
神科学種の魔法陣

なんごくピョーコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神科学種の魔法陣

【Nコード】

N9917Q

【作者名】

なんごくピヨロコ

【あらすじ】

巫女衣装が戦闘服（泣） 体調不良でMMORPGゲームにログインしたら取り込まれました。でもここは本当にゲームの中？初心者最弱だけど幸運度MAXの主人公ハル、同じく取り込まれたネカマ狂戦士エルフや電波系武士の仲間達。女神さまと激似で生贄乙女の身代り女装したり、強欲な支配者やモンスターと戦ったり、モンスター料理振舞ったりしてます。ハーフ巨人王子や腹黒ツンデレハイエルフ少女も巻き込んで、終焉世界を豊穡へ導きます。 奴隷海賊VS猫人族 偽お色気注意

神科学種の魔法陣 イラストギャラリー

イラストを見て、小説のイメージを壊したくない方は
そつと閉じてください。

話の数が多くなったので、挿入したイラストのギャラリーを作つて
みました。

元々、文章とイラストのコラボを目指して書き始めた作品で、これ
から更にイラストを増やす予定です。

- - - - -

> i 2 4 8 6 7 — 1 9 6 9 <

主人公 ハル

このイラストを描いたときには、

まだ巫女女装を知らない、清らかな少年でした（笑）

- - - - -

> i 2 8 9 7 2 — 1 9 6 9 <

「神科学種の魔法陣」バナー用に描いた巫女ハル
目次トップにしばらく置いていました

- - - - -

> i 3 3 4 5 9 — 1 9 6 9 <

ミゾニャン女神風 巫女ハル

巨乳はニセモノデス。サボテンの実を詰めてます。

> i29618 | 1969 <

王の影 YUYUさま

YUYUさま 生みの親のさる方から、ツンデレ度が少ないと言われ
表情や配色を訂正しました。

最初はこちら

> i29566 | 1969 <

.....

> i27205 | 1969 <

「リアル」ティダ ハル SEN

お話の根幹に関わるのが「リアル」

ただ、描写が甘いイラストなので、描き直し予定

12月に入った途端、関東は急に冷え込み東京高尾山では初雪が降ったそうだ。

めざましテレビのニュースで、中央線のダイヤの乱れを放送している。

「へ、へっ、へーくちゅ、すみません。」

はい、調理栄養士科1年14番です。今日は風邪で欠席します」

朝起きると、全身に寒気がして震えが止まらず、体の節々が筋肉痛のように痛む。

僕は、くしゃみで汚れた携帯画面をパシヤマの袖で拭きながらを、脇に挟んでいた体温計の数字を確認する。

38.2度

やばい、これ以上熱が出て辛くなったら解熱剤を飲もう。

しかし、貧乏学生なので夜の居酒屋バイトは休めない。

無理してでも風邪などねじふせ、家賃と食費を稼がなくてはいけなかった。

引き出しの奥から探し出した風邪薬を、牛乳と一緒に胃に流し込む。

押入れから真空パックしていた毛布を1枚引っ張り出し、薄い布団の上に重ねた。

「頭はまだ痛くないし、ただ寝てるだけじゃ時間がもったいないよ……。」

そうだ、ゲームの地下鍾乳洞ダンジョンクエストをクリアしたいな」

ふらつく体を起こすと、枕を2個重ねて背もたれに、頭の位置を高く固定する。

右目にモノクル（片眼鏡）を嵌め、小さなイヤホンを目に差し込む。

シルバーのチョーカーには宝石のようなデザインの治療ボタンが付いており、それを首に巻き起動スイッチを押す。

モノクルの透明なグラスが赤く変化し、チョーカーがほのかに発光する。

|| || || || || || || || || ||

ゲーム使用上の注意

体調がすぐれない時や変化を感じた場合などには、V B Wシステム使用はお控えください。

|| || || || || || || || || ||

ほんの一瞬、警告ページが出るが、すぐに画面は切り替わる。

『V B W バーチャルブレインワールド』

四年前、突如現れた電腦ゲームシステムは、モニター画面もキーボードも必要なく指で操作する必要すらない。

簡単に体に装着する専用機器で、視覚と聴覚、中枢神経から脳に特殊な電気信号を送りバーチャル空間を体感できる。

V B Wは無料会員登録&無料機器貸出、人気ゲームもすべて無料プレイという信じられない大盤振る舞いで、ユーザーを爆発的に増やしていた。

目の前にはリアルの室内と、ゲームのスタート画面が重なって見える。

消し忘れたテレビのワイドショーはインフルエンザの流行、学級閉鎖の話をしている。

「この風邪は、まさかインフル？」

昨日の終電で、隣で咳き込んでいるオジサンにうつされたかもしれない」

そんなことを一人で呟きながら、V B W提供無料ゲームの中で一番人気を誇る

オンラインRPGゲーム『End of god science

- 神科学の終焉 -』のログイン場面にパスワードを入力する。

- - - - -

『End of god science - 神科学の終焉 -』

神科学の時代は「黒い蝶」の厄災により終焉を迎えた。

魔法の時代は、種が絶えたエルフとともに終わり、

今、力の時代は、巨人の欲と破壊により終焉に差し掛かった。

神科学の霊廟【ミゾノゾミ】に眠るのは、紅い右目の『神科学種』

科学の知識と魔法と力を兼ね備えた者たちが、精霊の導きで終焉世界に蘇る。

彼らは、
世界を豊穡へ導くのか、
破滅へ導くのか。

クエスト1 パーティを組もう

『End of god science - 神科学の終焉 - 』

聖都 カミノレンジャク

神科学の霊廟と呼ばれる光の柱と硝子の壁、宙に浮く階段が螺旋を描きながら天まで登る。

その中央転送ゲートには女神像『ミゾノゾミ』が鎮座し、47のエリアと108のダンジョンへ冒険者は旅立つ。

白い巫女服を着た幼い顔立ちの女神像は、腰まで伸びた絹糸のような碧の黒髪、紅い瞳にぷっくりとした桃色の唇、両手を重ね祈る様に遠くを見つめていた。

ゲーム設定上、プレイヤーは神科学の歴史を未来に伝承するために造られた『神科学種』と呼ばれる。

人間は【生命力/魔力/体力】が均等に与えられたオールマイティな種族。

エルフは【魔力】が3倍に特化され、身軽さが特徴の種族。

巨人は【体力】が3倍に特化され、バトルを極めた種族。

ハルは、女神像を仰ぎ見ながら無意識のうちに自分の頬をなでる。

【神科学種（冒険者） 人間 男 レベル36 ハル 15歳】

ゲームを始めて3か月、そろそろ初心者クエストを終了してキャラを作りこみたいと考えている。

ハルのキャラは東洋人風の少年、体格は少し細身の平均より少し低めの身長。

右目は赤色固定なので左右の違和感がないオレンジ色に設定した癖のある青い髪に、細い尻尾のような三つ編みが背中まで伸びている。

一見なんの変哲もない初心者キャラは、そこに居るだけで周りの注目を集めていた。

頭にかぶる大きな緑のベレー帽には鳳凰の羽根飾り付き、黒いライディングスーツの背中には高位の聖獣が刺繍されている。

右手の持つバスターソードは目の覚めるようなレアカラーの群青色、背負う弓は神殺しの銘が刻まれていた。

初心者ハルは、とある理由から「全身レア装備」で身を固めているのだった。

「砂漠の中にあるダンジョンだから、スタミナアイテムを多めに持って行った方がいいな。罫素材も必要だし、使わないアイテムは売ってみよう」

朝9時という時間帯は、ゲームにINしてる人間が少ないのだから。中央転送ゲートは行き交う人もまばらで、のんびりとした雰囲気だ。

土日の深夜はプレイヤーが溢れ、ココは満員電車のように込み合い、キャラの動きが鈍くなり、運が悪いとサーバーダウンも珍しくない。

中央ゲートの周りには、ヨーロッパの洒落たバザーをイメージして作られた様々な露店があり、同じ商品でも値段や性能が微妙に変化する。

冒険者たちはウィンドウショッピングを念入りに行い、お買い得アイテムを探す。

またアイテム売却時も値段交渉をする必要があり、下手すると買い叩かれて泣きを見ることもあった。

「うわあ、ハルちゃん〜久しぶり。どうしてこんな時間にINしてんの？」

突然背後から声かけられ驚いて振り向くと、長い銀の髪に絹の口ブを纏った、絵画から出てきた天使のような美形がハルに近づいてきた。

「おはようございます、ティダさん。

久しぶりって先週一緒にダンジョン行ったじゃないですか」

「ひと月ぶりに会えたのに、ハルちゃんったら何てつれない返事なの。」

お姉さまに会いたくて学校さぼって来たのね。」

「ち、ちがいますよ!!」

今日は風邪で学校休んで、退屈だから初心者クエを消化するためにログインしたんです。」

【神科学種（冒険者） エルフ 不明 レベル165 ティダ 2歳】

天使をイメージして造られたエルフには性別がない。

ティダは透けるような白い肌に切れ長な瞳を縁取る長い睫、紅く薄い唇が常に微笑みを浮かべ、まるで天女のような容姿をしている。

実は、魔力をすべて自己回復と自己治癒に回し、エルフ最強の狂戦士を目指してるネタキャラ。

時々、自称お姉さま言葉で聞くものを惑わすが、中身はさっぱりした性格の野郎だったりする。

ハルが露店前で売却アイテムを選んでいると、ソレを覗き込んできたティダが驚いた様に目を輝かせる。

「ま、まってハルちゃん。そんな馬鹿みたいに安い値段で『黒曜石の台座』を売るなんてやめてくれ！！（ここから野郎のダミ声）っうか俺に譲って、お願いします！！」

「これって珍しいアイテムなんですか？

昨日ダンジョンのプチスケルトンが落としたヤツだけど、ティダさんならプレゼントしますよ」

「うっしやぁー！！さすが『ラッキーボーイ』ありがとう」

「お礼なんかー！あああー！グルグルグルグル」

ハルは、頭ひとつ大きなお姉さま？に抱きつかれ、コマのように遠心力を付けて振り回される。体感システムが働くので、生身と同じように眼を回してその場に倒れこんだ。

『ラッキーボーイ』

「幸運度」と呼ばれる非表示ステータスが高いキャラクターに与えられる称号。

「幸運度」が高いと、敵を倒した時に出てくるドロップ品や宝箱報酬がレアアイテムになる。

ハルはキャラ設定時、1万分の1の確率で、幸運度MAX『ラッキーボーイ』の称号を与えられた。

そのおかげで全身レア装備で身を固めることができるのだ。

また、この「幸運度」は残酷行為（PK プレイヤーキラー）をすると下がるシステムになっている。

悪質PKを繰り返し幸運度マイナスのキャラが、最上級ダンジョンのラスボスを倒した宝箱報酬が「ネズミの糞」だったという都市伝説もある。

「ちょうど今、SENもログインしてきた。

二人でハルちゃんの初心者クエを手伝わせてよ」

中央転送ゲートに、背の高い黒い袴姿の青年が現れる。

鍛え抜かれた鋼のような細身の体、眼光鋭い黒い左瞳、右頬に青い刺青、黒い髪を後ろに束ねている。

【神科学種（冒険者） 人間 男 レベル197 SEN 21歳】

SENは、ココに住んでると言っても過言ではない、レベル200という未知の領域に挑む廃プレイヤー。

頭脳明晰で、ゲームAIプログラムをいじれるほどの知識を持つ

ている。

「ああ、時は満ちた。二人そろって現れるとは……伝承通りだな」

「SENの旦那ったら、電波な会話はやめてくれよ。」

普通にハルちゃんのクエストを手伝うだけなんだから」

「いいんですかSENさん？初心者クエストのサポートなんて」

ティダとSENは最上級クエストを軽々クリアできる実力の持ち主だ。

「遠慮するな、お前を連れ歩けば俺たちのレアアイテム入手率が高くなるんだ」

「そうそう、SENみたいな汚れた大人には、ハルちゃんの清らかな魂が必要なのよ。」

お姉さまも幸運のおこぼれが欲しいの。
不純な動機で手伝うんだから、気にしない気にしない（笑）」

ハルは、ゲームを始めて3日目にダンジョンでSENとティダに出会った。

3人でダンジョンを回ると、ハルの『幸運度』が発動してレアアイテムがうじゃうじゃ現れた。

その時まだアイテム価値の判らないハルは、同行したベテランプレイヤー達が目の色を変え、狂喜乱舞する姿に恐怖を覚えたことは秘密だったりする。

「さて、女神の元へ行くこうか」

3人はパーティを組むと中央転送ゲートに向かって歩き出す。

その時すでに、世界が異なっていたことに、誰も気付かなかつた。

クエスト2 ゴブリンを倒そう

初心者クエスト、地下鍾乳洞ダンジョンはタイシヨ砂漠エリアの中心にある。

転送ゲートからダンジョンまで徒歩で30分。

砂漠歩きはスタミナ消費も激しく、冒険者の間でも不人気なダンジョンだった。

地下鍾乳洞ダンジョンクエストは、ティダが一人で暴れまくって、わずか15分でスピードクリアした。

クエスト報酬は、2メートル超えの巨斧『ドラゴンスレイヤーアックス（龍殺しの斧）』

某ゲームの木こり少女が似たような斧を持っていたが、初心者ハルが使いこなすには難しい得物だ。

そして、楽に終えたクエストの後、予想外の出来事が待ち構えていた。

地下鍾乳洞ダンジョンから地上に出ると、砂漠の熱風と吹き付ける細かい砂が激しく顔に打ちつける。

「うわっ、ぺぺっっ、口の中に砂がー！」

「砂嵐が発生しているなんてタイミング悪いな、早く転送ゲートに移動しよう」

パーティは、突風に吹き飛ばされそうになりながら、視界ゼロの砂嵐の中を歩く。

これはダンジョンバトルよりきつい、ハルは前を歩く二人にはぐれないように追いかけるが、体力は倍のスピードで減少する。

しかし、苦勞してたどりついた転送ゲートは、台座が崩れ魔法陣が破壊されて起動できなくなっていた。それも、ついさつき破壊されたものではなく、風化して自然に崩れ去ったかのような壊れ方だ。

「いったいどうなってんだ？ココに来たときはちゃんと起動していたのに」

更に、運の悪いことに無数のモンスターが群れで近づいてくるのが見えた。

子供のような大きさで、全身に黒い毛を生やした半獣人モンスター
「『ゴブリン』」

手には棍棒や鎌のような刃物を持ち、背には汚れた袋を背負っている。

「面倒だな、こんな雑魚モンスター倒してもレベル上げにならないよ」

「ちょっと待て、あいつらの持つてる袋をよく見る」

二匹のゴブリンが運んでいる大きめの袋の口から、傷だらけの白く細い脚が覗いている。

三人の存在に気付くと、ゴブリンは奇声を上げ一斉に襲いかかってきた。

「ゴブリンが人間を襲ったらしい。これは新たに導入されたイベントなのか？」

「あの袋の大きさと子供が入ってるよ。絶対助けなくちゃ」

面倒だと愚痴っていたティダが、イベントと聞いたとたん嬉々として駆け出す。

柄頭に鋭い突起の付いたメイス（戦棍）両手に持ち、歯を剥き出し飛びついてくるゴブリンの頭に振り下ろした。

レベル165の狂戦士（エルフ族なのに）なら一撃で倒せる相手だ。

ぐちゃり

「えっ……」

まるでスイカ割のように、メイスはゴブリンの頭蓋骨を一撃で叩き潰す。

破裂した脳や血が辺りに飛び散り、頭を失った体から赤紫色の生暖かい血が噴出す。

肉の破片がティダの腕に、生臭い血が頬に、べちゃりと音を立て張り付く。

それはバーチャルではなく、リアルな感触。

「う、うわぁ、どうなってんだ！！まるでコレは、ホンモノ みたいな……」

驚いて後ずさるティダに、3匹のゴブリンが襲い掛かる。

「氷の聖霊よ加護せよ アイスボルト」

SENの魔法攻撃で、ゴブリンの体は鋭利な刃物のような氷の塊に切り裂かれた。

「鈍器はよせ、剣か魔法で攻撃しろ」

「おかしいぞ、SENこれはおかしい!!」

ティダは、うわ言のように呟きながら武器をバスターソードに持ち返る。

勝てる相手でないと思いきや逃げ出すゴブリンを、剣で背中から一刺しにした。肉を骨を絶つ感触、溢れ出す赤紫の血、崩れ落ちるゴブリンの重みが腕に伝わる。

ハルは弓を番えると、子供をとらえた荷物を引きずるゴブリンを狙う。

「どうして、腕が震えて、狙いが定まらない!!」

V B W システムは、脳から指令を出すだけ操作ができる、腕が震えるなんてありえない!

ハルはなんとかリアルな感覚を思い出しながら、敵に向けて無我夢中で矢を放つ。

矢はゴブリンの目に突き刺さり、そのまま突き抜け頭部半分を破壊した。

死にかけの手足をひくつかせるゴブリンを横目に眺め、崩れ落ちそうになる足を奮い立たせる。

地面に放り出された襪褌袋の口を緩め、中に押し込まれた子供を引きずり出した。

見た目8歳ぐらいの、長い金色の髪をした痩せた女の子。

捕まえられた時殴られたのか、全身痣や切り傷だらけで、服もボロボロに擦り切れたみすぼらしい姿だ。

「まずい！デッドリー状態だ、早く生命力を回復させないと死亡判定になる」

治療呪文のヒールは、ゲームを始めて1時間で強制取得する呪文だからレベルの低い僕にも使える。

でもこの瀕死状態では、さらに上の完全蘇生呪文を使用したほうがいいだろう。

「聖霊よ、命の光を灯せ ヴアルネラ・サネン えっ うわああっ」

呪文詠唱状態に入った僕は、無意識のうちに地面に横たわる少女の唇に、自分の唇を重ねようと…

「うわあ〜ストップ！ストップ！！どうして完全蘇生呪文でチユウを〜」

まるで、眠れる姫に目覚めのキスをするような……

この呪文は、特に戦闘時多用されるポピュラーな呪文なのに、何故わざわざキスするエモーション（表現行動）が必要なんだ！！

「お嬢ちゃん、お姉さまの熱いベーズで甦らせて「やめんか！！このロリコン」ゲフツ」

見た目だけは美しいエルフの麗人の顔面に、SENは躊躇わずとび蹴りを食らわす。

「なに考えてんだ、ヒールの多重掛けで回復させればいいだろ！！」

恐る恐る唱えたヒールは、光る右手を相手にかざすだけのエモ

シヨ
ンだ
った。

クエスト3 水を調達しよう

藤田友哉の住む地区すべての学校が閉鎖され、彼の経営する学習塾も役所の通達により休塾になる。

「インフルなんだから家で大人しくしてろよ、カラオケなんか行くんじゃないぞ」

1月は高校受験真っ只中、私立高校の受験日も差し迫っているこの正念場に、インフルエンザ騒動が起こってしまった。

塾生一人ひとりに連絡を入れ、体調と勉強の進み具合や世間話まで話し合う。

実は友哉自身、昨日から体調が悪く、起きて動き回るのも辛かった。

ベットで横になりながら塾生に電話をかけたままだったのだ。

うがい手洗いに気をつけていても、大勢の生徒や父兄と係る仕事なので、病気をうつされても仕方ない。

インフルは症状が出てから1日経たないと検査できないらしい。

今日一日外出できないし、テレビも退屈なドラマばかり、無意識のうちに首に巻いたチョーカーに触れる。

友哉が気にしたのは、ゲームの中で知り合った不思議な少年。

ひと月前から姿を見せない彼は、今日こそ現れるだろうか？

目の前に浮かび上がるのは、砂漠の彼方にそびえ立つガラス細工の巨大な建造物 神科学の霊廟。

オンラインRPGゲーム『End of god scienc
e』のログイン場面から、彼のアバター「テイダ」を選びパスワードを入力する。

.....

ゴブリンに攫われ瀕死状態だった少女は、意識を取り戻すと喉の
渴きを訴えた。

彼らは初心者エリアと甘く見て、うかつにも飲料水の準備をし
てなかつた。

少女にはポーションを飲ませようと話していると、SENが何か
を閃いた。

「テイダ、ドラゴンヘルム（竜兜）を持っていたら。ちよつと
貸してくれ」

テイダは言われるがまま、金色に輝くレアカラーのドラゴンヘル
ムをSENに渡す。

SENは兜を上下逆にして砂の上に固定すると、ゆっくりとした
動作で狙いを定め魔法攻撃呪文を唱えた。

「氷の聖霊よ加護せよ　アイスボルト」

「ええつゝつちよつ（ここから野郎のダミ声）俺のヘルムに何す
んだあ！！」

ティダの罵声を掻き消し、派手な白い爆音を上げ、氷の弾が降り注ぎドラゴンヘルムを直撃する。

しかし最高強度を誇るドラゴンヘルムは傷一つ付かず、兜の中には氷の塊がぎっしり詰まっていた。

SENは氷をひとかけら取り出すと少女に手渡し、食べるゼスチヤーをしてみせる。

しかし、生まれて初めて氷を見た少女は、宝石のような透き通る石を不思議そうに見つめているだけ。

「これを口に入れて舐めるんだ。」

布に包んで顔を冷やし……ってお前らも食ってんじゃねえ」

「もぎゅ もぎゅ ガリガリ冷たっ……生き返る……」

「これ俺のヘルム。SENほら、あ……ん「やめろ」ゲシッ」

ガリガリと音を立てて氷を食べている僕らを真似て、少女も恐る恐る口に氷を含んだ。

「この石冷たいっ、あれ？解けてお水になっちゃった」

青い大きな瞳を輝かせ、整った顔立ちの少女は可愛いしぐさで小首をかしげる。

そうして氷を何個か食べてると、少し元気を取り戻したようでした。しっかりとした口調で話し出した。

「お兄さん達、助けてくれてありがとう。」

私の名前は 萌黄もえぎといます。

オアシスのはずれに叔母さんと住んでいて、聖堂の帰りに、ゴ布林に襲われたの」

「僕はハル、二人はSENとティダ、神科学種の冒険者なんだ。もうゴ布林はやつつけたから大丈夫。ちゃんと君をお家まで送ってあげるよ」

ところが、少女は暗い顔を見ると、怯えたように震えながら首を左右に振った。

「村に戻っても……オアシスの水も、食べるものも無くて、みんなに迷惑かけちゃう。」

それに、砂漠から大きなモンスターが村を襲ってくるの」

ハルは、初めての砂漠エリアなので、その言葉の意味を理解できなかった。

ティダたちは、怪訝そうな表情で萌黄と名乗った少女に訊ねた。

「まさかオアシスの村の水が枯れたって？

それと砂漠のモンスター、まさかエリアボスの蒼珠砂竜がオアシスを襲ってくるのか」

「転送ゲートが破壊されて、モンスターが狂暴化している。いったいどうなってんだ？」

SENの説明では、タイシヨ砂漠エリアのオアシスは『女神がもたらした奇跡のオアシス』と呼ばれている。

『タイシヨ砂漠のオアシスの水に浸かると、怪我や難病が直ちに直る』という伝承から、祝福を求める人々がオアシスを多く訪れ、砂

漠の村に繁栄をもたらしていた。

しかし、今少女から聞いた話では、オアシスの水は枯れはじめ、女神の神力が弱まっているようだ。

「でもモンスターより酷いのは、オアシス聖堂の大神官なの。」

聖堂に湧き出る僅かな水をもらうために、大人も子供も奴隷のよう一日中働かされてる！！」

気丈に振る舞っていた少女の瞳から大粒の涙が溢れ、耐え切れず声を上げて泣き出した。テイダが少女を慰めながら抱きかかえ、SENに声を掛ける。

「お嬢ちゃんの話だと、俺たちがオアシスの村に行っても、やっぱり事に巻き込まれるだけじゃないか？」

地下鍾乳洞の中には川が流れていたから、今はそこで水を確保したほうがいいと思う。

ダンジョンに戻ってこれからの行動を決めよう」

結局、僕らは少女を連れて、もと来た砂漠の道を引き返すことになった。

地下鍾乳洞は、神科学種と呼ばれる冒険者たちのために造られたダンジョン。

神科学種の『造られた体』に蓄えられた魔力に、ダンジョン魔法陣が反応して内部に入ることが出来た。

しかし、この世界のほとんどの住人には魔力はなく、ダンジョンに入る事はできない。

「場所を教えても、村人が水を汲みにダンジョンの中に入ることはできないのか」

「そもそも、モンスターがうるつく砂漠の中を往復4時間歩いて、どれだけの水を運べるんだ？」

鍾乳洞の中を流れる冷たく透き通った川で手足を洗いながら、3人は思い付くままアイデアを出し合う。

側で僕らの話を大人しく話を聞いていた少女に、ティダが手招きした。

「さあ、お嬢ちゃんもこちらにいらっしやい〜」。

ハアハア お姉さまが全身綺麗に「やめんかロリコン」「ゲフツ」

「ハル、こいつは俺が見張っているから、その子を洗ってやってくれ」

SENに着替えとタオルを渡され、ハルは小さな少女の手を引いて少し離れた川下へ連れてゆく。少女は治癒魔法ヒールの効果で、体中の痣や傷も消えて白くきれいな肌に戻っていた。

「タオルで体をこすって汚れを落としてね、服はもうボロボロだからコレに着替え……」

ち、ちよっと、待った!!」

なんでSENさん、ピンクのメイド服なんて持ってんだ〜〜。そうだ、きつとこれは宝箱かモンスタードロップ品であって、男のロマンを追い求めてうっかり購入したもので無いはずだ。

ハルの心の葛藤を知らない少女は、過剰にヒラヒラの付いたピンクのメイド服に目を輝かせ、大喜びで身に着けた。

メイド服を着た少女は、小さいながらも不思議な気品であふれていた。

絹糸のように細く流れる金の髪、海のように深い蒼い瞳に長い手足。

砂漠の民というよりお姫様のようで、将来はきっと絶世の美女になるだろう。

彼女が無事に家に帰れるように、なにか僕らにできる事が無いかな？

「ハルお兄ちゃん、このお水を石にして、カバンに入れておうちに持っていきたくない」

「萌黄ちゃん、氷は暑い砂漠ではすぐ溶けちゃうんだよ」

ハルの返事に、小さな少女はガツカリして悲しそうに頂垂れた。

今の僕らは兜で水を汲んでいる状態だ。

せめてペットボトルみたいな容器があれば……ちゃんとアイテムを準備して来れば良かった。

バックの中身を確認しても、水を汲めそうなものは何もない。

いや、もしかして、ひとつだけ、この方法なら、水を汲んで運べるかもしれない。

「試したいことがあるんです。僕の荷物を預かってもらえますか？」

ハルは、ウエストポーチタイプのアイテムバッグの中身を全部引き出した。

ゲーム始めてまだ3ヶ月で、所有アイテムも多くない。

無造作に放り出されたハルのアイテムは珍品レア激レアばかり、テイダとSENは競ってそのアイテムを預かった。

ゲーム内でアイテムを収納できるバッグは、種類もポシエットからボストンバッグまで様々なタイプがある。

バッグの種類やアイテムのサイズは関係なく、バッグ1つでアイテム80個×ランク数（ハルの場合36）を収納する。

裏ワザとしてアイテムバッグの中にバッグを収納し、所持アイテム数を増やすこともできた。

「アイテムバッグで、水を収納できるのか確かめてみます」

「えええっハルちゃん、大胆な発想だけど、もし壊れたらどうするのー！」

ハルはテイダの止める声も気にせず、空になったアイテムバッグを川の中に沈める。

ゴボ　ゴボ　ゴボッ

川の水がバッグの中に勢いよく流れ込んでゆく。

もし、水が1アイテムとして判断され、サイズや重量も関係なく収納できるなら、バッグ1つでかなりの量の水を簡単に持ち運ぶことができるはずだ。

5分後、ハルはアイテムバッグの口を閉じると川から引き上げる。バッグの重さに変化はなく、防水加工が施されているのだろうか。全然濡れていない。

ハルはおもむろにバックをひっくり返すと、中のモノを取り出すように腕を突っ込む。

ゴボ バシヤ バシヤ バシヤ

まるで蛇口をひねったように、バッグの中から水が溢れ出してきた。

「まさか、本当に上手く行くとは……さすが『ラッキーボーイ』だな」

川の中にバッグを沈めていた時間と同じ5分間、水が湧き出した。水といっしょに、川エビが26匹も中から飛び出してくるといっておまけつき。

「すごいっ、このカバンがあったら、お家まで水を持っていけるよ」

目の前で繰り広げられた手品に、少女は歓喜の声を上げた。

クエスト4 食料を調達しよう

おまけで捕まえた川エビは、新鮮なうちに食しましょう。

炎の結晶を利用した簡易コンロで湯を沸かし、塩辛いハーブティ
ーを作って川エビを茹でる。半生状態でピクピク動き回るエビを、
踊り食い状態で口に放りこんだ。

「きゃっ、そんな食べ方したらエビがかわい……もぐもぐ美味っ、
もつとちようだい」

「このハーブって、塩コショウ味がして食欲が進むね」

「一匹串焼きにしてみるか。おおっ、この食べ方もいけるな」

ちなみにエビを茹でている鍋は、ドラゴンヘルム（竜兜）だった
りする。

水の問題は何かかなりそうなので、次は食糧を探すことにした。
砂漠に住む動物を狩れば、肉の確保（要解体）はできるが、他の
食材も確保したい。

「このダンジョンに住んでる白デビルモンキーは何食べてるんだ？」

鍾乳洞ダンジョンの最奥には、ボスモンスターの『地底世界樹』
が生えている。

魔法使い学校の映画で出てきた暴れ柳にそっくりで、蛇のようにうごめく根で獲物を捕食する肉食植物だ。

その根を麻痺攻撃すれば簡単に動きを止めてしまうという、初心者向けボスマンスター。

地底世界樹に住む白デビルモンキーは、背中に飛べない黒い羽根の付いた真っ白な猿で、黒い木の実を餌にしているようだ。

木の実が野球ボールほどの大きさで、数えきれないほど鈴なりに実っている。

子ザルが器用に実を割って、白い種を美味しそうに食べていた。

「猿が喰える木の実なら、人間が食べても大丈夫じゃないか？」

「でも、猿達も木の実を盗られたくないみたい、すごく怒って威嚇しているね」

猿たちは、キイキイと耳障りな鳴き声をあげて、彼らを木の上から睨みつけている。

「ああ、この反抗的な目付きなら慣れている。ちょっと調教してアゲル」

ティダはメイスをしまうと、代わりに木の枝を折り、それを勢いよく振り回す。

まるで鞭のように撓り、ひゅん と風を切り裂く鋭い音が響く。

ティダの様子を、SENは苦笑いしながら眺めている。

「リアルで、ティダの経営している学習塾は、中学生対象、しかも

問題児の高校受験対策に力を入れてるから、悪ガキ連中には慣れるんだ。

このゲームも生徒に教えられて始めて、今は生徒以上に嵌ってるんだと」

「清らかなハルちゃんには、ちょっと刺激が強いから見ない方がいいよ。」

萌黄ちゃんをつれて焚火の場所で待っていてね」

突如、切り裂くような鞭打つ音とティダの高笑い、猿の悲鳴が響き渡る。

ハルは恐怖で振り返ることもできず、萌黄の手を引いて駆け足でその場を離れた。

三十分ほどすると、ティダが白猿を従えて、焚き木まで戻ってきた。

三匹の白猿は、両手に黒い木の実を抱えていて、それを悲しそうな顔で差し出すと全速力で逃げて行く。

野球ボールサイズの木の実の、黒い皮を割ると、堅そうな白い種がびっしり詰まっている。

遠目からだ、甘くて柔らかいフルーツに見えていたのに、予想が外れてガツカリしてしまった。

「うっっん、食おうと思えば食えるけど、味、食感もいまいちだな」

種を一口食べてみると、硬くてパサパサしていた。が、僕はこれ

とよく似たモノを食べた記憶があった。

果物と思わなければ、焼いたり煮たり……茹でて蓋を取るのが早すぎなければ。

まさか、まさか！！アレと似たものができるかも。

「もしかしたら大当たりかもしれない、この木の実を茹でてみます」

兜の鍋に木の実を放り込んで、ぐつぐつ茹でていると、もっちりとした懐かしい香りが漂ってくる。

二人もこの匂いに思い当たったようで、鍋の前に座り込んで僕の作業を眺めている。

これは間違いない！！

我々日本人のソウルフード、オカズなしで何杯も食べられるヤツだ。

茹であがった木の実をひとつ取り出して硬い皮を割ると、つやつやと銀色に光輝く粒が目飛び込む。

その粒をつまむと粘り気があり、口に放り込んで噛みしめると、つい笑みがこぼれた。

「間違いない、正真正銘、おコメの味です！！」

「おおつ、炊き立ては旨いな。これは、こしひかり、いや、あきたこまちかな」

白い種はお米が10倍に巨大化したような形で、茹でた木の実はおにぎりそのものだ。

しかも中心の赤くやわらかい種は、まるで梅干しのようなスツパ

イ味がする。

「キュウリがあれば梅キュウが作れるな。このまま梅茶づけも美味しいかも」

砂漠でのサバイバルライフとは程遠い会話が繰り広げられていた。

ゲーム内での一日は、リアルでは一時間の設定になっている。そしてゲームをセーブするためには、転送ゲートに行くか、就寝タイムを作る必要があった。

ふわふわと触り心地の良い芝の上で、ハルと萌黄はロープを毛布代わりに眠っていた。

「おにぎりの実なんて誰が考えたんだ、絶対遺伝子操作して造ったモノだろ。」

誰かさんがお願いすれば、そのうちワインの川も造ってくれるだろうよ」

「SENの旦那、誰かさんって誰？電波語で話すのはやめてくれよ」

ティダのオネエ言葉は鳴りを潜め、乱暴なしぐさでSENの持つウィスキー瓶を奪い取り、SENはジロリと横目でにらむと、懐から缶ビールを取り出す。

アルコールは常に5種類以上持ち歩いており、リアルのSENは下戸でアルコールを受け付けられない体質なのに、この世界では酒豪で名をはせていた。

「あまりにも、できすぎた話だと思わないか。
村人は、水も食料も無く飢えているのに、俺たちはこんな簡単に、水や食料を手に入れることができる」

「お約束というか、そういうクエスト設定なんだろう？
それに、水を運ぶ方法や、茹でた木の実もハルちゃんがい付いたんだ。

俺たちだけなら、硬い木の実をかじって、川の水を手ですくって飲んでただろう。

川エビを踊り食いしたり、梅干し味のおにぎり食べたり、ハーブティで一服なんてできなかった」

確かに、過酷な状況でありながら、恐ろしいほどの幸運に恵まれ快適に過ごしている。

さっきは、少し横になろうと話しているそばから、やわらかい芝の生えた横穴を見つけてしまったくらいだ。

この終焉を迎える世界が、迷い込んだ俺たちを留めるために、接待づくしをしているようだ。いや、ハルにもたらされる幸運のおこぼれを分けてもらっているだけか。

奪ったウイスキーを一気に飲みほしたティダは、速攻で酔っ払って、大の字にいびきをかいて寝てしまった。

SENは一人焚き木の見張り番をしながら、暗い笑みを浮かべる。

「女神様は、すべてのクエストをクリアするまで、ハルを帰さないつもりだよ」

クエスト5 オアシス自警団と戦おう(前書き)

やっと戦闘シーン、あれ???

クエスト5 オアシス自警団と戦おう

オアシス自警団が蒼珠砂竜を追って村を離れたわずかな隙に、ゴブリンの群れは彼らの拠点としていた宿を襲い略奪し、仲間の少女を連れ去った。

襲撃から一晩過ぎて宿に戻ってきた彼らは、必死で攫われた少女の行方を探す。

砂漠の中にポツンと存在する壊れた転送ゲート前は、腐肉臭が漂い、数体のゴブリンの死体が黒厄鳥につつかれている。

「竜胆様、この襪袋の中に子供の靴が入ってました」

周りの男達より一回り大きな体格の、竜胆と呼ばれた青年は、目を矢で射ぬかれたゴブリンの死体を踏みつける。

「こいつらが萌黄を攫っていったのか。」

しかし、どうしてゴブリンは殺されているんだ？」

防砂用のフードから覗く顔は浅黒く、太い眉に彫の深い彫刻のような整った顔立ちをした青年。

人としては大きすぎる、巨人にしては小柄で動作も巨人特有の愚鈍さが見られない。

見るからに勇猛果敢な青年は、苦り切った表情で辺りを見回していた。

15人ほどの武装した自警団の半数は、彼のように大柄な体格を

した巨人族 竜胆りんとんの従者だった。

「我々が砂漠竜を追っている隙に、聖堂のやつらはゴブリンに萌黄を攫さらわせたんだ」

「そして証拠隠滅に、ココでゴブリンと萌黄を殺したと……なんて卑怯な連中だ」

諦めたような男の呟つぶやきに、竜胆の叱咤しだの声こゑが飛ぶ。

「黙れ！あの色狂いの大神官は、美しい萌黄を簡単に殺しはしない。この方向には地下鍾乳洞があったはずだ、萌黄が連れ去られたのならそこだろう」

奴らはどういう意図をもって少女を連れ去ったのか、怒りを押し殺した主の言葉に、従者の男たちはうめき声をあげる。

そこへ、先行していた仲間の一人が慌てたように戻ってきた。

「地下鍾乳洞から、見慣れない姿をした怪しい連中が出てきました。人数は三人、子供を一人連れていてます。」

子供は攫さらわれた萌黄のようで、なにやら豪華な服に着飾らせています」

「見慣れないとは、砂漠の民ではないのか？ たった三人なら我々で簡単に奪い返せる」

少女の無事と、取るに足らない少人数の敵に男たちは沸き立つが、それも一瞬のことだった。

「一人は武人のようで、もう一人はエルフ、そして少年が萌黄を監

視してました。

ただ……やつら三人とも、赤い右目の『神科学種』です」

それは、大人から子供まで知らぬ者はいない。

この世界の始まりから終焉を語る、教えの冒頭に明記されていることだ。

神科学の霊廟【ミゾノゾミ】に眠るのは、紅い右目の『神科学種』

人の姿でありながら、神の知識と魔法を操り、数倍の戦闘能力を誇る『神科学種』

精霊の導きで終焉世界に蘇る彼らは、

世界を豊穡へ導くのか、破滅へ導くのか。

しかし、竜胆は面白い話でも聞いたかのように瞳を輝かせると、腕組みをした。

「神科学種、霊廟のオモチヤ達なら遊び相手として不足はない。

この竜胆を謀り、村人を虐げる聖堂の手下どもを、生かして帰すものか」

若き戦士の熱い闘気が全員に感染するかのようになり、男たちは手に

した武器を握り直すと雄叫びをあげた。

一晩を鍾乳洞ダンジョンで過ごし、ハル達は少女をオアシスに送り届けるために砂漠を進む。

今日は風も穏やかで、砂に足を取られることなく砂漠歩きもスムーズだ。

ここから二時間ほど歩いたところにオアシスがあるそうだ。水と食料を持って行けば、萌黄もしばらくは安心して生活ができるだろう。

砂漠の向こうに、壊れた転送ゲートの形がうつすら見えてきた。

ゴブリンの死体が転がっているであろう場所に、ハゲタカみたいな鳥が集まって奇声を上げている。

ゲームなら、倒した敵は数分で砂のように掻き消えてしまうのに、あの場所のゴブリンはそのままなのか？

鮮やかな青い色のローブを纏い、皆の先を歩くティダが急に立ち止まる。

その場所には、今付いたような新しい多くの足跡があった。

耳を澄ますと、その優れた聴力は周囲に潜む者の息遣いを聞き取る。

「ひとり、ふたり……全部で十五人。

しかし、少し毛色の違うものも混じっているな」

ティダの声掛けに、SENは頭巾を取ると、動きやすい様に和装の袖を纏掛け、襟の合わせを緩める。

黒装束の武士は、潜んでいる敵に、刀を掲げるイチローポーズを見せつける。

「俺とすることが少し油断した、すっかり囲まれているようだ。

おいティダ、相手は人間だ、やり過ぎるなよ」

モンスターを倒すバトルと違う、まるでリアルのような状況で、しかも相手は人間。

殺るのを避け、手加減して戦闘不能状態にしなくてはいけなかった。

判った と答えたティダの取り出したのは二本の黒い木刀だった。体が弛緩したように姿勢が崩れ、再び顔を上げると、切れ長な紅い瞳は狂喜の色が宿り、薄い唇は薄ら笑いを浮かべ狂戦士モードのスイッチが入る。

「SENの旦那は、お嬢ちゃんを守ってくれ。

さあ早く出ておいで、あんたらはお姉さんが可愛がってやるよ
おお」

砂の中に潜み、顔を布で覆い、眼だけをぎらつかせた男たちが姿を現した。

半月状の刀をもち、ティダに向かって正面から切り込んでくる。

「炎の精霊よ、私の敵を焼くつくせ！2チャージ、ファイヤボルト」

木刀を手にしたティダが、まさか魔法攻撃すると予想できないか
った敵は、防御する間もなく炎の弾丸に弾き飛ばされる。

甲高い笑い声をあげながら、相手の腕や足を狙い、木刀で叩き、突き、払う。

炎の魔法で派手に花火を打ち上げ、敵を己にひきつけ、まるでダンスを踊る様に縦横無尽の暴れまくっていた。

SENは、初心者ハルと少女を背後にかばいながら目の前の三人と対峙する。

人間にしては大柄な、筋骨隆々とした闘戦士と向かい合う。

しかし、力任せに殴り合う必要はない、神科学種は、武と魔力を掛け合わせ戦うことが出来る。

SENは、雷属性を帯びた太刀　タケミカヅチを一閃させる。

「雷神よ、邪を薙ぎ払え！稲光紫冥燕月」

刃先から放たれた雷は、扇状に周囲に電撃を発生させ、男たちは避ける間もなく雷に打たれて昏倒した。

派手な二人のバトルに巻き込まれないように、ハルは注意しながら萌黄を守るつもりだった。

しかし音もなく砂の中から現れた男が、自分の背後に立つのに全く気付かなかった。

振り返ると、見上げるほど大きな体格の、猛々しい形相の男が仁王立ちしている。

太い丸太の様な腕が、風切る音を立て、ハルの耳元を僅かにかすめる。

ハルの着るレア装備の回避性能のおかげで、頭が碎ける危機を逃

れた。

SEN達と距離を取ってしまったことが災いした。

「ちっ、コイツらは罔だったのか。

逃げるハル、相手は人間じゃない！！ハーフ巨人だ」
シャイアント

人の3倍の体力に攻撃力、しかも戦い慣れた戦士では初心者ハルは相手にならない。

とつさに振りぬいた剣は、男の腕の籠手で塞がれ真っ二つに折れた。

男は体勢を崩したハルの襟首を鷲掴み、がら空きになった腹に堅い拳から重いパンチが打ちこまれた。

「しまっーガッツ！ハアツアア」

ミシリ と肋骨から嫌な音がして、内臓が押しつぶされたような焼けるような痛みで、視界がブラックアウトしかける。

ダメだ、眼を閉じるな

彼女を守れ 守れ 守れ

見ろ 見ろ 見ろ

その場で腹を押さえて崩れ落ち、呻きながら砂に顔をうずめる。
しかし、男が萌黄に掴みかかるトコロを、力を振り絞り震える腕で相手の足にすがりつく。

「萌黄っー逃げー」

「邪魔だ、この餓鬼どけっ」

「やめてっつ竜胆様！！この人たちは」

鈍い音が背中に響き、巨体の男に高々と蹴り上げられた。

舌を嚙んでしまったのか、口の中が生暖かい血で溢れ出すのがわかる。

うわっ、こんなに痛いんじゃないや死んじゃうかも。まるで現実リアルみたい。

ラノベでよくある、異世界トリップとか、そんなモン。

・
・
・
・

「ハル、大丈夫か？まだどこか痛いところはないか」

ぺちぺちと頬を打つ手が邪魔、痛いです。

これは逝ったと思ったけど、完全蘇生呪文で生き返るよね。

え、完全蘇生呪文ってチュウするんだよ、接吻とか口づけとか。

ま、ま、まさま、まさか

がばつと勢いよく起き上がる僕の目の前には、心配そうに覗き込む萌黄ちゃん、目を爛々と輝かせたティダと無表情で腕組みするSEN。

「い、生きてるってことは……そ、完全蘇生呪文使ったん、ですか？」

「うふっハルちゃん、お姉さんのキッスの味は「やめんか！変態工
ロフ」げふう」

SENはおもむろに、僕の目の前に黒く焼け焦げた羽を差し出し
た。

これは、僕のベレー帽に付いていた綺麗な羽根飾り？

「一度だけ身代わりの『鳳凰の羽根』がお前の命を助けてくれた。
完全蘇生呪文は使っていない」

そう言ったSENの後にいる男たちは、僕らを襲った連中だった。

クエスト6 宿屋に泊ろう

僕を殴り殺した相手が、深々と頭を下げてきた。

「俺たちはオアシス自警団で、攫われた萌黄もえぎの後を追っていたんだ。すまない、まさか萌黄の命の恩人を……勘違いして殺してしまうところだった。」

萌黄ちゃんを抱きかかえる大柄な青年は、勇猛果敢な顔立ちにどこか高貴な風格を漂わせている。

お互い敵と勘違いして戦ったのか、いきなりの謝罪に、僕はコクコク頷くだけだった。

SENが自警団の前に歩み出ると、青年に話しかけた。

「いや、こちらも敵と思い込んで攻撃して怪我させたことに変わりはない。

我々は『神科学種』の冒険者。俺はSEN、隣はエルフのティダ、そして……」

「竜胆さま、ハルお兄ちゃんが私をゴブリンから助けてくれたの。

美味しいご飯を食べさせてくれて、綺麗な洋服も着せてくれたんだよ。」

あのねハルお兄ちゃん、この方はあたしの叔母さんがお世話している 紺りんどうの竜胆様」

少女は嬉しそうに青年を見上げながら、ゴブリンに攫われてからの冒険談を話している。

SENは、青年の名前を聞いて驚く。

今、終焉世界を實質支配しているのは、ハクロ王都の紺の巨人王だった。

「紺の名は、巨人族暴力王 鉄紺てつこんの子供しか使えない。まかりなりにも巨人族王子が、どうしてこんな辺鄙な砂漠にいるんだ？」

「巨人族にしては小柄で、それに右目の色に赤が混じっている。もしかして『神科学種』の血が流れているのかな？」

SENとテイダの不躡な質問に竜胆の従者が声を荒げるが、当の本人は気にならないように簡潔に答えた。

「俺の母親は、霊廟から盗み出された『神科学種』心がないオモチヤだ。

王は、偶然手に入れた美しいオモチヤを気に入って可愛がった。そして二十六番目の『混血の巨人の子』が生まれただけさ」

心がないオモチヤとは、脳に知識データを入力されていない神科学種だろう。

そういった道具として、巨人王の元へ献上されたのが竜胆の母親だった。

巨人族の優劣は、知性や体力や性格よりも、体の大きさが最優先される。

王の子供でも人の血が混ざり、巨人族としては小柄な竜胆は、名前だけの王族扱いだった。

二十六番目の王子は、ハルの顔をジロジロと興味深げに眺める。

「お前は、女神や母に似ているな。神科学種にも血筋があるのか？」
「ぼ、僕は無料キャラ設定で作ったからねえ。」
えっと『神科学種』は女神様に似る人が多いんですよ」

ゲームキャラ アバターに個性を出したい場合、どうしても有料のスペシャルパーツが必要になる。
貧乏学生のハルのキャラ作成は、基本無料パーツ【女神／平民／戦士】の中から単純に女神モデルを選んだだけだった。

実はその選択が、後に終焉世界に大きな影響を起こすカギになるのだった。

オアシスのはずれにあるその宿は、頑丈な石造りの2階建てで、1階が食堂2階が宿泊部屋になっている。
何度もモンスターの襲撃を受けて、建物は破損個所が目立つが、それでも宿の主人の努力で清潔感のある雰囲気を保っていた。

宿の女主人 黄檗きはだは、萌黄の叔母で、竜胆の乳母だった。

濃い金髪の大柄な女性で、肝っ玉母さんタイプ、助け出された萌黄と再会した時はガラス窓が揺れるほどの大声で泣き、喜んでいた。

宿に来てハルが最初にしたことは、浴槽の中に水を移し替えることだった。

小さなウエストポーチから、水が音を立てて湧き出し、それを見た宿の主人や自警団のメンバーから驚きの声上がる。

水は約10分間出続け、大きな浴槽1杯分の量が貯まり、オマケの川エビが60匹泳いでる。

オアシス自警団は十五人、そして体の大きな巨人族の竜胆と従者達は大喰らいだ。

しかし今は水が無くまともな食事にありつけない、乾燥肉に干からびた野菜、水は口に含む程度で命をつないでいた。

「おばさん、僕に厨房を使わせてください。鍾乳洞から持ってきた食材で料理を作ります」

宿の厨房は大人数の料理ができる。

多めに持ってきた木の実、川エビを浴槽の中から捕まえて、手持ちの乾燥ハーブ、宿で飼っている鳥が生んだスイカ大の卵を使ってチャーハンを作ることにした。

エビの焼ける香ばしい匂いにつられて、かまどの周りには自然に人が集まってくる。

「あんだ、男の子なのに随分と料理の手際がいいね」

「僕のリアルの家は食堂していて、それに学校でも料理を習っているんです」

「リアルって何のことだい、神科学種の学校は料理も教えるのかい？」

おしゃべりな叔母さんは、料理をしながらオアシスの村の惨状を色々話してくれた。

「オアシス聖堂のやり口は、最初の一月は、タダで水を恵んでやる

のさ。

次の二月は寄付が出来なくてもある時で良いという。

三月からは寄付を払うか、聖堂のために働かされるのさ」

オアシスには二千人の砂漠の民が住んでいる。

それがバケツ一杯水を得るために、財産や家の家財道具をすべて聖堂に寄付して、それすら無くなると奴隷労働のような状態で使役された。

「アタシたちは、オアシス自警団という名目で聖堂から距離を置いているんだ。

竜胆様たちが狩ってくる動物の肉と水を交換して、なんとかなっている。

村も、一年前に聖堂に逆らった連中がいたんだけどね……」

1年前 オアシス聖堂の横暴さ嫌気をさした人々は立ち上がった。

「それほど私の成すことが気に入らないのなら、お前たちは好きにするがよい。」

聖堂の大神官は、杖や神具をすべて放り出すと聖堂を出て行った。

反乱を起こした村のリーダーは歓喜の声を上げ、内通していた聖堂の若い神官と固く握手を交わす。

村人は聖堂になだれ込み、喜びを爆発させ涙を流し歌を歌う。

しかし、日が沈むとその状況は一転した。

聖堂と村々に灯っていた『神の燐光』は消え、漆黒の闇夜に閉ざされた。

砂漠からゴブリンの大群が現れ、家畜を襲い畑を荒らし、子供を攫い、家に火を放つ。

日が昇る頃には、村は壊滅寸前になっていた。

村の夜を灯し、モンスターを退けていた『神の燐光』は、聖堂の大神官の力によってもたらされていたのだ。

結局、リーダーと若い神官は村人に殴殺され、大神官は再び聖堂の主になり、その横暴さは前にも増して過酷になる。

.....

「ごめんよ、今こんな話したら食事が不味くなるね。

聖堂や村について、詳しいことは竜胆様に聞いとくれ。」

叔母さんは浮かぶ涙をエプロンでぬぐい、厨房を出てゆくと食事のセッティングを始めた。

僕も気持ちを切り替えて、横から伸びてくる摘まみ食いの手を叩きながら、料理の仕上げにかかる。

「おお、うまそうだなあ、一口」ピシッ

「ハルちゃん、ちよっとだけ」パシッ

「お兄ちゃん、もう我慢できないよ」パンッ

自警団の仕留めてきた黒豚カピバラを、骨ごとぶつ切りにして
こんがり焼くとチャーハンの上に乗せる。

卵の黄色に川エビの赤、乾燥ハーブの緑、焼けたカピバラ肉、見
た目にも食欲をそそる一品に仕上がった。

「うつまあいいつ。こんな料理初めて食べるぞ。」

「白い粒に卵が絡んで、エビもカリッと焼けて香ばしい。」

「カピバラ肉がこんなに柔らかく焼けるなんて、どんな料理方法な
んだい？」

出来上がった料理は、みんなテーブルに腰掛けるのも待てなくて、
皿を受け取った傍から立ち食いしている。

少ないおかわりを求め凄まじい争奪戦が始まり、ハルの料理人魂
を満足させた。

「お前達は、一体どういった関係なんだ？誰が主人だ」

おかわり争奪戦に勝利した竜胆が、皿を片手にハル達の食事テ
ブルに近寄ってきた。

確かに、天女のようなテイダは女主人風だし、黒袴のSENは用
心棒、僕は二人の従者に見えるかもしれない。

「神科学種の冒険者は、誰にも縛られない自由な身分だ」

これは、ゲームシナリオでよく尋ねられる質問に対するSENの答えだった。

テンプレな答えをして、ゲーム進行をスムーズにさせる技らしい。だが「自由な身分」な考えは、王子様には理解できなかったのか、とんでもないことを言ってきた。

「ほう、それならハルには主人がいないんだな。お前、俺のモノになれ」

「ちよつとお、ハルちゃんはお姉さまのオモチ「やめる変態エロフ」げふう」

……慌てるな、腕のいい料理人が欲しいだけなんだ……BLタグなんか要らん。

「1年前に、全域転送魔法陣（転送ゲート）が壊れ、俺たちはこの砂漠に閉じ込められた。

だから今は、世話になつてるオアシスの村人の安全を守るために、自警団の手助けをしている。

お前たちはどうする？いくら冒険者と名乗っても、転送ゲートは壊れていては、コノ砂漠から出ることはできないぞ。」

竜胆は食事を平らげて、僕のハーブティまで飲むと、席を立つて仲間の所に戻っていった。

確かに、今の僕のレベルじゃ戦闘しても足手まといになるだけだ。

できる事と言ったら、ここの食生活の改善ぐらいか？

うつつ、相手が一応王子様だし、まるで異世界トリップ後宮モノみたいな話だ。

しかし、神科学種の力に頼ってばかりいたら、オアシスの人々は自立できない。

聖堂に頼りきったツケが、今、村を滅ぼそうとしているのだから。

「この村は、衣食住のうち一番大切な食の、しかも水の確保が出来ない。

俺たちが同情して、地下鍾乳洞まで水を汲みに行っただとしても焼け石に水。

アイテムバッグが壊れれば、それでお終いだ」

「いつそ、鍾乳洞に住んで原始人生活を送った方が快適かもしれないねえ。

水もあるし、ゴブリンも砂漠竜も襲ってこないし」

「あの川の水を、どうにかしてオアシスまで引くことはできないかな？」

ハルはそう呟くと何か考え込んで、長い間席を立たなかった。

クエスト7 ログアウトしよう(前書き)

MHネタが少々。

クエスト7 ログアウトしよう

2日目は、宿屋の太陽の匂いのするベッドで熟睡できた。

朝、ハルが目を覚ますとSENとティダはすでに起きて、着替えも何もかも済ませていた。

何気にSENの顔を見て違和感が……あれ、無精ひげ、すこしワイルドな顔立ちになってるかも。

「おはよう、よく眠れたかハル」

「あっ、おっはようございます、SENさん、ティダさん」

二人は僕が起きるのを待っていたようだ。

どうしたんだろう、なんだか少し妙な雰囲気だな？

「ハル、ちょっと確認したいことがあるんだ。

試しに落ちて（ログアウト）みてくれないか」

そうか、ちゃんとセーブ（就寝）してからでないと、ログアウトできないからね。

ゲーム世界での2日目は、リアルでは2時間。

僕は、9時にログインしたから、ログアウトしたらお昼前になっているはずだ。

判りました、と返事して、僕は首のチャーカーに触れようと……

あれ、リアルの腕ってどうやって動かす？

頭は、首は、

腕は、指は、
僕の体は、どこにいった？

「あつ、な、なんで、ログアウトできない？」

SENとティダは、黙って僕を見つめている。その視線は探る様に鋭い。

どうしたんだろう、これは……夢？

鮮明な夢の中に居て、夢だと意識しているのに起きられない感じに似ている。

体が目覚めない。

「ハルちゃん、風邪ひいて学校休んだって言ってたよね。
風邪薬の成分に眠気を誘う作用があれば、本体は眠てる状態かもしれない」

「そうだ、僕ログインする前に風邪薬を飲みました。
ということは、SENさんもティダさんもログアウトできないの？」

僕ら三人とも、体調不良の状態でゲームにログインしてしまったらしい。

ゲーム使用上の注意　甘く見てました、すみません。

リアルな体は、インフルの高熱にうなされて昏倒してるかもしれない。

はぁ、とSENはため息を吐くと髪をガシガシ掻き繕る。

「ハル、お前はゲーム初心者で、このエリアを初めて来たのだから気が付かないだろうが、ココは、俺たちが知っている場所とは、あまりに違い過ぎている。」

オアシスの村はこんな悲惨な状況ではなかったし、モンスターバトルもリアルすぎる。

疑似体感システムが本当にここまで再現できるのか？」

「しかしなあ、逆に剣や魔法の世界がリアルなんて、ありえないよ。元々V B Wシステム自体が、二世代先に行く謎の技術と噂されるくらいだ。」

リアルっぽいのも、ゲーム内で新たな技術導入がされたんじゃないか？」

どうやら、異世界迷い込み派のSENと、ゲームの新システム導入派のテイダで意見が対立中。

結局、10日（リアル10時間）後の強制ログアウトを待つか、少しでもリアルの体が動けば、その場でログアウトするという話になった。

三人は1階の食堂へ降りると、自警団の数人が地図を広げ何やら話しこんでいる。

竜胆たち自警団は、半年に一度オアシスを襲う蒼珠砂竜を追っていた。

机の上に広げられた地図には、広いタイシヨ砂漠の中を回遊する砂漠竜の進路コースが数パターン記されている。

「今回の砂漠竜の動きは、3日後にオアシスを襲うコースだ」

自警団は、砂漠竜をオアシスに近寄らせないように何度も攻撃したが、砂の中を縦横無尽に泳ぎ回る相手を倒すことが出来なかった。

興味津々で横から地図を覗き込むハル達に、竜胆は気軽に席を勧めめる。

SENが地図の上に、オアシスを示す一点に×印があるのを見つけてる。

「砂漠竜はオアシスのこの場所で引き返している、どうしてだ？」

ああ、と竜胆は苦々しそうに呟く。

「この位置は女神聖堂のある場所だ。

聖堂の連中は砂漠竜に建物を破壊されないように、生贄を差し出して餌付けするのさ」

「なんだって、竜の生贄……まさか」

「ご想像通りだ。村の若い娘を生贄に差し出して、竜の怒りを抑えてもらおうんだよ」

ガンッ

黙って話を聞いていたテイダが、突然立ち上がると怒りに任せて机を叩く。

「あんたら馬鹿か！！砂漠竜は神じゃない。

生贄が豚でも人間でも、喰って腹いっぱいになれば満足して帰っ

ていくんだ。

……そうか、お嬢ちゃんが攫われたのは、生贄にするためか」

「あの腹黒い大神官は、反乱分子への見せしめのために、関係者の娘を生贄にする。」

三日後には、聖堂前に砂漠竜が餌をもらいにやってくる。

萌黄もえぎの代わりに、別の娘が生贄になるはずだ」

SENは腕組みしたまま地図を眺めると、不敵な笑いを浮かべる。

『最上級 蒼珠砂竜 討伐クエスト』

それは、砂漠竜の貴重部位を手に入れたくて、SENとティダが挑戦したクエスト。

当時【物欲センサー】が働いていたせいか、討伐しても討伐しても欲しい部位は出なくて、SENのハートをスタボロにしまった、トラウマのあるクエスト。

【物欲センサー】主にネットゲームなどで、プレイヤーが欲しいアイテムほど入手できないような場合に働いていると噂される特殊なセンサー。

「くくくつ、大剣溜め 長押し点滅3回 移動ステック×回転 大剣溜め 長押し」

「うわつ、SEN正気に戻れ！！電波垂れ流している」

「それは神科学種の呪文なのか、どういった意味なんだ？」

なにやら目が座り、異様な黒いオーラを放ちながら、SENは宣

言する。

「最上級 蒼珠砂竜 討伐クエ68回クリアの実力見せてやる。
王子竜胆、それに自警団諸君、神科学種 最強武士（廃プレイヤ
ー）が竜の狩り方を教えてやるっ」

午後から、ハル達はオアシスの村と女神聖堂を尋ねるために宿を出た。

以前のオアシスは『病を治す奇跡の水』を求めて各地から巡礼者集まり、観光と商業でとても賑わっていた。

しかし今は奇跡の水は枯れ、転送ゲートが壊れて訪れる者もない、以前の華やかさは見る影もない。

干ばつと圧政とモンスターの襲撃で、畑は荒れ作物も育たず、建物は破壊されたまま放置されていた。

木の陰に座り込んで動かない老婆や、大きな荷物を抱え疲れたように歩く親子、物陰からハル達の様子を監視する視線。

スラムと化した家々を見下ろすように、村の中心にオアシス聖堂はそびえ建っていた。

オアシス女神聖堂は、白い石積の巨大な長方形の箱のような、一風変わった建物だ。

建物前面は、色とりどりのタイルで女神と神話の世界が描かれ、屋上は供物を捧げる祭壇の様な造りになっている。

聖堂前大広場は白い石畳が村の大通りから砂漠まで伸びて、広場中央には『奇跡の池』と呼ばれていた、水の枯れた池が備え付けられていた。

聖堂訪問用に、SENは黒のシルクハットに白い艶のあるシャツ、燕尾服の様な黒いコートを羽織り、クラシカルな雰囲気イケメンになっていた。

ティダは「どこの花嫁ですか」と言いたいような、全身白のドレス姿。

そして僕は、無料キャラ設定で平々凡々、見た目二人の従者です。

「あら、ハルちゃんも高貴な御曹司に見えるようにお姉さまが着替え「やめる変態エロフ」げふっ」

強欲悪大神官との面談はSENに一任することになる。

ティダは、会話をするとイメージぶち壊しなので黙って立っていると言われた。

「王や貴族、神官や將軍、身分の高いキャラに会う場合は、テンプレ通りの会話をしないと面倒な事が起こるんだ」

「なんですか、テンプレ通りの会話って？」

「ふざけた会話して相手を怒らせると「地下牢ダンジョン」に送り込まれる。

地下牢ダンジョンも凝っていて面白いんだが、今は後回しだな」

なるほど、僕みたいなゲーム初心者が会話したら、大神官を怒らせて「即 地下牢ダンジョン」決定だね。

周囲の人々の恐れるような視線を感じながら、3人の異邦人は、
伏魔殿 オアシス女神聖堂の大きな門をくぐった。

クエスト8 大神官と会話しよう(前書き)

トホホ、注：R15 になってしまいました。

クエスト8 大神官と会話しよう

その部屋はオアシス女神聖堂の中で最も美しく、金の壁にヒスイの柱、様々な宝石で彩られた女神像が祭られている。

部屋の外でひかえていた下級神官は、中に声を掛ける。

「大神官様、面会のお時間です、神科学種の冒険者が到着しました」
「神聖な襦の最中だ、しばらく待たせておけ」

自分の体を支えきれないほどでっぷりと太ったり、たるんだ腹に香油を塗りこみながら、濁った眼の大神官は甲高い声で返事をする。

湯気がたちこめる部屋の中、襦を行う湯殿には並々と湯が張られ、異国の花が大量に浮かべられていた。

湯殿の中で男の体を丁寧に洗う少女は、薄布一枚で水に濡れ、まだ未成熟な体のラインが浮かび上がった状態で、舐めるような邪な視線に晒されていた。

大神官は、湯殿から出ようと少女の細い体にのしかかり、重い自分の体を支えさせる。

小柄な少女に、その太った大きな体を支えきれはるはずもなく、悲鳴を上げて膝から崩れ落ちると床に押し潰される。

カラントツ カラ カラ カラ

少女の倒れた先に置かれていた香油の瓶が倒れ、中身がこぼれてしまう。

全身の痛みには耐えながら顔を上げると、そこには奮怒の表情で目

を血走らせた男がいる。

「この役立たずめ!!」

都から取り寄せたこの香油は、お前の何倍も価値のあるものだぞ」

大神官は肥満体を支えるために持つ杖を振り上げ、激しく少女を打つ。

下級神官は身をすくめると、自分が巻き込まれないように、慌てて部屋を出てゆく。

ヒステリックな罵声と、少女の哀願する悲鳴、激しく打たれる音が響き続けた。

「お初にお目にかかります大神官様。

私はSEN、後の者はテイダとハルと申します。

我々はオアシスに迷いこんだ神科学種の冒険者、決して怪しい者ではございません」

うやうやしく頭を下げる男が身に着ける衣装は、高級な艶のある生地に襟や腕のこった装飾、王都の貴族が好むような高価な品だった。

礼儀に則った洗練された仕草、しかし右頬のタトゥーは武士の証、そして眼光鋭い視線は油断ならないものがある。

「我々は、しばらくこの村で滞在する予定ですが、大神官様には何かとご迷惑をおかけするかと思いますので、これを、女神様への忠

誠の証としてお納めください」

「お、おう、なんとこれは素晴らしい。淡雪ユニコーンの杖ではないか」

大神官に差し出された品（袖の下）は、もちろんハルが出した激レアアイテム。

杖に頭部に大きな3色の水晶がはめこまれ、持ち手の部分は純金、杖本体は淡雪ユニコーンの角でできていた。

「はい、聖人であらせられる大神官さまに相応しいモノをと思い、お持ちしました。」

楔での少女の失態に不機嫌になっていた大神官は、喜色満面で杖を受け取ると満足そうにうなずいた。

その大神官の様子を確認して、SENはたずねた。

「ところで、このオアシスには他にも我々の様な冒険者はおりますか？」

「いや、転送ゲートが壊れてからは、そのような者たちは訪ねてこないな。」

霊廟から迷い出てくる神科学種の中には、冒険者を名乗る毛色の変わった者がいる。

オアシスに居た冒険者たち、下らぬ正義感を振りかざす邪魔な連中は、1年前に全員粛清された。

この男はどうだろう、権力者たる者への対応も心得ており融通が利きそうだ。

「この尊い行為、女神様もお喜びであろう。
我々は女神様の愛児、仲間である。
私に、SEN殿の連れのモノも紹介してもらえるかな」

聖堂の入口で控えていた神科学種の二人が立ち上がり、中に足を踏み入れた。

顔を上げた銀髪の麗人を見て、入口警備の背の高い神官が溜息をもらす。

透き通るほど白い肌に切れ長な美しい瞳、見惚れるような微笑みを浮かべている。

そして、後からオドオドと付き従う少年には、気にも留めなかった。

ハルは、SENの合図に気が付くのは遅れ、ティダは先に聖堂の中に入ってしまった。

慌てて立ち上がると、つんのめりながら磨き抜かれた大理石の廊下に足を踏み入れた。

チリンッ　チリンッ

ハルの頭の中で、小さな鈴の音が鳴り響く。

聖堂に踏み入れた脚先が微かに光ったかと思うと、体中を光が駆け巡り、それが倍に膨れ上がって外へ流れ出すような感覚。

聖堂内でほんのりと灯っていた『神の燐光』と呼ばれるランプが、突如、音を立てて煌々と燃え上がる。

天井から吊り下がる水晶玉に光が宿り、カラーボールのように周囲へ五色の光を放つ。

「うつつ、何が起こったのだ!!」

これは、神力が、女神の祝福が、聖堂に集まって来ている」

驚いて叫ぶ大神官の視線の先には、白いドレスを着た天女のような美しいエルフが立っている。

広い部屋の入口で、驚いて立ち尽くす少年には気付かない。

「これはハルの力だ。ティダ、上手くごまかしておけ」

「えええつ、いきなり何いってん……」

「ご機嫌麗しゆうございます、オアシス聖堂の大神官様っオツホホホッ」

SENは、ティダの背中を強引に押し入れ替わり、大神官の前から下がる。

入口に立っていた警備の神官も、ティダに見惚れて、ハルの異変には気が付かない。

SENは、ポカンと突っ立ったままのハルを脇に抱えると、大股でその場を離れる。

ずる ずる ずる ずる~~~~

「うわっ、落ちる、落ちる。どうしたんですかつSENさん!!」

脇に抱えられ、半分引きずられるように聖堂を出たハルは、周囲の景色が変わったことに気付く。

聖堂へと続く白い石畳の大通りは、両脇の街灯が光が膨れ上がるように輝き、夕暮れ前の聖堂は鮮やかにライトアップされ光り輝いていた。

聖堂門の上部に、錆びて埃を被った銀鈴が、突然、女神をたたえる神曲を謳いだし、その音色がオアシス中に響き渡る。

「な、なんて、暖かくて眩しい、街灯の『神の燐火』が輝いてるぞ」「壊れて鳴らなくなった銀鈴が、神曲を奏でている。これは、どこかに聖人様が現れた」

「我々の祈りが通じたのか？ミゾノゾミ女神が、この苦しみから救ってくださる」

村人たちは驚きの声を上げ、不思議そうに光を取り戻した『神の燐光』を見つめ、銀鈴の奏でる『神曲』を聞いている。

彼らと同じように、光り輝く聖堂を眩しそうに眺めるハルを、SENは奇妙な想いで見つめていた。

「俺たちは、ハルの『幸運度』を簡単に考えていたようだ」

四年間、ひたすら『End of god science - 神科学の終焉 -』をプレイしたSENの目から見て、ハルの能力『幸運度』は特異なモノだった。

ゲームを楽しむ要素の中に、トレジャーハンティングがある。

モンスタードロップ品やダンジョン報酬の宝箱数々は、人の欲望を掻き立て執着を生み、ゲーム中毒の廃プレイヤーを生み出す。

しかし『幸運』を約束されたハルには、ゲームを楽しむ執着や欲望が薄い。

レアアイテムを収集するだけ、チートやBOTのようなこの能力に何の意味があるのか。

ところがハルは、先入観や固定観念のない柔らかな発想で、この膠着し終焉に向かう世界に小さな変化を起こす。

その『幸運力』は、別の呼び方「奇跡」「祝福」と表わすことができる。

科学の知識と魔法と力を兼ね備えた者たちが、精霊の導きで終焉世界に蘇る。

彼らは、世界を豊穡へ導くのか、破滅へ導くのか。

ハルは、俺たちは、精霊の導きで終焉世界に蘇ったのだろうか？

クエスト9 蘇生呪文を使ってみよう(前書き)

どうも、シリアスとは程遠い方向に……

お気に入り登録 ありがとうございます。

クエスト9 蘇生呪文を使ってみよう

聖堂と街灯が、突然クリスマススイルミネーション状態になった原因が、僕の非表示ステータス『幸運度』にあるとSENは言った。

『ラッキーボーイ』の称号は、実は『奇跡』を起こすステータスかもしれない。

「体力も生命力も魔力も減ってないけど『幸運度』が使われたんですか？」

「『幸運度』は非表示のステータスだから、増えた減ったか判断できない。

ハルは聖堂の中に居た時、何か変わったコトは起きなかったか？」

「そういえば……小さな鈴の音がして、不思議な光が足先から全身に駆け廻っていったような……気がします」

腕組みして考え込んでいるSENに、ハルは少し居心地悪くなり、ソワソワと周りを見回していると、そこへ神官の相手押し付けられ置き去りにされたテイダが、凍るような笑みを浮かべながら大股で近づいてくるのが見えた。

「SEN……よくも逃げたなあああ

俺に、あんな脂ぎったメタボオッサンの相手させやがって!!」

「おかえりテイダ、お前は色仕掛け担当だろ。大神官さまのハートは虜にできたか。」

ブウン ビユウウウン

怒り心頭のティダが、血糊の付いたメイスを投げつけてきた。しかし、SENはそれを片手で軽々と弾き飛ばし、ふふんつと鼻で笑う。

敵？を仕留め損ねたティダは、げっそりした表情で僕に抱きついてきた。

「スウハア スウハア ハルちゃんは若草のようなイイ匂いだあ。
あのオツサン、神官のくせにムスクと生魚が混ざった酷い匂いで、
手汗でベタベタして気持ち悪っ。」

お姉さまの傷ついた心をハルちゃんに慰め「やめろ 変態エロフ
げふっ」

人目の多い聖堂前で少年に抱くつく天女に、それを引きはがすイケメンという、修羅場にしか見えない状況。

村人たちは、3人に距離を取りながらも、興味津々でその痴話喧嘩を眺めている。

やっと冷静さを取り戻したティダからの情報では、聖堂は生贄の儀式を行う準備をしているそうだ。

二人の話し合いを邪魔をしないように、僕はぼんやりと街灯の『神の燐光』を眺めていた。すると、どこから飛んできたのか、小さな緑の光が体に纏わりつく。

「あつホタル、じゃないよね、何だろっコレ？」

緑の小さな光は、ハルが捕まえようと手を伸ばすと、スルリと交わし、少し前を漂っている。何度かそれを繰り返して、逃げもせずハルの周りをヒラヒラ漂い舞い続ける。

「どこに行くの、僕について来いって言っている？」

ハルの声掛けに反応するかのように、緑の光は微かに震えるとゆつくり移動を始める。

「精霊の導きか、これは何かのクエストだな」

「ココに入れなんて怪しさ満点ね、まさか罠じゃないといいけど」

三人は、緑の光に誘われて、聖堂裏の穴倉のような小さな勝手口から中に侵入した。

聖堂正面の豪華な造りと比べると、同じ建物とは思えない、石積がむき出しになった長い廊下が続いていた。

低い天井、横幅も人がすれ違うのがやっとの狭い廊下、中で奴隷労働をさせられている人々は、見るからに異邦人の3人を光のない疲れた目で眺めるだけだ。

「これは、聖堂というより牢獄のようだ。」

廊下の突き当たりに、半開きの豪華な大きなドアがあり、中に人影が見えた。

緑の光は、するりとドアの中に入り込み、僕らも誘われるように

部屋の中に足を踏み入れる。

途端、薄暗い部屋の明かりが煌々と輝きだした。

これが『幸運度』の効果なのか、僕は自分が照明スイッチになつたような気がした。

「うわっ、すげえ、何だこの豪華絢爛な部屋は……」

「ちよつと待て、中の様子がおかしい。」

部屋の中には金銀に彩られた壁に、儀式用の宝石をちりばめられた神の像、色とりどりの花々が飾られて、奥に大きな浴槽がある。

しかし、花の香りと混ざり異質な生臭い匂い、浴槽の水は真っ赤に血で染まっている。

目の前には、酷く殴られて血を流している少女と、その手当てしてららしい数人の姿があった。

「ダメだ、出血がひどくて止まらない、もう助からない。」

「かわいそうに、こんな酷く痛めつけなくても……」

女神聖堂の警備神官 退紅あひやうが駆けつけた時には、すでに義妹の銀ぎん朱しゅの意識はなく、呼びかけにも答えなかった。

母親違いの妹は、家族の為に水を得ようと聖堂で働きに来ていた。それなのに、突然生贄に選ばれて、大神官に訳もなく痛めつけられるなんて。

愛らしい顔は原型を留めないほど腫れ上がり、体中打たれた傷は肉が裂け、そこから血が流れている。

「ごめんよ銀朱。こんな仕打ちを受けるくらいなら、砂漠の果てで干からびる方がよかった。」

すでに息絶えようとしている妹の横で、兄は座り込んで彼女の手を取る。

仲間たちも手の施しようのない状態に諦め、ただ静かに見守るしかない。

不意に、部屋の明かりが煌々と輝き、気が付くと「神の燐光」で満たされていた。

大神官が戻ってきたかと驚いて部屋の入り口に目を向けると、そこには奇妙な異邦人達がいる。

退紅あひそめが聖堂入口を警備していた時に、大神官と面談していた『科学種』の冒険者だと気がついた。

「お、お前たち、勝手にこの部屋に入ってくるな。」

少女を守るように、仲間の警備神官たちは身構え武器を手に行く手をふさぐ。

「その娘、ヒドイ怪我をしているじゃないか。いったい何があったんだ？」

背の高い黒衣の武士は、神官の威嚇を気にも留めず、堂々とした態度で近づぐ。

屈みこんで、倒れる少女の状態を確認すると眉をしかめる。

『神科学種』は、精霊の力で怪我を癒す術を使うという。

彼らが聖堂を訪れた時、聖人出現を知らせる聖堂門の銀鈴が鳴り響いた。

この方は、我々の祈りの声を聞き、現れた女神の使徒ではないだろうか。

退紅は男の前でひれ伏し、頭を床にこすり付けながら、喉の奥から絞り出すような声で叫んだ。

「聖人様、どうか、どうかお願いします。」

俺なんでもしますから、銀朱を、妹を助けてください。」

空気がゆるやかに動き、退紅が顔を上げると、妹の傍に、別の神科学種が立っていた。神科学種の少年は、血まみれの少女に覆いかぶさり顔を覗き込んでいる。

何をするのか、それを止めようと腕を伸ばすが、少年に触れることが出来ない。

少年は彼らの信仰する女神【ミゾノゾミ】と瓜二つの顔立ちだ。

彼女の命が途切れる瞬間、少年の声が静かに響く。

「傷よ癒えよ、聖霊よ、命の光を灯せ」

ほんの1日前、僕は死に掛けたけど、運よく生き延びた。
その瞬間は、痛くて、苦しくて、悲しくて、辛くて
だから、目の前の女の子を見た途端、僕の体は勝手に動いて呪文
を唱えていた。

SENやテイダが止める間もなく、ハルは少女に完全蘇生呪文を
行使した。

その術は、自分の力を相手にすべて与えてしまうことでもある。

【ハル 生命力0・001/魔力0・001】

初心者ハルの僅かなライフやスタミナや魔力は、相手に根こそぎ
吸い取られていた。

「まったく、この術は体力があるか自己回復強化しないと、共倒れ
になるんだぞ。」

青ざめた顔で目を回してひっくり返ったハルは、SENのお小言
をコクコクと頷きながら聞いた。

渡されたライフポーションを飲み、どうにか動けるようになる。

少女の全身の傷は一瞬のうちに癒えて、赤黒く腫れ上がっていた
顔の傷も消えた。

卵の様に柔らかかそうな白い肌に大きな瞳、小さな口にピンクの唇。
背中まで伸びた癖のない真っ直ぐな艶のある黒髪は、眉の上で綺麗
に切り揃えられている。

銀朱は、とてもとても可愛い和風美少女だった。

意識を取り戻した少女はゆっくりと体を起こす。

横で座り込んでいるハルを、思いつめたような表情で キツ と睨んでくる。

「やたっラッキー、じゃなくて、チューしてごめんなさいっ……と、謝ればいいのかな。」

彼女の顔を覗き込むと、明るい緑の瞳は、僕らをここに連れてきた小さな光と同じ色。

右目は少し赤みを帯びていて、彼女も「神科学種」の血が混ざっている証拠だった。

「君が、僕らをここまで呼んだんだね。」

少女は小さくうなずくと、頬を染め、いきなりハルに抱きついてきた。

覆っていたシートがハラリと下に落ちて、服が千切れて裸同然の彼女の体があらわになる。

ハルは後ろに倒されて、頭を強打すると再び目を回した。

「ああっ女神様、私の声を聞き届けてくれたのですね、ありがとうございますっ」

「ちょっと僕は女神様じゃないから、抱きつかれるとポニョポニョポニョ 柔らかあ〜」

僕の上に乗っかって、ギュッと痛いほどしがみつく彼女に押しつぶされてしまった。

だって彼女すっぱんぽんなんだよ、どこを触って引き剥がせばいいんだっつ。

「銀朱、離れるんだ。この子は女神様じゃない!!」

兄の退紅は、慌てて妹を引き剥がし、自分の着ていたコートを羽織らせる。

いつもはテイダがしゃしゃり出たり、SENが止めに入るのに、二人はどうしたんだ？

「REC 脳内HDへの動画保存完了、只今より脳内再生。」

「いやあん、眼福だったわ〜ハルちゃんグツジョブ。」

だ、だめな大人がここにいる。

クエスト10 反大神官派と話し合おう

玄関先に届けられたピザは冷たくなっていた。

野原幸樹は、リクライニングチェアから体を起こし 首に巻いた5本のチョーカーに触れる。

急に熱が上がって、こってり味のピザを食べる食欲は無くなっていった。

数本の端子が伸びたヘッドホン、V B Wモノクルを違法改造した赤いレンズの眼鏡を掛け直す。

最初のインフル死者は詳しくニュースになったが、1月末で死者が1千人を超えたところから、その数は報道されなくなった。

国はひた隠しにしているが、関東地区だけで死者5千人は確実に超えただろう。

世界的パンデミック 新型インフルエンザは『バタフライ』と呼ばれるようになった。

蝶の羽ばたきは、病災の鱗粉を世界中に降り注いでいる。

ああ、体が重い、寒気がする。

自分は家に引きこもっているから大丈夫だろうと甘く考えていた。コンビニや移動の電車、日曜にアキバに行ったのが拙かったかもしれない。

彼の目の前の景色は、5つのバーチャルモニターが重なって存在するゲーム空間だった。

V B W システムは、10 時間経つと強制ログアウトになる。だから、彼は5本のチヨーカーを9時間30分ごとに切り替え、ほぼ24時間システムを起動させている。

その中の、一つのモニターに映し出された男が早口でしゃべっている。

「なあコウキ、我々の『End of god science』は世界の終焉を予言していたんだ。

ヒヒツ この腐った世界は、黒の蝶によって清められる。女神なんて現れるものか」

「黙れアマザキ、予言が真実なら、それを防ぐ方法もあるはずだ。俺は、自堕落で妄想まみれで無関心で自分勝手な、この世界が気に入ってんだよ。」

幸樹はスカイプを切ると、苛立たしげに長く伸びた前髪を掻き上げる。

今日は体調がよくない。少し休むか。

その時、フレンド登録していたキャラのログインを知らせるメールが入った。

12月と、1月に、姿を消していた二人が同時にゲームにログインしている。

まさか、彼らがログインできるはずがない。

だって、彼らは……

どうする、行くか、逝くか。

幸樹は、黒袴姿のアバターSENを選ぶと『End of god science』のログイン場面にパスワードを入力する。

退紅は僕らを、聖堂の武器庫の奥にある備品置き場に案内した。

周りから怪しまれないように造られた隠し部屋。

狭い部屋の中には、退紅の声掛けで集まった20人ほどの神官達が待ち構えていた。

「妹は、聖堂で働く約束はしたけど、砂獺竜の生贄になるなんて話は聞いてない。

由緒あるオアシス聖堂の権力を、大神官は私物化し非道な行いを繰り返す。

俺はこれ以上我慢できない。生贄の儀式の間を狙い、奴を倒すぞ」
「神科学種の聖人さまが現れた。今度こそオアシスを我々の手に取り戻そう」

背の高い茶髪の男、銀朱の兄 退紅は反大神官派のリーダーのよ

うだ。

集まった男も女も、熱気を帯びた熱い眼差しで、突然現れた神科学種の救世主を見つめている。

状況を呑み込めないハルの腕を引き、皆の前に連れ出そうとする彼をテイダが遮る。

「ハルちゃんを祀り上げる前に、まず話を聞かせてくれないかしら。生贄の儀式をぶっ潰して大神官を倒したとして、オアシスを襲う砂漠竜はどうするの？」

「我々の力では、砂漠竜どころか、群れたゴブリンを倒すこともできないのです。」

しかし、神科学種の冒険者は、砂漠竜を倒せるほどの力を持っているという話を聞きました」

ん、これはもしかして、僕らに悪いモンスターを倒してくれ、という他力本願？

無表情で相手の出方を伺っていたSENが、厳しい口調で更に問いかける。

「今回は、俺たちが砂漠竜を倒しやっても、次の砂漠竜が沸いたらどうするんだ？

自分たちで砂漠竜を倒せないなら、再び生贄を差し出すことになるぞ」

SENの言葉に、集まった神官たちは戸惑うように顔を見合わせる。

ただリーダーの退紅だけは、挑むように鋭い眼差しで答えた。

「大神官^{ヤツ}を倒して、砂漠竜を倒すなんて無謀かもしれないが、俺はそれで討ち死にしたって構わない。

もうこれ以上、奴らの言いなりになるくらいなら、モンスターに喰われたほうがマシだ」

彼の言葉に呼応するかのようになり、仲間の神官も声を殺して拳を振り上げる。

その様子にSENはニヤリと笑うと、退紅の肩をポンと叩いた。

「我々は精霊の導きでこの地に現れた『神科学種』だ。

女神【ミヅノゾミ】は、罪無き乙女が魔物の生贄になることを望まない。

我々は、オアシスの砂の民のために力を貸してやるう」

イベント好きのティダは、楽しげに呟いた。

「1・生贄の少女を救う 2・砂漠竜を倒す 3・悪大神官をボコる というクエストかあ。」

神官たちを解散させた後、リーダーの退紅と二人の神官、それに僕たちでこれからの作戦を練る。

砂漠竜を倒すのに実力経験不足の神官たちは、オアシス自警団と手を組み、SENから砂漠竜討伐のノウハウを教わることになった。

また、生贄の儀式もぶち壊すけど、そもそもどんな儀式なんだろう。

「大神官は、乙女が生贄として相応しいか」確認する「儀式を行うと言っている」

それって、生贄のオンナノコの味見するってコトですか!!
なんとという如何わしいエロ大神官なんだ。

「この蛮行を見過ごしては、我々変態紳士の名が廃るといふもの」

「おいSEN、俺はそっち系じゃないからな。電波漏れてるぞ〜」

話が脇にそれた頃、SENから渡された服で身支度を整えた、生贄の少女 銀朱ぎんしゆが現れた。

彼女の姿を見て、兄の神官達は感嘆の聲が、僕らは戸惑いの声を発した。

その姿は、白い肌に長い黒髪の映える、白い小袖（白衣）に緋袴を履いたMIKOですよ!!

つつか、なんでSENさん、巫女服なんて持ってた〜。

きっとこれは宝箱かモンスタードロップ品であって、男のロマンを追い求めてつつかり購入したもので無いはずだ。

「まるで女神さまが降臨したようだ、なんて神々しい衣装だ」

「ああ銀朱、我が妹とは思えない、見違えるほど美しくなった、素晴らしいよ」

こちらの方々には、コスプレではなく、本来の神聖な衣装として

映っているらしい。

SENも満足げに彼女を眺めると、何故か僕の方に銀朱を連れてきて隣に立たせる。

「顔は、怪我をしているという理由で包帯を巻けば隠せる。」

このMIKO服は神事に相応しいし、体格も上手くごまかせるだろっ」

あれ、皆さん、どうして僕と銀朱ちゃんを見比べているの？

「身長もほぼ同じだし、中身が入れ替わっても気付かれない」

何故か、すごく嫌な予感がする。

「ハルちゃん、本番ではお嬢ちゃんの身代わり、生贄役お願いね」

なんてテンプレな話、そしてお約束の展開になんだ！！

クエスト11 蒼珠砂竜討伐作戦 1

萌黄^{もえぎ}は、冒険者ハルお兄ちゃんの助手になりました。

最初の助手のお仕事は、地下鍾乳洞から持ってきた木の実の種を鉢に植えることです。

お水をかけると、1時間したら小さな葉っぱが出てきました。

ハルお兄ちゃんが、面白がってカピバラの骨を葉っぱのそばに置いたら、根っこがニョキニョキ伸びてきて骨を捕まえて土の中に埋めてしまいました。

次の日、朝起きて見ていたら、葉っぱがモシャモシャ生えてきて、萌黄のおへその高さまで大きくなっていました。

朝早くからハルと萌黄は、宿の裏庭に「地底世界樹」の苗木をせっせと植えていた。

「これが砂漠に根付いて『おにぎりの実』が収穫できれば、オアシスの食糧事情はだいぶ改善できるはずです。」

「ハルちゃんが植えるなら、『幸運度』が発動して、確実に根付くと思うよ」

昨日深夜まで作戦を練っていたティダは、眠気まなこで窓枠に体を預けながら、二人の作業を見守った。

「肉食植物だから噛み付きますよ、近づくときには根を麻痺させないと喰われるので注意してくださいね」

「楽しそうな二人の姿に、興味本位で近寄ってくる自警団のメンバーに注意をする。」

「砂漠竜討伐作戦が開始されるので、自警団員は宿の外で待機しながら装備や武器の点検をしている。」

「これからハルは、後方支援（戦闘参加は即死確定なので）として、水と食料確保のために再び地下鍾乳洞に向かう。」

「SENとテイダは砂漠竜討伐作戦を指導し、竜胆はハル達と地下鍾乳洞に付き添うことになった。」

「なんで、自警団で一番実力のある俺を最初から参加させないんだ？」

「竜胆が納得できずに抗議すると、SENは苦笑いしながら若い王子に言い聞かせる。」

「貴方は紺の王子、砂漠の民じゃない。」

「そして貴方も、その従者も、俺達もいずれココを去る。」

「だから砂漠の民達の力で、砂漠竜が狩れるように教え込むんだ」

「昨日の約束通り、退紅が仲間を十数人引き連れてオアシス自警団に合流した。」

これで、オアシス自警団と神官の混合討伐隊が結成される。部隊は二つに分けられ、ティダが先発隊を率いて出発した。

SENが砂漠竜狩りに用意させた武器は、剣や鈍器ではなく大きな銛や釣り針だった。

武器のほとんどは聖堂によって没収されていたが、水の枯れたオアシスでは役に立たない銛や釣り針は確保できた。そして爆弾の代わりに、女神聖堂の祭りに使われる花火を、退紅の協力で手に入れた。

「さて、2日後にオアシスを襲う砂漠竜を仕留めるために、この花火を仕掛けに使う」

「SEN様、花火をぶつけても堅い鱗に覆われた砂漠竜にダメージを与えられないし、すぐ砂の中にもぐって逃げられる。」

退紅は、あまりに頼り気の無い作戦に、困惑気味にSENを問う。

「砂漠竜を捕まえるんじゃない、花火で休む間もなく追い立てて、オアシスに誘い込むんだ。」

夜行性の砂漠竜が、のんびり昼寝しながらオアシスに来るの待ち構えるのか？」

砂漠竜は習性として、必ず同じコースを回遊し、同じ場所で休んだ。

前もって回遊コースと休憩場所に大量の花火を設置しておき、警戒心の強い砂漠竜を花火の爆音と光で興奮させ追い立てる。

「大型モンスターは見た目よりスタミナがない。」

休む暇など与えずしつこく追い立てれば、オアシスにたどり着く頃には、随分とスタミナを消耗して弱まっているはずだ。

明日の昼までに、砂漠竜を聖堂大広場まで追い込み、そこで釣り上げる」

SENの発言に、周りからどよめきが起こる。

討伐隊を二つに分けたのは、これから丸一日、狂暴な砂漠竜を熱風吹き付ける砂漠の中で追い回さなくてはいけないからだ。

隊は数時間ごとの交代を繰り返しながら、砂漠竜をオアシスに追い込む。

すでにこの時、ティダと少数の自警団、神官によって作戦は実行されていた。

人間より耳と鼻の利くエルフ族のティダは、ボスモンスター砂漠竜のマーキングした匂いを簡単に探し出す。

夜行性の砂漠竜が、真昼の日差しを嫌い砂漠の中深く潜っていると思われる場所に、大量の花火が仕掛けられた。

「コホン、さて、第1回 蒼珠砂漠討伐 大花火大会を開催いたします」

ふざけた合図により、自警団は花火に点火すると、大急ぎでその場所から離れた。

ドンツ ドドドンツ スドォンーン

大量の火薬の破裂音で地面が揺れ、砂が舞い上がり数十発の花火が同時に青空に白い花を咲かす。

ギギギギヤアアーアア

耳をつんざく金切声が響き、砂が山のように盛り上がると、中から爆炎とともに砂漠竜が飛び出してくる。

砂と同じ白い保護色の鱗をきらめかせ、長い胴体に鉤爪の手足が東洋の竜に近い姿をした巨大な竜が姿を現す。蒼珠砂竜の名の通り頭部に青い珠が埋め込まれ、裂けた口から青白い炎の舌がチラチラ覗いていた。

砂漠の強い日差しを嫌い、身をひるがえし砂の中に潜り込もうとするとところを、先回りして待ち構えていた自警団が、手にした鉋や釣り針を投げ竜の鱗に引っ掛ける。

鉋や釣り針には銅線の釣糸が取り付けられ、竜が暴れるとソレが体に絡みつく。

ティダが砂漠竜の前に歩み出て、雷属性の銀色に輝く呪杖を構えた。

「いかすちそのの神官、お姉さまの、術の行使をよく見ていなさい。」

雷よ集え鳴り響け 稲妻鷹落

銀髪のエルフが杖を振り上げると、バチバチと白い火花を散らす雷の塊が、巨大な珠になって杖の先に浮かぶ。

魔力を込め、勢いよく振り下ろされた雷の塊が砂漠竜に当たり弾

ける。

竜の体に纏わりついた銅線に電撃が伝い、黄色い火花が砂漠竜の巨体を這い回った。

しかし、これだけの電撃を受けても、砂漠竜に致命傷を与えることはできない。

砂漠竜にとっては静電気程度の威力しかないが、今まで敵の攻撃をほとんど受けたことのないボスマンスターを苛立たせるには充分だった。

「さて、次はアンタたちの番よ。5人で行えば同等の電撃の威力があるわ」

ティダは、竜の暴れる様を驚いてポカンと見ている神官達に声を掛ける。

慌てた5人の神官は、てんでバラバラの、力のない呪文詠唱で呪杖を振るう。

シュプ パシュ バシヤ ビリリ プスン

放たれた電撃は、横に外れたり途中で欠き消えて、砂漠竜の体にすら届かない。

その隙に、せつかく地表に誘き出した砂漠竜は、ノソノソと砂の中に潜り姿を隠してしまった。

「どうも杖の調子が悪いなあ」

「ここは暑ついし、寝不足で力が出ないよ」

「どうして私が冒険者に使われなくてはならないんだ」

彼らには「モンスター狩りは野蛮な連中の仕事」という考えがこ

びりついている。

文科系体質の神官たちは、砂漠竜を見逃す失態を犯しておきながら、ブツブツと言いつつ訳しだした。

人並み外れた美貌の、常に天女のような微笑みをたたえたエルフは、手に持つ武器を呪杖から細い木の板に持ち替えた。

それは、教室の黒板の横に引つかかっている、1メートルものさし（竹製）。

「SENのヤツ、この連中は手がかることを知っていて、俺に押し付けたのか。」

まあお姉さまにかかれば、あつという間に「素直なイイ子ちゃん」にシテアゲル。

調教パート2、始めますか」

相手の雰囲気が変わったことに気付いた神官は後ずさりした。

それすら気づかすべらべらと愚痴っている男に、凍るような笑みを口元に張り付け、ギラギラと瞳が光らせたティダが近づく。

突如、切り裂くような鞭打つ音とティダの高笑い、神官の悲鳴が砂漠に響き渡った。

1時間後、神官たちの呪文詠唱がピタリと八モる。

「オアシスを救うのが我々の務めだ 雷いかづちよ集え鳴り響け 稲妻鷹落」

神官五人の息の合った、気合が入った呪術が砂漠竜の体を打ち、砂漠竜は、巨体を引きずりながら背中を向けて逃げ出す。

初めて上手く決まった攻撃に、神官たちは喜声を上げて拳を振り上げる。

パチ パチ パチ

舞い降りた天女のような、慈悲深い微笑みを浮かべたティダが、拍手をしながら満足げに頷く。

「なんて素晴らしいチームワーク。」

お姉さまの思った通り、お前たちはやればできる子なのね」

「……アリガトウ先生！！貴方のおかげで俺たちは生まれ変わっ
たよ！」「……」

ノリノリで次の攻撃に取り掛かる神官たちを眺めながら、ティダは小さな声で呟いた。

「やばいつ、こいつら簡単にマインドコントロールに掛かっちゃう。
大神官を追い出した後、代わりに上に立つヤツを仕立てあげたほ
うがいいな」

クエスト12 魔法陣を書こう(前書き)

後方補給部隊のつもりがピクニックに。サボってないよ。

クエスト12 魔法陣を書こう

初心者ハルと、自警団で紺の王子 竜胆、ハルの助手 萌黄の3人は、地下鍾乳洞ダンジョンを目指す。

今回の砂漠歩きは、途中から竜胆が萌黄を背負ってくれたので、予定より早く目的地にたどりついた。

「中はとても涼しいよ、竜胆さまに白いお猿ちゃんを見せてあげる。」

少女は、大柄な半巨人の肩からピヨンと飛び降りると、洞窟の入り口に書かれている魔法陣の前に駆け寄った。

「ココがピカアッと光って、中に入るの。」

あ、あれえ、光らない、中に入れないよ」

萌黄が魔法陣の上で一生懸命ピヨンピヨンと跳ねる姿は、小さい子が自動ドアが開かなくて焦っている姿とよく似ていた。

「萌黄ちゃんは魔力を持ってないから、魔法陣が起動しないんだよ。そうだ竜胆さん、萌黄ちゃんと一緒に上に立ってみて下さい」

竜胆は巨人というより人間に近い引き締まった体格、褐色の肌に赤毛の髪、整った彫の深い勇猛果敢な顔立ちで、王子としての高貴な雰囲気も持ち合わせている。

彼がミニドレス（実はメイド服）を着た美少女を抱き上げると、ファンタジー映画のワンシーンのようだ。

竜胆が魔法陣の上に立つと、陣が薄く光を放ち、一瞬のうちに二

人を洞窟の中に転送した。思った通り、神科学種のハーフである竜胆の魔力に魔方陣が反応したのだ。

ハルも、二人の後を追うように魔法陣に立ち、中へ転送した。

地下鍾乳洞ダンジョンは初心者向けで、簡単な迷路のような作りになっている。

一度来てしまえば迷うことなく、最奥のボス部屋 地底世界樹までたどり着くことができた。

「木の実を多く実らせるには、それなりの肥料が必要だと思っんですよ。」

世界樹さん、これで美味しいおにぎりの実を沢山実らせてください」

ハルはアイテムバックをひっくり返すと、中から大量のカピバラ出汁骨を出した。

地底世界樹の木の根が、まるで大蛇のようにうねると、出汁骨に絡みつき土中に引きずり込む。

カピバラ出汁骨を食事中？の地底世界樹の幹はユサユサと震え、白猿達は振り落とされないように木の枝にしがみ付いている。

揺れる枝からポトポト落ちるおにぎりの実を、ハル達は手分けして拾い、アイテムバッグに収納した。

「ハル、前から気になっていたんだが、その鞆はどんな仕組みになっている？」

竜胆は、五十個ほどの木の実が、小さなウエストポーチに入って

しまう不思議な現象に驚いた。

「バックの中の裏地に魔法陣の様子が描かれてるから、おにぎりの実は魔法陣の力で、別の場所に転送されてると思うんですよ。」

「でも、萌黄が鞆に入れても木の実は消えないよ。」

萌黄が木の実をポーチに押し込んでも、木の実は中から溢れてしまふ。

少女はほっぺを膨らませ、怒ってアイテムバッグの裏表を逆にすると、竜胆がソレを取り上げて中に描かれている魔法陣を凝視する。

「なるほど、この地下鍾乳洞の入り口に描かれた魔力マナで動く魔法陣と同じ模様だ」

「魔力マナの量が多い人は、追加アイテムバックを持ち歩けるみたい。僕はレベルが低くて魔力マナ量が少ないから、バックを一つしか持てないし容量も少ないです」

ハルの答えに竜胆がニヤリと笑うと、自分の腰にウエストポーチを巻いてしまふ。

「それなら水汲みは、お前より魔力マナの多い俺がした方がいいだろ。」

【ハル 神科学種（冒険者） 魔力マナ36】

【竜胆りんどう 半巨人（紺の二十六番 王子） 魔力マナ103】

ハルは右の赤眼で、自分と竜胆のステータスを見比べてみる。

王族で母が神科学種、血筋の良い竜胆は、ハルより魔力が3倍多い。

「うつつ、ちょっと悔しいっ。竜胆さん、そのポーチは僕の大切なモノなので、水を汲んだらちゃんと返してくださいねっ。」

「何情けない声出してるんだ、コレを取ったりしねえよ。」

荷物持ちなんて従者の仕事だからな。萌黄、ちゃんとハルとお手々つない歩くんだぞ」

竜胆は、王子にしては荒っぽい口調でセレブ発言をすると、フフンと僕を鼻で笑った。

戦闘も素材収集もあまり役に立たない、保育士兼従者キャラですか、僕は。

同刻 オアシスの村 女神聖堂

高窓から光の降りそそぐ礼拝室で、大神官は朝の祈禱を執り行っている。

その背後には、青白い肌をした骸骨のように痩せ細った男が、影のように控えていた。

「生贄の娘は、神科学種が手当てを行い、寝たきりではありませんが、辛うじて命は取り留めたそうです」

「それは良かった。」

我々も儀式を楽しめるし、砂漠竜様も出来るだけ新鮮な餌のほづが旨かるっ」

影の男は、さらに大神官の傍まで近寄ると、蚊の鳴くような小さな声で耳打ちする。

「それから、見張りからの報告によりますと、神科学種の連中は村はずれの宿屋に滞在してます。今朝から、自警団と砂漠竜を探しに出かけています。」

「狩りに出かけたとすると、奴らの荷物は宿に置かれたままであるう。」

誰もいない留守中に、ゴブリンが空き巣に入って荷物を盗まれたら大変だな。」

昨日面談した神科学種の服装から見て、他にも金目のモノを色々と持っているはずだ。大神官は、手に持つ淡雪ユニコーンの杖を撫でながら、影の男にいつものように目配せする。

指示を受けた男は小さく頷くと、その場から掻き消えるように姿を消した。

三人は地下鍾乳洞の中を流れる川にたどり着くと、竜胆はさつそくアイテムバッグを川の中に沈める。

僕だと10分間水を汲めたから、魔力が3倍ある竜胆は30分間水を汲むことが出来る。

ゴボゴボと音をたてて、アイテムバッグの中に水が流れ込んでい

る。

キヤキヤと歓声をあげて、萌黄が浅い水の中にとび込み、川エビを追い回す。

川の水でずぶ濡れになっても、砂漠に戻ればすぐに乾いてしまうので、ハルもそのまま川の中に入って、一緒にエビを捕まえる。

「もったいない、川底の砂に水がしみ込んで消えてゆく。

ココの水を、なんとかしてオアシスまで引くことはできないのか？」

竜胆の小さな呟きに、僕は答えることが出来なかった。皆思いは一つなのだ。

川エビ捕りに飽きた萌黄は、川の中から黒い石を拾うとチョークのように白い鍾乳石にお絵かきを始める。

「萌黄ちゃん、何を書いているの？」

「あのねハルお兄ちゃん、魔法を書いているの。ここからピューンとお家まで飛んで帰るんだよ」

萌黄が書いているのは、鍾乳洞入口に描かれている魔法陣だ。

- 魔力で転送する地下鍾乳洞ダンジョン魔法陣 -
- アイテムバックの中の同じ文様の魔法陣 -
- 水もアイテムと同じように転送できる -

カチャリ ピースが全部揃った。

「竜胆さん、ココの水をオアシスまで引く方法があるよ。
おいで萌黄ちゃん、入口まで戻ろう、助手のお仕事してもらえ
る？」

「ハル待て、川の水をどうするんだ。」

ハルは自分の着ていた防砂ロープを水に濡らすと、川の中から黒い石を数個拾い、鍾乳洞の入り口に向かって走り出した。

水を汲み終えた竜胆が、地下鍾乳洞ダンジョンの入口まで戻ってくる。

ハルと萌黄が魔法陣の上でしゃがみ込んで、水にぬれた防砂ロープを魔法陣の上に敷き、透けて浮き出た図形を黒い石でなぞり書いている。

「ハルお兄ちゃん、萌黄もじょうずに魔法をお絵かきできるよ。」

「ほんとだ、萌黄ちゃんは僕より字が綺麗だね。」

はた目からだど、二人はクスクスと笑いあいながら、楽しげに布に落書きをして遊んでいるように見えた。

だが、ハルの意図に気付いた竜胆は、作業の邪魔をしない様に息を殺して見守る。

末席の王子である竜胆は知っていた。

終焉世界は女神の祝福が薄れ、古の業である四十七全域転送魔法陣も、半分は破損しエリア移動ができない。

王都の最上位神官たちは、魔法陣を復活させようと数か月に及ぶ儀式を何度も執り行い、しかしソレを成す事は叶わなかった。

まさかこんな簡単に、神科学種のひ弱そうな少年によって魔法陣の術式が成立しようとしている。

「ちゃんと描けているみたい、これで出来上がりです」

描き残しが無いかチェックして、ハルは立ち上がり、凝った肩を回し大きく背伸びした。

子供の書いた拙い描線に沿って、青い光が這い回り、魔法陣そのものが薄緑に発光している。

ハルは、魔法陣が描かれたロープを丁寧に折りたたむと、竜胆の元へ持ってきた。

「竜胆さん、村の石工に頼んでこの魔法陣を石に刻んでもらいたいです」

「なるほど、村と地下鍾乳洞の間を魔法陣で転送できるようにするのか。」

村人で魔力を持つ者は十人もいないが、その連中に水汲み作業させるのか？」

「魔法陣を使って人を転送するのではなく、この川の水を魔法陣から村に転送させます」

そういうと、ハルは見惚れるような晴れやかな笑みを浮かべてみせた。

クエスト13 蒼珠砂竜討伐作戦2（前書き）

天気雨さんの、感想リク「片鎌槍」使ってみました。

クエスト13 蒼珠砂竜討伐作戦2

オアシスの村はずれにある白い石造りの宿屋は、自警団の宿泊所になっている。

その自警団は、砂漠竜を捕らえるために全員出かけ、宿の留守を守るのは女主人と2匹の番犬だ。

砂漠の果てから現れたモンスターの群れはオアシスを目指していた。

人間の子供サイズで全身黒く短い毛に覆われ、腰布を纏ったゴ布林は、砂漠に足を取られることもなく統制のとれた動きで、静かに音も立てず宿屋の近くまで迫る。

宿の厨房で料理中の黄燐きはだは、大量のカピバラ肉を炙り鍋に水をくべる。

2匹の犬がモンスターの気配にうるさいほど吠えても、全く気にせず動き回っていた。

風に乗って美味しそうな肉の焼ける香ばしい匂いが漂い、ゴクリと喉を鳴らし涎を垂らすゴ布林達。

宿の勝手口の扉は不用心に開け放たれたままだ。

先頭の一匹が奇声をあげて駆け出す、他のゴ布林達も石斧や木の棒を振り回しながら一斉に宿屋へ殺到する。

惨劇の幕開け、のように思われた。

しかし、先頭のゴ布林が、何も無い平坦な砂の上でつまずき派

手に転んだ。

慌てて体を起こそうと地面に手を付くと、その手首に地面から伸びたツルが絡まり、引き抜こうと掴むと更に数本のツルに捕らわれる。

それは、早朝ハル達が宿屋の周りに植えた『地底世界樹の捕食根』

ゴブリンは木の根に捕らわれ、ズブズブとアリジゴクのように砂の中に引きずり込まれた。

最後は腕の太さほどのある根が首に巻きつき、鈍い音をたててへし折ると、砂の中に埋もれて姿が見えなくなる。

他のゴブリン達は、肉の焼ける匂いにつられ、目の前の仲間が消えたコトなど気にもしなかった。

地面から伸びる捕食根に次々と絡め取られ、砂の中に引きずり込まれる。

結局、宿屋までたどり着いたゴブリンは一匹もいなかった。

「魔法陣書くの少し時間が掛かったね、黄檗さん、心配してるかな。」

「クンクン、どこかでお花が咲いているね。甘くいい香りがするよ。」

正午過ぎ、予定より少し遅れて、地下鍾乳洞ダンジョンからオアシスはずれの宿屋に帰ってきた3人が見たものは……

「なんだこりゃ、俺たちが居ない間に何があっただんだー!!」

宿の周囲を取り囲むように、桃色の花が満開に咲き誇っていた。

地底世界樹の苗木が大きく育ち、まるで桜のような花びらが風に舞っている。

その木の根元には、薄汚れた腰布や木の棒、石斧が大量に転がっていた。

「これ、もしかしてゴブリン、血の色が花びらハル、黙ってる」ヒッ。

絵の様に美しい景色の中、舞い散る花びらを追いかけて、萌黄がはしゃいでいる。

「俺はゴミ片づけをするから、ハルお前は黄檗きはだの手伝いをしている。

「そ、そうだね……、ヨロシクお願いします。」

青ざめた顔のハルと苦い顔の竜胆は、押し黙ったまま宿屋のドアを開けた。

砂漠にはSENと数人の精鋭部隊が残り、ティダが残りの自警団

と神官達を引き連れて宿屋に帰ってきた。

「ただいまあ、ハルちゃん。砂漠で花見できるなんてロマンチックね、また何を仕掛けたの？」

桃色の花を咲かせる木の周囲に立ち入らないように、竜胆の手により簡単な杭とロープで囲われていた。

「テイダさん、あの花は僕たちが植えた地底世界樹の苗木が、餌を食べて急成長して花を咲かせてるんです。」

餌って？と訊ねるテイダに、そばにいる萌黄に聞こえないように、ハルは声を潜めて耳打ちする。

さすがのテイダも、思わず唸ると青い顔をして口元を抑え、大慌てで髪に絡まったピンクの花びらを払い落とした。

食堂のテーブルの上には大量の料理が並べられている。

塩とハーブで味付けされた炙り肉に、川エビに川魚のから揚げ、半熟卵のリゾット風。

漂う匂いにつられ食堂に入ってきた神官たちは、驚きの声を上げ、体格のよい自警団達を押しつけて料理にかぶりついた。

「お、美味しいっつ素晴らしい。これは、どんな魔法で取り寄せた料理だ！」

「なに言ってるんだい、ちゃんとあたし達が作った料理だよ。」

「魚料理なんて、水が枯れてから何年も見たことないのに……う、うみゃいいいい。」

「あのね、この魚はね、萌黄とハルお兄ちゃんが水の中に入って捕まえたの。」

感動の半泣き状態で食事をするのは、ティダにしごかれていた神官グループ。

苦労した後のご褒美、料理が一段と美味しく感じられるのだろう。

退紅は、自分の目の前に置かれた、ちゃんと味付けされ具の入っているリゾットの皿を見つめる。

砂漠で育つことのない米によく似た白い実の料理と、コップに注がれた冷たい水。

自警団達の話では、神科学種だけが特別に入れる洞窟から、彼らは運んでくるそうだ。

思いを巡らす退紅の隣の席に来た竜胆は、王族独特の右手をかざす合図をする。

「女神聖堂の警備神官 退紅、あんた、元は高位神官だったよな。」

「紺の竜胆殿下、俺に何の御用でしょう。」

退紅は若くして高位神官の技を習得していたが、大神官に疎まれ警備神官まで地位を落とされていた。

「高位神官なら魔法陣に詳しいだろ、見てもらいたいモノがある。」

竜胆は、無造作に薄汚れたローブをテーブルの上に広げる。

そこには、つたない描線であるが丁寧に描かれた魔法陣がある。高位神官の眼には、魔法陣の描線をなぞるように力強く走る魔力マナが見て取れた。

「竜胆殿下、こ、この魔法陣は生きてますよ！」

まさか、魔法陣を生きたまま書き写せるなんて、誰がそんな神業を行ったのですか。」

「やっぱり、上位神官のお前でもそう思うか。」

コレを俺の目の前で書いたのは、ハルと萌黄だ。

神殿で一番腕の良い石工に、この魔法陣を石板3枚に刻むように手配しろ。」

竜胆の言葉に顔色を変えた退紅は、その場で目礼すると、食事も手を付けずローブを受け取り食堂を出て行った。

夕日が白い砂漠を赤く染め、辺りは薄暗くなり、やがて満月の薄明かりが砂漠を照らす。昼間は太陽の光を嫌い逃げ回っていた夜行性の砂漠竜は、夜になるとその本性を露わにする。

全身の白い鱗が興奮状態で青白く変わり、瞳は憤怒の赤で染まる。砂の中から地表に躍り出ると、獲物を求め、泳ぐように砂の上を這い回る。

「うろたえるな！土地の利を生かし、砂漠竜をさらに追い立てるんだ。」

砂漠の地形が変わり、平坦な砂の平地から、元は岩山があったゴツゴツした巨石の転がる岩陰に身を潜め、奇襲攻撃を砂漠竜に加えながら、オアシスの村を目指す。

岩の上に、黒袴姿の男が長い片鎌槍かたかまやりを手に身構えている。

餌を見つけた砂漠竜は、長い体をバネの様に撓らせ跳ね上がると、岩上の男に襲い掛かった。

SENは、自分の頭を喰いちぎろうと迫る砂漠竜の目前で体を沈めると、顎下目がけ、手にした片鎌槍を突き上げる。

ぎちゅり

全身硬い鱗で覆われる砂漠竜の唯一の弱点が、下顎と鱗の狭い隙間だった。

中の柔らかい肉に食い込む手ごたえを感じ、SENはさらに力を籠め槍を擦じりこみ、鎌の部分で傷口を広げる。

砂漠竜はけたたましい悲鳴を上げ、頭を大きく振り廻し、腹を見せ地面に倒れる。

隙をうかがい、岩陰に潜んでいた自警団が、倒れた砂漠竜の腹部に一斉攻撃を加える。

「切りかかっても鱗に弾かれるぞ、鱗の生え際に剣を突き立てる！」

「傷つけるだけでいい、深追いはするな、素早く隠れるんだ。」

砂漠竜は怒りで体を震わせ身を起こすと、前足の爪で八エでも払

うように、目の前の黒衣の男を追いかけた。

退路を長い体で防ぎ岩場に獲物を追い込むと、一噛みにしようと襲い掛かる。

「全員岩の隙間に隠れる。今だ、花火を着火しろ！」

SENの合図で、昼間仕掛けた倍の量の花火が、砂漠竜の目前で破裂する。

その爆発と熱は、砂漠竜の巨体を痛めつけ、爆音と光が視覚と聴覚を奪う。

SENの着る黒袴は「爆発耐久アイテム」で防護服のようなものだ。

熱と爆風の中、ひるむ砂漠竜の下顎に再び切りかかり、更に肉をえぐり傷口を広げる。

さすがの砂漠竜も、たまらず身をひるがえし、驚くような速さで砂に潜ると逃げ出した。

「すげえ、これなら俺たち、砂漠竜を倒せるかもしれない！」

逃げる砂漠竜を岩陰から見ていた男たちは、歓声をあげる。

「なに悠長なこといつてるんだ、ヤツは確実にオアシスで仕留める。」

いつの間にか、戦闘と不似合の黒いスーツに着替えたSENが、自警団を見まわすと声を掛けた。

「ところで、この自警団の中で一番力のある奴は誰だ？」

そいつに、俺の服と武器をくれてやろう。」

SENの連れてきた自警団メンバーに、竜胆の従者はいない。純粹に砂漠の民だけを連れて来ていた。

彼らの力で砂漠竜を倒せるように、これから狩り方を仕込んでゆくのだ。

「うほほっ、はい、SEN様、俺であります。」

SENより頭一つでかい、気性が荒く欲深そうな顔をした男が、他の仲間を威嚇するように前に出てきた。男の頭から足の先まで見渡すと、SENはニヤリと笑い頷く。

「では勇敢なお前に、この服と武器を与えよう。」

この片鎌槍なら固い竜の顎を貫くことができ、服は花火の爆発に耐える事が出来る。

次のポイントでお前は最前線に立ち、俺が攻撃したように、砂漠竜に直接攻撃するんだ。」

「えっ……俺が……竜に……むりでしゅ。」

SENは笑いを噛み殺し、冷静な口調で服と武器を差し出すが、怖気づいた男はぶるぶると首を振ると後ずさる。

予想通りの展開に他の自警団を見渡すと、一人の小柄なスキンヘッドの青年に視線が集まっていた。

「この中で一番はあんたか、この武器を使いこなせるか？」

「そのようですね、神科学種様の御期待に応えられるよう頑張ります。」

クエスト14 生贄巫女と入れ替わろう

ガリガリに痩せた神官達は、恐ろしいほどの食欲で、砂漠に残る精鋭部隊の食事まで平らげていた。ハルは大慌てで追加料理を作ることになり、調理手伝いに追われ、気が付くと外は真っ暗だ。

生贄の儀式は明日の正午、夜のうちに生贄の少女と入れ替わるため、ハルは闇にまぎれ、人目を避けながら聖堂に向かう。

砂漠の夜、オアシスの村と聖堂は『神の燐火』により光り輝いている。

その神殿の最上部の小さな部屋に、生贄の少女 銀朱ぎんしゅが閉じ込められていた。

部屋の鉄格子を嵌められた唯一の窓からは、砂漠に浮かぶ月と村々の灯りが見える。

捕らわれの身でありながら、彼女の口元には笑みが浮かび、不思議と楽しげだった。

オアシスでの悲惨な日々、神の存在を疑いかけた私に、女神さまは慈悲の御手を差し出してくださいました。

砂漠竜の餌食になる運命の私を救うため、義兄と『アノ方』がココにやってくる。

部屋の外が騒がしくなり、言い争う様な声が聞こえてきた。

鉄の扉が叩かれ、見張りの神官が扉を開けると、義兄 退紅たいこうの姿と、その後ろにはボロボロのシャツを着た少年が大きな鍋を抱えて

立っている。

「ちょっと待て、中に入れるのは家族だけだ、勝手なことするな。」

「頼むよ、妹に最後の食事ぐらい腹いっぱい食わせてやりたいんだ。」

見張りの神官と退紅あいらめの言い合いを黙って見ていた少年は、大きな鍋を抱え直す。

重そうな鍋の蓋がずれて、中身の、油の乗った柔らかそうな肉が覗き、香ばしい匂いが辺りに漂った。

オアシスの村人同様、見張りの神官も食べ物に飢えている。

鍋の中身に目が離せずゴクリと喉を鳴らす、それ見て少年は鍋の中に手を突っ込むと、大きな骨付き肉を選んで差し出す。

神官は黙ってソレを受け取ると、二人に背を向け廊下の端まで離れていった。

退紅あいらめの後からスルリと部屋に入り込んだ少年に、少女は嬉しそうに抱きついてきた。

「お待ちしておりました女神さま。」

ああ、私の身代わりを女神さまにお願いするなんて、とても心苦しいです。」

「えっと銀朱ぎんしゆさん、僕は女神様じゃないからね。

時間が無いから、早く服を交換しよう。」

自分の目の前で、なんの躊躇いもなく、白い小袖（白衣）に緋袴を脱ぎだした少女に、慌てて背を向けた。ハルは変装用の粗末な上

着とズボンを脱ぐと、彼女を見ないように後ろ手で服を手渡す。

「ハアハア 女神さま、私にお召替えの手伝いをさせて下さい。」

なんだ、なんだ！

彼女は出会った時から、やたらと僕にスキニシップを仕掛けるんですけど。

ナマ着替えを見ないように後ろを向いていたのに、彼女は正面に回り込むと体を密着させてくる。

僕は本能的に後ずさって、布面積の少ない下着姿の少女に壁際に追い込まれていた

「この巫女服は形状記憶で、袖を通せば勝手に着れるから大丈夫です！！」

ま、待って、ノーブラ紐パン姿で急接近されると〜〜」

「ハル様、すぐ引き離します。」

妹はミゾノカミ女神の熱狂的信者でして、ハル様の御姿に血迷っているだけです。」

二人の間に分け入り、妹を押し戻す兄に チツ と舌打ちをした。ええっ、妹のために大神官裏切ってゲリラ活動している兄に対してそれってヒドイ。

できるだけ彼女と視線を合わせないように大急ぎで巫女服に着替え、黒髪のストレートロングのウィッグを頭にかぶる。

部屋に置かれた小さな鏡を覗き込むと、女神ミゾノゾミそっくりの僕が映っている。

銀朱は、鼻息荒くウツトリと舐めるような視線でMIKOさまを食い入る様に見つめている。

これは……彼女に一度チユウしちゃったし。
僕が女神さまではないと知ったら、逆に怖いことになりそうだ。

ハルは、なんとか気持ち奮い立たせ、護身用にティダからもらった「毒蛇マウスピース」を口にはめる。

このアイテムはどんな縄でも噛み切ることが出来て、麻痺毒も含んでるそうだ。

顔は、怪我を理由に包帯でぐるぐる巻きにして隠すので、中身が入れ替わってもばれない筈だ。仕上げにおにぎりの実を2個、懐に入れて胸の膨らみを作る。

「私が大神官と会ったのは、あの日一度きりです。」

あの男は、生贄の顔なんて覚えてないと思います。

だから女神さまのお顔を見られても、別人だと気付かれませんよ。

「

「うん、それなら大丈夫かな。」

生贄儀式を行う前に、砂漠竜はSENさん達に退治されるはずだし。」

一緒に部屋の残ると言い出した銀朱を、兄の退紅は無理やり引きずって連れ出した。

彼女と入れ替わり部屋に残ったハルは、ホツと気を抜いたせいか急に眠気が襲ってきた。

そういえば今日はとても早起きして、一日中動き回り、セーブする時間もなかった。

意識が薄れる。

強制セーブ（就寝）モードに切り替わる。

普段は静かな夜の砂漠が、今夜は騒々しい気配で満ち溢れていた。

月明りで照らされた砂漠竜の鱗が、みるみる蒼紫色に変色し、魔力の高まりが感じ取れる。全身から青い炎を立ち上らせた砂漠竜は、首を起こすと一声嘶き、巨大な蒼い炎のブレスを狩人達に吹き付ける。

「一班は防御魔法、二班魔力強化魔法、三班は氷属性加護魔法。恐れるな、魔炎なら弾き返せる。」

「倒れてもお姉さまがキッスで蘇生してアゲル、思いつきり戦ってきなさい。」

自警団と神官の混合隊は、各得意技ごとに班分けされ、SENの指示によるフォーメーションで砂漠竜に挑む。

戦闘を有利に進めるため、聖堂の秘儀と隠されている『治癒魔法』を神官たちに伝授した。また大きな怪我を負っても、天女のように美しい神科学種の接吻で一瞬のうちに完治してしまう。

（ちなみに、ティダの中の人がおツサンという事実は ヒミツ）

そうして、わずか1日で彼らは死も恐れぬ戦闘集団に化けていた。

砂漠竜の炎のブレスは大きな壁に阻まれるように弾き返され、そ

これから黒衣の男が片鎌槍を抱え突進してくる。

竜にとつて、人間は弱い小動物であつたはずが、今やコノ生き物は恐怖の対象でしかなかつた。

「竜の首の下に潜り込め！」

憤怒状態で赤い線の浮き出る場所に、竜血の大動脈が流れている。

「

オアシス自警団 一番手 臙火は、敏捷な動きで砂漠竜の首下に滑り込むと、SENの指示通り赤く浮き出た動脈に槍を突き刺す。神科学種から授かつた武器は信じられないほどの切れ味で、深々と竜の肉を突き破る。

それならと、臙火は柄を捻り、片鎌の刃を血管に押し込み切り口を広げた。

プシュン

竜の血が雨の様に吹き出し、砂漠の砂が一面赤く染まる。

臙火は全身返り血を浴びた姿で、転がりながら砂漠竜の下を這い出てきた。

「一度の指示で、砂漠竜の動脈を傷つける事が出来るとは大した奴だ。」

俺より上手く竜を狩れるかもしれないぞ。」

感心した様にSENが呟くと、隣で腕組みして観戦？している半巨人の竜胆が不平をもらす。

「ああっ畜生、楽しそうに狩っていやがる。なあSEN、俺の出番はまだか？」

「砂漠の民に竜の狩り方を教えているんだから、王子はオアシスに入るまで我慢してくれ。聖堂前広場でたっぷり暴れてもらうよ」

大量の血を失った砂漠竜は動きが鈍くなり、のろのろと移動し始めた。

自警団は竜を追うのを止め、全員の無事を確認するために点呼を取らせる。

「神科学種さま、この調子なら昼前には、砂漠竜をオアシスに追い込むことが出来ますね」

「ああ、さつさと竜を狩り、そのまま大神官も捕らえてしまえばクエスト終了だ」

SENは、整列した自警団達を見まわして、さつきまで目立って動き回っていた一人が居ない事に気付く。

「えんか臙火、おまえの前で偉そうにしていた、デカイ奴の姿が見えないぞ。」

頭と顔についた血を布で拭っているえんか臙火も、そういえばと仲間
の数を確認する。

砂漠竜との激しい戦闘の最中やられたか、置き去りにしてしまっ
たのか。

だが、欲深そうな顔をした男が消えたコトに、SENの中で嫌な
警戒音が鳴った。

全員の点呼を取り終えた神官が、戸惑った口調で返事をしてきた。

「あいつなら、1時間前にSEN様の伝令を村に届けると言っていて行きました。」

「なんだと、俺はヤツにそんな伝令を頼んでない。

まさか大神官のスパイが紛れ込んでいたか。」

顔色を変え、怒声をあげるSENの異様な雰囲気、周囲がざわめき出す。

テイダが、ちよつとタンマ と声を掛けてSENを引きずる様に岩陰に連れてゆく。

「SENの旦那、何そんなに慌てるんだ、仲間の裏切りなんてクエストに付きものだろ。」

あんた自身、下剋上は得意中の得意じゃないか」

「テイダ、この討伐作戦に次はない、やり直しは許されない。

ゲームオーバーもリセットも存在しないんだ」

こんなにテンパったSENを初めて見る。

そうだ、ゲームクエストは決まったプログラムの繰り返しのはず。

これはまるでリアルのような、想定外のバグでは無く、意図的に、しかも悪意を持って変えられたシナリオだ。

「テイダ、計画を変更する。今ここで砂漠竜を俺たちで仕留める。

生贄の儀式も、大神官も、全部俺が片付ける」

「はあ、ここまで来て計画変更なんて、何考えてんだ！

砂漠の民が、自分たちで砂漠竜を倒せないなら、同じことの繰り返しだろ」

テイダは怒鳴り返ししながら、SENの襟首を鷲掴み、その顔を覗き込む。

睨み返された瞳に渦巻く色に見覚えがある。

リアルで、受験や学校や部活動や、たまに恋愛で、切羽詰まり追い込まれている生徒達と同じ眼だ。

「旦那、何か俺たちに隠していることがあるんだろ。

（ここから野郎のダミ声）コレが片付いたら全部ゲロってもらっからな。」

様子を見に来た竜胆に、スパイが紛れ込んでいた話と自警団の指揮を頼む。

作戦は中止できない、SENにも頭を冷やしてもらっ必要がある。

「脚の短い人間や、ノロい半巨人じゃ、村に着く前に生贄の儀式が終わっちゃう。」

これはお姉さまの出番ね、可愛い生贄の姫を助けに行きますか」

クエスト15 蒼珠砂竜討伐作戦3 (前書き)

偽りの工口展開 注意(笑)

クエスト15 蒼珠砂竜討伐作戦3

何だろっ、遠くからカチンカチンと金属同士ぶつかり合う音や、大勢で怒鳴り合う声が聞こえる。

窓を閉め忘れたかな？隙間風が吹いて肌寒い。

毛布、毛布、あれ、無い？

「へーくちゅ。さ、さぶーっ、あれココは何処？」

長い黒髪に顔を包帯で覆い、白い小袖に緋袴姿で生贄の少女に化けたハルは、夜明け前の冷たい風が肌を刺す神殿屋上の祭壇で目覚めた。

強制セーブ（就寝）モードに入り意識の無い間に、部屋から連れ出され供物台に寝かされていたのだ。

体に違和感を感じ腕を見ると、両手は太い縄で幾重にきつく括られていた。腰には太い皮のバンドが巻かれ細い鎖で繋がれている。脚を拘束されてないので、起きて動き回することはできそうだ。

それにしても、生贄儀式は昼に始める予定のはず。こんなに早く部屋から連れ出されたということは、計画がバレタのか？

ハルが体を起こすと、祭壇に繋がれ石床でとぐるを巻いた銀色の細い鎖が、ジャラジャラ金属音を響かせる。

床の所々にこびり付いた赤黒い染みは、この場所で命を散らした少女達のモノだと想像できた。石床の隙間には黒い小さな虫が蠢いている。

供物台の上に立ち、その眼下に広がる景色に目をやると、夜明け

前の暗い砂漠の彼方に、小さな花火と砂埃が見える。

ドン ドーン ドーン

砂漠竜を追い立てる火の花が光り、少し遅れて破裂音が聞こえる。あと1時間もしないうちに、神殿大広場に砂漠竜は誘い込まれるだろう。果して生贄儀式前に、砂漠竜を狩ることができるだろうか？

ハルは供物台から降りて、祭壇前に祭られた黒い漆塗りの長い筒と、並べられた赤い矢を手にとった。

「筒の中に何か入っているみたいだけど調べてる時間は無いな。これは神事の破魔矢みたいだ。」

武器に使えそうな赤い矢を、1本だけ盗って袂に隠す。

とにかく、手首の縄だけでも切って腕の自由を取り戻さなくては。ハルは顔を覆う包帯をほどくと、手首の縄を口元に持ってきてマウスピースで噛みつく。しかし、幾重にも硬く結わえられた縄は、焦ってなかなかうまく切れない。

作業に専念していると、ふと、神殿の下から聞き覚えのある怒鳴り合う声が聞こえてくる。

慌てて鎖を引きずり祭壇端まで身を乗り出して下を覗き込むと、数人の神官相手に囲まれ戦っている人物がいる。

「テ、ティダがどうしてココに居るの？」

その時、祭壇を出入りする唯一の石の扉が開かれ、大神官と骸骨の様に痩せ細った執行神官が姿を見せた。

ティダは、夜の砂漠を駆けオアシスの村に入る。そこにはすでに行く手を阻む神官達が待ち構えていた。

神科学種は信仰する女神の使徒。そんな彼らと戦うことを命じられ戸惑う神官と、高レベルの狂戦士エルフでは、結果は最初から判っていた。

五分も経たずに、足元で呻き声を上げながら倒れる神官をティダが見下ろす。

「ちっ、加減しながら戦うって面倒くさいわあ。

大人しく伸されてくれれば見逃してあげる、あんな大神官に義理立することないでしょ」

村の中で数回の戦闘を繰り返し、聖堂裏口までたどり着くと、見るからに毛色の違う十数人の武装神官が中から現れる。

「これは兄ちゃんか姉ちゃんか判らないが、かなりの上玉だ。

ちいと痛めつけて、可愛く啼かせてやるうぜ。」

長い銀髪に天女のような美しい姿の獲物を見つけると、男たちは下卑た笑いを受けながら取り囲む。

「お前らニセ神官か？随分と俗世にまみれた狂悪顔だな。

お姉さまは今忙しくて、馬鹿を相手してる暇ないのよ。

全員まとめて相手してあげるから、さっさと掛かっておいで！！」

テイダの挑発に、男達はみるみる怒りで顔を赤く染め、悪鬼のように歯をむき出し唸り声をあげる。

普段、無抵抗な村人たちを黽つているせいも、まったく隙だらけの体勢で棍棒を振りかざし殴り掛かってきた。

テイダは両手に黒塗りの木刀を握り、腰をかがめ低く構える。

武装神官達に戦術などない、数で一斉に襲い掛かり相手を殴り殺すだけだ。

「地面に這いつくばって、これまでの悪行を悔いるといいわ。

逝け、如来双腕 風巻突」

獲物のエルフが目の前で掻き消えたように見え、視線を彷徨わせたわずかな隙に、男たちの腹の下に数十打、風の刃を纏った木刀が打ちこまれた。

鉄の防具を突き裂き、肉を碎き腱を絶つ。腰から下を血まみれにして、獣のように悲鳴をあげ倒れる。

運よく攻撃を逃れた武装神官も、次の瞬間、武器を持つ右手の肩を碎かれ、その場で気を失う。

その時、神殿屋上の祭壇から、生贄儀式の開始を伝える五色煙が立ち上るのが見えた。

仲間を見捨て逃げ出す神官たちは放っておき、テイダは神殿裏口から中の狭い階段を、最上階めざし駆け昇る。

ガジガジ ブチッ ガジガジ ケホケホ

この状況では、腕が自由にならないと抵抗することもできない。焚かれた香の煙に咳き込みながらも、僕は必死で縄をかじる。

「神科学種の治癒が効いたのか、顔の傷も治っているな。」

おおつ、お前のその姿は、女神ミゾノゾミそのものではないか。」

顔を覆う包帯は、必死で縄をかじっている間に解けてしまった。しかし、銀朱の顔を覚えてない大神官は、ハルを偽物と気付いていない。

大神官はニヤニヤと薄笑を赤ら顔に浮かべ、ベロリと卑猥に舌舐めずりながら、近寄ってくる。

と、とても嫌な予感がする、もしかして絶体絶命！！

「生贄儀式の前に砂漠竜さまを狩ろうなどと、浅はかな考えをするものだ。」

神の化身に危害を加えるとは、なんという罰当たりな連中だ。その罪はお前の躰で償ってもらうぞ。」

大神官から逃れようと、腰の鎖を引きずりながら供物台の後ろに回り込むが、血の様に赤い服を着た痩せた神官に背後から取り押さえられる。

ガシガシガシ　ガシガシガシ

とにかく、この縄を切ることが先決だ。

骸骨顔の神官に顔を覗き込まれても、縄を噛み続けることはやめない。

「これはこれは、大神官様のおっしゃる通り、ミゾノゾミ女神と瓜

二つですな。

それに、ウヒヒヒヒ、幼い顔のワリに胸は一人前に大きく育っているようです。」

えっと、おっさん、鼻息荒く後から廻した手で、胸に入れた「おにぎりの実」をモミモミしてますが……

ええいっ！ここは時間稼ぎのチャンスだ、覚悟を決めて上手くこまかそう。

「んっんっ、いやあっ、ああ（おにぎりが潰れるから）そんなに強く揉まないでっ。」

裏声を使い舌足らずな感じで、少ない知識を総動員して、感じて喘ぎまくりAV女優になり切って演じますよ！！

うわあゝ、骸骨神官が下半身を密着させてきたり、大神官が目をキラつかせながら近寄ってくるのが、キ、キモイ。

手首を縛る縄は残り二本。ずっと噛み続けているので、顎も疲れて涎が、あっ、汗が目に入った。

「うっうっ（ガジガジ）ふう、やああん（ガジガジ）くっっ」

背後から神官に捕らえられ、痩せた男の掌で胸をまさぐられている少女は、羞恥で顔を赤く染め、薄く開いた口から透明な滴が伝い、うっすら額から汗が浮かぶ（風に見える）。

「ハアハア、おや、もう感じているのかい。見かけより淫乱で、はしない娘だ。」

「もうやめて（ガジガジ）放して（ブチ、ブチンッ）」

「はあはあ、やったあ切れた！！ガブーーーリッ」

その瞬間、ハルの「おにぎりの実」を撫でまわしていた、骸骨のような神官の筋張った腕に思いきり噛みつく。

毒蛇マウスピースの犬歯が、男の腕に深く喰いこみ離れない。

そこから麻痺毒が回って、全身の皮膚がみるみるうちに紫色に変色してゆく。

生贄の少女を齧っていた執行神官は、突然口から泡を吐くと、意味不明な言葉を口走り、手足を痙攣させながらその場に倒れた。

その様子に大神官は慌てた。娘が抵抗して噛みついたように見えしたが、隠し持っていた毒で神官を攻撃したのだろう。

動かせない様に拘束していた手首の縄も引きちぎっている。

自分たちが騙されていたことに気付くと、よろよると重い体を杖で支えながら少女に近づく。

怒りに顔を歪ませながら迫る大神官を、ハルは供物台をヒラリと乗り越えてかわすことが出来た。

マトモに歩くこともできない大神官相手なら、助けが来るまで逃げきれそうだ。そんな淡い期待をってしまった。

大神官は祭壇前にドカリと胡坐をかいて座り込むと、細い鎖を手に取り取る。そして凄まじい力で、ハルの腰に括りつけられた鎖を手繰り寄せる。

「一度躡けてやったのに、まだ私に逆らうとは往生際の悪い娘だ。簡単に殺すのはつまらん、そうだ、砂漠竜様が食事しやすい様に八つ裂きにしよう」

ハルは足を踏ん張って堪えるが、大神官の力には逆らえず、釣り

上げられる魚の様にずるずると体が引き戻される。

それでも、どうにかして相手から逃れようと鎖を引き抵抗すると、大神官の巨体が宙を浮き、まるで蛙が飛びつくようにハルの上に押し掛かってきた。

「ああっ、ーぐっ!!」

ハルは、体の上に降ってきた肉の塊に押しつぶされ、石の床に叩き付けられる。胸を圧迫され悲鳴を上げることすら出来ない。

大神官は細い鎖を生贄の首に巻きつけ、ギリギリと締め付ける。

「ほう、苦痛にゆがむ顔も美しいな。コレは楽しめそうだ。」

首にかかる鎖を緩めようと手を伸ばすが、血の気は失せ、全く力が入らない。

気が遠くなる、今度こそ、本当にヤバいかも……

「どけ、この腐れ神官、汚いブツおっ立てて興奮してんじゃねえよ!!」

聞き慣れたアルトの声がして、体にのしかかる重みが消える。

ハルが顔を上げると、狂戦士のエルフが大神官の薄い髪をわし掴み、片手で巨大な肉の塊を軽々と持ち上げている。そして汚物を捨てるように、大神官を後ろに放り投げた。

「ハルち…生贄のお嬢ちゃん、間に合ってよかった。すぐ逃がして

あげるからね」

なんとかマトモな呼吸を確保したハルを助け、ティダは細い鎖を壊そうと鈍器を叩き付ける。

「スパイを潜り込ませておいて正解だったな。やはり神科学種が一枚噛んでいたか」

大神官はゆっくりり体を起こし、小さく口笛を吹いた。そこら中からカサカサと蠢く音がして、石の隙間から無数の黒い蜘蛛が湧き出してくる。

「ティダさん、大神官が何か術を使っています。気を付けてください！」

呼び寄せられた蜘蛛たちは大神官の体を這い上がり、神職を示す白い衣は、黒蜘蛛の体と吐出す糸で覆われ黒衣に変化した。

蜘蛛を纏い、一回り大きくなった大神官の体から、黒蜘蛛の足が八本生えている。

「魔物を手足の様に使役し、乙女を生贄に差し出すなんて、お前こそ邪教の神官だな。」

「私の信じるモノは、金と色と服従だ。

いくら熱心に女神を信仰したところで、空から金や女が降ってくる訳ないだろ。

ならば女神を利用して、自分の欲しいものを手に入れば良い」

大神官の頭と巨大な黒蜘蛛の体、長い蜘蛛の足で祭壇を這い回る姿は、もはや人間と呼べる代物ではない。ハルを背後にかばいなが

「らも、ティダは楽しそうに呟いた。

「それは好都合だ、人の皮を被った怪物なら、俺も手加減なしで殺ることができる」

砂漠の彼方にオアシスを照らす『神の篝火』が見えてきた。

砂漠竜の次の出現ポイントに先回りするため、自警団の指揮を任された竜胆は、黙りこみ口を開かないSENに問いかける。

「スパイを見抜けなかったのは仕方ないとしても、あんたたち神科学種が揉めていると、他の連中も不安がる。いったい何があったんだ。」

ハルが生贄の身代わりになっている事は、竜胆と自警団には知らせていない。だが、ティダが討伐隊を抜けた理由を説明する必要がある。あった。

「生贄の少女に食事を差し入れようとして、ハルが大神官に捕まっていたらしい。」

それでティダがハルを助けるため、先にオアシスに戻ったんだ。」

「なに、ハルが大神官に捕まっただと！！どうしてそれを俺たちに言わない。」

この討伐作戦に加わらない、部外者のハルの事だ。彼らに話したところで、ティダ頼みで事態はどうすることもできない。

しかしSENの思惑に反して、自警団や神官達から驚きの声がかかる。

「ハルは俺達のために、砂漠の洞窟から重い水を1日かけて運んできてくれるのに。」

「そうだ、俺がスープのおかわりを頼んだとき多めに入れてくれた。」

「俺なんか、ハル様の食べる肉を分けもらったんだぞ。」

「あんな可愛い顔していたら、大神官に ピーピー や ピーピー されちまう!」

ハルの心配と大神官を罵倒する声、皆が口々に騒ぎだし、辺りは騒然とした雰囲気にも包まれる。

その事態を收拾したのは、竜胆の一喝だった。

「いいか、俺たちにできる事は、砂漠竜の尻を叩いて一刻も早くオアシスを目指すことだ!!」

次の出現ポイントで、残りの花火も全部使い切り勝負をかける。」

「美味しい飯を食わせてもらった恩を忘れるなよ。」

自警団は全員攻撃参加、オアシスまで一気に砂漠竜を攻め続けるぞ。」

「神官達も覚悟決めろよ! ついてこれない奴は置いてくからな。」

「「「「「おおおーっ」「」「」

地響きのような討伐隊の掛け声に、SENの方が驚いた。
いつの間に、自警団と神官全員ハルに餌付けされていたのだ。

そうして勢いづく討伐隊に嚇けられ、パニックを起こした砂漠竜
は、夜明け前にはオアシス寸前まで追い込まれていた。

クエスト16 蒼珠砂竜討伐作戦4

ティダは、鎖に繋がれ逃げられないハルを背後にかばいながら、武器を木刀から愛用のメイスに持ち変えた。

2本の銀色のメイスは雷属性の魔法を帯びており、触れれば相手に電気ショックを与えるスタンガンのようなものだ。

聖堂にたどり着くまでの戦闘でボロボロになったローブを脱ぎ捨て、艶のある鮮やかな緑色のアオザイ風衣装になる。

巨大蜘蛛の怪物は、オアシス聖堂の大神官が憑依させた禍々しく蠢く黒蜘蛛の集合体で、体を上下に揺らし相手の出方を待っている。

「ヒイヒヒヒッ、貴様らに、この私が倒せると思っているのか。」

この世のモノとも思えぬ苦しみを与え、生きながら砂漠竜に食わしてやるう」

「化け物は勝手に吠えてる。これから害虫駆除してやるから、覚悟しろよ！」

ティダはハルに何やら耳打ちすると、ステップを踏むように一気に駆け出す。

あつという間に距離を詰め、床を蹴り飛び上がると、大神官の頭部めがけメイスを振り下ろす。

パシン

叩き付けた力が、柔らかいソレに絡め取られる。

「チィ、手ごたえがない！なにか、なにかが邪魔をしている」

邪悪な薄ら笑いを浮かべる大神官の顔面寸前で止められたメイヌ。そこには見えない蜘蛛の巣が幾重に重なり、蜘蛛の体を守る様に縦横無尽に張り巡らされていた。

テイダが大神官の戯言に気を取られている間に、黒蜘蛛は尻から糸を吐いて巣を編んでいたのだ。

透明な蜘蛛の糸は、獲物を捕獲するだけの強度と粘着性があり、巣に触れると絡みつき動きを止め、糸に触れると皮膚を切る。

巣に触れ、糸が絡みついたメイヌは使い物にならない。

さらに、蜘蛛の糸はテイダの全身に纏わりつき、素手で切り傷を増やしながら、逃れようと足掻かなければならなかった。

「お前の細い手足などこの糸で簡単に切断することができるぞ。

まずはその細い首から掻っ切ってやろう」

さすがに、神科学種でも首を落とされれば死んでしまう。

自分だけでなくハルも殺られ、最悪のゲームオーバーになるとテイダは焦る。

しかし、蜘蛛の糸に拘束されたテイダに攻撃から逃れる術はなく、大量の蜘蛛の糸が、首めがけて一斉に放たれた。

テイダは咄嗟の判断で、両手で首をかばい蜘蛛の糸を腕ごと巻きつける。

「ハハハハア、まさに、手も足も出ないとはこの事だな。

先に貴様の腕が干切れて無くなるぞ」

掌に力を籠め、絡まる糸を引き千切ろうと力を入れると、糸の喰いこんだ両手の皮膚が裂け鮮血が吹き出す。

「イツ、痛いなあああ！確かに痛みはホンモンだな。
こんな世界がリアルなんて冗談が過ぎる。
だがな、狂戦士をなめるんじゃねえー！！」

テイダが動くたびに、糸は皮膚を切り、深い切り傷から白い骨が見え、流れ出す血が足元から床に血溜まりを作る。

しかしよく見ると、テイダの切れた皮膚は、次の瞬間ピンクの肉が再生し、エルフの高い魔力マナによる自己治癒術が発動する。

傷を受けるより治癒スピードの方が早い。
纏わりつく蜘蛛の糸が明らかに減ってきて、テイダの体は徐々に自由を取り戻しつつあった。

テイダが大神官の注意を惹きつけてる間に、ハルは巨大蜘蛛の後脚近くの死角になる場所まで移動していた。

大神官の体にびっしりと張り付いて蠢く大量の蜘蛛。

このモンスターは、一匹の親蜘蛛マザーが、数千の子蜘蛛を従えるコロニーを形成する。

テイダから耳打ちで、親蜘蛛を探すように指示されたハルは、目をこらして1センチほどの黒蜘蛛が互いに糸で結び合っている中に、一匹コブシ大の赤黒い親蜘蛛マザーを見つける。

袂に隠し持っていた赤い矢を握りしめると、心臓の様に脈動する親蜘蛛に、狙いを定め突き立てた。

「ぎゃG@kあ、貴様なにをs i *したh k n 2 y 3 % & a m p ;
いー！ー！！」

巨大蜘蛛は人語と獣の声の混じった奇声をあげる。

動きが止まり、ボロボロと蜘蛛の集合体が崩れ始める。

黒蜘蛛の体は、汚物を吐出すように大神官を床にべチャリと叩き付けた。

大神官は、状況が呑み込めず呆けたまま顔を上げると、目の前には、緑の服が赤く染まり血化粧の映える美しいエルフが微笑んでいる。

「よお、ほっぺにおかえりのキッスだよ。喰らえブタ野郎！」

ティダは太った男の頬を、電流を帯びたメイスで渾身の力で殴りつけた。

頬骨が砕け歯が折れる鈍い音が響き、大神官は、祭壇の際まで吹き飛ばされて気を失った。

やっこのことで敵を倒したティダは、全身血まみれのまま、同じくボロボロ状態のハルに駆け寄る。

ハルの右手には赤い矢が握られ、毒々しく赤黒い親蜘蛛を串刺しにしていた。

「さすがのお姉さまも絶体絶命だったよ。ハルちゃんのおかげで助かった。

さあ、早く鎖を切ってここから脱出しよう」

だがティダの声掛けに、顔面蒼白で血の気の失せたハルは弱弱しく首を振る。

「それが……この鎖、全然切れないんだ。ティダだけでも逃げて、もう間に合わない」

その時、神殿全体を震わすほどの地響きと、今まで聞いたことのない獣の怒り狂う吠声が聞こえた。

ハルが指差す方向に目を向ける。

砂煙の中、エリアボスの蒼珠砂竜が聖堂をめざし、一直線に突進してくる。

砂漠竜の姿に怯えていた獲物にんげんが狩人になる。

オアシス自警団は逃げる砂漠竜に花火を打ち込み、白い鱗に銚を突き立て、オアシス女神聖堂前大広場に激しく追いたてる。

竜の巨体が砂を巻き上げ、ひどい砂埃が立ち、視界はゼロで周囲は全く見えない。

だが、砂漠から村の入り口にかけて、誘導灯のようにともる『神の燐火』が、聖堂大広場に続く道を示していた。

「竜胆、聖殿正面が石壁のような造りをしているのは、砂漠竜が突

つ込んできても壊されないためだ。

元々コレは聖堂ではなく、砂漠竜を狩るための見晴台、避難場所だったのだらう」

SENは自警団の前方に指示を出しながら、間近に迫る聖堂の屋上祭壇を見上げる。

俺は間に合ったか？ ティダは大神官からハルを助け出せただろうか。

ドン ドンッ

パニックを起こした砂漠竜は、そのまま頭から聖堂に突っ込んでいった。

聖堂の上部にヒビが入り、小さな石の破片がパラパラと落ちてくる。

激しい頭突きに脳震盪を起こした砂漠竜は、一瞬動きを止めた。

オアシスの村人たちは、家々から松明を抱え、武器を手に怒声を上げながら砂漠竜に群がる。

「みんな恐れるな！

この砂漠竜は神でも悪魔でもない、砂漠に住む、ただの獰猛なモンスターだ。

我々人間の方が強いということを、この怪物に教えてやろう！！」

村人を先導しているのは、銀朱の兄、反大神官派の神官 退紅だった。

建物の上から、女子供が焼けた石や高温の油を竜に投げつける。クワやシャベルの様な農具を武器にしたオアシスの男たちが、自

警団に交じって砂漠竜を攻撃していた。

砂漠竜は潜って逃げようと地面に爪を立てるが、硬い石畳の大広間では、砂の中に逃げ込むことが出来ない。

「この大広場は、砂漠竜を三枚に下ろす、まな板なんだよ。」

広い砂漠の中で砂漠竜を封じ込めることが出来るのは、オアシス聖堂前の大広場しかなかった。

「えんか 臙火、竜の額にある珠を槍で突いてえぐりとれ。竜胆は首を狙え。」

SENの鋭い指示が飛ぶ。

小柄なえんか臙火は、竜の頭部に駆け上がり、渾身の力を籠め半鎌槍を竜の額に突き立てる。

やっと出番の来た半巨人の竜胆は、嬉々として大剣を振るい、その剛力で硬い竜の鱗を砕いて傷を付け、村人に混り、神官の退紅が馬鹿でかい粗末な槍を砂漠竜に突き立てている姿が、SENの目に留まった。

「退紅、神官にしては力があるようだ。こいつを使いこなせるか？」

退紅の前で、神科学種は小さなカバンから巨大な武器を引きずり出した。

それはSENすら持ち上げるのがやっとの、竜狩りに特化して作られた武器（ハルの地下鍾乳洞ダンジョン報酬、激レア品）。

2メートル超える刃先を持つ『ドラゴンスレイヤーアックス（龍殺しの斧）』だった。

「SEN様、こ、これは竜と対抗することのできる最強の武器、ドラゴンスレイヤー!!」

確かに、コレなら砂漠竜にトドメをさすこともできます」

背丈のある退紅は、その優男風な顔立ちから想像できない腕力で、巨大斧を軽々と持ち上げた。

そして、竜の首めがけ振り下ろされた一撃は、堅い鱗ごと肉を絶ち、砂漠竜に最大のダメージを与える。

砂漠竜は神殿に這い登ろうと壁に縋り付くが、壁画の色タイルはツルツルと滑り爪を立てることが出来ない。

ドンツ　ドンツ

人間からの攻撃を受け、逃げることもできず、苛立ちまぎれに何度も白い建物に体当たりする。

その衝撃で、ハル達がいる神殿屋上の、碁盤の目の様に並べられた石床が端から崩れ始める。

ハルの体が、フワリと浮くと足元の床が消えた。

ガラガラと轟音をたて崩れる石に足を取られないように、腰に巻に巻きつけられた細い鎖を命綱にして必死にしがみつく。

なんか、こんなパズルあったよね、夢の中で羊男が、階段から落ちて潰れるゲーム。

アレ、4面までしかたどり着けなくて、全クリできなかつたな。

アハハッ

「ハルちゃんしっかりしろ！！手を伸ばして俺に掴まれ。」

間一髪で供物台に飛び移ったティダは、細い鎖を掴み、意識を飛ばしかけたハルの体を台の上に引き上げる。

その時、ハルの視界の隅に、祭壇端まで吹き飛ばされた大神官が

……

「ティダ、あれは「見るな、もう間に合わない。」つつ！！」

ティダはハルの頭を抱え込み、眼を塞いだ。

祭壇は前半分が崩れ落ちた。

暴れる砂漠竜の鼻先に、いつものように神殿の上から餌が投げ込まれる。

「人が落ちて来たぞ、まさか生贄を捧げたのか！」

「まて……ありや大神官じゃないか。」

「顔が潰れてるけど、あの服は見覚えがある、確かに大神官だ。」

丸二日間、休む間もなく追い立てられ腹を空かせた砂漠竜は、落ちてきた丸々と太った男を頭から噛み砕いた。

「え、まさか、砂漠竜のヤツ、アアアアアア？」

「うわああ、大神官が喰われちゃった！！」

オアシスの人々を苦しめた諸悪の元凶は、あっけなく最期を迎えた。

辺りは一瞬にして静まり返り、砂漠竜の咀嚼する生々しい音だけが響いた。

クエスト16 蒼珠砂竜討伐作戦4（後書き）

やっとここまでたどり着きました。討伐作戦残りわずか、頑張ります。

クエスト17 蒼珠砂竜討伐作戦5

シン と静まり返ったオアシス女神聖堂大広場。

砂漠竜を取り囲む村人達は、固唾を飲んでその様子を見つめていた。

祭壇から落ちて来た贄を竜が咀嚼する。

骨が砕け、肉を噛みちぎる音だけが辺りに響く。

贄に異物が混じっていたのか、砂漠竜が酷く咳き込むと骨のようなモノを吐きだした。

竜に噛まれても傷一つ付かないソレは、SENが大神官に贈った淡雪ユニコーンの杖だった。

祭壇は後半分を残し崩落が止んだ。

大神官の死によって戒めが解かれ、ハルの腰を締め付けていた皮ベルトが緩んで、細い鎖がバラバラと千切れる。

最後の最後に、生贄を捕らえて離さない縛めの鎖は、屋上から転落を防ぐ命綱になった。

まさかこれも偶然？

ティダは、隣に立つ少年（MIKOコスプレ中だけど）に対する見方を変える必要があると認識した。

もはやハルの持つ「ラッキーボーイ」称号だけでは済まされない、

不可侵な大きな力が働いている。

「ティダさん、はやくここから逃げ、あ〜っ転っ」

供物台から慌てて降りたハルは、床に落ちた長い筒に足を引っかけ、派手に顔面からすっころんだ。

鼻をしたたか打ち付け涙目で体を起こすと、床に転がる黒い漆塗りの長筒が指先に触れた。転んだ時に踏みつけた衝撃で、筒は縦に裂け、その中に収められていた神具が見える。

それは、赤い地にびっしりと金色の呪文の様な文字書かれている、長さ2メートル余りの和弓だった。

ティダが弓を拾い上げるが、竹製に見える弓はまるで鉄の塊の様にずっしりと重い。

「な、なんて重さだ、こんな弓使えないぞ」

大神官の巨体を片手で放り投げるほどの怪力を見せたティダが、弓の重さで体がふらつくほどだ。

長い間『神科学の終焉』をゲームしているが、こんな弓は初めて見る。

周りに落ちている赤い矢を拾い上げると、それも重くて射って飛ばせそうにない。

ハルは、その赤い弓を受け取ると、片手でひょいと持ち上げた。軽々と慣れた仕草で弓の弦を引き、矢を添える。

「そんなことはありませんよ、普通の重さです。手に馴染んでとても持ちやすいな」

ティダは右の赤眼で、その不思議な弓の性能を確認すると【女神属性】の文字が浮かび上がる。

ハルが持てるということは『幸運度』の高いキャラが扱える武器なのだろう。

その時、ハル達の居る真下、神殿大広場では再び砂漠竜が暴れ始めた。

とっさに弓を番え、砂漠竜への遠距離攻撃を試そうと弦を絞り標的を定める。

祭壇から砂漠竜までの距離、そして自警団や村人が入り乱れる中に矢を射るのは不可能。しかし赤い弓を引き絞り狙いを定めると、標的は手を伸ばせば届きそうな、ハルの50センチ先にあるように見える。

祭壇に祭られて激レアアイテムだろうと予想していたが、こいつはとんでもないチート武器だ。

「えっ、嘘、的がこんな近くに見える！！」

驚きのあまり手が震え、いったん矢から手を放した。

ハルが弓を番い構える様子を見たティダは、感心したように声を掛けた。

「ハルちゃん、構えがすごく綺麗だ。」

弓の扱いに慣れた様子だけどゲームスキル取っていたの？」

「僕は、去年まで弓道部でしごかれてました。ゲームスキルじゃないんです」

- - - - -

それは、気の弱そうな担任に「部員不足だから名前だけ」と誘われた弓道部。

実は担任の彼女は、全国大会、高校総体の為に派遣された、選手育成のスペシャリストだった。

マイナー競技と甘く見た僕は、彼女に鬼のしごきにあい、弓道浸けの高校生活。

まあ、経験者がレギュラーを固めて、僕は万年補欠だったけど、それなりに矢を射ることはできるようになった。

- - - - -

弓を引く、ティダが重くて構えることのできなかった弓が撓り、弦はピンと張る。

「凄い、これが神器の威力なのか。」

どんな下手な補欠部員でも、50センチ先の的を外したりしない。僕は矢を二本手に取ると、砂漠竜の血走る右目を狙い弦を引き絞る。

そしてイメージ、鬼のように厳しかった彼女の優美な引き成りを思い描く。

竜胆、^{りんどう} 臙火、^{えんか} 退紅の^{あらしめ} 攻撃を受けながらも、砂漠竜は底なしのスタミナで暴れ続ける。

頭部に立っていた臙火は、竜が頭を振りするとふるい落され、竜胆の大剣も狙いが外れ弾き返された。

竜の最期のがきだろつ、額に埋め込まれている蒼珠が魔力を集め輝きだす。

「全員退避、砂漠竜のプレスが来るぞ！！」

しかし、その場には、戦闘していた自警団や神官だけではなく、村人や女子供に、やじ馬まで混じり、砂漠竜への恐怖心が呼び戻されパニックが起こり、人の波に飲まれた少年が転び、数人が定規倒しになる。

砂漠竜の裂けた口から青白い炎の舌がチラチラ覗き、口が大きく開かれる。

倒れた村人は足がすくみ動けない。

逃げ切られない！！

誰もが次に起こる惨劇を予想した。

プシユン プシユン

その時、聖堂屋上の祭壇から放たれた赤い矢が、狙い通り砂漠竜の右目に刺さった。

再び放たれた二本の矢は、今度は左目に刺さる。

両目から黒い血を流して、大広場をのた打ち回る砂漠竜を、頭上の祭壇から弓を番えた黒髪の巫女が見つめている。

まるで、ミヅノゾミ女神の化身のように。

祭壇から次々放たれる赤い矢は、砂漠竜の頭部を針山状態にした。その際にSENが竜の背に駆け上がる。

背びれの生え際、砂漠竜の心臓真上に、雷属性を帯びた太刀、タケミカツチを、深々と突き立てた。

「神官全員、俺に続いて呪文詠唱！！雷よ集え鳴り響け」
いかすち

その場にいる神官達が、一斉に呪杖を天高く掲げる。

「いかすち雷よ集え鳴り響け 稲妻鷹落」
「いかすち」

朝日が顔を覗かせる、雲一つない砂漠の空を、無数の小さな稲妻が走る。

それが一点目指し幾重にも重なり合い、巨大なエネルギーとなつて、龍の背中に突き刺さる太刀、タケミカツチに雷が落とされる。

バチツ バーバーバーバーアアツ

轟音とスパーク。膨大な量の落雷を、直接心臓に受けた砂漠竜は、ショックで気を失い動きを止める。

フラッシュバックで、その場にいるほぼ全員、視界を失い立ちつくしていた。

ただ一人、退紅だけは、巨大な龍殺しの斧を手に砂漠竜に向かって駆け出す。

「これで終りだ、ウアアアアアー!!!」

渾身の力を籠め、砂漠竜の首に、斧を振り下ろす。

ドラゴンスレイヤーの銘を持つその斧は、吸い込まれるように砂漠竜の首に喰いこみ、骨も肉も一刀両断にした。

ごとんっ

巨大な砂漠竜の首が、長い胴体と別れを告げ、聖堂大広場に転がった。

「砂漠竜に大ダメージ与えたぞ、ハルちゃん、その弓凄いな」

ティダは戦闘の様子を眺めながら声を掛けると、ハルは最後の矢を放つと同時に、その場に崩れ落ちる。

弓を引き絞り矢を放つたび、加護の代償に、ハルは自分の生命力が奪われていくのが判った。だか、何かに憑かれたように、無意識のうちに矢を手に取り弓を番え射る。

手元の矢が尽く頃には、すでにハルの意識すら弓に奪われていた。

デンドロ〜 デンドロ デデ〜〜ン

ウルサイなあ、なんだか不安を誘う音楽が脳裏に流れている。

ふと目を開くと、何故か嬉しそうなティダに膝枕され、寝転がっている自分がいた。

「ハルちゃんたら、デットリー状態になるまで戦うなんて無茶するわ。

ちゃんとお姉さまが完全蘇生魔法で、カイクク　してあげたから、ごちそうさま」

え、え、僕また死に掛けたの？ティダ、ごちそうさまって何！！

デンドロ〜　デンドロ　デデ〜〜ン

そんな僕に追い打ちをかけるように、脳裏に響く音楽と、右の赤眼にペナルティ文字が浮かび上がった。

【ペナルティ発生】

ゲーム100時間内にトリプルデットリー

- 1、半巨人からのPKによりデットリー
- 2、キアラ蘇生のため完全治癒魔法行使により生命力および体力ゼロ
- 3、特殊武器使用により生命力ゼロ

従って3ランクダウンのペナルティが実行されました。

【神科学種（冒険者）ハル　レベル35　レベル32】

うわああああ〜〜〜何やってんだ、僕は！！

脱初心者、レベル上げ目指してゲームにINしたのに、レベル下げてるよ。

僕は、あまりのショックに再び失神しかけた。

オアシス神殿の大広場では、砂漠竜の周りに村人が集まり、喜びを爆発させていた。

自警団も神官も肩を組み雄叫びを上げ、村人は男も女も抱き合っ
て喜んでいる。

子供が、倒れた砂漠竜の体に、恐る恐る触れていた。

「おい、腹いせに砂漠竜を傷つけるな。

これは邪神への復讐なんかじゃない。ただのボスモンスター狩り
だ」

SENは、砂漠竜の軀を傷つけようとした神官を厳しくとがめる。
半年もすれば、別の縄張りから似たような砂漠竜が現れるだろう。
それは自然発生的な事であって、神の意志という屁理屈を付けて
はいけない。

「さすが神科学種だ、俺に大口叩いたダケのことはあるな。

自警団が1年かけて仕留める事ができなかった砂漠竜を、たった
一昼夜で倒したんだ。

紺の王子として、SENあんに礼を言うよ、ありがとう。」

「ああ、自分で殺った方が楽だったが、後々を考えるとオアシスの

村人が自力で倒さないと意味ないからな。

それに砂漠竜は、部位から色々なアイテムが採取できる。狩ることが村の資源になるんだ」

ゲーム内では数枚しか採取できない貴重部位『蒼珠砂竜の鱗』が、今SENの目の前に数百枚も並べられている。

さらにゲーム内では入手不可能アイテム、砂漠竜の額に埋め込まれた『蒼珠』を臙火が抉り出している。

人々の中から歓声上がる。

龍殺しの斧を肩に担いだ神官 退紅が、彼の妹で生贄の巫女 銀朱を連れて現れた。

オアシスの村人たちは二人の元に駆け寄り、感謝の言葉を口にする。

「あの兄妹はカリスマ性があるから、大神官の替えに適任だな」

SENはそう呟くと、彼らから離れた神殿入口で疲れたように座り込んでいる仲間の元へ向かう。

「1・生贄の少女を救う 2・砂漠竜を倒す 3・悪大神官をボコる クエスト完了」

終焉世界を支配する巨人族 暴力王 鉄紺^{てっこん}

そして、黄金の都と人々が憧れと称賛で語る、ハクロ王都。

巨人族の王宮は細かな装飾を排した、宮殿を形取るために積み上げられた石の一つ一つが巨大な宝石だった。

王の宮殿そのものが巨大な宝物、他種族をしのぐ圧倒的な力は、五十棟に及ぶ華やかな後宮御殿にも表れている。

そんな豪華絢爛な後宮の中に、くすんだ赤レンガ造りの小さな古代図書館が紛れこんでいた。

神科学の時代から終焉世界まで、すべての書物がココに保管されている。

その図書館の最奥、幾重にも扉で閉ざされた古代禁書本棚の前で、小さなランプを手に本を読みふけていた少女が立ち上がる。

細かな銀刺繍の施されたヴェールで顔半分をかくし、大きめのガウンで足先まで体を覆っている。

少女に声を掛けたのは、最近將軍との逢瀬を楽しんでいると噂される、豊満な肉体に美しく波打つ水色の髪を持つ第十八位側室だった。

少女の正面でひざを折り優雅に挨拶すると、顔を寄せそつと耳打ちする。

しかし、その仕草は隙がなく、鍛え抜かれた兵士を思わせた。

「報告ご苦労 水浅葱みずあさぎ。あの堅物で有名な將軍を落とすのは大変だったでしょう。」

だが、これだけの情報が得られるとは、苦労した甲斐がありました。

二年ぶり、しかも三人同時に現れた神科学種が、末席の王子の元へ飛んでいたとは。」

「ありがとうございます！！」

YUYU様に喜んでいただけるのでしたら、水浅葱みずあさぎはどんなご命令にも従います。

そ、そのうつ、YUYU様の顔をかんばせ拝ませて下さいませ。」

輝くような美しさの水浅葱は頬を赤く染め、そつとYUYUのヴェールに手を伸ばす。

取り払われたヴェールの下には、柔らかいふわふわなブラウンの髪が肩先で跳ねる。

透き通るような白い肌に小さな顔、好奇心旺盛な輝きを放つ大きな青い左瞳。

見た目12歳くらいの幼さの残る天使の様な雰囲気、先端のどがつた長い耳と、服の下に隠された背中の小さな白い翼、赤い右目の【神科学種 ハイエルフ】だった。

「ああつYUYU様、そんなお顔で睨んでも、愛らしさが増すばかりですね。」

感極まった彼女が、涙目になりながらYUYUを抱きしめる。

小柄なハイエルフは、豊満な胸に力いっぱい押しつぶされ、軽く窒息しかけた。

「ぶはっ！？こほっこほっ……はあはあぜいぜい

私はしばらくココを空けることになりそうです。7番目の馬鹿王子が何やら企んでいるらしいので、ちょっと様子を見に行かなくてはなりません」

YUYUは水浅葱にそう告げると、手にした古代禁書を柵に仕舞いヴェールをかぶり直す。

「そういえば、神科学種の一人はミゾノゾミ女神神にそっくりだそうですね。」

他にも、色々と、面白い噂がありますのよ」

その場を離れようとするYUYUに対して、彼女は絶妙のタイミングでネタを振ってくる。

まったく、この住人は儚い乙女の様なふりをした肉食系猛女ばかりだ。

「……ふふっ、では、もう少しおしゃべりするとしましょうか。」

水浅葱、私の部屋でお茶などがですか」

クエスト17 蒼珠砂竜討伐作戦5 (後書き)

砂漠竜討伐作戦 完了!!

クエスト18 砂漠竜を食べよう

ハルとティダは、聖堂屋上から疲労した体を引きずるように、狭く長い階段を下りて外に出た。

大神官とのバトルで大量に血を失ったティダは、その場でずるずると座り込んでしまう。血塗れの服は着替えたが、銀色の美しい髪に、まだ血がこびりついている。

乾いた血液は拭っても落ちず、ゴワゴワした感触に嫌気して疲れたように呟いた。

「あゝゝっ風呂に入って、全身体を洗いたい！！」

そんな贅沢、砂漠^ゴじゃ無理だと判っているんだけどね。

大神官が襦に使っていた湯殿があっただけど、あんな所、絶対使いたくないし」

「ティダさん、宿に汲み置きの水が残っていたから、帰ったら髪を洗いましょう。」

もう少し我慢してください」

そんな会話をしていると、二人の姿に気付いたSENがゆっくりと近づいてきた。

「女神から与えられた様々な試練をくぐり抜け、ついに俺は未知の領域へ一歩近づくことができた」

いきなりSENが酔ったように意味不明な言葉を呟き、ハルはおびえた表情を見せる。

「えーっと、SENの旦那の電波語を解説すると レベルが上がっ

た っ て「トね」

「そんな、SENさんズルい!!
僕なんか三回デッドリーのペナルティで、レベルが3つも下がったのに」

今回ハルは結構頑張ったが、それはバトルとは関係のない料理や治癒魔法ばかりだった。レベル上げに加算されたのは、唯一トドメを刺した親蜘蛛一匹。

ちよつとウルウルしているハルに睨まれ、さすがのSENも困ったようにティダに助けを求める。

「ハルちゃんの愛情こもった料理を食べていながら、自分だけレベルアップするなんて酷い男。お姉さまも、人間相手に殺れないから、レベルが全然上がらなかったよ」

そう言いながらも、ティダは立ち上がるとSENにハイタッチで祝福をした。

「旦那は、明日からハルちゃんのレベル上げを手伝いな。
ちよつと肩を貸して、ハルちゃんが致命傷を負わせた獲物を検分しよう」

聖堂大広場の中央に横たわる砂漠竜は、頭と胴体が綺麗に真っ二つに分かれ、胴の部分はまだビクビクと動いている。

砂漠竜に近寄ったハルは、興味深々で見事な切り口をジッと見つ

めていたが、何を思ってたのか素手でペタペタと触り始める。

「この赤身具合は牛肉？」

いや、もっと柔らかくて脂の乗り具合からしたら魚……マグロの赤身！！」

「ええっ、砂漠竜の身がマグロ？っつかハルちゃん、これ食べるつもりなの。」

ティダの叫びに振り返ったハルは、瞳をキラキラと輝かせ、口元は締まりなくうっすら涎が光り……本気^{マツ}だった。

「熟れたリンゴの様な色といい、艶と透明感のある肉質といい、まるで海の黒いダイヤ 本マグロのようだ。」

殺したてで鮮度も最高、身もキュウっと締まって、まさに今が食べ頃の状態！！

ああ我慢できない、SENさん、試しに一切れ切ってください。」

ハルは食材が係ると、普段の遠慮がちな彼とは異なる料理オタクな性格が出てくる。

SENは言われるがままに 名刀 タケミカヅチ を包丁扱いにして砂漠竜の肉を切り取る。

それをクリスタルシールド（水晶の盾）をまな板にして分厚い短冊切りにした。

「う、う、う美味い！！これはホンモノのマグロと変わらない。ワサビ醤油欲しいっ」

「もぐもぐ、この油の乗り具合だと中トロだな」

「僕の見立てた通りでしょ。」

砂漠竜の心臓近くは、電撃であぶり状態になっていそうですね。」

人を食う砂漠竜の生肉を、旨そうに食べる神科学種。

まるで食物連鎖の頂点を見せつけるような恐ろしい姿に、村人はドン引きしていた。

「あれ、もしかしてココの人たちは生を^{ナマ}食べる習慣が無いのかな？」

村人の怯えた様子にハルは箸を止める。

その横から竜胆が現れ、ハルから切り身を一枚奪うと口に放り込んだ。

「ほう、これが「刺身」っていうモノか。」

親父の飼っている神科学種が、生の魚を乗せた「スシ」が御馳走だっけ教えてくれた事があったな。魚がぐるぐる回る台に乗って回っているんだっけ？」

「ちょっと待て竜胆。なんで、巨人族の王子が「回転寿司」を知っているんだ」

この終焉世界は科学の代わりに魔法が、その魔法も衰退しつつある世界だ。

「神科学種の世界『リアル』に『回転寿司』はあるんだろ？」

ソイツも、SENと同じ『リアル』から『バーチャル』に来たって言ってたよ」

この世界がゲームの中なら、ゲーム世界の住人相手に『バーチャル』発言はしない。

『バーチャル』『回転寿司』を竜胆に教えた神科学種は、自分たちと同じように、コノ世界に迷い込んだゲームプレイヤー。

三人は竜胆の何気ない一言に、ココは仮想現実空間ではなく、終焉世界という名の『リアル』だと確信した。

オアシスの村は、大神官を倒した解放感に包まれ、祝宴ムードで村人の隠し持っていた酒が振る舞われている。

砂漠竜の肉はハルの指導の下、魚天ぷらとガーリックステーキとクリーム煮 マグロ（砂漠竜）丼に調理され、大広場には骨のみとなった砂漠竜が残された。

マグロ丼の味を堪能したティダとSENは、場所を礼拝堂に移動して、竜胆から聞いた他の神科学種の話をする筈だった。

しかし、砂漠竜討伐の立役者の二人を皆が放っておくはずがない。

「お姉さま！！俺たちと乾杯しましょう〜」

「SENさま、砂漠竜討伐の指揮お見事でした。

こいつらにも、詳しく話を聞かせてやって下さい」

自警団&神官達&村人が酒とツマミを持って押しかけて、神聖な礼拝堂は大衆居酒屋状態になる。

皆は互いに武勇伝を称賛し合い、そのうち歌が始まりオヤジの裸踊りが飛び出して、最後は隠し芸大会で締めくくられた。

ちなみに、酔ったSENの歌った「ミクミク」が子供たちに大

受けで、そのままオアシスの童謡として未永く歌い継がれる事となった。

おはようサギ、ではなく、こんにちワニ

明るすぎる日差しとサウナのような熱さ、そして近くで人の話し声が聞こえ、ハルは意識を浮上させる。

気が付くと、礼拝堂の長椅子の上で、数枚のローブに包まれて汗だくになりながらミノムシ状態で寝ていた。

昨日ハルは、礼拝堂に料理を運んできたところを酔っ払いと化したティダに捕まり、勧められるまま酒を飲んだ。

たいした酒量ではないのに酔いつぶれ、意識が途切れたまま寝てしまい、ハルを起こさないように、皆が親切心で毛布代わりに被せたローブが暑くて起きてしまった。

僕は、リアルでは眠りが浅いタイプなのに、セーブ（就寝）状態の意識は完全に無くなってしまう。冒険者がこんな無防備な眠り方をしているのは、野宿なんか出来そうにも無いです、はい。

礼拝堂の大テーブルには、半巨人の竜胆と神官の退紅、その後ろに白い作務衣を着た年配の男と弟子の少年が控えていた。

彼らを相手に、SENとティダは広げられた図面を見ながら話し合っている。

「あつ、ハルちゃん起きたんだ。ちょうどいい、コレが出来上がってるよ」

テイダに指差す先を見ると、床に2メートルほどの白い石板が三枚重ねられ、一番上の面に魔法陣が刻まれていた。

それはハルと萌黄が地下鍾乳洞ダンジョンで写し取った魔法陣で、石板自体が微かに発光して、刻まれた文様を魔力が流れ、すぐにも起動できる状態だと判る。

「まだ一枚しか完成してないが、ちゃんと魔法陣としての機能を果たしている。

残りの二枚も腕のいい石工五人で取り掛かっているから、明後日には仕上がるだろう。

さて、お前の指示通りに魔法陣を作ったが、コイツをどう使うんだ？」

「竜胆さん、石板の手配をしてくれてありがとうございます。

まず、一枚目の石板は神殿の横にある、水の枯れた噴水の底に設置してください。

二枚目は、村はずれの宿の水槽に沈めます。

そして三枚目は……ここまで種明かしすれば判りますよね」

ニヤツと悪戯っぽく笑うハルに、竜胆は目を輝かせ、SENはああっ とタメ息をついた。

「さすがハルちゃん。

そうだね、魔法陣ならどんな遠くにあるモノでも一瞬で転送できる」

ハルの説明に納得した仲間たちと、神官の退紅は話の見当がつかない顔をしている。

そこへ年配の石工が、感嘆したように話し出した。

「それにしても、この魔法陣は凄いですなあ。」

霊峰女神神殿の法王さまでも、起動できる魔法陣を描くことはできませんでした。

さすが神科学種さま、子供でも魔法陣を描く技を習得してるとは素晴らしいですなあ。」

あれ、なんだか可笑しな話だ？

ゲームの中で魔法陣を描くスキルなんて存在しないし、単純になぞり書きしただけで、魔法陣の半分は萌黄が描いている。

「そもそも、今までどんな魔法陣が描かれていたか、俺たちもよく判らない。」

「それでしたら、こちらは霊峰女神神殿より送られた一級品です。破壊されたタイシヨ砂漠の全域転送魔法陣を、正確に描いたものです。」

そう言って、退紅が女神像の足元に置かれた宝物入れの中から、ピロードの様な薄紫の布に包まれた紙を取り出す。

全域転送魔法陣は、魔力の代わりに硬貨マナを捧げ、目的地まで移動するエリア転送ゲート。

タイシヨ砂漠のエリア転送ゲートは、魔法陣が破壊され、現在はゴブリンのテリトリーになっている。

うやうやしく退紅が布を広げると、そこには金の糸で複雑な図形

が細かく刺繍され、呪文が色とりどりの飾り文字で描きこまれていた。

鮮やかな布の豪華さに、見た瞬間は感嘆の声を上げた。

しかしそれをじっくり眺めていると、だんだん眉に皺が寄ってくる。

「只の派手なタペストリーだろ？この魔法陣じゃ起動しないぞ」

「そうね、見かけは派手だけど、形がいびつで描線は途切れまくっている。」

呪文のスペルも間違いだらけだし。」

魔法陣は、魔力を陣の描線に走らせることで、様々な魔法を生み出す。

それを例えるなら、デジタル回路を正しく配線しないと起動しないようなものだ。

二人の指摘通り、全域転送魔法陣は見栄え良く描かれているが、図形としては穴だらけだ。

中央の星形ペンタグラムの各辺角度がバラバラ、重なる縁取り線も並行に描かれていない。星形の先端五個の円は、正円ではなく楕円形に崩れ、6本の放物線アスタリクスは描線自体が歪んでいた。

「そ、そうなのですか？」

我々には、大変立派に描かれた魔法陣のように見えますが」

「ハルちゃんが写し取った魔法陣は、左右対称、すべての線が途切れることなく描かれている。」

それに比べ、この全域転送魔法陣の描線は切れたり飛び出したり、

外枠の正方形も角が直角90度じゃない」

「あおう、正方形ってなんでしょうか？」

是非、ハル様や神科学種さまで、正しい魔法陣を描いていただきたいのです。」

ん、またもや『神科学者さま頼み』他力本願が出てきました。

退紅と会話していたティダの目が座ってます。

「この魔法陣がオカシイ事も見抜けないのに、神官が務まるのか？」

退紅、あんた達は今までどうやって陣を描いていたんだ」

「それはもちろん、霊峰女神神殿の法王様にお伺いを立て、ありがたい口伝を頂き」

ガシャアアアン

退紅の答えを聞いたティダは、怒りにまかせて礼拝堂の大テーブルを『ちやぶ台返し』する。

「待て、そんな馬鹿な事ありえない。」

魔法陣という複雑な図形を描くのに、上の連中は口伝えでしか教ええないの！？」

それとも、わざと知恵を付けさせないように仕組んでるのかもしれない」

声を荒げるティダに、ナニ当たり前のことを聞くんだ と不思議そうにしている退紅。

「で、では正しい円の書き方を、口伝で言ってみなさい」

「はい、円は天から落ちる雨の滴が、池の波紋をイメージし、滑らかな曲線で描きます」

ダメだこりゃ、基礎の基礎から教えてやらなくてはならない。

そしてティダは、リアルの本職『学習塾経営』『教育者』の誇りがうずいた。

「知識が乏しいのは判った、正しい魔法陣の書き方を伝授してあげる。」

神官を10人集めなさい。お姉さまが調…神科学種の知識を皆に授けよう」

それから神官達に小テストを行った結果、女神聖書500ページを丸暗記し、星座と月の満ち欠けから気候を読み取る知識は豊富だが、算数は三桁の足し算を間違っお粗末さ。

「計算が出来ない……大神官に騙されて、オアシスの住人が財産をまきあげられた理由が判った。とりあえず、小学校低学年の算数から教えますか」

礼拝堂が寺小屋に替わり、何故かゼーマス眼鏡に黒のタイトスカート風の衣装に変身したティダが、鞭をピシピシ叩きながら神官の回答を見まわっている。

「ティダ、ちょっと待て。小学校一年の算数から始めるつもりか。」

魔法陣を描きあげるまでに、何年かかるんだ!!」

「100時間集中して算数の基礎を叩き込んであげる。

五日あれば大丈夫でしょ、図形も並行しながら教えるからね」

「えっと、五日で100時間って……もしかして神官を一日20時間勉強させるの?」

ハルの愚問に、テイダは妖艶な笑みを返した。
スパルタですね、スパルタ。

クエスト18 砂漠竜を食べよう(後書き)

美食冒険バトル作品ではありません。危ない危ない

クエスト19 女神聖書を読もう

【女神ミゾノゾミ逸話】

神科学人の時代

闇から生まれた「黒い蝶」は、人々の体に卵を産み付け蝕み喰らった。

神科学人は急激に数を減らし、神科学世界は終焉を迎えようとしていた。

・私の体は花の様に香り、血は蜜のように甘い・

予言を携え現れた聖女ミゾノゾミは、「黒い蝶」に自らの体を差し出す。

聖女の甘い血に、全ての「黒い蝶」は引き寄せられた。

そして全ての「黒い蝶」を引き連れ、全ての「黒い蝶の卵」を抱え、聖女は消えた。

.....

SENが礼拝堂の本棚に手を伸ばしたのは、全く無意識の行動だった。

本棚に飾られた、丁寧に磨かれた蝋燭台も、小さな女神像も花柄の宝石箱も、ゲーム内では背景グラフィックなので決して触れることはできない。

しかし今は、その本棚の中に収められた文庫サイズの古びた女神聖書を手に取ることが出来た。

SENが本を開くと、最初のページには女神逸話が書かれていた。

それは『End of god science - 神科学の終焉 -』ゲームのオープニングムービーで語られる始祖の物語。

消えた聖女は、神格化され『女神ミゾノゾミ』として終焉世界の信仰の象徴となる。

改めて女神の話を読み返すと、今リアルで起こりつつある出来事と符合する箇所が多くあった。

SENは考え込んだまま本を閉じ、裏表紙の文様に目が留まると、思わず声を上げる。

「なんだこりゃ！おいテイダ、ハルも、この本を見てくれ。」

裏表紙のモノグラム模様が『QRコード』になっている

女神聖書の裏表紙の文様を赤い右目で凝視すると、バーコードリーダーが起動する。

目の前の景色と二重になって浮かび上がるスクリーンに、読み込んだURLが表示された。

神官達に手作りコンパスで円の書き方を教えるテイダと、手伝いをしていたハルが近寄ってきて、一緒に本を覗き込む。

「終焉世界の本にQRコードが組み込まれてるなんて、これもクエストの一部なのか？」

とにかく、アドレス先に飛んでみよう。

……ゲゲツ、なんだこれは!!」

そこに映し出されたのは、8ケタの英数半角文字を入力するパスワード画面だった。

啞然とするハルとティダに、SENは不敵な笑みを浮かべる。

「クククツ、たかが英数字8桁の組み合わせなど、鉄壁の工@動画サイトパスワードを楽々解読する俺が簡単に解いてやる。

さあ、ミゾノゾミ女神の籠る天の岩戸を、こじ開けてやるっ」

そういうとSENの両目が赤く染まり、バーチャルブレインワールドVBWシステム5機を同時起動させる。

通常VBWシステムは、使用者の脳疲労を考慮して10時間制限が掛けられている。

しかしSENのプレイヤーは、違法改造したVBW5台を9時間30分ごとに切り替え、24時間フル稼働するシステムを構築していた。

ただ、それは脳にかなりの負荷を強いる行為でもある。

SENの赤い両眼は、瞬きすることなくカツと見開られ、額からダラダラと滝の様な汗を流す。

「あのう、SENさん、お取込み中悪いのですが、ちょっといいですか?」

女神聖書を手にしたハルが声を掛けた。

「ハル、ちょっと黙ってくれ、集中できない」

「いえ、あのう、パスワード解けちゃいました」

「なにに」

ハルが、手にした女神聖書の背表紙を指差すと、そこには本の持ち主の名前なのか、カタカナ3文字が小さく記されている。

「えっ、このパスワードって半角英数8桁じゃなくて、全角カタカナ3文字だと!!」

つまり、パスワード入力画面すら騙しが入っていたのだ。がつくりと肩を落とすSENを、慰めるようにティダが肩をたたく。

「全角漢字8文字じゃないだけ良かっただろ、さっさとパスワード入力しよう」

「僕もパスワード入力してみたら、データ量が大きくてずっと読み込み中なんです。

SENさんなら容量が大きいから、すぐアクセスできますよ。」

「判ったよ、パスワード入力『ハ ヌ ケ』何の意味だ？

認証確認 OKサインが出たぞ。

かなり重いデータだが、ちゃんと読み込めそうだ」

25%

:

40%

:

75%

：
100% インストール完了

データを読み終わると同時に、別スクリーンが立ち上がる。

目の前に映し出された、浮かびあがるソレをみてSENは絶句する。

その見覚えのある蒼い球体、中央に現在の時間が記されている。

DC・2828/09/05

15:24:34

「西暦2828年9月5日だと……そんなバカな」

それは、ニュースの天気予報で映し出される人工衛星からの地上写真、またはグーグルアースそのものだった。

画面を操作すると、現在位置がどんどんアップで映し出され、大きな大陸の右端に見覚えのある細長く小さな島々を示した。

少し地形は変わっているが、見間違うはずもない……日の出する国。

「SEN、急に黙りこんでどうしたんだ、何が出た？」

この礼拝堂では、神官たちに聞かれて、込み入った話が出来ない。SENは礼拝堂から二人を連れだし、埃まみれの道具部屋に場所

を移した。

しかし、部屋に入ってもなかなか話を切れ出さないSENは、テイダに急き立てられてやっと口を開く。

「今日で、ゲームにログインして6日目に入った。」

ハル、リアルの日付は何月何日だ？」

突然話を振られたハルは、戸惑いながら答える。

「えつと今日は12月7日、僕は風邪気味で学校休んで寝てます」

「ハルちゃん、なに言ってるの？」

先週まで正月休みで、今日は1月8日。

俺は、生徒からインフルうつされたみたいで本日休業なんだ」

「「えつ！」」

ハルとテイダは、相手の言葉に、お互い不思議そうに顔を見合わす。

そしてSENは、無表情のまま堅い声色で会話を続ける。

「俺がログインしたのは2月14日。」

ハルとは去年12月、テイダは1月から連絡が取れなくなっていた。

それが、二人が同時にログインしている事に気が付いて、俺は後を追ってきた。

俺たちは全く違う日にゲームにログインして、何故か聖都カミノレンジャクで合流してるんだ」

それってどういう事、ココはゲームの中じゃないの？

「SENの旦那、ちょっと一言イイか？」

「なんだ、テイダ」

「バレンタインに、彼女と会う約束は無くてゲームしてたなんてカワイソウ」

おどけた口調で、ニヤニヤと笑いながらテイダはSENをからかうと、ハルの肩を組み引き寄せた。

「ココに来てから、ハルちゃんはず回死に掛けたし、お姉さまは全身ズタボロの血まみれになってるんだ。」

今更、何を驚くことがある。さつさと、旦那が知ってること全部ゲロツちまえ」

ログインしてからの六日間、戦闘以外も様々な生理現象が起きてそれはリアルそのもので、皆、薄々感じていたのだ。ココはバーチャル空間では無いという事を。

そうしてSENに告げられた真実に、二人とも表面上は落ち着いて受け入れた。

「タイムマシンに乗った記憶無いんだが……ド@えもんもビックリだな。」

「ココは異世界ファンタジーもどきの、約800年以上未来の世界ってことか」

「そうだ、正確には『プレイヤーの意識』が時空を超えて、この世界の神科学種の肉体に宿った」

二人の会話をハルは黙って聞いていた。

異世界、未来？

僕だけだろうか、この世界に迷い込んだというのに、まるで違和感がない。

ココでやり遂げなければならない、何かが存在するような気がする。

「V B Wシステムが、未来から過去にもたらされた技術なら、未来ココから過去の世界に帰る方法もあるよね」

「そうさ、終焉世界の24日はリアルココの24時間。

ここに240日居たって、リアルではたったの10日だ。

時間はたっぷりある、焦らずのんびり帰り道を探せばいい」

ハルの問いにティダは力強く答える。

だがSENは、壁に背を預け、黙って目を閉じたままだった。

クエスト19 女神聖書を読もう(後書き)

独り言 ネタにしました〜

クエスト20 耳長砂漠ウサギを狩ろう

見渡す限り白い視界、そんな砂漠の上を、何かがピョンピョン跳ねている。

体のサイズは普通の兎と同じ、耳の長さが50センチある『耳長砂漠ウサギ』

長い耳は、片方が某キャラクターの様に折れて愛らしく、白い毛色が保護色となり敵から身を守っていた。

そんなウサギが十数羽、砂漠の真ん中で倒れたカピバラの周りに群がっていた。

よく見ると、砂漠ウサギの口の周りは赤く染まり、草を食む前歯は犬歯のように尖っている。

ウサギはカピバラに歯を立てて噛みつく、その血を啜りはじめた。

植物の生えない砂漠で、耳長砂漠ウサギの食料は、動物の血だった。

夢中でカピバラの血を啜っていたウサギが、小さな音に聞き耳を立てる。

その瞬間、二本の矢が同時に飛んできて、砂漠ウサギの頭と腹を縫い止めた。

砂の中に潜み獲物を待ち構えていた少年は、素早く弓を番え続けざまに二本の矢を同時に射る。

さらに二羽の砂漠ウサギが仕留められ、他のウサギは、正に脱兎のごとく間近の巣穴に逃げ込もうとするが、そこには両手に短剣を握る少女が待ち構えていた。

金色の長い髪をなびかせながら、小さな少女が砂の上を滑るようにステップを踏み、まるでダンスを踊るかのよう様に二本の剣を振るう。

一瞬のうちにウサギ三匹を切りつけ、更に逃げる二匹のウサギに追いつくと、電光石火の早業で仕留めた。

「やったあ勝った、萌黄の捕まえたウサギが五匹だよ。

ハルお兄ちゃんはウサギ三匹で、萌黄に負けたでーす!!」

「す、凄いよ萌黄ちゃん、もう戦闘力で僕を上回っている……ガクッ」

ハルはペナルティで落ちたレベルを取り返すため、食糧確保を兼ねて砂漠でモンスターを狩っている。

一緒に付いてきた萌黄に狩りを教えたところ、抜群のバトルセンスでどんどんレベルを上げてきた。わずか2日で、戦闘レベル40という凄まじい才能を見せつける。

「萌黄の両親は、王都で近衛隊団長と副団長を務めたほどの戦士。それに、萌黄の双剣を用いた剣舞が得意で、王の前で披露できるほどの舞い手だ」

「持って生まれた才能と、剣舞による無駄のない洗練された身のこなし。

これは、萌黄の将来が楽しみだな」

ハルの付き添い役のSENと、ティダの勉強会から逃げてきた竜胆が、二人のバトルを見学している。

「あのう、SENさん、僕へのアドバイスはありますか？」

「ああ、ハルは萌黄のサポートに徹してくれ」

ウウツ僕のレベル上げのはずが、いつの間にか萌黄ちゃんのレベル上げになっている。

「ハル、お前は非力だしテクニックも大して無いんだから、サポートが向いてるんだよ。」

矢もチマチマ射るヤツじゃなくて、連射のできるクロスボウにした方がいいな。

的を外さないだけの、取り柄はあるんだから」

竜胆のアドバイスは全くおっしゃる通りで、トホホ、手加減ないが、最後の一言は褒められてると受け止めていいかな。

「大丈夫、萌黄はもっと強くなって、ハルお兄ちゃんを守ってあげる」

「ハハツ、ありがとう萌黄ちゃん。頼りにしているよ」

萌黄はキラキラと輝く瞳で力強く答える。ハルは苦笑いしながら頷くしかなかった。

次の狩場に移動しながら、竜胆はSENに話しかける。

「ティダが全域転送魔法陣を修復すれば、俺たちもやっと王都に戻

ることができる。

昨日、オヤジの飼っている神科学種から連絡が入った。どうやら、SENあんなたちの事を知っているらしい」

「オヤジって、巨人族 乱暴王の鉄紺の事か」

「今は誰も『乱暴王』なんて呼ばない。影では『ロリコン王』と噂されている」

「ほう、それはステキな趣味だ、俺は高く評価してやる。是非一度、王とそっち方面で話がしたいな」

怪しげな単語が聞こえたハルは、ギョツとした顔で立ち止まり二人の顔を眺めている。

竜胆は慌てて、危なげな眼の色になったSENを軽く度突く。

「ソレは噂だと言っただろう!!」

ロリコン王と呼ばれる原因は、アノ神科学種に有るんだ。

王の後宮に居座って十年、見た目は童女のまま年を取らず、天使のような愛らしい姿形で人を惑わす『王の影』と呼ばれる化物だ」

「竜胆、なんで俺たちに、そんな王の裏事情まで話すんだ？」

「SEN、察しがよくて助かるよ。」

乱暴王 鉄紺 第四位側室『王の影 YUYU』が、あんな達に会いたがっている」

後宮に住まう側室が、同じ神科学種だからといって簡単に外部の者と接触できるのか？

その事を竜胆に問うと、とんでもない答えが返ってきた。

「全然大丈夫だ、アレは後宮の名を借りた女戦士育成所だ。
YUYUは、側室の中から使える連中を鍛えて「女忍者」にするらしい。」

神科学の世界では、普段は平民に交じって暮らす、忍者と呼ばれる暗殺集団が、主の危機には大活躍するんだろ」

なんだか間違った知識を植え付けられて、弾んだ声で楽しそうに忍者の話をする竜胆に「リアルに忍者は居ない」と言えなくなる。
『王の影』とまで呼ばれる神科学種は、一筋縄ではいかない相手のようだ。

これは、楽しくなりそうだ。

皆の後を歩くSENが、今まで見せたことのない狂暴な微笑を浮かべたのに、気が付く者はいなかった。

「くしゅん、くしゅん……これは、誰かが私の噂をしているのでしょうか？」

「まあ、YUYU様がお風邪をひかれては大変です！！

さあこちらにいらして下さい、水浅葱の懷で温めて差し上げます」

北のトウジ高原エリアは、短い夏を終え、夕方の風は肌を刺す冷たさだった。

小柄なYUYUは、水浅葱の膝上で上質な毛皮のマントに包まれながら、鳳凰小都へと続く街道を馬車の窓から眺める。

身分を隠しての旅なので、馬車は目立たない下級貴族が使うモノを用意した。

その横を、豪華絢爛な装飾が施された、いかにも成金趣味の馬車が先を競うように追い抜いてゆく。

「なんだありゃ、まるでデコトラ……デコトラですか」

「YUYU様、デコトラとは何ですか？」

「ふふつ、神科学の世界では『トラック』と呼ばれる召喚獣を手なずけるため、獣の体に金銀財宝で装飾して飼いならすのです」

そうですか。と、水浅葱は生返事をしながら、YUYUのフワフワの髪を撫でて堪能していた。

道の両脇はバラック建てのスラムが広がり、道の先には過度な装飾が施された建物が立ち並んでいる。

花街からは、活気あふれる呼び込みの声と喧騒と音楽が聞こえ、汚臭を誤魔化すように造られた花の香りが漂う。

全身を着飾った商人が目付きの悪い用心棒を従え、僅かな布を纏った娼婦たちが品しなをつくり客を捕まえようと躍起になっている。

暮れゆく空に、闇を纏った漆黒の烏が、群れをなして花街の上空を旋回する。

「栄華を誇っていた『鳳凰の住まう高貴な都』が、わずか二年でここまで墮ちるとは」

窓から身を乗り出して、変わり果てた都を眺めるYUYUの傍で、水浅葱は楽しそうに呟く。

「YUYU様のお力で、墮ちる処まで落としてあげてはいかがです」
窓から離れると、再び水浅葱の膝の上に抱き上げられ、柔らかな彼女の腕にぬくぬくと包まれた。

これは、楽しくなりそうだ。

YUYUはマントの中に顔をうずめながら、こっそりと狂暴な微笑を浮かべた。

「この穴の中にモンスターが住んでるの？」

たどりついた先は山の様な巨大な黒い岩で、岩の裂け目は、半巨人の竜胆がぎりぎり中に入れるほどの横穴になっていた。

「ココは、中級モンスター『砂漠大イノシシ』の住処なんだ。いつまでもウサギをチマチマ倒すより、強い大イノシシ相手にした方が一気にレベルが上がる」

どうやら竜胆も、ハルの弱さを不憫に思ったていたようで、自警団お勧めの狩場を紹介してくれた。

この狩りに加わるSENが大イノシシを追いたてて、ハルが矢を射って動きを止め、萌黄がトドメを刺す事になっていた。

SENが一人穴の中に入り、外におびき出す手筈だが……かなり時間が経過していた。

「SENさん遅いなあ、中にイノシシいるのかな？」

ハルは穴の正面から距離のある一直線上に、萌黄は穴にすぐ横で待機していた。

「ホント、SENのオジちゃん、まだ出てこないよ。

どうしたんだろう？ちよっと萌黄が中に入って見てくるねえ」

そわそわと穴の中を覗き込んでいた萌黄は、ついに痺れを切らして中に入ってゆく。

「えっ、待ってよ萌黄ちゃん、勝手に「来るなあー」にげるおーー！！」えええっ」

穴の中から血相を変えて飛び出してきたのは、萌黄を抱きかかえたSENだった。

突如、穴の中から壮絶な腐臭が漂い、グチャリグチャリと、湿った巨大な物体が這い出てくる。

穴から大イノシシを啜えて這い出てきたのは、汚れた不死の『オーガゾンビ』だった。

体の一部が穴に悶えたらしく、上半身が外に出たところで動きを止めた。

しかし、長い腕が伸びてきて、萌黄を抱えて走るSENを捕らえようとする。

生きながら人を腐らす呪いを撒き散らす、特殊モンスター『オーガゾンビ』に、通常武器は使えない。

ハルはとつさの判断で、クロスボウを投げ捨てると赤い和弓に持ち替える。

彼以外、番える事の出来ない弓を引き、赤い矢の先に狙いを定める。

女神の弓に、自分の力が流れ込んでゆくを感じる。

射れる矢は2本が限界、弓に魅入られないように意識を保ちながら、矢を放つ。

肉を絶つ鋭い音が響き、異様な長さに伸ばされたオーガゾンビの腕を、赤い矢は射落とす。さらに、頭を上げてぎよるぎよると周囲を見回したところを狙い、首を射る。

グチャリッ　ゴロ　ゴロ　ゴロ

矢に断ち切られた頭と胴体、そしてオークゾンビの頭部が砂漠の緩い傾斜を転がった。

その先には……

「うぎゃああーひいひいーうわうわうわっ」

女神の弓に生命力を吸い取られ「ライフはゼロよ」状態のハルの目の前で、オークゾンビの頭は勢いよく転がってきた。

巨大な生首の、血走った目とお見合い状態になり、ハルは腰を抜かして座り込んだまま動けなくなる。

あれは誰だ？

場の空気が変わる。

優美な構えから、赤い弓の弦を引き絞り、不死のオークゾンビを狙い矢を射る。

その顔は見慣れた少年の筈なのに、王子の自分が膝をつきたくなるほどの神々しいモノだった。

なるほど、神降ろしの巫女か。

だが、どうしてそんなモノが、よりによって末席の俺の前に現れるのだ。

「ちよつとー竜胆さん！！オーガゾンビが出てくるなんて、話が違いますよ」

神の業を見せ付けた巫女は、砂まみれで泣き言を言う、弱そうながキに戻っていた。

「イノシシだろうがオーガだろうが、レベルが上がったからいいだろ。」

文句あるならシバくぞ」

そんなハルを怒鳴り返しながらも、竜胆は古の予感に縛り付けら

れる。

この神科学種は、
俺を豊穰へ導くのか、
破滅へ導くのか。

クエスト21 オアシスに水を引こう

砂漠竜討伐から数日が過ぎ、オアシスの村は変わりつつあった。

村人には、少ないながらも水が平等に与えられ、聖堂への奉仕という名の強制労働から解放された。

オアシス自警団に加わり、狩りの腕を磨こうとする者も現れる。

ハルの思いつきで、地底世界樹の苗木がオアシス聖堂の周囲に植えられた。

大広場に残されたままだった砂漠竜の骨を、砕いて地底世界樹に与えたところ、樹はみるみる大きく育ち薄桃色の花を咲かせる。

その日、勉強会という名のスパルタ地獄から五日ぶりに解放された神官たちは、礼拝堂から外に出た途端、花吹雪の歓迎を受けた。

「砂漠に桜など、ありえない、これはなんとという神業だ……」

草一本生えない枯れた砂漠の聖堂に、突如深い緑の大樹の森が現れ、薄桃色の花を満開に咲かせている。

その美しい光景に、言葉もなく立ち尽くし、感極まって泣き出す者もいる。

「さすがに五日間の集中勉強会に、最後まで付いて来れた奴は十人中四人。」

これからは、暗記と練習問題を繰り返せばいいでしょう」

すっかり燃え尽きたティダは、ぐったりとイスに腰掛け、机に脚を投げ出している。

ふと気が付くと、まだ一人、机に向かって問題に取り組んでいる者がいた。

背の高い退紅あいらづめには低すぎる机で、背を丸めて掛け算九九を必死に解いている姿は微笑ましくあった。

ティダは立ち上がると、退紅の傍に近寄り、忙しくペンを走らせる手元を覗き込む。

「退紅あいらづめ、これで調：勉強会は終わりです。

やはりお前が一番優秀だね。

これからはオアシス大神官として、この村を豊穡へと導きなさい」

気配に気付き、退紅が顔を上げると、そこには慈悲深く見惚れるような微笑みを浮かべたティダがいた。

「ティダさま、貴方のおかげで自分がどれほど無知だったか思い知らされました。

神の言葉を伝えることはできても、この世界の仕組みは何も知らなかった。

俺は、神科学の知識と……

そして、貴方の事が知りたい!!」

はあ？もしかして、こいつM属性だったのか!!ちっと調教しすぎた。

五日間ほとんど完徹状態で眼の周りに黒々とクマを浮かべながら

も、退紅は瞳をギラギラと輝かせティダの腕を掴み引きよせた。

「ティダさ〜くん、お疲れ様です。」

「晩御飯持つてき……お、お邪魔しました／＼」

「ハ、ハルちゃん！？コレは違う（ここからオッサンのダミ声）ウラアツ手え放しやがれ」

バキンッ

寝不足の退紅は、久々の深い眠りを脳天直撃の刺激によって強制的に与えられた。

「調教というか洗脳というか、まあ退紅には刺激が強すぎたんだろ
う。」

「村の連中も、俺たちに依存しそうな雰囲気があるし、計画を早めた方がいい。」

「ティダは、ほんのりと頬を赤く染めながら　ウサギ肉の照り焼き
丼を食べる。」

「貴方の事が知りたいって、中のオッサンだし。美しい思い出の
ままが、ブファツ」

SENは思いだし笑いをこらえきれず、お茶を吹いてしまう。

「計画を早めるということは『エリア転送ゲート』の全域転送魔法陣、修復作業が終わったんですね」

テイダが神官達に教えていたのは、小学校低学年の算数の基礎、掛け算引き算と平面図形など。初日のうちに、テイダは自分で全域転送魔法陣を書き起こし、石工に修復を手配していたのだ。

そこに、勉強会を逃げまくっていた竜胆が話に加わる。

「俺の部下が全域転送魔法陣の修復に立ち会って、王都まで無事転送できた。」

前の魔法陣より早い移動で、座標も狂いなく正確に動いたそうだが、俺たちは、明日このオアシスを出る。

行く先は『鳳凰小都』、あんなたち神科学種も一緒に来てもらいたい」

二日前、ウサギ狩りの最中話していた『王の影』との会談が準備されているそうだ。

「あんなイカガワシイ所を会談場所に指定するなんて、ヤツが何考えているのか俺にもよく判らないんだ。」

だが、王より正式に書状も届けられているから無視はできない。

『王の影 YUYU』と一度だけ会ってもらえないか？」

あまりに話が早く進みすぎる、嫌な予感がする。

腕組みをして考え込むSENに、オアシスから早く逃げ出したいテイダは不満そうだ。

「SENの旦那は、何深刻に考え込んでいるの。」

新しいクエストと思えばいいじゃない」

ふと、何かを思い出したのか竜胆が呟く。

「そういえばYUYUが神科学種に『中の人ナース』って伝えてくれた」

「……なに、中の人ナース!?」

僕ら三人、見事にハモりました。

「それから『ミニとピンクで検温』と言ってたが、何の呪文だ?」

竜胆のトドメの一言で、神科学種と『王の影 YUYU』会談が了承された。

翌日、地下鍾乳洞ダンジョンの入り口には、ハルと萌黄もえぎと竜胆りんとう、そして生贄まじしゆの少女 銀朱ぎんしゆが立っていた。

「このダンジョンは神科学種の為に作られ、魔力マナを持つ人が居ると中に入れます。

銀朱さんは魔力マナがあるから入ることが出来ますよ。この魔法陣の上立って下さい」

わずかに神科学種の血が流れる銀朱は、ティダから教わった治癒魔法で、人々の体と心の傷を癒していた。

ハルはこれから村を導いてゆく彼女に、もしもの時の避難場所と

して、地下鍾乳洞ダンジョンを教えることにしたのだ。

銀朱は、足元の魔法陣に恐々足を乗せる。

すると、体が浮いたように感じ、突然視界が変わる。

転送された暗闇の中に、白い鍾乳洞が浮かび上がり、初めて見る神秘的な風景に溜息をもらす。

「銀朱さん、びっくりした？」

中は簡単な迷路になっているから、僕にぴったり付いてきて」

「ああっ、仰せのとうりにいたします女神さま！！！」

そう叫ぶと、銀朱はハルの右腕に両手を廻し、離れないようにぴったりくっ付いてきた。

「何度も言うけど、僕は女神さまじゃないからね。

ち、ちよっと歩きにくいよ。そんなに張り付かなくても迷わないからっ」

「ハアハア、銀朱は女神さまにどこまでも付いてゆきます。

私は永遠に、ミゾノゾミ女神の下僕です」

うわっ、銀朱さんは相変わらず僕を女神さまと信じてる。

竜胆はまだ来ないし、魔法陣まで戻る時間もない、早く仕事を終わらせてしまおう。

ハルは右腕にしがみつく銀朱を半分引きずりながら、地下鍾乳洞の泉までたどりつく。

地下鍾乳洞の中を流れる川の水は泉に溜まり、底の砂に吸い込ま

れてゆく。

泉の深さは、子供の萌黄は遊べるほどの、ハルの腰下の程度。

ハルは泉の中央まで進み、小さなアイテムバツクから1メートル四方の石板を取り出す。水の中でふらつきながらも足を踏ん張り、石板を割らないように注意して沈める。

再びバツクから石板を取り出し、同じ作業を繰り返す。

石板の四等分されたピースを合わせて、ひとつの魔法陣を完成させた。

「あれ、起動しない、右上と下が逆になっているのかな？」

泉のそばで、ハルの様子を食い入る様に見つめる銀朱には、それは神聖な水行儀式に見えた。

「ああ、女神さまの服が水に濡れて、背中のラインや細い腰がステキ、もう、もう、」

「女神さまーも、もう、わたしがまんでもきませんー！」

銀朱は泉の飛び込むと、半分水に潜った状態で作業しているハルに飛びかかる。

「ふうっ、これでやっと魔法陣が起動でき……って、ええっ!?!
銀朱さん、こっち来ちゃダメッ!！」

銀朱はサブサブと水の中を突き進む、が、巫女服は動きづらく、袴に足を取られる。

「きゃっ、転ぶ、魔法陣が光って……」

泉の底に沈められた魔法陣の石板が、その上で転んだ銀朱の魔力に反応して起動する。

オアシス聖堂広場中央の『奇跡の池』と呼ばれていた枯れ池に、ハルが写しとつた魔法陣の石板が設置された。

SENはその魔法陣の上に、砂漠竜の額から抉り出した魔力の源『蒼珠』を置いた。

「仕組みはアイテムバッグと同じで、魔力の容量で転送できる量が決まる。この砂漠竜の『蒼珠』なら、どんな遠い場所のモノでも、一瞬に大量に転送できるはず」

ティダに殴られた頭のコブを、帽子で隠している退紅と、小柄でスキンヘッドの臙火という凸凹コンビは、真剣にSENの説明を聞いている。

「えっと、この魔法陣に砂漠竜の『蒼珠』を捧げると、何が起こるんですか？」

「それは見てのお楽しみだ。もう、始まっているぞ」

捧げられた『蒼珠』から魔法陣へと勢いよく魔力が流れ込み、陣全体が蒼い光を放ち『蒼珠』が徐々に転送されてゆく。

乾いた石板が湿り気を帯び、ポツポツと表面に水滴が浮かぶ。

魔法陣の重い石板が、カタカタと小刻みに振動すると……

ドドドドドッ パシャ バシャ ざああああーざああああ
ー

突如、魔法陣から大きな水柱が吹き出す。

まるで池の底から湧き出てくるような勢いで、清く透き通った水は池を満たし、水路に音を立てて流れ込む。

「おおおい、皆たいへんだあ、『奇跡の池』に水が湧き出した!!」
「池から、誰か、女神さまが………降臨されたぞお!!」

神秘の水で満たされた『奇跡の池』の魔法陣から現れたのは、長い黒髪に神世界の巫女衣装を着た少女。

「誰かと思ったら、銀朱じゃねえか。あんた、どうして池の中にいるんだ?」

池の周りに集まり出した村人の前に、水の中から突如現れた銀朱も、自分がどうして村に戻っているのか判らなかった。

「えっ、私は今まで女神さまにお会いしてました。

神科学の泉の中で、女神さまが不思議な儀式を行い、私をこの池に戻したのです」

「なんだって、それじゃあ、銀朱は女神に遣わされて来たのか?!」

「女神さまは私たちの祈りに答えて下さりました。

この水は、ミゾノゾミ女神さまより与えられた水です」

銀朱の言葉に村人たちは感動で打ち震え、両手を合わせ天を仰いで拝み始める。

その場にいた神科学種は、いつの間にか姿を消していた。

帽子を深めにかぶり薄汚れたシャツを着た男が、お祭り状態の村を出てゆくのを気に止める者はいなかった。

「ふーっ、エロい、びしょ又レ又レの巫女最高！！」

REC 脳内HDへの動画、永久保存完了」

地下鍾乳洞ダンジョンからずぶ濡れ状態で姿を現したハルを、竜胆は面白そうに眺めていた。

「竜胆さん、わざと僕と銀朱さんを二人つきりにしましたね！！」

「銀朱のヤツがしつこく頼むからなあ、仕方なかったんだ。」

それで銀朱と上手くやれたか、姿が見えないがどうだった？」

ニヤニヤと笑いながら、あからさまに聞いてくる竜胆に、ハルは溜息をつく。

「竜胆さんは何を期待してたのか……銀朱さん、僕を女神と勘違いしてるだけです。」

それに、彼女は設置した魔法陣に触れて、オアシスに転送されち

やいました。

「村の枯れ池に転送されていると思うけど、大騒ぎしていそうだなあ」

「村には銀朱の兄貴もいるんだ、ヤツに任せておけば大丈夫だろう」

銀朱の転送の出来事は、大騒ぎどころか、新たな神話として「タイショ砂漠の女神降臨」と終焉世界中に知れ渡る事となる。

「エリア転送ゲート『全域転送魔法陣』の前で、SENとテイダ、竜胆の従者たちが待っていた。

見送りに来ていた、宿の女主人 黄檗きはだは、ふくよかな両腕でハルを抱きしめて別れの涙を流す。

「今日、宿の水槽にも魔法陣から水が出てきたよ。

本当にありがとう、予言通り神科学種は村に豊穡をもたらした。

特にハル、あなたの作る料理を食べると、生きる勇気がわいてきたよ」

「ありがとうオバサン。僕は少ししかお手伝いできなかったけど、そう言ってもらえると嬉しいですよ」

そして、幼い萌黄も王都で行儀見習いすることになり、育ての親の黄檗との別れに泣きじゃくっていた。

つられて泣きしそうになりながら、ハルは萌黄の手を引いて全域転送魔法陣の上に立つ。

「行き先は『鳳凰小都』、高原の高級避暑地エリアとして設定されている。」

ハルちゃんは、まだこのエリア見たことないよね」

「はい、ゲームの中だと高レベルクエストが多くて、僕は行ったことないです。」

オシャレな高級宿が多いって聞いていたから、楽しみだな」

「俺の行き先は『中の人ナース』フッフッフッ」

足元の魔法陣が青い光を放ちながら起動する。

新たな神科学種との出会い、そして旅の先にあるものは……
豊穰へと向かうのか、破滅へと向かうのか。

『End of god science - 神科学の終焉 -』
・タイシヨ 砂漠エリア コンプリーター complete

クエスト21 オアシスに水を引こう（後書き）

やっと「オアシス編」書きあがりました。

3人の旅は、まだ始まったばかりです。

語りたいたことが色々あったんだけど、今は書き上げた満足感がいっぱいです。

次は、すこしお色気が多めになる予定です。

メインキャラ紹介【オアシス編】

ネタバレ含みます。

オアシス編（クエスト21）読後にご覧ください。

> i 2 4 8 6 7 — 1 9 6 9 <
- - - - -
- - - - -
- - - - -

神科学種の魔法陣 メインキャラ紹介

【ハル 神科学種（冒険者） 人間 男 レベル36 15歳】

2014年12月7日『 - 神科学の終焉 - 』 ログイン

リアル 第1話 ログイン 2014/12/07 9:02

参考

名前 ？？ 調理師専門学校1年 19歳

無料キャラ”女神タイプ”

右目は赤色固定なので左右の違和感がないオレンジ色に設定した。癖のある青い髪に、細い尻尾のような三つ編みが背中まで伸びている。

『ラッキーボーイ』 1万分の1の確率でキャラ設定時に与えられる称号

「幸運度」と呼ばれる非表示ステータスがMAXらしい。

初心者で最弱、お料理大好き。

【ティダ 神科学種（冒険者） エルフ 性別不明 レベル165
22歳】

2015年1月8日 『神科学の終焉』 ログイン

リアル クエスト3 参考

名前 藤田友哉 学習塾経営 29歳

長く伸びた絹糸のような銀色の髪、透けるような白い肌に切れ長な瞳、
紅く薄い唇が常に微笑みを浮かべ、まるで天女のような容姿をしている。

魔力をすべて自己回復と自己治癒に回し、エルフ最強の狂戦士を目指してるネタキャラ。

時々自称お姉さま言葉で聞くものを惑わすが、中身はオッサン。

S属性 調教大好き。

- - - - -

【SEN 神科学種（冒険者） 人間 男 レベル197 21歳】

2015年2月14日『神科学の終焉』ログイン

リアル クエスト10 参考

名前 野原幸樹 NEET デイトレーダー 24歳

長身、黒い袴姿のイケメン青年
鍛え抜かれた鋼のような細身の体、眼光鋭い黒い左瞳、右頬に青い
刺青、黒い髪を後ろに束ねている。

レベル200という未知の領域に挑む廃プレイヤー。
頭脳明晰で、ゲームAIプログラムをいじれるほどの知識を持っている。

自称 変態紳士 電波語発信。

- - - - -

【紺の竜胆^{りんとう} 第二十六位王子 巨人と神科学種のハーフ 21歳】

巨人族としては小柄、赤い髪に浅黒い肌、太い眉に彫の深い彫刻のような整った顔立ち。
母親が人間（神科学種）末席の王子であるため、名前だけの王族扱いという境遇。

勇猛果敢で明るいジャイアン気質、意外と世話好き。
モテ体質で、健全な色男。

【萌黄^{もえぎ} 人間 8歳】

美しいストレートの金髪、深い蒼い瞳に、色白ですらりと長い手足。
お姫様のような雰囲気のお愛らしい美少女。魔力は皆無。
剣舞が得意で、戦闘能力も将来性期待大。

ハルお兄ちゃんの助手、私が守ってあげる。

鳳凰小都編 追加メインキャラ

・ YUYU

・ 水浅葱

・ 紫苑^{しおん}

・ アマザキ

クエスト22 エリア転送ゲートを利用しよう

頬を撫でる風はヒンヤリと冷たく、乾いた空気と柔らかい日差し。ハル達パーティと竜胆一行は、灼熱の太陽と砂嵐の砂漠エリアから、北のトウジ高原エリアへと転送した。

「へ、へっ、ヘー！くちゅ、

あつ唾飛んだ、竜胆さんゴメン。

まだ九月なのに、砂漠と比べたらココは肌寒いね」

「……」

竜胆はムツとした表情でハンカチを取り唾を拭くと、仕返しにハルの頭を鷲掴み、無理やり顔をゴシゴシと擦った。

ティダが修復したエリア転送ゲート『全域転送魔法陣』の乗り心地は、エレベーターを二階から一階に降りて「えっ、もう着いた！？」な感じだ。

「おい、あんたらさっさと魔法陣から退いてくれ。次の客が聞えてんだよ」

半屋外の高原エリア転送ゲートは、相撲の土俵に似ていて中心に魔法陣が描かれている。

緑の粗末な着物を着た魔法陣の管理人は、箒で魔法陣を掃き清めながらハル達を急き立てた。

慌てて場所を譲ると、すぐ次の転送が始まり魔法陣が起動する。

やたらと派手に着飾った商人グループが転送されてきたが、全員顔色が悪く足元がふらついていた。

「かわいそうに、あの商人達は長時間の転送で『魔法陣酔い』してるんだ。

やはり、ティダ製の魔法陣は性能がいい。

俺達は他の連中を押しつけて、最速で転送して来たみたいだ」

竜胆が笑いながら指差した商人たちも、管理人に箒で追い立てられている。

トウジ高原エリアの全域転送魔法陣は、分刻みで転送を繰り返して、大勢の旅人を招き入れていた。

北のトウジ高原エリア 『鳳凰小都』

鳳凰の住まう高貴な都と呼ばれる、高級避暑地のはずだが……。

エリア転送ゲートの建物を出たハルの目の前に広がるのは、人の波、波、波。

アジアのバザーを思い起こさせるような、人々の喧騒と立ち並ぶ露店の数々。

なんだか人混みにもまれて、肌寒さを感じなくなるくらいだった。

見るからに金をかけ全身着飾ったメタボ男とガラの悪そうな用心棒、露出の多い派手な服で誘う女。

露店には、高級そうなドレスや装飾品が並び、怪しげで目付きの悪い店員が客引きをしている。

そんな喧騒の中を、裸足で襪履をまとった幼い子供が物乞いをしていた。

「あのう『鳳凰小都』って、セレブの多く利用する高級リゾート地の設定でしたよね」

「確かに、王族や貴族、裕福な民がバカンスを楽しむ避暑地だった

はず。

「いったい何がどうなったら、こんな力オス状態になるんだ？」

SENも戸惑ったようで、隣に立つ竜胆に問いかける。

「竜胆は苛立たしげに腕組みすると、声を落として返事をした。」

「1年前は、もうちょっとマシだったんだが……。」

「こいつは身内の恥を晒すもんだ。詳しくは馬車の中で話す」

「おいふざけるなつ、先月は乗車代2000ピョコだったのに、3500に値上げだど!!」

俺は足を怪我してて、街まで歩いて帰れないんだ。

せ、せめて2500、いや3000に乗車代をまけてくれよ」

馬車乗り場では、乗合馬車の持ち主と乗客が、激しく言い争いを繰り返している。

その横を二頭立ての豪華な高級馬車が、乱暴な運転で乗合馬車を追い越してゆく。

竜胆たち巨人族を乗せる大型馬車が出払っていて、馬車が戻ってくるのに2時間ほど待ち時間ができてしまった。

ハルと萌黄にとっては、見るもの聞くもの全てが珍しい初めての高原エリア。

時間ができたので露店見物することになり、SENとティダが武器や魔法道具を、ハルと萌黄は竜胆が付いて食料を仕入れることに

した。

「クソツ、この俺様がガキの子守とは。

ハルすっかり付いてこいよ。お前の成りだとはぐれたら攫われまうぞ。」

竜胆は、小さな萌黄をひよいと肩に乗せ、ハルはその後ろを付いて歩く。

人混みの中でも半巨人の体は威圧感を与え、凜々しく高貴な面立ちの竜胆はかなり目立つ。

彼が王族だと気付く者もいるようで、自然と周囲には人垣ができる。

果物を扱う露店の主人は、通りの騒ぎを覗こうと外に出たところで、青い髪をした小間使いの少年に声を掛けられた。

「おじさん、包装はいらないからリンゴ10個買うことできる？」

白いひげを生やした恰幅の良い、某パン屋のおじさんそっくりな店主が果物を並べていた。

リアルとほぼ同じ形をしたリンゴ、長さ50センチのバナナ、スイカ大の梨。

そんな果物がキレイな箱や籠に入れられ贈答用として置かれている。

「ああ、果物だけでも売るよ。

美味そうだろう、今入ってきたばかりの新鮮なリンゴだ。

1個2100ピョコ、10個なら20000にまけてやるよ。」

「えっと、ピョコってピョコじゃないよね、お金の名前!？」

僕、今このエリアに来たばかりでまだ換金してないんだ。

ココのお金持ってないけど、紺銀貨でリング代を払ってもいい？」

ゲーム内通貨『コン』は、終焉世界の支配者 紺の巨人族の名から付けられた。

石銭1コン、銅貨100コン 銀貨1000コン そして1万コンは金貨になる。

主食の白穀物が一食分1000コンで、通貨価値は日本円とよく似た感覚だった。

「お、お客さん、代金を銀貨一枚で払ってもらえるならリング4個オマケに付けますよ！！」

店主の大声に、ハルの周りにいた売子たちが、一斉に商品を手に押しかけてきた。

「お兄ちゃん、この帽子あんたに似合いそうだ、銅貨五枚でどうだい！！」

「ほら、銀貨一枚でこのネックレスを買えるんだよ！！」

「コン銀貨三枚あるなら、この鶏五匹買わないか！！」

売り子の迫力にハルは立ちすくむと、背後に立っていた顔に傷のある瘦男が、いきなり腕を引いた。

カモを囲いこんだ売子達は、目配せすると逃がさないように路地に連れ込もうとする。

「なあ坊主、俺たちの商品買い取ってもらおうか。

痛い目に会いたくないなら有り金全部出しな」

「おい貴様ら、俺の従者に何してるんだ？」

その時、売子達に囲い込まれたハルの襟首が掴みあげられ、突然現れた大男の肩に担がれた。

獲物を横取りされた売人達は、相手が高原エリアの支配者である巨人族だと気付くと、蜘蛛の子を散らしたように逃げ出した。

「ふわあ、ビックリした。随分と強引な売り子だな」

「このバカ！お前、俺の話聞いてなかったのか。」

あいつらに路地に連れ込まれて、身ぐるみ剥がされるトコロだったんだぞ」

「あの人悪者なの、ハルお兄ちゃんいじめたの？萌黄がやつつけようか」

その後、竜胆に担がれたままのハルは、露店を見て回ることもできず馬車に押し込まれた。

巨人族の乗る頑丈な造りの馬車の窓から、ハルは夕焼け空を眺めていた。

ハルと別れて、露店で武器を探したSENとティダの方も散々な目にあっただらしい。

見かけ高級防具はバツタもんの偽物で、魔法道具と思って入った店は大人のオモチャ屋だった。

その店で何を買ったのかは、二人とも話さなかった。

「タイシヨ砂漠では、お金を使う機会がなかったけど、終焉世界の通貨って『コン』でしたよね。」

この高原エリアは、別の通貨が使われているみたい」

「鳳凰小都の支配者 紺の第七王子 青褐あいかちの命令で『ピヨコ紙幣』が使われている」

ピヨコ ピヨコ マジで……そんな紙幣で大丈夫か？

突然押し黙り、神科学種たちは紺の王子を感情のない視線で見つめる。

「うっ、確かに妙な呼び名だが……」。

この地域に伝わる古代呪文の一節から取った正当な言葉だ。

雨乞いの呪文で、カエル ピヨコ ピ「わかりました、竜胆さん」
「ピヨ」

800年も経つと、元の言葉の意味なんて歪曲されても仕方がないよね。

「さっきの馬車乗場の乗車賃が、ひと月で2000から3500に値上げしていたな。」

そもそも『ピヨコ紙幣』ってどんな金なんだ？」

ハルの隣に座るティダは、アイテムバックから金貨を一枚取り出すと親指で弾き、それを正面に座る竜胆がキャッチする。

「鳳凰小都は印刷技術が進んでいて、終焉世界の書籍はほとんどココで作られていた」

オアシス聖堂で見つけたQRコードの印刷されていた女神聖書も、この鳳凰小都で印刷されたのだろう。

「だが、どんなに優れた技術で本を刷っても、大した儲けにならない。

それで第七王子 青褐あいかちは、とんでもないモノを印刷することにした。

鳳凰小都での『紺貨幣』コン使用を禁止して、それに代わる紙の金『ピヨコ紙幣』を発行したんだ」

警備を兼ね、前の御者台に座るSENも話に加わってきた。

「露店で聞いた話では、最初150ピヨコで銅貨一枚換金できたのが、今は3500ピヨコ出して銅貨一枚だと。

いちいち計算する必要もないらしい、明日にはまた換金率が変わるからな」

ハルが、果物屋で「紺銀貨コンで支払う」と言ったら店主たちが大騒ぎした理由が判った。

「バカ王子は、遊ぶ金欲しさに『紙幣』を刷りまくって、二年で物価は30倍まで跳ね上がった。

来月はさらに倍、今年中で100倍までいくんじゃないか」

街道を走る馬車の真上を巨大な黒い影が横切り、うるさい羽音が響く。

黒い羽根、額に蒼珠の埋め込まれた数百羽の死黒鳥が、道の彼方にある光へと引き寄せられ飛んでゆく。

「第七王子 青褐あいかちは、住人から金を巻き上げるだけじゃ飽き足らず、悪どい仕組みを作った。

元々高級避暑地だ、余所から来た裕福な連中から『アレ』を使って金を落とさせる」

竜胆は立ち上がると、馬車の窓をすべて開け放つ。

日の暮れかけた街道の先、遠目からでも色とりどりに照らされた鳳凰小都の街並みが見えてきた。

道の両脇に広がる貧民街、それとは対照的に、鳳凰小都の中心は派手な装飾が施された建物が無数に立ち並ぶ。

街丸ごと巨大な歓楽街、不夜城、花街とも呼ばれる。

「鳳凰小都内で、特に娼館で使用できる通貨は『ピヨコ紙幣』のみ。他所から色と欲に釣られてココに来た金持ちたちは『ピヨコ紙幣』換金したら最後、すべてを搾り取られ無一文で街の外に放り出される」

人間以上に欲望に忠実な巨人族の花街には、ありとあらゆる快樂が用意されていた。

甘い欲望の蜜に群がる蟻は、その先にアリ地獄が仕掛けられている事も知らずおびき寄せられる。

「被害を受けるのは殆ど人間だが、誇り高い巨人王は見過ごせない

のだらう。

『王の影 YUYU』が動くほどだ」

鳳凰も逃げ出し、厄災を運ぶ死黒鳥の住処になった哀れな『鳳凰
小都』

神科学種たちを乗せた馬車は、欲望の都に呑み込まれていった。

クエスト23 古代禁書本を読もう

数年前まで、鳳凰小都の街壁は、白い石積の壁を美しい文様の蔦やツルバラが彩っていた。

今や見る影も無く、胸や尻を強調した女性の扇情的なポスターが張られ、卑猥な言葉の落書きで埋め尽くされている。

それでも鳳凰小都の街の入口、正門近くは高級避暑地の面影を留めており、普通に商店や民宿、役所や学校が立ち並んでいる。

だが路地を一つ奥へ進むと、雰囲気はガラリと変わり、怪しげな商品を扱う店や客待ちの娼婦がたむろする酒場が並ぶ。

正門正面に建てられた、王族用の高級宿前に馬車は停まる。

これから目指す場所には幼い萌黄を連れて行くことはできず、竜胆の従者と宿で留守番させる。

すでに日も暮れ、夜の闇が辺りを包み込む。

街は眠りから覚めたように、煌々と怪しげな光を放ち、欲望の都へと人々を誘い込む。

『王の影YUYU』との会談に指定されたのは、鳳凰小都の最深部にある高級花街だった。

竜胆の案内で、冒険者の三人は街の中に足を踏み入れる。

細い路地には人が溢れかえり、住人がほとんど人間だったオアシスと比べ、大柄な巨人族の姿も見かける。

それでもこの界隈のほとんどは人間で、奇異な服装の道化や、どこのカーニバル！というような少ない布で豊満な体を誇示する娘たちが呼びこみをしている。

「あ、あれはっ、素晴らしいネコ耳だ!？」

「コミケ会場でも、あんなに完璧なネコ耳コスプレ見たことないぞ」
SENが見つめる先、黄色い声で客引きしている女の子の頭に、
ピヨコンと三角のネコ耳が付いている。

耳は音に反応してピクピク動き、ピンと立ったフサフサの尻尾が
とてもセクシーだ。

「なんだ、猫人族が珍しいのか？」

「……にゃんと！！リアル猫耳娘ですか」「」

三人ハモりました。

ファンタジー世界で、サキュバスに次ぐ萌えキャラ、ねこ耳を装
着した猫人族が現れましたよ。

「元々猫人族は最下層の身分で、貧しさから花街に売られてくる娘
は多い。」

この界限で人気の高級娼婦は、ほとんど猫人族だからな」

「く、詳しいですね。竜胆さん」

「当たり前だ、この俺を女たちが放っておく訳ないだろ。」

人間も猫人も、向こうから言い寄ってくるからな」

確かに、巨人と人間のイイとこ取りのルックスの竜胆は、歩くだ
けで注目を集める。

竜胆だけじゃない、無精ひげでワイルド二割増しなSENや、ミ
ステリアスな雰囲気で美しい銀髪のエルフのティダ。

男も女も、この見栄えにする華やかな一行から目が離せないよう
で、ちらちら様子を伺っている。

えっ、僕ですか？

小間使いの従者のように、こそこそと彼らの後を付いてゆくだけです。

＊＊

鳳凰小都の最深部　高級花街エリアは、周囲のケバケバしい店と一線を画していた。

青々と茂る竹林の壁が高級娼館を取り囲み、落ち着いた和風旅館のような雰囲気だった。

王の命により、鳳凰小都を極秘で偵察するための拠点「完熟遊誘館」で、『王の影YUYU』と神科学種の会談が行われる。

ハル達に通された部屋は、十二畳ごと襖で仕切られた三部屋が縦に伸び、最奥の部屋では宴会が始まっている。

色鮮やかな着物に、宝石をちりばめた髪飾りを身に着けた四人の若い娼婦が、喜声を上げながら遊びに興じていた。

「アウト、セーフ、ヨヨイのヨイっ　いやぁん、また負けちゃった」

勝負に負けた薄紫の着物の娘が、髪飾りを一本抜いて放りなげる。畳の上には、すでに上掛けや足袋、首飾りなどの装飾品が散らかっ
つていて、向かい合いジャンケンしてる娘達もかなりの軽装になっ
ていた。

えっと、これから僕らは『王の影』と呼ばれる凄い人と会談する

はずなんだけど……

部屋の主人は、豪華な造りの座椅子にだらりと腰かけ、その後は鮮やかな水色の波打つ髪の魅力的な女性が控える。

『王の影』は、細かな銀刺繍の施されたヴェールで顔半分をかくし、薄緑色の打掛の様なガウンで足先まで体を覆っている。

ヴェールから覗く顔は透けるほど白く、薄い桃色の唇が微かに笑うのが見えた。

次の勝負で、負けた桃色の着物の娘の帯に手がかかると、娘たちは面白がって長い帯をひっぱる。

「あれ〜っおやめになつて!? クルクルクル」

「良いではないか、良いではないか」

この場面にこのセリフ、しかも野球拳、どこかで見たことが……
そうかバカ殿だ!!

目の前でキャッキヤと戯れる彼女たちの姿に、その場で立ち尽くしていたハル達を見かね、竜胆は声を掛ける。

「おい、YUYU。約束通り神科学種を連れて来たぞ。」

竜胆の大声に、客の存在に気付いた娘たちは、素早い動きで席を整える。

小柄な『王の影』は、座椅子から立ち上がり、足音もたてず畳の

上を滑るように近づいてきた。

「……ふふっ、遠路はるばる、時空の彼方から終焉世界へようこそ。私は、乱暴王 鉄紺 第四位側室『王の影 YUYU』」

薄いヴェールを取ると、ふんわりと肩にかかるブラウンの髪に整った小さな顔、先端のどがった長い耳に紅い右目。

「そして『End of god science - 神科学の終焉 - revision?』のゲームプレイ中、この世界に呼び込まれたプレイヤーです」

ハルは、赤い右目で相手のステータスを確認する。

【YUYU 神科学種、revision?（冒険者） ハイエル
レベル285 12歳】

この「revision?」ってなんだろう？

レベルが上限200を軽く超えてるし、ハイエルフという種族は存在しないはずだ。

隣のSENを見ると、心なしか青ざめているように見える。

「あんだ、このステータスは本物が、チートキャラじゃないだろうな」

『王の影』も同じように、赤い右目でステータスを確認していたようで、SENの問いかけにニコリと笑い返す。

「SEN、貴方は『14年バージョン』の神科学種。

私はその四年後『18年バージョン、revision?』です。」

2018年10月に口グインして、すでに終焉世界の滞在時間は23年経過しています」

ということは『王の影』と呼ばれるYUYUは、僕らより後に口グインしながら、20年以上この世界に住んでるってこと？

この街に来てからどこか不機嫌そうなティダが、堅い声色でYUYUに訊ねる。

「俺は終焉世界が……本当に2015年から800年後の未来なのか、信じられない。」

もし、はつきりとした証拠があるなら教えてくれないか。」

「では貴方たちに、ハク口王都に伝わる『古代禁書本』を見せましよう。」

この本を読む勇気が、または読まない勇気が在るかどうか……読んで正気でいられるか、試しますか？」

背後に控えていた、水色の髪の女性がYUYUへ黒い箱を手渡す。ハルたちが固唾をのんで見守っていると、『王の影』は箱の蓋を取り、中に納められた古代禁書本を三人の前に差し出す。

それはとても見覚えのあるデザインで、厚さ1.5センチほどの片手で持ち運べるサイズ、表紙はカラフルなイラストの描かれている。

「あれ、コレってジャ@プロミックでしょ？」

この絵柄は、主人公がルフ「うわぁー！！ネタバレダメッ」ゲフッ」

「見ないぞ、俺は見ないぞ『最終巻 俺は永遠に海@王になる』って……読んでえ!!」

「SEN、お前殺す、ネタバレ許さない!!死ねエ」

本を見た神科学種たちは、突然人が変わったように殴り合いを始め、その様子を水浅葱は恐ろしげに眺めている。

「YUYUさま、一目見ただけで神科学種をここまで狂わせる。なんて……恐ろしい呪われた本なのでしょう」

SENの口を塞いだティダは、忌々しげにYUYUを睨みつける。

「確かに、ココが未来だと確信したが……俺は毎週ジャ@プを読むの我慢して、コミック発売を待ってるんだぞ。」

それをいきなり最終巻ネタバレするって、なんて鬼畜な奴だ!!」

YUYUはティダの嫌味も気にせず、涼しい顔でさっさと本を箱の中に戻すと蓋を閉めた。

クエスト24 じゃんけんゲームをしよう

「さて、このような物的証拠で確信してくれた事と思います。ここが八百年後の現実世界で、とある事情で世界は終焉した後の世界、ということ。」

『ジャンプコミックス 古代禁書本』を黒い小箱に仕舞ったYUYUが座椅子に戻ると、水浅黄と呼ばれた女性が湯呑を差し出す。

それが合図だったようで、お揃いの小紋の着物を着た少女たちが、料理を乗せた盆を持って部屋に入ってくる。

竜胆が畳の上にとっしりと腰を下ろしたのにつられ、ハルたち三人も美しく料理が盛り付けられた盆の前に座る。

和風懐石風の鮮やかな小鉢に盛り付けられた料理は、砂漠エリアでサバイバルに明け暮れた彼らには、夢のような御馳走だ。

ハルは部屋の端っこの席で、いただきます と手を合わせ食事に箸をつける。

見かけは和風だけどゴマ油を使っているんだね、塩味がかなり強いな、白米は……堅っ、おにぎりの実の方が美味しいかも。

料理をもぐもぐと口に運びながらも、ハルの脳内は「くいしん坊万才」状態になっている。

SENとテイダは食事に手を付けず、奥座敷に座るYUYUの様子を伺っていた。

『王の影』は、警戒心をあらわにしたままの神科学種たちを、楽しいオモチャを見つけた子供のような、無邪気な天使の笑顔で話しかける。

「私の詳しい自己紹介は済ませました。

次は貴方がたの…… タイシヨ 砂漠の聖堂に降臨した女神を紹介してください」

「YUYU、なに言ってるんだ？女神が憑依したのはオアシス神官の妹だ。」

ココには連れて来てないぞ」

『王の影』の発言に、竜胆は食事の箸を止め不思議そうに答える。

ガターーンツ ガチャン

唐突に甲高い音が響き、きれいに盛り付けられた料理は皿ごと盆から落ちて床に散らばる。怒りに顔をゆがめたSENは、目の前の料理盆を蹴って立ち上がったのだ。

竜胆は、生贄乙女をハルが身代わりした事を知らない。

大神官を欺くため、その秘密を知るのは自分達と退紅の神官仲間数人だけだ。

しかし『王の影』は、今はっきりと『女神降臨』を口にしたのである。

「なるほど、あんたは最初からソレが目的だったんだな。」

茶番は終わりだ！！

ティダ、ハルを連れて「うきやああ、なんだなんだ！？」しまった」

SEN達と離れた席に座っていたハルは、いつの間にか高級娼婦の娘たちに取り囲まれていた。

彼女たちは一斉にハルの服に手を伸ばし、抱きついたり押し掛かったりしながら服を脱がしてる。

「ああっ、まだ茶碗蒸しを食べてないのに!？」

「ぎゃあーあ、ズボンは待って、女の子がそんな積極的にーウワアアア」

「ぼい ぼい ぼいつ と上着やベルトやズボンは畳の上に脱ぎ捨てられ……」

「はしゃぐ彼女たちに揉みくちやにされて、無理やり着替えさせられた。」

「大人しくしなさい、この黒髪のカツラを被って……えっ、これは」

「まあ、なんて可愛らしい」

「化粧は紅をさすだけで、充分お綺麗ですわ」

用意された衣装を身に着けたハルを、娘たちは羨望の眼差しで見つめる。

様子を眺めていたYUYUも座椅子から立ち上がると、まるで憑かれたような目つきでハルの傍に来た。

「……ふふっ、女神ミゾノゾミが降臨した噂は王都まで伝わってました。」

まさか、平々凡々の目立たない小間使い従者が、これほど化けるとは驚きです」

女神モデルの無料キャラなんだから、そっくりなのは当たり前っすよ。

オアシスで着た巫女服とは少しデザインが違うが、白い小袖（白衣）に緋袴を穿いて、背中までの長い黒髪のカツラを被ったハルは、終焉世界の女神そのものだった。

ハルの巫女姿を初めて見たSENや竜胆も、それは衝撃の変身姿

だった。

「確かに銀朱よりも、ハルの方がミゾノゾミ女神に似ているな」

「REC みこみこみこ脳内HDへ「逝ね、変態紳士！！」げふっ」

電波モードのSENに、ティダが前々からのお返しとばかりに顔面に蹴りを見舞った。

嗚呼、やっと、長かった、やっと、見つけた、あれを、手に入れる、

女神、禁忌、黒い蝶、パニック、過去を、世界を、変える

突然、全身の力が抜けたかのように座り込むYUYUを、水浅葱は素早く肩を支えながら、心配げに声をかける。

「YUYUさま、お顔の色がすぐれませんか……大丈夫ですか？」

YUYUが腕を伸ばすと、水浅葱はその手を取りお姫様抱っこする。

水浅葱は力無く目を閉じたYUYUを抱えたまま、ハルを捕獲した娘たちの前に出て、神科学種と対峙した。

「竜胆様はそのまま、神科学種のお二方、お帰りはあちらの裏口からどうぞ。」

私達は、王より『タイシヨ砂漠に降臨した女神を、霊峰女神神殿より先に手に入れる』との命を受けてます。

ハル様は、私たちが手厚く御持て成しいたしますので、ご心配なく」

腕の中で、人形のように動かなくなった『王の影』に代わり、水浅葱はきつぱりと告げた。

「ふえっ、僕は女神さまじゃないですよ!？」

戦闘力もないし、魔力も足りない、弱いだけの神科学種です」

ハルはなんとか誤解を解こうと、若く綺麗な高級娼婦たちにパフパフされながらも、必死に答える。

それに水浅葱はこう返す。

「オアシスに潜入させた者の報告によりますと……」

ハル様は、砂漠に緑の森を出現させ、その実で飢えを無くしたと聞きます。

枯れた『奇跡の池』の水を魔法陣で蘇らせたのも、ハル様の技だと。

それに『女神の弓』を扱うことが出来るのは、ミゾノゾミ女神しかおりません」

「はうっ、言われてみればそうなんだけど……」

でもそれは、別に奇蹟でもなんでも無いよ、僕は単に運が良かっただけだ」

そうだ、これほどの祝福を受けるモノを、誰も放ってはおかない

だろう。

SENは刀を抜くと、その鋭い切先を、水浅葱と腕の中の『王の影』に向ける。

「王命が何だろうが、俺たち神科学種には関係ない事だ。

ハルを、俺たちから奪えるなら、やってみるがいい。

コノ セカイ ハ メンドクサイ

ゼンイン シンエンノ ヤミヨニ オトシテ ヤロウカ」

ガコイーン 「うがあああつ！」

ティダが、今度はSENの後頭部めがけ、力いっぱい手刀を振り下ろす。

まただ、SENはハルが関わると、異常なほど過激な反応を示す。そう、自分達はその気になれば、すべてを簡単に破滅に向かわせる力があるだろう。

ただ、ゲームではない現実の行為には、責任も伴うのだ。ティダはそれを危惧したのである。

「SEN、何テンパってるんだ！！」

丸腰の相手に、そんな物騒なモノ突き付けるんじゃない」

『王の影』と『神科学種』の駆け引きを眺めていた竜胆は、のっそりと立ち上がると、水浅葱を睨みつける。

「俺も、このガキだけを、一人王の元へ連れて行くには反対だ。

例え『女神を憑依』させたとしても、コイツは一人では何もできない。

王都に連れて行くなら、他の神科学種も一緒じゃないと奇蹟を起こせないだろう」

その時、水浅葱に抱きかかえられていたYUYUが、小さく身じろぎ、パチパチと何度か瞬いた。
意識を取り戻し腕の中から体を起こすと、目の前に突きつけられた刀を見て、ぷいと顔をそむけ水浅葱のふくよかな胸に顔をうずめる。

「あら、YUYUさま、寝ぼけてらっしゃるのですか？」

そんな、胸に強くお顔を擦り付けられては、ああっ、ひゃんっ、ちよっ、ダメですう」

抱きかかえるYUYUが、もぞもぞと何やら悪さをしているようで、水浅葱が艶のある声を上げる。

目の前で、美女の悶える姿を見せ付けられ、SENの刃先はかすかに揺れている。

「ふわあふわ……むにゅ、こんな場面で『落ちて（ログアウト）』してしまっとは。

……あれ、どうしたのです？随分と殺伐とした状況になっていますね。」

YUYUがやっと彼女の胸から顔を上げて、殺気のそがれたSENを見つめる。

「そのような物騒なものを仕舞いましょう。

ここはお店ですし、娘たちも怯えています」

「アウト、せーふ、ヨヨイのヨイ!？」

あら、負けてしまいましたわ。はい、指輪1個捨てま〜す」

は、謀られたっ。

欲望に駆られ勝負を受けたSENと竜胆は、激しく後悔していた。

脱衣ジャンケンの勝負は殆ど互角、だが、高級娼婦の彼女たちを美しく飾るアクセサリを計算に入れてなかった。

最初の一人、薄着の青紫色の服装の娘と勝負しても、まだ彼女の上着すら脱がせられない。

身に着けるモノの少なかつた竜胆は、すでにパンツ一丁で、SENも残りは下半身の袴と下着だけだった。

「クッ……我が拘束具を解くと押さえ込んでいる魔力が放出するといふのに……！」

(電波語解説：服脱いだら、汗臭かった)

おい、俺たちが負けたら、次はティダの番だからな」

SENが悲壮感を漂わせながらティダに声を掛けるが、予想外の返事が返ってくる。

「お姉さまは、このジャンケン勝負には参加しない。

ハルちゃんは、王都に連れていった方が良いと思っているよ」

「なんだと！？ティダ、どういう事だ」

ティダは『王の影』の視線がこちらに向いていることを確認すると、しつかりとYUYUの目を見て答えた。

「巨人王は、『霊峰女神神殿より先に女神を手に入れる』と言っていた。

それはつまり、巨人族と霊峰女神神殿は対立する立場にある。

俺は、アノ大神官を野放しにしていた霊峰女神神殿を信用できない。

そして、竜胆やその従者たちを見れば、まだ巨人族の方がマシだと思うよ」

YUYUはクスリと笑うと、甘い声で歌うように、コノ世界の闇を語る。

「巨人族の王は、あくまで巨人を総べる王。

人間は、ミゾノゾミ女神を信仰する霊峰女神神殿が治めるべきなのに、彼らはその務めを果たさず、自らの私利私欲に走っている。

巨人族 暴力王 鉄紺は、人間にも手を差し伸べ、終焉世界はなんとか破滅手前で留まっている状態です。

それにしても良かったです、話が判る方が居て。

短絡的なバカ、失礼、判断を全員お持ちなら、どうしたものかと思いましたよ。いくら神科学種であろうとも、巨大勢力二つを相手にして無傷では済まない事は、どこまで愚かだろうと理解できるでしょう？」

クソツ SENは舌打ちすると、再び青紫の服を着た娘と向かい合い。

「男には、どうしても、負けられない戦いがある。
アウト、せーふ、ヨヨイのヨイ!? あっ、しまった……」

キヤアアーと、黄色い声上がる。

ホホを赤らめた娘たちが、チラチラと覗き見る視線の先は……

SENは袴姿だから、もしかしてと思ってたけど、ちゃんと「ふんどし」だね。

太マッチョと細マッチョの二人が、素晴らしい肉体美を晒しながら、畳の上で正座してる姿はシュールだ。

クエスト24 じゃんけんゲームをしよう(後書き)

次回も、脱衣ゲーム続き(笑)

クエスト25 翼の毛繕いをしよう

『王の影』の口車に乗ってしまい、脱衣ジャンケンで身ぐるみ剥がされた男二人。

畳の上に正座して屈辱に耐える竜胆とSENの姿を、YUYUはあくびを噛み殺しながら眺める。

「勝負ありましたね。もう少し粘れると思ってたのにツマラナイ。敗者はペナルティとして、1年間、宿の用心棒の強制労働です。ボロ雑巾……ではなく、厄介なお客様を追い払う要員としてこき使われてくださいね？」

まあ、私も鬼ではありませんので、最後に1度だけチャンスあげましょう。

貴方の持つその珍しい刀　タケミカツチを賭けての勝負です」

『王の影』の挑発に、SENは怒りを押さえ込んだ表情で、刀を握りしめ立ち上がるうとした。

「ダメ、ダメですよ、SENさん。

タケミカツチを賭けるなんて、刀は武士の魂じゃないですか！！

そもそもこの争いの原因は僕なんだ、脱衣ジャンケン、次の相手は僕がします」

ハルは、纏わりついている美しい娼婦達を払いのけると、YUYUに勝負を挑む。

それも予想通りの行動だったのだろう。

YUYUは、薄笑いを浮かべながら舐めきった態度で巫女姿の少年を見つめる。

「いいでしょう。ではハルくんが、彼らの勝負を肩代わりするのですね。」

もし私たちに負ければ絶対服従、下僕として王都で働いてもらいますよ。」

「下、下僕って……何を」

「貴方のミゾノゾミ女神そっくりの姿なら、王の後宮ハーレムに入り込んでも男性だとバレることはないでしょう。」

仕事も裏工作とか、諜報活動とか、暗殺部隊とか色々あります」

負ければ貞操の危機？裏街道まっしぐらを示されたハルは、少し青ざめながらも顔を上げ、ビシツとYUYUに宣言する。

「そ、そっちこそ、覚悟してくださいよ。」

あなた達全員、僕が『すっぱんぼん』にしてあげます!!」

「うわあ、お姉さま感激!?!初めてハルちゃんが、カッコイイ事を言ったよ」

傍観者を決め込んだティダは、事の成り行きを楽しそうに見守る。そして、脱衣ジャンケン二回戦の幕が切って落とされた。

「アウト、せーぶ、ヨヨイのヨイ!!……」

「アウト、せーぶ、ヨヨイのヨイ!!……」

「アウト、せーぶ、ヨヨイのヨイ!!……」

えっ、嘘でしょう〜〜ど、どうして勝てないの？」

彼女はガツクリと肩を落とすと、ユリの花の刺しゅうされた肌襦袢を肩から落とした。

足元には、色とりどりの髪飾りに、身にまとっていた三重の着物、蒼く染め上げられた帯が脱ぎ散らかっている。

彼女が身に纏うのは、プルンと柔らかい桃の様な胸を隠すキヤミソールと、少ない布の紐パン。

「やんっ、さむいさむい」と呟きながら、同じように半裸に剥かれた仲間の傍にくっついて肌を温めあう。

「さて、これで三勝負。次は誰が僕の相手をしてくれますか？」

額にうつすらと汗をにじませながら、ハルは服の脱ぎ散らかされた部屋の中央で、腰の手を置き次の獲物を探す。

脱衣ジャンケン 72勝3敗という凄まじい強さで、娘三人は下着姿にされてしまった。

ハル自身はまだ、髪飾り二個と足袋片方しか脱いでない。

「ハルさま、次は私がお相手しましょう。お手柔らかにお願いしますね」

YUYUの合図で、隣に控えていた水浅葱が立ち上がり、ハルと対峙する。

軽くりズムを取りながら、二人は向かい合つと手の内を見せないように袖で隠し、掛け声をかける。

「最初はグー、アウト、せーふ、ヨヨイのヨイ!!」

あら残念、負けてしまいましたわ。一枚脱ぎましょう」

水浅黄は妖艶に微笑みながら、服の留め具をパチンパチンと外すと、躊躇うことなく上着を脱ぎ捨てた。

薄く透けたキャミソールの下には、YUYUが何度も顔を埋めた、ボリュームのある豊かな胸が揺れている。

おおうつ、竜胆とSENは思わず立ち上がるうと足を崩し、前のめりになる。

「うつ、熟し切ったマンゴーがワッサワッサと、今にも零れ落ちそうー!!」

「ダメだ!!これは目が離せない、彼女の持つその双丘から解放されている膨大な妖力によって、凄まじい心理攪乱攻撃を受けざるを得ない!」

水浅黄は両手で余るほど豊満な胸を、強調するように寄せて持ち上げ、向かい合う少年に見せつける。

「さあハルさま、勝負はこれからですよ。

アウト、せーふ、ヨヨイのヨイ、あら?負けました……

おかしいですね、私のお色気攻撃が効いてない?」

目の前の巫女姿の少年は、少し頬を赤らめながらも冷静な視線で睨み返してくる。

だが、読心の魔力を持つ水浅葱が覗くのは、ターゲットの心。

確かに、自分の肌もあらわな姿に動揺しているが、心が見えない。読心能力に絶対の自信を持っていた水浅葱は、力を使えず焦って負けを重ねる。

「YUYUさま、これは一体どうした事でしょう。
ハクロ王都一の読心魔術の使い手である私が、あんな無防備な子
供の心を読めないなんて」

「水浅黄、女神を憑依させる心を持つハルくんは『魂の位』^{くわい}が貴い。^{たか}
それは、人が簡単に覗き見る事は出来ないのです」

脱衣ジャンケンというふざけた勝負だが、ハルの強さに圧倒され
てしまう。

正に「勝てる気がしない」状態だ。

YUYUは、すっかり戦意喪失してしまった水浅葱を下がらせる。

「そろそろ遊びに飽きてきました。ハルくん、私との十回戦で勝敗
を決めましょう。」

ヨヨイのヨイ!! x10回

その大一番であろう勝負は、意外にも直ぐに決着した。

「あおう、YUYUさま……ジャンケン弱すぎです」

一度のあいこも無く、水浅葱にバツサリ指摘されるほどストレ
ートで全敗してしまったYUYUは、がっくりと肩を落とす。

「くっ、悔しいです……はっきりいって、裏仕事専門の私には『幸
運度』は皆無でした」

YUYUは、のろのろと頭から被るケープを取り、室内履きをポ
ンと蹴り捨て足袋を脱ぐ。

エルフ耳を包む耳飾りを外すと、耳は不自然な形で千切りとられ
た跡があつた。

打掛のような豪華なガウンを脱ぐ、中から背中が大きく空いた薄
緑色の服を着ている。

ハイエルフであるYUYUの背中には、小さな白い羽根が4枚生
え、夜の冷たい空気に震えるようにパサパサ羽ばたいた。

「困りました、私これでも巨人王の『第四位側室』。

王以外の者に、むやみと肌を晒せません。

しかし負けは負け、私が脱ぐ替わりのモノとして、コノ「完熟遊
誘館」をハルくんに差し上げましょう」

「えええつつ、YUYUさん何言ってますか!？」

いきなり水商売、しかも娼館経営なんて無理です。要りません、
お返しします」

いくら『王の影』と呼ばれていても、これは、庶民感覚では考え
られないトンデモプレゼント。

ハルは首を左右に振り拒絶の意思を伝えるが、仲間二名が異様な
関心を示す。

「おおつ、脱衣ゲームの景品がハーレムとは、さすが『王の影』太
つ腹だ。」

「ついに、ついに男の夢、酒池肉林展開 キタアアアア」

けだものが二匹、吼えているよ。
フツ……なんかもう、今日は、疲れたよ、あつ、目の前に霞がか
つてきた。

YUYUの敗北宣言を聞いて、控えていた娼婦たちは、楽しそう
に再びハルを押し倒す。

「今宵は、私たちがハル様を天国に招待しますわ。

あらハルさま……えっ、まさか、この状況で寝てしまわれました
？」

前日の砂漠エリアから、すでに二四時間以上起きている。

しかも『幸運度』を勝負で消耗したため、ハルの脳内システムが
強制的に就寝モードに切り替わっていた。

ハルをパフパフしていた娘たちも、爆睡中で起きない様子にあき
らめて離れてゆく。

ずっと勝負の様子を黙って見守っていたティダが、狂戦士の笑み
を浮かべてYUYUの側に立った。

「『王の影』随分とふざけた方法で、ハルちゃんが本当の女神かど
うか確かめたね」

「不自然なほどの勝負強さ、ハルくんの『幸運度』は、もはや疑う
余地もない。

偶然の幸運？いや、それは特別に選ばれ者にのみ与えられる祝福
された力、私に欠けた力。

ついに、この終焉世界を豊穡へと導く神科学種が現れたのです」

『王の影』が敵か味方が判断するために、カマかけのつもりで尋
ねてみたが、返ってきたセリフはまるで女神の熱狂的信者に近いも

のだった。

この様子なら安全、少なくともハルが不利になるような事はしないだろう。

そのティダの思惑すらも読んでいるのだろう、YUYUは無垢な天使の顔でいた。

「ティダさん、貴方にも部屋を用意させます。気に入った娘にお世話しましょう。」

あつ、男二人は負けがチャラになった訳ではないので、同等の対価を払って下さい」

こっそり娘二人を従えて、部屋を抜け出そうとした竜胆は釘をさされる。

「なあどうする、お前たちのご主人様はあんなこと言ってるけど」

美しい娼婦たちの耳元で、若く凛々しい王子は低く甘い声で呟く。肌襦袢を羽織っただけの二人の娘は、YUYUに会釈すると、竜胆に甘えるように腕や腰にしがみつきぐいぐいと引っ張って別の部屋へ姿を消した。

「では、お姉さまはハルちゃんと同じ部屋を頼もうか。

ふふっハルちゃんしっかり爆睡してるようだし、あんなことやこんな「やめんか！変態エロフ」げふう」

「ティダ、貴様だけ役得なんて許さん！？」

こーなったらヤケクソだ、一夜限りの宴、ハーレムを楽しんでやる。

この店の者全員連れてこい。俺がまとめて面倒見てやる」

全くイイところの無かったSENは、勇ましくほざいた。

店の者は、嬉しそうにSENに会釈をすると、他の者を呼びに行く。

しばらくすると数人？いや、それ以上の足音が廊下に響き渡り、部屋の襖が開かれた。

ぞろぞろと部屋に入ってきたのは、子供、子供、子供……

さつき部屋に食事を運んできた少女たちと、他に、年齢もまだ6才位の幼児から12歳までの少年少女二十数名。

薄桃色の着物の娘が嬉しそうに子供たちを整列させると、丁寧に頭を下げる。

「この館は、巨人王御用達の娼館いう名目から「ロリコン王」の噂を真に受けた者が、子供を宿の前に捨るんです。

子供が飢えない様に巨人王の慈悲を受けさせたい、との悲しい親心なんですよ。

おかげで、ココは娼館とは名ばかりの『孤児院状態』です。

まさか神科学種さまが、子供達の面倒を見て下さるなんて、ほんと助かりました」

「おいおい、SEN、この状況どうするんだよ……あっ！！逃げんな」

ティダが気付くと、YUYUも水浅黄も姿を消し、SENもとんずらしていた。

三部屋続きの広い部屋は子供たちで埋め尽くされている。

この騒ぎでも、朝まで目覚めないであろうハルの寝顔を眺めながら、ティダは子供たちに指示を出す。

「そつだ、もう子供は寝る時間。起床は朝七時、寝坊するな。

くそう、鳳凰小都がここまで末期状態とは……子供を捨てた親を激しく調教したいよ」

厄介ごとを神科学種に押し付け、宿の来賓室に戻ってきた『王の影』は、しかし一息つく間もなく側近のおねだりに悩まされていた。

「YUYUさま〜ハアハア、今回は私、とても頑張りましたよ。

」ご褒美に、YUYUさまの背中の羽を毛繕いをさせて下さいっ」

水浅葱は、甘い猫なで声と期待をこめた目でYUYUに抱きついてきた。

「……まあ、確かに水浅葱は、イロイロ面倒な用事をこなしてくれました。

今回はわがままに付き合ってくれた礼に、その申し出を受け入れるしかありませんね」

YUYUの一言で、とろけるような笑顔になった水浅葱は、さっそく膝の上でYUYUを横抱きにする。

背中に生えた小さな翼にやさしく手を伸ばし、その柔らかな手触りを堪能する。

「うっ、うっうん、水浅葱っ、ちょっと、くすぐったっ、ヒヤッ」

「YUYUさま、翼の付け根に触れるとパタパタ羽ばたいて……感じてらっしゃるんですね。ほわほわした極上の手触りが最高、それ

に体からも良い香りがします」

羽根がしっとり潤ってきて、YUYUは頬を真っ赤に染め、ぴくぴくと身悶えながら、細い腕で水浅葱に縋り付く。

「や、やんっ、みずあさ……そこは らめえーあっあっーんっ……」

『王の影 YUYU』最大の弱点、背中を思う存分撫でまわして堪能した水浅葱は、今回の騒動で一番の役得だったかもしれない。

クエスト25 翼の毛繕いをしよう(後書き)

お色気要員 水浅黄さんに決定しました。

クエスト26 子守をしよう

うつらうつらと、まどろむ。

でも、もう少し……布団を頭までかぶろつと引き寄せると、ヒヤリと冷たい感触に驚いて脳が覚醒する。

ん？んっ！？湿ってる、しかもこのツーンとした匂いは、ま、まさか……この歳になって オネ シ ヨ ！！

「おわ、わ、あわわっー？あれ、この子だれ」

ハルは慌てて飛び起きると、右脚に小さな男の子がしがみついている。眠っている。

その子のズボンがぐっしより濡れて、敷布団におねしょの地図を描いていた。

室内を見回すと、そこには子供、子供、子供……

昨日、高級娼婦たちと脱衣じゃんけんをした部屋は、合宿所のように布団が敷き詰められ、見た目幼稚園から小学生の子供が二十人以上寝転がっている。

「やあ、ハルちゃんお早う。昨日はご苦労様でした」

ちょっと気怠そうなアルトの声に振り返ると、『王の影』が居た場所で、ティダがキセルを啜え煙をくゆらせていた。

「あのうティダさん、この子達どうしたんですか？？僕の寝ている間に何があったの」

「フウーツ この子たちは、娼館に捨てられ世話を見ている孤児だ。」

SENが余計な事を言ったおかげで、神科学種が孤児の面倒をす
る羽目になったんだ。

夜泣きする子供をなだめたり、寝相の悪いガキに何度も蹴られて、
お姉さまはほとんど寝てないよ」

一晩中子守をしていたティダは、怠そうに座椅子の背に体を預け
ると、眠気覚ましのつもりなのかスパスパ煙草を吸う。

窓の外からは、朝日が覗きすつかり明るく夜は明けていた。

ハル達の話し声に気が付いたのか、ポツポツと子供たちが起きて
きた。

これだけの数の子供たちが、無言でティダとハルを、縋るような
目で見つめている。

とりあえず、僕のできる事を……始めますか。

「えっと、皆さんおはようございます。」

まず自分の布団を片づけて、顔を洗ってお着替えをしましょう」

ワイワイと子供たちと布団を畳んでいると、SENがこっそり部
屋を覗くのを発見。

ティダがSENをボコった後、おねしょした子（他にも6人いた）
を風呂に入れるように命令する。

その後、館の娘たちも起きてきたので、子供の世話は任せて、ハ
ルとティダは厨房に向かった。

高級娼館にしてはそれほど大きくない厨房、それを取り仕切る料理人は、主に高級娼婦や客に出す料理担当、その弟子がまかないで子供たちの分まで食事を作るそうだ。

すでに朝食用のご飯が炊きあがっていたので、ハルはそれで一品作ることにする。

「この食事、酒のつまみには良いんだけど……塩を使いすぎるんだよね。」

料理にトマトっぽいのが使われていたから、子供が大好きなメニューの料理を作ろうと思います」

「えっと、お姉さまは何を手伝えばいいのかな？料理は全然できないんだけど」

ドンと台の上に置かれたのは、おなじみのドラゴンクレスト（竜兜）、ハルはその中に刻んだトマトとニンニク、他の調味料を投げ込む。

「僕がドラゴンクレストをしっかりと支えていますから、ティダさんはメイスで具材をかき混ぜながら『稲光竜巻』の技をかけてください」

「それって、まさかハルちゃん、武器をハンドミキサー代わりに使うつもり？」

『稲光竜巻』の技とは、文字通り電圧による加熱にトルネード回転を加える攻撃技。

いつも鍋代わりになっている竜兜リオンヘルムを使えば、技が外に漏れ出さず、フードプロセッサー状態になるとハルは言う。

しかし、愛用のメイス（鈍器）を、トマトとニンニクまみれにするなんて、ティダの戦士としてのプライドが許さない。

ハルは瞳を爛々と輝かせ、さつさと手伝えと言わんばかりに、鍋をティダの目の前に突き付ける。

「ハルちゃん……このメイスでゴブリンの頭を力チ割ったりしたんだけど」

「お湯も準備してます、煮沸消毒で殺菌すれば大丈夫。早くしましょう、みんな、お腹空かせてご飯を待ってますよ」

料理オタクのハルには、何を言っても無駄だろう。ティダは諦めて、メイスをグツグツと煮て煮沸消毒した後、トマトの中にメイスを突っ込んだ。

厨房から、鼓膜を破るような爆音と暴風が吹き荒れ、建物自体をビリビリ揺さぶった。

そうして出来た「手作りトマトケチャップ」を、ハルは満足そうに眺める。

「さて、朝ご飯作りに取り掛かるうか。みんな、手を洗って待って下さい」

SENは、風呂に入れて綺麗になった子供たちを連れて部屋に戻ろうとしたところで、二人の娘と風呂に向かう竜胆を鉢合わせする。彼女たちは、昨夜の閨での激しさが伺えるような色香を放ち、半巨人の王子はスッキリして元気澁刺、鋭気を蓄えた状態だ。

「おはよう王子様。チツ、一人だけイイ思いしやがって」

「さすがの神科学種も、ガキには振り回されっぱなしだな。
俺も、前に『王の影』にはめられて、1週間子守をさせられたよ。
しかし……その時より捨て子の数が増える」

そうなのか？とSENは呟くが、目のやり場に困る娘達の姿に、
竜胆へ嫌味の一つでも返したくなる。

「それにしても綺麗な娘二人を相手にするなんて、王子様は随分と
お盛んだな。

リア充禿げろ」

「巨人の相手に、人間一人だと抱きつぶしてしまう。俺だと二人で
ちようどいい具合だ。

何妬んでるんだ、SENも毎日綺麗どころをハベラしてるじゃな
いか。

あれだけ美しいエルフの相手ができるのは、終焉世界では王ぐら
いのものだ」

なんだ、今、空耳がしたぞ。

綺麗どころはハベラす？美しいエルフ？ってアレのことか!!

「えっ……待て、それは変態紳士のハートが砕け散りそうな勘違い
だ。

俺はロリや猫娘までが範疇、サクユバスも追加オーダーしよう。
しかしびーえるはジャンル違うし、そもそもあいつエルフだぞ」

「エルフと人間で付き合うって、そんな珍しくないから気にするな
よ。

乱暴王はもっと凄いで。

ハイエルフを側室にするし、第十七位王子は巨人とエルフのハイエルフだ」

猫人族とハイエルフ、それにエルフと巨人のハイエルフだと！！そんな俺も知らない設定があるのか？

廃プレイヤーとして、ゲームすべての謎を解き明かし、極めたハイエルフの終焉世界。

しかし実際には、ゲーム設定と異なる点が多すぎる……っつか、仲間にも重大な秘密があったのか。

「無知は罪」それがSENの信条だ。

この世界の情報を得る一番の方法は、やはり『王の影』に取り入るしかないだろう。

二人の立ち話も長くなると、空腹に耐えきれなくなった子供がSENをせかし始めた。

慌てて話を切りあげると、SENと子供たちは食堂へ向かう。

その子供の後姿を、竜胆は憐れみをこめた目で見ていた。

鳳凰小都は、強いものに守られなければ、あっという間に喰いつくされる弱肉強食の世界。

最下層の猫人族は、獣に近い分、この街でも生き延びる生命力がある。

一番の犠牲者は、親に捨てられた力の弱い人間の子供だろう。

そういえば、誰からも手を差し伸べられることなく、弱肉強食の世界を生き延び、醜い獣になったハイエルフ王子が居たな。

この騒動にヤツも関わっているという噂も聞くが、『王の影』が動いたなら、それも納得できる。

険しい顔つきになった竜胆の腕に、娘たちの細い腕が絡む。

「どうか、気を落とされずに。」

私たちは、竜胆様や皆様がコノ街を救ってくださると信じてます」

一瞬だけその瞳は潤んで見えたが、すぐ艶めいた猛々しい色に戻ると、娘たちの腰を引き寄せ湯殿の中に消えた。

ジューシーなトマトと、ふわつとした半熟卵の優しい香り、ガリリツクのスライスが食欲をそそる。

テーブルの上には、みんな大好きオムライス が並べられている。トマトケチャップで描かれたスマイルマークに、子供たちが声を上げて笑い出す。

「ご飯は炊けていたので、トマトケチャップと合えてオムライスを作りました。」

これなら、子供でも好き嫌いなく食べてくれるでしょ」

「まあ美味しい。以前YUYUさまがお作りになった、ライスがベチャベチャして卵が焦げて苦くなっていた「おむらいす」とは比べ物になりません。」

これが本物の「オムライス」なんですね」

「もぐもぐ……何気に罵詈雑言ですね。ポムライスと言って下さい、ポムライスと。そういう新たな発見があつてこそその創作料理の醍醐味でもあるのですよ。」

それにしても、ふわとろ卵焼きのテクニクまで習得していると、さすが女神の力を授かるだけありますね」

「ハルちゃんの料理の腕に、女神は関係ないよ。
というか、どうして『王の影』と巨人王側室という高貴な方々が、
子供と一緒にオムライス食べているのかな？」

いつの間にか、子供たちに混じってYUYUが何の違和感もなく
オムライスを食べていた。そんなYUYUを探しに来た水浅葱が見
つけて、彼女もちゃっかりオムライスを御馳走になっていたのだ。

「神科学種のコックが作る料理が絶品だという報告がありました。
是非一度、リアルの世界の料理を食べてみたいと思っていたので
す。まさかコックがハルさまだったとは、驚きですわ」

そんな、庶民くさい話まで『王の影』は把握してるのか。
それは水浅葱の読心能力で、誰かの心を読んでもたらされた情報
かもしれない。

「水浅葱さん、ハルちゃんの料理をお好きだけ召し上がってくだ
さい。」

実は、貴女に是非協力してもらいたいことがあります」

いきなりテイダに丁寧語で名指しされ、戸惑った水浅葱はYUY
Uに判断を仰ぐ。

『王の影』はオムライスを食べ続けながら、こくんと小さくうな
ずいた。

「神科学種さま、直々の御指名を受けるなんて感激です。

さて、私は何をすれば良いのでしょうか？」

「貴女に、ココに居る子供全員の生い立ちを読んでもらいたい。」

幼い子供たちは自分の年齢、それどころか自分の正しい名前すら知らないモノもいる。

貴女の力を借りれば、親の顔や名前、住んでいた場所も把握できるはずだ。

そして、もし親が健在なら親元へ帰してやる」

ティダの言葉に、水浅葱は語気を強めて抗議した。

「そんなの子供たちが可哀相です！！」

捨てた親元へ返せば、再び同じ目に会うかもしれないのに」

「奴隷商人に子供を売ったりせず、巨人王の娼館に捨てれば飯ぐらい食わせてもらえるだろうと、この館を選んだ僅かな親心に賭けたい。

子供を捨てるまで親が追い込まれる、この鳳凰小都の状態が異常だと思う。

帰した子供が暫らくマトモに生活できる援助と、親にはキツめの調教を加えて、二度と捨てる気の起こさないようにしよう」

でも、と、躊躇う水浅葱に、ティダは言い聞かせるように話す。

ティダが鳳凰小都に入ってから不機嫌だったのは、子供たちを気に病んでいたのだ。

口の周りにケチャップが付けたままのYUYUが立ち上がると、水浅葱の背中を優しく撫でる。

「あと数か月もすれば、厳しい冬が来るでしょう。そうになったら、今より更に酷い状況になります。

ここはティダさんに協力して、とりあえず子供たちを親元へ帰してあげましょう」

「YUYU様がそうおっしゃるのであれば……協力いたします。ただ、二十人もの読心を行うには、私の精神負担も大きいのですよ。」

YUYU様、それなりのご褒美を オヤクソク してもらいますからね」

「そ、そんなに何度もご褒美はないですよ。」

あ、あまり多くご褒美をやると、楽しみが慣れてしまいますから、それなりの成果を出した場合のみ約束します、か、勘違いしないようにっ」

水浅黄の一言に『王の影』は、何故か頬を赤く染め、恥ずかしそうに返事した。

アレッ？上下関係逆転してるような……約束したご褒美ってなんだろう。

クエスト27 剣舞を披露しよう

鳳凰小都の中央に、豪華絢爛な六層六角の建物がそびえ立つ。

極彩色の鳳凰の彫刻と宝石を埋め込まれた柱、全ての壁と屋根瓦が金箔貼り、この街の支配者である巨人族の第七位王子 青褐あいかちの『鳳凰館』だった。

巨人族の住む建物は人の建物より全ての造りが大きく、鳳凰館の最上階の寝所から街を一望することができた。

豪華な建物の最上階、寝所の中央で、巨人は仰向けに倒れている。大きな肉の塊は血の気が失せ、手足を激しく痙攣させて、その振動は部屋をガタガタと震わせる。

第七位王子 青褐あいかちは、巨人族でも飛びぬけて巨体の持ち主だ。

配下の者はその巨体を動かす事ができず、白目を向いて横たわる主を遠巻きに眺めるだけだった。

下の階から幾人かの声が騒がしく聞こえ、階段を駆け上がる足音がした。

「兄上どうしたのです、お体の具合が悪いと伺いました。

ああ、何ということだ！！今、弟の紫苑しおんがお助けします」

そこに現れた人物は、光り輝く金色の髪に蒼い神秘的な瞳、スラツと高い鼻梁、見た者が言葉を失うほど整った顔立ちの男。

人とは異なる長身、だが、巨人族にしては線が細すぎる。

一番の際立つ特徴は、透けるような白い肌と細長く尖った耳だった。

巨人とエルフのハーフ 第十七位王子 紫苑しおんは、倒れた巨人に駆け寄ると、懐から紙に包まれた紅い丸薬を取り出す。

「この紫苑しおん、兄上から譲られた鳳凰の血を用いて、秘術を行い精製した不老不死の丸薬をお持ちしました。

エルフ族の秘術であるコノ薬を服用すれば、衰えた体は一瞬のうち二十歳の若者へと回帰するでしょう。」

紫苑に差し出された薬を、第七王子を介護していた男が受け取り、横たわる巨人の口元に持つて行く。

だが口を閉じたままの王子に、介護人は指示された通り、その口をこじあけてようと触れた……

「青褐あいかちさま、お薬でございますよ。呑み込んで ヒイツ、ギヤアアアアア！」

ギチャリッ

介護人が丸薬を直接に口に押し込もうとした途端、第七王子はその手に噛みつき、丸薬を持っていた指ごと喰い千切った。

悲鳴を上げて、指先から大量の血を流した打ち回る男を、寢室を警備していた兵は、眉を顰めながらも引きずり出す。

王子がゴリゴリと薬と指を咀嚼する音が部屋に響き渡る。

配下の者は誰一人表情を変えず、その様子を見守っている。

白目をむいて口から涎を流し、獣のような唸り声が漏れ、だらりと横たわっていた第七王子。

与えられた丸薬を飲み、数分もすると眼球がギョロギョロ動きだし視線が定まった。

全身から油汗が噴出し、でっぷりと弛んでいた肉がみるみる引き締まる。

土気色に近かった肌は、血の通った、張りのある健康的な浅黒い

肌に戻り、ブルドックのようにたるんだ顔の肉が引き締まると、巨人族の精悍な顔立ちになった。

主の急激な変化に、周りの者から、思わず感嘆の声が上がる。

「おおつ、こ、これは凄い！！」

体が軽く自由に動くぞ。全身から力が湧き出てくるようだ。

紫苑、お前のペテンに引っかけかかって鳳凰を渡してしまったかと心配したが……本当にエルフの不老不死薬を作れたのだな」

意識を取り戻した巨人は、脂汗にまみれた服を脱ぎ棄てると、傍で待機していた下女が濡れた布で体を清める。

乱暴王が十代で生ませた 巨人族 第七王子 青褐あいかちは、王子の中でも一、二位を争う巨漢だった。

だが、五十代後半でも生氣あふれ衰えを知らぬ王に対し、第七王子は飽食と快楽に溺れ、四十才で肉体が老化の兆しを見せた。

若く力のある王子達と比較され、第七王子は巨人族の次期王後継争いの候補に数えられず、誰からも無視されていた。

「巨人族の中でも、飛びぬけて立派な巖のように逞しい体は、真の巨人王の証。

いつまでも王座にしがみ付く、老いた貧相な乱暴王とは比べ物になりません。

武勇は野蛮な証、知識は軟弱者の証、次期王に相応しいのは兄上でございます。

その御姿を、愚か者たちに、終焉世界に知らしめるのです」

完璧な美を持つ紫苑が、まるで王に接するように褒め称える。それは第七王子の自尊心を増越させた。

「ところで兄上、鳳凰の替わりに住み着かせた死黒鳥は役に立つて
ますか？」

第七王子の首から下げられた笛は、鳳凰小都空を我が物顔で飛び
回る、黒死鳥を操る魔笛だった。

死黒鳥は光物を収集する癖のある鳥で、人を襲うことも躊躇わな
い。

「ああ、高級娼館に上客が来たという報告があったな。

そろそろ鳥どもに仕事をさせてやろう。

それに、金が足りないという連中を黙らせるために、来週か
らミリオン紙幣を印刷することにした。

お前のおかげで、俺はこんな僻地エリアに押し込められても、贅
沢三昧で暮らせる。

俺が王になった暁には、他の王子を肅清して、お前を右腕として
重用してやるぞ」

紫苑は、床に額を擦りつけるほど平服すると、呼び寄せられた五
人の高級娼婦と入れ替わり、第七王子の寝室を出た。

優美な美貌に笑みを張り付かせたまま、鳳凰館を出ると、待機し
ていた王族専用の人力車に乗り込む。

「本当に愚かなヤツだ、高級娼館エリアの上客が誰なのか判ってな
い。

欲に駆られ、相手も知らずに『王の影』を敵に回すことになるん
だからな。

アマザキ、これから面白いモノが見られるぞ」

ハーフェルフの王子は凍るような冷たい笑顔を浮かべ、座席の奥

に控えていた者に声をかけた。
その者は、歌う様に返事をする。

「世界は紫苑さまの思いがままです。
巨人の支配する薄汚れた終焉世界を、
予言通り破滅へと導きまし
よう」

高級娼館とは名ばかり、孤児院状態の「完熟遊誘館」^{かんじゅくゆうゆうかん}。
その娼館の前、高級娼館エリアの大通りで、幼い少女が金の髪を
なびかせながら、双剣を振るい剣舞を踊る。

『王の影』が、巨人王の前で披露した萌黄の剣舞を見たいと言っ
たのが始まりだった。

店前で余興に披露したのが「巨人王お抱えの天才剣舞少女」の噂
に、舞を見るためだけに娼館を訪れる客が殺到した。

目の覚めるような赤い着物を着た少女が宙を舞い、二本の剣の軌
跡が煌めきながら光の帯のように少女を取り囲む。

見えない敵を薙ぎ払うような、無駄のない華麗な舞に、集まった
やじ馬達は魅入られたように釘付けになった。

激しく美しい剣舞が終了すると、客が投げたおひねりの宝石や金
貨を雨のように降り注ぎ、これを青い髪の少年が、何故か竜兜を持
って一つ逃さずキャッチする姿も、この出し物の名物になっていた。

「萌黄ちゃんお疲れさま、本日も大入り満員、明日の食費を稼げました」

「えへへ、ハルお兄ちゃん。今夜は エビフライのタルタルソースがけ を食べたいな」

ドラゴンクレストの中にジャカジャカ入った宝石や金貨、そしてピヨコ紙幣。

小さな子供たちも手伝いで、ハルに金貨や宝石の数え方を教わりながら、本日の売り上げを計算する。

この実益を兼ねた方法で、子供たちはあつと言つ間に足し算引き算を習得していた。

鳳凰小都の娼館では紙幣しか使えない決まりだが、超インフレ状態のピヨコ紙幣を欲しがるものは殆どいない。

紙幣の代わりに、チップやお手当という名目で、宝石や金貨が流通していた。

ただ貧しい殆どの人々には、宝石や金貨を入手する手段も限られてる。

身を売るか、犯罪に走るしか道は残されてなかった。

そんな中で萌黄の剣舞は、正に「芸は身を助ける」の典型的な成功例だ。

「萌黄を先生にして、この館の子供達に剣舞を仕込もうと思います。ただの遊戯ではなく、剣舞の動きを習得することで、物騒な鳳凰小都で生きる護身の技も身に付けられるでしょう」

何の違和感もなく、子供たちの中に混じって小銭を計算している YUYU。

晩ご飯のエビフライと一緒に頂こうという魂胆だ。

「はいYUYUさま、みんなで踊れるように、萌黄頑張って踊りを教えます。」

「ただ、ハルお兄ちゃんは踊りがとても下手で、すぐ怪我しちゃうから、みんなと別々がいいです」

「ヒイ、萌黄ちゃん、僕の面目丸つぶれな事をハッキリと断言するなんて。」

「ハルたちが『完熟遊誘館』^{かんじゅくゆうゆうかん}で孤児の世話をして一週間が過ぎた。二十八人いた孤児のうち、親元に帰せたのは十一人だった。」

「そして十二歳以上の五人は、成人前の見習いとして館で働くという。」

「それでも、館に子供を捨てていく親は後を絶たないだろ。」

「根本的な問題は、孤児を保護する役目を持つ、鳳凰女神聖堂がある状態だからな」

「SENが館の警備の休憩時間に、一服するため食堂に入ってきた。」

「SEN、持ち場を離れるには一分三〇秒早いですよ。ペナルティとしてエビフライを一本減らします」

「初対面の互いのイメージが悪すぎて、犬猿の仲になった二人。」

「SENの姿を見ると『王の影』は必ずイチャモンを付ける。」

「それを無視することが出来ないSENは、歯ぎしりしながら言い返す。」

「エビフライのカロリーって70kcalだったな。」

「どっかの誰かさんは、体が重くて背中羽根では飛べないんだろ。」

毎日館でダラダラしてハルの旨い料理食べてたら、さらに太っちゃうぞぞ」

だ、誰か……この人たちを止めてっつ

「ククツ……SEN、その暗い服装の同等に暗い台詞しか吐けないデリカシーも皆無な方ですね。さぞモテずに自分に酔っている私生活が見えますよ……」。

まあ、それはさておき、確かに、鳳凰女神聖堂は信仰の場としての役割を全く果たしていません。

だがこれは、巨人族の陣営に居る私は口出しできません。

彼らを戒めることが出来るのは……女神の使徒である、神科学種だけなのですから」

数日前、ハルたちは鳳凰小都の女神聖堂を訪問したのだが……

そこは安っぽいお色気グッツや媚薬を販売している「恋愛成就」の占いの館だった。

ミゾノゾミ女神像は、巨乳グラビアアイドルのようで、紐水着にM字開脚の悩殺ポーズで佇んでいた。

あんな聖堂に子供を預けるより、まだコノ娼館の方がマシだ。

睨み合う二人をそのままにして、夕食の準備に取り掛かろうと厨

房へ向かうハルは、急に暗くなった窓の外を見た。

「あれ？凄く黒い雨雲だな……なんだ、羽音が、様子がおかしい」

鳳凰小都の空を埋め尽くす黒い物体。

飢えた狂暴な数百の死黒鳥の大群が、一件の高級娼館を目指して飛んでいた。

クエスト28 影分身で戦おう

『鳳凰』

それは徳の高い王よる平安な治世の証。真の霸王出現を知らせる瑞獣ともいわれる。

ツルの様な長い首に、体は五色絢爛な色彩で、羽には孔雀に似て五色の紋がある。

その鳳凰が、鳳凰小都の空から姿を消して二年が過ぎた。

今、小都の空を埋め尽くすのは、体長50センチ、翼を広げれば1メートルを越え、額に魔力の源である”蒼珠”^{マナ}が埋め込まれた、禍々しい黒色の羽を持つ狂暴な厄鳥『死黒鳥』

死黒鳥は、定期的に討伐しなければ、ネズミ算式に増え続けるモンスターだった。

しかし鳳凰小都で、金にならないモンスター狩りに時間をつぶす暇人は居ない。

死黒鳥の天敵である鳳凰が姿を消し、数年かけて数を増やした厄鳥は、今や鳳凰小都の真の支配者と言っても過言ではなかった。

鳳凰小都の高級花街エリア、そこで営業する娼館の窓には、美しいデザインの頑丈な格子が嵌められている。

仕事を嫌がる娼婦が逃げ出さない為の、しかしそれ以上に、頻繁に高級花街エリアを襲う死黒鳥の襲撃から身を守るためだった。

獣なら、腹を空かしていれば身近な獲物を狩る。しかしこの死黒鳥は、いくら飢えていても、肉より光りモノを求め、高級花街エリ

アに現れた。

空を埋め尽くす何百の厄鳥、窓の外を食い入る様に眺めていた八ルに、厨房の料理人は声を掛けた。

「来やがったか、奴らは忌々しいことに鳥の癖に知恵が回るんだ。死黒鳥一羽でも傷つけたり殺したりすれば、小都の上空に居る数百羽の仲間が一斉に襲ってくる。」

人間は館に立て籠もり、死黒鳥に手出しせず光りモノを与えて、立ち去るまで大人しくしておくのが一番の方法なんだ

しかし、月の頭に死黒鳥の襲撃があつたばかりなのに、十日も空けずに襲ってくるなんて変だな？」

館の中も蜂の巣をつついたような大騒ぎで、肌襦袢に乱れ髪の高級娼婦たちが、慌ただしく客を安全な奥の部屋に案内している。

猥雑とした鳳凰小都の中にあつて、高級花街エリアだけは格式のある洗練された建物に、美しく整備された街路樹の緑が映える。

そこに住まう高級娼婦たちも、一流の着物や装飾品で身を飾り、品のある佇まいと磨き抜かれたテクニクで男達を籠絡させる。

自然とエリアに集まる人々は、高価な貴金属を身に着けた富裕層に限定されていた。

それは、光モノを好む死黒鳥にとっても、格好の餌場だった。

大通りを歩いていた人々は、死黒鳥の群れに気付くと慌てて身近な館の中へ避難した。

各娼館の入り口の扉も、死黒鳥の襲撃に備え頑丈な格子で閉じられる。

しかし、中には初めて高級娼館エリアを訪れ、何も知らず逃げ惑う人間も居る。

果物を積んだ重い台車を引いて、初めてエリアを訪れた果物屋店主は、厄鳥の姿を見てパニックになった人の波に巻き込まれ台車を倒される。

苦勞してココまで運んだ果物が地面に散らばり、逃げ惑う人々に踏み潰され、啞然となって立ち尽くしていた。

男に向かって、逃げる と警告する声が響き渡り、慌てて周囲を見渡すと空から黒い影が降りてくる。

急いでココから逃げよう踵を返すと、背後からか細い女の悲鳴が聞こえ、倒れた台車に挟まれて身動きのとれない美しい娼婦を見つけた。

「ひい、いたい……たすけて、誰か助けて、動けない」

「おい娘さん大丈夫かい、さあ早く逃げるんだ……足を怪我したのか？」

小太りの果物屋主人は、娘を台車の下から引きずり出した。

座り込んで動けない彼女を背負おうと近寄る、その背後に、獲物を見つけて急降下はじめた黒死鳥が迫っていた。

果物屋主人は普段は地味な綿のシャツ姿だが、高級娼館エリアに入るため、宝石の縫いこまれた一張羅のベストを着ていたのが災いしたのだ。

死黒鳥のターゲットになった初老の男が、無残に襲われ喰われる場面を誰もが予想した。

「ここはワシが食い止めるから、あんたは這ってでも逃げなさい。」

雷いかすちよ集え鳴り響け 稲妻鷹落

小太りで白髭の、初老の果物屋店主がエプロンのポケットから取り出したのは、高位神官が携帯用に持ち歩くキセルを模した最高級呪杖だった。

死黒鳥が獲物に喰らいつく寸前、男は高速呪文詠唱を唱える。

黄色い火花が杖の先から膨れ上がると、その瞬間飛び散って、死黒鳥は電撃を纏った杖に貫かれた。

「うわああ、あのジイサン何やってんだー！！死黒鳥に攻撃しちまったよ」

「怒った鳥どもは、光りモノだけじゃ満足できなくて、腹が膨れるまで人間を喰らい尽くすぞ」

上空を旋回していた黒鳥の群れは、仲間が殺されたコトを感知すると、一つに塊のように渦巻きながら男に襲い掛かってきた。

娘が館の中に逃げ込んだのを見届けると、果物屋店主は覚悟を決めたかのように空を仰いだ。

そこへ、館から鍋のような物を抱えた、青い髪の少年が飛び出してくる。

ドラゴンヘルムの中身、萌黄が剣舞を披露して得た大量の宝石や金貨を、惜し気もなくソノ場にばら撒いた。

本物の輝きを放つ宝石や金貨の一つ一つが地面を転がり、肉より光モノを好む死黒鳥の狙いが男から逸れる。

「おじさん、早く僕の後を付いてきて。今のうちに逃げるよ」

小太りの店主に声を掛けたのは、一週間前に彼の店で銀貨でリン

ゴを買った少年だった。

ギアアギアと煩く喚きながら光りモノを拾う厄鳥の間を縫って、果物屋店主は少年に手を引かれながら、一件の館に逃げ込んだ。

「くそつ、数が多すぎる！」

孤児の親探しに留守しているティダと竜胆の奴が居てくれれば…

…」

小太りの男を助けて、館の中に逃げ込んだハルと入れ替わりに、SENは外へ飛び出す。

それはあまり使いたくない能力だが、敵から高級花街エリアすべての人間を守る為に人数不足を補わなければ、背に腹は替えられなかった。

黒衣の武士は、袂から三枚の人型の札を取り出すと額に翳す。

「我が真の姿を見るものは有であり皆無

見えなき闇夜よ、辺りを覆いつくし彼の者を惑わせん 黒霧 幻

想影分身！！」

SENの体を取り囲むように黒い霧が噴き出すと、透明な水に墨を垂らしたかのようにジワジワと闇が辺りを包む。

宝石を奪い合って争う死黒鳥たちが気付く頃には、その場は真黒の霧に呑み込まれていた。

「フフフツ、我は闇夜の深遠より生まれし者SEN。
愚かな獣どもよ、我「闇夜の剣聖」最終奥義を用いて、傀儡の刀
の錆にしてやるう」

(電波語訳：武士最上級スキル 影分身で倒す)

そこには鋭く研ぎ澄まされた雰囲気の、同じ姿形をした黒衣の武士が三人、刀を構えて現れた。

「このような化け物に、我の刀が触れるのも汚らわしい。

雷神よ、邪を薙ぎ払え！稲光紫冥燕月」

SEN1号は、刃先から放たれた雷は扇状に電撃を発生させ、死黒鳥は飛び立つ前に雷に打たれて絶命する。

「ほう、やるなあSEN1号、では俺も試し切りさせてもらおうか。
蝶天剣 六方切り！！」

SEN2号の刀が、ヒラヒラと蝶が舞うような軌跡を描きながら、
周囲六方向の敵を切り刻む。

「アタイも張り切るピョン 悪いモンスターはお仕置きだピョン
火炎車 閃風突！！」

SEN3号の突きだした刀の先に真紅の炎が浮かび上がり、炎は
地を這う車輪のように転がって、残りの死黒鳥をすべて焼き払った。

宿の入り口を守るように待機しているハルの傍に、子供たちを地
下に避難させていたYUYUが戻ってきた。

神科学種の赤い右目は、SENが発生させた黒い霧の中を覗き込むことが出来る。

ハルとYUYUには、闇の中の戦闘の様子がすっかり見えた。

三人のSEN、彼の影分身が、霧の中に閉じ込めた数十羽の死黒鳥を切り刻んでいる。

しかし目が覚めるような素晴らしい無双な活躍も、突っ込みどころ満載の影分身がオジャンにしていた。

そのバトルを眺めながら、ハルの隣に立つYUYUがボソツと呟いた。

「今、ピヨン って聞こえたが……」

「あつ、そ、それはSENさんのサブキャラ白ウサちゃんの口癖です。」

ウサ耳コスプレの可愛い子なんですよ。

き、きつと久々の影分身で、うっかりサブキャラ口調が出たんだと思います」

例え使い捨てサブキャラでも、成りきり（ロール）プレイは譲れないと断言していたSENさん。

でもダメだよ、痛い、痛すぎる……！

ここでカツコいい所を見せて、YUYUさんに認めてもらおうチャンスだったのに……

黒い霧が晴れると、三人のSENの立つ地面はおびただしい獣の

血で真つ赤に染まり、死黒鳥の亡骸で埋め尽くされていた。

だがこれは、上空を埋め尽くす数百の死黒鳥のほんの一部にすぎない。

仲間の死に怒る厄鳥の群れが、まるで数十本の黒い竜巻の柱のように、高級花街エリア上空に現れる。

厄鳥の不気味な羽音が、大地を震わすほど音をたてて、人々は窓から恐る恐る上空を眺めていた。

YUYUは館の外に出ると、足元の死骸を器用に避けながら大通りを横切りSENに近づいた。

「死黒鳥は、数十万の群れを形成することも可能です。

今ココに集まっている死黒鳥に、仲間を呼ばれてはやかいです。一匹も残さず刈り取りましょう。

できるだけ高い場所から、鳥を攻撃する必要があります。

SEN、館の屋根まで私を抱えて運びなさい」

「え〜っ、あんたを連れて運ぶピョン？アタイめんどくさいピョン」

「ここで一番高いのは、完熟遊誘館かんじゆくゆうゆうの裏にある物見やぐらだな。

俺たち二人が地上から援護射撃をする、SEN1号はYUYUをそこまで運んでくれ」

「ああ、了解した。では王の影よ、我が半身達が鳥の注意を惹きつけている間に、我と共に参ろう」

ナイスチョイス、一番マトモな影分身でよかった！！ハルは心の中で叫んだ。

SEN影分身さん、ここで少しYUYUさんと親睦を深めてくだ

さい~~~~

SEN1号はYUYUを片手で優しく抱きあげると、建物の壁面を、まるでロクククライミングのように軽々と登り始めた。

その姿に気付いて襲ってくる鳥をSEN2号が手裏剣で、再び増え始めた死黒鳥を、SEN3号が楽しげにチャクラムを投げ次々と仕留めてゆく。

「…………絶対零度の氷の聖霊よ、太古より…………約束されし印の元へ集え」

壁を登るSEN1号に抱えられながらも、YUYUは攻撃呪文詠唱を開始していた。

細い腕に握られているのは、モリア銀、伝説のミスリスで作られた魔弓『弓張月』

「大気に満ちる…………空気よ、凍て尽くせ…………」

SEN1号は、腕の中で長い呪文を唱え続けるハイエルフの魔力が高まってゆくのを感じ取れる。

複雑な術式を幾重にも言霊に乗せ、巨大な力を得た魔弓が、眩いばかりの銀色の輝きを増し始めた。

物見やぐらの上に到達する、静かにYUYUを降ろし、SEN1号は王の影のガーディアンとなり、群がる鳥を叩き落とす。

王の影は手に持つ魔弓、魔力を注ぎ込むことで実体化させた氷の矢を番え、弦を引きしぼる。

「極寒の息吹…………白き世界…………閉じ込めよ」

突如、高級花街エリア内の空気が急激に下がり、冷気が上空に向かって噴きあげる。

薄い氷の膜で覆われたかのようなドーム状の結界が、高級花街エリアの空全体に張り巡らされ、すべての厄鳥を囲い込んだ。

風にあおられバランスを崩す鳥の群れの中へ、王の影は凍てつく蒼い炎を纏った氷の矢を放つ。

「我が命を糧とし、彼の者を打ち砕け！！零 氷 裂 殲 塵」

魔矢が一羽の死黒鳥に刺されると、その贅の命を糧として空中に巨大な魔法陣が展開される。

絶対零度の氷属性魔法陣は、その陣内に居る百近くの獲物をすべて凍らせた。

続けざまに数発、氷の魔矢が死黒鳥の群れの中に撃ち込まれた。

汚れた黒で埋め尽くされた空を、蒼い光を放ちながら絶対零度の氷の魔法陣が次々と花開く。

Y U Y Uの魔弓は、広域破壊に特化された殲滅“兵器”のようなもので、一度発動すれば魔力が尽きるまで獲物を屠り続ける。

数百の死黒鳥は一瞬のうちに氷の彫刻と化し、硬直したまま地面に落ちると、鋭い音を立てて砕け散った。

力を使い果たしたY U Y Uの体がよろめく。背後のSEN1号に支えられ、やぐらの床に腰を下ろした。

影分身は隣で膝を折り、まるで貴人に傳くように恭しく『王の影』に頭を下げる。

「これほど間近で、最高位魔弓の呪攻撃魔法が見られるとは、何という僥倖。

王の影、いやYUYU姫とお呼びすればよいのかな。

稀有な技を見せていただき感謝する。では我は消えるが、姫の御武運をお祈りする」

普段のSENから電波臭が除かれ、イケメン度が3割増の影分身は、次第に半透明になってゆく。

YUYUは腕を伸ばしてその顔に触れようとするが、指先は空を切る。

「世話になりましたSEN1号、いや『闇夜の剣聖』。また会いましょう」

地上でも、影分身たちの術が解かれようとしていた。

「今日は疲れたピョン さようならだピョーン」

：

3人のSENが光の粒になって消えると、影分身を解いたSENが頭をかきむしり苦しげに吠えた。

「うわあああー、なんでこの場面でウサ子とキザ男の影分身が出てくるんだあアア。

く、く、黒歴史だ。この記憶はデスノ、いやチラシの裏に書いて破り捨てるんだ！」

SENはパニックって奇声を上げながら、生き残りの死黒鳥を遠距離魔法で乱射しまくり、次々と撃ち落としていった。

クエスト29 蒼珠を手に入れよう

地上は傷ついた死黒鳥とその亡骸で埋め尽くされていた。

もはや飛び立つことは無理だろうと、SENは翼が折れ這いずりまわる死黒鳥を見逃してしまった。

その傷ついた死黒鳥は何かを探しているようで、虫の息で奇声を上げる仲間の鳥を見つけると、眉間めがけて鋭い嘴で突き殺す。

ガツツ ガツツ グチャリ グチャリ

頭蓋骨を割って中身をほじくり出し喰らうと、すぐ次の仲間を襲った。

それが合図のように、突如死黒鳥同士の共食いが始まり、SENが異変に気付いた時には、仲間を喰らい尽くした最後の一羽が変化へんげを始めていた。

ブクブクと急激に体が膨れ上がり、体が人間と同じサイズに、翼を広げると4メートル越えの怪鳥に化けた。

バサバサと巨大な翼を羽ばたかせ、怪鳥が空へと舞い上がる。

SENが慌てて攻撃魔法を放つが、巨大化した死黒鳥には大したダメージを与えられなかった。

「畜生、逃げ足が速い。仲間を呼ばれたらまずいぞ、今度こそ防ぎきれん」

怪鳥はSENの攻撃を振り切り、ぐんぐんと上昇すると高級花街エリアを包む氷の結界にたどり着く。

変化へんげで魔力をまとい強化された体で、結界に何度も体当たりを繰り返す。

魔力が尽きかけたYUYUには結界を保つことが出来ず、執拗な攻撃の末に結界に穴を空けると、死黒鳥は外へ逃げ出した。

物見やぐらの上で、疲労で座り込んだYUYUの目に、かんじゆくゆうゆう完熟遊誘館の屋上に必死で這い上がるハルの姿が映った。

追う死黒鳥は、すでに空の彼方、砂粒ほどの小ささだ。

ハルはガクガクと震える脚に気合を入れて、足場を定めて屋根の上に立ち上がる。

「下を見るな、見るな、ここは地面の上、頑張れ、僕はやればできる子だ！！」

気持ちを静め、女神の弓を番えると、空の彼方を飛ぶ獲物が”目前50センチ”を飛んでいるように見える。

相変わらずチートな弓だ、その対価として、僕の生命力を旨そうに喰っている。

バトルでスタミナを消耗して、射れる矢は一本限り。

傾斜のある不安定な屋根瓦の上で、ハルは不動の姿勢でゆったりと、優美な引きなりを見せる。

空気を切る。

鋭い音を立てて放たれた赤い矢は、まるで命を受けた使い魔のように獲物を追う。

あれは、女神の弓、そしてミゾノゾミ女神を神卸した巫女。

YUYUは弾かれたように疲れた体を起こすと、神科学種の赤い

右目の望遠機能を最大まで上げ、矢の行方を追う。

高級花街エリアなど軽く越え、鳳凰小都の中央、金色に輝く巨大な館に逃げ込もうとする黒死鳥。

その瞬間、ハルの放った矢は、寸分の狂いもなく怪鳥の頭部を仕留めた。

鳥を操る魔笛を手の中で弄びながら、第七位王子の青褐あいかちは、鳳凰館最上階から、街を見下ろすテラスに向かう。

高級花街エリアで略奪を楽しんでいるはずの死黒鳥が、一羽も戻ってこない。

痺れを切らして、外の様子を見るためテラスに出たが、ソノ風景を見て啞然とした。

「なんだあれは！？高級花街エリアの空に魔法陣が浮かんでいるぞ。俺様の街で、一体誰が、勝手に殲滅魔法を使っているんだ！！」

地上の人々が空を仰ぎ、鳳凰小都の五分の一を包み込む巨大な氷の境界と、蒼い花火のように次々と花開く魔法陣を指差し騒いでいた。

第七王子は苛立たしげに足を踏み鳴らし、その振動で建物全体が大きく揺れる。

しばらく眺めていると、やっと一匹、鳳凰館に向かって飛んでくる死黒鳥が見えた。

体が膨れ上がり、酷く傷ついてバランスを崩しながらも必死で飛

んでいる。

それを、宝石を喰って腹を膨らませたのだからと勘違いした第七王子は、魔笛を吹いて死黒鳥を自分の傍に招く。

軒に足をかけ、死黒鳥を捕まえようと手を伸ばした第七王子の目の前で、赤い矢が怪鳥の頭を貫き、飛び散った血糊が巨人の服を汚した。

「これが、真の女神の力……素晴らしい性能の最強チート弓。

あれほどの命中率を誇りながら、惜しむらくは『女神の弓』は暗殺に使用できない。

本当に残念、もったいない力ですね」

王の影は残念と呟きながらも、どこか嬉しそうな様子で、ガウンを脱ぎ捨て白い背中の羽根を露わにすると、フワリと物見やぐらの上から舞い降りた。

厄鳥の襲来が止み、建物の中に避難していた人々も様子見に表へ出てくる。

ハルは矢を放った後、バランスを崩し屋根から落ちかけて、悪戦苦闘の末やっと地上に降りてきた。

そして今、屈みこんで氷付けになった死黒鳥を興味深そうにマジ

マジと眺めている。

隣に立つSENは、このハルの行動にイヤな予感がした。

「痩せてガリガリ、骨と皮だけで出汁骨にもならないね。

ん？鳥皮ならどうか、焼き鳥用の鳥皮なら沢山取れそうだよ」

「ハル、俺に聞いているのか！！

これはどう見ても喰えねえから！？つか喰わないぞ」

SENのツツコミに一瞬悲しそうな顔をしながらも、ハルは諦めきれない様子で、死黒鳥の足を抓んで肉付きを確認してたりする。

しばらくは、ハルの料理に鶏肉が出たら用心して食べるのを止めよう……とSENは思った。

ハルは、鳥の首を持ち上げ光のない瞳を覗き込むと、死黒鳥の額部分、頭飾りの羽根に埋まる”蒼珠”を見つけた。

「ねえSENさん、これってもしかして。

とても小さいけど、砂漠竜の額に埋まっていた魔力の源”蒼珠”と同じモノなの？」

ハルは死黒鳥の首を落とす、まるで料理の下ごしらえをするような慣れた手つきで”蒼珠”を抉り出す。

それは小指の爪ほどの、小さな蒼い石だ。

SENは渡された”蒼珠”を手のひらで転がすと、魔力量を計る。

「こいつは3魔力くらいだな。

そうか、連中が共食いはじめたのは”蒼珠”を喰って魔力を得るためだったんだな。

ハル、お前の魔力量が37だから、この蒼珠12個分が同じ量になる」

「SENさん、凄いですよ!!」

ココに転がっている死黒鳥全部から”蒼珠”を取り出せば砂漠竜と同じ、いや、それ以上の魔力量^{マナ}が手に入ります」

「それはそうだが、ハル、この蒼珠をどうするつもりだ?」

ハルの言う事をイマイチ理解できないSENは、首をかしげながら訊ね返した。

「僕、オアシスの『奇跡の池』と『宿屋の水槽』の魔法陣2ヶ所では、まだ水場が少なく不便だなんて思ってたんです。

蒼珠があれば、オアシスの水場をもっと増やせるんですよ」

ハルは、何のためらいもなく、アイテムバックに死黒鳥の死骸を次々放り込む。

アイテムバッグは、80アイテム×37個(持ち主のレベル数)収納可能なので、大通りを埋め尽くす数百の厄鳥も鞆一つに納まった。

物見やぐらの上から降りてきたYUYUが、ゆっくりと二人に近づいてきた。

今の会話を聞いていたようで、興味津々でハルに話しかける。

「砂漠竜の”蒼珠”を用いて、鍾乳洞の泉に沈めた魔方陣からオアシスに水を転送してる。と報告で聞いていました。

ハルくんは、新たな水場を作るためには”蒼珠”が必要だと言っているんですね。

そしてダンジョン魔法陣は”蒼珠”の魔力^{マナ}でも起動する。ということなら……」

この終焉世界中に設置された108のダンジョンが、神科学種や魔力持ちの神官以外の者でも”蒼珠”を使用して開かれ攻略可能になる。

ダンジョン内の秘宝は、神科学種の失われた技術が用いられ、終焉世界の人間には手に余るモノばかりだ。

この事実が知られれば、古代エジプトの墓荒らしが横行した様に、神科学種のダンジョンもすべて盗人に暴かれてしまうだろう。

それは……まずい、この秘密を外に漏らしてはならない。

”魔法陣”も”蒼珠”も、すべて巨人王の元で管理すべきだと王の影は思った。

「ハルくん、もしその”蒼珠”が余ったら、残りはすべて私が買い取りましょう。

いえ、私よりも、巨人王権限の元”蒼珠”二個で銀貨一枚と交換できるようにします」

「本当ですか、YUYUさんありがとう!!

それなら、レベル上げ兼ねて死黒鳥狩れば一石二鳥になります。

二羽で銀貨一枚、二十羽で金貨一枚、萌黄ちゃんと組めば楽に稼げそうだ」

ハルは嬉しそうに答えると、はりきって回収作業を再開した。

一見、無邪気な天使の微笑みで、王の影はハルを見守っていたが、その心中は穏やかではなかった。

厄鳥すら、豊穰をもたらすモノに変えてしまうとは、まるで女神がハルの耳元で囁いているようだ。

コレが欲しい。

一度拒まれたが、どんな手段を用いてもコレが欲しい。

野放しにして、敵対する連中の手に渡る愚を犯す前に……

そして、私の願いを叶えるためにも……

女神の豊穡をもたらす神科学種の少年も、我が主君の元で管理する必要があるのだ。

翌日、王の影が巨人王の承諾を得て布告した『蒼珠の銀貨交換』は、予想外の動きを見せた。

貧窮していた鳳凰小都の人々が、金を得る手段として死黒鳥狩りに精を出し、代替通貨として蒼珠が流通し始めたのだ。

すると、ピョコ紙幣は更に暴落、ハイパーインフレを引き起こすことになった。

クエスト30 果物屋店主と話そう

「ありがとう少年、本当に助かった。アノ時はもうダメかと覚悟したよ。

それにしても…… たった一週間前に店で買い物した客が、娼館で働かされるほど身を落としてるとは。

体を売れば金は簡単に稼げるかもしれないが、今ならまだやり直せる。

キツくても真つ当な仕事を探したほうが良いぞ」

高級娼館「完熟遊誘館」かんじゅくゆうゆうかんの玄関間に、小太りに白髭の男が休んでいた。

怪我をして倒れた娘を助け、厄鳥の攻撃から庇った初老の果物屋店主だ。

果物屋店主は、現れたハルに礼を述べながらも何やら勘違いした様子で、両手を固く握り返しながら諭していた。

低く重厚なその声は聞く者の心に響き、ハウツ、何だか涙腺が緩くなって思わず懺悔したくなるような……

「お、おじさん、ごめんなーって違います！！そういうお仕事はしていません。

僕はココで、捨てられた孤児の世話や食事のお手伝いしてるんです」

不本意ながらも、ハルが必死で言い訳すると、果物屋店主は納得したようで手を放してくれた。

そこへ、死黒鳥から助け出した若い娼婦が、傷の手当てを済ませ姿を見せた。

少し足を引きずりながらも、元気な様子で男の元へ駆け寄り、何度も感謝の言葉を繰り返している。

そんな彼女の後ろから、小柄な少女、いや、目映いほどの美しさに身震いするほど神々しいオーラをまとった天使が、館の娘達を従えて男へと歩み寄る。

その姿を見た途端、初老に差し掛かった小太りの男は玄関の土間に平伏した。

「こ、これは『王の影』」。

巨人王 鉄紺陛下の第四位側室にあらせられるお方。

なるほど、先程の殲滅魔法は、鳳凰小都を穢す厄鳥を退治するため『王の影』自ら鉄槌を下されたのですな」

額を土間に擦りつめながらも、男の口調は淀みなく、きっぱりと真実を言い当てた。

その振る舞いは、ただの果物屋主人というより、貴人や神職者のようだ。

「ふふつ、下女を救ってくれた礼をと思いましたが、その男、私が誰か知っている様子。

高位神官の持つ携帯用呪杖といい、その高速魔法詠唱といい、二年前に鳳凰を盗人に奪われ神職を解かれた、ノロマで間抜けな鳳凰聖堂大神官そっくりです。

顔を挙げなさい。随分と太りましたね、黒鷲くろとび」

黒鷲くろとびと呼ばれた果物屋店主は、額から噴く出す汗を袖で拭い、苦笑いを浮かべながら『王の影』と向かい合った。

YUYUの言葉に、館の住人も男の顔を見て思い当たった様で「ああっ」とか「うわっ」とか感嘆の声を上げる。

「霊峰女神神殿から、神職をはく奪されたワシの名をまだ覚えてましたか、ありがたい」

「間抜けな大神官は、たかが鳳凰を奪われただけで責任を取らされ、その命令に抗する事もせず、女神神殿を辞してしまいました。」

それから二年……見事に肥え太って、随分と気楽な暮らしをするようですな。

果物屋を営んでいるようですが、肉屋の店主が向いているのでは？」

どうやら二人は顔見知りのようです。

YUYUさんの辛辣な言葉にも、某アニメのパン屋似おじさんは困ったように微笑みながら聞いている。

『王の影』と、果物屋店主『元 鳳凰女神聖堂大神官 黒鷲』が向かい合う場面。

そこへ、廊下手前の地下階段からパタパタと賑やかな足音が響き、地下室に避難していた子供たちが上がってきた。

好奇心旺盛な子供たちは、外の様子を見たがって玄関先に押掛け、黒鷲の前を通り過ぎる。大声を出したり走って騒ぐこともせず、きちんと躡けられ整然と外に出てゆく。

エリア転送ゲート前のバザーで物乞いをしてる子供と見比べると、皆、健康的な肌の色で髪はすっきり整えられ、清潔で綺麗な色の服を着ている。

これだけ大勢の子供たちが高級娯館に住み、世話を見てもらっているという違和感のある光景に、黒鷲は『王の影』に向き直る。

「巨人王御用達の娼館に子を捨てた。という話をよく耳にします。こちらで子供たちを保護して頂いていたのですね。」

ワシが皆になりかわり、巨人王 鉄紺陛下の御慈悲に感謝します」

だが『王の影』は、厳しい口調で返事を返した。

「黒鷲、善と倫理を説く貴方が辞めた後、他の神官たちは教えを歪めてやりたい放題。」

鳳凰女神聖堂は、人間の子供達を保護するべき務めを放棄して、ミゾノゾミ女神を穢し背徳の怪しげな商売に精を出しています。

こちらにとぼっ……いえ、こちらが聖堂代わりに子供を保護しているのですよ？

慈悲に感謝すると、よくも簡単に口にできますね。」

えっと、YUYUさんの話をまとめると、おじさんは鳳凰女神聖堂の大神官だったけど、今は果物屋店主になっている。

おじさんが辞めたあと、鳳凰女神聖堂は占いと媚薬で儲けに走り、孤児保護の務めを放棄してる。女神を穢した姿……あのM字開脚の女神像は、凄く恥ずかしいよね。

「それに私たちは、オメデタイ無償の愛で子供の世話をしてるわけではありません。」

子供に生き延びる知恵と護身術を身に着けさせる事、その中から特異な才能を開花させるダイヤの原石探し。

将来を見据え、巨人王の手足となる「知」と「武」に優れた子供を育てる、打算的な目的もあるのです。

だが、それにしても、人間たちは巨人王に頼りすぎます……」

そこまで話すと、王の影はお付きの者が用意した背もたれ椅子に

腰掛け、疲れたように目を閉じた。

YUYUさんは、あれだけ大きな殲滅魔法を行使した後で、実は起きているのも辛い状態かもしれない。

それでも無理を押しして、黒鷲と呼ばれる初老の男と対面するほどの重要事なのだろう。

僕はあまり力はないけど、鳳凰小都に来てから思うことは色々あった。

「おじさん、僕も巨人王の高級娼館が人間の子供たちを保護するのは、間違っていると思います。」

何人かの子供たちは親元に帰したけど、また今日も二人の捨て子が館の前にいました。

巨人たちは財力もあるけど、人間がそれに頼り下僕に甘んじて何もしなければ、そのうち巨人王も見捨ててしまいますよ。

僕が前に居たオアシスでは、人々が力を合わせて砂漠竜と支配者を倒す姿を見たけど、ココでも同じコトは出来ないの？」

「おおつ、少年はオアシスから来たのか！！」

オアシスに女神が降臨して、人々を救って下さった。と噂で聞いているのだ。

ああ、奇蹟が起こったオアシスを羨ましい。

ワシは孤児達を救いたくても何もできない、どうか、その話を詳しく聞かせておくれ」

聖堂を追放されてからも、男の魂の抛り所はミゾノゾミ女神だった。

ハルがオアシスの奇蹟を目にしたという話に、黒鷲は少年に駆け寄ると、思わず両肩を力を入れて掴める。

覗き込んだ優しい少年の顔立ちはどこか見覚えのあるモノ、才

レンジに見えた双眸は右目は赤く、それは女神の使徒の証。

女神によく似た少年が、穏やかな微笑みを浮かべながら静かに宣言する。

「もう既に、コノ地にも女神は降臨しています。

僕らは精霊の導きで終焉世界に蘇った『神科学種』です」

SENさんの真似をしたんだけど、ちょっと芝居臭かったかな……

あ、あれー？

おじさんいきなり平伏、YUYUさんの付き人さんも平伏、館の従業員さんも平伏。

まるでこれは、水戸黄門の印籠状態です……！

皆さん顔を上げて下さいっ

オロオロしてる僕を、眠っていたはずのYUYUさんは薄目を開けて眺めている。

肩を震わせて笑いかみ殺してるね、どうせまだ僕には役不足ですよ。

王の影は椅子から体を起こすと、しっかりとした足取りでハルの隣に立ち、黒鷲に声を掛ける。

「貴方にはまだ、孤児たちを救いたいという気持ちがあるのですね。それなら、霊峰女神神殿と決別して、敵対する巨人王に忠誠を誓いなさい。

貴方が誓えば『王の影』は、いいえ『神科学種』はその願いを叶

えてあげましょう。

女神の使徒である神科学種が与えるチャンスを、掴むのか拒むのか選びなさい」

顔を上げた初老の男の瞳は揺らぐことなく静かで、既に覚悟を決めた表情だった。

「しばらく考える時間を頂いても宜しいですか？」

「貴方は既に、二年も考える時間を与えられたはず。

無力な町民のままか、巨人王に忠誠を誓い、孤児達を救う道を選ぶのか決めなさい」

黒鳶は自らの呪杖を差し出すと、王の影は静かに受け取った。

それは巨人王に、神官自らの魔力を捧げるといふ忠誠の証だ。

代わりの杖を、とYUYUが付き人達に声を掛けていると、ハルが隣でアイテムバックを漁りはじめた。

「えっと、僕とても丈夫な杖を持っているので。

ゴソ　ゴソ　ゴソ

あ、あった。砂漠竜が噛んでも折れなかった呪杖です」

「なんとこれは！！」

歴代の最高位神官でも、手にした者はわずか数名しかいないといふ至宝の杖」

「僕あまり魔力ないから、魔法の杖は全然使わないんです。良かったら貰ってください」

軽い口調でハルが取り出したのは、激レアアイテム『淡雪ユニコーンの杖』

それは、杖に頭部に大きな3色の水晶がはめこまれ、持ち手の部分は純金、杖本体は淡雪ユニコーンの角でできていた。

「ハ、ハルくん。その……超激レア、プレミアムアイテムを

……いえっ、ボソツ、羨ましい」

何故か落ち着きのなくなったYUYUを不思議そうに眺めながらも、ハルはユニコーンの杖を黒鷲に手渡す。

その時、何故かYUYUは顔を袖で覆い、しばらく身動き一つしなかった。

数か月後、親密になったYUYUは、その時のことをハルに白状する。

「アノ時は、本当に泣きそうだったんですから。

私がすつと探し求めていた淡雪ユニコーンの杖を、ハルくんは目の前で簡単に人に渡したんですよ。えっ、泣いて、思い出して泣いてなんかいませんっ。」

クエスト31 色仕掛けをしよう

前日の死黒鳥襲撃がまるで無かったかのように、鳳凰小都 高級花街エリアの大通りは人々で溢れかえっている。

そんな群衆のなかでも、ひととき目立つ一団が居た。

猿の様なしわくちな顔をした小柄な男は、鳳凰の姿を写し取ったきらびやかな法衣を身に纏い、同じように神職と思えない派手な姿の部下を2人引き連れていた。

神官が花街を堂々と歩く姿は、普通に考えると顰蹙ものだが、鳳凰女神聖堂は怪しげな道具や薬を娼館に提供していて、いわば同業者、同じ穴のムジナ状態だった。

鳳凰女神聖堂の神官達が招待されたのは「かんじょくゆうかむ完熟遊誘館」

高級娼館一のランクを誇る巨人王御用達の娼館であり、高位の者の相手をするにふさわしい、選りすぐりの美女たちが取り揃えられている。

「新しく館に招かれた娘に、ミゾノゾミ女神の神託に受けさせたいそうです。」

噂ではこの娘、ある程度の教育を施した後、巨人王の元へ召し上げられる予定だとか……」

大神官に話しかけるのは、地味な顔立ちの男で派手な法衣が似合わなかった。

「ニヨホホツ、何も知らん無知な娘なら、女神秘儀の房中術だと適当にでっちあげて弄んでやるっ」

「王の相手に選ばれるなんて、絶世の美女なんだろうな……」

イヒツ、大神官様、私も是非、娘に女神様の技を伝授するお手伝いさせてください」

付き人の必死の懇願に、猿顔の鳳凰大神官は黄色い歯を見せ卑猥な笑みを浮かべる。

ミゾノゾミ女神など存在しない。それをマトモに信じるバカな連中は、ちよつとした小細工と幻影魔術で簡単に騙される。

さて、今日はどのようにして女神の神託をでっちあげ、娘を騙つてやるうか、

「ようこそいらつしやいました、鳳凰女神聖堂　大神官様。ミゾノゾミ女神に仕える高貴な方を、この様な場所までお呼び立てしまい大変失礼しました。」

私は、巨人族　暴力王　鉄紺　第十八位側室　水浅葱でございます」

鳳凰大神官を前にして、優美なしぐさで挨拶をするのは、豊満な肉体に美しく波打つ水色の髪、見る者の欲望を掻き立てるように妖艶と微笑む美貌の女。

その隣で、三つ指を付く年若い二人の娘が顔を上げる。

二人の乙女は、磨きあげられた透き通る肌に手入れの行き届いた艶やかな髪、そして愛らしい美しい顔立ちをしていた。

「陛下が、後宮に若い乙女を加えるよう所望しておりまして、この娘達が王に相応しいかどうか、女神様の神託をいただきたいのです」

鳳凰大神官の前で平伏する少女達、いや、隣にいる王の側室も加えると三人の美女を、自分の舌先三寸で好きに翳ることが出来るのだ。

後ろで控える付き人の神官たちは、逸る心を抑えきれず思わず野太い呻き声を漏らす。

自然と猿顔大神官の鼻息も荒くなり、欲望で濡れた目で、どの獲物から弄ぼうか選んでいた。

「ミゾノゾミ女神より授かった我が心眼を用いれば、どの娘が王に相応しいか、魂の有り様まで見極めることが出来る。

どれ、一人ずつ前に出て、まず私の神が宿る手に触れるのだ」

鳳凰大神官が行う騙しの手法は、手に触れた娘が穢れていると激しく罵り精神的に追い詰めた後、浄化の房中術で清めると理由をつけ犯す。

誰でも一つや二つ、口にできない後ろめたいことがあるもので、信仰心熱い者ほどコロリと引っかかる。

逆らえば女神を愚弄する反逆者として、さらに激しく追い詰めればいい。

鳳凰大神官は、目の前に控える、見るからに無垢な娘をどう料理しようかと、邪な考えを巡らせながら呼び寄せる。

「さあ娘よ、私の掌にそなたの右手をかさ…「キャキャ、はやく脱ぎなさいよお」なんだ、騒がしい!」

突如、隣の部屋からウルサイほどの娘たちの笑い声が響いてきた。

「フツツ、ダメでしょ、我慢しなさいっ」

「引つ張らないで、やあんっ、あっあ」

「フウ、うづんっ、くすぐりたいよお」

完熟遊誘館かんじゅくゆうゆうかんは、各部屋を襖で仕切っただけの和室造りで、隣の部屋の音は薄い壁一枚から漏れ聞こえてしまう。

隣の部屋で大騒ぎしている娘たちの甘く艶めかしい笑い声が、鳳凰大神官たちのいる部屋に響いている。

「まったく、神聖な儀式の最中だというのに、竜胆王子様りんとんは何を悪さしているのでしょうか。ちょっと失礼します」

呆れたように呟いた水色の髪の側室が立ち上がると、隣の部屋に繋がる襖に手をかけて、勢いよく開け放った。

突如、襖が取り払われて部屋の中が丸見えになると、娘たちの破廉恥な様が眼に飛び込んできた。

若く美しい高級娼婦が互いの服を剥ぎ取り合い、着乱れて、中には胸を露わにしている娘もいる。

床に散らばる髪飾りや色とりどりの着物で、足の踏み場もない。

どの娘も輝くような美しさで、花のような甘く艶めかしい色香を放ち、鳳凰大神官の目の前にいる二人の娘など霞んでしまう。

その部屋の奥座敷で腰掛けるのは、まだ年若い大柄な体格の男。

巨人王と同じ赤い髪に浅黒い肌、太い眉に彫の深い彫刻のような整った顔立ち、巨人族の中でも特異の神科学種の血が混じった王子。

若く美しい高級娼婦がじゃれ合う姿を酒の肴にして、楽しそうに眺めている。

「ああ、水浅葱、ちょうどコツチも盛り上がってんだよ。

四人相手の野球拳なのに、全然コイツに勝てねえじゃないか。

一番最初に負けた奴はお仕置きなあ」

半巨人の王子が罰を与えると云っても、娘たちは歓声をあげて返事をする。

鳳凰女神聖堂の大神官たちは、チラリと流し目を送る若く美しい娘達に魅入られ、そして、娘たちに取り囲まれ輪の中心にいる、黒髪の娘に目が留まる。

服がはだけて生肌を露わにした娘達とは異なり、ぴっしりと巫女服を着こみ、腰まで伸びた絹糸のような長い黒髪、紅い瞳にぶつくりとした桃色の唇の幼い顔立ちの娘。

「どうやら巫女服の娘相手に、脱@ジャンケン勝負をしているようだ。」

「あなたたちは よわすぎて ぜんぜん しょうぶに なりません
どなたか わたしに かてたなら こよいの ねやで おあいて
いたしますわ」

娘はぎこちなく笑うと、台本でも読んでいるような抑揚のない口調で話す。

だが、そんな事など神官たちは気にもならなかった。

ミゾノゾミ女神に似た娼婦はいくらでもいるが、この娘は、まるで女神そのものだ。

幾度となく夢想した邪な思い、ミゾノゾミ女神をこの手で地に落とし、体を貪り、自分の下で喘がせたい。

その願望を叶えることが出来る、男達の暗い欲望に火がついた。

「あのう、鳳凰大神官様。女神の神託は、お告げは何と出ましたか？」

自分の用事をすっかり忘れている神官達に、水浅葱は戸惑った様子で声を掛ける。

「ああつ、そ、そうだ、安心するがよい、この娘たちは王の相手に相応しいぞ。

ところで側室殿、私たちを、あちらの竜胆王子殿にご紹介してもらいたいのだが……」

もはや下心を隠す余裕もなく、気が急いたように話しかける神官達に、水浅葱は袖で隠した口元に薄笑いが浮かべた。

「この娘の名はオハナと申します。

顔が女神様によく似ているので人気があるのですよ。

彼女と脱@ジャンケンで勝って、裸にすることが出来れば、残りの娘達も一緒に神官様たちのお相手をさせますわ」

「神官様、がんばってソイツを脱がしてくれよ。

勝てば、この世とは思えない酒池肉林が体験できるぜ」

竜胆王子が囁し立て、改めて水浅葱に紹介された巫女服の少女は、ぎこちなくペコリと頭を下げる。

周りに控える娘達には目もくれず、黒髪の娘を全身舐めるように眺める神官たち。

ちよおおつーとおおお、

どう見てもオツサンたち、僕にロックオンしてるよね。

ここで勝負に負けたら、あんなことやこんなことをされちゃんだよー！！

水浅葱さんも竜胆さんも面白そうに見てるだけで、手助けする気が微塵も無いですね。

ひいつ、ミゾノゾミ女神さま、助けてくださいー

「その話、本当だろうな。」

ヒヒッ、俺たち三人を相手に勝負して、勝てるつもりでいるのか？」

「さっさとその服を引っぺがしてやろうぜ、今夜は楽しくなりそうだ」

ああ、何か口調が荒っぽくなって、下品な本性が見えて来たね。

「それでは おてやわらかに よろしく おねがいしまーす

さあ しょうぶ さいしょは ぐー じゃんけん……」

鳳凰女神聖堂の神官達は、三人ともハルにストレート負けで、あ

つという間に身ぐるみを剥がされた。

普通なら、そのまま館から放り出すトコロだが、神官達は、罰当たりとか天罰を喰らえとか、散々逆ギレして騒ぎ出した。

結局、負けはツケにして服を返してやり、更にツケを重ねて他の娘を買い、完熟遊誘館かんじゅくゆうゆうかんで一夜を過ごした。

「くくつ……全裸で外に放り出された方がまだマシだったのに、鳳女神聖堂の神官は真性の愚か者たちですね」

あれから五日過ぎ、神官達は店にツケを払いに来る様子もない。

『王の影』が手にしたのは、鳳女神聖堂大神官に書かせた借用書だった。

完熟遊誘館かんじゅくゆうゆうかん + - 借用書

遊興費の返済期限内に入金が無ければ + - 延滞利息が加算されます

YUYUに手渡された借用書を見て、ティダは呆れた様な顔で文面を指差す。

「この模様はプラスマイナスじゃないだろ。

十一トイチの借用書なんて、あくどい事をする。

それでお姉さまたちは、これから鳳女神聖堂に借金取り立てに行けばいいの？」

「ええ、大神官達の身ぐるみを剥がして、聖堂丸ごと取り立ててください。

神科学種には『破滅』へ導く役目もあります。

鳳凰のいない鳳凰女神聖堂は潰し、新たに”蒼珠”女神聖堂を興しましよ」

長い銀の髪の毛の美しいエルフは、小さく頷くと借用書を受け取り、血に飢えた狂戦士の笑みを浮かべながら部屋を出て行った。『王の影』は椅子から立ち上がり、窓の外へ歩み寄ると、眼下に広がる鳳凰小都を見渡す。

「雪が降る前に、膿を出し切らなくては……
多くの貧しい者は、厳しい冬を越せないでしょうから」

そして、ティダと入れ替わりでハルが部屋に飛び込んできた。
ハルは、頬を赤らめながら言い放つ。

「あれが最後の女装ですよ！！もう絶対、次はないですから」

「えっ、もう5種類ほど、別デザインの巫女服を仕立てさせましたよ。」

ハルくんには、これからもドンドン囿と……女神の代理人として、活躍してもらいます」

「今、囿って……」

クエスト31 色仕掛けをしよう(後書き)

トイチとは、

借入金利が「十日で一分の金利」の略で、法律で禁止されている複利での貸付を行うため、実質年利は10000〜30000%を超える。

クエスト32 借金を取り立てよう

鳳凰小都の正面門から三区画奥へ進んだ場所に、鳳凰女神聖堂は存在した。

木造の東洋風の建物が立ち並ぶ中で、鳳凰女神神殿はゴシック風の本館と、円柱状の塔が数本建つ洋風の建物である。

天に向かって伸びる白い塔は、以前は象牙の塔と呼ばれ街で印刷された書籍が大切に保管されていたが、今では塔の中からモンスター1の奇妙な鳴き声が聞こえてくる。

聖堂の周囲には、ミゾノゾミ女神の祝福の力で「神の燐光」の街灯が弱々しく光を放ち、わずかな温かさを求めて浮浪者たちが溜まっていた。

「こんにちは、私 神科学種の冒険者 ティダと申します。

突然の訪問失礼します。

かんじゅくゆうめう 完熟遊誘館から遣わされ、こちらの大神官さまにお話が有っててまいりました」

鳳凰女神聖堂の正門横の扉を叩いたのは、滝の様に流れる美しい銀の髪に、見惚れるほど優美な姿をしたエルフ。

そのエルフト、後ろで影のように控える武士の男の右目は赤く、女神の使徒の証を持つ神科学種だった。

「これは、神科学種様ではありませんか!!」

え、えっと、只今鳳凰大神官はお忙しく、事前に約束が無ければ、例え王様であろうともお会いすることはできません」

「私たちは三日前から大神官様へ面会を申しこみ、なにかと理由を付けて断られています。それで仕方なく直接訪ねてきたのですが、

女神の使徒である神科学種と会えないとは……

鳳凰大神官は、いったい誰に仕えているのでしょうかね」

聖堂の門番は、これほど近くから神科学種を目にするのは初めてだった。

大神官が神科学種の訪問を断る理由は、あまりにも判り切っていた。

この天女のような神秘的な雰囲気を纏った美しい神科学種が、卑猥な偶像で埋め尽くされた鳳凰女神聖堂の中を見てどう思う。

実は……門番の自分ですら、今の鳳凰大神官達の女神を愚弄した行為には、耐え切れないものがある。

大神官の命令と、女神の使徒である神科学種の命令では、どちらを選ぶか。

「では、俺が鳳凰大神官様を呼んできますので、どうぞ中に入ってお待ちください」

信仰心の厚い鳳凰女神聖堂の門番は、ためらうことなく彼らを聖堂内へと導いた。

鳳凰大神官は、憤怒の表情で脂汗を流しながら、報告に来た門番を怒鳴りつけた。

「貴様あ、そいつらが娼館の使いなら、借金の取り立てに決まっているだろう!!」

相手が神科学種だからと怖気づいて、言われるがままに聖堂の中に入れちまったのか。

我々に楯突く連中は、痛めつけて追い出してしまえ」

「そ、そんな、相手は神科学種様、この世界に豊穡をもたらす女神の使いですよ」

口答えをする門番を、腹立ちまぎれに拳で殴りつけた鳳凰大神官は、他の神官達を呼び寄せると、神科学種が通された聖堂大集会所の小窓から様子をつかがう。

「この街で我々に逆らうとは、たとえ神科学種でも許してはおかないぞ。」

ヒヒツ、塔の中で腹を空かしているモンスターに奴らを襲わせるのだ。

男の方は殺ってもかまわん、エルフは極上品だ、生かして慰み者にしてやるう」

猿顔の鳳凰大神官は、手鏡で髪を整えながらそう呟くと、大集会所の扉を叩いた。

鳳凰女神聖堂の中に通されたSENは、その場のカオスっぷりに呆れを通り越して笑いたくなくなった。

「ココはホントに……女神に祈りを捧げる場所なのか？

なんつうか、淫魔の邪教館 ってエロゲタイトル付けたくなるぐらい、イカガワシイ展示物満載だ」

聖堂正面に祭られていた『M字開脚の女神像』は、まだまだカワイイ物だ。

信者が腰かけるはずのベンチには、大人半分サイズの精巧な愛らしい少女人形が、モニヨモニヨな姿で鎮座し、床には使用方法が想像できない奇妙な形をした器具が並べられている。

毒々しい色の液体の入った瓶が並び、胸をざわめかせるような、今まで嗅いだことのない獣の匂いが部屋を充満していた。

同じように、室内を興味津々で眺めていたティダが、縛り吊るされてモニヨモニヨな少女人形を一瞥すると呟いた。

「こんな縄じゃダメだ、収縮性もないし硬すぎる。

見本の縛りも、団先生の洗練されたモノと比べれば全然劣る。

しかし、未来でも人間の欲望は変わらないのね。もちろんお姉さまは相手を縛り上げたい方だけだ」

「ティダ、妄想世界だけで欲望をとどめる変態紳士の俺は、縛るのも縛られるのも勘弁」

ティダの目付きが怪しい……普段からナチュラルなS趣向を持つてるが、それを平気で口にする様子を見ると、部屋に充満する獣匂に媚薬効果があるのだろう。

嗅覚の鋭いエルフには、モロ影響が出るヤバい場所かもしれない。

「早く用事を済ませたほうが良いな。さっさと手分けして金目のモノを全部押さえるぞ」

「な、なんだ、これは！！お前たちいつたい何をしているんだ」

歴史ある鳳凰女神聖堂には、数々の貴重な彫刻、絵画、装飾品が収められている。

神科学種たちは、イカガワシイモノに埋もれた、その貴重な品々を探し出し『差し押さえ』と書かれたシールをベタベタ張っていた。

「あんたが何時まで経っても来ないから、俺たちは先に仕事をさせてもらった。

完熟遊誘館かんじゅくゆうゆうかんが鳳凰女神聖堂に借金の取り立てをする話が他の娼館にも伝わって、大神官様の借金を代理取り立てして欲しいって要望が数えきれないほど舞いこんだんだ。

さあ、娼館で淫行三昧で溜めたツケを、今日中に全額返済してもらおうか」

眼光鋭い黒衣の武士が、厚さ数センチの及ぶ借用書でペチペチと鳳凰大神官の頬をはたくと、普段は威張り散らかしている猿顔の男は、顔面蒼白でワナワナと小刻みに震えだした。

「この差し押さえシールは、借金が返済されない限り、剥がせないのよね。

大神官様、完熟遊誘館かんじゅくゆうゆうかんで、一晩楽しんだ支払をお願いします」

神科学種のエルフが差し出された請求書を見て、鳳凰大神官は悲鳴を上げる。

脱@じゃんけんゲーム料金 金貨2枚×48回

高級娼婦 接待料金 金貨8枚×3名
 宿泊料金 金貨9枚×3室
 飲食料金 金貨6枚 …… e t c e t c

合計 紺金貨^{こん}185枚

延滞日掛利子 4割
 金貨185枚×1.4×1.4×1.4×1.4…… (複利計算)

合計 紺金貨^{こん}1392枚

「なんだこりゃ!? そ、そんな金額、払えるわけないだろ!!
 アノ脱@じゃんけんゲームは、竜胆王子がやってみないかと勧め
 たから参加したただけだ。ゲーム代は王子に払わせればいいだろう!
 」!

「何か勘違いしているようね、竜胆王子様は客じゃないの。
 巨人王の側室様から、店を譲渡された「完熟遊誘館^{かんじゅくゆうゆうかん}」経営者。
 あんたは王子の営業トークに乗せられて、オハルという娘と勝負
 して負けたんだから、ゲーム代払うのは当然でしょ」

口から泡を吹きながらも、血走った目で鳳凰大神官は怒鳴った。
 よりによって、巨人王御用達の高級娼館でバカ騒ぎして借金をこ
 しらえるなんて。

大神官の後を付いてきた神官の半分は、さすがに呆れ果てて無言
 で部屋を出て行く。

「代理取り立て借用書分の借金計算をしたが、聖堂丸ごと差し押さえても足りないな。」

「ちよつと失礼するよ、ペタツと」

そういうとSENはニヤリと笑い、鳳凰の描かれた派手な大神官の法衣に『差し押さえ』シールを貼った。

「き、貴様らあ、よくもこの俺を嵌めやがったな。」

こつなつたら生かして帰す訳には……そうか……ココでお前たちの口を封じて証書を奪えば、借金はチャラになるじゃないか」

開き直った様子の鳳凰大神官は、その場に残った腰巾着の神官達に合図を送ると、くるりと踵を返し部屋の外へ飛び出していった。

その後を追いかけるSENに飛びかかってきたのは、数体のモニヨモニヨな少女人形。

SENの背中に少女人形は縋り付き、腕に抱き付き、細い足を絡め、半分サイズながら生身と変わらない造りのモニヨモニヨを押し当てる。

「うわあ、こ、これは、即席ハーレム!!!」

「邪魔だ、振り払う、俺には、で、できないっっ」

「こらあー!!ダツチ@イフにときめいてる場合かあ。」

「炎の精霊よ、我の敵を焼くつくせ　ファイヤボルト」

ティダは人形に向けて、SENが巻き込まれることも気にせず炎

の弾丸を撃ち込む。

炎が愛らしい人形の頭部を次々と破壊し、小さな体がビニールのようにめらめらと燃えて解け落ちる。

アチチ！と悲鳴を上げる仲間を放置して、テイダは鳳凰大神官の後を追った。

部屋の外には渡り廊下があり、円柱の白い塔へと繋がっている。塔の入り口である扉が開け放たれ、鳳凰大神官はそこに逃げ込んだのだろう。

夢中で後を追いかけていたテイダは、渡り廊下を半分ほど進んだトコロで、その場に立ち止まり足を動かさなくなる。

なんだ、この、匂いは、酷く、気分が、悪い、心が、乱れる

焼け焦げた姿でテイダに追いついたSENの目に、異様な光景が飛び込んできた。

嗅覚鋭いエルフのテイダは、匂いにやられ、渡り廊下の途中で目を閉じて座り込み、苦しそうに口元を覆っている。

SENは警戒しながらテイダの傍までくる。

渡り廊下の先にある塔の入口、開け放たれた扉の中に人影が見えた。

その人……いや、その化けモノが外へと這い出てくる。

ズルツズルツ パチャパチャ

人と同じような頭部、女性の様な上半身、細い2本の腕、そして下半身部分は、3メートル以上の長い胴体を持つ大蛇だ。

ビー玉の様な黄色い眼に、耳まで裂けた口から二股に分かれた赤い舌が見え隠れして、腕に見えたものは軟体動物のように奇妙な動きをして、手のひらや指は見当たらない。

全身小さな赤紫の鱗が生え、異様な匂いを放つ分泌物で体は濡れていた。

「これは……ラミア（蛇女）、キメラの出来損ないか。人型に近いモンスターとは趣味が悪い」

塔の中から溢れ出てくるように、ラミアが次から次へと扉の外に這い出てくる。

狭い渡り廊下が、十数匹のカミラの重みで軋み、大きく揺れる。

白い塔の窓に目をやると、外に出たがって硝子にへばり付く化けモノの姿が見える。

「どんだけラミアを飼ってるんだ？これ以上化けモノ達が外に出たらマズイ。」

ティダ、起きる。俺がラミアを引きつけている間に、氷属性魔法で塔の入り口を塞いで閉じ込めてくれ」

ティダの肩を激しく揺さぶると、目を閉じながらも意識はあるように、震える手でアイスワンドを握りしめる。

SENはラミアに向かって駆け出すと、黒い残像だけ残して、一瞬姿を掻き消した。

「穢れたキメラの成れの果てよ、我に牙をむけた事を悔いるがいい
二刀流 如来双腕 旋風切」

「てめえら、臭せえええ、汚臭は密封封印するぞ！！
氷の聖霊よ加護せよ　アイスボルト」

二人の目の前まで押し寄せてきた蛇女が、SENの繰り出す刀によつてミンチになり形を失う。

化けモノで埋め尽くされた空間に、一瞬間ができ、テイダがその間を縫つて氷属性魔法を放ち、塔の入り口を氷で塞ぎ固める。

これ以上、塔の中で蠢くモンスターの放出はない。

しかし、激しい大立ち回りで、狭い渡り廊下が不気味な音をたて軋み始める。

高さは五メートルほどの渡り廊下、落ちても自分たちにダメージは無いだろう。

しかし、それは…… エルフのテイダにこれほどダメージを与えた十数匹の化けモノが、地上に放たれ人々を襲うのだ。

SENの足元の板が抜け落ち、鳳凰女神聖堂の渡り廊下は、音を立てて崩れ落ちた。

クエスト33 空を飛んでみよう

人の良さそうな痩せ細った男は、ガラクタを積んだりアカーを引きながら、鳳凰女神聖堂前の【神の燐光】を目指す。

今日も仕事を得られず、住む家もなく、3日もまとまな食事に取りついてない。

月が変わると同時に、秋風が急に刺すような冷たさになり、厳しい冬がそこまで来る気配が感じ取れた。

そんな宿無しの彼に、鳳凰女神聖堂が救いの手を差しのべることはない。

唯一、人々はわずかな暖を求めて、女神聖堂前の大通り沿いに灯る【神の燐光】の元へ集う。それは、魔物を除け安息に導く、終焉世界に残された女神の慈悲の光。

男は、【神の燐光】の灯る街灯の下に薄汚れたゴザを敷き、寝て空腹を紛らわそうと横になった。

その時、鳳凰女神聖堂の方向から大きな破壊音と、鼻が曲がりそうなほど異様な獣臭が漂ってきた。驚いて建物の方に目を向けると、聖堂本館と白い塔に繋がる渡り廊下が音を立って崩れ落ちるのが見えた。

そして、人が、いや、蛇……大量のモンスターが、そこから這い出てくる。

崩れ始める渡り廊下の上で、SENは意識のないティダを担ぎ上げ、刀をハーケンのように塔の壁に突き立てる。

そして右手の刀に掴まり壁に宙ぶらりん状態で縋り付く。寸でのトコロで崩落に巻き込まれずに済んだ。

数匹のラミアが渡り廊下のがれきと仲間の下敷きになり、内臓を撒き散らして押しつぶされたが、まだ両手に余る数の敵が残っている。

ラミア達は頭上に居る二人を見上げ、避けた口から毒素を吐きながら、けたたましい威嚇の奇声を上げているのだ。

その忌まわしい化けモノに、近づく人影があった。

黄色い歯を剥き出し笑う顔は猿そのものの、派手な法衣の胸に『差し押さえ』のシールが張られた鳳凰大神官。

「ニヨホホツ、神科学種と言われていても、この香しいフェロモンに全く免疫が無いとは、まるで生娘のようだ。

武士の男、貴様は何とか意識を保っているようだが、仲間がその様じゃ手も足も出ないだろう。さあ降りてきて、俺の可愛いラミア達に鬺り殺されるがよい」

「チツ、さすがにこのままじゃ埒が明かない。

ティダ、少し怪我するかもしれないが、勘弁してくれ」

SENは、肩に担ぎ上げていたティダを、片腕で持ち替える。

ブンツ　ブンツ

グツタリして力の抜けたエルフを振り子のように数回揺さぶると、そのまま思いつきり【神の燐光】の灯る大広場方向に放り投げた。

見事な弧を描きながら、空高く飛んでゆく仲間を見つめる。

できるだけ遠くへと、手加減無しで全力で投げたから、落ちてアバラの1、2本は折れるかもしれない。

まあテイダの、狂戦士の自己修復能力なら、怪我也数分で直るはずだ……後からの報復が怖いが。

そしてSEN自身は、塔の壁を蹴り両手に刀を握り直し、地上でうごめく蛇女の群れめがけ切り込む。

オラの上に、空から天女さんが降ってきただよ。

重たい落下音とリヤカーのひしゃげる音、周囲に紙吹雪が舞い、落ちて来たソレが埋もれて倒れている。

リヤカーに積まれていたガラクタ、金として全く価値の失ったピヨコ紙幣の上に、鳳凰女神聖堂から飛んできたソレはぶつかった。

痩せ細った男は、自分の唯一の財産が木端微塵になったことも忘れ、落し物に見入る。

「なんてキレイな天女さんだあ!!」

絹糸の様な長い銀髪に、透き通るような白い肌、眉を苦しげに寄せ、閉じた長い睫が微かに震えている。

恐る恐る近づいて、綺麗な顔に手を伸ばすと、微かの吐息と温もりを感じる。

どつやら生きているようだ。

その間にも、鳳凰女神聖堂から漂う臭いが強くなり、獣の奇声と何か激しく争う音がする。

周りの浮浪者や町民たちは、聖堂から離れようと、蜘蛛の子を散らしたように逃げ出している。この街では、僅かな状況判断の遅れが命取りになるのだ。

「オラはバカか！こんなモン放って、サッサと逃げねえと……」

それでも見捨てられずに、オロオロとその場に立ちすくんでいると、聖堂から毒素を帯びたであろう青紫の煙が漏れだし、地面を舐めるように迫って来るのが見える。

「ああっオアシスでは女神さまが降臨して、人々に救いの手を差し伸べたつうのに。」

もうお終いだあゝこの罰当たりな鳳凰聖堂は、女神さまに嫌われてるだよ」

男は咄嗟に、ガラクタの紙切れで天女を隠す様に体の上を覆い、隣にしゃがみこむと破れた上着で自分の鼻と口を塞いだ。

煙に巻かれ、逃げ遅れた者たちが、うめき声をあげながらバタバタ倒れてゆく。

堅く目を閉じる。自分はどれだけ息を止められるだろう、この命も、後数分しか持たないのか。

あれ？オラ、生きてるだ。

恐る恐る目を開き顔を上げると、目の前に巨大な男が仁王立ちするシルエットが見えた。

このデカさは人間じゃない。でも巨人王や街を支配する第七バカ王子と比べるとかなり小柄だ。

青紫の毒煙が立ちこめる中で、自分たちの周りには淡い光のドームが現れ、男の足元に転がる「境界石」の力でバリアが張られていると知った。

男が振り返ると、燃えるような赤い髪に褐色の肌、深い彫の顔立ちが高貴な雰囲気。

まだ年若いハンサムな大男は、筋骨隆々のたくましい戦士で、大型の武器を何種類も背負っている。

「煙で視界ゼロ、何も見えないなあ、ホントにココにティダが居るのか？」

なあ兄さん、ここら辺で長い銀髪のエルフを見かけなかったか」

大男に話しかけられ、オラはまごついて返事ができなくて、慌て壊れたリアカーの荷台を指差しただ。

積んだ紙切れを掻き分けると、埋もれて眠っている美しい天女さんが現れただよ。

「まさか死んで、いや、仮死状態か。

ふーん、さすがエルフ、静かに寝てれば絵になる姿だ。取りあえず蘇生しないとな」

ハンサムな大男は、オラの方を見てニヤリと笑うと、天女さんの上に覆いかぶさって……うおう、ナニしてるだっ……！！

「すげえっ、天女さんが生き返っただけあー」

それから数分後、果物屋店主で元鳳凰大神官の黒鷲^{くろとび}が、ハルに支えられて鳳凰女神聖堂前の大広場にたどりついた。

「竜胆さんは先に行っちゃいましたね。

おじさん、少し休みましょう。5区画も走り続けて脇腹の痛みがひどくなってますよ。無理しないで歩きましょう」

ふうふうと、全身滝のように汗を流しながら、小太りの男は必死に駆けている（ように見える）。

ハルはその背中を押しながら、テイダの姿を確認して、広い通りを横切ってくる。

「テイダさん、こんなトコロに居たんですね。

毒煙を吸って動けなくなっただってSENさんから連絡が、ウ、ウギャアア!!」

ちゅうつううう~~~~~

「うちゅう~~~~ハルちゃんて口直しさせてもらったからね。

ああ、何たる一生の不覚!!ハルちゃんの為に取っておいた、お姉さまの清らかな唇をジャイに奪われてしまうなんて」

突然僕に抱きついてチュウしておいて、清らかな唇なんてどの口で言ってるの？

この人、砂漠竜狩りの時、若くハンサムな神官たちに蘇生魔法チユウしまくつてたキス魔ですから。

いつもよりハイテンションで、かなり様子がおかしい。

「テイダさん、どうしたんですか、なんだか酔っぱらってるみたい？
わ、判りましたから、離して下さいー」

テイダさんを助けたいらしい男の人と黒鳶くろとびさんが、生ぬるい目で見守っているっつ。

抱きつかれた体を押しつけようとすると、さらに胸に両手を回して、グイグイ締め付けるベアバック技をかけられ、イタイイタ、痛いんです。

「こうやってハルちゃんにくっついてると、体が楽になる。

あーっ、気持ちいい、酷い眩暈と吐き気が収まってきたなあ」

テイダは二日酔いのオヤジのように眩くと、抱きしめたハルの拘束を解き、ふと顔を上げると驚きの声をあげる。

驚くテイダにつられ頭上を仰ぐと、弱々しく灯っていた【神の燐光】は黄色い光の珠となり、両手を広げたサイズまで膨らんで、煌々と輝きながら浮かんでいる。

彼ら神科学種たちを中心として、眼がくらむほど眩しく輝き始めた【神の燐光】は、一帯に漂っていた青紫の毒煙を掻き消してゆく。

道に倒れていた人々は意識を取り戻して起き上がると、光の元へ

引き寄せられるように集まってくる。

それは、数々の宗教画に描かれた聖人出現の場面、それに現れる光輪に似ていた。

巨大な光の塊となった【神の燐光】は、小太りで白髭をたくわえた、初老の男の頭上に輝く。

その隣に立つのは、赤い右目の女神の使徒。長い銀色の髪に透き通るような白い肌、美しい顔立ちの天女が控えている。

誰も、初老の男の背後の従者風少年には気を留めない。

「貴方は、まさか、黒鷲さま。前の鳳凰大神官さまですよ」

「これは奇蹟だ。黒鷲さまが、消えかかった「神の燐火」を蘇らせ、毒煙を抜ってくれた」

「聖人の黒鷲さま、その隣は神科学種さま！！
俺たちにも、女神さまの救いの手が現れたんだ」

果物屋店主、前 鳳凰大神官の黒鷲の周りに人々は集い、祈りの言葉を口にする。

瘦せた男が興奮した様子で、集まった人々に訴えかけた。

「オラはこの目で見ただよ。

天女さまが鳳凰女神聖堂から逃げ出して、オラのリアカーの荷台に落ちて来たんだ」

男の言葉に合わせるかのように、ティダは弱々しく笑みを浮かべると、両手で顔を覆って泣き真似をする。

この美しい神科学種が鳳凰女神聖堂でどんな目に会ったのか、人

々は妄想とともに怒りを掻き立てた。

鳳凰女神聖堂からは、獣の奇妙な鳴き声、争う罵声と武器の打ち合う音が聞こえる。

質素な綿のシャツ姿の黒鷲くろじゆは、朗々とした低く重厚な声で人々に語りかける。

「鳳凰女神聖堂では、神科学種さまの同志が大神官の操るモンスターと戦っている。」

私たちは今からそこへ向かう。大神官の背徳を暴き、女神聖堂を取り戻すのだ」

聖人の頭上で煌々と輝く光の珠【神の燐火】

本当は、後ろで控えるハルの「幸運度」または「祝福」「奇蹟」の成せる技だ。

でもハル自らが聖人になる必要はない、彼らの街に相應しい聖人がいるのだから。

聖堂へと歩む黒鷲の後に続く列ができて、少しずつ行進に参加する人数が増える。

クエスト33 空を飛んでみよう(後書き)

色気のない ちゅう で失礼しました。

クエスト34 鳳凰大神官を辞めさせよう

ぐちゅり　ぐちゅり

粘着質なソレが靴底に張り付いて足を取られそうになる。

SENが降り立った地面はラミアで埋め尽くされ、蛇女の体からにじみ出る体液で濡れ、匂いもかなりきつい。

背中を冷たい汗が流れる。胃液が逆流しかかり、生理的な嫌悪感が沸き起こる。はつきりいつてココから逃げ出したい。

だが、飢えた化け物が聖堂の外へ放たれ街の住民が襲われれば、それは恐ろしい地獄絵になるだろう。

SENは改めて右手の大刀左手の脇差を握りしめると、化けモノへと飛び込んでゆく。

「背徳の大神官と穢れた使い魔よ、我に牙をむけた事を悔いるがい
い!!!」

二刀流　如来双腕　旋風切」

2本の刀が4本に、さらに8本、16本、数十の刀の軌跡がラミアの体に刻まれる。

SENの周りを取り囲んでいた3匹の化け物は形を失い、ミンチになって飛び散った。

しかし、ラミアの人型に見える上半身はフェイクで、その胴体を切り落としても自切で片方が生きて再生するのだ。

見た目以上に硬いラミアの鱗と、強い酸を帯びた血で、SENの刀は所々が刃こぼれていた。

普段なら一太刀で倒せるのに、数十回も刀を振るわねばならず、しかも大きな破片から再生するラミアもいる。

倒した数以上のモンスターが自己増殖し続けている。これではキリが無い。

仕方ない 宝刀 タケミカツチ を使い、雷で仕留めるか。モンスターを倒すために強力な雷を落とすと、一緒に聖堂建物も破壊され、借金の差し押さえが失敗することになる。

しかし、今のSENに躊躇する余裕はなかった。

「あーSEN、早まるなよ。こいつら倒すにはコツがあるんだ。武器は使い捨て、切り刻むんじゃなくて、縦に三枚おろしすればいい」

半壊した聖堂入口に、巨大な武器を構えた大柄な人影が見えた。

半巨人の竜胆は、片手に身の丈ほどの大斧を持ち、籠のような入れ物の中に大量の刃物を背負い、まるで御伽噺に出てくる弁慶のような出で立ちだ。

新たな敵の出現に、ラミアが一斉に襲いかかる。だが、竜胆の振り下ろした分厚い鉄の大斧で頭から胴体まで縦に割られた。

ラミアの血糊で刃先が解けはじめの斧を投げ捨てると、背負った籠から2メートル越えの鉄の大剣を取り出す。

手前のモンスターの腹に剣を刺すと、下へ叩き付けるように振り下ろす。

下半身が二つに裂けたラミアを踏みつけ、上半身も頭から胸、腹まで縦に裂く。

飛び散る血糊が肌を焼くが、竜胆はそれを面白そうにペロリと舐めた。

「巨人族の”王家の血”は、終焉世界で最強血族。下級モンスターの毒には殺られない。それに、こいつらの獣臭も、複数の女が発するフェロモンに慣れた俺には効かないぜ」

「竜胆の言う通り、巨人族の生命力と精力は、人間やエルフを軽く超える。」

だが！変態紳士の俺の前で、もてもてリア充自慢されると非常に腹が立つ。

したがって、お前には『淫獣ハンター竜胆王子』と名乗る呪を掛けてやるう」

「何だよそれ、俺の名は淫獣ハーーー！！」

SEN、ホントに言霊の術を掛けやがった」

怒声を上げる竜胆にSENは暗い笑みを返すと、両手の刀を仕舞い、ナイフのような魔剣に持ち替える。

「なるほど、縦に裂くなら魔法詠唱で充分だ。」

カマカゼ 鎌風よ、タイバカゼ 堤馬風よ、鋭い刃の鞭で彼の者を断て 風魔 鎌鼬！！」

振り下ろしたナイフの刃が、しなやかな鞭のように伸びて、鋭利な風の牙となりラミアのいる空間を切り裂く。

きよとんとした表情のラミアは、自分が頭から縦に切られた事も気付かないまま、キレイに二つに分かれた。

軽々と大剣を振り回し、まるで薪を割るように敵を切りつける竜胆と、風の鞭で一瞬のうちに真つ二つにするSEN。

モノの十分も経たぬうちに、すべてのモンスターを倒していった。

一瞬の形勢逆転、修羅の様な凄まじい暴力に、鳳凰大神官は信じられないモノでも見るかのような顔をしている。

だが、徐々にこみあげてくる怒りを抑えきれず、興奮して赤ら顔の猿のような奇声をあげた。

「ぎ、ぎいいー、霊峰女神神殿 法王さまから授かった俺の可愛いラミア達を殺したな！！貴様ら、許さないぞ。こうなったら塔で飼う200匹のラミアで、お前らも街も全部滅ぼしてくれる」

鳳凰大神官が踵を返し、白い塔へ逃げ去ってゆく後ろ姿を、SE Nと竜胆は嘲笑を浮かべながら眺める。

あんな怪物たちとまともに戦って勝てるわけない、数にモノをいわせて残りのラミアで襲ってやる。鳳凰大神官は邪悪な策を練りながら、ぜいぜいと息を切らして渡り廊下のがれきを越え、白い塔に近づくが、その場で足を止めてしまった。

塔の前では天女のようなエルフと小太りの男が待ち構えていた。

「気高き氷の聖霊よ、汝の敵を凍て尽くせ、永久に光なき氷に閉ざされん

極 零 氷 封 印」

鳳凰大神官の目の前で黒鳶は氷魔法を唱え、ラミアの住まいである高さ30メートルの円柱塔が、丸ごと銀色に輝く巨大な氷の塊に変えた。

「おお、これは凄い呪杖だ！！

人間のワシでも”淡雪ユニコーンの杖”を使えば、氷属性の高位魔法を成立させることが出来るぞ。

さすがのラミアも、魂と肉、芯まで凍ってしまっっては復活できないだろう」

「鳳凰大神官、このお姉さまを弄んだツケを返してもらいましょう。（ここからオツサン声）借金のカタに身ぐるみはいで、ケツの穴まで毛をむしり取ってやるから覚悟しな」

茫然自失でその場に座り込んだ男に、ティダはいつもの調教モードで歩み寄る。

パチン と指をはじくと、『差し押さえ』のシールが貼られた法衣がまるで生きてるかのようになり、鳳凰大神官を脱がそうと動きだす。服を止めようと、押さえつけ大声で怒鳴り抵抗する鳳凰大神官の姿に、物陰に隠れ成り行きを見守った居た神官達もこらえきれずに笑い出す。

裸に剥かれ、腹だけがポツコリ出た貧相な体の男の背中に、ティダは『差し押さえ』シールを貼る。

「これで、お前自身が差し押さえ対象”担保物件”になったのよ。俗にいう奴隷ね。行動に自由はなくなり、馬車馬のように働いて借金返済してね」

「このっ罰当たりな悪魔め！！

俺は、霊峰女神神殿 法王さまから直々に命を受けた大神官だ。

このペテンを法王に訴えれば、貴様らは女神の教えに背いた罰と破門が下されるぞ。

終焉世界で、霊峰女神神殿に逆らって生きていけると思うなよ」

猿顔の鳳凰大神官は、勝ち誇ったような笑みを浮かべながら言葉を放つ。

しかし、突如、見えない力で後ろに引き倒され、体を強く地面に押し付けられたように動けなくなる。

顔を僅かにあげた男の目の前に巨人族の王子が立ち、見下したように睨み付ける。

鳳凰大神官の背中に貼られた「差し押さえ」シールに違和感が生じ、ジリジリと焼け付くような熱を放ちだす。痛みと恐怖で悲鳴を上げた。

今、男がしゃべった言葉は、霊峰女神神殿と対立する巨人王への不敬罪として首を落とされるほどのモノだ。

「鳳凰大神官、貴様に訪ねるが、この聖堂に”鳳凰”と”女神”は居るのか？」

”鳳凰”も”女神”もいない、借金まみれで役立たずの聖堂は潰してしまえと巨人王はおっしゃった。

だが王の影は、鳳凰大神官が『自己破産』を受け入れれば、借金は無かった事にしてやるそつだ」

「へ、なんだ、その『自己破産』とは？」

俺がソレを受け入れれば借金が無くなるのか」

「神科学種の世界で『自己破産』とは、自分の財産を失う代わりにすべての借金がチャラになることだ。

貴様の場合、聖堂を明け渡し大神官の地位を捨てれば、それ以上の借金は無かったことになる。

「差し押さえ」シールも剥いでやろう。どうだ、悪い話じゃないと思うが」

鳳凰大神官は、拍子抜けしたように、王子の言葉を聞いていた。

なんだ、大神官を辞めると言えばいいんだな。そんな簡単な事で借金をチャラにしてくれるのか。

ここを引き払い、ほとぼりが冷めるまで隠れた後、別のエリアで再び大神官を名乗って信者を増やせばいい。いずれコノ地に舞い戻り、こいつらに復讐してやろう！！

「確かに王子のおっしやる通りです。

私は数々の過ちを犯し、もう大神官を名乗る資格はありません。

『自己破産』を受け入れ鳳凰大神官の職を辞します。どうかそれでお許しください」

あっさり大神官職を捨てへこへこと媚ながら頭を下げる男の姿を、竜胆は冷淡に見つめながら、背中に貼られた「差し押さえ」シールを剥がす。

「もう貴様は鳳凰大神官ではない、さっさとココから出ていけ。

これより、巨人王直属の神官 黒鳶くろとびを大神官として、”蒼珠”女神聖堂をコノ場に成立させる。」

クエスト35 少年法王と話そう

鳳凰小都の大通りは、正面門から街の中心に位置する第七位王子の居住する鳳凰館、最深部の高級花街エリアまで続く。

すでに日も沈みかけた夕暮れの中、鳳凰小都正面門から大通りへと、三頭の白馬が猛スピードで駆けてゆく。

目の前を通り過ぎる白馬を見た老婆は、驚いてその場に座り込み両手を合わせた。

二頭の馬は、光り輝く純白の鎧に身を固めた聖騎士パラディンが手綱を握り、それに守られるのように、金の糸で複雑な魔法文様が刻まれた長細い帽子をかぶった少年を乗せた馬が走る。

若葉のような黄緑色の髪に、闇夜を写し取った黒い瞳、薄い生地しろの金の衣を数枚重ね着にした法衣は、霊峰女神神殿 少年法王 白藍あゐのみが着ることを許された衣。

不思議な事に、街中を疾走する馬の蹄の音が聞こえない。

白馬はわずかに地表から浮いて宙を駆け、土煙の代わりにキラキラと「神の燐火」を撒き散らす聖獣であり、ソレを従える霊峰女神神殿は、終焉世界で人々に祝福を分け与える存在だった。

だが、それは過去の話。

今は、霊峰女神神殿自体が、欲と権力闘争の魔窟であると噂されている。

女神聖堂前に集う人の波に押されながらも、痩せた男は壊れたりアカー引き、緑のベレー帽をかぶった少年が後ろから押している。

「オラの名前は抹茶っていうだ。みんなチャチャって呼んでるだよ。」

群衆の邪魔にならないように、かなり離れた道の端にリアカーを置くと、二人はコノ騒動の当事者でありながら、中からはじき出された状態で最後尾になっていた。

チャチャのリアカーに山と積まれたのは、1ピョコ紙幣。

現在パン1個＝100コン（銅貨1枚）で、物価は50倍で5000ピョコも払わなくてはならない。

男がリアカーに放置しても、もはや誰も1ピョコ紙幣など見向きもしない。

「この1ピョコ紙幣はオラのお布団なんだあ。どんなに寒い夜でも、中に埋まって寝るとほんのり暖かくて、朝までぐっすり寝れるだよ。」

「チャチャさん、そのお金一枚見せてください。」

へえ本当だ、とても綺麗な模様、色鮮やかな鳳凰の絵が描かれていますね。

お金として価値が無くても、1ピョコ紙幣を何かに使えるといいな。」

「ああ、その鳳凰の絵を描いたのは 第七バカ王子だよ。」

二年前までは、絵ばかり描いてる役立たず王子と言われてたけど、オラはあの人の描く絵が好きだったな。それが、他の王子の口車に乗ってピョコ紙幣を刷り出してから、様子がおかしくなったんだあ。」

わあわあと、周りの群衆が騒ぎだすのをよそに、ハルと痩せた男はのんびりおしゃべりをしていた。

だって、僕がラミアと戦うとか、大神官と交渉するとか絶対無理。SEN達の邪魔にならないように、離れた安全なトコロで待機するのが一番です。

しばらくすると、群衆の最前列から多くのどよめきが上がった。

「鳳凰大神官が辞めさせられたぞ」

「大神官が身ぐるみ剥がされ、素っ裸で聖堂から出てきたぞ」

「前の大神官、黒鷲さまが、巨人王から青珠大神官に選ばれたんだって?」

まるで伝言ゲームのように、人々が口々に聖堂の中の状況を伝える。

建物の影から様子をつかがっていた人々も集まりだし、更に聖堂側に押し寄せ、群衆の中心は身動き取れない状態になっていた。

モンスターの死体の山と、半壊した鳳凰女神聖堂。

そこから叩き出された猿顔の男を、群衆がぐるりと取り囲んでいた。

「なあ、この大神官が悪魔被いだといって、俺の女房を弄んだんだ。あれはペテンだったのか!!」

「病が治る人形をこいつに売りつけられたが、いくら拝んでも効き目は無くて、親父は死んじまった」

「娘に聖女の素質があるといつて、どこかに連れて行ったんだ!!」

昨日まで、女神の名を語り詐欺三昧を繰り返していた鳳凰大神官の周りを、洗脳術が解けた人々が口々に罵る。

「な、何言ってるんだ!!あの女は本当に悪魔憑きだったし、人形は霊峰女神神殿から授けられた霊験あらかたな品だ。」

お前の娘も、霊峰女神神殿に奉公に出した。しばらくすれば帰ってくる」

猿顔の男は叫ぶように言い訳を喚きたて、それが、さらに群衆の怒りを招く。

誰かが、思わず小柄な大神官の腕を掴んだのがきっかけで、簡単に転んだ猿顔の男に、次々と人々の手が伸びた。

群衆の中を引きずられ、集団リンチも避けられない状態に、聖堂の中から様子を伺っていたSENとティダが立ち上がる。

「あんなやつを助けるつもりか？」

自業自得だろ、100回殺されたって釣りが来るような酷い事をした愚図だ」

竜胆が冷たく言い放つが、ティダは曖昧な笑みを浮かべると答えた。

「竜胆王子と神科学種は、鳳凰大神官に神官職を放棄させる契約を交わした。

皮肉なことに、鳳凰大神官はその契約によって、俺たちの敵から味方にポジションが移動したんだ。

だから、ヤツを味方であるはずの信者に殺されれば、神科学種の「幸運度」が下がる。

特にハルちゃんの「幸運度」奇蹟の力を、愚か者の死で弱らせる訳にはいかない」

『神科学種の終焉』ゲームで、契約によって敵味方が激しく入れ替わる【下剋上イベント】がある。その時、味方になった元・敵キャラを、私怨でPKすると「幸運度」ガタ落ちペナルティーが科せられる。

この終焉世界にも、そのルールが適用されているのだろう。

SENとティダは聖堂の外に出て、興奮状態の人々を掻き分け鳳凰大神官を探す。

しかし、それよりわずかに早く、三頭の白馬が群衆を蹴散らして、人々に小突き回されていた鳳凰大神官の前に現れた。

「おい、あれは、白馬に純白の鎧、パラディン霊峰女神神殿の聖騎士じゃないか！！」

「まさか鳳凰大神官のヤツ、霊峰女神神殿の連中を呼び寄せたのか！！」

リンチで全身傷と痣だらけの鳳凰大神官は、腫れ上がった顔に鼻血を流しながら、助けを求めるように白馬に駆け寄る。

「霊峰女神神殿、法王さま。どうか私をお助け下さい。」

この愚かな連中は女神神殿に反旗を翻し、大神官である私を亡き者にしようとしております」

二人の聖騎士が白馬から降りると、白藍少年法王に近づく猿顔の男を殴り倒した。

「たかが大神官ごときが、軽々くし白藍さまに声を掛けるとは何事だ！！」

「我々は、白藍法王さまの千里眼で、貴様が巨人族の王子に大神官職を売ったと知り、コノ場に駆け付けたのだ」

聖騎士の断罪するような冷たい声に、鳳凰大神官は顔面蒼白になり、金切声をあげてガタガタと小刻みに震えだす。

金の衣を着た馬上の人物を、縋るような目で見上げながら、ひたすら弁明した。

「そ、そんなあ、俺は他所の聖堂の数倍も霊峰女神神殿へ寄付を贈りました。」

アマザキさま、あんた言ったじゃないですか。

要求した金を積みば、いくらでも聖堂を自由に好きにしていいって……」

「アマザキって誰？この人、ナニ意味ワカラナイ事を言っているの。オマエハ、ワタシの許可なく大神官の座を巨人族にウツタんだ。」

霊峰女神神殿とのケイヤクヲ破った天罰が下さなくちゃね。
ほら、女神さまがオコッテル」

少年法王は、白馬に跨ったまま手に持つ巨大な呪杖を天へと掲げる。

すでに日が落ちかけた空に、どす黒い雲が現れ、聖堂上空に渦巻きながら分厚い雲の層を作る。

それは秋の高原に現れる事のない巨大な積螺旋雲。黒雲の中を雷が走り、地表に殴りつけるような風が吹く。

まさか、これだけ群衆が居る中で術を使うのか？

聖騎士たちも、少年法王に思いとどまるよう制止の声をかける。

しかし、まったく聞く耳を持たない馬上の少年は、瞳を爛々と狂気の色に染めあげ、歌う様に最高位雷攻撃詠唱を行う。

二人の会話を聞き、SENは少年法王の姿を目指して、武器を手を駆けだした。

アマザキだと、まさかあの疫病神アマザキが、この終焉世界に送り込まれているのか！？

彼は上限レベル200のランカーでありチートプレイヤー、ゲームNPCデータを丸ごとコピーして様々な悪事を繰り返す疫病神。

そして、神科学種を滅ぼした「黒い蝶」予言を信じる終末思想の持ち主だ。

「裏切り者の大神官と、ついでに雑魚も一緒に、天罰ー！ー！！
イケエエエーガラガラどっかーん」

「やはりテメエ、アマザキイ！！法王に化けているのか」

巨大な雷が形成され、聖堂に落とされる瞬間、呪文詠唱途中の少年法王の白馬に、黒衣の男が飛び乗ってきた。

魔力の込められた呪杖の先を、SENはタケミカツチで一閃する。力は相殺、呪杖の先に埋め込まれた金剛石が砕け散り、タケミカツチの先端がポキリと折れた。

聖堂前に集まった群衆の頭上で、花火のように巨大な雷が弾け、流星群となって降り注ぐ。

人々は、悲鳴を上げながら、物陰へ、聖堂の中へ逃げ込もうと走り出しパニック状態になった。

「うわっ、ちよっと、みんな落ち着いてって、聞こえないよね、ア
ワワッ」

群衆の中に居たハルは、人波に運ばれていつの間にか聖堂内に足を踏み入れた。

チリンッ　チリンッ

ハルの頭の中で、小さな鈴の音が鳴り響く。

脚先が微かに光ったかと思うと、体中を光が駆け巡り、それが倍に膨れ上がって外へ流れ出すような感覚。

ハルの存在そのものが”祝福”という見えない力を発動させるスィッチなのだ。

その瞬間、鳳凰小都中の「神の燐火」が油を足されたように激しく燃え上がり、七色の光を放つ。

鳳凰聖堂の周囲に立ち並ぶ円柱状の塔そのものが楽器であり、笛のように鳴り響き、アンサンブルで女神の歌を奏で出す。

「神の燐火」は降り注ぐ雷を取り込み、さらに輝きを増して、女神聖堂とその周囲はクリスマスイルミネーション状態になる。

ただ一か所だけ、神の燐火の力に逆らい落ちた雷は、猿顔の男を消し炭に変えた。

群衆の感情は、恐怖から安堵、そして畏怖へ。

聖堂前に集った人々は言葉を発することも忘れて、七色に輝く光を眺め、次第にぼつりぼつりと、夢見心地で会話を始めた。

「オアシスで女神さまが現れた時も、聖堂が光り輝いたって聞いた事あるわ」

「じゃ、この中に女神さまが居るっていつのか？こんだけ人間がいるんだぞ」

「きつと天女みてえな神科学種さまと、大神官の黒鳶さまが俺たちを助けて下さったんだ」

「やっぱり、黒鳶さまは女神に選ばれた本物の聖人だ!!」

一人が黒鳶の名前を叫ぶと、次から次へと爆発した様に大声援が沸き起こる。

聖堂の中で、群衆が自分の名前を呼ぶ声を聴いて、黒鳶は驚いて尻もちをつき、竜胆は腹を抱えて笑い出した。

ティダは黒鳶を立ち上げらせ、聖堂のテラスへ連れてゆき群衆の前にお披露目する。

美しい天女は、黒鳶の頬に祝福のキスをすると、高らかに宣言した。

「これより、巨人族 暴力王 鉄紺配下の大神官 黒鳶を、神科学種承認のもと、蒼珠女神聖堂の大神官とする」

霊峰女神神殿の聖騎士は、目の前で繰り広げられる女神の技を、信じられないモノでも見るかのように眺めていた。

終焉世界で、最高位の神官である法王が下した術を、女神は否定するかのよう打ち消した。

そして新たな大神官が任命され、女神の使徒と呼ばれる神科学種が少年法王に刃を向け、互いに睨み合っている。

アマザキと呼ばれた少年法王は、SENの顔を覗き込むと、心底嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、SEN、ホントに久しぶりだね。

俺、もう待ちクタビレテ、セカイナンカトットと終わらせようと思っちゃった。

SEN、俺はアンタを追いかけたのに、2年もハヤク、このツマラナイ世界に取り込まれたんだよ」

「なんだと、まさか……2年前？

オアシスの水が枯れて大神官が生贄乙女を差し出したのも、この街から鳳凰が消えて、黒鷲が大神官を辞めさせられたのも2年前だ」

「俺が法王とイレカワツテ、退屈な世界をオモシロオカシク変えてやったのさ。

ソレナノニSENとネカマ野郎は、現れた途端に女神の使徒気取りで、悪者退治ハジメルンダヨナア！！」

そう呟くと、アルカイックスマイルの少年法王の黒い右目が赤く変化する。

「霊峰女神神殿の神官も、俺が白藍とイレカワツテル事を知ってるよ。

ダツテ、俺が法王で居た方が、連中もスキカツテ贅沢三昧できるんだから」

まるで、付き添う二人の聖騎士にワザと聞かせるように、アマザキは大声で話す。

純白の聖なる鎧に身を包んだ男たちの表情は、顔を覆うヘルムに

隠され見えない。

少年法王は、白馬に跨ると、人々を蹴散らしながら大通りを走り去る。

聖騎士の一人はすぐ少年法王の後を追うが、背の高い方の聖騎士は、しばらくその場を動かず、群衆が黒鳶を呼ぶ声に耳を傾け、SENに軽く会釈すると去って行った。

そして、一番の立役者であるはずのハルは、群衆の中に混じり、チャチャと一緒に嬉しそうに拍手をしていた。

クエスト36 策略を巡らせよう

鳳凰小都の女神聖堂大神官が交代して一日が過ぎた。

昨日モンスターバトルで派手に壊れた女神聖堂は、朝早くから信者たちの手で修繕作業が行われていた。また、鳳凰大神官達が扱っていた怪しげな媚薬やオモチャが中から運び出され、問答無用で廃棄処分される。

聖堂周辺の見回りから戻ってきたSENは、大神官となった黒鳶の部屋の前でうめき声を聞き、慌てて中を覗くと、白髭をたくわえた小太りの男が、簡易ベットの上で激痛に襲われ苦しんでいる姿を見た。

「ど、どうした、黒鳶さん！？ いったい何があったんだ」

「イタタータツ、ああSENさま、これはワシの持病のギックリ腰じゃ。

久々に大魔法を使った負担がでてしまったのお、持病が再発してしまっただ。

魔力が足りなくて、治癒魔法も効き目が無いんじゃ……イタタツ」

黒鳶は、昨日の氷属性高位魔法の行使で、消費した魔力がまだ戻っていないかった。

疲れ果てた老体に鞭打って働かせるのも気の毒なので、今日は自己回復に専念させ、ゆっくり休んでもらおう。

大神官代理は、神科学種の天女様（笑）に押し付けられればいいんだから。

聖堂前には、食べ物の施しを求めて人々が押しかけ、臨時配給所

のような様相を呈している

そこで大きな鍋を抱えて忙しく走り回る少年、ハルの姿を見つけた。

SENは声を掛けようと近づいたトコロで、ハルが氷漬けになったラムリアを食い入る様に見つめる様子に、デジャブを感じて無視しようとした。

「あっSENさん、ちょっといいですか？

ラムリアって半分蛇だから、臭みを抜いて照り焼きにすれば、ほら、ウナギの蒲焼きモドキが作れますよ」

満面の笑みを浮かべ、瞳をキラキラと輝かせながら話しかけるハルに、うっかり「そうだな」と頷いてしまうところだった。

何故いつもハルは、俺にゲテモノ料理を毒見させる気満々で聞いてくるのだろうか？

「ぎゃあああ！！ハルちゃん、ラムリアを喰うとかヤメてくれ。

お姉さまは匂いだけで死に掛けたのに、喰えば猛毒で即死確定だよ」

SENが返事をする前に、ティダが悲鳴を上げて顔面蒼白で拒絶反応を示す。

「そうかなあ……わかりました、ラムリア料理は諦めます。

「このモンスターって、食べられないのばかりでツマラナイな」

SENとティダは、心底がっかりした様子で呟くハルの言葉を聞こえないふりをした。

蒼珠女神聖堂は、ギツクリ腰で動けない黒鷲とSENに任せて、竜胆とテイダとハルは高級花街エリアの『完熟遊誘館』かんじゅくゆうゆうかんに戻ってきた。

三人の帰りを待っていたのは、鳳凰大神官の借金代理取り立てを頼んだ娼館経営者たち。

鳳凰大神官の差し押さえ結果を報告した後、彼らを前に王の影は一つの条件を出した。

頼まれた借金を全額徴収できなかったが、その代わりに、後任の蒼珠女神聖堂と黒鷲大神官を承認すれば、巨人王から借金不足分を保証するというコト。

娼館経営者は、鳳凰小都の実権を握る商売上手な実力者が多い。

大神官に全額踏み倒される覚悟をしていたのに、その条件を呑めば、巨人王が満額保障してくれるのだ。

皆あっさりと王の影の提案を認め、もろ手を挙げて歓迎した。

「女神聖堂の修繕が終われば、子供たちは聖堂で引き取って育てる事が出来ます。黒鷲は巨人王直属の大神官、孤児たちの生活は巨人王が保障するでしょう。」

しかし、これは、まだこの街の一つの問題が解決されたにすぎないのです」

すべての計画を立案した『王の影 YUYU』は、それが成功裏

で終わった後も素直に喜べる気分ではなかった。

「今日の夜明け前には、捨て子が6人聖堂の前に置き去りにされていた。」

夏なら食い物だけ確保すれば何とか生きてゆけるが、これから冬になれば、貧困から寒さを凌げずに凍え死ぬ人間も増えるだろう」

「だがこの貧困は人間達の問題だ。巨人王は成人した人間の世話まで見ることはない。」

人間が巨人の奴隷になるなら、話は別だが」

YUYUさんと竜胆とティダは、お互いの立場から、この街を救おうとしている。

鳳凰小都は、金さえあれば衣食住に困ることはないし、女神聖堂がマトモに機能すれば、最低限の食事は配給で得ることが出来るはず。

だけど、チャチャさんみたいに家もなく路上で暮らす人や、弱く力のない人々は、これからやってくる厳しい冬を越すことが出来るだろうか？

「YUYUさん、蒼珠女神聖堂に子供たちが引き取られたら、僕らも一緒に聖堂に行きますね。人手はいくらあっても足りないし、僕でも手伝える事が色々あると思います」

ハルの言葉を聞いて、一瞬YUYUが固まったように見えた。

「ハルくんは、ずっと完熟遊誘館かんじゆうゆうかんのお客様でいらして良いのですよ。ココに来てから孤児の世話でゆっくりすることがなかったでしょう。」

もう女神姿の囹役をさせたりしませんから、ねっ。

「どうぞ、今日は、ココで、ゆっくりのんびり、過ごして、下さい
！」

YUYUは語意を強め、言い含めるようにハルに話しかける。その後ろで控えていた水浅葱は目配せをして立ち上がると、三人に声を掛けた。

「今日、館にいらっしゃるお客様は竜胆様とティダ様、そしてハル様の三人だけです。」

鳳凰女神聖堂を廃し、蒼珠女神聖堂を立ち上げた成功報酬として、私たちが存分におもてなしいたしますわ」

その場に豪華な食事が運ばれ、普段以上に着飾った娘達が入ってくる。

特に竜胆の周りは華やかな雰囲気、王子様の気を引こうと甘い声で誘い群がる娘達は、だんだんエキサイトして痴話げんかを始める。

「おい竜胆、これじゃあ落ち着いて食事もできない。さっさと相手を決めろ」

綺麗な高級娼婦相手だと、ティダもおっさんモードになるんだね。竜胆はティダの叱咤にフェルモンむんむんの流し目で答えると、食事には手を付けず、若い娼婦を三人連れて部屋を出て行った。

三人ですか、さすが竜胆さん、すごいよ巨人族。

ふと気が付くと、僕の隣には水浅葱さんが座っていて、ご飯をよ

そつています。

僕は目の前の豪華膳に箸を伸ばし、赤魚の姿煮をモグモグと噛みしめる。おや、塩分控えめになって味に深みが増しているよ。

炊き込みご飯は彩りも綺麗で、固くパサついていた米も柔らかく炊けている。

出された料理の味付けが、中華から和食に変化していた。

「この料理、ハルさまのお口に合いますか？」

厨房の者も、ハルさまの真似をして味付けを変えたところ、お客さまからの評判が良くなったと言っています」

「料理人さんたちの腕が良いのですよ。

以前より、料理の味にバリエーションが増えて美味しいですね」

YUYUさんとテイダは、なにやら真剣に話し合っているので、水浅葱さんが僕の相手を務めている。綺麗な人とおしゃべりしながらの食事は楽しいです。

和菓子風デザートを食べているトコロで、部屋に大量の衣装を抱えた女の人がニコニコと笑いながら入ってきた。

水浅葱さんがその衣装を受け取ると、僕の方を何度も見ながら服を選び始める。なんだか、嫌な予感がした。

「ハルさまは、いつも地味で飾り気のない平々凡々服ばかり着ている、せつかく綺麗な女神さまのお顔をしているのに、宝の持ち腐れですわ。

水浅葱がハルさまに似合う服を取り揃えてきました。

さあ、コノ場で着せ替えゴツ、いえ、衣装合わせしてください」

「ええ〜っ、僕は聖堂の片付けしてて埃まみれ、すごく汗臭いん

です。

「こんなに綺麗な衣装を着たら汚してしまいますよ。

「ごちそうさまでした!!!ちょっと部屋に戻ってお風呂に入ってきます」

慌てて立ち上がり、部屋を出てゆこうとするハルの後ろを、水浅葱が服を抱えてついてくる。

「ハルさま、今日は使用人浴室ではなく、館の上客専用露店風呂をご利用ください。

「せっかくですので、私も一緒にさせていただきます。ハルさまのお背中を流させていただきますわ」

「えっ、えーっ、マジですか!？」

それはハルたち三人が『かんじゅくゆうづう完熟遊誘館』に戻ってくる数時間前。

「水浅葱、霊峰女神神殿が動き出しました、もはや時間はありません。

「あの狂った頭真つ白な名前の偽法王がハルくんを手に入れてしまったら、私は手が出せなくなります。どんな方法を使ってもかまいません、今日中にハルくんを墮としなさい」

王の影 YUYUは、普段の冷静で落ち着き払った姿をかなぐり捨て、酷く焦った様子で側近の水浅葱に命じた。

女神聖堂に現れた霊峰女神神殿の白藍法王は、二年前に現れた『アマザキ』という神科学種が入れ替わっている。

ソイツは改造能力チートで神科学種を超える力を有し、YUYU以上にパワーのある殲滅魔法を行使して、鳳凰女神聖堂自体を滅ぼそうとした。

それを、初心者ハルは無自覚で発動させた『神の燐火』で、壊滅魔法を打ち消したのだ。

偽法王を超える女神の力『神の燐火』、それを発動させるハルを敵の手に渡さないためにも、霊峰女神神殿の連中より先に動かなくてはならない。

「YUYUさま、私、ハルさまはちょっと……読心術が使えないので苦手です」

「水浅葱、もはや悠長な事を言っている場合ではないのです。

貴女の手業で、ハルくんを色に溺れさせ快樂漬けにして、愛玩用男の娘に仕立てあげ、王都へお持ち帰りするのです!!!」

脱衣じゃんけん勝負で、ハルに対して読心能力が使えずに敗北感を味わった水浅葱だったが、めったに見られない主の焦る様子に、気持ちを切り替える。

「YUYUさま、後半部分はかなり歪んだ願望が……。

そこまでおっしゃるのでしたら、御期待の応えなくてはいけませんね。

ハルさまはそちら方面が淡泊な様子ですが、私がこれまで殿方に

施した房中術で虜にして、墮としてみせましょう。

くふふっ、YUYUさまとハルさま、三つ巴が出来るかと思うと心躍ります」

「み、水浅葱こそ、後半部分はかなり歪んだ願望が見え隠れしていますよ。

ハルくんを一人きりにするには、保護者気取りのティダと別々にする必要があります。私は邪魔者のネカマエルフを引きつけるので、その間にハルくんを連れ出して、妖艶な身体と手業で籠絡するのです！！」

食事を済ませたあと、二人で部屋を出ていくハルと水浅葱。

その後ろ姿を眺めながらYUYUは某漫画主人公の様に心の中で呟いた。

「計画通り」

クエスト36 策略を巡らせよう(後書き)

今回のタイトルは、YUYUたちのクエスト(笑)

ついに次回はお風呂でドッキリ!!!!!!

クエスト37 露天風呂に入ろう

ドボドボと音を立てて源泉から湧き出る温泉水が、飛沫を立てながら岩壁を流れ落ちて、鏡のように磨かれた黒曜石の湯船に満たされる。

周囲は高く伸びた竹林に囲まれた巨大な露天風呂で、ここが高級花街エリアの中とは思えない風情のある景観だ。

「うわあ、さすが巨人王御用達の上客専用お風呂。

ココまで凝った造りだったなんて凄い。まるで山奥の露天風呂みたい」

普段ハルが利用しているのは従業員用浴室で、幼い子供達を世話しながら慌ただしく入浴していた。それが、今この高級娼館の露天風呂を一人貸切状態だ。

すぐにでも湯の中に飛び込みたいけど、まずは汚れを落として、身も心も清めてからのんびりと浸かりたいね。

ヒノキの香りと敷き詰められた床の感触がいい、お湯に手を沈め温度を確認。

水質はサラリとして、うん、ちょっと熱めで僕の好みの湯加減だ。

桶を手にしたハルは、湯船から湯を汲んでバシャバシャかぶり、準備されていた石鹸を手にする。シャンプーやリンスは見当たらず、濡れた髪に直に石鹸をこすりつけガシガシと泡立て洗い出した。

気分よく鼻歌交じりで体を洗っていると、露天風呂の出入り口の方から物音がした。

ふとそちらに目を向けると……

「あら、ハルさま、私がお背中をお流しすると言いましたのに。そのように乱暴な洗い方では キ レ イ になりませんよ。ふふっ、私がハルさまを全身くまなく丁寧に洗い上げてさしあげます」

水浅葱は豊満な肢体を一糸まとわぬ姿で、妖艶な笑みを浮かべながら露天風呂に入ってきた。ハルは驚いて固まったまま動けない。

「ええっ、ちよつと水浅葱さん、本当に一緒にお風呂に入るつもりだったのー！！」

もしかして、このお風呂って混浴！？」

熟れた胸のふくらみが左右に揺れ、滑らかな腰のラインとそれに続く部分も隠すことなく、まるで見せつけるように成熟した女の色香を漂わせながら歩み寄る。

体格は水浅葱の方がハルより少し背が高い。

床に直で座り込んでいるハルを、後ろから覆いかぶさるように胸と腰を密着させる。

うわわわわっ〜

これは、背中に弾力のある二つの大きなメロンが押し当たられて…
…柔らかさは水蜜桃ぐらいです！

水浅葱さんの腕が背中から前に回されて、細くて長い綺麗な指が、僕のお腹とか、お、お尻を撫でまわしている！

「ハルさま、そんな緊張しなくてもよろしいのですよ。フツッ、私が、手取り足取り、腰取り、導いてあげますわ。気持ちを楽しんで、水浅葱にすべてを委ねてください」

顔を真っ赤にして、パクパクと金魚のように口を開け閉め、声すら出ないハルの顔を両手で包み込むようにして唇を重ねる。

ああ、ハルさまったら、近くで見れば見るほど女神に似てらっしゃる。

お肌も張りがあつて、健康的でぴちぴちして、初々しい様子が私好みです。

このまま押倒して、私の殿方の体を熟知した手業で、あーんなコトやこーんな悪戯をして、喰べちゃいましょう。

すっかり自分の術中にはまった少年の唇の感触を堪能していると、硬く目を閉じていたハルが薄目を開けた。

少し頬を赤らめながらも冷静な視線で、水浅葱の顔を覗き込んでいる。

アノ時と同じ表情、女神を憑依させる心を持ち、触れることのできない高みより見下ろされている圧倒的な感覚。

ハルの指先が水浅葱の頬や脛の上に伸びて、やさしく愛撫するように肌をなぞる。

「あ、あのう、ハルさま、どうしました……」

「水浅葱さん、このままお風呂に入ったら湯船のお湯が汚れるよ。

お化粧落とさなくちゃ、その重たそうな髪飾りも全部取りましょう」

ハルさまは突然何を言い出すのでしょうか？

水浅葱は戸惑いながらも、うつとりするような柔らかいタッチで触れてくる指先に、思わず声を漏らした。

テイダの前には酒瓶が並べられ、手にした盃が空になると、傍で控えた少女がすぐさま酒を継ぎ足す。正面に座る、色鮮やかなガウンをまとった妖精のような愛らしいハイエルフの姿が酒の肴だ。

さて、ハルと水浅葱が席を立ててそろそろ一時間過ぎた。

どうやら仕組まれたらしい茶番に、ここまで付き合ってたのだ。こちらもそれなりの報酬を頂こうか。

「テイダさん、貴方にお聞きしたいことがあります。

私はリアルで、看護関係の仕事に、稀に怪我をして救急で運ばれた男性がセクシーなランジェリーを着用している事があります。

ネカマの貴方も、そういうご趣味があるのでしょうか？」

話を切り出したのはYUYUの方だった。

「残念ながらお姉さまは、リアルに女装趣味はないけど、せつかくのバーチャル世界なら、違う自分になりたいと思っただよ。

軽い気持ちでおねえキャラ演じたら、結構楽しいから、そういうたジェンダーを持っているのだろうね。

しかし、まさかゲームで無性のエルフが、終焉世界では“天使”なんて半端な性で、（ここからオッサン声）正直、男としてのプライドはスタスタな状態だ」

そういいながらも、美貌のエルフは艶めいた微笑を浮かべながら、

杯の酒を一気飲みする。YUYUも少し足を崩して、座椅子の背もたれに体を預けながら、小さなガラスの器に注がれた酒に口を付ける。

「私はまだ、貴方がた三人の関係がよく判りません。

ただの仲良しゲーム友達にしては……まるで違和感がある。

それに、霊峰女神神殿の法王 白藍と擦り替わっている、薄気味悪い自己中のアマザキという神科学種は、SENと知り合いのようですね」

「俺とSENはゲーム歴も長く腐れ縁状態で、リアルも数か月に1回は会って飲みに行く仲だ。

アマザキは悪名高いチーターで、理由は判らないが、いつもSENの真似をして優位に立とうと頻繁に絡んでいた。

ヤツは道徳観念皆無で、欲しいモノはどんな手段を用いても欲しがり、垢ハック（アカウントハック）という犯罪行為にも手を染める」

「では、SENもその犯罪者の仲間なのですか？」

「いや違う。SENはデイトレーダーで、ざら場の板を覗きながら片手でプレイをしている、あくまでゲームは趣味の世界。

アマザキはリアルマーケットレーディングRMTの業者もどきで、どうやらゲームと現実の区別がつかないらしい。

一度SENの真似をして、より優れている自分なら大稼ぎできると思い込み、リアルゲームの株取引に手を出した。結果は予想通り、株の信用取引で散々大損を繰り返し、有り金全部スツて借金までこしらえたらしい。以来バーチャルゲームの中に引きこもり、SENを逆恨みしている。

それが、まさか終焉世界まで追って来たとは、真性ストーカーだ」

終焉世界での予言には、神科学種は“豊穰”と“破滅”に導く者が現れる。

これは偶然ではなく、見えない力が意図したモノなのだろうか？
ティダは話を続ける。

「3か月前、一万人に一人の確率で「幸運度」MAXのアバターが選ばれ、アマザキがそれを狙っているという噂が流れた。

まさか偶然ダンジョンで出会った初心者か、その『幸運持ち』だと知った時には驚いたよ。それから俺たちは、ハルのレベル上げに付き合う名目で、アマザキや他の悪質プレーヤーの毒牙にかからないように見守る事にした」

「貴重な情報をありがとうございます。

ふふっ……確かに貴方がたはハルくんの保護者のようですね。

では、もしハルくんが自らの意思で私たちと一緒に王都に行きたいと言えば、保護者はそれを止めないのですね」

あどけない人形のような顔立ちのハイエルフは、勝ち誇ったようなまなざしで見つめ返しながら、こちらの出方を伺っている。

なるほど、既にコトがなされた後で、成果に自信があるんだな。

「そんな遠回しな言い方しなくてもいいよ。

水浅葱がハルちゃん相手に激しい濡れ場を繰り広げているか、それとも彼女が堕ちているか。さあ、風呂を覗きに行こうか」

「えっティダさん、お風呂を覗くって、そんな破廉恥な、あつ、ちよつとー」

酔っているはずのティダが勢いよく立ち上がると、向かいに座る

YUYUの手を取って、無理やり引きずるように部屋から連れ出す。館の露天風呂目指して歩き出した。しかし、YUYUの右手はしっかりと固く握られ、とても酔っているとは思えない。

「王の影、君に聞きたい事がある。」

SENに訊ねても、いつも答えをはぐらかされる」

押し殺した硬い声にYUYUは顔を上げるが、前を歩くティダの表情は見えない。握られた手が小刻みに震える。

「この終焉世界に来る前に、俺は超新型インフルに感染していたはずだ。」

死亡率の高いインフルで、まだ治療法も見つかってない。

リアルの俺は、俺達は生きているのか、死んでこの世界に送り込まれたのか？」

YUYUの握られた右手がそつと解かれると、表情を無くしたティダが振り返る。しばらく二人の間で沈黙が流れた。

「SENが話さない、ということとはそれだけ深刻な話なのでしょう。私の持つ古代禁書の中に、貴方の居た時代DC・2015に何が起こったのか記されている書物があります。」

望むのなら、本当の真実を教えましょう。

しかし、聞けば貴方は今までの生活には戻れなくなる、その覚悟はありますか？」

「何も知らずに、まるで根無し草のような気分で日々を過ごすより、俺は真実を知りたい。」

「では、真実を教えましょう。勿論、望む事も。その代わりに、私に

力を貸してください。

ゲームプレイヤーが、神科学種として終焉世界に送り込まれるのには理由があります。

しかし私はその理を壊したい。

私は禁忌に手を染める、その共犯者になってもらいたいのです」

この言葉に、ティダはその場で答える事が出来ず、「考えさせてくれ」と早々に露天風呂へと歩を進めた。

クエスト37 露天風呂に入ろう(後書き)

なんと、お風呂が次回まで続く〜)

お色気表現、このままで突き進んでOK?アドバイスください。

クエスト38 秘密を暴露しよう(前書き)

ちよつとR15かも

クエスト38 秘密を暴露しよう

娼婦たちを引き連れて、露天風呂へやってきた竜胆はその場で足が止まった。中から聞こえるのは女の艶めかしい喘ぎ声、激しい息遣いは風呂場に響き渡り、外まで漏れ聞こえてくる。

「ハルさま、もっと強く、ふあ、あ……んあっ……いいつ、ああ」

「水浅葱さん、ここはどうですか。力を抜いて楽にして」

「ひいあ、や、ビリビリと痺れるっ。あん……ハルさまの蜂蜜プレイ、すごい！」

竜胆と3人の娘は互いの顔を見合わせると、露天風呂へと繋がる木の引き戸をわずかに開け、戸に張り付いて聞き耳を立てる。

「竜胆様、水の側室様があんなに激しく乱れて、蜂蜜プレイ何ですよっ？」

「これじゃあ、お風呂に入れませんか。どうしましょう」

「シィー、ちよつと静かにしろよ。」

まさか、やり手の水浅葱が、ガキのハルに嬲られているのか！？湯煙が邪魔だな、もっと近くに行かないと中の様子が判らないな

あ

娼婦たちの言葉にも、盗み聞きに夢中の竜胆は生返事で返す。

中から聞こえる甲高い喜声に、年頃の若い彼女たちもつられて戸に耳を当て、つい妄想してしまい頬を赤く染める。

「おい竜胆、風呂の入り口をデカイ体で塞ぐな、何を隠れてコソコソしている？」

背後から聞き覚えのある声が掛けられ、竜胆は慌てて振り向くと、ハルの様子を見に来たティダと鉢合わせする。

「ティダ、まだ二人は取り込み中だぜ。邪魔に入るなんて野暮な事すんなよ」

竜胆が声を潜めながら露天風呂の中を指差し、再び戸に張り付いた。

後から来たYUYUも露天風呂の入り口まで来たところで、眉間にしわを寄せ聞き耳を立てる。

エルフのティダ、そしてハイエルフのYUYUの聴力は、中から響く艶めいた音を鮮明に聞き取れるのだ。

YUYUは感情を抑えきれない様子でワナワナと震えている。

これはやばい！！

ティダは隣のYUYUから魔力の高まる気配を感じ、慌てて後ろに下がり、覗きに夢中になって異変に気が付くのが遅れた竜胆一行は、魔力の暴走に巻き込まれる。

「水浅葱、貴女にはハルくんを籠絡するように命じたのに！！
なに、アンアン言ってるんですかーーーーー」

YUYUの圧縮された魔力が風圧となって、露天風呂入口の扉を勢いよく吹き飛ばし、ついでに扉に張り付いていた竜胆と娘達も、露天風呂の中へ飛んでゆく。

娘たちの悲鳴と激しい水しぶきの音が聞こえ、竜胆たちは湯船に落とされた。

周りの視界を防いでいた白い湯煙が掻き消え、突然の出来事に驚いているハルと水浅葱の姿が見えた。

「へっ、なんですか?? 皆さん、お揃いで……」

「な、な、なんではこちらのセリフです。」

「あ、あ、貴方がたは、いったい何をしているのですか?!」

薄い浴衣を羽織ったハルが、露天風呂の床に座りこんでいる。その前でうつぶせになって寝そべる水浅葱も、背中半分を露わにしているが、裸ではなくちゃんと浴衣を着ていた。

「ふうん、とても甘い香りがするね。ハルちゃん、蜂蜜使ってるの?」

薄々、二人が何をしていたのか分かったティダは肩を震わせ、可笑しさを堪えきれず手で口元を覆う。

ハルが横たわる水浅葱の肩に触れ、その指先が動くたびに、彼女は耐え切れないような甘い声を漏らしている。

「水浅葱さんの肩こりが、とても頑固に、こっていたので、肩マツサージしたんですよ。」

「ここには刺激の強いローション（媚薬入り）しか準備されてなかったから、代わりに蜂蜜を使いました」

「ハルさまが、私の表情がオカシイからマッサージをするとおっしやいまして、肩こりと疲労でまぶたの痙攣が酷かったのを、蜂蜜プレイで癒してくださいました」

露天風呂の中を響き渡る喘ぎ声に、どんな激しい交わりが行われているかと妄想していたら、種を明かせば肩こりマッサージでした。ハルの手技にメロメロ状態の水浅葱に、YUYUは近寄ると顔を覗き込む。

「ふむう……水浅葱の頑固な片側顔面痙攣は、王都の有名な按摩師でも直す事は出来ませんでした。」

言われてみれば、瞼の痙攣が収まっています。

あら？腫れぼったい眼も一回り大きく、パツチリと開いてますね。頬も綺麗な薔薇色で、顔のむくみもとれて小顔になっているわ」

「YUYUさま、王都のヤブ按摩師の乱暴な揉み方と比べて、ハルさまの蜂蜜プレイは、優しく滑らかで丁寧な、まるで神手トシノテの様です。ハルさまが行う癒し技は、あまりの心地くて、私、昇天してしまひそうでした」

どこのエステCMだというぐらい、水浅葱がハルのマッサージを賛美しまくる。

竜胆の連れの若い娼婦も水浅葱の傍に寄ってきて、興味津々に蜂蜜マッサージの感想を聞いていた。

「ハルちゃん、そのマッサージテクは、どこで習ったの？」

「ああ、僕は高校の部活で補欠というより、マネージャーみたいなポジションで、その部長は、弓道の腕は良いけど『ガラスハート』」

の持ち主で、大会前になるとストレスで顔面痙攣起こして大騒ぎするんです。

水浅葱さんの症状が、部長のそれと同じだったのでマッサージしました。

マッサージ方法は、弓道部顧問の先生から習ってます」

そういつて立ち上がるうとするハルの周りに、素早く細い腕が数本絡んでくる。

「ハルさま、私にも是非、蜂蜜プレイをお願いします」

「ちよつとー、私が先よ！！ふふっハルさま、お互い触り合いっこしながら、気持ちよくなりませんか」

常日頃、水浅葱と似たような悩みを抱える彼女たちは、主人の竜胆を放り出してハルに絡んでいる。

コレって、もしかして、僕が彼女たちを竜胆さんから横取りした事になるの？

うわっ、なんだか背後から凄い威圧感と、肩にすっしりと重い掌が！！

イターーイタイ、骨がギシギシ軋む音がするんですけど。

恐るおそる振り返ると、どす黒いオーラを漂わした竜胆さんが薄笑いを浮かべる。

ヒイツ、視線を下にすると……竜胆さんの大変立派なテーマポールがそそり立ってスタンバイしてます！！ガクブル ガクブル

「んじゃあ、女どもも騒いでいるし、仕方ねえな。

ハルお前も混ぜてやるから「竜胆てめえ！！その気もあるのかよ」ドカバキッ」

巨漢の竜胆の腹にティダの廻し蹴りが決まり、背後に吹き飛ばされ、再び湯船の中に水しぶきを立て落ちた。

その後、露天風呂で裸の付き合いというか、なし崩し的に宴会が開かれています。

僕は、騒ぎの原因である蜂蜜プレイ、もとい、蜂蜜マッサージをリクエストされ、一人15分と決めて、娼婦さんとYUYUさんの肩をマッサージします。

湯船の外なので、寒くないようにちゃんと浴衣を着ていますよ。

「ハルくん、こ、これは……」

うくっ、あっ、首の、付け根部分の、ツボが、一番、効きますね」

「YUYUさんは翼があるから、背中の筋肉の付き方が違いますね。特にココが」

YUYUの小さな背中から、ふわふわ羽毛の純白な翼が4本生えていて、小さく羽ばたく様子に思わず指が伸びる。

「ひゃあっ、翼は、ら、らめえ、そんな触られたら、やぁー！！！」

あまりに激しいYUYUの反応に、ハルは驚いて肩から手を除けると、水浅葱が素早く横から抱きかかえて引き離す。

「んう、あう……ひゃっ、す、すごい、これが蜂蜜プレイ」

あまりに強烈な快楽に、YUYUは息も絶え絶えで、ビクビクと体を震わせながら言葉を紡ぐ。

YUYU様がこれほどまでに息を乱すとは……ハル様の手腕は、まさに私以上、恐ろしい子ツ！水浅葱は心の中で感嘆の声をあげた。

「私、永遠にログアウトしてしまうところでした。

なんとという繊細なタッチに、ツボを知り尽くしたような心地の良い指圧具合、まさに神の手と呼ぶにふさわしい手技です。

はっ、そういえば水浅葱、ハルくんと既成事実と、誑し込みは成功しましたか？」

「それが、最初にハルさまを勢いで襲って出来たのですが……」

ほう、あの快楽を探り当てる素敵な指使い、甘く癒されるような優しいお声に女神さまそっくりの顔立ち、後半は私がハルさまのなすがままでした。

はつきり申し上げます、私のほうがハルさまに籠絡されてしまいました。そして、YUYUさまも同じだと思いますが……」

王の影は、任務に失敗した側近を睨みつけたが、その腕に抱きかえられ、頬を赤らめ瞳を潤ませた状態では説得力が無い。

「否、それだからこそ、今すぐハルくんを無理矢理拉致してでも、愛玩用男の娘に

『ゴットハンド神手』という付加価値付きで、王都にお持ち帰りしたい！！」

「もしもし、お二人さん。露天風呂中に会話が響いて聞こえますよ」

湯船の中で杯を手にした酔っ払いのティダが、ヘラヘラ笑いながら声を掛け、その隣に避難してきたハルが、やっと一息ついて冷えた果物を口に運ぶ。

ハルは、YUYUたちと目を合わせない、どうやら会話の内容をスルーしたい様子だ。

風呂での楽しみを先送りされ不満気だった竜胆も、周りにはべらした娼婦とイチャイチャするのに飽きたのか、離れた場所で湯につかるティダに手招きする。

「おい、ティダ、なんで服着たまま風呂に入っているんだ？

俺たちに裸を見せられないのか、旦那に操立てんのか」

あれ、なんか竜胆さん、SENと二人の関係を勘違いしてる？

言われてみれば、SENとティダはいつも一緒で、傍から見れば、男前の武士と優美な天女のお似合いカップルに見える。

でも中の人は、電波オタクとネカマおっさんという、残念な組み合わせだけ。

「筋骨隆々の立派な体格をした巨人族の前で、貧相なエルフは体を見せたくないよ」

確かに、ムキマツチョで凄いシンボルの竜胆さんの隣は、ちよつと遠慮したい。

声を掛けられたティダは、長い銀の髪を結びあげ、性的特徴のない体を隠すように袖のない薄い生地の水着を着ている。その姿は逆に、湯の中で微かに素肌が透けて見える衣は、裸より禁欲的な色気を放っていた。

本人もそれに気付いているのか、艶めいた微笑みを口元に浮かべ

ながら流し目を送る。

「ねえハルちゃん。SENがオタクだと言っても竜胆は意味が分からないだろうね。」

でも、SENと出来ているなんて勘違いは、精神衛生上痛すぎるなあ」

ティダさんにそう言われて、誤解を解くためには、第三者の僕が竜胆さんに話した方がいいと思った。

オタクをどう説明するか、少し考えをまとめて竜胆さんに声を掛ける。

「実は……SENさんは、神科学種の神話の美しい聖霊アニメ キャラに、永遠の忠誠を誓っているのです。ティダさんとは親友で、それ以上の関係はありません。」

何故なら、SENさんの心は常に、神話の聖霊アニメ キャラとともにあるからです」

そうだったのか！と、竜胆さんはちょっと感動した様子で聞いていたけど、YUYUさんは会話の意味を正確に理解したのだろう。ひどく冷めた目で見ている。

本当のことを話したただけなのに、何故か良心がとがめる。

「そういう色男気取りの王子さまは、どんなお姫様を探している？ 美女を取つかえ引つかえ、喰い散らかしてばかりいたら、そのうち碌でもない女に引つかかるんじゃない」

「人間や猫人族の可愛いタイプが好みなんだが、俺相手だと一人では体力が持たない。」

巨人族は気位が高くて苦手だな。

「そういえば、あんたはエルフの神科学種だから人間より頑丈だし、どっちでもいけるんだよな」

「ほう、面白いことを言うのね。何ならその、だらしない下半身を調教してあげましょう。(ここから野郎のダミ声)このクソ生意気な小僧が、あqwsふじこgethy」

う、うわぁー。禁止用語連発で、こ、こわいっ！！

どうやらティダの隠していたコンプレックスを、竜胆さんが暴きまくりで、ひどく切れてます。

「ホホホッ、お二人とも熱くならないで下さいな。」

そういうティダさまの理想のタイプは、どのような方ですか？」

見事に空気を読んだ水浅葱が、話の矛先を切り替えてきた。

竜胆と睨み合っていたティダは、隣で幸せそうに湯につかっている少年に目を向けると、口元をほころばせながら答えた。

「そうね、お姉さまの理想はね、素直で明るくて可愛らしい、お料理上手なお嫁さんが欲しいわ」

ふむふむ、ティダの理想の彼女って、思ったより平凡なんだね。

あれ、話を聞いた竜胆さんや水浅葱さん、それにYUYUさんまで押し黙ってしまったけど、いったいどうしたのだろう？

ゆらり、YUYUは凍てついた微笑みを浮かべながら立ち上がる。

「ふつ、ここにSENがいれば、確実に貴方の顔面に蹴りが飛んでいますよ。」

私とした事が、ネカマだと思って油断していました。まさかティダさんは、洒落や冗談ではなくガチで狙っていたのですね。

理想のお嫁さんですか、それはライバルとして交戦布告と受け取ります」

なんだ？温泉の湯が急に冷めてきた……

えっ、YUYUさんの背後に、殲滅氷魔法の魔法陣が浮かび上がっている！！

YUYUと相対するティダは、鋭い目つき、そして口元に残忍な笑みを浮かべ、狂戦士モードとなる。無言で立ち上がると、ハルを湯船から引つ張り出した。

ピキッピキピキ　パリンッ

瞬く間に、YUYUから溢れ出した冷気で、温泉の湯に氷が張り、中に居た竜胆と娘たちは凍りついてしまった。

「これはいけません。ハルさま、早く二人を止めてください」

「ええっ！！最弱の僕に、戦闘状態のYUYUさんとティダさんを止めるなんて無理です。例えるなら、スーパーサイヤ人に赤ん坊が立ち向かうくらいムリゲーです。」

そもそも、どうして二人は睨み合ってるんですか？！」

「それはお二人が、ハルさまの寵を争って、ああ、もう間に合いません！！」

ハルさま、こうなったら身を挺して止めてくださいな」

ハルよりわずかに体格の良い水浅葱は、火事場の馬鹿力で少年を肩に担ぐと、争う二人に向けて力いっぱい放り投げた。

「ひいっ、ティダっ、YUYUさん、喧嘩はやめ、ああああー」

水浅葱の上手投げは見事に決まり、ハルは宙を舞いながら二人を止めようと腕を伸ばす。その腕がかすかに光り、神の燐火と似た色を纏う。

伸ばした右手は狂戦士モードのティダの結界を破り襟首を掴み、左手は壊滅氷魔法を解除させYUYUの翼を掴み、三つ巴で凍った湯船の中に落ちて行った。

「へ、へーくちよ。結局、あの騒ぎの中で風邪を引いたのは僕だけか」

青い顔をして、布団の中でガタガタ震えているハルの看病をしているのは幼い少女。

「ダメじゃないハルお兄ちゃん。

萌黄が居ない間に、お風呂で長い時間遊んで、湯冷めして風邪をひくなんて。

もう大きいんだから、しっかりしなさい」

熱にうなされながら、子供の萌黄に叱られているハルの姿を、襖

の向こう側からYUYUとティダが神妙な顔で見つめている。

「では、ティダさん。この件はハルくんの自由意思に任せる、お互い恨みっこなしで、正々堂々と勝負しましょう」

「ああ、なんだか本音を出し切って、俺も吹っ切れたみたいだよ」

YUYUは小首を傾げて、隣にたたずむエルフの麗人を見つめる。ティダの声色が、芝居がかったモノから、しっかりと意思のあるアルトの声に変化していた。

「俺はこのエルフの器で、終焉世界を生きてゆこう。」

共犯者、いいだろう。その腹黒い企みを手伝ってやる……!!」

クエスト39 対アマザキ PKバトル

ハルが「露天風呂でドッキリなう」で大騒ぎしていた頃、SENは一人、女神聖堂の白い象牙の塔の中を上へと登っていた。

円柱形の細長い建物の内部は、壁面部分がすべて本棚になっており、コノ地が文化都市として一世を風靡していた時に印刷された書籍が保管されている。

SENの持つ数冊の本の裏表紙には、奇妙な文様が描かれている。オアシスで文様を起動させた時、航空写真風マップは鮮明に表示されたが、ココ鳳凰小都では何故かそれがうまく起動しない。

立ち並ぶ建物が障害となつて電波が届くにくいかもしれない、そう考えたSENが一番高い象牙の塔の最上階目指した。

「ふう、なんとという誘惑の多い場所だ、ココの本は神話関係が多くて、ついつい立ち読みしてしまう。」

特に美人画100選の本の中の女神画が素晴らしい。ココにも、マニア魂を揺さぶるほどの萌え萌え女神像を描く絵師がいるとは驚いた」

SENは、うっかり手に取った本を3時間も読みふけり、眼精疲労気味のこめかみを押さえながら、手すりにつかまって最後の階段を登り、塔の屋根部分に繋がる扉のドアノブに手を掛けたところ……

「遅エエエエエ　！！馬鹿は高いところが好き、ジャネエダロ。」

SEN、いつまで人を待タセルんだよ。俺様はアンタト違ッテ色々忙しいんだ。

「ここでは感動の再会もあったモンジャネエヤ」

扉の碎け散る音と、鋭利な穂先の槍が10数本余り飛び込んでき

た。

SENの立っていた場所に刺さり、その衝撃で階段の足場が崩れおちる。

寸でのところで、壁に飛び移り難を逃れたSENは、ぽっかりと空いた扉の向こう側に、宙を浮く白い白馬と、それにまたがる若葉のような黄緑色の髪に金の法衣を着た少年法王、アマザキがアルカイックスマイルを浮かべている姿を見た。

突然の相手のPK行為、ブレイヤーカーしかしそれは二人にとって挨拶の様なモノで、SENは素早く壁を蹴り、天窓に体当たりして外へ出る。

ソレを待ち構えていたアマザキは、手にした武骨な鉄の刀を横一線に振り切った。

歪んだ波動の刃が、離れた相手の体の、細い首を狙って切り落とす。

刀の名はチャタンナキリ、首を落とす事だけに特化された妖刀であり、アマザキは神殿に納められていたこの刀を手にした時から振るう相手を決めていた。

「ヒヒイイーなんだあSEN！！手ごたえが無いなあ、死ンジマエヨ。」

神科学種でも、首ヲ落トサレルト蘇生できないんだぜエ」

頭部と胴体が別々に分かれたSENの体が屋根から落ちる。

しかし、その切り口からは血が出ない。

ゴロゴロと屋根を転がる頭が、途中でぺらりと薄い紙に変化し、胴体もぺらぺらな紙になって、風に煽られて飛んで行った。

屋根の反対側から、苦虫をかみしめた顔をしたSENが現れる。天窓からひよいと顔を出したSENは、面白くてたまらない様に

目を爛々と輝かせる。

アマザキの背後に、表情無く静かにたたずむSEN。

「粘着アマザキ、久しぶりぴょん

今お前の切り殺したのは『影分身 SEN4号 油断』だぴょん
囷に引つかかって手の内を見せるなんて、毎度詰めの甘い、愚図
な性格がよく出てる攻撃だぴょん」

「その虫唾の走る話し方は『SEN3号 暴露』かああ。

フザケンジャネエー、貴様ら全員、首チヨンパしてやるぜえ」

屋根に上がる前に、SENは護符を取り出し、外のアマザキに聞こえないよう影分身の術呪を唱える。

「我が真の姿を見るものは有であり皆無

見えなき闇夜よ、辺りを覆いつくし彼の者を惑わせん 黒霧 幻想影分身!」

違法チートで最強能力を保持するアマザキ相手に、正面から戦えば負けは目に見えた。

だが、素晴らしい力と技を持っていても、情緒不安定なアマザキを混乱させることで、戦いに隙が生まれ、それが勝ちに繋がる。

そのSENの読みは半分当たって、半分外れた。

失った影分身もSENの一部であり、残された影分身のうち厄介な性格の「ナンバー3 暴露」が暴走し始める。

再び妖刀を構えたアマザキは、宙を駆ける白馬にまたがり、上空から影分身達を見下ろすと楽しそうに次の獲物を吟味する。

正面に立ち真つ向勝負のSEN1号と、塔の中に姿を隠すSEN2号、そしてSEN3号は……

「ほらほら、どこに目が付いてるびよん　ここびよんびよん」

急に白馬の聖獣が嘶き声を上げ、後ろ脚を必死になって動かそうとする。

アマザキが背後を振り返ると、馬の脚にしがみ付いたSEN3号が後ろ脚2本を互いに括りつけている。

ケタケタと笑いながら前足に掴まるうとするSEN3号に、イラついたアマザキはチャタンナキリを振るう。

妖刀は、最も近くにある首を落とす。

その瞬間、距離を取り塔へ飛び移ったSEN3号の目の前で、聖獣の首が音を立てて切り落とされた。

首を失ない、キラキラと光の粒を撒き散らしながら地面へ落ちる白馬を乗り捨て、アマザキは足元に魔方陣を描くと、空中に浮かぶその上に立つ。

能面のように表情を失ったかのように見えるが、瞳には憤怒の炎が渦巻いている。

「ケツ、蠅がたかってくるみたいなお見苦しい抵抗スルンジャネエヨオオオ」

今の俺は、女神神殿最高位の法王サマで、近いうちに巨人王ダト

カナンダトカモぶつ殺す予定だし、終焉世界最強TUEEEだぜ」

そう怒鳴ると、アマザキは指輪をはめた左手を不自然に動かす仕草をする。

塔の中から刃物同士の擦れるような音が聞こえると、中に潜んでいたSEN2号が外に飛び出し、逃げた獲物を追いかける魚の群れのように、鋭利な穂先の槍が10数本飛んできた。

2、3本は止めることが出来るが、残りの槍がSEN2号の全身を貫く。

体中にボコボコ穴の開いた影分身は、紙ふぶきの様に千切れて宙を舞った。

「なるほど、指に填めた指輪で、槍を遠隔操作リモートコントロールしているのか。

影分身も残り2枚、我々の出来る事は……よろしいか？暴露」

「めんどくさいけど、ココはアタイ達で止めないとマズいびよん

ねえ、盗み聴きしてる陰険アマザキ、そろそろお遊びはおしまいだびよん」

次の槍のターゲットとなり、塔の壁面をハムスターのように駆け回っていたSEN2号は、軽業師のようにチャクラムで槍の柄を断ち、数を減らしてゆく。

その様子に、再度妖刀を握り直したアマザキは、今度は仕留め損ねないように、足元の魔法陣を移動させSEN2号の正面に回る。

「なあSEN、お前が居ない2年の間に、俺がどれだけ荒稼ギシタカ聞キタイカ？

ヒヤハアアー、ゲームマネーは11桁超えたビリオネラだぜ。ココは最高に稼ぎやすいサーバーだな。メインNPCも殺りたい放題

で、俺二敵ウ奴ナンカ一匹もない」

SEN3号は、甲高い声で、口に泡を浮かべゲラゲラと笑う男を、奇妙な生き物でも見るかのように眺めた。

「へえ、凄いぴよん それならさっさとログアウトして、ゲームマ
ネーをRMTの業者に換金してくるといいぴよん」
リアルマネートレーディング

ふと、笑い声が止み、アマザキは目の前の黒袴の武士を通り越して、その彼方を見つめうわ言のように呟いた。

「なんで俺様が、アンナ現実リアル二戻ラナクチャいけないんだ。

インフル専門病棟に隔離されて、ロクに診察もしない、薬モ効キキメガナイ、なんでエ俺様がこんな目に！！」

「終焉世界に2年も居ながら、今だ真実を認める覚悟が無いとは、哀れな奴だ」

ぐちゃり

肉をえぐる音がして、アマザキの前に立ちふさがっていたSEN3号の心臓辺りから黒い木刀が生え、妖刀を握るアマザキの拳を叩き割る。

SEN3号を囮に、その体を盾にして、SEN1号はアマザキに攻撃を加えた。

弾き飛ばされたチャタンナキリをSEN1号は奪い取り、紙切れになって消えるSEN3号と、砕けた腕を抱え悲鳴を上げるアマザキを睨みつける。

「最後に残ったのが『影分身 理性であり闇夜の剣聖』の我である

事を感謝せよ。

他の奴なら、迷わずこの刀で貴様の首を刎ねたであろう。

愚かな者よ、終焉世界で最高位の者は、女神神殿でも巨人王でもなく、ミゾノゾミ女神と使徒の神科学種である」

その時初めて、ほんの一瞬、アマザキが怯えた表情を見せた。

黙って睨み合う二人の沈黙を破るように、高い馬の嘶きが聞こえ、白馬を従えた聖騎士が塔の影から姿を現した。

「もう時間切れだ、搾り取れるだけ奪ったし、コンナ薄汚レタエリアはイラネエヨ。

だが、俺様に逆らった報復はさせてもらうぜ。

イヒヒヒッー今年は厳しい冬にナリソウダナアア」

そう言つとアマザキは身を翻し、白馬の聖騎士の後ろに跨る。

何事か急いている様子の聖騎士は聖獣を操ると、人馬では出せない速さで駆け、鳳凰小都から去って行った。

「いつ痛えー。マジ死ぬかと思つたあ。

影分身が心臓突くなんで、1号は本体の負担をなんだと思ってるんだあ」

影分身の術が解けた途端、首から血を流し全身切り傷だらけで、地面にうずくまり悶死しかかったSENは、うめき声をあげながら文句を言う。

半分詐欺の様なバトルだった、次はこんなもんで済まないだろう。

それにしても、SENはアマザキの話に、少し違和感を感じた。

影分身たちとの会話の中で、ヤツはひたすら自分の話しかしなかった。

会えば真っ先にハルの事を問質すと思っていたのに、オアシスや鳳凰女神聖堂での出来事も、俺とティダが仕組んだことだと思いついでる。

霊峰女神神殿の最高権力者である法王に、ハルの存在が知られて無い事の方がおかしい。

これは、あちらも一枚岩では無いというコトか。

その場で自己治癒を何度も繰り返し、やっと体を起こせるようになったSENが空を仰ぐ。

わずかな間に、底冷えするような冷たい冷気が流れてくる。

ふわふわと、綿毛のように白い物体が舞い降りるのを、忌々しげに見つめた。

「あの野郎。この街丸ごと、氷漬けにするつもりか？」

クエスト40 冬に備えよう

SENとアマザキが激しいバトルを繰り広げた直後から降り始めた雪は、夜には吹き荒ぶ風と覆まじりの雪になり、一夜で鳳凰小都は銀世界となった。

突然の寒波の到来で、外で野宿できなくなった浮浪者たちが聖堂に逃げ込んで来て、いや、冬への備えが間に合わなかった貧しい人々も、寒さに耐えきれず大挙して聖堂の扉を叩いた。

蒼珠女神聖堂が興されて1週間が過ぎた頃には、寒さを逃れる民で聖堂は満杯状態になり、王の影の配慮により近所の宿屋を貸し切った事態を凌いでいた。

「この寒波は偽法王 アマザキの仕業でしょう。対抗できるのは我々神科学種だけです。

しかし私もメインは氷魔法で、炎系魔法術は苦手で術の解除は困難。

ティダは狂戦士で攻撃魔法と自己治癒魔法、SENも武士だから似たようなものですね。

ハフハフ……呆れるほど見事な脳筋パーティー、まったく一人くらい、ハフハフ……魔道師は居ないのですか。ハフハフ、ああ、何て美味しいのでしょうか……！」

蒼珠女神聖堂に住居を移したハルを追いかけ、視察という名目で、実は手料理を食べに来たYUYUは、熱々チキンドリアを額に汗しながら美味しそうに食べている。

その様子を、大鍋を抱えながら眺めるハルは、毎日の大量の炊き出しでさらに料理の腕が磨かれたような気がした。

大切な戦闘レベルは、1ポイントも増えてないけれど。

そんなYUYUの真向かいに座るティダは、お茶をすすりながら答える。

「聖堂がこの寒さに耐えられるのは、『神の焔火』による祝福があるからね。

今、蒼珠女神聖堂は、ハルちゃんという祝福増強ブースターのおかげで寒波を免れている。その恩恵を街全体に行き渡らせれば、寒波から免れることができるんだけど。」

「ティダさんの言う通りですが、しかし『神の焔火』は、まだ私たちの知らない未知の技術であり、そして終焉世界ではすでに失われた技術なのです。

あの神科学種の面汚し、中二病のアマザキが行使した氷魔法がどれだけの期間作用するか予想もできません。

長期戦も視野に入れ、王都に炎の結晶を大量に確保するよう緊急要請しました」

「まあ、素晴らしい状況判断、さすがYUYUさまですわ。

炎の結晶があれば、この『コタツ』を実用化することができるのですね。

外は吹雪だというのに、ぬくぬくと温まりながらハルさまのお手製アイスクリンを頂けるなんて、こんな贅沢ありませんわ」

実は、この女神聖堂の食堂の一部に畳が敷かれ、掘り炬燵が作られていた。

YUYUとティダと水浅葱は同じコタツに入り、そこで作戦会議を行っている。

コタツのアイデアは、貧乏学生で隙間風の入るボロアパート暮らしのハルの提案で、コタツのヒーターかわりに炎の結晶を使っていた。小さな結晶一つでは部屋中暖めることは出来ないが、炬燵の中の足元を温めるだけで随分と寒さが凌げる。

女神聖堂に不似合な掘り炬燵は他に五台ほど置かれて、どれも大人数で、チャチャを中心とした信者たちが要望に応じて大量製作を行っている。

「彼らにも仕事が出来て良かったです。といつても、まだ冬はこれから……」

コタツ程度の暖房器具では、気休めにしかなりませんね」

この高原エリアの森林ほとんどを占めるのは書籍樹という木だった。簡単に印刷用紙に加工できるよう品種改良された樹で、その反面、水分を多く含んでいるため燃料薪には適さない。

したがって、鳳凰小都では冬になると薪不足に陥り、高級娼館などは高価な『炎の結晶』を大量に使用した。

そして貧しい人々は、衣服を着こみ身を寄せ合って、隙間風の吹き荒れる家の中で、僅かな薪の炎で暖を取り寒さを凌ぐしかなかった。

老婆の鳴き声は、その轟音にかき消された。

竜胆は聖堂へ向かう道の途中で、奇妙な場面に出くわす。

一見すると、大勢の男たちが手分けして廃屋を解体しているように見えたが、道の端にポツンと椅子に座らされた老婆が泣き叫び、必死でソレを辞めさせようとする。

近くで様子を見守る者たちも、気の毒そうに老婆を眺めてるだけだ。

これは、家賃を払えずに追い出されたって事か。

その場面に立ち止まり黙って見ている巨人の姿に驚く者もいたが、彼らも構っている余裕はなかった。

ボロ家を壊しても薪を確保しなければならぬほど、住民は困窮している。家が解体され、大きな木材が運び出された後、小さな木屑を拾おうと人々が群がり、騒乱状態になる。

「まったく嫌になるぜ、何で人間は、こんなに無力で哀れなんだろう」

竜胆は呆れたように呟き、涙も枯れ果てヒイヒイと荒々しく息をして、寒さで凍える老婆を軽々と摘み上げる。片腕で抱きかかえ自分の来ていた外套でそっと包みこむと、聖堂へ向かって歩き出した。

YUYUが食事を終えた頃、食堂に大勢の子供たちがなだれ込んできた。

三人はそっと席を外し、ハルは大鍋を火にかけ食事の準備を始める。

娼館に居た子供たち、転送ゲート前のバザーで物乞いをしていた子供は保護され、更に寒波を逃れるために親と一緒に聖堂に来た子供もいる。

蒼珠女神聖堂は孤児院としての役割も担い、念願叶って大神官に任命された黒鳶くろとびは、ギックリ腰をなだめながら子供たちに囲まれ忙しく動き回っていた。

運よく炬燵に陣取った子供も含め、食堂のテーブルは子供たちで埋まり、目の前に料理が配膳された。

お子様ランチ風卵ピラフの上には小さな旗が乗っていて、隣にカピパラ肉のから揚げが三個付いている。大きめの器には、具のたっぷり入ったシチューが注がれた。

普段は固いパンのかげらと、具のないスープがほとんどの食事をしている避難民の子供達からは歓声が上がリ、早く食べたくてソワソワしている。

この食事は、巨人王から蒼珠女神聖堂への援助もあるが、砂漠エリアで収穫される『おにぎりの実』を『蒼珠』との等価交換で大量に入手することで、食糧が容易に手に入るようになっていた。

「痛たたつ、では食事前の祈りの言葉を捧げよう。」

イタツ女神さまに与えられた祝福を、イタタツ皆で感謝して……」

大神官黒鳶は、子供たちを前にしてに食前の祈りの言葉を捧げる。祈りが終わると、一斉に食事を始める子供たちの様子を黒鳶は満足そうに眺めながら、食事には手を付けず、痛む腰に手を廻し背中を丸めながら食堂を出てゆく。

その黒鳶の姿を、大鍋前で給仕しているハルは心配そうに眺めた。

テイダやSENが治癒魔法を施しても、黒鳶の頑固なぎっくり腰はなかなか完治しない。ハルの神手ゴットハンドマジは肩こり限定なので、気休め程度の効き目しかなかった。

誰かが黒鳶に呪いをかけているらしい。

鳳凰小都中央に位置する場所に、豪華絢爛な六層六角の巨大な建物がそびえ立つ。

館を彩る極彩色の鳳凰の彫刻に、色鮮やかな鳳凰の壁画は、館の主巨人族の第七位王子 蒼褐あいかちの作品だという。

『鳳凰館』と呼ばれるその館は、今、奇妙な静寂に包まれていた。

館を厳しく警備していた兵が姿を消し、鳳凰館の周囲は荒んだ雰囲気で、汚物が散乱してゴミ溜まりになっている。

建物の中も、部屋を美しく彩っていた調度品が姿を消し、畳の上を土足で複数の人間が荒らし回った痕跡がある。

ゴミ屋敷と化し、部屋の中に入り込んだ死黒鳥が飛び回って糞を撒きちらしていた。

「おい、誰かいないのか！！主が呼んでいるのだぞ、返事ぐらいしないか」

第七位王子 蒼褐は、罵声を上げながら苛立った様子で部屋から出てくると、幼少からの世話係の男が一人、疲れはてた表情で立ち尽くしているのを見た。

第七位王子は、ボサボサの髪はシラミにまみれ、薄汚れた服を着て全身から異臭を放ちながら、年とった側近に詰めよる。

「おい、召使たちの姿が見えないがどうした？」

神聖な巨人王に一番近い王子である、俺の世話をする勤めを仕事をサボるとは。

「許せん、召使全員に、厳しい罰を与えてやるぞ」

「なにをおっしゃいます蒼褐さま、彼らは奴隷ではありません、ただの召使いです。」

「まともに給金も払われずこき使われれば、逃げ出すのも当たり前ではありませんか」

「そういう年をとった男も、元は上等の服が薄汚れて、表情も暗く病んだ様子だ。」

「何をいつてるんだ！！召使どもに、給金は100万紙幣も払っているぞ。」

「それだけあれば贅沢に暮らせるではないか」

「以前なら金貨100枚の価値があったミリオン紙幣ですが、この町の物価は王子が紙切れを刷りまくったせいで50倍に跳ね上がっているのですよ。」

「100万紙幣も、今はたった金貨2枚の価値しかありません」

「じゃあ、1億紙幣を刷ればいい。」

「もうこの話は仕舞だ。腹が減ったぞ、飯を準備しろ、それから女を5人ほど寄越せ」

「蒼褐王子、館の調度品はすべて売り払い、ここには米一粒買う金ありません。」

例え1億紙幣刷ったところで、そんな紙切れで物売ってくれるバカは、鳳凰小都には誰も居ないでしょう」

そう冷たく主に言い放ちながらも、なんとか苦勞して用意した食事を差し出すと、自分は空腹に耐えながら席を外す。

親代わりに、長年王子の側で勤めていた男も既に限界だった。

巨人族として体位だけは立派だが、知も武を並以下で社交性もない、バカ王子と蔑まれていた。趣味の絵に没頭し、美食と女を楽しむ害のない凡庸な主だった。

それが、あの悪魔のような弟王子に舌先三寸で騙され、王位の証である鳳凰と引き換えに偽りの体と贅沢を覚え、満たされない欲望に溺れた。

この一月余り、金が尽きたと知った女たちは王子に寄り付かなくなり、食事も貧しくなって巨体を維持できず、体重もかなり減ったのは不幸中の幸いだ。

隠密の情報から、高級花街エリアに、王命を受けた『第四位側室王の影』とその部下たちが潜伏してらしい。ここまで街を疲弊させ、恥さらしとなじられようが、もう『王の影』に縋るしか道は無い。

弟の紫苑王子から引き離し、蒼褐王子の目を覚まさせたいのだ。

ふと、雪に覆われた街を見下ろす庇の外に目をやると、忌々しく

も美しい白い雪がふわふわと空から降ってきた。

クエスト41 女神の奇蹟

「はあ〜っ、今日も雪がドカドカ降ってお外で遊べないね。退屈だよお、ハルお兄ちゃん」

蒼球女神聖堂の大食堂のテーブルの上に突っ伏して、金色の髪を鮮やかに散らしたまま話しかける幼い少女に、青い髪の少年は困ったように微笑みながら、テーブルの上に広げられたカードを箱に仕舞う。

「萌黄ちゃん、10回連続のババヌキは飽きちゃったね。何か別の遊び、そうだ、ジャンケンでもする？」

「ハルお兄ちゃんには誰も勝てないのに、それ卑怯だよ。いち、にーい、さんっ……もう8日目。早く雪止まないかなあ」

テーブルから顔を上げた萌黄は、指を折って建物に閉じこめられている日数を数えると、またパタッと顔を伏せた。

寒波に襲われた鳳凰小都を取り囲む壁の外、街道沿いに立ち並ぶスラムには、聖堂の『神の燐火』が及ばない。

降り続く大雪で、スラムの粗末なバラック造の家は、簡単に屋根に積もった雪で押しつぶされ、住処を失なった人々が大拳して街中に避難してくる。

鳳凰小都を統治するはずの第七位王子の指導力は皆無に等しく、

各コミュニティのリーダーや商工組合、そして花街の支配者が、それぞれのテリトリーで自主自治状態になっている。

このような災害時には、何の後ろ盾もない貧しい人々の唯一の拠り所は、終焉世界に豊穰をもたらす女神の教えであり女神聖堂だった。

今日も朝早くから、YUYUや竜胆、ティダは、大雪被害の対策と避難民の対応に追われ出払っている。

そして、この慌ただしい最中、SENは留守中起こったアマザキとの戦闘で負った怪我の療養という名目で、象牙の塔の書庫に引き籠もったままだ。

ハルは、聖堂で暮らす孤児たちの食事の世話と、ついでに遊び相手を手を任されていた。

食堂から子供たちの元気な笑い声が響き渡り、並べられたテーブルの間や下の狭い隙間を縫うように、駆けずり回って遊んでいる。

畳の上に掘りコタツが設置されたスペースには、竜胆が拾ってきたお婆ちゃんたちが、背中を丸めウトウトと居眠りしていた。

竜胆が連れてくるのは何故か老婆ばかりだったが、保護されて身だしなみを整えると”美”老女揃いで皆を驚かせた。

さすが竜胆さん、ここまで徹底した審美眼で女好きを極めるとは、なんて漢前だ！！

食事担当のハルは、頭の片隅で夕食のメニューを色々と考えながらも、退屈し切った萌黄の話に付き合っていた。

「塔の中には本がいっぱい置かれているから、本の読み聞かせしようか。」

萌黄ちゃんは、どんなお話が聞きたい？」

ハルは手元に置かれた、SENが象牙の塔から持ってきた本をぺらぺらめくり……大人向けの絵柄にパタンと本を閉じる。

SENさんは、塔に閉じこもって、いったい何をしてるんだ！！

ふと気が付くと、ハルの居るテーブルの周りを子供たちが取り囲んでいた。

娼館で保護していた子供とはタイプの違う、目つきの鋭くやせ細った少年少女は、聖堂が最近保護した浮浪児たちだ。

どの子も不安そうな顔をして、何か話したげに二人を見つめ、その中で1人リーダーらしい黒髪の少年がハルの前に歩み出てきた。

「白髭オツサン、いえ、大神官さまの体調が悪くなっている、病気はもう治らないの？」

今日は朝食にも姿を見せなかったし、だんだん元気が無くなってきているみたいだ」

「そうか、みんな黒鷲さんを心配してるんだ。」

ゴメンね、僕はお料理はできるけど、大神官さまの病気を治せる力は無いんだ」

黒髪の少年に見覚えがあり、転送ゲート前のバザーで物乞いをしてきた子供だったことを思い出した。黒鷲に救われて聖堂にやってきたのだらう。

ハルはしばらく考え込んだ後、ふと何か思い付いたかのように顔を上げると、子供たちを手招きして呼び寄せた。

「みんなで、大神官様の病気が早く治るように、ミヅノゾミ女神様にお願ひしよう。」

僕のお手伝いしてくれる？」

この方法なら、部屋に閉じこめられている子供たちの気晴らしになるし、黒鷲さんにみんなの気持ちが届けば、体を壊すほど無理をしなくなると思う。

「なあに、ハルお兄ちゃん、どんな魔法を使うの？」

不思議そうに尋ねる萌黄に、ハルはニコニコ笑うと、鳳凰の描かれた1ピヨコ紙幣を取り出し、萌黄と数人の少女にそれを手渡した。

机の上に1ピヨコ紙幣を広げ、それを丁寧に折り畳み始めた。

「みんな、僕の真似をして、同じように折紙してね。」

これを千個作って大神官さまにプレゼントすれば、病気が早く治るかもしれないよ。」

そう言いながら、指を動かし器用に紙を折るハルを、子供たちは興味深そうにのぞき込んでいた。

チャチャが寢床代わりにリアカーに積んでいた、金としての価値がほとんどない1ピヨコ紙幣。ハルが極彩色の鳳凰の絵柄を気に入っていたので、聖堂に住み込みで働けるようになったチャチャが、お礼の代わりに紙幣をハルに譲ったのだ。

半分に折って三角形にした紙をさらに半分に折り畳み、中を広げて正方形にして、縁を折ってひし形にする。

「わぁ、おもしろそう。あたしも作りたい」

「ねえハル兄ちゃん、形が変になっちゃった。どうしたらいいの？」

テーブルの上で折紙教室が始まり、細かい手の動きを上手にまねる子供たちに感心しながら、ハルは丁寧に教える。

「紙がこんなに小さくなっちゃった。ねえ、これでなにが出来るの？」

手のひらで複雑に折られたひし形の紙を不思議そうに見つめる萌黄。

「よく見てね、折り曲げて細くなった方が頭としっぽ、反対側は鳥の羽だよ。」

せつかくキレイに折った紙を破らないように、注意してね」

ハルは微笑みながら、仕上がった千羽鶴の羽を広げ、萌黄の手の平に乗せた。

その時、小さな異変が起こる。

象牙の塔に引きこもっていたSENが、その異変に逸早く気付い

た。思わず手にした本を取り落とし、慌てて全神経を集中させ、その変化を知ろうとする。

「幸運度「祝福」の力は、神科学種の赤い右目を通してもステータスは表示されない。」

ただ、純粹に肌で力を感じ取ることで、目の前で起こる「奇跡の現象」を確認するしかない。

それは最初、

とても小さな力が　ひとつ　生まれ、

ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ、

数分おきに、その数はどんどん増えてゆく。

「何だ、敵の攻撃か!!」

聖堂のすべての窓から、眩しいほどの光が漏れ出て見えた。

SENは象牙の塔を飛び出し、駆け込んだ聖堂のあけ放たれた扉の前で、信じられないモノを見る。

眩し過ぎるほどの七色の光溢れる大食堂の中で、興奮した子供たちが、宙を漂うソレを捕まえようと手を伸ばしテーブルの上でジャンプしている。

「まさかこんな事が……やっぱり、ハルの仕業だろうな」

賑やかな笑い声が聞こえる中、SENの足はその場から動けなかった。

その場で膝を折り、平伏したくなるような、これが畏怖の念というやつか。

自分の姿に気付いたハルが、嬉しそうに笑顔を返すが、喉が枯れて声すら出なかった。

小さな千羽ツルを核にした『神の燐火』は、ふわふわと大食堂の中を漂う。

手のひらサイズの七色の光が数百個、夜空の星のように輝いている。

SENと同じように異変を感じ、蒼珠女神聖堂に戻ってきたYUやティダは、力が溢れ出し暖かすぎる室内で、防寒コートを脱ぎながらハルの話を聞く。

「つまり、ハルくんたちは大神官に千羽ツルをプレゼントしようとして、1ピヨコ紙幣で折紙をしたら、それが突然光り出したと……」

ティダは、光を放ちながら宙を漂う千羽ツルを一匹捕まえると、広げて一枚の紙に戻す。

その折り目に指を這わすと、魔力が折り目に沿って流れているのを感じ取れた。

「終焉世界の魔法陣は、完全なシンメトリーとアスタリスクを基本とするの。」

この1ピヨコ紙幣に描かれた図柄は、わずかに『祝福』を帯びている。

そして千羽ツルの折り目は完全なシンメトリー、立体の3D魔法陣となって『神の燐火』を発生させているのね」

全転移魔法陣を修復したティダは、その仕組みを素早く見抜いた。リアルな知識があるメンバーはその内容を理解できたが、水浅葱

や他の者にテイダの説明は、謎の呪文にしか聞こえなかった。

「そうらしいな。折り紙が下手くそだと、ほら『神の燐火』は宿らない」

SENの手作りらしい不格好なツルは、羽を広げると僅かに光ったあと、地面にぼとりと落ちた。

「まったく、この寒波を退けるために走り回っていた私たちの苦勞が、たった一枚の紙切れで解決できるとは。死黒鳥の蒼珠や、殲滅魔法の解除なんて、大した奇蹟ではないのですね。

これが……神寄せの巫女の行う、真の女神の奇蹟ですか」

「ほらYUYUさま、上をご覧ください。ああ、なんて美しい。

まるで鳳凰小都の空に、鳳凰が舞い戻ってきたかのようにすわ」

紙細工の鳥の放つ七色の光が、鳳凰が描かれた女神聖堂のステンドグラスを鮮やかに浮かび上がらせる。

この奇蹟を起こした当の本人は、子供たちに混じって再び千羽ツル作りに熱中している。

しかも、コタツに座って居眠りばかりしていた老婆たちが、かくしゃくと動き回って、テーブル上に立って暴れる子供たちを叱りつけ、一緒に折り紙作ってる。

「まさか、婆さんたちの体調まで良くなっているみたいだぞ」

「そうなんじゃよSENさま。

ワシのぎっくり腰の痛みもピタッと止まって、なんだか体も軽くなっただようじゃ」

力強い張りのある声に振り返ると、背筋も真っ直ぐに伸び、血色もよくなった大神官の黒鷲が部屋に入ってきた。子供たちは大喜びで大神官の周りに集まると、自分たちの作った千羽ツルを手渡してはしゃいでいる。

「ほんとだ、ハルさまの言った通り、女神さまが僕らのお願いを聞いてくれたね」

七色に輝く光を放ちながら宙を舞う紙細工の鳥を、水浅葱はうつとりと眺めていた。だが、隣に居る主の表情が、硬く緊張したものであることに気が付くと、『王の影』の合図に目配せをして、大食堂から廊下へと場所を移動する。

「水浅葱、これよりハク口王都の近衛師団を大至急、鳳凰小都へ派遣させます。貴女は全方位魔法陣で待機して、師団が到着次第、ソレを率いて目的地を制圧しなさい。」

事態は一刻を争います、霊峰女神神殿より先に動かなくてはなりません」

「畏まりました、YUYUさま。して、その制圧地点は何処ですか？」

「場所は、鳳凰小都 書籍の森の中にある、ピョコ紙幣を印刷する造幣局。」

秘密保持のため、中で働く職人も一人残らず全員捕らえなさい。

印刷輪転機、そして1ピヨコ紙幣の原版を確保するのです」

クエスト42 第七位王子と会おう

SENはツルを数羽折ってみたが、微妙に形が不恰好で『神の燐火』は宿らなかつた。

己の不器用さを見せつけられたような、つまらない気分です。ピョコ紙幣をマジマジ見ていると、描かれた鳳凰の絵柄が、今、自分が象牙の塔の書庫で漁っている“超絶萌え萌え”女神像を描く絵師と似ている事に気が付く。

「正確なデッサン力に迷いのない滑らかな描線、独特の原色使い、そして個性的なアングル。間違いない……コイツは同一人物が描いている」

書庫から持ち出した本をテーブルの上に広げ、手にした紙幣と本に載っている肌も露わな女神の身悶え図を見比べてみると、確かにそつだ。

人目もはばからずエロ本を広げてブツブツ呟くSENの奇行に、ドン引きする周囲にかまわず、ティダを呼び寄せると本を示した。

「言われてみれば、似ている気がする。SENの旦那のオタク鑑定眼は正確だ。」

紙幣の図柄を書いたって事は、有名な画家なんですよ」

「このピョコ紙幣を僕にくれたチャチャさんが、鳳凰の絵は第七位王子様が描いたって言っていましたよ」

エロ本を前に話し込む二人の間に割り込んできたハルの言葉に、SENは一瞬聞き違いかと耳を疑った。

「これほど素晴らしい絵を描く人物が、バカで無能と噂される第七位王子だと……。」

そうか、巨人族の中では認められない特異な才能なのか。

絵に『祝福』を宿らせるほどの芸術的センスを持っているというのに。」

それはリアルでもよくある話で、周りからの理解を得られず筆を折る鬼才や、後世になって認められた天才とか、そういった部類に当たるのだろう。

その鳳凰が描かれた千羽ツルを、皆が夢中で折った結果、部屋の中で飽和状態になった『神の燐火』が窓の外へふわふわと逃げ出し、風に乗って紙細工の鳥が街中を群れを成して飛んでゆく。
それは美しい光景だった。

すべての手配を水浅葱に指示し終えた王の影は、廊下で三人の会話を聞き、ハルたちの前に姿を現した。

「先ほど『鳳凰小都』へ、巨人王 国軍の介入を許可しました。

これより鳳凰小都は巨人王直轄、蒼珠女神聖堂が預かり統治することになります。」

私は、今貴方がたの話に出た第七位王子へ、街の支配権停止と明渡しを告げに行きます。」

「突然、何物騒なこと言ってるんだ。

これまで策を巡らして、街を良い方へ導こうとしていたのはアンタじゃないか？」

それが一体全体、どうして軍を介入させるんだ」

「はあつ……私もすぐに行かなければならないので、貴方ではなく別の、紳士的な、頭の良い『闇夜の剣聖』にご意見を伺いたかったですね。」

私はこの鳳凰小都の、常軌を逸した狂乱がこれ以上進むのであれば、巨人王の援助を停止し街そのものを廃する予定でした。

それが驚く事に、貴方がた、というよりハルくんが現れてから、街の厄鳥は取り除かれ、新たな聖人が生まれ、終焉世界の力の源である神の『燐火』を発生させる術まで手に入れました」

「そうして鳳凰小都にもたらされた豊穰を、勝手に力ずくで巨人王のモノにするのか」

「なんと仰られてもかまいません。」

あのバカ王子には、鳳凰小都を治めるどころか、自分の身ひとつ満足に世話するコトができないのですから」

YUYUは踵を返すと部屋を出てゆく。

扉の前で足を止めると、静観していたティダに目配せした後、薄笑いを浮かべてSENに告げる。

「すでに水浅葱は、王直属の近衛師団と行動を共にしています。ティダさんに代わりの付き添いをお願いするつもりでしたが、SEN貴方も一緒に来て下さい。第七位王子が、実際どのような人物であるかの判断してもらいましょう」

雪深い森の中、木の根元に座り込んでいた若草色の髪の少年は、

金色の衣に付いた雪を払い抜けると、手にした物をポイと投げ捨てた。

それは藁でできた呪いの人形で、腰の部分に太い釘が刺さっている。

「いくら最強チートTUEEEEな俺様でも、巨人兵を相手二スルノ八面倒臭イ。

部下も1匹逃ゲチマツタシ、ココ寒ミイシ、一旦神殿に戻るとするか」

以前の法王は、天真爛漫とは聞こえはいいか無防備すぎる警戒心ゼロの男で、見るたび苛立ったが……中身が違つとコレほど見苦しい生きモノになるのか。

雪の中、黄金に輝く髪をなびかせ純白のマントを身にまとい。すらりと伸びた長身瘦躯の体格、見る者すべてを魅了するといつても過言ではない、大輪のバラのように華々しい雰囲気を持つ紫苑王子は、作り笑いを浮かべたまま隣の偽法王の話聞いていた。

己の野望のため手を組んだ、信用しているわけではない。常に互いの腹のさぐり合いをしている。

自分を冷めた目で見ている相手に、アマザキは黒い笑いを浮かべながら一言告げた。

「そういえば、蒼珠女神聖堂の大神官は、美シイえるふノ天女ニヨツテ選定サレタ。

純血エルフなんて絶滅危惧種、終焉世界デハ『王ノ影』トそいつシカ居ナイダロウナ」

巨人もエルフも、所詮遺伝子操作で生み出された種族、それを『自分たちは神に選ばれた』なんて戯れ言を本気にする連中がいる。

アマザキの話に顔色を変えたハーフェルフの王子は、滅びた種族^{エルフ}の選民思想に毒され、父親であるはずの巨人王を憎悪している。

「アア、何てオモシロいゲームだ。こんな世界グチャグチャになってシマエバイイ。」

使用人がすべて逃げ出し、ゴミ屋敷と化した鳳凰館の中を、王の影YUYUとティダ、SENの神科学種たちが訪ねたのは、日が沈み、それに変わって酒場や娼館の明かりが辺りを照らし始める時刻。

鳳凰小都中央に鎮座する巨大な鳳凰館とその周囲だけが、光も無い不気味な闇に包まれている。

ティダは手のひらに乗せた千羽ツルを広げると、『神の燐火』を纏った紙細工の鳥は、薄暗い室内をが照らし出した。ヒラヒラと荒れ果てた館の中を舞いながら、まるで三人を導くように入り組んだ廊下の先のある階段の上へ飛んで行った。

「嫌な気を感じます。どうやら先客がいるようですね」

最上階の、第七王子の寝所へと登る階段の下で、茶髪に白髪まじりで顔色の悪い老人が、叩頭したまま『王の影』が現れるのを待っていた。

「このような惨めな有様で、巨人王殿下の使者である王の影をお迎えしてしまい、誠に申し訳ありません。」

私が愚かな王子を諫められなかったばかりに、鳳凰小都は色にまみれ地に落ちました。

どうか巨人王へは、何とぞ御慈悲を頂きたく、それと、十七位王子……」

「主を裏切る小物が、王の妾に取り入ろうとしているのか？」

最上階へと続く階段の上から声が降ってきた。

見上げたその先に居るのは、輝く黄金の髪に澄んだ青い瞳、彫刻のような整った顔立、美丈夫なハーフエルフの男だ。

「なぜ貴方がココにいるのですか？第十七位王子 紫苑」

「敬愛する兄上が貶められるのを、弟である私がお助けするのです。第七位王子である兄上を、王位継承選定から外し、裏で糸を引く女狐。現に鳳凰小都へ向かって、ハクロ王都の近衛師団が出陣したという報告が入って来ている」

王子紫苑の言葉に、様子を見守っていた側近の男は驚愕の声をあげ、頭を抱えてその場でうずくまる。

「聞きましたか、兄上様」

次期巨人王にふさわしい貴方を滅ぼすために、この売女は近衛師団まで操るのですよ。

巨人族の誇りを汚す王の影に、天誅を下さなくてはなりません」

ズシンツ と、建物全体を揺さぶるほどの振動が、天井がばらばらと崩れはじめた。

巨人族用の大きな間取りの丈夫な造りの建物が、ゆさゆさと左右

に揺れる。

紫苑の後ろにいる人物が、コノ館の主 第七位王子 青褐あいかちだろう。しかし、巨人族でも大柄だと言われているが、異常な大きさと全身が赤く膨れ上がり、手足の表面は固く石化して、着衣も裂け異様な状態になっている。

「青褐あいかち様つ、なんとというお姿に！！紫苑、貴様、青褐あいかち様に毒を盛つたのか」

「これは兄上のご希望通り、山のような体位、鋼のような体、岩のような手足をエルフ族の秘薬術で叶えて差し上げたのですよ」

歌うような透き通るテノールの声で、見る者を魅了する美しい微笑みを浮かべる紫苑の後ろから、巨人としての姿をかるうじて留めた肉の塊が、階段を踏みつぶし天井を破壊しながら降りてきた。

ティダとSENは、青褐あいかちに駆け寄ろうとする男の襟を引いて後ろに下がらせ、YUYUを守るように前にでる。

「ちよつとすまないが、ティダ、少し時間稼ぎしてくれ。

俺は、戦略に秀でたこの魔眼に映るビジョンに従い、禁断の儀式をしてこよう（電波語解説：トラップを設置してくる）」

「ふふつ、いいぜえ。足止めするのに武器はいらないなああ。

前から一回、巨人族相手に素手のガチバトルやってみたかったんだよおお」

身体が酔ったように左右に揺れ、瞳に狂気が宿り、狂戦士モードに切り替わったティダは、肉達磨と化した王子の前に歩み出る。

ターゲットを定めた巨人の口から、唸り声とも人語ともつかぬ音

が漏れた。

その隙に、SENは腰の抜け座り込んだ老側近を担いで、YUYUと共に下の階へ移動する。

「見た目派手なイケメンだが、同じ王子でも、中身は竜胆の方がずつとマシだな。」

おい、黄色頭！！このバカ王子にエルフの秘薬を使ったといっていたなあ。

薬が切れるのに、どんぐらい時間が掛かるんだ」

長く美しい銀髪のエルフが、紫苑王子を睨みつけ吠える。

同族のエルフを、食い入る様に見つめるハーフエルフの王子は、熱に浮かされた様に答えた。

「図体のでかい巨人では、薬の効き目は半刻もないでしょう。」

それより、貴女のような純血のエルフが、何故王の影に使われているのですか？

野蛮な巨人族や下等な人間とは違う、我々は神に選ばれた種族エルフなのです」

紫苑は淀みない態度だとアピールするように純白のマントを払う。だが、その口元はひくついており、それが悪魔的な笑みへと変わる

「そして、聞き捨てならない言葉を仰いましたね……同じ高等なエルフの血が流れるコノ私が、竜胆のような下等な者に劣ると言うのですか！！」

すでにティダの目の前には、巨大な肉の塊が振り上げた腕が迫っていた。

エルフの狂戦士は、ハーフエルフの王子に冷たい一瞥を投げつけると、振り下ろされる巨大な岩のような拳を避け跳躍する。肉達磨の肩に飛び移り、巨大な顔の横面に蹴りを入れた。

クエスト42 第七位王子と会おう(後書き)

あと一話、がんばろうっ

クエスト43 萌え萌え絵師を説得しよう

色鮮やかな青紫のアオザイ風の衣装を着た長い銀髪のエルフが、巨大な肉の固まりと化した巨人族の王子 青褐と相対している。

巨人の右顔面に加えた鋭い蹴りは、大したダメージを与えられず肉の壁に弾かれた。

そして、巨人の巨岩のように変化^{へんげ}した拳が、ティダを追い回し振り下ろされた場所には大きな穴が開く。

運悪く直撃すれば、細身のエルフの骨など簡単に砕くだろう。だがティダは、それらの攻撃を軽々とかわし続けた。

「ふん、動きが鈍すぎる。これならエルフの秘薬が切れるまで逃げ切れそうだが、でもそれじゃ面白くない。

せっかく巨人とのマジバトルだ、デカイ図体をひっくり返してやりたいなあー」

ティダは、この場面で唯一の傍観者である、ハーフェルフの王子紫苑に聞こえるように呟くと、妖艶な笑みを浮かべる。

このエルフという奇妙な器は、戦闘で相手をねじ伏せる時に一番の快楽を感じる。ゲーム内の無機質なバトルではない、触感や匂いが伴い、反撃されれば自分も痛い目に遭うという状態が、ティダには楽しくて仕方なかった。

「それにしてもデカイ、この体格差じゃマトモにやり合えないなああ！！」

御伽話、一寸法師の真似事でもしてみるか」

ティダは、降り下ろされる拳の雨の中を縫って、巨人の股をくぐ

り背後に回り込むと、黒い木刀を巨人の左踵に突き立てる。
踵にわずかに傷つけただけで、木刀はボキリと折れたが、巨人が
悲鳴を上げて仰け反る様子に効果有りともみた。

ドスンドスン と足下に陣取るティダを踏みつぶそうと、第七位
王子が動き回る。床がミシミシと嫌な音を立て揺れる。

相手の攻撃をかわしながら、ティダは執拗に何度も何度も、巨人
の左カカトへ蹴りやパンチを加える。

岩盤のような足の表面が裂け、ジクジクと血が流れだしたのを確
認すると、ティダは攻撃を止めた。僅かに傷つけただけが、巨人
の膨れ上がった体を支える事は困難になる。

グラグラと体のバランスを崩し、両ひざを付いた巨人は、相変わ
らず意味不明な言葉を漏らしながら、四つん這いの体勢でティダに
突進してくる。

巨人族の住居である鳳凰館は天井が高い。小山の様な肉ダルマの
猪突猛進をヒラリと交わすと、壁を蹴り、天井に吊るされているラ
ンプの鎖に飛びついた。

獲物の姿を見失い、辺りをぎよるぎよる見回している第七位王子
の、ちよつと真上にティダは居た。

上から見下ろすティダの視界の片隅に、薄暗い中でも輝くブロン
ドと白いマントの紫苑が捉えられた。口元に薄笑いを浮かべながら、
感情のない蒼い目で二人のバトルを観察している。

いや、様子が変だ。紫苑の纏う白いマントが、ガサゴソと不自然
に蠢いている。

次の瞬間、中からドス黒い煙の様な物体が溢れ、蝶の群れが現れ
ると、鱗粉を撒き散らしながら飛び回る。

「死黒鳥は光モノを餌に、そして死黒蝶は乙女の生血を餌にする。伝承では、女神の血と肉は酔うほどに甘いとされているが、科学種のエルフの血はどんな味がするのだろうか!?」

オオゴマダラに似た死黒蝶は百羽あまり、花の蜜に吸い寄せられるようにティダの周囲で、黒い鱗粉を撒き散らす。

視界は黒く塗りつぶされ、騒がしい蝶の羽ばたきが周囲の空気をかき廻し、カマイタチが起こる。

小さく鋭利な風の刀が、獲物を切り刻み、ティダの銀の長い髪の毛が切られてハラハラと散ってゆく。

「チツ、カマイタチで肉を裂き、血を啜る吸血鬼の真似事をする蝶か。」

なら、思う存分喰らうがいいさ!」

そう叫ぶと、ティダは自由な方の腕を口元に持ってゆき、自らの手首に噛みついた。

動脈近くの白い肌を破って、鮮やかな血しぶきが流れ出す。

掌を伝い、指先から滴り落ちる血を蝶の群れに差し出すと、まるで花の蜜を舐めるように黒い蝶が集まってきた。

「まさか、こんな馬鹿な方法で、何て野蛮な、よせ、やめろっー!」

死黒蝶の群がる、血まみれの手のひらに魔力^{マナ}を溜める。呪杖すら必要ない、自分の血を媒体にした初級攻撃魔法、だが高ランクエルフの出力は最大MAX。

「正しい害虫駆除の方法を教えてやるよ。飛んで火に居る夏の虫っ

てなああ

火の聖霊よ 怒れ！！ファイヤアーツ」

テイダの掌に燈る魔力の火に、群がる蝶たちは自ら飛び込んで消し炭となり、喰らった死黒蝶の魔力で、火はどんどん膨張して炎の球体となる。

そして狙いを定め、背を向けて逃げ出す男めがけ火焰球を投げつける。

魔力結界が火焰玉を相殺するが、媒体となったテイダの血が、狼狽えるハーフェルフの男の白マントに赤黒い染みを作った。

死黒蝶を片づけたテイダは、宙吊り状態のまま足裏に魔力を溜め、天井のランプから手を離す。

落ちる先は、肉ダルマの背中。軽身の躰が、ズシンツと重々しい鈍い音をたて両足で背を踏みつけ、下へ向かって更に魔力の圧を高める。

巨人の背中に居る細身のエルフが、まるで鉄の塊のように重みを増し、木の裂ける嫌な音を立てて床が抜け、二人はそのまま下の階に落ちて行った。

これがSENの仕掛けたトラップだと？！

巨人と一緒に下の階まで落とされ、受け身の体勢で床に投げ出されたテイダは、その部屋の有様に立ち上がる気力を失ってしまった。

『神の燐火』を纏う折鶴が数十羽、七色の光を放ちながら漂い、明

るく室内を照らしている。そして目に飛び込んできたのは、床一面広げられ、壁中ベタベタと貼られた“超絶萌え萌え”女神美人画。

清楚に微笑む絵もあれば、大蛇に跨り祈りをささげる御姿……いかにも行為を妄想させる卑猥な絵もあり、ミゾノゾミ女神画というオブラートで包まれた、萌え美少女イラストで埋め尽くされている。

「このオタク部屋だ、ここは！！」

SENは部屋の中央に腕組みし、今まで見たこともない楽しい喜色満面な表情で立っている。その部屋の隅で、酷く冷めた眼差しで様子を見守る王の影の姿があった。

天井を突き破り落ちて来た巨人は、むっくりと体を起こし、驚いた様子で部屋の中を見回す。それはそうだろう、自分の描いた女神画が部屋一面に溢れかえっているのだから。

SENは体を起こした異形の王子の前へ、背を正し歩み出ると、胸に手を当て深々と敬礼する。

「巨人族 暴力王鉄紺 第七位王子 蒼褐さま、仲間が手荒な真似をして失礼しました。」

私は神科学種のSENと申します、どうぞお見知りおきを。

いえ、蒼褐画伯の前では神科学種などという下らない肩書は必要ありませんね。貴方様の描き出す究極の美、俗世の穢れを祓った真の女神像に惚れ込んだ、只のファンです。

この素晴らしい終焉世界の至宝をご覧ください、貴方の描かれた女神像一枚一枚、すべてに魂が宿っていると言っても過言ではありません。聖なる光を発し、あらゆる魔を払い、この私すら凍てついた心を震わせられ思わず涙を流しそうだった。

絵に描かれた髪の毛一本の描線、まるで生きているかのような肌の質感、無垢な少女のようでいて慈悲の心あふれる聖母、そしていつかめぐり合うであろう理想の恋人の姿を描き出す天才、いや、絵筆に宿るネ申だ。」

恐ろしいほど饒舌なSENの様子に、ティダもYUYも、横から口を挟むことすらできない。凄いな、オタクの熱意がひしひしと感じとれる。

SENの話を理解したのか、まだ肉ダルマの変化は解けてないが、第七位王子の瞳に正気の色が宿る。ごによごによと、何か話そうとしているが言葉にならない。

「蒼褐王子、これより私は貴方の事を画伯とお呼びしたい。

今までこれほど素晴らしい作品を制作されていますが、ここ二年ばかり画伯の描かれた女神像が一枚もありませんね。

どなたかの口車の乗せられ、飽食と美女に酔う酒池肉林の日々は楽しかったでしょう、しかし、それで画伯の心の飢えは満たされることはない。

なぜなら、いくら絶世の美女と呼ばれる女を抱いても、画伯の描き出す究極の女神と比べれば、足元にも及ばないからですよ。

巨人だとか王子だとか、そんな下らない地位にこだわる、凡人どもの言葉を聞いて創作のネ申の行為を止めるなど言語道断！画伯の授かった才能を埋もれさせることは、終焉世界にとっての損失です。我ら魂の同胞、そして世の人々に究極の美を触れてもらうべきだ。」

なんてこった、巨人の瞳から、滝のように涙が流れている。

SENの熱に浮かされた、まくしたてるようなオタク語りだが、その中身は「王位を諦めて才を生かせ」と、暗に説得している。

「兄上！！そのような戯言に耳を貸してはなりません。

この男は王の影の仲間、我々の敵です！！

次期巨人王の座に付くのは、蒼褐兄上さまなのです。こんなつ、イカガワシイ絵を描くという下らないマネはもう辞める時期なのですよ」

「お前、本当に第七位王子を次期王に祀り上げようと思っているのか？何故、兄に王の影暗殺を仄めかす。そのような事をすれば暴力王が見過ごすはずがない。」

画伯は、権力などという、そんな虚ろで不確かなモノに焦がれる小物など相手にする必要ありません。

それより、究極のミゾノゾミ女神像を、自らの手で描き生み出したいと思いませんか？

私はその手助けができます。ココに居る王の影、天女と呼ばれる神科学種のエルフなどがモデルに相応しいでしょう。

そしてオアシスに降臨した本物のミゾノゾミ女神を描き、終焉世界の人々へ知らしめたいと思いませんか？

「ち、ちよつと、SEN。なんとという外道なマネを……」

巨人王 第四位側室である私まで、餌にして、その“萌え萌え”美少女イラストのモデルになれと言うのですか！！」

「ハルをモデルに、天才画伯の描いた、究極のミゾノゾミ女神像を見たいだろ？」

ニヤリと笑うSENの言葉に、YUYUは妄想でうっとり頬を赤らめ「そ、それは素敵かもしれませぬ」と呟く。

「俺は、どんな、贅沢をしても……満たされなかったのだ。

いや………どんなに金をばら撒いても………想いは、得られず………認

められなかった」

エルフの秘薬の効果が薄れて来たのか、体の腫れが引くように、蒼褐王子の躰は一回り小さくなり、言葉も何とか聞き取れた。

混濁する濁った瞳には希望の光が宿り、王の影の方へその巨体を向けると、第七位王子はゆっくりと頭を下げた。

老いた側近が、泣きながら王子にしがみ付く。

その様子を、美しくも凍りついた表情で眺めていた、第一七位王子 紫苑は、足早にコノ場から去ろうとして、一瞬、銀髪のエルフの麗人に目をやる。

「神科学種は、巨人族 次期王に、あの野蛮な末席の竜胆を選ぶと受け取ってよろしいか？フフツ、では次は竜胆を潰すでしょう。

それから、貴女がオアシスに降臨した女神だと思っていたが、私の勘違いのようだ。

貴女は狂戦士だ、豊穰の女神ではない。はて？真の女神は何処に居るのだ」

ティダは壁に背を預け、煌びやかな美丈夫の王子を見返すが、何も語ることはない。

背中に冷たい汗が浮かぶ。どうも、かなり厄介な相手に目を付けられたらしい。

粉雪が舞う寒い中、蒼珠女神聖堂の窓はすべて開け放たれ、七色の光が周囲に溢れ出ている。

その窓の奥から、子供たちの賑やかな笑い声と、温かいスープの匂いが漂ってくる。折り紙騒動で料理の準備がおくれ、普段より遅い夕食が始まった。

ハルは、孤児全員の料理を作り終え、やっと仕事がひと段落ついた安心感で気を抜いていたのだろう。

空になった大鍋を外で洗おうと、調理場勝手口の扉を開けると、いきなり誰かにぶつかり鍋を抱えたまま派手に尻もちをついた。

薄桃色のローブを羽織った背丈のある若く美しい女性が、慌てたように手を伸ばしハルを立ち上がらせた。

彼女は、美しい、白馬を連れていた。

クエスト43 萌え萌え絵師を説得しよう(後書き)

さ、サブタイトル、どなかたアイデア下さい……とほほ

クエスト44 ユニコーンに触れよう(前書き)

祝 お気に入り登録 500件 ありがとうございます〜

クエスト44 ユニコーンに触れよう

カラン カラン カラン

尻もちをついたハルの手から離れた大鍋は、音を立てて転がり、薄桃色のローブを着た女性の足元で止まった。

「うわっ！！すみません、足に鍋が当たりました？」

「ふふっ大丈夫よ、足に当たる前に鍋はちゃんと止まったから。

私の方こそ、美味しそうな匂いに釣られて中を覗き見してしまっ
てごめんなさい。」

「匂いに釣られてっつて、嬉しいなあ。僕の料理を褒めてくれて。

お姉さん、もしかしてお腹空いてるの？

そっつだ、竜胆さん分の夜食が残っていたな。どうぞ中に入って食
べてください。」

どう見ても調理場の下働きにしか見えない少年が、他の料理人を
差し置いて夕食を作っていたという発言を聞いて、彼女は不思議に
思った。

ハルは、厨房から取って返ってくると、料理を包んだ紙袋を彼女
に手渡す。

紙袋の中身は、ハルがパン生地の発酵時間の研究を重ねて完成さ
せたふわふわパンに、香りのいいチップで燻製にした赤身の魚、新
鮮な野菜を挟んだ、力作のサンドイッチだ。

「あら、モグモグ、まあ、こんな柔らかいパン食べたことありませ
ん。」

それに魚が生臭くないわ、良い香りがして本当に美味しそうなサンドイッチ。

でも私、馬を連れているので中は遠慮して、外で立って頂きますね」

雪の中に立つ彼女は、薄桃色のフードを深めに被り、僅かに見える顔は切れ長で凜々しい眼差しの美人だ。

しかし長旅の途中なのか、酷く疲れた表情をしていて、パンを一口かじると驚きの声を上げとても嬉しそうに微笑んだ。

ハルは温かい蜂蜜茶を彼女に差し出し、彼女の隣で大人しく控える白馬に近づいた。

白い雪に紛れてしまいそうな、美しい白い毛並みの馬だね。

あれ、馬って頭に角が生えていたっけ？

額からまっすぐに伸びた芸術品のように美しい角は、傷一つなく仄かに白く輝いた。

馬より一回り小さく、脚が華奢なほど細い。そして雪の上に馬の蹄の跡は何処にも付いておらず、地面から数センチ浮いた状態で立っている。

「お姉さん、この馬は、もしかしてユニコーン？

角の形が、大神官さんの持つ『淡雪ユニコーン杖』と一緒にだ！」

興味津々で聖獣ユニコーンを眺める少年を、彼女は驚いた様に見つめる。何故、質素な灰色のシャツにエプロン姿の下働きの子供が、歴代法王のみ持つことの許される『淡雪ユニコーンの杖』を知っているのだろうか？

そういえば、蒼珠女神聖堂の大神官 黒鷲は、女神の憑依した神科学種から『淡雪ユニコーンの杖』を託されたという情報を受けて

いた。

その場に静かに佇む聖獣に、ハルは恐る恐る触れる。

白く絹糸の様な柔らかかな毛の手触りに驚き、おとなしく触らせてくれる聖獣に気を良くして、その滑らかな感触を何度も撫でて堪能する。

次第にユニコーンの方が自分から頭を摺り寄せ甘えるように嘸くと、驚いて手の止まったハルの顔を、長い舌でベロベロと舐めはじめた。

「この子の名前は山桜といいます。

聖獣がこれほど大人しく、男の子に触れさせるのはとても珍しい事です」

「ひやあつ、このユニコーン大人しくくないですよ！？ちよつ、髪を齧らないで〜」

ユニコーンの持ち主である彼女が、顔面唾液まみれのハルの背後に立った。

清らかな乙女しか相手にしない筈の聖獣ユニコーンが、かなり興奮して少年にじゃれ、そのうち求愛行動まで起こしそうな様子だ。

頭部をユニコーンにボリボリと甘噛みされ、助けを求めるように涙目で振り返る少年の右の瞳が赤く、神科学種の証であることに気が付く。

「ところで、君は『淡雪ユニコーンの杖』の事を何処で知ったのですか？」

「アレは凄く強力な呪杖ですよ。大神官の黒鷲さんは『淡雪ユニコーンの杖』で、カミラの飼われる塔を丸ごと凍らせる高位魔法を

行使するのを見ました」

「まあ、それは凄い!!!」

君は、アノ時、大神官黒鷲の聖人出現に立ち会った神科学種の一
人なのですね。

その背丈や体格、よくみれば女神と瓜二つの顔立ち、神獣ユニコーンが無条件で敬愛の情を示すほどの祝福を持つ、報告にあった女神に化けた神科学種は、アナタか!!!」

えっ？

不思議そうにハルが背後の女性を見つめ返す。

次の瞬間、彼女の振り上げた手刀がハルの首筋を強打し、悲鳴を上げる間もなく意識を刈り取った。

ゆつくりと雪の上に倒れる少年を、彼女は慣れた仕草で屈みこんで状態確認をする。

完全に意識のないハルの口をこじ開け、舌の上に、女神神殿禁術で罪人にも使用を許可された、言葉を奪う『沈黙の呪』を印す。

そして、ハルの細い三つ編みが背中まで伸びた青い髪を根元から切り落とし、勝手口のドアに引つ掛け『身代わりの幻術』を行使して、その場に大鍋を抱えた、今にも動き出しそうなハルの幻を生み出した。

「仲間の神科学種二名、それに巨人王の手下相手に、この程度の幻術は一刻も持たないでしょう。だが、それだけ時間を確保できれば、聖獣一の俊足を誇る、天駆けるユニコーンなら逃げ切るのも可能。

コレはきつと神の思召しだわ。私は偽法王より早く、オアシス降

臨の女神を手に入れることができたのだから」

彼女の羽織っていた薄桃色のローブを脱ぐと、白銀に輝く細身の聖騎士鎧が姿を現す。

肩に付く程度の黒髪に白い獣耳が生え、緑の瞳の奥に開く瞳孔が夜目を利かせていた。

ハルをローブで包みユニコーンの背に乗せ、一刻も早くこの場を立ち去ろうとユニコーンの手綱に手を伸ばす彼女の背後に、小さな竜巻が襲い掛かる。

「イヤアアー！！ハルお兄ちゃんを返して！！」

聖騎士としての技量と、白い獣耳を持つ猫人族だから、その小さな殺気を感じ素早く避けることができた。

二階窓から、両手に短剣を持ち飛び出してきた小柄な少女は、驚くほどの跳躍力で迫り襲い掛かる。

輝く金の髪をなびかせ、舞う様に優雅でありながら、敵に鋭い切り込みを途切れることなく、繰り返し繰り返し、まるで小さな金の竜巻が聖騎士の周囲を舞っているようだ。

「だが、しょせん子供の剣ね、軽すぎるわ」

彼女の身に纏う、ミスリルを特殊加工した白銀の鎧は、短剣の刃を弾き傷つくことはない。胸元を狙い飛び込んでくる少女を、籠手で殴りつけるように短剣ごと弾き飛ばす。

勢いよく殴られた萌葱は、数メートル後方の地面に頭部を強打し、動かなくなった。

倒れた少女に近づき顔を覗き込むと、鼻血を流しているが、気を

失っただけのようだ。聖騎士は腰のレイピアを抜いて、幼い少女の細い喉に剣先を押し付ける。

ここは、口封じするべきね……あの方を取り戻すためなら、私は、どんな犠牲も躊躇わない。

しかし、隣に居た聖獣が、乙女の血の匂いを嫌いイライラと嘶き出した。背中に乗せた少年がグラグラと揺さぶられ、落ちてしまっそうだ。

聖騎士は子供を処分することを諦め、厨房の中に放り込むと勝手口のドアを閉める。

猫人族の聖騎士は、獲物を落とさないように気を配りながら、白い聖獣に跨ると手綱を握る。ユニコーンは、雪降る鳳凰小都の宙を『神の焔火』を撒き散らし駆けて行った。

なんだこれは、酷い、落ち着かない、胸騒ぎがする。

巨人王直属の近衛隊が鳳凰小都に入り、王族の末席の地位である竜胆は、水浅葱と共に軍の制圧行動に加わっていた。

書籍の森にある、黒煉瓦で作られた製紙工場とそれに連なる造幣局は、二年前から書籍印刷を辞め、ピヨコ紙幣を印刷していた。第七位王子に命じられたとの大義名分を傘に、彼らは必要以上に紙幣を刷りまくった。

その行為は、鳳凰小都に住む人々を苦しめる、ハイパーインフレ

の一翼を担ったといっても過言ではない。

巨人王直属軍は、暴力王 鉄紺の色である、黒に近い紺色の重厚な鎧を身にまとっている。巨人族と人間の混合部隊で、武において終焉世界最強を誇る猛者軍団だ。

特に巨人兵士は、小山のような巨体に磨き抜かれた肉体を持ち、迫力満点の威圧感、か弱い人間の太刀打ちできるものではない。

巨人王の近衛隊は、大した抵抗も無く簡単に製紙工場と造幣局を制圧し、中で働いていた職人も一人残らず捕らえ、印刷輪転機と今回の作戦行動の目的である『1ピヨコ紙幣』の原版を無事確保した。

制圧作戦は、完璧に完了したというのに、この胸騒ぎは一体なんだ！？

「竜胆様、なにか気になる事でもあるのでしょうか？」

随分と落ち着かないご様子ですが」

近衛隊の仮設テントの中で、読心術の力を持つ水浅葱が、竜胆の状態に気が付いて心配げに声を掛けた。

だが、竜胆自身、この胸の奥から湧き出るような黒い不安の原因が分からない。

冴えない顔で、眉をひそめ、首を振る。

「もしかしたら、竜胆様の王族の血で契約した者が、危険な目に会っているではありませんか？誰か、心当たりはありませんか？」

「俺の従者の中に、終焉世界最強の支配者である『巨人王族の血の契約』を交わした者は居ない。

そもそも末席の王子なんかと、誰も生涯かけた契約なんかしない

だろ」

この巨人王軍の中にも、王と同じ赤い髪に精悍な顔立ちの若い王子は、他の兵士と一線を画したカリスマ性ある風貌を持っている。

彼がオアシスエリアで民衆を率い怪獣砂漠竜を討伐し、女神降臨の手助けをしたという噂は、兵の間でも知れ渡っていた。

そこへ、部隊の伝達役の小柄な男が、青い顔をして仮設テントの中に飛び込んできた。

「り、竜胆王子、水の側室様、た、大変です！！」

今、蒼珠女神聖堂より連絡がありまして、神科学種の少年が、霊峰女神神殿の手のモノに誘拐されました」

厨房の中に倒れていた萌黄は、食器を片づけに来た子供たちに発見され助けられた。そして、勝手口に括られたハルの幻を、大神官の黒鷲が解呪するまでに、すでに一刻の時が経過していた。

「だめだ、ハルからパーティチャットの返答がない、完全に意識を失っている。

チクシヨウ、なんでハルを一人にした。アマザキはハルの事を知らなかったはずだ。

まさか、こんなに早く手を出してくるなんて、俺達は油断していた」

激怒したSENは、切り取られたハルの三つ編みを握りしめたまま、聖堂の石壁を力任せに殴る。いつもハルに関わる事柄には冷静さを失い、酷く直情的になる。

ティダは、誘拐現場の雪の上を歩き回り、何かを見つけると戻ってきた。

手にしたのは、白く長い尾の毛。

ハルがユニコーンを撫でまわした時に抜け落ちたものだ。

「雪の上に残っているのは人の足跡だけだった。

萌黄ちゃんが見た白い馬は、霊峰女神神殿の聖獣で間違いなしでしょう」

SENとは真逆で、感情を押し殺したようなティダの呟きが漏れた。

YUYUは、その場で報告書らしきものに目を通しながら、傍に控える隙のない身のこなしの女性達に指示を与える。

娼館の中で見覚えのある少女が、YUYUに駆け寄ると何事か耳打ちをする。王の影は顔を上げ、ティダ達二人に向き直った。

「今、法王近辺に潜伏させている間諜から報告がありました。

偽法王 アマザキを護衛する側近の聖騎士の一人が、一昨日から姿を消したそうです。

その聖騎士は猫人族で、獣人である自分を聖騎士として召し上げたホンモノの法王に忠誠を誓い、影で懸命に行方を探しているという話です。

どうやら、この聖騎士がアマザキへもたらされる筈のハル君の情報を、手前で揉み消していたようで、この人物が、今回のハルくん誘拐事件の首謀者です」

その時、三人の頭上から荒々しい羽音が聞こえ、聖堂上空から深紅の翼を持つ一匹のドラゴンが舞い降りてきた。

巨人王、近衛隊所有の軍用ファイヤードラゴンの背に竜胆と水浅葱が騎乗している。

水浅葱はドラゴンの背から飛び降りると、急いで王の影の元へ駆け寄る。

「YUYUさま、派遣された近衛隊から、一番早い魔獣を手配いたしました。」

これでハルさまの後を追えます」

「ありがとう水浅葱。しかし今、肝心のハルくんが意識を失った状態でチャット念話が繋がらず、行方が確かめられない状況です。

聖獣ユニコーンの宙駆ける脚で、一刻以上過ぎれば、すでに鳳凰小都エリアを抜けているでしょう」

「それが、竜胆様のご様子がおかしくて……」

ハル様の居場所がわかるとおっしゃるのです」

水浅葱は戸惑い気味に、ドラゴンに騎乗したままの竜胆を振り返り、YUYUに一部始終を報告する。水浅葱の話聞き、何か思い当ることがあったのか、YUYUはドラゴンの背の竜胆に話しかけた。

「竜胆、ハルくんの居場所がわかるというのは本当ですか!!」

何故、神科学種のパーティであるティダ達でも探せないのに、竜胆にそれが判るのです?」

「そんなの俺の方が聞きたい。だが、判るんだ、なんでだ?」

南の空を飛んで海に向かって飛んでいるのが判る」

竜胆は、空の一点を睨みつけたまま、早く後を追いたいと焦る様子で答えた。

緊急クエスト 誘拐された仲間を助けに向かう

「何故、神科学種のパーティーであるティダ達でも探せないのに、竜胆にハルくんの居場所が判るのですか？」

「そんなの俺の方が聞きたい。だが、判るんだ!!」

真紅の翼をもつファイヤードラゴンは、獰猛な嗚咽を周囲に撒き散らし、早く獲物を追いたいとねだる。

そんな魔獣の様子を気にも留めず、騎乗した竜胆に王の影は再び問いかけた。

「互いの居場所を知ることができるのは、奴隷契約か、王族の血の契約です。」

竜胆はハルくと、いつの間に『王族の血の契約』を結んだのですか？」

「あのガキとは、仲間として一緒にいるが、王族の【血と肉と魂】の契約なんかした覚えは無い」

竜胆はきつぱりとした口調で否定するが、最初からハルを、暴力王 鉄紺へお持ち帰り予定だったYUYUには、ハルが竜胆と契約を結んでいるというのは、寝耳に水の話だ。

「ちょっと、お姉さま達にも分かるように話してくれない？」

確か『王族の血の契約』は、終焉世界の覇者一族のみ行える主従契約のはず……

もしかして、竜胆が一度、ハルちゃんを殺った事が原因じゃないの？」

「竜胆、それは本当ですか？」

「ああ、初対面の時、萌黄を誘拐した盗賊と勘違いしてハルの奴を殴り殺した。

その場でハルは甦生して、互いに喧嘩両成敗って事で謝って丸く収まったが」

「なんですって!？」

それは【神殺し】と【神の復活】、【懺悔】と【許容】の儀式に当たります。

ではその時に『王族の血の契約』が不完全ながら結ばれたのでし
よう」

YUYUはこめかみを押さえ苦悩の表情で告げると、顔を上げドラゴンに跨る竜胆を見つめる。

「王族の血の契約の導くままに、竜胆王子は決して迷うことなく、ハルくんを探し出してください。同行はティダさん、お願い「俺を連れてゆけ!！」」

YUYUの言葉を遮るように、SENの吠声が重なる。

怒気をはらませ眼の据わった表情のSENが歩み寄り、ドラゴンに飛び乗ろうとする。

しかし、ドラゴンの腹に足を掛けようとしたその時、金色のメイ
スが弧を描きながら飛んできて、SENの頭部に直撃した。

まるでスイカが割れたような不気味な音がして、SENは仰向けに倒れ、ティダはそれを跨ぎファイヤードラゴンに騎乗する。

「SEN、誘拐犯を屠る気満々の物騒な顔をして、そんな状態じゃ冷静な判断なんか出来ない。無事ハルちゃんを取り返すどころか、大失敗するのが目に見えてる」

「テイダ、俺も騎乗させろ！！」

この誘拐に偽法王のアマザキが関わっているなら、俺にも責任があるんだ」

テイダのメイスに殴られ、陥没したザクロ状態の頭部を自己再生修復させながら怒鳴り返す。

「嫌だね、お前はココで担う役目があるはずだ。」

アノ第七位王子の相手できる奴は、SENの旦那しかいないぞ。

あれだけ煽って、鳳凰小都の支配権と王位継承の地位を手放させたんだ。

しばらく画伯の相手をして、義理を果たせ」

「そうですね。私たちは”萌え萌え”絵画の良さが、いまいち理解できません。」

第七位王子の相手は、SENさまでないと務まりませんわ」

水浅葱の畳みかけるようなフォローの言葉に、SENは悔しそうに地面を睨み付け、ドラゴンに背を向けた。

先を急ぐ竜胆がドラゴンの手綱を引くと、魔獣は真紅の翼を大きく広げ、風を集め力強く羽ばたく。

その瞬間、物陰に隠れていた子供がドラゴンの真下で跳躍した。

「待ってえー、竜胆様さま！！萌黄も連れてって」

すでに地面を離れたドラゴンの足に飛びついて、大きく揺さぶられながらもしがみ付き必死に叫ぶ。

「萌黄はハルお兄ちゃんを守るっていったの。だけど、お兄ちゃんを助けられなかったよ。萌黄も竜胆さまと一緒に、助けに行くっ！！」

小柄な少女は、宙を飛ぶ魔獣の体に生える鱗に手をかけ、竜胆たちの居る背中までよじ登る。

「ダメだ、帰れっ、子供は連れてゆけない！！これはとても危険な旅だぞ。」

竜胆は、ドラゴンの背中まで這い上ってきた少女の首根っこを捕まえて大声で怒鳴ると、ドラゴンを再着陸させようとする。

だがティダは、泣き顔で目を真っ赤にした萌黄を竜胆と自分の間に座らせると、胸に抱え込むようにローブで包み込む。

「いや、竜胆、萌黄ちゃんを連れてゆこう。」

今までハルちゃんが奇跡を起こした時、いつも萌葱ちゃんが隣にいた。彼女は、そういう星の巡り合わせかもしれない。きっとハルちゃんを探す手助けになるはずだ」

前方から、苛立たしげな竜胆の舌打ちが聞こえたが、ティダは気にせず萌黄の黄金色の髪を撫でる。

さらに雪が吹雪き、地表も空も白の中、唯一真紅のドラゴンが、南の空へと飛び去って行った。

次の日

鳳凰小都中に通達されたのは、ミリオン紙幣と1万ピョコ紙幣の使用停止、そしてミリオン紙幣を金貨20枚、1万ピョコ紙幣を銀貨2枚と通貨交換する措置だった。

「何故YUYUさまは、金貨20枚と換金するなんて、金をばら撒くようなことをするのですか？」

第七位王子より街の統治権が移譲され、YUYUと水浅葱は鳳凰館の最上階で、緊急案件の処理に忙殺されていた。

といつても、YUYUの指は筆ではなく千羽鶴を折っていて、殆どの書類は水浅葱が処理している。

YUYUの折った紙細工が、フワリと浮かび上がった。

『神の燐火』は三日三晩、温かな七色の光を放ち、そして燃え尽きる。

「水浅葱、確かに現在のミリオン紙幣は、金貨2枚分の価値しかありません。

しかし、この祝福を帯びる1ピョコ紙幣は、どのぐらいの価値があると思いますか？」

貴女はいくら出して欲しいと思いますか」

「そうですね、私でしたら、1ピョコ紙幣なら10コンで交換します。」

千羽鶴の形に造られたモノなら、二羽で銅貨一枚出しますわ。

ああっ、そういうことですか!！」

水萌葱はYUYUの言葉に納得した表情でパチンと両手を叩き、尊敬のまなざしでYUYUを熱く見つめる。

物価が50倍の鳳凰小都では、ミリオン紙幣(100万)は、金貨2枚(2万コン)の価値しかない。

しかし、1ピョコ紙幣は、石銭10枚(10コン)以上の価値が生まれていた。

だが、プレミアがあるのは鳳凰の図柄の1ピョコ紙幣のみ。

ほかの紙幣に価値は無く、特にミリオン紙幣が流通しては、鳳凰小都のハイパーインフレは解消されない。

市中に溢れかえっているピョコ紙幣を一挙に回収する効率的な方法は、住民が得をする高額通貨交換を促すことだ。

小都中の人々は通貨交換の通達を知り、家で眠っていた紙幣をかき集め、1万ピョコ紙幣やミリオン紙幣を銀行や両替所で金貨や銀貨と交換に走った。

「この措置は、我が巨人王の国庫も一時的負担を強いますが、バカ息子のでかした事への賠償金として飲んでもらいましょう。

将来的には、1ピョコ紙幣の原版を持つ私たちが有利になるのですから」

水浅葱は「お茶にしましょう」と席を立ち、隣の部屋に控える召使いに話をしている。

YUYUは、巨人族に合わせて作られた大型の執務机の上の、山積になった書類を見ないように、鳳凰館最上階のバルコニーに出る。眼下に広がる白い雪に覆われた街並みの中、紙細工の生み出す七色の小さな灯りが、ホタルの群れのように光っていた。

「破滅へと向かっていた鳳凰小都に、女神の祝福による豊穡がもたらされました。」

そして、すべてのクエストをクリアした途端、強制イベントが始まる……

忌々しいことに、すべてがシナリオ通り、お約束な展開です。」

YUYUは、その妖精の様な幼い風貌とは程遠い、酷く冷めた目の色でひとり呟く。

「踊らされたばかりでは、私の性に合いませんからね。」

ゲームを完璧に全クリして、隠しエンディングを見せてもらいましょっ」

ゲームプレイヤーが、神科学種として終焉世界に送り込まれるのには理由がある。

女神霊廟に眠る神科学種は、過去からの魂の補給が無ければ只のオモチャ、生き人形にすぎない。

過去からピックアップした魂を神科学種にインストールして、知識の正確な伝承と、遺物の保存管理の役割を負わす。

数百年前、このシステムを作りだした人々の、自己顕示欲の強さには寒気がする。

しかしYUYUはその理を壊し、禁忌に手を染める覚悟があった。
今まで終焉世界に送り込まれた、どの神科学種も成しえなかった
過去への復帰と、未来を変える禁忌をタイムパラドックス実行に移す。
それにはどうしてもハルの存在が不可欠で、それを利用する必要
があるのだ。

『End of god science - 神科学の終焉 - 』

・トウジ高原エリア 鳳凰小都 「コンピュータ complete

緊急クエスト 誘拐された仲間を助けに向かう（後書き）

私が話を描く（書くではなく、元がマンガ脳なので）テーマの中に、現実であった出来事をファンタジーのオブラートに包み、親しみやすく伝えたいという願望があります。

いかにもファンタジー話のようですが、実は30年前、似たような出来事が日本で起こります。

ニクソン・ショック（ドル・ショック）

1971年8月15日に発表されたドル紙幣と金との兌換停止 1
ドル＝360円 の金本位制から変動為替相場制へ移行。

翌1972年5月15日、沖縄がアメリカから日本復帰した際、1
ドル360円 300円になっていました。

国家間の都合で、住民の財産はわずか9か月で、六分の一も目減りしたのです。

そこで、「沖縄の復帰に関する特別措置法」として6日間だけ1ドル＝360円での通貨交換が行われました。

そして2011年8月現在 1ドル＝77円 ですが 50セント
銀貨＝2000円・（プレミア）と価値観が逆転しています。

YUYUの取った方法は、この通貨交換からアイデアを頂きました。

ハルたちの冒険も、やっと、やっと、折り返し地点へ達しまし

た。
まだまだ先は長い、これからも宜しくお願いします。

メインキャラ紹介【鳳凰小都編】&オマケ話

ネタバレ含みます。

鳳凰小都編（クエスト22）緊急クエスト）読後にご覧ください。

>i29618—1969<

イラストをクリックすると、イラストサイトみんなみて に飛びます。

右上 さしかえYUYU 文字下の <<YUYU をクリックすると!!!

表情が変わり、パラパラアニメの様に動きます。

神科学種の魔法陣 メインキャラ紹介

||||豊穣サイト||||

【ハル 神科学種（冒険者） 人間 男 レベル36 15歳】

2014年12月7日『 - 神科学の終焉 - 』ログイン

リアル 第1話 ゲーム使用上の注意 参考

名前 ??? 調理師専門学校1年 19歳

無料キャラ”女神タイプ”

右目は赤色固定なので左右の違和感がないオレンジ色に設定した。癖のある青い髪に、細い尻尾のような三つ編みが背中まで伸びている。

『ラッキーボーイ』 1万分の1の確率でキャラ設定時に与えられる称号

「幸運度」祝福」と呼ばれる非表示ステータスがMAXらしい。

普段は地味なボブキャラだが、巫女姿になると女神ミゾノゾミそっくりの男の娘になる。

初心者で最弱、お料理大好き。じゃんけん無双。

【ティダ 神科学種（冒険者） エルフ レベル165 22歳】
性別 ゲーム内無性から両性

2015年1月8日『神科学の終焉』ログイン

リアル クエスト3 参考

名前 藤田友哉 学習塾経営 29歳

長く伸びた絹糸のような銀色の髪、透けるような白い肌に切れ長な瞳、

紅く薄い唇が常に微笑みを浮かべ、まるで天女のような容姿をしている。

魔力をすべて自己回復と自己治癒に回し、エルフ最強の狂戦士を目指している。指しているネタキャラ。

時々自称お姉さま言葉で聞くものを惑わすが、中身はオッサン。

S属性 調教大好き。

【SEN 神科学種（冒険者） 人間 男 レベル197 21歳】

2015年2月14日『 - 神科学の終焉 - 』ログイン

リアル クエスト10 参考

名前 野原幸樹 NEET デイトレーダー 24歳

長身、黒い袴姿の武士青年

鍛え抜かれた鋼のような細身の体、眼光鋭い黒い左瞳、右頬に青い刺青、黒い髪を後ろに束ねている。

レベル200という未知の領域に挑む廃プレイヤー。

頭脳明晰で、ゲームAIプログラムをいじれるほどの知識を持っている。

自称 変態紳士 電波語発信。
影分身の『闇夜の剣聖』はイケメン。

【YUYU 神科学種、リビジョン revision? (冒険者) ハイエル
フ

レベル285 12歳300ヶ月】 性別 幼女 未成熟

巨人族 乱暴王 鉄紺 第四位側室『王の影』

2019年10月『リビジョン 神科学の終焉 - revision?』ログ
イン

リアル クエスト23 参考

名前 ?? 看護師 22歳

普段はヴェールで顔をかくし、薄緑色の打掛の様なガウンで足先まで体を覆う。

ふんわりと肩にかかるブラウンの髪に整った小さな顔、先端のところが長い耳に紅い右目。背中には小さな純白の4枚羽。

妖精のように無邪気な微笑みを浮かべながら、巨人王の代行『王の影』として策略を巡らせる。

伝説のミスリルで作られた魔弓『弓張月』広域破壊特化された殲滅氷属性魔法を行使。

ハルを、巨人王の元へお持ち帰り予定。
毒舌ツンデレハイエルフ。

【水浅葱 みずあさぎ 人間 25歳】

巨人族 乱暴王 鉄紺 第十八位側室 『水の側室』

美しく豊満で官能的な肉体、美しく波打つ水色の髪、母性溢れる優しい雰囲気。

『王の影』に絶対の忠誠を越えた、盲目的な愛情を持つ。
色仕掛けと読心の魔力で、YUYUの策略をサポートをする。

YUYUさまのご褒美を下さいます。

【紺の竜胆 こんとう 第二十六位王子 巨人と神科学種のハーフ 21歳】

巨人族としては小柄、赤い髪に浅黒い肌、太い眉に彫の深い彫刻のような整った顔立ち。

母親が人間（神科学種）末席の王子であるため、名前だけの王族扱いという境遇。

勇猛果敢で明るいジャイアン気質、意外と世話好き。
モテ体質で、健全な色男。

【萌黄^{もえぎ} 人間 8歳】

美しいストレートの金髪、深い蒼い瞳に、色白ですらりと長い手足。
お姫様のような雰囲気、愛らしい美少女。魔力は皆無。
剣舞が得意で、戦闘能力も将来性期待大。

ハルお兄ちゃんの助手、私が守ってあげる。

|||||破滅サイト|||||

【アマザキ ERROR ERROR ERROR】

2015年3月2日『 - 神科学の終焉 - 』ログイン

リアル クエスト37 参考

名前 ??
リアルマネットレーディング RMT業者 25歳

上限レベルのランカーでありチートプレイヤー。

倫理観が欠落しており、ゲームNPCデータを丸ごとコピーして様々な悪事を繰り返す。

現在、霊峰女神神殿 少年法王 白藍 のキャラクターデータをコピーして、本人と入れ替わっている。

若葉のような黄緑色の髪に闇夜を写し取った黒い瞳、常にアルカイックスマイル。

ゲームと現実の区別がつかない終末思想の持ち主。

俺、もう待ちクタビレた、世界ナンカトットと終わらせよう。

【紺の紫苑^{しおん} 第十七位王子 巨人とエルフのハーフ 29歳】

金色の髪に蒼い瞳、高い鼻梁と完璧に整った顔立ち。

線が細く、透けるような白い肌と細長く尖った耳を持つエルフ寄りの容姿。

その姿が災いし、妬みと蔑み、そして利用され続けたことにより、滅びた種族^{エルフ}の選民思想に毒され、父親の巨人王を憎悪している。

エルフ族の知識を利用して、王位継承権を巡る争いを誘発、暗躍する。

高等なエルフの血が流れるコノ私が、竜胆のような下等な者に劣る

と言っのか

おまけ設定

その1・

人間タイプ キャラ作成
基本無料パーツ【女神／平民／戦士】

実は、平民キャラは 美人女優との離婚騒動を起こした漫才師と激似。
戦士キャラは、モデルになった歌舞伎俳優が、飲酒暴力事件を起こす。

というわけで、ハルは、消去法で女神キャラを選んだのでした〜。

その2・

「エルフの性別を詳しく聞きたいですって。
ふ〜ん、いい根性してるじゃない。

ゲーム内では 天使≠無性 だったのに、こっちじゃ両方ついて

るのよ。

(ここからオツサン声)どっちも楽しめてイイネ だと？

アレが50%縮小状態になって、俺の男のプライドはズタズタだ

……

あ、ああ、そうだな、フッフッフッ。

貴様にも、お姉さまの気持ちを味あわせてあげよう!!」

その3 .

「画伯!!まずこの衣装をご覧ください。この長い足袋は【ニーソ】と言います。

純真な乙女が【ニーソ】を履き、丈の短い下穿き【ミニスカ】を着用した時!!

脚のわずかに見える肌の部分が【絶対領域】といいます。

これを頭に叩き込んで、どんな女神像でも【ニーソ】だけは脱がさないように。

全ての衣服を脱がしても【ニーソ】は「この痛いオタク語り、我慢ならん」ウワァ」

第七位王子の前で、熱っぽく語っていたSENの姿を黒い闇を纏うと、全く同じ姿の二人のSENが現れる。

「いくら我が本体でも、あまりに恥ずかしい耐え切れない。

我は『闇夜の剣聖』として、YUYU姫に本体の常軌を逸した行動を詫びに行く」

「いつてら〜アタイはここで遊んでるぴょん

「画伯、あなたは本体に言われたことなんか無視して、好きに描けばいいじゃない」

クエスト45 遭難

聖騎士に誘拐されたハルを追って、竜胆とティダ、飛び入りの萌黄達が騎乗するファイアドラゴンは、冷たく吹雪く鳳凰小都エリアから南下する。

月のない漆黒の闇夜の空を、魔獣は休むことなく急いで駆け、雪化粧をした山を幾つも越え緑の深い森の上にたどり着く。

「霊峰女神神殿のエリア内に入るのは避けたい。海沿いを低空飛行するぞ」

声をかけた竜胆は『王族の血の契約』の力でハルの居場所を関知でき、ドラゴンを操る手綱を引き左へ旋回させた。

騎乗してるドラゴンの速度と、鳳凰小都の位置をリアルの軽井沢辺りとすれば、そこから南へ降りると……。

ティダの予想通り、眼下に広がる深い森は富士樹海、そして夜明け空に霊峰女神神殿の本拠地である、白い雪をかぶった優美な風貌の山を眺めた。

「なんとという神々しい姿、御来光を空の上から拝めるとは思わなかった。霊峰の名が付いているからもしかしたらと思っただけど、霊峰女神神殿は富士山に有るのか」

思わず芙蓉山へ手を合わせてしまっティダを、竜胆が不思議そうに見ている。

ティダの懷に抱え込まれた萌黄は、随分前からぐっすりと寝込んで起きない。

幼い少女を抱え直しながら、ティダはドラゴンの手綱を握る竜胆

に話しかける。

「ハルちゃんも気を失ったまま、就寝状態スリープに入っている。

念話チャットは繋がらなけど、とりあえず無事は確認できるから安心していい」

ティダの赤い右目に浮かび上がる仮想モニター。

ハルのパーティ状態を表示する名前表示はグリーンの通常状態だ。これが赤い点滅なら攻撃を受けての負傷状態、灰色の名前表示がデットリーになる。

「ああ、俺も、この先の海の向こうに、ハルが居るのを感じる」

敵は、霊獣一の俊足を誇るユニコーンで逃げている。

だが『王族の血の契約』者の目は誤魔化せない、攫った相手が悪かったな。

聖騎士は、何の目的でハルを攫った？

そんな事は、敵を捕らえてからじっくり聞き出せばいいか。

竜胆は不敵に笑うと、魔獣の首を平手で力いっぱい叩き、更に速度を上げた。

海岸線上を飛ぶと、湿った生暖かい風が吹き付け、磯の香りがある。

日が登り明るくなった視界に見えたのは、海上を埋め尽くす巨大な黒雲。

ティダは赤い右目を切り替え、マップ表示と脳内GPSを起動、

映し出された気象衛星の画像を確認する。海の前には島々が点在し、ドーナツ状の雲の固まりが渦巻いて迫っているのが分かる。

「海がひどく荒れていると思ったら、台風が接近しているみたいだ。988ヘクトパスカル、風速30メートル、速度5キロって移動が遅い台風だな」

「この時期に台風だと。お前たち神科学種は、天候を操るのか？」

「いや、これは魔法ではなくて、鳥の目より上空、星から大地の雲の動きを観察して、気象を判断しているだけ。」

台風は只の自然現象。何もかも、女神の力だと盲信しない方がいい。

この先に港町があるはず、とりあえず其処に向かってくれ」

しばらくすると風が強まり、大粒の雨が降ってきた。

ティダの指示通り、飛び出した半島の付け根あたりに中規模の港町が見えた。

白い石を積んだ立派な栈橋があり、沖の方に大型船、港の中には中型漁船が停泊している。町の中央広場には全域転送魔法陣が描かれ、そこを中心に放射線状に街が築かれていた。

竜胆は、その中央広場に巨人族の王旗を見つけると、慌ててドラゴンを着陸させようとした。しかし、休みなく空駆けた魔獣はバランスを崩し、ほとんど胴体着陸のような形で地面に転がり、3人は慌てて飛び降りることになる。

王旗を掲げていたのはYUYUから連絡を受けた役人達で、夜明け前から竜胆達の到着を待っていた。

「お、お待ちしておりました！！紺の竜胆王子、それに神科学種サ

マ。

い、急いで御報告したい件がありまして、王旗を掲げてお待ちしております。

この先には、風香十七群島と呼ばれる島々が点在しています。

昨日の深夜、灯台守が、島に向かって奇妙な光が空を駆けるのを見たそうで、竜胆様たちの追う、聖獣ユニコーンの放つ光だったと思われます」

「それは本当か、アレは只の雨雲じゃない、台風だぞー！

その中を飛んでいったというのか」

そう話している竜胆の体にも、雨粒が強く打ちつけるのがわかる。これから、更に天候は悪化してくるだろう。

すでにテイダは、この状態でもぐっすり眠る萌葱を抱え、軒下に避難している。

「竜胆、ユニコーンはドラゴンの倍のスピードで飛ぶことが出来るのなら、もうどこかの島に逃げ込んでいるはず。

いくら『王族の契約』の力があっても、土地勘のない竜胆が悪天候の中で探しまわれれば、逆に自分の方が海で遭難するだろう」

テイダの冷静な意見に、竜胆は不承不承の表情で、周囲を見渡す。船を陸揚げして台風に備える漁師たちが忙しく動き回り、町の住民も、家の周囲に土嚢を積んだり窓を板でふさいだりと、これから襲い来る台風対策の準備に余念がない。

「あ、嵐が過ぎて海が鎮まれば、一番足の速い船と土地勘のある者に、竜胆様を案内させます。ど、どうか竜胆様、我々が手配した宿屋でお休みください」

今、竜胆に対応している役人も、本来ならば台風対策に動き回らなくてはならない立場だ。無理は通せない、船も出ないし、騎乗して来たドラゴンも暫く休ませる必要がある。

ティダの話ではハルも無事なようだし、台風が去るまで待機するしかないだろう。

だが、実際のハルの状況は、最悪だった。

闇夜を駆けるユニコーンと夜目の効く猫人族の聖騎士は、風香十七群島の空と海が、ひどく荒れている様子がよく分かった。

だが、ココを切り抜ければ、追っ手の追跡を完全に振り切れる。

彼女は危険を顧みない、誤った判断を下すと、捕らえた獲物をユニコーンにしっかりと結びつけ、雷雲の中を飛び込む。

これは雲の中か、まるで水の中にいるようだ!!

巨大な雨粒と猛烈な暴風、濃雲に視界をふさがれながらも、濁流を遡るように前へと突き進む。

激しく上下左右へ揺さぶられ、聖騎士の彼女は、雨風を避ける結界を張ることに必死で、徐々に獲物を結わえていた縄が緩んできたことに気が付かなかった。

もうすぐ台風雲を抜ける!!それは一瞬のこと……

ぷちんっ

ハルをユニコーンの背に括りつけていた縄が切れ、そのまま振り落とされる。

一本だけ、かろうじて繋がった縄が身体の落下を止めるが、バランスを崩したユニコーンは、きりもみ状態で下へと落ちていった。

突如、宙に投げ出された彼女は、伸ばした指先がハルに結わえ付けられた紐に届き、必死でそれをたぐり寄せユニコーンの背中に戻る。

だが、落下は止まらない。

台風雲を抜けると、更に激しい雨と、殴るような強い暴風に煽られる。最後のあがきで、ユニコーンは体勢を整え、真下に見える孤島の砂浜へ着陸しようとした。

しかし、無情な横殴りの風が、ユニコーンの体を地面へ叩きつける。

彼女は激痛と、顔を打つ強い雨粒で目を覚ました。

特に脇腹の焼けつくような痛み、骨が数本折れたかもしれない。

少し離れた場所に倒れるユニコーンと、鳳凰小都から攫ってきた少年の側まで這うようにして進む。

ユニコーンの背に括られた少年は、雨風で濡れた体が冷え青白い顔をしているが、怪我をした様子はない。

そして、同じく倒れるユニコーンの様子を見て、彼女は悲鳴を上げる。

「ああっ、山桜、なんてこと……」

暴風の力で地面に叩きつけられた衝撃で、聖獣の細い足は四肢はすべて奇妙な方向に折れ曲がっていた。倒れて口から泡を吹きながらも、主の姿を目で追うユニコーンの姿に、彼女は気力を振り絞り立ち上がると周囲を見渡す。

腰から下げていた武器も、荷物の入った鞆も、嵐の中で落としてしまった。

激しく打ち寄せる波が、足元まで迫ってくる。このまま潮が満ちれば、砂浜はすべて波に飲まれてしまう。

慌てて陸地の部分に目をやると、砂浜と陸の境目、ギリギリ波が避けられる岩陰に洞窟らしきものが空いているのが見える。

急いで砂浜で流木を拾い、ユニコーンの足に添え木をすると、普段は羽のように軽い聖獣が酷く重くなっていた。

ユニコーンを引きずって岩陰まで運び、再び同じ場所に戻ると、今度は攫ってきた少年を背負って運ぼうと顔を覗き込む。

満身創痍な自分たちと比べ、彼は傷一つなく、穏やかな寝顔を浮かべる。

この嵐は、まるで神の怒りの様だ。

篡奪者を罰するために、ミゾノゾミ女神が起こした神罰か？

そんなの気の迷いだ、神など居ない、私が信じるのは白藍法王さまだけ。

彼女は、熱を持ち腫れ上がっているであろう脇腹の痛みを耐え、少年を背負い岩陰に向かった。

ゴオオオオー　オオオ　オオオー

って、ウルサイなあ、SENかな、まさかテイダのイビキ?!

ふわりと意識が浮上するが、酷く寒くて、再び瞼が閉じそうになる。

ペチンと強めに頬を叩かれ、しぶしぶ目を開けると、誰かが顔を覗き込んでいる。

「アナタが女神の使徒と名乗る者なら……」

何故、聖地である霊峰女神神殿を避け、砂漠のオアシスに現れたの？

女の人の声、怒ってる、聞いたことない、憎しみのこもった声

「女神は、きれい?なら、現れない」

「ああ、私は、女神も奇跡も、何も信じない!!

神など居ない、その使徒も要らない。
私に必要なのは、白藍サマだけだ」

「信じない、なら、女神は、現れない」

女の人に襟首を掴まれ、激しく揺すぶられるけど、眠い、もう目

が開かない。

「白藍^{はくあい}サマは、貴様らと同じ神科学種に、記憶を奪われ器を移し替えられたんだ。

私の、瑠璃^{るり}の白藍サマは何処にいる！！
神の使徒ならアノ人を探し出してっ」

「要らないなら、もう、眠るね」

寒いし、ウルサイし、もう少し眠るから、静かにしてね。

眠ると、一言告げると、少年の頭はカクンと落ちた。

それから、いくら揺さぶっても、頬を叩いても神科学種の少年は目覚めない。

諦めて少年をその場に転がすと、四肢が折れているはずのユニコーンが体を起こし、首を伸ばして少年の襟首を啜えたと自分の方へ守る様に引き寄せる。

ユニコーンは、しばらく甘えて少年の顔をベロベロ舐め、寄り添い大人しくなる。

今、私は誰と話をした？

私は神を信じない。

でも、白藍サマを探すため、アマザキを出し抜くには、神に縋るしかない。

その神に、信じないなら現れないと、否定された。

彼女は、脇腹を脈打つ痛みと絶望で、全身の力が抜ける。

膝から崩れ落ち、そのまま意識が遠のいた。

それから、ハルが再び目覚めるのは二日後。

薄暗い洞窟の中、ハルがもたれ掛っていた温もりは白い聖獣で、半分白目をむき、口からだらりと長い舌を垂らして、微かに息をしている、死にかけているのが判る。

そして、少し離れた洞窟の入り口付近で、白いミスリル鎧を脱ぎ捨て、ポロ布に包まって荒い息遣いと細いうめき声をあげる、全身が鬱血してドス黒い肌色をした聖騎士の女。

（なんで僕、こんなところに？何が起こった？あれ、声が出ないー
ーっ）

ハルは一人、パニックに陥った。

クエスト46 猫人族を治療しよう

もうどれだけ時間が過ぎただろう？

悪天候で、昼とも夜とも判らない薄暗い世界、荒れ狂う暴風は納まる気配がない。

必死の思いで避難した孤島の洞窟入口まで波が押し寄せた。

幸い洞窟の中は深く、奥の方は広さも充分あり苔が分厚く生えて、雨風から身を守ることは出来た。

聖騎士の彼女は、熱を持った腹部の痛みと、酷い喉の乾きに襲われていた。

洞窟の中の溜まり水を口に含むと、それは塩辛い海水で、飲めるものではない。気休めにスポンジみたいな食感の苔を口に含む。

聖騎士の証である、体に纏うミスリルの鎧が重く感じる。彼女はそれを脱ぎ捨て、薄いシャツとズボン姿になった。

武器も荷物をすべて失わない、唯一身を守るのは、籠手に仕込んでいた小型ナイフ一本だけ。汚れたローブに包まり体を横たえると、もう指一本も動かせない。

四肢が折れて重傷のユニコーンが数回痙攣する姿が見える。せめて水を与えてやりたいが、外に水を探し行く事もできず、宥めてやることも出来ない。

鳳凰小都から奪って連れてきた少年は、一度目覚め、再び眠り続けている。

嵐が去った時、はたして自分と聖獣は生きているだろうか？

久々に、とてもよく寝たなあ。

パチクリ、と目を開けたハルは、周りの暗さに首をひねる。

あれ、まだ夜だっけ？

隣に寝ているのは誰だろう。触り心地のイイ毛深い……毛並みの良い白い馬？

ハルはゆっくりと体を起こすと、枕だと思つて背中を預けていたのが、ユニコーンだと気が付いた。

暗闇の中、その白い聖獣の体が仄かに発光して明るい。

ユニコーンは横たわったままで、その足はすべて負傷して添え木を当てられている。顔をのぞき込むと、半分白目をむき、時折痙攣するような不規則で苦しそうな浅い息をしている。

どうして、このユニコーンは酷い怪我をしているの？

何が起こった、思い出せ！！

確か、僕は厨房の勝手口に居た女の人と話をして……

連れていたユニコーンを触らせてもらった、それから、記憶がない。

生温い空気と、外で吹き荒れている暴風の音と、岩に波の打ちつける音、磯の香り。

ここが鳳凰小都でないことは分かる。
暗闇に目が慣れ周囲を見回すと、そこはゴツゴツとした岩場で、
自分の寝ていた場所は分厚い苔がクッションになっていた。

自分の髪も服もゴワゴワして、もしかしたら海水に浸かっていた
かもしれない。

ハルはその場で立ち上がりかけ、天井から飛び出した岩に頭をぶ
つける。

ガツン「!!!!!!!!!!!!!!」

(痛ああア、あれっ、声がでない。どうしたんだ?)

ぶつけた痛みで悲鳴を上げたはずなのに、喉から空気が抜けるだ
けで声にならない。

喉は何の違和感もない、しかし、何故か上手く舌が動かない。

ハルは首を捻りながら、腰に巻いたエプロンの下に隠していたア
イテムバックを出す。

ウエストポーチタイプのアイテムバックの中から大鍋を取り出し、
更に逆さに持ち、バックの中から蛇口を捻るように水が溢れ出た。

水を大鍋いっぱい満たし、ハルは直接口を付けて含むと、数回
うがいを繰り返す。

(あーいーうーえーおっ! やっぱり声が出ない)

その時、助けを求めるような弱々しいユニコーンの嘶き声が出て、
後ろを振り返る。

ぐったり横たわっていたユニコーンが、水の匂いに反応して頭を

起こそうとしていた。水を欲して大鍋に首を伸ばすが、頭を上げる力もなく舌か宙を彷徨っている。

慌ててハルは、エプロンを大鍋の水に浸し、たっぷり含ませると、ユニコーンの口元に持ってきて潤した。

それを数回繰り返し、顔や首や体まで拭いてやると、ユニコーンは少し意識がしっかりしてきたようで、自力で頭を起こした。大鍋の中に頭をつっこんで、ゆっくりと水を飲み始めたのを見て、ハルはホッと一息つく。

改めて周囲を注意深く観察すると、かすかに外の光が射し込む洞窟入口付近に、倒れる人影を見つけた。

ハルは恐る恐る近づくと、それは見覚えのある人物で、ロープの下に隠れていた頭には白い獣耳があり、体を覆う布の下から白く細いしっぽが覗いている。

（ユニコーンを連れていたお姉さん、猫人族だったの！！この人も大怪我して、今にも死んでしまいそうだよ）

その時、女には意識が在り、ハルの様子をつかがっていることに本人は全く気が付かなかった。

彼女は暗闇でも夜目か効き、獣の耳は聴覚が鋭い。

そして護衛聖騎士として訓練を積んだ感覚で、離れた場所にいる少年が目覚める気配を感じとった。

二日ぶりに目覚めた少年は、自分の置かれた状況が分からないのか、慌てふためいている。その様子に、彼はまったく頼りにならないと思った。

しかし少年をそのまま観察していると、腰に巻いた小さな鞆から手品のように大鍋を出し、そして次は鞆の中から水を出し大鍋にそそぎ入れる。

あれは神科学種の魔法鞆。過去の遺物や武器、あらゆる物を中に納めていると噂で聞いたことがある。

少年は、てきぱきとユニコーンに水を与え、体を拭って世話をする。

ユニコーンの落ち着いた様子に安堵したらしく、周囲をキョロキョロ見回し、どうやら私が倒れているのを発見したようだ。

猫人族の女の人は、顔色が鬱血したようにドス黒く、全身も腫れ上がっている。

白い手足は細く短い白毛が皮膚を覆い、触れると滑らかな手触りだ。

（怪我を直したいのに、声が出ないからヒールの呪文が唱えられない。直接、手の平から魔力を送り込んで治癒しよう）

彼女は、痛めた脇腹を庇うように背中を丸めている。

ローブからのぞく擦り傷だらけの肩に、ハルはそっと触れるとイ

メージする。

SENがタケミカズチを抜刀する時に左手に宿らせる魔力、ティダが狂戦士モードで素手に宿らせる魔力を真似る。

手の平がほんのり温かくなる、その温もりを相手に流し込むイメージ。

（生命を司る精霊よ、傷つく彼の者を癒せ ヒール）

横たわる彼女の全身に青い光が巡り、治癒魔法が行使される。だが怪我は酷い、一度の治癒魔法では癒しきれない。

（僕の魔力と生命力では、治癒魔法はギリギリ三回しか使えない）

ハルは、繰り返し治癒魔法を多重行使する。

彼女の全身を包み込むように温かな魔力が癒し、脇腹の痛みが消え、折れた骨が自動修復してゆくのが判る。

目立つ傷は消え、急激な傷の修復に全身が痺れる。

癒されたはずの彼女は、ひどく恐れ戦いていた。

まさか、こんな弱々しい少年でも、神科学種はこれほどの治癒魔法が使えるのか。

終焉世界に、魔力を持つ者は僅かしかない。一度の治癒魔法を行使するには、神官三人がかりで行うのだ。

それが一人で三回も治癒魔法を、しかも無詠唱で行使した。
彼ら神科学種も、あのアマザキのような、悪魔の力を秘めている
！！

そのことが、彼女のハルに対する警戒心を高めてしまった。

治癒魔法が上手く効いたようで、猫人族の彼女の傷が消えてゆく。
ドス黒かった顔色も、頬と唇に赤い血の色が戻り、手足の腫れも
引いている。

（さすがに疲れたよ。うわっ、魔法行使で【生命力 残り2】っ
てマジですか！！）

治癒魔法ヒールは、魔力8 生命力8を消費する。

初心者レベルのハルは、魔力&生命力が30程度で、ヒール魔法
を3回行使すると生命力は僅かしか残らない。

ハルは、しばらく眠って生命力を回復すればいいかと単純に考え
た。

まさか、命を助けたはずの相手が、牙を剥くとは思ってもいなか
った。

傷が癒え、息使いの穏やかになった猫人族の彼女を状態を確認す

ると、ハルは、ユニコーンを枕に一休みしようと立ち上がる。
その途端、相手が起き上がると背後から羽交い絞めにして、ハルの細い喉元にナイフを突きつける。

霊峰女神神殿 法王付 守護聖騎士 瑠璃るじ

彼女は『冷たい牙』と呼ばれ、女神神殿と法王に逆らう謀反人の命を狩る執行人だった。

「動くな神科学種、アナタの持ち物を渡してもらおう。
その腰に下げている鞆を渡しなさい」

「ええっ、ま、待って、あれ？声が出る」

「アナタには、女神神殿禁術で言葉を奪う『沈黙の呪』を印したの。
私以外の者とは会話が出来ない」

驚いて後ろを振り返り、自分の顔を覗き込む少年に対し後ろめたい感情が沸き起こる。

思わず腕の拘束を緩めてしまい、逃げようと暴れ出す少年の喉元のナイフが動いた。

ハルの喉元に、一筋の切り傷と数滴の血が流れた。

【直接攻撃 - 2 生命力0】

暴れていた少年が抵抗を止めると、カクンと膝を折り、前のめりに倒れる。

えっ、一瞬彼女も訳が分からず、その体を手放してしまう。

目を見開いたまま、少年は事切れていた。

クエスト47 王族の契約を発動してみよう

コクウ港町エリアは、季節外れの台風に襲われていた。

ハルの行方を追ってきたティダ達三人は、台風で港町で足止めを食らい、宿で大人しく……できるはずもない。

半巨人で人間の倍以上の力を持つ竜胆と、治癒魔法に長けるエルフ族のティダは、この非常事態に散々駆り出され、舟が横倒しになったと力仕事を手伝い、風で飛ばされ腕の骨を折ったと担ぎ込まれれば治療を行う。

それに、身分を隠していても若々しく凛々しい顔立ちの竜胆と、見目麗しい天女のようなティダ、姫君のような愛らしさの萌黄は、台風で家や宿屋に閉じ込められ暇を持て余した人々の噂になる。

特に、来る者を拒まないモテモテ体質の竜胆は、宿の部屋にマダムやら娘達が押しかけてきた。

ティダは、パーティチャットのログインアラーム音で目を覚ました。
た。

二日ぶりに、ハルが就寝モードからログイン状態になった合図だ。

「ハルちゃん、目が覚めたの？」

大丈夫、聞こえたら返事して頂戴」

ティダは念話で何度も呼びかけるが、台風のせいで電波状態が悪いのかハルからの返事が無い。

なんだか嫌な予感がする。あのハルちゃんのことだ。
自分たちの助けが来るまで、大人しくしてればよいが、何かやら
かすのではないか。

まだ朝7時前、ティダはベットから起き上がり、赤い右目を切り
替えマップ表示と脳内GPSで気象衛星の画像を確認する。

台風は二日間、コクウ港町エリアと風香十七群島に居座り、やっ
と昼には暴風域を抜け出そうだ。夜のように薄暗い窓の外を眺める
と、雨は随分と小降りになってきた。

いつでも出立できるようにアイテムバックの中身を確認している
と、再びアラーム音が鳴り異常を知らせる。

ハルのステータス表示が、グリーンの通常状態から赤く点滅し始
め、生命力と魔力がガンガン減少している。元々初心者レベルで、
30そこそこしかないハルの生命力が、あっという間に一桁、2ポ
イントしか残ってない。

これは何が起こった、魔力も同時に減っているから治癒魔法を使
ったのか。

さっきまでハルは通常状態だった、他の者が怪我を？

まさか誘拐犯に治癒魔法……ハルちゃんならありえるな。

生命力ギリギリ状態で、赤く点滅するハルの名前に、ティダの不
安は掻き立てたれる。

コクウ港町一の高級旅館 巨人族の王子 竜胆のために用意された特等室。

ティダは廊下を足早に駆け抜け、竜胆の居る一番奥の部屋のドアを蹴り開けた。

広いベットの上には竜胆本人と、お約束通り、両脇には全裸の美女二人がシートに包まって眠っていた。突然、ドアが破壊された大きな音に驚いて二人の美女は目を覚まし、部屋に乗り込んできたティダを怯えたように見つめる。

ティダは彼女たちに、天女のような慈悲深い笑顔で笑いかけると、土足でベットに乗り込み、眠気まなこの竜胆の襟首を鷲掴む。

「竜胆、この状況で、相変わらずお盛んだな。」

さつさと起きろ、ハルちゃんの状態がおかしい。

竜胆、お前契約者だろ、何か感じないか?!

ティダは、細い腕で巨漢の竜胆をベットから引きずり出すと、そのまま廊下へ連れてゆく。

その間にも、ハルの名前表示が赤の点滅から、色を失い灰色のデッドリーになる。

襟首に手をかけたまま、詰問するように聞いてくるティダの様子に、さすがの竜胆も危機感を覚えた。

「慌てるなティダ、今呼びかけてみる。」

王族の、血と肉と魂の契約者の名の元に命ず。

我が半身の姿を映し出せ、所在をー」

竜胆の全身から紺のオーラが立ち上り、感覚が研ぎすまされる。

閉じた瞼の眼球が、見えないなにかを探すように動いている。

王族の契約の呪文も終わらぬうちに、ティダの目の前で、竜胆の喉元に『一筋の切り傷と数滴の血』が流れた。

竜胆は僅かな痛みを感じ、自分の首に手を伸ばすと、指先に付いた血を見て眉をひそめる。

「これは、半身の契約者、ハルが受けたダメージを肩代わりした。俺は、誘拐犯の聖騎士の顔を見た。

ヤツに脅され切りつけられた傷で、ハルは死んでいたぞ」

「竜胆、神科学種は女神霊廟で用意された器に、プレイヤーの魂がインスタル憑依されている。

この世界の人間には無い、特別な力を与えられているが、必要以上ログアウトに生命力を失えば、器から魂が解離する。

ククツ、お姉さまのハルちゃんを傷物にするなんて、随分と舐めたマネしてくれるじゃないの。

竜胆、連れてきたドラゴンはもう充分飛べるだろ。

台風が過ぎるのを待つ必要はない、30分後に出発するぞ！！」

いつもは取り澄ました表情のエルフが、瞳を爛々と輝かせ、口元は歪んで吊り上り、血に飢えた狂戦士モードになる。

「この暴風の中、飛んで探すなんて無謀じゃないのか？」

「雨が収まりつつある今なら、台風雲が薄い場所を選んで魔獣を飛ばし、雲の上に出れば大丈夫だ。

風香十七群島は、すでに台風から抜けている。

我々やアマザキを出し抜いて手に入れた、貴重な『女神の憑代』を簡単に傷つけるとは、敵は精神的に追い詰められているようだ。

これは一刻も早く、ハルちゃんを助け出す必要がある」

半刻後、暴風の中を赤いドラゴンが飛んで行くのが見えた。
海の向こうは、雨雲の間から、久しぶりの太陽の光が差し込んで
いる。

わずかな切り傷を受けて、その場で倒れた少年は、人形のように
動かなくなつた。

そんなバカな、まさか、まさか、まさか！！

治癒魔法で、私の折れた骨を一瞬で繋げることが出来るのに、た
ったこれだけの傷で死ぬの？

血の気の失つた顔、紫の唇、目を見開いたまま事切れる神科学種
の少年。

猫人族の聖騎士、瑠璃は愕然として、両手を地に付き、その顔を
間近から覗き込む。

少年の赤い瞳に、自分の姿が映った瞬間、違う誰かが見つめ返す
のが解つた。

「ひいっ！！」

その視線に秘められた威圧感は、圧倒的な力の差と恐怖心を呼び
起こす。

紺のオーラが少年を包み込み、赤い瞳はさらに彼女の姿を追う。
終焉世界で最強の一族、巨人王の目。

それは、わずか一瞬の出来事だった。

瑠璃は我に返ると、不思議な事に少年の首の傷は消え、顔に血の
気が戻り、息を吹き返していた。

洞窟の奥にいるユニコーンが、興奮した嘶き声で鼻を鳴らしなが
ら少年を探している。

聖獣は少年を気に入り、自分の傍に連れてこいと言っているよう
だ。

彼女は、自分より小柄な少年を抱き上げると、ユニコーンの傍に
運んだ。

久々に、とてもよく寝たなあ。

あれ、なんだか同じ場面デジャヴー？

パチクリ、と目を開けたハルは、首をひねりながら周囲を見回し
た。

ガブ ガブ ガブツ

幸せそうに僕の頭を甘噛みするユニコーン、唾液まみれになっ
ているのは仕方ない。

それから、なんで誘拐した犯人が、怯えたように警戒心丸出しで、壁に隠れながら僕を見ているのだろう？そんな彼女が、遠くからポイと投げてよこしたのは、僕のアイテムバックだった。

「ア、アナタに命令しますっ。そ、その鞆の中身を全部出して、床に並べなさい。

ち、沈黙の呪いが掛かってますから、命令に逆らい嘘をつくことは出来ませんよ」

ふむっ、バッグの留め金が外れている。

ネコさん（と命名）は中身を出せなかったのか。

アイテムバックは、裏地に描かれた魔法陣を魔力で起動させないと、中身が取り出せない仕組みになっているからね。

バックの中身は、オアシスの洞窟で水を汲むために全部出したから、大したモノ持ってないよ。

神科学種の少年は、アイテムバックに手を突っ込むと、次から次へと奇妙なモノを出してきた。

「えっと、鞆の中身は、使い込んだ火の結晶の簡易コンロ1、着替えの上着とズボン1、それから……」

神科学種の所有物だと期待して、少年に命じて出させた鞆の中身は、竜の鱗や使えない紙幣、ただの黒い石、紅白の衣装というガラクタばかり。

「ぶ、武器を持ってたら出しなさい。私が使えそうなモノです。」

「この大きな弓はどう？ちょっと重いけど性能はイイよ」

ハルはニヤリと笑い、女神の弓と矢を直接彼女に手渡す。瑠璃は、その赤い漆塗りの美しい弓が使えそうだと受け取ると、その鉄の塊のような重さに、体を支えきれず膝をつく。

「こ、こんなに重たい弓は持ってられません。矢も重すぎて射れないし、武器として使えないわ」

逆切れ気味に突き返された弓を、ハルは軽々と片手で受け取るとアイテムバックに仕舞う。

彼女の驚いた表情に気付かない振りをして、油のこびり付いたドラゴンヘルム（竜兜）と、傷だらけのクリスタルシールド（水晶盾）、20センチほどの長さのナイフを出す。

「僕は料理が趣味なので、兜はお鍋として、盾はまな板として使います。」

コノ包丁は、特別お肉が良く切れます。僕の持つてる武器はこれだけ」

ハルの言葉に、彼女はガックリ肩を落とした。

少年が眠っている間に、彼女は嵐の納まりつつある浜辺に出てみたのだ。

白い砂浜に、四足の足跡と太い尻尾を引きずる跡が大量に付いていた。

この浜辺は雑食のモンスター、全長二メートル越えの蒼海ワニの群生地だ。

脚を怪我して動けないユニコーンに、すぐ死んでしまう弱い神科学種の少年。

自分はミスリル製の鎧がある、身を守るだけなら大丈夫だ。

しかし他者を守るための、戦うための武器が欲しい。

武器はあった。

ハルの持つ『良く切れる包丁』は、SENがアマザキから奪った
『首切り刀 チャタンナキリ』。

その元は、切れ味の良すぎる包丁だったので、ハルなら使いこなせるだろうとSENは譲ったのだ。

呪で、嘘を吐くことのできないハルは、言葉を上手く変え、彼女を誤魔化した。

ひとつの嵐は過ぎ、その後に、新たな嵐が待ち構えていた。

クエスト47 王族の契約を発動してみよう(後書き)

特殊な武器なので、説明〜

北谷菜切 ちゃたんなきり (ウィキ参考)

伝承によれば、北谷の農婦が包丁を振ったところ、触れてもいないのに赤子の首を切って殺してしまった。

取調べを受けたが無実を訴え、役人が試みに山羊に向かって包丁を振ったら同じく首が切れ、そこで農婦は放免された。

この包丁を刀に鍛え直したものが、北谷菜切であるという。

クエスト48 島を偵察しよう

神科学種の魔法靴アイテムバッグ

過去の貴重な遺物や最強の武器、あらゆる宝物が中に納められていると噂で聞いた。

しかし、鳳凰小都の聖堂から攫ってきた神科学種の少年の鞆から出てきた物は、ガラクタと中古防具、マトモに使えない武器。

唯一、使用できそうな『よく切れる包丁』も、自分の持つ護身ナイフの方が高性能に見えた。

しかし、刃物は取り上げた方がいいか？

沈黙の印で呪われた少年は、術者に逆らうことも危害を加えることはできない。『よく切れる包丁』は、そのままハルの手元の残った。

「では、鞆から水を出したように、他の物も全部出して。何か食料はあるの？」

「果物を持ってますよ。オアシスで生えていた木の実で、堅い皮を剥いて食べてください。」

あとは……鳳凰小都で退治した死黒鳥の死骸です、腐ってるけど。」

「死黒鳥なんて醜い厄鳥を、どうして鞆の中に仕舞っているの！！」

「命令通り、鞆の中身を全部出したのに、クスツ、文句言わない下さっ」

ハルはしれつと答えると、木の実を十数個取り出し、物欲しそうに見つめる彼女に木の実を二個手渡す。

彼女は鳳凰小都で見た時より疲れ果てた表情で、鎧を脱いだ体は痩せ細り、頬はコケ目の下には隈が浮いている。

ずっと二日間眠っていたハルと比べ、飲まず喰わずの状態で洞窟に閉じこめられ、その飢餓感は酷かった。

少年から貰った木の実は、皮を剥くと白いツヤツヤした果肉が美味しそうに見えたが、口に含むとパサパサした味のない堅い芋のような食感で、とても呑み込みづらい。

しかし今は全く食料が無い、食えることが出来るだけマシだ。

ふと気が付くと、少年は木の実を手にしたまま、自分の食べる様子を面白そうに観察している。

「アナタはお腹が空いてないの？どうして木の実を食べようとしな
いの」

「あつ、お気になさらずに、どうぞどうぞ。」

僕は木の実を茹でて、柔らかく調理して食べますから」

少年は、心底楽しそうな笑顔で返事をする。

自分にワザと、生で木の実を食べさせて、からかった事に気が付いた。

一見、大人く優しげな顔立ちの少年、しかしその瞳の奥には強い光がある。

これは、見かけで判断できない。言葉で脅しても折れない、力で脅せばすぐ死んでしまうかもしれない。

もしかしたら、自分の手に負えない面倒な存在のような気がした。

食べかけの木の实を握りしめたまま、考え込んでいる彼女を無視して、ハルはユニコーンにも木の实を与えようとした。

馬なら人参がいいんだけど、おにぎりの実なんて食べるかな？

予想通り、差し出された木の实を無視したユニコーンが、突然、ハルの腰に巻いたアイテムバックに鼻頭を押しつける。

必死に匂いを嗅ぎ、歯をむき出しにして中身を出せと要求してくる。

「山桜、急にどうしたの！！アナタ、鞆の中は何が入ってるの」

「えっ、アイテムバックの中には死黒鳥の死骸しか入ってないけど

……

まさかユニコーンってモンスターを食べる？」

「ユニコーンはモンスターなんか食べないわ。

聖獣は綺麗な水と”蒼珠”を食べて生きているの。ユニコーンの四肢の怪我也、”蒼珠”でしか治せないもの」

「そっか”蒼珠”ね。それなら……」

少年は小さく呟くと、おもむろにアイテムバッグから死黒鳥を一羽取り出し、その場で首を落として頭部を捌く。鳥のきつい腐臭に彼女は眉をしかめるが、ハルはソレから青い塊を取り出すと、ユニコーンの鼻先に差し出す。

ぱくん

聖獣ユニコーンは、ハルの掌に乗った青い石をペロリと食べてしまった。

「あ、あーっ、死黒鳥を食べさせるなんて、アナタ聖獣を毒殺するつもり!？」

「違いますよ、ほら死黒鳥の額に小指の爪ぐらいの小さな青い石”蒼珠”が埋め込まれているでしょ。

ユニコーンは、この”蒼珠”を食べたいんですよ」

ハルはそう答えながら、バッグの中から新しく死黒鳥を出して彼女に押しつけた。

彼女は、神科学種の少年が”蒼珠”を取り出したのを真似て、ナイフで石を抉り出そうとするが、”蒼珠”は刃先が触れただけで脆く砕け散ってしまう。

自分が一個の”蒼珠”を取り出すのに悪戦苦闘してる隣で、少年は鼻歌まじりに慣れた鮮やかな手つきで、鳥を捌き”蒼珠”を取り出している。

「うん、まさか肉屋のバイトで鍛えた技が、ここで生かされるとは思わなかった」

ハル一人で死黒鳥を二十羽以上捌き、手の平いっぱい”蒼珠”を集め、それをユニコーンに与えてやった。

”蒼珠”を食べた途端、ユニコーンの足の腫れが引き、折れた四肢の怪我がみるみる回復して、横倒しの状態から体を起こし、四肢を曲げて座れるまでになった。

ただ、走れるまで怪我が完治するには、もっと大量の”蒼珠”を食べさせる必要がある。

一仕事終え、手に着いた死黒鳥の臭いを落とすため、ハルは洞窟の入口の水たまりでゴシゴシ手を洗っている。

聖騎士であり、今は誘拐犯の彼女は、奇妙な気分で捕らえた少年を見ている。

この子が、女神卸の巫女という噂が信じられない。ただの平々凡々の食堂の下働き召使いではないか。

「砂漠竜を狩り、枯れた泉に水を満たし、食糧不足を解消した『オアシスの奇蹟』と

死黒鳥を狩り、聖人黒鷲を選定し、祝福の宿る紙細工を与える『鳳凰小都の奇蹟』

アナタは本当に、終焉世界に降臨したミゾノゾミ女神なの？」

「僕は女神さまじゃないですよ。

戦闘力もないし、魔力も足りない、弱いだけの神科学種です」

嘘ではない、僕の器は女神モデル（無料キャラ）だけど、普通の人間とドコも変わらない。

オアシスでも鳳凰小都でも、ほんの少しの偶然と幸運で奇蹟は起こった。

しかし殆どの者は、小さな奇蹟すら起こせない。そして疑心暗鬼の心の彼女は、小さな奇蹟の予兆を見逃してしまう。

偶然、ハルの鞆の中に”蒼珠”があったという幸運を、気付きもしないのだ。

見回りに行くと猫人族の彼女は洞窟を出てゆき、ユニコーンの傍で休んでいたハルは体を起こした。

外にはモンスターが居て危険だと言うが、本当に危機感を感じるのには、自分を捕らえる聖騎士の彼女だ。死黒鳥から”蒼珠”を取り出せない、指先のコントロールができないほど、酷く情緒不安定な状態。

(洞窟内で電波状況が悪いのか、パーティチャットが繋がらない)

今なら、ココを抜け出すチャンスだ。

外の電波状態が良ければ、仲間達に念話チャットで助けを求められるのだ。

洞窟の入口に向かうハルの姿を見て、一緒に連れて行ってくれというように、鼻を鳴らすユニコーン。

潤んだ蒼く大きな瞳が瞬いて、長い首を左右に振って甘えるような仕草で、ハルの気を引こうと一生懸命だ。

(ああっ、山桜ちゃんかわいい)。この子の足の怪我を治してあげたいよ)

ハルは、後ろ髪を引かれる思いで洞窟の入口まで来て、周囲に敵の潜んでる気配が無い事を確認して外に出る。、

普段より強い風が吹いているが、まさに台風一過の天気。

そして、目の前に広がる光景を見て、ハルは突っ立ったまま啞然

としてしまった。

千切れ雲が浮かぶエメラルドグリーン天空と海、大きな波が打つ寄せる白い砂浜、そして、周りに陸地が見えない。

洞窟の中では、始終波の音が聞こえ潮の香りがしたので、海の近くの洞窟なのだろうと思っていた。

それが、まさか、四方を海に囲まれた絶海の孤島、海の中の岩の洞窟だったなんて！！

周囲に白い砂が堆積した、巨大な岩の島。

そして、青い海の色に紛れ、白い砂に潜り、姿を隠しているモノをハルの赤い右目の赤外線センサーは確認していた。

浜辺と浅瀬は、風華十七諸島の真の支配者『蒼牙ワニ』のコロニーで百匹余りのワニがたむろする。

一見、白く美しい砂浜に足を踏み入れた途端、二メートル越えの巨大ワニが襲いかかってくるのだ。ただし、ワニがいるのは砂浜の部分で、ハルの居る傾斜のある岩場までは登ってこられない。

島全体が巨大な岩の島は、逞しい雑草が張り付くように生え、小さな実を付けた細い低木が岩の割れ目から根付いている。

ハルは島の頂上を目指して岩場を登り続け、三〇分ほどかけて頂上にたどり着いた。

遙か海の彼方に、二日前まで自分が居たであろう陸地の影が見え、ブッチンプリンの形をした山のシルエツトが目飛び込んでくる。

そして、岩の島上から360度水平線を見渡せる、眼下に広がる光景に驚く。

こ、これは、見事なほど、人工的に造られた群島だ。周囲を海に囲まれた、綺麗なドーナツ状の砂の浅瀬に、首飾りの宝石ように美しい、大小の島々が並んでいる。青紫の岩礁の島、青い花に覆い尽くされている島、赤い岩山と赤く紅葉した樹の島、黄金色に輝く黄色の実が鈴なる島、どの島も一つの色に染められ、グラデーシヨンのように並んで配置されている。

ハルの居る黒い岩島の隣は、深緑の森が広がる大きな島で、潮が引けば浅瀬を歩いて渡れるかもしれない。

ただしその浅瀬には、獰猛なワニ群れが、獲物を待ち構えてうろついているが……

周囲を見渡すと障害物は一切無い、しかし陸からかなりの距離がある。

（携帯だと確実に圏外だよね。念話はちゃんと繋がるかな。^{チャット}）

ハルが、赤い右目に浮かび上がる仮想モニターを立ち上げたと同時に、SENとティダから送られた、二日分の大量のメッセージが表示される。

メッセージ過去ログを見て、皆が自分を心配している様子を知り、思わず目頭が熱くなってしまふ。そしてティダの^{チャット}念話と通信可能状態なのを確認できた。

（大丈夫だ、コレで連絡が取れる。助けが呼べる！！）

しかし、次の瞬間、思いもかけないアクシデントが待っていた。

クエスト49 難破船を救助しよう

朝早く、台風をかわしハル救助へ向かった竜胆たち三人は、風華十七群島エリアに入ったところで、嵐にやられた難破船を発見した。半分沈みかかった舟と、荒れる海の中で波を受け転覆しかかる二艘の救命ボート。船の乗組員と商人らしい乗客、三十人近い人数が乗っていて、必死に助けを求めている。

竜胆はドラゴンを操り、近くの小島まで救命ボートを誘導し、間一髪のところを救い出した。

難破船の重傷者は、ティダの蘇生魔法で助けられたが、処置が間に合わず息絶えた者も数名、まだ船の中には人が閉じこめられているという。

半分沈みかかった船は物資を山積していた商船で、約束の取引時間間に合わせるため、台風の中、船を出して難破したのだ。

「おい船長、どう責任を取るんだ!!」

あの程度の雨風で沈むボロ船のせいで、俺の大切な商品が全部ダメになっちまった。

せっかく安く仕入れた奴隷代金、弁償をしてくれるんだろうな」

「ふざけんな、俺は船を出すのを反対したぞ。

お前が、奴隷市場の取引に間に合わないが無茶なことを言って、無理に船を出させたんだろ!!」

頭の禿げた小太りの豪華な着物を着た商人と、浅黒い肌の船長が、大声で互いに怒鳴り散らしている。

なんだ、奴隷市場の取引？

竜胆は仲間の怪我の手当をしている船員に、二人は何の話をしているのか尋ねると、船員は口ごもりながらも返事をした。

「俺たちの船は、風華十七群島で採れる珍しい貝やサンゴ、香辛料や綿の物資のほかに、猫人族の奴隷娘も運んでいるんです。

あの商人は、猫人族の島人にタダで餌を与える代わりに、娘を奴隷として安く仕入れて、船底の牢に猫人族の奴隷娘を閉じこめていたんですよ」

「なんだと、それじゃ、まだ船の中に猫人族の奴隷が閉じこめられているのか!!」

早く助け出さないと船は完全に沈んで、娘たちは溺死してしまうぞ」

船員の詳しい説明を聞くと、まだ水に浸かっている船の浮いている部分に奴隷の籠牢があり、今なら生きて助け出せるかもしれない。

竜胆は、チツと舌打ちをすると、他の者を治癒しているティダに振り返る。

エルフの聴覚は、周囲の会話をすべて拾い聞き取ることができ、竜胆と船員の会話も離れた場所からすべて聞いていた。

「竜胆、奴隷を籠牢から一人ひとり助け出すより、牢に入れたままドラゴンで舟外に引き上げたほうがいい」

「まてティダ、船底の牢をどうやって舟上に運び出すんだ？」

「船長も商人も見ての通り、ろくでもない連中だ。こんな船、壊すぐらい造作もない。

さあ竜胆、早く船に潜って、美しい奴隷娘たちを救いに行きなさい」

い
」

テイダは妖艶な笑みを浮かべ、銀色の細い鎖をアイテムバッグから取り出すと竜胆に手渡した。

その言葉の意味を解した竜胆は、片目でウインクを返すと、鎖を身体に巻き付けて、ドラゴンに跨り難破船の上まで飛んでゆく。

大波に煽られ、いつ沈んでもおかしくない船の甲板に飛び移ると、竜胆は船中に潜り込んでいった。

「あんたら、奴隷を船の中から助け出してくれるんだってなあ。

アノ薄汚い連中でも、ワシにとっては大切な商品だ。

生きて助けてくれれば、奴隷一人分金貨2枚出してやるよ」

頭のはげ上がった商人風の男は、頬を赤らめながら、美しいエルフの麗人を舐めまわすように見て話しかける。

テイダは、相手を凍った視線で一瞥すると完全に無視をした。

船から戻ってきたドラゴンを呼び寄せ、大人しく控えていた萌黄と一緒に騎乗すると、島を離れ、沈みかけた船の上まで飛ばす。

「萌黄ちゃん、舟の上の甲板にある鎖をドラゴンの足に巻きつけて頂だい。そしてすぐ戻ってきてね」

身軽な少女は、ドラゴンの上から細いロープを伝って甲板に降り、竜胆の身体にまかれていた鎖の端を拾いドラゴンの足に括りつけると、再びロープを登って戻ってくる。

ドラゴンの足に括られた鎖がピンと張るのを見ると、テイダは優しく魔獣の首を撫でながら、命令を出す。

「煉獄の炎の魔獣、ファイヤードラゴンよ。

コノ壊れかけたみすばらしい船を 消し炭に変えろ ファイヤー

「……」

ゴオオオオー！　ゴオオ

巨人王　近衛師団に属する　火力攻撃に特化された騎乗用ファイヤードラゴン。

その口から炎の塊が吐きだされ、火焰放射攻撃が難破船を襲い、船体を焼き払う。

「うわああー俺の船がああー！！！」

「うわああーワシの積み荷がああー金ずるがあー！！！」

赤い炎は、強い風に煽られ煌々と燃え上がり、船が火の吞まれ海へ崩れ落ちてゆく。

ドラゴンは足に絡んだ鎖を引き上げる。

その先には猫人族の奴隷娘たちが押し込められた小さな籠牢と、氷結界を張り炎から籠牢を守る竜胆。

「うひゃひゃひゃつ、あの奴隷娘さえいれば、いくらでも商売はやり直せる。」

おーい、金貨をくれてやるぞ。早く奴隷たちをこっちに連れてこい」

禿げ頭の商人は小躍りして、大声を張り上げ、ドラゴンを呼び寄せようと手を振る。

籠牢を吊り下げたドラゴンは、焼け落ちる船を離れ島の上空を旋回する。

ティダは懐から金貨を取り出し、空から商人に向けて力いっぱい投げつける。

「猫人族一人金貨2枚で買ってあげる。」

お姉さまたちは忙しいから、救助は自分で呼んでね」

そういうと、島に商人と船乗りたちを置き去りにして、竜胆は手綱を操り、ドラゴンを港町へ引き返させる。

宙吊りの籠牢には、若く美しい猫人族の娘が7人、2メートル四方の檻に押し込まれていた。やせ細って疲労しているが、怪我をした様子はない。

「どうせ家に帰したところで、また貧しさから売りに出される。娘たちは、鳳凰小都の「完熟遊誘館」かんじゅくゆうゆうに引き取らせよう」

「2日も台風で閉じこめられ、やっとハルちゃんを助けに行けるかと思ったら港町に逆戻り。お姉さまの魔力も、蘇生魔法乱発で燃料切れよ」

台風の去った港町の空に、突然、奴隷娘の入った籠牢を吊り下げて戻ってきたドラゴンが現れ、ひと騒ぎ起こる。

船が遭難して助けを求める救命ボートを見つけ、島に乗組員を避難させた。と、竜胆が役人に報告してる時、ティダのパーティチャットウィンドウに、ハルからのメッセージが表示された。

しかし、その内容は……

四方海に囲まれた岩山の島の頂上まで登り、パーティチャットの通話可能状態を確認したハルは、期待を込めてティダにメッセージを送信した。

「t j k k j つ j b で c 4」

(あれ？なんで意味のない音に変換されてるの？)

ハルの言葉は正確に表示されない。

「ハルちゃん、お姉さまたちも島の近くまで来ているんだけど、今、難破船の救助してるの。もう少し、助けに行くのに時間が掛かるけど、持ちこたえられる？」

「: f g g h v じゅ m ん h g れ x d」

「ええっ、ちょっとハルちゃん、どうしたの！？
チャット
念話が文字化けしているよ」

それは、ハルにかけられた沈黙の呪いの影響で、発する言葉が全て化けして、意味の通じない言葉に変換されていた。

これではせっかく繋がったチャット念話も一方通行、どうすればいい。
チャット
ふと思いつき、ハルは念話を文字チャットに切り替え、返事を返す。

「(T T)」

「ああ、絵文字なら意味は伝わるね。

ちゃんとハルちゃんの居場所は判るから、もう少し頑張って」

「(> <) b」

「ハルちゃん、お願いだから、お姉さまたちが助けにくるまで、むやみに動き回らない、危険な事はしないでね！！約束だよ」

そこで、ティダとの念話は途切れる。
チャット

やっと仲間との連絡だけは取れた。

だが、こちらの複雑な状況を、絵文字だけで伝えることはできない。

ティダたちの助けが来るまで、自力で生き延びるならならぬ。

そのためにはサバイバルのための食料の確保が必須だ。アイテムバッグの中には一週間分の水があり、食料はおにぎりの実が一週間分保存されていた。

はつきりいって自分よりも、怪我をしたユニコーンと情緒不安定な彼女が心配だ。

ユニコーンは水だけでも生きてゆけそうだが、彼女は、あの後、木の実を調理できずに生で食べ続けた。どうもサバイバルの経験が乏しい。

ハルは、ゆつくりと岩山を下りながら、食べられそうな草を採取する。

岩山には、食料になりそうな植物は生えていない。

だが、美しい海の中は海産物の宝庫なのだ。ワニに襲われなければ『魚を捕ったどー』で生きてゆけるかもしれない。

ハルは岩山を下り、そろそろ洞窟に戻る獣道に出そうだと歩調を速めたところで、下の砂浜から子供の悲鳴が聞こえた。

自分たちの他に、この島に人間が居るのか！！

ハルは岩の陰に隠れ、声のした方を見ると、十歳ぐらいの同じ背格好の二人の子供が、ワニの群に追われ必死に逃げている。

その姿は人間ではない、頭に黒い猫耳が生え、四つん這いで長いしっぽを立てて獣のように走る猫人族の子供だ。

俊足を生かして、ワニの群から逃げきるかと思っただが、嵐の後に障害物の多い砂浜が災いし、小柄で足の速いワニが一匹、子供に追いついてくる。

後ろを走っていた子供のしっぽに、ワニが噛みつくのが見えた。

ハルは岩影から飛び出し、いつの間握った女神の弓に矢をつがえ、狙いを定め、子供の頭をかみ砕こうとするワニに向かって矢を放つ。

女神の矢は、ハル以外の者では片手で持てないほど重みがあり、破壊力は抜群だ。

猫人族の子供の頭をかすめ、赤い矢はワニの口の中に飛び込むと、柔らかな内蔵を破壊して、背中から血しぶきを上げながら突き抜けていった。

蒼牙ワニは、子供の上に覆い被さるようにして倒れ絶命した。

一瞬の出来事で、子供たちは何が起こったのか理解できず、助かった子供も、重いワニの下敷きになって動けない。

そこへ、仲間を追ってきた巨大なボスワニ、三メートル越えのブクブクに太った蒼牙ワニが、威嚇声をあげ激しく身体を揺らしながら、地響きを立てて迫ってきた。

ハルは、自分の居る安全な岩山に逃げると子供たちに知らせたいが、舌が動かさず声がでない。

ハルは岩山を転げ落ちるように、加速を付けて砂浜まで一気に駆け降りると、巨大ワニに睨まれ恐怖で身動きのとれない子供たちの側まで走る。

(ヒイイー、今まで、鳥や兎やせいぜいゴブリン程度しか戦ったことないのに。

いきなり巨大ワニとクロコダイルハンターですか!!!)

しかも、すでに女神の矢を一度使い、ハルの残り生命力は絶賛激減中だ。

手元にある武器は、SENから貰った『良く切れる包丁』しかない。

迷う暇はない。巨大ワニと子供たちの間に割り込むと、クリスタルシールドを子供の盾にして、右手に包丁を強く握りしめる。

野生の凶悪な巨大ボスワニ、その迫力に負けてはダメだ、気持ちを奮い立たせる。

コクウ港町エリアは、遭難者救助の警備艇と、漁船が出発の準備で慌ただしい。

重い籠牢を港町まで運んできたドラゴンは、再び休ませなくてはならない状態だ。

竜胆は遭難者の避難場所を案内するため、役人たちと船に乗り込もうとしたところで、ふと足を止める。

「テイダ、ちゃんとハルに、大人しく救助を待つように伝えたか？」

「それはもちろん、お姉さま達が助けにくるまで、むやみに動き回らない。」

危険な事はしないと約束させたわ」

「今、半身の契約者、ハルが巨大ワニと格闘している場面が見えたんだが……」

「な、なんですとー！！！」

約束してから1時間も経ってないのに、ハルちゃん何してんの」

クエスト50 クロコダイルハンター

オレ達の家は、10歳の双子のオレたちと、下に3人のチビどもがいて、親代わりの兄にいが漁をして生計を立てている。

あの日、いつものように、兄にいが漁に出た後、島を大きな嵐が襲った。

バケツをひっくり返したような雨と暴風が三日間続く。

嵐が去った後、家の中にオレ達は食べるモノが無くなった。

兄にいは食料を持って、いや、生きてオレたちの家に帰ってくる？

オレと弟は、嵐で浜辺に何か打ち上げられてないか、探しに出かけた。

そしたら、いつもは深い海の底にある貝が大量に転がっている。

オレと弟はそれを夢中で拾いまくった。

ふと気が付くと、兄にいに決して近づくなと注意させていた、蒼牙ワニの縄張りまで入ってたんだ。

青い鱗をキラキラ光らせた十匹以上のワニの群れに囲まれてた。

そして、今まで見たこともない大きなボスワニと目が合った!!

オレも弟も、悲鳴を上げて、拾った貝を放り出して全力で逃る。

いつもなら、ワニなんか簡単に逃げきれなのに、砂浜もモノが散らばって走りにくい。

気が付くと、足の速い小さなワニが、弟のすぐ後ろまで迫っていた。

ギャアッ

弟がワニに尻尾を噛まれた!!

転んだ弟の背中に、ワニが乗り上げる。
ワニの鋭く蒼い牙が、弟の頭を噛み砕く……

兄助^にけて！！神さま神さま、弟を助けて！！

赤い光が、弟を噛み殺そうとするワニの口に飛び込んで、次の瞬間、ワニが血を吐きながら倒れた。

えっ、何が起こったの？

だけど、すぐ後から、ドスドスと地響きを立てて、目を血走らせ怒り狂ったボスワニが迫ってくる。

ワニの姿を見ると、怖い怖い、足が震えて動けない、今度こそダメだと思った。

その時、青い髪の間人が、岩山から駆け下りてくる。

色が白くて女みたいな顔をした、とても弱そうな人間。

人間は、オレの前に透明なガラスの盾を置くと、ボスワニの前に立ちはだかった。

「今、半身の契約者、ハルが巨大ワニと格闘している場面が見えたんだが……」

竜胆がそう告げると、ティダは顔面蒼白になり声を上げる。

「な、なんですとー！！！」

約束してから1時間も経ってないのに、ハルちゃん何してんの。り、竜胆、何とかしろ。ハルちゃんの魂を乗っ取って、お前がワニと戦え」

普段の冷静なテイダとは思えない、酷く取り乱した様子に、竜胆は呆れたように声を荒げ言い返した。

「前から思っていたんだが、SENもアンタも、ハルを過保護に守り過ぎだ。

事故とはいえ、俺様と契約したからには、これからビシバシ書いて強くするぞ。

たかが巨大ワニぐらい、視線で射殺す気合が必要なんだよ!!」

竜胆は、意識を高めながら目を閉じると、半身の契約者、ハルの様子を伺う。

同じ神科学種の血が、赤い右目のシンクロ率を上昇させた。

巨大ボスワニは暴風を砂の中で耐えて、空腹で酷く飢えている。目の前に飛び込んだ餌が、一匹増えたことに喜んだ。

追いかけていた二匹の猫人族の子供より大きい、肉も付いて白くて柔らかく、とても旨そうだ。

ターゲットを大きい白い餌に変え、喰いつこうとしたところで、身構えた。

白い餌の、赤い右目が異様な光を放つ。それは、圧倒的な恐怖を呼び起こす強者の視線、巨大ワニは視線に射すくめられ動けなくなる。

ハルは巨大ワニと相対し、腰が引けながらも、背後の子供たちを守るうと懸命に足を踏みしめる。

なんだ？ワニが脅えたように後ずさり、今にも背を向けて逃げ出しそうだ。何に脅えているのか分からないが、これは万に一つのチャンス。

アイテムバッグの中から、首を落とした死黒鳥を取り出すと、巨大ワニの目の前に投げた。雑食悪食で腐った獲物も平気で食らう蒼牙ワニは、珍しい獲物の匂いに飛びつく。

さらに死黒鳥を数匹取り出すと、ワニに向けて投げつけた。

ソレは、ワニの気を外らすための時間稼ぎのように見えたが、ハルは逃げようとせず、巨大ワニのわずか側面に回り込む。

手にした武器は、刃渡り二十五センチの『良く切れる包丁』。ハルは、SENからそれを貰った時、一言こつ告げられた。

「これは『良く切れる包丁』で【妖刀 チヤタンナキリ】呼ばれ、普通の武器とは扱いが異なる。

むたみやたらと振り回し敵を傷つけるモノではない。

ハルなら、包丁の扱い方を良く知っているだろ」

そつだ、これほどの切れ味の刃物は、力任せに切りつける必要ない。

正しい包丁の使い方は、軽く添えて、引けばいい。

ハルは、死黒鳥を食らう巨大ワニの首に、そっと包丁の刃先を向ける。

V o o ヴ ヴ オ ヴ オ V o o オ ー

ハルの細い躰は、衝撃で反り返り弾き飛ばされ、後のクリスタルの盾にぶつかる。

次の瞬間、右手に握られた【妖刀 首切り チャタンナキリ】の刃先から、禍々しい波動が膨れ上がり、力の奔流が鋭利な黒い牙となって放たれ、空間を切り裂く。

巨大ワニの首をいとも簡単に絶ち落とす、更にその先の一直線上に居た、他のワニの首も次々刎ねた。

首と胴体の分かれたワニの死骸が、一線上に四体転がり、白い砂浜は大量の鮮血で赤く染まった。

(ギ、ギヤアアー!!!)

なに、この大量殺戮兵器。良く切れるって、切れすぎだし!!!

SENさん説明不足だよ。こんな包丁、僕以外使いこなせないよ)

コレを、あの病んだ聖騎士の彼女が持って振るっただとしたら、どんな惨事が起こっただろう。

決して、戦いに使用してはいけない、呪われた妖刀。

戦いと無縁な厨房で、食材を捌くのに使用されるのが一番だ。

しばらく、その場で尻もちをついたまま呆けていたハルは、立ち上がると、恐る恐る倒した巨大ワニに近づいた。

頭と胴体に、綺麗に二つに分かれた巨大蒼牙ワニ。蒼く鋭い牙を剥き出しにしたまま、砂の上に転がる頭部を眺めて、ハルはふと気が付く。

（あれ、ワニの歯って”蒼珠”と同じ、透き通った綺麗な蒼い色をしている。

これは、もしかしてもしかして！？）

アイテムバッグから、蒼珠を一かけら取り出し、ワニの歯と並べて比較してみると全く同じ色をしていた。

ハルは腕組みをして、しばらく考え込んだ後、ワニの胴体部分の確認をする。

綺麗にスパンと断られた胴体の切り口、クンクンと匂いを嗅いだり、指でプニョプニョ押して肉質を確認する。

（ワニは動きが鈍いから、肉の色は白っぽいね、白身の魚より鶏肉の方が近い感触だ。

そういえばワニ肉って美味しかったよね）

実は、貧乏学生ハルのアルバイト先の肉屋は、何故か普通の肉以外にも、馬ヤギやダチョウ等、珍しい肉を扱っていた。もちろんワニ肉も含まれている。

砂浜に、頭と胴の二等分にされ、倒れている数体の蒼牙ワニ。
ハルは屈んでアイテムバッグの口を開き、バッグの中に押し込むイメージで触れると、中へと転送された。

【蒼牙ワニ頭×4 蒼牙ワニ胴×4】

（やったね！！これだけの量の食材（注 蒼牙ワニ）があれば、当分飢える心配はないよ。それに一度、本マグロとか、大物を一人で解体してみたかったんだよね！！

『良く切れる包丁』を使えば、楽々解体できそうだ。ちょっと種類は違うけどね）

すっかり料理オタクモードに入ったハルは、今、自分の置かれている状況も忘れ去り、ルンルン気分でワニを回収している。

助けられた猫人族の双子の兄弟は、青い髪の人間を不思議そうに見つめていた。

あの巨大ワニを、触れずに真つ二つにして、手品みたいに消した。この人は誰、いつも兄にいがお祈りしている、ミゾノゾミの神様？

「ハルの奴、SENから貰った武器で、巨大ワニを倒しちまったぞ」
目を開けた竜胆は、ティダに実況生中継で戦闘の様子を報告した。

「ソレは良かった。早くハルちゃんに、その場から離れるように伝

えなくては」

「うっくん、どうやらハルは、ワニを食べる気満々なんだが」

「ま、またゲテモノ料理を始める気なの。

むやみに動き回らない、危険な事はしない、って約束したのに」

隣でガツクリと肩を落とすティダを、竜胆は同情の眼差しで見つめた。

倒した蒼牙ワニを片づけて、ハルは猫人族の双子の兄弟に近づく。ワニに尻尾を噛まれた子供は、足を痛めて歩けないみたいだ。さて、僕は声が出ないから、どうやってコミュニケーションを取ろう。

近づくハルに、猫人族の子供が駆けよると、両手を胸の前で合わせて、何やら拝むポーズをする。

「神さま神さま、オレたちを助けてくれてありがとう!!」

兄も弟も、ずっとミゾノゾミの神様が現れるのを待っていたんだ。オレは、あまり信じていなかったけど、今日からは神さまを信じるよ。

ねえ、早くオレたちの家に来てよ!!」

子供は、黒い猫耳と尻尾に紫の猫目、茶色に黄色のメッシュの入った髪の毛の三毛猫風猫人族だ。僕の腕を無理やり引っ張って、連れてゆこうとするけど、怪我をした兄弟はどうするの？

結局ハルは、猫人族の子供の勢いに押され、怪我をした弟を背負って、彼らの家まで行くことになった。

ハルたちのいる洞窟から島の反対側、切り立った崖のわずかな平地に、岩をくり貫いて作られた彼らの家があった。

子供をおぶったまま家の中に入ると、ガラクタがそこらかしこに転がり、薄暗く汚れた室内の中央に、猫人族用にアレンジされたミゾノゾミ女神の像がある。

（ああ、ここも小さいけれど、ちゃんとした聖堂なんだ。）

突然現れたハルの姿を興味津々で見つめる小さな猫人族は全員男の子で、異なる毛並みの彼らは、他人同士の孤児なのだと判る。

一番小さな子が、ハルを家に連れてきた猫人族の少年に「お腹が空いた」といって泣いている。

「ありがとう神さま。ねえ、どうしてお話してくれないの」

背中から降ろした、大人しそうな猫人族の少年が聞いてくるので、ハルは口を開いて舌を見せた。

紫に変色した舌に、奇妙な印が刻まれている。

ソレを見て怖がるかと思ったら、皆興味深そうに寄ってきて「痛い」とか「痒いの」とか聞いてくる。

こんな貧しい暮らしなのに、彼らの保護者は、とても大切に世話

をしているんだ。

さて、僕は、ここで出来る事をしようか。

夕刻、岩を割り貫いた小さな船着き場に、ぼろぼろになった一人乗りカヌーが横付けされた。

船から降りた青年は、よく日に焼けた浅黒い肌に短く刈り込んだ黒髪、そして右目を黒い眼帯で覆っている。

三日間、嵐をやり過ごし、必死で島に戻ってきたが、弟たちは無事だろうか？

漁の獲物は無し、家の食料も尽きて、腹を空かせているだろう。とにかく今は休みたい、青年は力無く切り立った崖を登り、家が見えると奇妙な事に気が付く。

なんだ、家の方から、旨そうな料理の匂いがする。それに、油が切れてランプが使えない家に、外に漏れ出るほど煌々と明かりがついているぞ？

青年は驚いて家に飛び込むと、しばらく使われていなかった暖炉に大鍋が置かれ、中に白身の魚の様なスープが作られていた。

部屋の中を、鳥の形をした紙細工がふわふわ浮いて、暖かな七色の光を放っている。

弟たちは自分の帰りを喜んで、「兄トク、本当に神さまが来たよ。スープを作ってくれたよ」と、興奮して大騒ぎしている。

一体、何が起こったんだ？

聖騎士の彼女は、隣の島まで足を延ばし、洞窟に帰ってきた時には月が昇り切っていた。何一つ食糧を見つけきれず、落胆して帰ってくると、洞窟の中は美味しそうな匂いが充満している。

金色の兜の中に、美味しそうな魚の切り身と、野菜を混ぜ込んだ団子の浮いたスープが入っていた。

この料理はどこから持ってきたの？

洞窟の奥の寝床で、神科学種の少年は、ユニコーンのたて髪を編んで遊んでいる。

「アナタ外に出たのね。この食べ物は何ですか？」

「島の裏側に、猫人族の男の子ばかりの小さな聖堂があって、そこから料理を分けてもらいました。中身は、ヨモギ入りの団子に、白身のお肉のスープですよ」

その話には彼女は少し顔をしかめ、そして辛そうな表情でポツリと呟いた。

「猫人族は、女の子は高く売れるけど、男の子は売り物にならないから、無人島に捨てられるの。きつと、どこかのモノ好きが、子供を哀れに思って世話をしてるのね。」

そんな事したって、貧しい猫人族は同じ事を繰り返すだけなのに」

ユニコーンにもたれ目を閉じた少年が、眠そうな声で尋ねる。

「それでも、子供たちは、神さまを信じていましたよ」

「神なんていないわ。私はそんなモノ信じない」

その言葉に返事なく、少年の小さな寝息だけが聞こえた。

クエスト51 蒼牙ワニを捌こう(前書き)

アクセスが、びっくり。

はじめましての方、楽しんで読んでください。

クエスト51 蒼牙ワニを捌こう

「ちっ！！遭難者を救助に来ただけなのに。」

なんで今度は巨大鮫と戦わなくちゃならないんだ」

「これだけ色々な生物がいるというコトは、それだけ豊かな海なんでしょうね。」

ただ、縄張り争い、生存競争は厳しそうだけど」

島に避難させた遭難者を救助に向かった警備艇は、その海域を縄張りしている、10メートル台の巨大サメ 紅鬼鮫に、敵と認識され襲撃を受けていた。

巨大サメは、左の船腹に強く何度も体当たりして、警備艇が大きく傾く。

激しい揺れと衝撃に、甲板から海に投げ出されそうになる船員を、竜胆は巨体で3人まとめて受け止める。

ティダが舳先に立ち、船を攻撃している巨大サメをおびき寄せるために、雷魔法を帯びた呪杖を掲げる。

「雷火の鞭となり、彼の者を縛める 電紫剛鞭」

ティダの握る呪杖から放たれた雷の鞭が、巨大鮫を幾重にも縛め電気ショックを与え、僅かな時間気を失なわせて動きを止めた。

「竜胆！！このデカブツを始末しろ」

ティダの合図で、半巨人の王子は半月刀を両手に握ると、警備艇甲板から海へと跳躍し、雷鞭で縛められた巨大鮫に飛び移る。

その脳天に、渾身の力を籠めて半月刀を突き立てた。

サメも悲鳴を上げるのか、海のモンスターは身をのけぞらせ、深く水の中に潜ろうとするが、舳先に立つティダの呪杖に繋がった魔力の雷鞭は、獲物を縛め逃さない。

海の上で、まるでロデオのように上下左右に暴れる巨大サメに跨り、竜胆は振り落とされないように、更に力を込めて、サメの頭部に刀を深く押し込み格闘する。

巨大サメの動きが鈍くなってくると、竜胆を援護しようと警備艇から数本の銃が撃ち込まれ……

最後、竜胆の振るう巨人用大剣で、巨大サメ 紅鬼鮫にトドメが刺された。

竜胆とティダの活躍で、警備艇にはほとんど被害が無く、遭難者を島に迎えに行くことが出来る。

警備艇船員、その戦いを離れた場所で見守っていた漁船も、驚きと歓喜の声を上げた。

戦いを終え船に上がってきた竜胆を、ティダは出迎えて声を掛ける。

「さすが、巨人族の大型モンスター戦は、迫力があって思わず見惚れるほどの強さね。」

あれ、酷く顔色が悪いけど、どうしたの？」

「うぐっ、やば、鮫に揺さぶられて、酔った。」

み、港に帰 h y m n h g f ぶ ゲロ ゲロゲロ……!!」

竜胆は、先程の勇ましい姿が嘘のように、顔面蒼白でヨタヨタと船の縁にしがみつくと、激しく嘔吐している。

「り、竜胆、まだ船は片道の半分しか進んでない。悪いけどしばらく我慢して。

「っつか、島間は船でしか移動できないのに、そんな簡単に船酔いしたら、ハルちゃんを探し回れないじゃない」

突然の予想外の展開に、ティダは思わず天を仰ぎ溜息をついた。
「なんだか不可侵の力が働いて、自分たちがハルを探し出す妨害を
してる気がする。」

みなさん、おはようございます。

朝起きたら、スープの入ったお鍋（兜）が空で、猫人族の彼女もちゃんと食事をとったようです。ふふっ、白身がワニ肉だと気付いてません。聞かれないから教えないよ。

ハルが島の中を勝手に動きまわっても、彼女は閉ざされた島だから逃げ出せない、咎めることは無い。

「というか、自分はどんなに探し回っても食糧を探し出せず、ハルが色々と食料を調達しなければ、飢えてしまうのだ。」

「ほら、たまり水の中に小魚が居ました。」

衣に海草を混ぜて唐揚げにしたら、磯の香りが香ばしくて美味しいですよ」

彼女がたまり水を覗くと、魚は姿を隠し、ハルが覗くと、魚はワラワラと姿を現す。

ナニこれ、自分是要領悪いとか、少年の運がいいとか、そんな単純なモノではない。

以前、白藍さまが笑いながら「どんなに貧しくても、いつも食べ物に恵まれる人がいる」と、言ったことを思い出した。

どうして、世界は不公平だ、私だけ、私だけ、こんなに苦しいのだろう。

朝食は、貝の皿に盛られた、小魚と海草のかき揚げと白身の肉の天ぷら丼。

天ぷら丼の中央には、プリプリの黄色いウニをたっぷり盛り付けてみる。

わかめ風お吸い物に、爽やかな香りのハーブティ。

ハルは、自分の分だけ食事を盛り付けると、さっさと洞窟の外に出て、快晴の大海原を眺めながら天ぷら丼を食べる。

着のみのまま離島でサバイバルして、洞窟で寝起きしているのに、なんとという贅沢な食生活。

「うーん、おにぎりの実が少なくなってきたから、何か代わりになるものを探さなくちゃ。毎日魚ばかりじゃ飽きそうだし。あつ、魚じゃない。爬虫類だ」

ハルの洩らした最後の小さな呟きは、もちろん彼女には聞こえない

かった。

風香十七群島の中でも、一番小さな黒い岩山の島には、川がない。飲み水は、聖堂の中に深く掘られた井戸からくみ上げる。

聖堂へ、水を貰いに来たハルを待っていたのは、猫人族の子供たちと、昨日漁から帰ってきた保護者の青年だった。

短く刈り上げた黒髪に浅黒い肌、右目に眼帯をした、二十歳前の人間の青年。

顔立ちはハンサムの部類だが、なぜか殆ど特徴が無い。

しかし表情は豊かで、人好きのする大らかな笑顔で、子供たちの相手をしていた。

（何だろう、この人、不思議な感じがする？

どこかで見た様な、でも思い出せない）

「兄に下に、この人が神様だよ。オレたちをワニから助けしてくれたんだ」

「ああ、昨日からずっとその話を聞かされているよ。

その赤い右目、君は神科学種みたいだね。弟を助けてくれてありがとう」

おや、僻地の孤島に住んでいるにしては、青年の態度は堂々として、仕草も洗練されていた。

終焉世界の人々は神科学種だと知ると、驚くか感激して拜むか、委縮して怯えた態度になるのに、この青年の態度は全く変化が無い。

ハルは挨拶代わりにコクコクと頷いて、話が出来ないとゼスチャ
ーで知らせると、青年は石板を手渡した。

「俺の名前はクジラという、子供たちは兄と呼んでくれる。」

実は、2年前に遭難して、この島に流されて来たんだ。

人間の俺が、猫人族の子供たちの保護者なので変だと思っている
だろう。

俺は、聖堂の神官爺さんに助けられたんだ。

その爺さんが去年死んでしまって、それからは俺が後を継いで、
子供の世話をしてる」

さて、どうしよう。

ティダには何度も、大人しく助けが来るまで待てと、念を押され
てる。

僕が誘拐されて島に来たことを知らせると、彼らを巻き込んでし
まう危険がある。

相手は手負いの獣状態の彼女だ。

子供たちと保護者の青年は、彼女に接触させないほうが良い。

ある程度考えをまとめると、ハルは石板に文字を書いて青年に見
せた。

「君の名前はハルというんだね。猫人族の女戦士の従者、食事係。

おや、変だな。下級種族の猫人族が、女神の使徒である神科学種
を、従者として連れているなんて。

それに、ハルの舌の『沈黙の印』は、極悪罪人行使される呪だ
よ」

(やばい、この人は頭が切れる。余計に彼女と会わせたらダメだ)

青年の瞳はハルをしっかりと見据え、考えを読み取られてしまいそうだ。

ハルは石板をポイツと放り出し、会話を続ける意思が無い事を示すと、慌てて子供たちの方へ行つた。

暖炉の上の大鍋いっぱいにつつたスープは、一晩でキレイに食べつくされ空っぽになっていた。

うん、いいねえ、この食べっぷり。料理人として大満足だ。

おにぎりの実は、細かく砕いて乾燥させると、小麦粉に似た使い方が出来る。柔らかい海草と卵を混ぜて、ワニ肉の衣にしてフリッターを揚げることにしよう。

島には、巨大化したオリーブに似た実が生えていて、その油で揚げ物が出る。

ただ、肝心の穀物や果物の木は根付かず、他の島から手に入れなくてはいけない。青年クジラが、漁で釣り上げた魚と食料を、他の島で物々交換してくるのだ。

ハルは、昨日手に入れた食材(蒼牙ワニ)を、クリスタルシールドのまな板に乗せ『良く切れる包丁』で手早くさばく。固い鱗の下に包丁を差し込んで、皮を剥がしていると、青年が驚いた様に近づ

いてきた。

「な、なんだそりゃ!!!」

硬くて分厚い、蒼牙ワニの皮を簡単に剥がせるなんて、とんでもない切れ味だ」

さっきまで冷静で落ち着いた青年が、ハルのワニ捌きを、食い入る様に見つめる。

何をそんなに驚いているのだろう、確かによく切れる包丁だけど、そんなに騒ぐこと？

不思議そうに小首をかしげるハルに、青年は、自分の手首にサポーターのように巻きつけた『蒼牙ワニ皮』を見せた。

「この蒼牙ワニの皮は、軽くて収縮性があって、鋼の刃先でも傷つけない最高級防具が作れるんだ。

けれど、蒼牙ワニ皮は硬すぎて簡単に剥がすことができない。皮剥ぎには、王都の高級防具屋でも一週間も掛かるほど、とんでもない労力が必要なはずだ。

実際、俺も手首のサポーター分のワニ皮を剥がすのに、三日かかった。

それがこんな簡単に、ワニ皮剥ぎが出来るなんて信じられない!!!」

青年の話の聞きながらも、ハルは作業する手を止めず、ペラリと一枚に剥がれたワニ皮を青年に手渡した。

うおおお!!!

青年は、野太い歓喜の声を上げ、マントのようにワニ皮を背中に回して、興奮して部屋の中を走り回る。その後ろを子供たちが面白

がって付いて走り、聖堂の中はうるさいほど賑やかになる。

「アハハツ、フウツ、す、凄いつ。」

この最強のワニ皮で防具を作れば、どんなモンスターに襲われても平気だぞ」

頬を赤らめ、興奮冷めやらぬ状態の青年を、ハルは手招きして、ワニの身の方を示す。

「えっ、なに、ワニの腹の部分は柔らかくなっている。

ああ、この部分が心臓で、前足の内側から中心に向けて突けば、蒼牙ワニは一発で仕留められる？」

嬉しそうに、コクコクと頷くハルを見て、青年は冷や汗を流す。

「ま、待ってくれ。固いワニの鱗を貫くには、それなりに丈夫な銛が必要だ。

俺の持っている銛じゃ、固い鱗に弾かれ、すぐ折れて使い物にならない」

続いてハルは、アイテムバッグから蒼牙ワニの頭部を出し、ドンと床に置いた。

今にも噛みきそうな形相のワニ生首、その口をこじ開けると、鋭く太く大きな牙を指差す。

銛の先に、鱗以上の強度を誇る蒼い牙を仕込めば、どんな獲物も貫けるだろう。

恐ろしい事に、大人しげな愛らしい顔立ちの神科学種の少年は、自分に「蒼牙ワニを狩れ」と命じているのだ。

ハルは、再び石板を持ち出して、青年に書いて見せた。

【蒼牙ワニの牙が欲しい。

蒼牙ワニ50匹と『良く切れる包丁』を交換する】

クエスト52 奴隷商人と交渉しよう

見事なほど『良く切れる包丁』は、蒼牙ワニの硬い皮を簡単に剥ぎ、内臓を取り除き、骨と肉を綺麗に取り分ける。

ふむう、ここでワニの頭部を解体するには、グロすぎて、子供の前では行えないね。

えっ、お前はワニの頭、平気なのか？それは食材ですし、感謝して頂きますよ。

ワニの頭部は、解体するより、兜焼きにしたほうがいいかな？鰓の部分に脂が乗ってるかも、ミソあるといいな、目玉の後ろのゼラチン質は美味ですよ。

料理オタクのハルは、今、脳内美味しんぼ状態だ。

「なんで、そんなにワニの牙なんか欲しがるんだ？

仕留めたワニ4匹分の牙で充分じゃないか」

猫人族の子供たちの保護者、黒髪の青年 クジラ兄（ト）が不思議そうに訊ねてくる。

蒼牙ワニは、その名の通り”蒼珠”の牙を持つ珍しいワニだ。

そして、脚を怪我したユニコーンを癒すには”蒼珠”を与えなくてはならない。

ユニコーンの主である彼女は、ワニの牙に気付かず、他所から”蒼珠”を調達することもできないだろう。

ハルは、この島に留まるにしろ、逃げ出すにしろ、すっかり情が移ってしまったユニコーンの怪我を放置することは出来ない。

ただ、ユニコーンに、どれだけの量の”蒼珠”を与えればいいのかも判らなかつた。

(蒼珠は、オアシスでも使うし、巨人王も買い取ってくれるし、いくらあっても困らないはずだ。それに、この島のワニ、ちょっと増えすぎだし)

閉ざされた島の生活、外の情報が乏しい彼らに、ハルは、砂漠で水を得るためにオアシス女神聖堂が”蒼珠”を必要としている事を筆談で伝える。

日々慎ましく、自然と向き合い女神を信仰する彼らには、その話
は感じ入るものが有ったのだらう。

青年は、子供達を相手にした穏やかなまなざしから、海の男の勇
猛な目つきに変わる。

「あの狂暴なワニが人の役に立つのなら、いくらでも狩って牙を手
に入れてやろう。

仲間の漁師、数人で力を合わせれば、蒼牙ワニを狩るのも難しく
ないさ」

青年との交渉で、ハルはワニの牙50個、それ以外はワニ皮も肉
も、すべて彼らが貰ってよいと話を付ける。

「ワニの骨も、固くて丈夫で、色々と漁の仕掛けに使えるんだ。

蒼牙ワニ皮と肉は、腐敗を防ぐため、塩付けにして保存しよう」

それから、青年と猫人族子供達も総出でワニの塩付け作業の手伝
い。

ハルは白身肉料理を作る。

賑やかで忙しく、いつの間に猫人族の子供が一人増えている事に
気付かなかった。

「ハルのやつ、猫人族の子供と……ウブツ 仲良くワニ料理作つ…
…ゲブツ」

島の遭難者を救出して、港へ戻る警備艇の甲板で、船酔いで起き上がれなくなつた竜胆は、吐き気を堪えながら状況を伝える。

竜胆の、この様子では、港に戻っても使い物にならないな。

ティダは溜息をつきながら、赤い右目に浮かび上がる仮想モニタ―で、現在位置の確認をする。

遙か上空から眺める風香十七群島は、蒼い大海原にポツンと置かれた、砂の浅瀬のリングのようだ。

リアルでは、この地域に群島は存在しない。

空から見た島の色は、赤から赤紫、紫から蒼、青緑から緑へと、意図してグラデーションに造られて、まるで一七個の宝石が、砂のリングの上に規則的に並べられたように見える。

何かの目的を持って造られた人工の島々。しかもこの配置と形、海域丸ごと魔法陣として展開している。

海の彼方を物憂げに眺める、美しいエルフの麗人に声をかけたのは、ターバンの隙間から茶色の猫耳を出した、幼い猫人族の見習い船員。

頬を赤らめ緊張した面持ちで、ティダに飲み物を差し入れる。

多少船酔いが楽になる飲み物らしく、竜胆はヨタヨタと体を起こし飲んでいく。

そういえば、港町の中や漁船の船員に、よく猫人族の子供を見かける。

鳳凰小都には猫人族の娼婦が大勢いたが、猫人族の子供はいない。獣の血が混じる猫人族は、同族で、しかも決まった場所では子供は生まれない。

それは鳳凰小都の花街のような所で、人間や巨人相手の娼婦として働かせるには都合の良かった。猫人族の女と種族が違えば、いくら交わっても孕む心配は無いからだ。

甲板の後方では、島から救助された遭難者が一カ所に並んで、健康状態と身元確認を行っていた。

その列から外れ、ぶくぶく太った男が体を揺らしながら、手下数人を連れてティダ達に近づいてくる。

「貴様らあ、俺の大切な商売道具、猫人族の奴隷娘を掠め取りやがって!!」

おい、こいつらは奴隷誘拐の盗人だ、みんな早くひっ捕らえろ」

島から助け出された奴隷商人は、船酔いで甲板に伸びた竜胆の姿をみて、猫人族の奴隷娘を取り返すチャンスだと思った。

相手は、所詮行きずりの冒険者。

皆は、この町で商売をしている、私の言葉を信用するはずだ。

奴隷娘を取り返したら、半巨人の男は知り合いの兵士に頼んで牢にぶち込み、美しいエルフは私専属の性奴隷にしてやるか。

しかし、奴隷商人が金を握らせた警備艇の船員、誰一人動こうとしない。

船員は、港町の役人から事前に竜胆とティダの身分を知らされ、粗相が無いようにと命じられていたのだ。

一瞬のうちに警備艇の甲板は静まりかえり、奴隷商人は、周りから怒りに似た視線に晒される。

状況にいち早く気付いたティダは、純白の総レールのシヨールを体に巻き付け、優美な微笑みを浮かべながら、奴隷商人の前に歩み出る。

「あら、盗人呼ばわりとは心外ですわ。

商人様には、奴隷娘の代金、一人金貨2枚を渡したではありませんか」

「私を馬鹿にするなよ。

たったあれっぽちの金貨で、猫人族の奴隷娘が買えるわけないだろ！！」

ティダが穏やかな丁寧語で話しかけると、奴隷商人は相手を恫喝する声色で怒鳴り返す。

「おお、怖い。私は商人さまとの話し合いに応じない訳ではありませんせん。

ただ、命懸で助けた猫人族が、金貨2枚じゃ安すぎると言っているのですよ」

「へへっ、なんだそういう事か。それなら、奴隷娘一人金貨8枚でどうぞだ。

7人まとめりゃ金貨56枚。かなりの儲けになるだろ」

「宜しいですわ、猫人族娘の命の価値は金貨8枚ね。
ところで、商人さまの命の価値は金貨何枚ですか？」

これで、奴隷娘を取り返す交渉は成立した。

そう気を良くした奴隷商人は、ティダの口車に乗り気軽に答えてしまう。

「フハハ、この奴隷商人の私の価値か。そうだなあ、商売の知識と才能、それに人脈と交渉術を鑑みても、金貨500枚を下らん」

女神の御使いといわれる神科学種が、奴隷商人と奴隷の売買の話をしている姿に、船員も救助された遭難者も、ひどく落胆して様子をうかがっていた。

しかしティダの一言で、会話が奇妙に、奴隷商人が言いくるめられる事態になった。

「では『奴隷商人の救助代金』は、金貨500ですね。

猫人族の娘7人と足すと、合計 金貨556枚払って下さい」

突然、自分自身の救助代金まで請求され、頭に血の上った欲深い奴隷商人は、ティダの示した条件を受け入れても自分の損にはならない。という事に気が付かなかった。

その金額で娘たちを買い戻し奴隷市場に出せば、娘一人金貨100枚以上、七人なら金貨700枚の値が付くのだから。

「ふざけんな！！貴様とは、もう何も話す必要はない。

おい、この盗人エルフを捕まえて痛めつける。

奴隷商人を舐めたらどんな目に遭うか、体に教えてやれ！！
ああ、顔は傷つけるなよ。ヒヒツ、後で楽しめなくなるからな」

奴隷商人の後ろに控えていた、見るからに凶悪顔をした三人の男が、一斉にティダに襲いかかる。

ティダは、一番手前の男をひらりと交わすと、男の長めの髪を鷲掴み、まるで子供がおもちゃの人形の髪をつかんで振り回すように襲いかかる敵を叩きつける。

貴婦人のような風貌のエルフが、筋骨隆々な男を片手で持ち上げて振り下ろし、バンバンと甲板に叩きつける。

「こんな化け物、手加減なんてしてられっか！！逝ねやあ」

腕にいくつもの刀傷のある瘦男が、双剣を手にティダに切りかかってくる。

仲間を振り回す細い腕を狙い剣を振り下ろし、瘦男は手ごたえ有りとはくそ笑むが、ティダは一瞬で体を入れ替えて、振り回していた男を剣の盾にした。

剣は仲間の男の足に突き刺さり、悲鳴が聞こえ、次の瞬間、瘦男の剣を持つ両手が折られ、短い髪を鷲掴みにされる。

ふわり バン バン バン バン

自分の体が高く舞い上がるのを感じ、そして急降下、鉄床の甲板へ、全身の骨が砕けるような衝撃を受け、悲鳴も上げられない。

瘦男の身体は、ハンマーのように、何度も何度も固い床に叩きつけられる。

我が目を疑うような壮絶な折檻シーンに、敵も味方も凍り付いてしまった。

ほんの数分で奴隷商人の手下を倒したティダは、慈悲深い天女のような柔らかな笑みを浮かべながら、腰を抜かし動けない奴隷商人の襟首をつまみ上げる。

「この海域は、腹を空かした紅鬼鮫の狩場だ。

肥えた豚のようなお前達は、鮫にはさぞかし旨そうに見えるでしょうね」

その言葉通り、奴隷商人は勢いよく海へと投げ捨てる。

悲鳴を上げ、溺れかかりながらも何とかして船に戻ろうとする奴隷商人の上に、ティダは匂いの濃い酒を振りかける。

「ひいつ、貴様あ、な、なにをしているのだ」

「えっ、鮫が早く気がつくように、撒き餌をしているのよ。

ココに旨そうな人間が泳いでますってね」

すっかりドモード全開のティダは、ケラケラ笑いながら、船にあがるうと手をかける奴隷商人を蹴り飛ばし、再び海に投げ入れ、船員の食事用の『血の滴る』肉切れもいっしょに、大量に海に投げた。

「ひっひいっ、血の匂いを嗅ぎつければ、鮫は、うわあぁー

分かったっ、奴隷娘はおまえ達にくれてやる。だから助けてくれ

ー」

常日頃、奴隷商人を快く思わなかった者も多い。

テイダのドS調教は、警備艇船員や遭難者の口を通して、港町中に瞬く間に広がる。

そして、終焉世界に新たな女神神話が生まれた。

ミゾノゾミ女神が嵐の海に降臨して、難破船の乗組員を助け出し、そこで、女神に無礼な行いをした奴隷商人は、生きたまま紅鬼鮫に腸を喰われる天罰を受けた。

その後、奴隷商人は事あるごとに「鮫に喰われた腹を見せろ」と因縁を付けられる。

夕焼け空を眺めながら、ハルは洞窟の前で火の番をしている。

大きく焚かれた薪に、バーベキューのようにクリスタルシールドを置いて、その上に兜焼きが乗り、辺りは、ジューシーな肉の焼ける香ばしい匂いが漂う。

昼間食材探しに出かけたハルは、島に自生するサボテンを見つけ、それを摩り下ると大根おろしになった。

（ホクホクに焼けた白身の肉の上に、大根おろしモドキをたっぷり乗せてますよ。

聖堂から分けてもらった、醤油風調味料を垂らして、いただきます。

おおっ、ゼラチン質がほのかに甘くて、焦げの苦みがアクセントになって美味しいっ）

一人で兜焼き料理の宴を楽しみ、満腹になったハルは、ふと思いで出してユニコーンに、蒼いワニの牙を与えてみた。

ユニコーンは、コリコリと音を立てて、”蒼珠”をキャンディを噛み砕くように、美味しそうに食べる。

瞬く間に、蒼珠の魔力マナの力で、ユニコーンの全身から淡い光が発せられ四肢は癒えてゆく。

折れた骨は完全にくつつき、全身の腫れも目立たなくなり、毛並に艶が出てきた。

まだ走ることは出来ないが、洞窟の入り口まで自分の足で歩いてきた。ユニコーンは、ハルの隣に座り込むと機嫌良く甘えて、ハルの頭をガブガブ甘噛みする。

日が完全に沈む。

夜は闇夜ではない。月が明るければ、夜でも薄い影が見えるほどだ。

（北斗七星、その先の北極星、カシオペア、プロセウス、オリオン座はすぐ判るね。

世界は変わっても、空は全然変わらない）

火の傍で、ユニコーンの腹を背もたれに眠ってしまうハルは、夜

遅く戻ってきた猫人族の彼女の悲鳴で目を覚ました。

焚き木の上で焼かれた物体を見て、彼女は自分が食べた白身肉の正体を知った。

クエスト53 子猫と遊ぼう

ああ、懐かしい。

神の燐火と呼ばれる、温かな七色の光あふれ、祝福の満る法王の間。

金色の衣を着た、綺麗な若草色の髪の小柄な少年が、私の横で穏やかに笑う。

「ねえ瑠璃、あまり僕を子供扱いしないでくれよ。これでも君より年上なんだから。」

十三歳で法王の神託を受けてから、エルフ族の秘術による肉体錬金で、躰は時を刻むことを止め、人として生を放棄したんだ。

ミゾノゾミ女神降臨を迎える準備を整え、終焉世界を豊穡に導く聖人を探す事こそが、僕の務めなのだから」

前法王からの負の遺産、苛烈を極める巨人族 暴力王との争いを停戦に導き、終焉世界の半分の支配権を譲り渡す代わりに、人々に心の平安をもたらした少年法王。

「広い支配地に金銀財宝、居のままに従う下僕を持って、征服欲、虚栄心、名誉欲は満たされるだろう。」

「だけど、ソレは本当に征服したことになると思う？」

「恭しく叩頭する相手の心の中は、罵りの言葉が渦巻いているのに」

栄華を極める巨人族 暴力王に富を奪われ、民衆の心が離れつつある霊峰女神神殿。

説教で飯は食えるか。と人目もはばからず、堂々と言い出す神官も現れてきた。

それを、少年法王はいつも涼しい顔で聞き流す。

「もうすぐ、この終焉世界に、ミヅノゾミ女神が降臨すると僕は信じている。」

その時まで、各地の聖堂を訪ね歩く祝福巡行を続けるだけさ」

少年法王は、僅かな従者を連れ、僅かな荷物で、終焉世界の聖堂を巡る。

私は常に隣に控え、猫人族の私をココまで引き上げて下さった少年法王の為に、命を懸けて守る。

白藍様がここまで信じて祈ることで、この笑顔を見ることが出来る幸せを、私も女神に感謝していた。

2年前ノ、アノ日マデハ。

久しぶりに、白藍^{しろあいらい}様の夢を見た。

洞窟の中、サラサラとした手触りで弾力のある苔の床に横になり、眠っていた彼女は、自分の頬が濡れている事に気が付いた。

夢を見て涙を流すなんて、何て無様なの。

彼女はゆっくりと起き上がり、洞窟の外に出る。既に日は登り、傷のほとんど癒えたユニコーンが気持ちよさそうに日向ぼっこしていた。

今はまだ立つだけで精一杯のユニコーンは、切り立った岩場を降りることは出来ないのだ。

まさか、攫ってきた弱々しい神科学種の少年に、私もユニコーンも怪我を癒され、食事の面倒まで見させて、ひたすら施しを受けている。

以前の私は、聖騎士という施しを与える立場だったのに、実は、一人では何もできない無力な存在。

洞窟の中に少年の姿は無く、すでに出かけた後だった。

昨夜までそこにあった、丸焼きにされた蒼牙ワニの頭部は片づけられ、代わりに金色の兜が置かれている。

白身のワニ肉だったら絶対食べない、と思いながら中身を覗くと、白く太い麺に大根の様な野菜さぼてんとヨモギ、エビがいつしょに煮込まれていた。

白い具と麺に、エビの赤い色が映え、ヨモギの緑と香りが食欲をそそる、鍋焼きうどん風煮物。

ココに置かれているってことは、食べてもいいのよね。

そう、力を付けて、他の島へ偵察に出かけなくてはならないのだから。

(彼女、鍋焼きうどん食べたかな?)

うどんはコシが出てツルツル食べやすく、味は薄味にしてるから食が進むんだよね。

ふふっ、実は麺に植物油をたっぷり練りこんで、完食すると1500キロカロリーです。

これを1日2食3000キロカロリー食べ続ければ、半月で確実に3キロは太るから、はっはっは、ミスリル鎧が入らなくなるよっ)

「ハル神さま、なにニヤニヤ笑っているの?」

ハルが、姑息な仕返しを思い出し、頬を緩めているのを子供達は見逃さない。

猫人族の双子の男の子、三果^{みか}が元気な兄 穏やかな弟は四果^{しか}とい

う。
今日は、ハルの居る洞穴と似た場所が岩の島にはいくつもあって、そこを双子に案内してもらっていた。

もしもの時、密かに隠れる場所が必要だしね。

「ねえねえハル神さま、全然声が出ないと不便だろ。

俺達、貝殻で笛を作ったんだ。

ハル神さまが俺達を呼ぶ時、この笛を吹いてくれれば、何処にいても来るよ」

そういつて、白い渦巻き状の貝笛の首飾りをハルに渡した。

子供たちは笛を吹いてみるとせがみ、ハルが息を吹き込むと、BUUUU とホラ貝のような音が出る。

おや、コレはおもしろい。さらに強めに吹くと PUPPU と間抜けな音がした。

「ハル神さま、俺たち猫人族は耳が良いから、小さく笛を吹いても聞こえるよ」

「そうそう、凄くうるさかったよ」

「耳がキーンとしてるう」

「きゃははっ、おならみたいな音」

「アタシも、その笛吹いてみたい」

えっと……増えている？

双子に案内された島の頂上に近い洞穴の中、ハルの目の前には、黒い猫耳と尻尾に紫の猫目、茶色に黄色のメッシュの入った髪の毛、三毛猫風猫人族の子どもが二人と四人。

こーういのは、瓜二つじゃなくて、瓜六つというのかな？

ただ、男の子は破れたシャツにズボン姿だが、洞窟の中で待っていた4人の女の子は、色鮮やかなワンピースを重ね着して愛らしく着飾っている。

「僕らは六つ子で、妹たちは隣の深緑島に住んでいるんだけど、ハル神さまのご飯がおいしって話をしたら付いて来たんだよ」

「ハル神さま、耳の先が少し尖っているのが、一番目に生まれた一果^{つか}。髪が長いのが二番目の二果^{ふたか}、それから……」

次々に兄弟を紹介されたけど、同じ顔をした愛らしい子猫がじゃれ合っている姿は、か、かわいいっ！！

隣の島には猫人族の大きな集落があり、女の子たちは、その集落で暮らしているらしい。

海岸は蒼牙ワニがウロウロしているのに、子猫達はどっやって島に渡ってきたんだろう？ 何とかゼスチャーで、ハルはその疑問を伝えると、子供たちは嬉しそうに手を引いて、洞窟の奥へと繋がる細い横道へ案内する。

夜目が利く猫人族とちがって、ハルは薄暗い洞窟の天井や壁にポコポコ頭をぶつけながら進むと、出口付近は、天井からのれんのよ

うにツタが垂れ下がって、その先から光が漏れている。

背を屈めて、狭い洞窟の道を進んだハルは、やっと出口についたかと背を伸ばし周囲を眺め、その場で硬直した。

(うわわわっ、なにこの、断崖絶壁、バ、バンジージャンプ台!!)

出口と思った先に地面はなかった。

バンジージャンプの飛び込み台のように岩が外へ突出し、下は波が渦巻く海で、隣の島まで鉛筆のような柱状の岩が数十本、海から伸びている。

子猫達は、楽しそうにはしゃぎながら、岩から生えるツタを腰に巻いてハルに手渡した。

ま、まさか、これは本当に、向こうの島までバンジーですか!!

拒否してプルプル頭を振るハルを、子猫達は違う意味に受けとったのか、ハルの腰にギッチリとツタを巻き付けると、体にしがみつき、勢いをつけて外へと飛び出す。

(うきゃああっー!!やめてええ)

重力のまま、海に向かってバンジー状態のハルの体が、腰に括られたツタが伸びきってピンと張ると、今度は上へと反動で引き揚げたれ、数回上下に揺さぶられた後、振り子のように前後へ激しく揺れる。

(ひいいいつ、何のドッキリ、罰ゲーム!!!!!!)

半分意識を失いかけているハルに、一緒に飛んだ三果が声をかける。

「ハル神さま、ほら、向かいの岩から伸びたツタを掴んで、離さないでね」

崖上からのバンジーで振り子状態から、躰を伸ばし空中でさらに跳躍して、子猫たちは隣の岩のツタに掴まると飛び移る。これを繰り返して、島の間を渡ってきたのだ。

しかしハルには、そんなターザンのような芸当ができるはずなく、揺れが収まるのを待って、ツタをよじ登って元の飛び込み台に戻る。

突然の命がけアトラクション、茫然自失状態のハルの隣で、面白かったと騒ぐ子猫達。

下級種族と言われている彼らだが、その獣に近い運動神経は、俊敏さを誇るエルフ族と張り合いそうだ。

ハルは、腰に巻き付けられたツタを解こうとして、細く強い張りのある手触りが気になった。

ツタがどこから伸びているのかをたどると、洞窟の途中に、天井が抜けそこから枝葉を伸ばした巨木が生えている

下半分が洞窟の中にあるので、厳しい風雨にも耐えて、この岩山の島でもで育つことができたのだらう。木の枝に触れると、木肌は滑らかでよくしなる。

この木なら、自分が使い慣れているアノ武器を作れそうだ。

2年前

神科学種の男が現れたという情報を聞きつけ、少年法王はコクウ港町エリアに向かう。

ミゾノゾミ女神降臨を信じ、数年も厳しい巡行を続けてきた少年法王は、女神の使徒である神科学種出現の話に、ついに自分の願いが神に通じたと喜んだ。

面談を希望した神科学種は、半島の先端にある物見やぐらの上で待っているといい、言われるがまま、少年法王はその場所を訪ねる。肩にかかる黒髪に赤い右目、整ってはいるが、まったく特徴の無い顔立ちの男。

そこには、見たことのない奇妙な魔法陣が敷かれ、畏が少年法王を絡め取った。

聖騎士の彼女は異変に気付き、畏を解除して黒髪の神科学種に切りかかる。

異様な赤い光を放つ右目を狙いレイピアで突くと、手ごたえがあり、男は物見やぐらの上から真つ逆さまに海へと落ちた。

畏により意識を失った少年法王は、二日間眠り続け、目を覚ました。

しかしそれは彼女の知る少年法王白藍ではなく、最凶な魔力を持つ別人。

少年法王 白藍しろあいの器は、神科学種アマザキゲームプレイヤーに擦り変わっていた。

少年法王の器に宿ったアマザキは、巨人族に付いた神科学種 王の影 Y U Y U を凌ぐ氷属性壊滅魔法を行使し、奪われた地を取り返す。

最初、女神神殿の人々は、法王が女神から新たな奇蹟の力を授かったと喜ぶが、アマザキの狂気は、聖堂や神官、そして信者にも向かう。

倫理観を持たない偽法王アマザキの、飽くなき富と力への欲望は、霊峰女神神殿を変質させる。

終焉世界は、緩やかな坂を転がり落ちるように、破滅に向かい始めた。

「キヒヒツ、YAつと裏切り者を見ツケタツ。まあ、猫人族が逃ゲラレル場所と言ったら、同族ノイル風香十七群島しかないからNA」

霊峰女神神殿の最奥、部屋の壁面を埋め尽くす百余りの水晶玉は、終焉世界のすべての場所を映し出す。その中の水晶玉一つに、白く輝く鎧を身にまとった猫人族の女の姿が居た。

ほんの数日前まで、彼の隣に控えていた側近の聖騎士。

そして、ここ数か月、オアシス女神降臨の情報を、彼の耳に届く前に握り潰していた裏切り者。

「この二年、随分と可愛ガツテヤツタのに、恩を仇で返SUとはトンデモナイ罰当たりだ。コウナツタラ、猫人族HA連帯責任として償ってモラオウかあ」

アマザキは、隣に控える聖騎士に、宙から取り出し乱暴に書きなぐった書面を渡す。

受け取った聖騎士は、姿勢を正すと、背後に控える神殿付神官へ聞こえるように読み上げる。

「一月後、霊峰女神神殿にて、ミゾノゾミ女神を異界より呼び寄せる最高位秘術を執り行う。その儀式の生贄に、猫人族の乙女1000人を、神へと、捧げ、る。

まさか法王様、本気ですか……」

「キヒヒツ、ナンダア100匹じゃ足りナイかあ。なら50匹追加するか。

風香十七群島を拠点とS Uる、奴隷海賊の首領、第十一位魔王子に伝える。

普段ノ倍の値D E、猫人族の娘を買い取ってY Aると」

クエスト54 違法BOTキャラ

コクウ港町エリア、中央広場の全域転送魔法陣前に、猫人族の娘が七人並んでいた。

どの娘も緊張で強ばった表情をしているが、それは劣悪な籠牢から出されれば自由に動き回れるようになった安堵と、これからの生活の不安と未知への期待である。

猫人族の娘達は、スリムでしなやかな体格に、小さめの顔にぱっちりとしたネコ目がミステリアスで愛らしい。頭の上のぴよこんと乗った猫耳がピクピク動き、細い尻尾は真つすぐピンと立っている。娘全員、かなり高レベルの美少女を揃えていた。

奴隷商人から救い出した彼女たちは、鳳凰小都のYUYUの元へ保護される事となった。

「奴隷商人からお前たちを買った金額は、金貨2枚。

これを働いて返してくれば、その後は自由の身にしてやる。

鳳凰小都なら、食堂の配膳の仕事でも一月で返せる金額だ。

ああ、これからは恩義を感じて、俺達の力になってくれるとありがたい」

奴隷商人に売られ、一生涯、日の当たらぬ虐げられた生活を覚悟していた猫人族の娘達は、竜胆の言葉に歓声を上げる。

口々に感謝の言葉を告げる娘達に、礼はいらない。と笑いながら何気にポテイタッチする竜胆。

さすがだな、女が勝手に寄ってくると豪語するだけある、これで何人かの娘は落とせただろう。半巨人の王子と娘たちの様子を眺めるティダは、口元に苦笑いを浮かべる。

竜胆の性格、気さくで明るく情に厚い、勇猛果敢、我儉な面もあ

るが考え方は真つ当だ、そして不思議なカリスマ性を持っている。オアシスでも鳳凰小都でも、女神降臨と聖人出現に竜胆が関わっている事は、人々の噂で世間に知れ渡っている。

これは、末席の王子が、次期巨人王候補に躍り出る事もありそう
だ。

ただし、竜胆が潰されずに王座まで上り詰めるには、それを支える参謀が必要。……先走り過ぎる、コノことを考えるのは、今はまだ時期尚早だ。

約束の時間になり、鳳凰小都からの王の影の使者が現れる全域転送魔法陣の上に、見知った黒袴姿の青年が現れた。

「このオタク武士、帰れっ！！」ガコオオオツ

SENが転送ゲートから姿を現したとたん、もはやティダの条件反射と化した、右足の飛び蹴りがSENの顔面に決まる。

こいつは、YUYUに送信した愛らしい猫人族の娘達の姿を見て、画伯の子守という役目を放り出し、駆けつけたんだろっ。

「い、いきなり何すんだ、ティダー！？

しかも狂戦士モードで蹴りやがったなっ」

「なんで、お前がココに来るんだ。YUYUには、娘達に不安感の与えない常識人を超越せと言ったはずだ。変態紳士は帰れ」

「それがなあ、状況が変わったんだ。

猫人族の娘達を守る、腕っ節のある護衛を付けなくちゃならな

「なくなった」

テイダの渾身の蹴りにも、頬を軽く撫でるだけで回復したSENは、真剣な顔でそう告げた。

「霊峰女神神殿の、アマザキのバカが、猫人族の娘狩りを命じた。ヤツは、オアシスの女神降臨と鳳凰小都の聖人出現は、俺達の仕組んだ事だと思い込んでいる。」

終焉世界に降臨したミゾノゾミ女神、人々の間に俄かに盛り上がる女神信仰に冷や水を浴びせるため、そして逃げた猫人族の聖騎士への当て付けに、猫人族の生娘150人を生贄にして、自分の意のままになる偽女神を造り出すつもりだ」

驚いたテイダは、竜胆と顔を見合わせる。

猫人族の娘達が、奴隷商人に捕らわれ酷い扱いを受けていた事を知っている。

それが、150人もの猫人族の娘が捕らわれ、あれ以上の最悪な扱いを受け生贄にされるのだ。

「巨人王派の、黒鷲が取り仕切る蒼珠女神聖堂は、猫人族の娘の味方だ。」

「となると、一番危険な場所は……」

3人は押し黙り、人と猫人族が平和に暮らす、コクウ港町を見渡した。

奴隷商人から救い出した娘達は、何も知らず楽しそうにおしゃべりをしている。

彼女たちの住んでいた風香十七群島、猫人族の娘を狩るために、欲に駆られた獣が、どれだけ押し寄せてくるだろう。

そして最も危険が迫っているのは、偽法王 アマザキの怒りを一身に買う聖騎士の娘と、捕らわれたハルではないか。

「これは、王の影からの伝言だ。

只今より、コクウ港町エリア、全域転送魔法陣の出入り者の身元確認強化。

そしてコノ地の支配者である、巨人族 第十二位王子 紺の青磁せいじに協力を仰いでくれ」

そう告げると、SENは迎えに来た猫人族の娘達の方へ、歩んでいった。

ティダは天を仰ぎ、溜息をつく、隣に立つ竜胆に向き直る。

「この調子で、いつまで経っても厄介ごとは増えて、ハルちゃんを探しに行けない。

ハルちゃんの居場所を突き止められるのは、王族の契約者のお前だけだ。

この方法だけは避けたかったが……

偽法王の悪事を止めるためにも、真のミゾノゾミ女神が誰であるか、終焉世界に知らしめる必要がある」

ハルの化けたミゾノゾミ女神は、人目に曝した後、巨人王の後宮でほとぼりが冷めるまで隠していればいいか。結局、王の影 YU YUのシナリオに近い展開になりそうだ。

「竜胆、ハルちゃんを救い出したら、速攻、巨人族 乱暴王の住まうハク口王都へ連れて行ってくれ。

目の前で争いが起こり、例えば猫人族の娘が捕らわれ鬻られようが、決してかまうな。

ハルは、終焉世界に降臨した、ミゾノゾミ女神の憑代だ。

豊穣の使徒を失えば、破滅の使徒 アマザキの凶気に引きずられ世界は滅するだろう」

それは、表情を消した、優麗な美貌を誇るエルフからの予言。

口調は、普段のワザと作った女言葉ではなく、ティダ自身が語る言葉だった。

巨大な終焉世界の運命の流れの中に、末席の王子である自分が組み込まれようとしている。ソレは、面白そうだ。コイツらと一緒に居たら退屈しない。

「では、俺様は先に島に渡って、ハルを探し救い出してやろう」

半刻して、竜胆と萌黄が騎乗したドラゴンは、港町を後に風香十七群島目指して飛んでゆく。それを見送る二人の神科学種は、複雑な心境だった。

「竜胆に、俺たちはハルちゃんを過保護すぎる。と言われた」

「そうか？俺たち以上に、この終焉世界自体が、ハルに過保護すぎると思うな。」

絶海の孤島でサバイバルしてるのに、ハルは、毎日旨そうな食事を作って、聖獣を枕にして寝てるぞ。

島の住人は、それまで飢餓と背中合わせの生活を送っていたのに、ハルが現れた途端、食生活が改善されているんだ」

竜胆は、ハルをさっさと連れ帰ることが出来るだろうか？
ティダは、何か嫌な予感に襲われる。

ハルがまた余計に手を出して、奇跡という名のトンデモない事を
しでかしそうだ。

千切れ雲が浮かぶエメラルドグリーンの空と海、大きな波が打つ
寄せる白い砂浜。

おだやかな景色と裏腹に、その白い砂浜には2メートル越えの巨
大ワニがウジャウジャひしめいている。

その中から抜け出し、群れをはぐれた一匹の蒼牙ワニは、砂浜を
のんびり歩いていた間抜けな黒髪の人間に気がついた。

背後からゆっくりと近づくと、巨大ワニに、獲物は気が付かない。
餌を、頭から一飲みに襲い掛かろうと跳躍した途端……

「チャンスは一度、今だ、縄を引け！！」

黒髪の青年の掛け声に、砂の上に隠されていた罟の網を、岩陰に
潜んでいた五人の猫人族の青年が、左右から一斉に引く。

蒼牙ワニは見事罟にはまり、まるでハンモックに絡まったように
宙に吊り下げられ、表と裏が逆になってジタバタ暴れている。

「上手くいったぞ、クジラ兄、頼むっ！！」

縄に絡まり激しく暴れる蒼牙ワニを逃さないように、5人の若い
漁師は必死に縄を掴んで離さない。

一瞬ワニの動きが止まり、白い腹が見えた。

「うおおおおおー！！！」

ワニを誘き出す囮役だった青年は、右目の眼帯を剥ぎ取り、両目で獲物の弱点を見極めると、両手で銚を振り上げ力いっぱい突く。

銚の先端には、蒼牙ワニの牙が仕込まれていて、硬い鱗を突き破り、内蔵の奥深く、ワニの心臓まで一突きにする。

固すぎる鱗に突き刺した銚は、喰いこんで引き抜くことが出来ない。

しかし、銚の柄を伝い音を立てて噴き出す鮮血から、この怪物に致命傷を与えたことがわかる。

2本目の銚が投げて寄りこされ、ソレを受け取ると、すかさず同じ場所へ、渾身の力を込めて銚を突き刺す。

今度はさらに奥まで銚が喰いこんだ。青年は力を振り絞り、汗で滑る銚の柄を手放さないように、更に捻りあげる。

蒼牙ワニはガクガクと全身を震わせて痙攣仕出し、青年の力を込めた銚の柄が、中央からポキンと折れた。

「おい、仕留めたか？すげえっ、やったなあ」

「バカ、まだ油断するな、うわっ、罨が切れる！！！」

その瞬間、男5人がかりで釣り上げていた罨が、暴れる蒼牙ワニの鋭い鱗に縄が擦れて、音を立てて切れた。

罨から逃れ、砂の上に落ちた蒼牙ワニは、瀕死の状態から信じられないほどの跳躍で、自分に銚を突き立てた黒髪の男の腹に噛みつく。

だが、男の腸を引きちぎることは出来なかった。

切り裂かれた薄いシャツの下から、蒼牙ワニの鱗皮で作ったベストが鋭い牙を防ぐ。

ワニの嚙圧で、骨の軋む音がする。

青年は、モンスターの巨体に押倒されながらも、手にした白く細いナイフをワニの目に突き立てる。

もう一度、激しい痙攣を起こし、蒼牙ワニの躰は動かなくなった。

「もう、動かないよなっ、ワニ、生きてないよな。ちゃんと死んでるか？」

「うおおっ、クジラ兄にっー信じられねえ！！本当に蒼牙ワニを倒したぞ」

蒼牙ワニの体の下から、仲間の漁師の手を借りて抜け出した青年は、改めて自分の倒したワニを眺めると深々と頭を下げる。

隣ではしゃいでいた、猫人族の若い漁師も、青年の様子につられて真似た。

少し離れた岩の上から、蒼牙ワニ狩りの様子を見ていた子猫たちが、歓声を上げながら青年に抱きつく。そして子供たちの後ろを、色白で弱そうな人間の少年が、微笑みながら付いてきた。

普段、クジラ兄に以外の人間には、警戒感を示す猫人族の漁師たちも、子猫たちに懐かれ纏わりつかれる少年を不思議そうに眺めるだけだった。

「漁師の兄にたち、この人が僕たちを助けてくれた、ハル神さまだよ。ほら、いつもクジラ兄にがミゾニャン女神のお話で出てくる、赤い右

目の神科学種さま」

あれ、今聞き間違えた？

ミゾニヤンってミゾノゾミ女神の事？なに、萌えるけど。

それより、皆さんの視線が僕に集中していますよ。まあ、見るからに平々凡々の僕を神様だと言われても、信じないよね。

蒼牙ワニを初めて一人で倒し、全身返り血と傷だらけの青年が、笑いながら近寄ってくる。いつもと雰囲気が違うのは、右目の眼帯が取れているからだ。

右目の色は黒い……ではない。

ERROR ERROR ERROR ERROR

ERROR ERROR ERROR ERROR

赤い右目の中に、小さなエラーの文字がびっしりと書き込まれ、瞳の色は黒く見えるのだ。

ハルは、自分の赤い右目を起動させ、目の前の青年のキャラデータを読み込む。

【NO NAME 神科学種（冒険者） 人間 男 レベルERR
OR】

ああ、どつりで彼の姿に見覚えあるはずだ。

ゲームの人間タイプ 無料キャラモデル【女神ノ平民ノ戦士】の中の平民キャラ。

ゲームの中では、初心者エリアの平原を、『違法BOT』の平民キャラが大勢走り回っていた。

青年は、その『違法BOT』のキャラデータを保有していたのだ。

BOTとは、FPSやMMORPGなどで使われるAIプレイヤーのこと。ロボットの略称。

クエスト55 良く切れる包丁を使おう

『End of god science - 神科学の終焉 -』
基本無料プレイのゲームで、人間タイプアバターは三種類用意されていた。

【女神／平民／戦士】
どのキャラクターも整った顔立ちだが、マネキンのように全く個性が無い。

したがって、ゲームに慣れはじめたプレイヤーは、自分の個性を出すため、アバターの容姿や体格を変更する有料アイテムを購入することになる。

また、特殊クエストを受けるために、ゲームマネーが必要な場合もある。

ここで需要があれば供給が生まれ、ゲームマネーはリアルマネートレーディングRMТの業者を介して盛んに取引されるようになる。

ソレを本業にして、ゲーム内ダンジョンに籠り、稼ぎのいいクエストをひたすらこなす廃プレイヤー。

違法なAIプログラムで動く無料キャラクターが、二十四時間オートマでモンスターを倒しコインを集める。

牧場をイメージして作られた広い初心者フィールドを、プレイヤー自身の居ない、同じ姿形をした平民キャラ『違法BOT』が数十体、ひしめいて雑魚モンスターをエンドレスで皆殺しにしている。

その光景を見た無垢な初心者プレイヤーは、初めてゲームの洗礼を浴びるのだった。

今、ハルの目の前にいるのは、『違法BOTデータ』を持つ神科学種だ。

右目の眼帯を直す青年に、ハルは指さして尋ねる。

「ああ、この目変だろ。」

俺の右目は細かい傷が入っていて、両目を使っていると頭が痛くなるんだ。

だから普段は眼帯をして、右目は休めている。

良く利くと言われる目薬を試したり、毎日目を洗ったり色々してるけど、目の傷は全然治らないんだ」

あれ？おかしいなあ。ハルは不思議に思った。

リアルから来たゲームプレイヤー神科学種なら、瞳に書かれた『ERROR』警告文字だと判別できる。

しかしクジラと呼ばれる青年は、それを目の傷だと思いこんでいる。

そして子猫たちを可愛がる様子や蒼牙ワニとの戦闘の様子をみると、この青年は普通の人間で、決して『違法BOT』AIではない。

声の出ないハルは、棒切れを手にすると砂の上に文字を書いた。

(クジラさんは、この島に来る前は、どこに住んでいたの?)

その文字をのぞき込み、青年はため息をついて答える。

「それが、二年前に海で遭難して、ココの聖堂の神官爺さんに助けられる前の記憶が、俺には一切無いんだ」

困ったような笑みを浮かべ答えた青年は、話を続ける。

「爺さんの話によると、俺は白波クジラの背中に乗って、海を漂っているところを見つけたらしい。」

聖獣の白波クジラと一緒にいたから、怪しい者ではないだろうと、記憶の無いまま聖堂の世話になっていた」

「俺もじいちゃんといっしょにクジラ兄にいを見つけたっ。

神様クジラの背中で昼寝していたよ」

「ばーか、兄にいは海で溺れていたのを、クジラ神様に助けられたんだよ」

青年にじゃれつきながら、子猫の兄弟も話に加わってきた。

子猫たちの頭をガシガシと乱暴に撫でながら、笑いかける。

「猫人族は眼がいい。運良くこいつらが俺を見つけてくれたんだ。命の恩人さ」

「それに、クジラ兄にいがこの島に来たから、魚が増えて大漁続きだぜ。兄はクジラの化身じゃねえのか？なあ、みんなそう思うだろ」

背が高く、片耳のちぎれた猫人族の青年漁師がそういうと、周りの仲間たちも口々にしゃべりはじめた。

異邦人で記憶を失い種族の違う神科学種の青年が、猫人族の漁師たちを率いている。竜胆とタイプは異なる、一見、人目を引く要素皆無の平凡青年は、不思議なカリスマ性を持っていた。

それから砂浜では、初めて自分たちの力で倒した、蒼牙ワニの解体シヨウが始まった。

ハルが『良く切れる包丁』を手に、非常に硬い蒼牙ワニの鱗皮を楽々と剥ぎ取っている。

側で見物していた漁師たちは、おおつ、とか、うひゃあ、とか、驚きと感嘆の声を上げる。魚をさばき慣れている漁師から見ても、ハルの手際は良かった。

ワニ皮を捌くのはハルに任せ、誰がソレを貰うか、じゃんけん合戦が始まっていた。

クジラ兄がワニ皮を腹に巻いて、サメの攻撃を防いだ防御力に、他の漁師たちも目を見張り欲しかったのだ。

「クジラ兄はじゃんけん禁止だよ。あんた絶対負けないんだから。ほれ、みんな行くぞ、最初はグー」

大の男達が、子供のように勝った負けたと砂浜を駆け回って、じゃんけんをしている。

また、ワニの肉も大量に取れて全員で分けても五日分はある。オレンジの髪の猫人青年は、奥さんがオメデタだということで、ワニ肉を一番多くもらった。

浜辺でにわかバーベキューが始まり、ハルはクリスタルシールドの上で白身肉を切り分ける。

(そういえば、ワニ内蔵はモツみたいに食べられるかな。

海水で綺麗に洗って焼いたらおいしそうだよね)

さつそくハルは、蒼牙ワニの膨れ上がった大きな胃袋に『良く切れる包丁』を突き刺す。

胃の中に異物があり、食べたエサが出てくるかと恐る恐る取り出すと、中から棒切れと太い筒が出てきた。

ハルの祝福が発動して、レアアイテムが現れたのだ。

一瞬木の枝と見間違えたモノは、黒い漆塗りに赤文字の書かれた弦のない小弓。

そして筒の中には、黒の漆塗りに薄桃色の羽根の弓矢が入っている。

（これは、何かクエストが起こるから、装備して使えと言っているね。

弦が無いけど、バンジージャンプのツタで代用できるかな）

弓に関しては、ハルはゲームスキルより、リアルの弓道部活動経験によるスキルの方が上回っていた。

小弓に弦を張ることもできるし、弓や矢もどきを製作することもできる。

考えごとをしながら、切り分けた肉の側に『良く切れる包丁』を置いたところで、バーベキューから宴会になりアルコールの入った猫人族の漁師の一人が、ハルの隣に来た。

「なあ、俺がここは見ているから、その臭いモノを海で洗ってこいよ。」

肉をコノ包丁で切り分ければいいんだろっ」

漁師の中で一番年長そうな男は、ハルを品定めする馴れ馴れしい口調で声を掛ける。

堅いワニ皮を切り裂け、素早く解体できる包丁の切れ味に興味を示し、手に入れたと思うていた。

素早く掠め取るように手を伸ばし、声のでないハルは、漁師を制止できない。

「見た目、そんな大したことのない包丁だなあ。

どれ、俺が切れ味を、ウワツッ！ぎゃあああー」

普通に肉の側にポンと置かれていた『良く切れる包丁』は、男が柄を握った途端、熱い鉄の棒のように真っ赤に焼け、炎を吹いて燃え上がった。

男は悲鳴を上げて、包丁から手を離し、真っ赤に燃え上がる腕を振り回す。

「ひいつ、熱い熱い熱いつ、なんだあこの火い消えないぞあ」

少し離れたところで、子猫たちに肉を配っていた青年が、驚いて駆けつける。

呆気にとられ、側で立ち尽くすハルの顔を一瞬見ると、腕を振り回し悲鳴を上げる漁師の燃える腕をわし掴む。

「あわてるな、ちゃんと自分の腕を見る！！全然燃えてないぞ。

これは妖刀の見せる幻影だ。好奇心で触れると呪われるぞ」

青年は呪解除の印を結ぶ。男の腕の炎は一瞬で掻き消えた。

それは神科学種の魔法ではない。オアシス聖堂で退紅神官や、鳳凰小都の黒鷲大神官が、祈りの際に行う魔避けの仕草だ。

漁師の男は、恐れおののいた様子でその場を離れると、青年は神

妙な面もちでハルに話しかけてきた。

「神科学種様に、仲間が失礼なことをした。
力の無い邪な感情を持つ者が触れると、妖刀の呪いが発動するの
だろう」

青年は、しつかりと『良く切れる包丁』を掴むと、柄の方をハル
に向けて手渡した。

呪われた妖刀の刃を素手で掴み、平然とした顔をしている。

『祝福Ⅱ幸運度』は非表示ステータスだが、ハルはソレを、光の流
れを感じとるように知る事ができる。

岩山の聖堂に置いた祝福の折紙は、青年がいると倍の明るさで七
色の光を放っていた。

(ふむむ、思った通り、この人は多くの『祝福』を持っている。)

ハルは、青年から『良く切れる包丁』を受け取るとニッコリ笑っ
た。

ファイヤードラゴンに騎乗した竜胆と萌黄は、まだ疲労感の抜け
ない魔獣を休ませながら、1日掛けて風香十七群島エリアに辿り着
いた。

大海原に白い砂浜のリングがポツンと浮かんでいる。

「いち、にい、さん、しい、ごお……。あれ、おかしいよ竜胆様？

風香十七群島なのに、島はひとつ多い。十八あるよ」

ファイヤードラゴンは、全ての島が見渡せる上空から、ゆっくり旋回しながら降下を始める。萌黄の言う様に、海に浮かぶ首飾りの寶石の様な十七の島と、ひとつ歪な形をした島が見えた。

さらに降下を続ける、低い雲の中に隠れながら、歪の形の島に近づく。

「なんだ、あれは？島じゃない、巨大船みたいだな」

それは、浅い砂地に乗り上げた巨大船、しかも一艘ではなく十数艘が互いに繋ぎ合せられている。

さらに異様な光景は、まるで砂糖に蟻が群がるように、大小の船が巨大船の周りに集結していた。

7,80艘、下手したら100艘はあるかもしれない。

すべて、霊峰女神神殿の命を受け「猫人族娘150人狩り」の獲物を求めて来た、奴隷海賊だった。

クエスト56 奴隷海賊船を発見しよう

風香十七群島の十八番目の島。

浅い砂地に乗り上げ、互いに繋ぎ合せられている十数艘の巨大奴隷海賊船は、まるで一つの島の様だ。

そして砂糖に蟻が群がるように、大小の船が巨大船の周りに集結していた。

猫人族の娘という獲物を捕らえに、わずが2日でこれだけの船が、風香十七群島に集まっている。

竜胆は上空のドラゴンの背から、数十艘の船団を眺めながら、鳥肌の立つ思いで、人間の強欲さを見せつけられていた。

海に浮かぶ方の大型船の甲板には、2メートル四方の鉄製の檻がいくつも並んでいる。

偽法王の布命では「ミゾノゾミ女神への祭事に、猫人族娘を150人生贄に捧げる」とされたが、この期に乗じて、猫人族の娘を捕らえて荒稼ぎしようと集まった奴隷海賊、闇商人、裏稼業の傭兵もいる。

このままでは、150人どころかその倍、もしかしたら猫人族の女は、全て狩られるのではないか？

すでに檻が準備されているという事は、捕らえられた獲物がいるのだろう。

「竜胆さま、ハルお兄ちゃんのトコロに早く行くつよ」

自分の懐に抱え込んでいる小さな少女が、焦ったように声をかける。

ああ、そうだった。
俺たちの最優先は、ハルを助け出すことだ。

それでも、眼下の奴隷海賊船の甲板に置かれた、頑丈そうな鉄の檻から目が離せない。

なるほど、ティダに強く念を押しして忠告したのはコレか。

猫人族の男を奴隷にするというものなら弱肉強食の世界、見逃せ
たかもしれない。

だが「猫人族の娘を狩る」というのは、完全に欲に駆られた人間
達の狂気の蛮行だ。

竜胆は迷うことなく決意すると、若い少女に話しかけた。

「なあ萌葱、俺はちよつとあの船に用事ができちまった。

ハルの居る島に着いたら、一人でハルのトコロに行けるか？」

竜胆は海賊船の島からドラゴンを再び上昇させ、砂の浅瀬の、リ
ングのちよつと反対側にある黒い岩の島を目指した。

浜辺で飲み食いして騒いだ後、漁師たちは漁の仕掛けをするため、
再び海へ出かけて行った。

ハルは、島で留守番の六つ子と三人の子猫を連れて、赤い夕焼け
空の中聖堂を目指し歩いていた。

「ハルお兄ちゃん ハルお兄ちゃん」

えっ、遠くから聞き覚えのある声する。

ハルは、聖堂とは正反対の島の山頂へと続く道へと目を向ける。真っ赤な夕焼けを背に、黄金色の長い髪を振り乱して、小柄な人影が急な坂道を下りてくるのが見えた。

「お兄ちゃん、ハルお兄ちゃん、会いたかったよお!!」

身軽な少女は、どんどん加速しながら、急な坂道を駆け下りる。あわてて少女を受け止めようとするハルは、毎度お約束のように胸部に弾丸の様なタツクルを喰らい、後ろに弾き飛ばされる。

(うっ、息が、ゲホゲホっ、は、肺が潰れるかと思った。それにしても、どうして萌黄ちゃんがこんなトコロにいるの?)

仰向けに倒れたハルにしがみ付いて、名前を連呼しながら泣き出す萌黄に、周りにいる子猫たちも驚いている。

「うわあ、人間の子供だ。初めて見みたよ」

「スゴイ、細くてさらさらした金色の髪、色も真っ白」

「小さくて手足も細くて、お人形さんみたいに可愛いわ」

「ねえお人形ちゃん、ハル神さまの上から降りないと、起き上がれないよ」

子猫たちは萌黄を抱き上げて、ハルの上から退かせる。

8歳という年齢より小柄な萌黄は、ピンクのメイド服を着てお人形のように、初めて人間の子供を見た子猫たちは大はしゃぎする。

最初驚いて大人しくしていた萌黄も、しつこく付きまとう子猫たちに癩癩を起こす。

「もう、ちょっと離してっ!!ハルお兄ちゃん、萌黄が助けに来た

よ

大股で自分の所にズンズン歩いてくる少女の姿は涙目で霞み、ハルは思わず感極まって、小さな体を抱きしめた。

（萌黄ちゃん、心配させてゴメンね。誰と一緒にここまで来たの？ああ声が出ない、萌黄ちゃんは余り字が読めないし、どうやって気持ち伝えよう）

ハルは、パクパクと金魚のように口を開け閉めするばかりで、萌黄は不思議そうに眺めるとコクンと頷いた。

「うんハルお兄ちゃん、とても心配したよ。」

あのね、ここまでは竜胆様と一緒にだったの。

海を飛んできたドラゴンとユニコーンは天敵で、ユニコーンの居る島に着陸できなくて萌黄だけ来たの。

竜胆様は、後から迎えに来るから、大人しく待っているって」

（あれ？萌黄ちゃん、僕の言いたいこと判るの）

「うん、ハルお兄ちゃんの声は、ちゃんと萌黄に聞こえるよ」

これは驚いた。ハルの声にならない微かな息遣いから、小さな少女は言葉を読み取る。

天性の戦士としての、様々な才能の片鱗が芽吹いてきているのだ。

（それなら、萌黄ちゃんが僕の通訳をして、皆に言葉を伝えてくれる？）

「萌黄は、ハルお兄ちゃんの助手だもん。お手伝いするよ」

気が付くと既に日は沈みかけ、辺りは夜のとばりが下りてきた。

聖騎士の彼女がいる洞窟に、萌黄ちゃんは連れて行けない。

ハルは少し考え込んだ後、岩場の聖堂に小さな少女を連れてゆく決意をする。

出来るだけ、彼らをコノ件には巻き込みたくなかったが、仕方ない。

あの不思議な青年に、自分の真実を明かさなくてはならない。

小さな聖堂の中庭で、突然現れた金髪の愛らしい少女と対面した青年は驚く。

少女は、堂々とした態度で青年に語りかけた。

「ハルお兄ちゃんは、霊峰女神神殿を脱走した聖騎士の女に誘拐された神科学種さまです。巨人族の王子 竜胆さまと萌黄は、ハルお兄ちゃんを助けに来たの」

静かに話を聞いていた青年は、厳しい顔つきでハルの方を向き直る。

信仰心の強い青年は、女神の使徒である神科学種が、理不尽な扱いを受けている事に怒りを感じているようだ。

「くっ、その聖騎士の女、許せない。

厳しく糾弾したいが、しかし只の漁師である俺には何もできない。貴方様には様々な施しを受けているのに、何もお助けできず、申

し訳ありません」

「もうすぐ味方が助けに来ます。だからそんな、物騒な事言わないで下さい。」

聖堂で萌黄ちゃんを預かってもらえれば、僕はとても助かります。……と、ハルお兄ちゃんは言ってるよ」

深々と頭を下げたまま、顔を上げようとしない青年にハルは慌てる。

信仰心が強すぎるのも怖いな。こういう場合、どうしたらいいのだろう。

「あのさあ、眼帯のお兄ちゃん。聖騎士の女の人はとても強かったよ。」

萌黄の宮廷剣舞技の軽々と片手で跳ねかえして、子供でも容赦しなかった。

もし眼帯のお兄ちゃんが争ったら、ここにいる子猫たちも巻き込まれるよ」

小さな少女はそう告げると、青年の前で両腕に隠し持っていた短刀を取り出し、ひらりとステップを踏む。

洗練された無駄のない動き、華麗に宙を舞い、両手の短剣を閃かせ宮廷剣舞技の天才少女は1分程度の剣舞を披露した。

それは、素人目にも恐ろしいほどの攻撃力を持つ、王族を守護する殺人剣舞だと判る。

しかし、それ以上の實力を持った聖騎士の彼女には勝てない。

青年は気持ちを切り替えたように、普段の人懐こい温かな表情に戻り、ハルと萌黄に微笑みかけた。

その夜は、萌黄は聖堂で過ごすことになり、子猫たちは大喜びで世話をしている。

（じゃあ、僕はユニコーンが心配だから洞窟に帰るね。
そういえば、竜胆さんはいつ迎えに来るの？）

「それがねえ、竜胆様はココに来る前に、海賊船を見つけたんだ。ちよつと偵察してくるって言ってるけど、すぐは迎えに来ないと思う。」

でも大丈夫、王族の契約でね、ドコに居てもハルお兄ちゃんの事は全部見えているみたいだよ」

見えているなら大丈夫、よかった……えっ、全部見えてるって、王族の契約？？

ソレは何。と萌黄に聞いても、幼い少女は上手く説明できない。

（竜胆さんが迎えに来た時に聞けばいいかな。ちよつと嫌な予感があるけど。）

そしてハルは何も知らされないまま、猫人族の危機に巻き込まれることになる。

クエスト56 奴隸海賊船を発見しよう(後書き)

少し短いけど、キリが良かったので投下。
嵐の予感です。

クエスト57 弓矢を作ろう

夜は、突然現れた萌黄（一緒に来た竜胆に、用事が出来たと置いていかれた）を岩場の聖堂に預け、ハルは一人洞窟に戻る。

そして翌朝早く目覚めたハルは、洞窟の中に聖騎士の彼女の気配が無い事に気がついた。どうやら、昨夜はココに戻って来てないようだ。

うっ、何で僕が彼女の心配をしなくちゃいけないんだ。もし彼女がトラブルに巻き込まれれば、ユニコーンが知らせてくれるハズだ。

ハルはぶつぶつと一人ごちながらも、鍋の中のスープを温め直し、ちゃんと茹でたおにぎりの実を置いて、萌葱の居る聖堂へと出かけていった。

また、子猫が増えていた。

小さな聖堂の中に、六つ子に小さな子猫3人、それと萌黄に12歳ぐらいの少女猫が3人。計13名の子猫たちが、お腹を空かせてハルが来るのを待っていた。

そして、さらにハルを驚かせたのが

「お早う、ハルお兄ちゃん。見て見てっ、萌黄もニヤン子になっちゃった」

（萌黄ちゃん、か、可愛すぎる。そのネコ耳とシツポは一体！？）

頭の上にネコ耳カチューシャをしている萌黄は、嬉しそうにハルの前でくるりと一回転する。ピンクのメイド風ワンピースのスカートがふわりと広がり、裾から白いシツポが覗いた。

終焉世界では下級種族と言われている猫人族だが、オアシス育ちで異種族の巨人に仕える萌黄に、差別という概念は無い。

そして、リアルから来たゲイムプレイヤー神科学種にとって、ネコ耳は憧れの存在ですらある。

（開眼！！SENさん、これが”萌え”というもモノなんですな。）

ハルは思わず『ネコ耳萌黄』をスクショ撮影して、SENへ画像を送りつけてしまい、それを見たSENは、中央広場の真ん中で奇声を上げながら「ふしぎなおどり」を踊るといふ黒歴史を作る。

（なんだか、オアシスにいても鳳凰小都にいても、僕の役目って変わらないねえ。）

ボヤきながらも、ハルは手際よく大量の朝食を準備する。クリスタルシールドの下に炎の結晶を数個並べ、簡易ホットプレートにした。

溶いた小麦粉に魚介類を混ぜ、お好み焼きのように平たく焼いたら、目玉焼きを上に乗せる。最後に甘辛いたれをたっぷり塗ると出来上がり。

年上の子たちに焼くのを手伝わせて、20分ほどで朝食ができた。

「ハル神さま、魚パン（海鮮お好み焼き）凄くおいしいよ。」
「わあい、パンがふわふわして柔らかい、こんな美味しいの初めて食べた」

それは、山芋の代わりにサボテンのすりおろしを加えて、小麦粉生地がふんわりと仕上がっているんだね。

キャベツがあれば、本物のお好み焼きが作れると考える料理オタク。

恐ろしい勢いで子猫たちが食事をする様子をノンビリ眺め、気が付くとハルは味見しかしておらず、子猫の騒ぐ声で起こされたクジラ兄（に）の分も残っていない。

料理はすべて、子猫たちが平らげていた。

お好み焼きを食べそびれた二人は、子供たちに食事の後片づけを命じて、小さな聖堂の中庭で、おにぎりの実にハーブティで簡単な朝食を取る。

「それにしても、女の子たちは隣の島に帰さなくてもいいんですか？
……と、ハルお兄ちゃんは言っています」

声の出ないハルの隣には、ねこみ装備の萌黄が付き添って通訳をする。

「ああ、帰さなくていい。

娘たちは、奴隷として売られるのを拒んでココに逃げて来たんだ。

隣の深緑島の村長は、奴隷商人から無料で酒や煙草や貰う代わりに、娘を奴隷として売り払う。

娘を犠牲にして、自分たちは酒や煙草や賭事に明け暮れ、自堕落に生きているんだ」

「えっ、子供の母親は心配しないの？」

……と、ハルお兄ちゃんは言っています」

「ハル神さま、ソレって子供を産む女の人のコト？」

村では子供を産んだ女の人は、奴隷として売られちゃうんだよ」

話に割り込み、あっけらかんとそんなコトを言う六つ子の三果^{みか}は、猫人族の村の様子を話す。

母親はいない。父親は、村にいる数人の猫人族の男の誰なのか分からない。

身なりを整える厳しい世話役の老女が数名いて、成長した猫人族の娘は奴隷として売られてゆく。

「以前は、風香十七諸島のうち、半分の島に猫人族の村があったそうだ。

だが数年前、この海域に現れた巨人族の魔王率いる奴隷海賊が、殆どの猫人族の村を滅ぼした。

唯一奴隷として猫人族の娘を差し出す約束をした、深緑島の村だけが残されたんだ」

ひどい、そんなことが……。

鳳凰小都にいた綺麗な猫人族の娘たちも、そうして売られてきたのかな。

青い顔をして、俯いてしまったハルに、青年は優しく語りかける。

「猫人族は、人間より強く逞しい。奴隷海賊から逃れて、再び村を作ろうとしている連中もいるんだ。それに、さすがの海賊も聖堂には手出しできない。俺は助けられるだけ猫人族を保護してゆくよ」

笑顔でキツパリと断言した青年からは、覇気と力強い『祝福』の気配を感じ取れる。

食後、子猫全員と萌黄を引き連れて、ハルは巨木の生えるバンジージャンプ台へと続く洞窟を目指す。

ワニの腹から出てきた黒い弓の弦を、バンジーしても切れなかった巨木のツタで作ろうと思っていた。

クエスト途中で現れたアイテムは、ゲームを左右する重要アイテムになるパターンが多い。この終焉世界でも、MMORPGゲームの法則は適用される、ハルはそう考えた。

巨木の洞窟へ向かう岩山の道途中、僅かな土の上に生えているサボテンを見つけては、ついでに収穫をする。

黒岩島のサボテンは、スイカ大の丸い実には、傘の骨ほど長い棘がビッシリ生えている。

棘先端には毒があり、触れると蚊に刺されたような痒みに襲われる。さらに、刺さった場所を水に付けると、痒みが焼け付くような痛みに変わり、赤く爛れ腫れ上がる恐ろしい毒性を持つ。

そんな毒サボテンなので、今まで誰も食べられると知らなかった。

料理オタクのハルが、好奇心から毒見（赤い右目で毒が無いことは判断できる）して食べられると発見したのだ。

緑のサボテンは大根味、薄桃色のサボテンは柿のような甘い味がある。

そしてハルは、傘の骨のようなサボテンの棘も、アイテムバッグのコレクションに加えていた。

小一時間ほどで、洞窟の中の、天井の抜けた巨木の生える場所まで来た。

さっそく丈夫そうな巨木のツタを探して選ぶと、ワニの腹から出てきたレアアイテム、黒い小弓に張る。ピンと張った弦はと最高のしなやかさと強度がある。

（これは、赤い女神の和弓みたいな呪は掛かって無いよね。普通の弓だから安心して使えそう、何か試しに射りたいな）

岩山の島には、海を渡り翼を休める飛来地として、様々な種類の鳥が来る。

ハルは、見晴らしのいい岩の上に餌の小魚を仕掛け、洞窟の岩陰に隠れた。

数分もしない内に、鳩によく似た茶色まだらな鳥が、餌に気づき近寄ってきた。

矢を二本同時につがえ、落ち着いて狙いを定める。

ハルは、いつも洗練された優美な弓の引き成りの、カノジヨ先生を思い描きながら弓を弾く。

手本の彼女は、その世界でトップレベルの弓道人だった。

生徒は、そのフォームを完璧にトレースする。

指先から放たれた矢は、風を切る音と、慌てて飛び立とうとする鳥の翼を打ち抜き、胴を貫く。

その様子を見ていた子猫たちから、おおっ、と歓声が上がった。

(やったあ、鶏肉ゲット!!)

魚肉も美味しいけど、鶏肉、焼き鳥、唐揚げチキンも食べたいよね)

浮かれてガッツポーズをするハルを、子猫たちは驚いたように見つめていた。

「すごおい!! やっぱり、ハル神さまはミゾニャン女神さまだ」

「弓の上手な猫人族の女神さま、ミゾニャンニャンさま、バンザイ!!!」

(なにつ、そのミゾニャン女神さまって!!!)

子猫たちは興奮したように、ニャンミゾニャンニャン と歌いながら騒ぎだす。

後からクジラ兄に聞くと、猫人族の伝説の中で弓の名手だった娘と、ミゾノゾミ女神信仰が混ざり合って、ミゾニャン女神に変化したらしい話だった。

騒ぐ子猫たちに戸惑いながらも、ハルはしとめた獲物へと近づい

た。

鳩に似た鳥の胴体を貫いた黒い矢に触れると、矢は突然消え、背中に背負っていた矢筒が カラン と音を立てた。

（これはもしかして、射った矢が自動で矢筒に帰ってくるの？）

それは、矢を拾いに行かなくてもいい、使い捨てではなくリサイクルする、地味だけとすごく便利なレアアイテムだ。

獲物を手にしたハルは、改めて、洞窟の割れ目からブロッコリーのように頭が飛び出している巨木を見つめる。

その樹の枝は片手で握れるほどの太さで、かすかに内側に湾曲して、まるで『これで弓を作れ』と言っているようだと思った。

ハルは早速、子猫たちに命じて枝とツタを集めさせ、黒い小弓を手本にして、オモチャのような素朴な弓を作った。矢は、サボテンの棘に死黒鳥の羽を付ける。

体がしなやかで手足の長く、視力の良い猫人族の子供たちは、あとと云う間に矢を射ることを覚えた。

昼過ぎまでに、十羽の鳥をシトメ、全員大はしゃぎで意気揚々と聖堂に帰ってきた。

一晩中、島から島へ浅瀬の砂地を徒歩で横断して、聖騎士の彼女が黒岩島の洞窟へ戻ってきた時には、すでに日は昇り、神科学種の

少年の姿は無かった。

洞窟の入り口に、逆さになった兜の鍋が置かれ、ぬるいスープと柔らかく茹でられたおにぎりの身が置かれている。

最初は、海草と白身団子^{ユニ}スープだったのが、今ではエビや貝も加わり、魚の卵を練りこんだ三色団子スープになっていた。

不思議だ、料理がドンドン豪華になっている。これではまるで愛情料理じゃないか。

そもそも、こんな島でどこから食材を調達してくるのだろうか？

彼女は、ハルの「高カロリー食で太らせそう」という企みを知らない。

彼女は食事をかきこむように食べると、すぐ其の場でゴロリと横になり仮眠を取る。

嵐の夜、女神が憑依した神科学種の少年との会話で、「神を信じないなら、現れない」と告げられた。

私は、もう無様に神には縋らない、自力で白藍さまの手がかりを見つけてだす。

二年前、白藍さまを罫に嵌めた、あの不気味な黒髪の神科学種を探し出すのだ。

数時間の仮眠の後、昏過ぎに起きた彼女は、おにぎりの実を腰の粗末な袋に仕舞うと、ユニコーンを優しく撫でてから、再び出かける。

男の手がかりを求め、風香十七諸島すべて、しらみつぶしに調べる覚悟だ。

クエスト57 弓矢を作ろう(後書き)

サボテンの実際の部分イメージ、ドラゴンフルーツ。
外見は、こんなモノ食べられるの!!!なフルーツです。

クエスト58 砂の浅瀬を歩こう

風香十七群島

二十二世紀に地殻変動により隆起して現れた浅瀬に、十七の人工島が作られたと、ハクロ王都 巨人王宮 後宮内にある古代図書館に集蔵された資料には記されていた。

群島は十七色に色分けされ、グラデーションになるように設計された。

女神の落としたネックレスと呼ばれて、飛行機での空中遊覧が人気の観光スポットだったようだ。

しかし、世界はすでに神科学と呼ばれる機械文明は消滅し、空を飛ぶ方法は魔獣を役とするしかなくなり、女神の落としたネックレスを愛でる機会はほとんど失われていた。

その風香十七群島中の、黒岩島から隣の青紫島へ、浅瀬の砂地を歩く人物がいる。

短く切りそろえた黒髪をなびかせながら歩く彼女の薄汚れたロブの下には、魔モノを退けるミスリル製の白銀の鎧を着ていた。砂地をテリトリーにしている蒼牙ワニも、白銀の鎧を着た聖騎士の彼女には近寄らない。

嵐の夜に遭難してから、風香十七群島の間続く砂地を、歩いて渡りながら偵察を続けていた。

最初に向かったのは黒岩島の隣、深緑島はひどい状況だった。

見るからに欲深く乱暴な数人の猫人族の男たちが、子供から二十歳前後までの百人近い娘を支配していた。

あれは、猫人族の娘を育てていると云うより、飼っている状態だ。だからこそ、何のためらいもなく、粗末な太刀と女物の服をかすめ取ってきた。

今彼女は、黒岩島を挟んで反対側にある蒼紫色の島を目指している。

潮が満ちると、島々を結ぶ砂の一本道は海の中に消えてしまう。早く隣の島へ渡り切らなくてはいけない。

島まで一気に駆けてようとした彼女の目の前に、浅瀬に乗り上げた小舟が見えた。

船には若い娘が乗っていて、オールを振り上げ泣きながら悲鳴をあげている。

よく見ると、船の側に一匹の蒼牙ワニがいて、女を狙い船の中に乗り込もうとしていた。

彼女は、悲鳴をあげ助けを求める娘の船まで近づく。

獲物を狙っていた蒼牙ワニは、強烈なモンスター避けの施されたミスリル鎧を恐れ嫌い、彼女から距離をとって逃げてゆく。

「娘さん、大丈夫。もうワニは去って行きましたよ」

娘が気が付くと、短い黒髪で薄汚れたローブを着た若く凛々しい顔たちの猫人族の女が、船の周りをうるついでいたワニを追い払ってくれていた。

「あっ、ありがとうございます」

アタイ、もうワニに喰われて死んじゃう、ダメかと思ったあ。

お姉さんが助けてくれたのね、ありがとう。

神さまありがとう。ミゾニヤン女神さまが、アタイの祈りに答えてくれたんだあ」

命拾いした安堵の涙を流しながら、自分に手を合わせる娘を複雑な思いで見ている。

まだ、幼さの残る若い娘は、茶色の髪に黒いネコ耳、そしてお腹がプクリとふくれた妊婦だった。

二人は話をしている間に、潮が満ちてきて船が動き出す。

茶色の髪の娘が、船の乗るように声をかけ、彼女は云われるがまま飛び乗った。

「この辺は、砂の浅瀬が多いから、普段は注意して船をこいでるんだ。

でも今日は急にお腹が痛くなっちゃって、気が付くと浅瀬に乗り上げていたの」

娘は大きなお腹で、しっかりとオールを漕ぎながら彼女に話かける。

波しぶきで着ているローブが濡れ、彼女は無意識でローブを脱ぐとミスリル鎧が姿を現した。

白銀色の美しい鎧は、強い日の光を反射して、自ら光輝いているようだった。

其の姿に、娘は啞然としてオールを動かす手を止めて見入ってし

まう。

今まで見たこともない、繊細な模様が刻まれた白く輝く美しい鎧。これは人間のお話で、魔物と戦う勇氣あるの王子様や騎士様が着ているような鎧、それがとても似合っていた。

コノ人は、どこか不思議な雰囲気で、アタイたち猫人族と違う世界の人だ。

娘の戸惑いと羨望の眼差しに気付かず、彼女は出来るだけ冷静を装いながら、静かに尋ねた。

「そつえば、アナタに聞きたい事があるの。」

「ココに住む人間で、黒髪で赤い右目の男は居るかしら？」

「えつ、この辺にいる人間っていったら、まともな奴はほとんど居ないわ。」

「汚らしい奴隷海賊ばかりよ!？」

「アイツらはほとんど黒髪だけど、赤い目は見たこと無いなあ。」

「お姉さん、他に何か男の特徴はあるの？」

「他に特徴？」

男は私くらいの身長で、死んだような顔をした、特徴が……無い。けどその男は、私の主を悪魔のような罠に貶めて、奪っていった仇なの!！」

彼女は、思わず感情にまかせて強い口調で叫んでしまう。

「こんな、幼い身重の娘に話をしたところで、どうしようもないのに。」

しかし話を聞いた娘は、瞳を爛々と輝かせ、彼女に駆け寄ると両手を取りぎゅっと握り締める。

「お姉さんは、その恋人の仇を取るために、黒髪の人間を捜しているんだね!!」

アタイも其の気持ち良く判るよ。

判った、任せてっ、アタイお姉さんの協力をするっ」

彼女は驚いて娘を見る。

こ、恋人ですって!!私と白藍さまがっ。どうしてそんな勘違いするの？

「お姉さん、アタイは深緑島に住んでいて、村長に恋人がいたことがバテて奴隷として売られそうになったんだ。

必死で隣の黒岩島の聖堂に逃げて、聖堂の神官爺さまに助けられて、恋人と駆け落ち出来たんだ」

なるほど、娘は自分の体験から私の話を勘違いしているのね。

でも、下手に否定して勘ぐられない方がいいわ。

彼女は、そう自分に言い聞かせながらも、頬が赤く染まるのを隠せなかった。

一刻ほどして、船は蒼紫島を半周して小さな船着き場に着いた。

岩を削って造られた船着き場から、陸に向かって大きな段差の階段が二十段ほど続いている。その上には平たい土地が開け、小屋が数件建っているようだ。

それにしても、コノ大きな段差の階段を登るのは、身重の娘には

きつそうだ。

娘が船をつなぎ止めて階段前まで来たところで、彼女は娘を軽々と横抱きにすると、そのまま階段を上り始める。

「えっ、お姉さん、すごい力持ちだ。アタイ、お姫様になったみたい」

いきなり抱きあげられて、驚きながらも首にしがみつく嬉しそうな娘が可愛らしい。

そういえば、小柄な白藍さまは私が抱きあげると「僕は子供ではないんだよ」とひどく照れていたわ。

彼女は、本当に久しぶりの、心からの笑みを浮かべる。

階段を上りきると、開けた平地に雑貨屋のような小屋と小さな畑、畑の手入れをしている若い女が二人、そして奥の林の中に数件家が建っている。

「お姉さん、もしかしてさつき砂の浅瀬を歩いて渡っていたけど、恋人の仇を探すために、風香十七の島を全部歩いて渡るつもりなの？」

「ええ、私はそうするつもりよ」

「待つて、それなら歩いて探すよりイイ方法があるんだ。

ほら、アタイのお店、小さいけど扱う商品が変わっていて、他の島からも客が買いにくるんだ」

そういつて、娘が小屋の中に彼女を案内して、床に大量に並べられた瓶を見せる。

中には白い液体が満ちて、花の香りのような甘いアルコール匂が

する。

見かけ幼い娘は、実はかなり強かで、深緑島の村で男たちが酒に溺れている姿を見て、商売になると考えて始めたそう。

「他に、畑で葉タバコも育てているんだ。

林の中でミツバチが蜜を集めて、ハチミツと蜜蝋もあるよ。

さっき話した、ロクデナシの人間の奴隷海賊たちは、ココに頻繁に買いにくるんだ。

お姉さん、コノ店に来る人間から仇の男の情報を聞き出したらいいよ。

アタイもそろそろ子供が生まれそうだし。ねえ、しばらくココでアタイを助けてくれない？」

大きなお腹をさすりながら、娘は期待を込めた目で彼女を見ている。

なるほど、悪い話では無い。猫人族の女に紛れ込んで店番をしながら、来た客に少し愛想良くサービスすれば、男の情報を聞き出すことができるかもしれない。

彼女はその話に快諾すると、娘は喜んで抱きついてくる。

「ありがとう、お姉さん。

へへっ、実はお姉さんって力があるし強そうだから、店の用心棒になって思っていたんだ。

あっ、自己紹介がまだだね。アタイは李^{スミレ}、モモって呼んで。

お姉さんの名前はなんて云うの？」

いきなり、娘に名前を尋ねられ、一瞬彼女は躊躇する。

「わ、私の名前は……白^{ハク}ら、ハクというの」

それから娘は畑にいる仲間を呼び寄せて、彼女を紹介する。
二人の少女もモモと似たような境遇らしい。

そしてモモは自分が彼女に助け出された状況を、かなり脚色して
臨場感たっぷり話して聞かせた。

「その時、大きなワニがアタイの船に乗り込もうとしたの。

アタイは持っていたオールでワニの鼻頭を叩きながら、ミゾニヤ
ンさまミゾニヤンさままって女神様の名前を何度も呼んで祈ったわ。

そしたら、海の向こうから、キラキラ光る鎧を着た人が、アタイ
の方へ歩いてくるの。

神さまが現れたと勘違いしたわ、だって凶暴なワニが、あわてて
逃げ出したのよ。

ハクさんが、女神様に遣わされた神様に見えたの」

なんとという、皮肉なのだろう。

ミゾノゾミ女神を信じない私が、まるで女神に遣わされたかのよ
うに、娘を救い出したなんて。

夕方、洞窟に戻ってきたハルは、空になった竜兜の鍋の中に、黄
金色の瓶詰めが置かれていることに気がつく。

誰が置いていったものかすぐ判る。

彼女の姿は見えない、再び出かけていったのだろう。

夕日に透かして見ると、黄金色の液体がキラキラ輝いて見える。彼女はやっと、食材を手に入れることができたのだ。

（やれば出来るじゃないですか。

これは舌触りのよい甘い蜂蜜だ。

フツッ、たつぷり高カロリーのお菓子が作れるね）

「さて、うまく忍び込めたな。

よかった、停泊している船なら船酔も起こらない」

竜胆がドラゴンの背から目を付けた、鉄の檻を積んだ奴隷海賊の大型船には、猫人族の娘を捕らえるために裏家業の傭兵が乗り込んでいた。

傭兵として紛れ込んだ竜胆は、その半巨人の怪力を生かし、五人でやっと運べる鉄籠を一人で軽々と運び腕っ節の強さを買われた。

「リンの旦那、昨日は助かりました。

これは、俺からのホンの礼ですが貰ってください」

骨ばった筋肉の痩せて髪の毛半分ハゲアガった奴隷海賊の男が、酒瓶を抱えて竜胆に声をかける。

昨日、倒れてきた鉄檻に腕を挟まれた男だ。

綺麗に骨が折れてブラブラしていた腕を、治癒魔法で直してやった。

この世界で、治癒魔法が行える魔力持ちは少ない。竜胆が治癒魔法を使ったことは口外しないよう言っている。

「へえ、旨そうな酒だな。」

おっと、あんたはしばらくは禁酒な。傷にひびくから。

それにしても、随分と沢山の檻を用意してるな。

もう猫人族の娘たちは、捕らえてあるのか？」

半分ハゲ頭の奴隷海賊の男の話では、猫人族の村が、娘を奴隷として販売するという。

その村の娘五十人を、全員安く買い取ってボロ儲けするのだと話す男は、何故か浮かない表情をしている。

「なあ、ボロ儲けならもつと嬉しそうな顔をしろよ。お前たちは、猫人族の娘が生け贄として串刺し八つ裂きにされても、全然気にしないだろ」

「う、うつつ、なんて事を言うんだ！！」

確かに俺たちは奴隷海賊と言われているが、ココ二年間海は豊漁続きで、その稼ぎで奴隷親方に金を納めているから、盗みも殺しもしていない。

俺たちは、風香十七群島で生きて行く為に、猫人族の世話にもなっている」

「それでも上には逆らえず、傭兵たちの言われるがまま、船を操って猫人族の娘たちを狩りに行く。無様な連中だな」

竜胆が鼻で笑うと、男の仲間たちも険しい目つきで押し黙ったまま睨んでいる。

これは、イイ傾向だ。

奴隷海賊の中にも、猫人族に同情している者たちがいる。

竜胆は、貰った酒瓶を、わざと甲板の上に転がしガチャンと割った。

「なあ、腕折れて使えない足手まといの奴隷海賊は、処分されてワ
二の餌になるって聞いた。ということは、折れた腕を治した俺は、
アンタの命の恩人だ。」

「ちょっと、その恩人の頼みごとを聞いてくれないか？」

「そういう竜胆は、これから悪戯を企てるような、楽しげな満面の
笑みを浮かべた。」

クエスト59 奴隸海賊と話をしよう

黒岩島の浜辺では、体長二メートルあまりの蒼牙ワニの群が、柔らかな日差しの中でのんびり昼寝をしている。

その中に一匹、四メートル近い飛び抜けて巨体の蒼牙ワニが、辺りを警戒しながら歩いていた。

砂の上に散らばった僅かに残る仲間の血と、引きずられた跡が岩影の方に続いていた。

共食いの癖のある巨大ワニは、血の匂いに誘われて跡をたどり、岩の後に回り込んだところで、風を切る冷たい音を聞いた。

岩山から浜辺を眺める絶好の位置で、ハルと六人の子猫たちは弓を引く。

普通、堅い蒼牙ワニの鱗と皮は簡単に矢を弾く。

しかしハルたちが放った矢の先には、蒼牙ワニの鋭利な牙が齧やじりとして使われ、堅い皮で覆われた巨大ワニの頭部に何本も突き刺さった。

更にトドメとばかりに、ワニの眼を二本の黒い矢が視界を奪い、恐ろしい鳴声をあげながらのたうち回る。

「いいぞ、これでヤツの目は潰れた。」

恐れるな、落ち着いて網で絡み捕れ！！二人がかりでやれば上手くできる」

暴れる巨大ワニに、左右二方向から、巨木のツタで編まれた丈夫な網が投げられた。

ワニの上半身が縄に絡んで、動きが封じたところでテコの原理で腹に棒をつっこんでひっくり返す。

黒髪に眼帯の青年が、手にした縄をワニの口に回し、その細身の体から信じられないほどの剛腕で締めあげ、無理矢理口を閉じさせる。

「今だ、前足の生え際から中心に向かって、鉗を突き立てる！！」

両腕でワニの口をホールドした青年の指示通りに、四人の若い漁師が鉗を突き立てる。

「ダメだっ甘い、次っ！！完全に動きを止める」

二番手の漁師たちが、雄叫びをあげながらワニに襲いかかる。

続いて三番手の漁師が突き立てた九本目の鉗は、ワニの体の反対側まで貫き、巨大ワニは動きを止め絶命した。

青年の率いる若い猫人族の漁師たちは、この一週間で自分たちの三倍の大きさはある巨大ワニを仕留められるまでに腕を上げていた。

603

岩の上から矢を放った子猫たちが歓声を上げるのに、青年は手を振って答えた。

人の数倍の視力と夜目が効き、弓師だった女神の伝承がある猫人族。

最適な弓と、最適な指導を行えば、その才能は瞬く間に開花する。それを与えたのは、優しげな頼りない顔立ちをした少年だった。

青年は、仕留めた巨大ワニの周りで騒ぐ仲間から離れ、わざわざ岩山の少年の所まで登ってきた。

「まさか、子猫たちがあんなに上手く矢を射れるとは驚いた。これで危険を冒さずにワニを誘き寄せて、それに目潰しすれば致命傷も与えられる」

「うん、子猫たちの中でも、特に六つ子は弓の才能があるね。もう少し練習すれば、ワニの目を狙い撃つ出来るようになるよ。と、ハルお兄ちゃんは言っています」

ウンウンと頷くハルの正面に回り込むと、青年は熱に浮かされたような眼差しで見つめてくる。

「何故だろう。神科学種様の弓を番える美しい姿は、神卸の巫女が行う神聖な儀式を見ているようだ。」

俺は神事なんか見た記憶も無いのに、魂が激しく揺さぶられる。何かずつと探し求めていたモノと、やっと巡り出会えたような気持になるんだ」

（ひいつ、神卸の巫女だつて！！クジラ兄さん^に、やっぱりこの人勘が良すぎる。

しかも、ちょっと熱心すぎる信者入ってるし。

オアシスの生贄少女、銀朱ちゃんみたい、あの子は熱狂的なほど過激だったけど）

このハルの呟きは、萌黄も翻訳せずに同意する様に頷いた。

小山の様な巨大ワニの鱗皮を剥がすと、一度に四人分の防具が作

れるほどの大きさだ。

せつせと『良く切れる包丁』で解体作業をするハルの周りで、若い猫人族の漁師たちは女の話で盛り上がっている。

「最近、俺の嫁の店にスゲエ美人が手伝いに来てるんだよ。

なんつうか、この辺の娘と違って田舎臭くない、垢抜けた高嶺の花っう感じ。

でもよお、その美人は猫人族なのに、人間の、しかも黒髪の男にしか興味が無いんだと」

「それなら、クジラ兄は人間の黒髪だし、その美人とお見合いさせてみるよ。

えっ、好みのタイプがクールで表情の無い男前。

何だそりゃ。あーあつ、全然クジラ兄とは真逆のタイプじゃないか」

その話を、こっそりと盗み聞きしていたハルは、思わず包丁から手を離しそうになる。

まさか、その美人の猫人族娘って……

青紫の島にある小さな売店の中で、年若い妊婦の娘が、一回り大きくなったお腹を抱えながら注文の酒瓶を数えていた。

「スゴイね、当店始まって以来の大量注文だよ。

えっと、熱泡酒を六十四本だって。いち、にい、さん、… よんじゅつに??」

無造作に並べられた酒瓶を何度も数え間違えている娘の所へ、畑から葉タバコを摘んでいた白ハクと呼ばれる彼女が帰ってきた。

しばらく娘の様子を眺めていたが、おもむろに縄を手に酒瓶を5本ずつまとめる。

「ほら、こうして五本まとめて二列にすると数え易いわよ。

十、二十、六十と八本、四本多いわね」

「ホントだ、数え易い、ありがとう。白ハクさんって客の対応もうまいけど、商品の扱いも良く分かるよね。なんか商売していたの？」

「そうね、主は頻繁に高価な貢ぎ物を頂いていて、宝物の扱いには特別注意を払っていたから、それでかしら」

「ええーっ、み、貢ぎ物や宝物を貰える身分の高い人！？」

白さんの恋人はお金持ちなんだ」

彼女の話に、瞳をランランと輝かせて、大きなお腹の娘は身を乗り出して続きを聞き出そうとした。

だが、彼女は曖昧な言葉で話をそらし、別の事をたずねた。

この店の手伝いをして、買い物に来る奴隷海賊と猫人族の関係がとても良好だったのだ。その事を不思議に思い娘に聞くと、意外な答えが返ってきた。

「アタイの小さい頃、この風香十七群島とコクウ港町は、双子の巨人族王子が治めていたんだって。ところが傲慢な双子の兄が、暴力王に謀反を起こして、それを双子の弟が止めたらしいよ。

負けた傲慢な兄王子は廃王子になって、逃げ出して暫く経った頃、

風香十七群島に海賊たちを引き連れてやってきた。猫人族は弟王子側に付いていたから、その復讐に、殆どの猫人族の村を滅ぼしたんだあ」

それは有名な話、巨人族 第十一位王子の暴力王暗殺計画。体を張って阻止したのが、双子の弟の第十二位王子だった。

「その出来事に怒った巨人王は、海賊の地位を猫人族以下の、奴隷海賊にしたの。

やつらは、陸に上がれば身分は奴隷になってしまう。

実は、奴隷海賊の首領になった廃王子は泳げないし、ププツ、巨人族ってヒドク船酔いするらしいよっ。

だから、浅瀬に海賊船を何艘も動かさないように括り付けて、島の島にしてるんだあ」

娘は、話しながらも可笑しさを堪えられなくて、ケラケラと笑い出してしまう。

廃王子は貧しい奴隷海賊たちの不満を煽り、コクウ港町エリアを襲わせよう企てた。

ところが風香十七群島は、ここ最近、釣り針を垂らせば一つの餌に三匹は食いつくほどの豊漁で、港町も奴隷海賊たちも懐が豊かになっていった。

「元々、貧しさに耐えられず、生きるため奴隷海賊に身を落とした連中なんだ。

漁師として稼いで生活できれば、それが一番なのさ。

噂では、黒岩の聖堂で子供の世話をしてる人間の漁師は、豊漁をもたらず白波クジラ神さまの化身だって話だよ」

「でも、私はここにくる前にひどい嵐に遭って、神の怒りに触れた

「思ったわ」

彼女の一言に、娘はキョトンとして、それから再び大声で笑いだした。

「それは違つよ、白さん。」

今年は夏中日照り続きで、島の水が干上がる寸前にあの嵐が来たんだ。

アタイと旦那の愛の巢は嵐で吹き飛ばされちゃったけど、井戸の水は満タンになった。

だから、あの嵐は恵みの雨だよ」

年若くとも苦勞人の娘の一言は、彼女の中で小さなワダカマリを溶かす。

青紫島の岩を削つて造られた船着き場から、小舟が二艘、船着き場に停止した。

陸に向かつて大きな段差の階段を下りるのは、妊婦の娘にはかなりキツイので、彼女一人で酒を受け取りに来た奴隷海賊に対応をしている。

黒髪の人間の行方を探するため、愛想良く奴隷海賊たちに話しかけて情報を引き出す。

三人ほど、似ていると言われた黒髪の男と会ったが、まったく当ては外れた。

探す男は、ロウ人形のような特徴の無い顔をしていた。特徴が無い事が特徴の男だ。

「こんなに沢山のお酒を、お買い上げ下さってありがとございませす」

酒を受け取りに来た三人の男は、一見善良そうな只の漁師に見える。

若い二人の男は、美しいミスティアスな彼女に話しかけられて、照れ笑いをするほどウブだ。

しかし、骨ばって痩せた中年の奴隷海賊の男は、眼光鋭く彼女の様子をうかがっている。

「おい、ベラベラ喋ってるんじゃないねえ。リンの旦那を待たせる気か！！」

この役立たずども、さつさと酒を船に積み込め」

男たちが慌てて酒を船に積み込んでいる間、男は皮の金貨袋をジャラジャラと音を立てて、彼女に見せつけるように近づいてきた。

「アンタ、俺から目を逸らさない、堅気じゃないな。

普通コイツを出したら、目はコツチに釘付けになるんだよ。

随分とポロツちい腰の得物だな。ちゃんと使えるのか？」

なんだ、この男は敵か？そこそ腕は立ちそうだが、しかし私の相手にもならない。

男は腰に差した二本の半月刀を握ると、彼女も腰をかがめ刀に手を構える。

だが男は、自分の刀をあっさりと彼女の目の前に投げ捨てる。

「な、これは「シィツ、黙れ」」

酒を運んでいる仲間の二人は、船の中でゴソゴソと隠れるように酒の味見をしているらしい。外で向かい合う二人の会話は聞こえない。

「アンタが、黒髪の人間を探している理由は判らんが、ココに来る時期が悪かったな。

いいか、今夜中に店の娘達を連れて、黒岩の聖堂に逃げ込め。

霊廟女神神殿が、奴隷海賊首領の廃王子と手を組んで「猫人族の娘狩り」を命じた」

そう告げると、男は走って船に乗り込み、彼女が声を掛ける間もなく去って行った。

なに、なぜ、霊峰女神霊廟が猫人族に手出しするの、わたしか、わたしが原因か。

あの狂った偽法王 アマザキなら、平気で猫人族の娘も、男も女も、子供も年寄りも、全て滅ぼすだろう。

わたしはまだ、白藍さまを、探し出していない、なのに。

沖へ漁に出ていた猫人族漁師のグループが、更に数匹の蒼牙ワニを仕留めて盛り上がっている青年たちのトコロへ、慌てて駆けこんでくる。

「た、大変だクジラ兄に！？」

隣の深緑島の周りを、見たこともないデカイ奴隷船が取り囲んでいる」

「おい、遠洋で港町から帰った来たヤツが、とんでもない事を言っていた。

霊廟女神神殿の法王が、ミゾノゾミ女神をこの世に蘇らせるために「猫人族の娘 150人」を生贄にするって。

今、奴隷海賊や奴隷商人、裏稼業の傭兵まで100隻の船団が、奴隷海賊島にどんどん集結しているぞ」

足の速い猫人族を追い越して、眼帯姿の青年は、岩山の山頂まで一気に駆け上がる。

リング状の風香十七群島の、黒岩島から反対側に位置する奴隷海賊島は見ることはできない。

しかし、眼下に広がる海の光景に唖然とする。砂糖に群がる蟻のように、大小の数十艘の船が、黒岩島の前を横切り、深緑島へ向かっていた。

奴隷海賊VS猫人族 開戦

クエスト60 猫人族娘狩り

険しい岩山を駆け上がり、島の頂上から、隣の深緑島の周囲に群がる船を見る。

大型船三艘に、小型船二十一艘。

その大型船には、甲板に鉄製の丈夫な檻が十数個準備されている。島の周囲は浅い砂地に囲まれているので、大型船は直接島に近づくことはできず、沖で待機しているのだ。

手漕ボートのような小型船が、島の小さな入り江にひしめき合いながら並び、そして割り込もうと船同士をぶつけ合って争う連中もいる。

ハルが一番最後に岩山の山頂にたどり着いた時には、猫人族の漁師たちは息を殺して景色の一変した海を眺めていた。

島から遠く、水平線にもポツポツと黒い点を散らしたような、奴隷海賊の船団が見えた。

現在の状況が飲み込めず、混乱するハルの赤い右目が起動する。目の前に仮想モニターが映し出され、呼びかけの念話チャットが表示された。

そういえば、萌葱ちゃんがこの島に着てから一週間が過ぎたが、竜胆はまだ迎えに来ない。SENやティダは、朝夕に挨拶程度のメッセージしか送ってこない。

何かおかしかった。

音声と文字の念話チャットで、ハルの脳裏にSENの普段より硬い声が流れる。

「ハル、今まで秘密にしていたスマン。
お前を助け出す準備が整うまで、無駄に動揺させたくなかったんだ」

「？。。。」

「ハルを誘拐した猫人族の聖騎士は、霊峰女神神殿のニセモノ法王を裏切り、ホンモノの法王を探している。

偽法王は、実は神科学種でアマザキという名前だ。

アマザキは聖騎士の裏切りを許さず、その見せしめに、同族である猫人族の娘狩りを命じたんだ。」

「。。。」

ハルと聖騎士の彼女との間で、これまでマトモな会話は一切なかった。

彼女は、唯一ハルと言葉を交わせる相手だというのに、ひ弱な神科学種だと判断して完全に諦め放置していた。

ココで初めて、ハルは自分が連れ攫われた理由を知る。

「ハルちゃん、偽法王アマザキは、まだハルちゃんがミゾノゾミ女神の憑代だというコトは知らない。

今夜迎えにいくから、それまで大人しくして危険な事はしないでくれ」

「。。。」

えっ、テイダ、待って待って!?

ハルは焦りながら思った。

今は僕より、猫人族が奴隷海賊たちに襲われて大変な事になって
いるんだよ。

しかし二人との会話は一方通行で、島の状況は顔文字じゃ伝えら
れない。

チャット
念話中のハルは、ぼんやりと宙を眺めているように見える。

そのハルの視界には、仮想モニターと二重写しになって、幼い子
猫が叫びながら、小石を海に浮かぶ海賊船に向かって必死に投げる
姿が映る。

小石は手前でポトリと落ちて、斜面を転がってゆく。

こんな場所から石を投げたって、奴隷海賊船に当たるはずもない。
でも、何かをせずにはいられない。

そうか、言葉で伝えられないなら、現場の映像をSENたちに見
せて知らせるしかない。

ハルはSEN達との念話チャットを一方的に終了させて、萌黄に声をかけ
る。

岩山の上で、成すすべもなく海を見つめる猫人族たちから抜け出
すと、バンジージャンプの洞窟に向かって走り出した。

深緑島は深い原生林に覆われた島で、中央に開けた土地に、猫人

族唯一の村がある。

村の中央広場には、娘たちが集められていた。

酒焼けで濁った目をしたの太鼓腹の村長は、美しく着飾らせた娘たちが怯えて泣くのを荒々しい声で怒鳴りつけた。

「ギヤアギヤアとうるさい女どもだ。

今まで俺がタダ飯食わせて、マトモな生活をさせてやった恩返しをしろ。

それが嫌な役立たずは、ワニの群れに、裸で投げ込んで餌にするぞ」

太鼓腹の村長は、奴隷海賊首領から、普段の倍の値段で娘を買い取るという話に大喜びで飛びついた。

半月前に、奴隷商人に売った七人の娘が金貨十枚だった。

それを倍の金貨二十枚、不細工でも乙女ならかまわないという絶好の条件なのだ。

「おい村長、メス猫の準備は出来たか？

一匹金貨20枚で、100匹分の金貨2000枚は準備してあるぞ」

キツネ顔で落ちぶれた貴族の様な服装をした、奴隷海賊首領の使いの男は、村長に声を掛けた。

手にした黒塗りの木箱から、ジャラジャラと重たそうな金属音がする。

「はい、奴隷海賊の廃王子さまのご希望通り、美人の猫人娘を三十八人揃えました。

へっ、人数が足りませんって？

奴隷として使えるように、キチンと仕込んだ娘はこの三十八人で

して、残りの娘達はまだ売り出すには早すぎます」

「生娘なら、どんなモノでも構わんといったはずだ。

生まれたばかりのメス猫からココにいる奴隷娘まで、全部の猫人族の娘を連れてゆく」

そうキツネ顔の男は告げると、見るからに凶悪な面相の傭兵たちが数十人、ゾロゾロと背後から姿を現した。

怯えて震える娘たちの首に、乱暴に縄を掛け、後ろ手に縛ると引きずるように連れてゆく。

傭兵たちはズカズカと村の家々に押し入り、中に隠れていた小さな子猫を捕らえると、髪を鷲掴みにして吊り上げて振り回す。

「ひやははっ、霊峰女神神殿で生け贄として殺すだけだし、なあどんなメス猫でも構わないんだよな」

傭兵の男は、そう言いながら襜褕袋の中に小さな子猫を押し込むと、荷物のように肩に担ぐ。

傭兵たちによる「猫人娘狩り」略奪の光景が、村中で繰り広げられていた。

「ええっ、生け贄として娘たちを殺すとは、どういう事ですか!？」

霊峰女神聖堂で、娘を奴隷として働かせるのではないんですか」

「なんだあ、その口の聞き用はあ。

女神神殿の法王様が、御神託を授かったんだ。

汚らわしい猫人族の生娘を百五十人生け贄として捧げれば、この終焉世界にミゾノジミ女神が降臨して、宝石の雨を降らせてくれるんだとよ」

「何をぬかす、猫人族が汚らわしいだと！？そんなバカな話があるか。」

二年前から法王が狂ったという話をよく聞く。そんな狂人……」

口が滑るとはこの事だ。

娘たちを売りさばく深緑島の村長は、傲慢なプライドを持っていた。

「猫人族ごときが、神聖な女神神殿の法王様に対して暴言を吐くとは聞き捨てならん。」

「廃王子の味方である法王様に逆らう謀反人は、この場で即処刑だあ」

キツネ顔の男は、耳障りな高い声でそう告げると同時に腰のレイピアを抜き、太鼓腹の村長の左胸に深々と突き立てた。

胸から真っ赤な血が勢いよく噴出し、心臓から背中まで貫かれ即死した村長の体を、男は細い腕で串刺しのままレイピアを上持ち上げて掲げる。

まるで、血の雨が降っているようだ。

「こいつの他に、俺たちに逆らう連中にはいないよな。」

おい傭兵ども。お前らもメス猫を誤魔化してかすめ取ろうとしたら、同じ目に合うと覚悟しろよ」

そして、村長の死骸を広間中央に投げ捨て、その上に持ってきた金貨をばらまいた。

「この金貨は、残りの猫人族で仲良く分けるんだな。もうこの村に用は無い。」

「廃王子さまが報告を待っていらっしやる、さっさと引き上げるぞ」

村長の手足だった村の男たちと、猫人族の娘を管理していた村の女たちは、村長の死体を踏みつけながら金貨を奪い合い醜く争っている。

その姿を鼻で笑うと、キツネ顔の男はきびすを返し村に背を向けながら、側に付き従う部下に一言告げる。

「いい天気だ。火を放てば良く燃える」

捕らわれ小型船に寄せられた猫人族の娘たちが見たのは、赤い炎に包まれて焼け落ちる島の姿だった。

次々と小型船で運ばれた娘たちは、沖に停泊する大型船の甲板に並べられた鉄の檻に閉じこめられた。

キツネ顔の男は、捕らえた娘たちの数を確認すると、大型船に乗り込んでいる傭兵達のリーダーである、赤い髪をした巨漢の男に声をかけた。

「あの欲深い目障りな深緑島の村長を、うまく片づけることもできた。

メス猫七十二匹か、まあ、一度のこれだけの数を集められれば、廃王子さまも満足されるだろう。

いいか、傭兵達の見張りはお前に任せる。メス猫の商品価値を落とすなよ」

「はい、分かっております。大切な、生贄として殺される猫娘達だ。生娘のままでも楽しむ方法は色々とありますから、充分可愛がつてやりましょう」

涼しげな顔でそう告げる若い赤髪の男は、どこか他の傭兵達とちがう洗練された仕草で、自分を高位の貴族のような傳く態度で接してくる。

直立不動の体勢から数歩後ろに下がり、深々と自分に対して頭を下げ続けたまま見送る傭兵のリーダーに満足して、男は魔王王子へ報告するために船を走らせた。

さて、邪魔者はいなくなつたか。

男を見送つた、赤い髪の若い傭兵、竜胆は猛々しくニヤリと笑つた。

七十二人の娘達を捕らえた鉄籠は、三艘の大型船に五個ずつ積み重ね、中には五、六人の猫人族の娘が入れられている。

船を操る奴隷海賊と、娘を捕らえてくる裏稼業の傭兵に役割は分担されている。

奴隷海賊と傭兵では、傭兵の方が身分は上になり、奴隷海賊は傭兵に逆らうことが出来ない。

そして竜胆は、深緑島を襲撃する傭兵たちのリーダーを任されていた。

一仕事終えた傭兵たちは、檻に囚われた美しい猫人族の娘を酒の肴にして、酒盛を始めていた。

檻の中に手を伸ばし、まだ幼い娘の片足を掴むと、無理やり檻の

手前まで引きずりよせる。娘を着飾っていた服に数本の手が伸びて、音を立てて引きちぎる。

娘の哀れな悲鳴と男たちの囁し立てる嘲笑が響き、その様子を見た他の男達も、真似て檻の中の娘をオモチャにし出した。

竜胆は空の鉄籠の上で胡坐をかき、その様子を黙ってしばらく見ていた。

傭兵たちへの労をねぎらう為にと竜胆が買ひ与えた酒が殆ど空になり、そろそろかと腰を上げたところで、隣の船からどよめきが起こった。

「おい、その娘を早く捕まえろよ。」

スゲエ、黒い長い髪に肌も真っ白で、顔がミゾノゾミ女神そっくりじゃないか」

「人間じゃないだろ、ネコ耳に尻尾が生えてるぜ。」

それでも、確かに女神さまに瓜二つだ」

船の端に置かれた檻は正面から檻の中に腕を伸ばすことが出来ず、中の娘は檻の反対側で体を小さくして蹲っている。

檻の周りには、酔ったやじ馬の群れが、娘に触れようと手を伸ばしていた。

透き通るような白い肌に腰まで伸びた絹糸のような碧の黒髪、ぶつくりとした桃色の唇に赤みがかかった優しげな大きな瞳。

白い小袖（白衣）に、膝上までの短い緋袴、膝小僧を隠す白く長い足袋ヒソを穿いている。

ネコ耳カチューシャと尻尾を装着した、巫女姿の娘がいた。

まさか、冗談じゃないぞ。でも、ヤツならありえるか。

檻に近づいてきた竜胆を見て、娘は困ったように微笑み、竜胆は

苦虫を嚙みしめた表情になる。

てめええーハル！？

なに猫人族の娘達に紛れ込んで、あっさり捕まってるんだよ。

クエスト61 海賊船を沈めよう(前書き)

久々の、偽お色気注意

クエスト61 海賊船を沈めよう

「まさかこんな事を……神をも恐れぬ、罰当たりな連中め」

舞い上がる火の粉を茫然と眺めながら、青年は押し殺した声で呻いた。

深緑島の中央にある村から上がった火の手は、瞬く間に島中に飛び火して、巻き起こる熱風は隣の黒岩島まで吹いてくる。

むき出しの黒い岩肌の島には、木はほとんど生えておらず、飛び火して燃え移る心配はない。

岩山の山頂で、ただ事の成り行きを見つめるしかない青年と猫人族の漁師たちの元へ、泣きじゃくりながら金色の髪をした幼い少女と子猫たちが戻ってきた。

「おや、萌黄にお前たちも、なんでそんなに泣いているんだ。

神科学種のハルさまと一緒に居たんじゃないのか。ハルさまはどうした？」

「ハ、ハルお兄ちゃんが、隣の島に。ウワァァン だけどすぐ捕まっちゃったあ」

「クジラ兄に、ハル神さまはミゾニヤンニヤン女神さまに変身した！！
女の子たちを助けるって言ってたけど、すぐ見つかって、奴隷海賊たちに連れて行かれちゃった」

ティダや竜胆に、大人しく待っているって言われているけど、この猫人族のピンチを伝えるには、直接現場の状況を知らせるしかないよ。ハルは心の中で決意した。

黒岩島と深緑島の間には、奴隷海賊の船がひしめき合い、隣の島まで渡る方法は、バンジージャンプ台から恐怖の綱渡りをするしかない。

ハルは子猫たちに手伝ってもらい、身軽な萌黄は、子猫たちの真似をしてスルスルと隣の岩に飛び移っている。

神科学種の躰は、リアルより身体能力が倍以上になってるはず、なのだが……

高い高い高い　ヒイイイ　落ちる落ちる落ちる！！

ハルは無様で情けない姿を晒しながらも、子猫たちに助けられ、必死の思いで何とか隣の島に辿り着くことが出来た。

これから猫人族の村に潜入するためには、同じ猫人族に変装する必要がある。

ハルは萌黄から借りたネコ耳と尻尾を装着したところで、ソレを眺めていた子猫がポツリと呟く。

「ハル神さま、猫人族の村には若い女の子しかいないんだ。

猫人族の男の子のカッコで潜り込んだら、すぐ余所者だとバレて掴まるよ」

そうか、深緑島の猫人族の村は、女の子を奴隷として売るために育てているんだよね。

女の子に変装するなら……アイテムバッグの中にYUYUさんか

ら貰った『紅白の巫女衣装』がある。まさか自分の意思で、この服を着るコトになるとは思わなかった。

ハルは、ため息交じりにモソモソと服を着替える。

白い小袖（白衣）に、袴の丈膝上30センチの短すぎる緋袴、白いレースの足袋ヒソソはSENの趣味を採用したようだ。

ネコ耳力チューシャと尻尾装着なので、緋袴の後ろは少し捲れ上がっている。

透き通るような白い肌に腰まで伸びた絹糸のような碧の黒髪、ぷっくりとした桃色の唇に赤みがかかった優しげな大きな瞳。

かなりサイズの大きなサボテンの実（ピンクの甘い方）を胸の詰め物にした。

見事に、猫人族の娘に変装したハルを見て、子猫たちは声を張り上げてニャンニャン騒ぎ出す。

「本物のミゾニャンニャン女神さまだ！！」

「万歳万歳、ミゾニャンニャン女神さま、悪い海賊を早くやっつけて」

（ちよ、みんな静かにつ。声が大きいよ、敵に気付かれちゃう）

いくら焦っても声の出ないハルは、興奮した子猫たちを静かに大人しくさせることはできない。

ガサツ

「随分とにぎやかだな。ヒヒツ、村から逃げ出してきた娘を見つけたぞ」

そしてお約束の展開。

子猫たちは素早く敵をかわし黒岩島に逃げ帰り、あっさりと捕らわれたハルは、首に縄を付けられ小舟に乗せられたのだ。

沖に停泊する大型船の甲板には、猫人娘を捕らえられた鉄籠が並ぶ。

その中のひとつの檻の前で、騒ぎが起こっていた。

檻の中に捕らわれた娘は、男たちが物心ついた頃から何度も話を聞き、写絵を見せられ、時には必死で祈りをささげたミゾノゾミ女神にそっくりの姿形をしていた。

略奪行為により高ぶった感情と強すぎる酒の酔いも手伝って、傭兵たちは競いながら檻の中に腕を伸ばして、娘に触れようとしている。

傭兵たちのリーダーである半巨人の赤毛の男は、無表情のまま、騒ぎの起きている檻の前まで来た。

檻にしがみ付く男たちを払いのけると、人間の男五人がかりで動かす鉄檻を、柵を掴み軽々と持ち上げる。

ソレを甲板中央まで運ぶと、檻の扉を開け、長い腕を伸ばして黒髪の娘の足を捕らえ、外へ引きずり出した。男達の下卑た歓声が起こり、赤毛の男は娘を抱えたまま檻の上に登ると、首の縄を引いて立ち上がらせる。

怯えた表情の娘の耳元で、赤毛の男は低い声で呟いた。

「ハルてめえ、弱いくせにしゃしゃり出て、あっさりと捕まってる

んじゃねえよ。

こうなったら、俺の計画を手伝ってもらうからな。野郎どもの餌になる覚悟しろよ」

底冷えするような怒りの視線に、ハルは冷や汗を流しながらコクコクと頷く。

竜胆の計画では、捕らわれた娘の中から、一人を生贄にする必要があった。

できるだけ、男の欲望を狩りたて嬲りたいと思われるような色香のある娘だ。

そして巫女服で女装したハルの姿に、竜胆は心の中では感嘆の声を上げる。

普段は地味で目立たないガキが、ミゾノゾミ女神に化けた途端、輝くような存在感を放ち始める。

終焉世界で女神は絶対的人気を誇り、特に男にとっては理想の女だ。酔ってマトモな判断の出来ない傭兵どもを、女神さまに魅入られたまま昇天させてやるう。

竜胆の口元に浮かぶ腹黒い薄ら笑いを見て、ハルは背筋に寒気が走る。

「おい、お前たち喜べ。」

ミゾノゾミ女神が、俺達の願いを聞き遂げて天から降りていらっしやっただぞ。

この中に、女神さまに慰めてほしい奴はいるかあ？」

「リ、リンの旦那あ、猫人族の娘達には手を出したら商品価値が無くなりますぜ。」

疵モノを献上したって、魔王王子や法王の目は誤魔化させませんぜ」

見るからに臆病そうな男が恐る恐る竜胆に進言すると、それを鼻で笑い、娘を抱きかかえたまま腰を引き寄せて座り込む。

「お前は、突っ込むことしか考えてないのか？」

生娘にちよつと悪戯するだけだろ。女神さまが俺達を、この可愛い小さな口や、真つ白な手や、でかい胸で慰めてくれるんだ」

竜胆の、一段声を落とした色気のある下半身直撃の悩殺ボイスは、同性にも有効だ。

娘の両脚を割り開くように男の片足を割り込ませ、細い体に似合わぬ豊満な胸を、白衣の襟を割って驚掴み、荒々しく揉みしだく。

男達の間にごよめきが起こり、ゴクリと生唾を飲み込む音に、竜胆は腹を抱えて爆笑したいのを必死で堪える。

ハルのそれは、薄桃色の肌に似た色の、サボテンの実を詰めた偽モノの爆乳なのだ。

楽しいな竜胆の芝居に付き合うハルは、声を出せずに荒い息になっってしまうのが、余計に男達をその気にさせる。

ミゾノゾミ女神と見まごう美少女を、見せつけるように鬪る半巨人の男に、周りに群がる傭兵たちに欲望と嫉妬が渦巻く。

しつかり喰いついてきたか、コレで仕掛けは十分だ。さて、ゲームの開始を告げよう。

「お前ら、俺と賭けをしないか？」

コノ、鉄の檻に何人の猫人族の娘が入るのかを当てるゲームだ。

七十二人の娘、全員が檻の中に入れば俺の勝ち、コノ娘も独り占めだ。

俺が外れて人数を正確に当てた奴に、俺の有り金全部と傭兵のリーダー、そしてコノ娘を譲ってやる」

激しい酔いと女神を思わせる娘の痴態に、傭兵たちは狂った判断しかできなくなっていた。次々と鉄の檻の扉を開き、娘達を追い立てる。

「ギャハハツ、俺は61匹に賭けるぜ。おら、外に出る、着込んだ服を脱げ」

「ああ、いい考えだな。裸にすればもつと檻の中に詰め込める。俺は68人に賭けるぜ」

男達に囃し立てられ、娘は自ら服を脱ぎ捨てて薄着で檻の中へ飛び込んでゆく。

一つの檻に娘達が押し込まれている間にも、赤毛の男に鬨られ続ける女神の化身は、剥き出しになった細く白い脚をぶるぶる震わせ、頬を染めて喘いでいる……ように見えた。

(ブブツ、ウハハツ、お、可笑しすぎる、腹筋崩壊だ!!!)

オッサンたち、騙されているとも知らずに、サボテンの実に釘付だよっ)

一つの船に娘を全員乗せるため、傭兵たちは別の船に移動する。

猫人族の娘たちは、人間より躰に柔軟性があり、小さな檻の中に次々と入って行った。

竜胆は、自分が捕らえられた娘の一人に、あることを告げていた。

全員が一つの檻に入れたなら、ココから救い出してやるぞ。

「おい、まさか」

「ウソだろ、これで七十二人全員か？」

「ちくしょう、大外れだよ」

娘たちの詰め込まれた檻の扉が閉まり、鍵が掛けられる。

「七十二人の娘全員が檻の中に入れば俺の勝ち。

約束通り、コノ娘たちは俺の独り占めだぜ」

猫人族の娘達の捕らわれた檻の上に、仁王立ちで傭兵たちを見下ろす半巨人の男。

荒くれた傭兵たちの中でも、男の力は飛びぬけて強かった。

だが今は、修羅場を潜り抜けてきた傭兵たちが、その眼光に射竦められるほどの威圧感を持つ男だった。

チャラ、チャリン、冷たい音がする

空から銀色の細い鎖が、娘達のすし詰めにされた鉄檻の上に垂れ落ちてくる。

銀の蛇が檻の上を這うように、銀の鎖が檻をがんじがらめにする。

上空で、身の毛もよだつような獣の吠声が聞こえ、船を巨大影が覆い尽くす。

男達が慌てて空を見上げると、真紅の巨大な翼をもつ魔獣ファイヤードラゴンが、ゆっくりと滑降してきた。

そして、ドラゴンの足には細い銀の鎖が結わえつけられている。

竜胆は銀の鎖を伝って魔獣の背に騎乗すると、ドラゴンは静かに上昇を始め、娘達の捕らわれた鉄籠が甲板から宙に持ち上がる。

「し、しまった、メス猫を全部連れ去られちゃう。

ヤツに騙されたんだ!？」

早く女を奪い返さねえと、俺達は全員、奴隷海賊の首領 魔王子に殺されるぞ」

傭兵たちが武器を取って、鉾や弓矢でドラゴンを攻撃するが、銀の鎖による氷の結界で全て弾き返されてしまう。

猫人族の娘たちの詰め込まれた鉄籠は、ゆっくりと静かに船から離れてゆく。

鉄檻の上に残ったハルは、腰にバンジージャンプのツタを結び付けると、恐る恐る檻の真下まで降りてきた。

腰帯の中に隠していたアイテムバッグの中から、小石を取り出して下に落とす。

その様子に、ドラゴンに騎乗した竜胆は眉をひそめる。

ハルのヤツ、何をしているんだ。また、とんでもない事を思い付いたんじゃないか？

ハルの落とした小石が、真下の船の甲板に当たるのが見えた。

再びバッグから小石を取り出すと、下に落とす。

その行動が意味のあるものだと感じ取った竜胆は、ドラゴンを上空で停止させて、ハルの様子を見守った。

ハルは中身をひっくり返すように、バッグの口を大きく開き、取り出す仕草をする。

すると、小さなアイテムバッグから、2メートル大の巨岩が飛び出す。

巨岩は、

小石と同じように、

真下の大型船の甲板に

落

ち

る。

ドラゴンの真下で、武器を振るっていた傭兵たちは悲鳴を上げた。女神の姿をした娘が、宙から巨大な岩を出現させ、船の上に落としてくるのだ。

それも、一つ二つではない。数十個の巨岩が、次々と空から降ってくる。

巨岩が船にぶつかり砕ける音と、激しい水しぶき。

岩に船首が破壊され、甲板に落ちてきた巨岩の重みで軋みながら沈む大型船。

ハルは黒岩島で、子猫が石を投げる姿を見てひらめいた。

アイテムバッグには、巨大ワニを収納することがでるなら、黒岩

島に転がっている巨岩も収納して持ち運べるはずだ。

その岩を、船の上にぶち撒ければ、重みで船は沈む。

ハルは、そこら辺に転がっている岩を片っ端からアイテムバッグの中に収納した。

アイテム容量表示は【岩石45個×12セット】その数は5百を超えていた。

傭兵たちは、大慌てで隣の船に飛び移ろうと、仲間を押しつけ小競り合いになる。

しかし、その船にも巨岩の雨が降り注ぐ。

猫人族の村を滅ぼし、娘たちを略奪した奴隷海賊。

ミゾノゾミ女神の怒りに触れた三艘の大型船は、わずか十分で、

巨岩による空爆で海の藻屑と化した。

クエスト62 雇われ傭兵と戦おう

岩山から砂浜へ続く道を、子猫達は尻尾を立てて両手両足で地を蹴り駆けてくる。

燃えるような深紅の翼の魔獣 ファイヤードラゴンは、七十二名の猫人娘の捕らえられた鉄檻をゆっくりと砂浜に降下させる。

「おい、おしゃべりは止めるよ。気を付ける、檻が揺れて舌噛むぞ」

ドラゴンを操る赤毛の若い男、半巨人の竜胆が娘達に声をかけた。狭い檻の中に詰め込まれている娘達は、素直に返事をして小鳥のさざめきの様な話し声が止む。

娘達を救い出したドラゴンが自分たちの居る黒岩島に向かっていく事に気づいた青年は、すぐ仲間の猫人族の漁師達と浜辺に降りてその一帯をうろついていた蒼牙ワニを追い払った。

ほんの一月前まで、砂浜に潜む蒼牙ワニに怯えて暮らしていたのが嘘のようだ。

普通のワニなら、漁師二人で網で絡め取り裏返し、鉗で串刺しにしてトドメを刺す。

他の漁師より力のある青年は、右手に網、左手に鉗を持って、一人で要領よく軽々とワニを仕留められるほどになっていた。

猫人族の漁師達が見守る中、娘達を乗せた檻は、ゆっくりと静かに砂浜に下ろされた。

竜胆はドラゴンの背から飛び降りると、檻の鍵を取り出し扉を開く。

猫人娘たちは、一斉に歓声を上げ檻の中から飛び出して来る。
漁師たちは、顔見知りの娘を見つけると、娘達を抱きしめ互いに泣いてなくさめる。

その中で青年は、全員無事救い出されているか人数確認をして、怪我や体調を崩した者の手当をするように命じる。

「みんな聞いて、アタシの目の前にミゾニャン女神様が現れたわ。
半巨人の男の人が奴隷海賊の船から私たちを救い出して、女神さまが空から岩の雨を降らせて、奴隷船を沈めたの」

年長の猫人娘がそう叫ぶと、皆口々に「ミゾニャン女神が現れた」と話し出す。

そういえば、娘を救い出した赤毛の男はどこだ？

鉄の檻から少し離れた浜辺の波打ち際で、今の今まで船酔いを堪えていた竜胆は、ハルに背中を擦られながら盛大にゲロっていた。

「もう二度と、ウブツ、俺は絶対、げぼっ、船に乗らな、ゲロ2g
ふじこjk」

何故か巨人族は船に乗ると酷い船酔いをする。

竜胆にとっては、傭兵として船に乗り込み、激しい船酔いに襲われ続けた地獄のような一週間だった。

吐くだけ吐いて、やっと落ち着くと、ハルが素早く水の入った水筒を差し出す。

竜胆はそれに口を付けながら立ち上がると、檻の周りにいる猫人族の中から抜け出して、右目に眼帯をした黒髪の青年が二人に近づいてきた。

青年は、右手を胸に洗練された優美なしぐさで、王族に対する独特の挨拶を行う。

「猫人族の娘達を、全員無事に救い出して頂きまして感謝します。萌黄さまから、お話は伺いました。貴方さまは 巨人族 第二十五位王子 竜胆殿下であらせられますか」

「ああ、俺は確かにそうだが、アンタは誰だ。人間の男が猫人族の代表として、俺と話をするのか？」

「私は、風香十七群島の中で唯一の聖堂を預かっている、クジラと呼ばれる漁師です。」

猫人族とか、人間とか、そして奴隷海賊も、私には関係ありません。

迫害に合い、黒岩島に逃げ込んだ者は分け隔てなく、聖堂の管理者として救うのが私の役目です」

ほう、どうやらコイツは只の田舎漁師じゃないな。

竜胆は感心したように浅黒く日に焼けた、不思議なほど印象に残らない顔立ちの青年をみた。

「それなら、さっさと娘達を安全な場所に避難させる。」

出し抜かれて怒り狂った奴隷海賊達が、もうすぐ大挙してこの島に押し掛けるぞ」

「とりあえず、僕の住んでいる洞窟に、女の子達を避難させましよう。」

と、ハルお兄ちゃんは言っています」

巫女衣装から普段の地味な姿に戻ったハルの隣で、萌黄はハルの

シャツの裾をしつかりと握りながら通訳する。

萌黄は、深緑島で敵から逃げる時にハルとはぐれてから、ずっと心細い思いをしていたのだ。

「ハルさまの住んでいらつしやる洞窟は、浜辺から近すぎて危険ではありませんか」

自分に対してすっかり敬語で話す青年に、ハルは少し困った表情をしながら、付いてくるようにゼスチャーをする。

「僕の洞窟には、強い守護者がいるから、大丈夫だよ。

と、ハルお兄ちゃんは言ってます」

浜辺を見下ろす洞窟まで、ほんの数分でたどり着いた。

洞窟の中に入ると、手触りの良い分厚いコケが絨毯のように敷き詰められた広い空間があった。

暖かな七色の光を放つ紙細工の鳥が、洞窟の中を明るく照らし、薄着の猫人娘たちも快適に過ごせそうだ。

そして、洞窟の入り口に鎮座する守護者とは……

「確かに、この聖獣なら奴隷海賊を寄せ付けないだろうが、コイツは本当にユニコーンか？まるで牛じゃないか」

清らかな乙女を守護するユニコーンは、竜胆に向かって威嚇の鼻息を上げる。

その姿は、太く逞しい四肢に燃えるような蒼い魔力を立ち上らせ、天を貫くような太く鋭い角で相手を圧倒する。

以前のポニーのような可憐で華奢な体型から巨大馬、まるで牛の

ような雄々しく逞しい体型になったユニコーンがいた。

「死にかけていたユニコーンに蒼珠を食べさせたら、どんどん怪我が回復したんですよ。」

ユニコーンがとても美味しそうに蒼珠を食べるものだから、ちょっと与えすぎちゃいました。と、ハルお兄ちゃんは言っています」

いくらなんでも、倍のサイズになるまで食わすなんて太らせすぎだろ。

しかもこのユニコーンは、ライバル心剥き出しで俺を威嚇してくるぞ。

竜胆はため息を付いて、ユニコーンに頭をガブガブ甘噛みされながら笑うハルに一言告げる。

「おいハル、それはユニコーンの求愛行動だ。」

もしお前が女で、これだけ長い間ユニコーンと一緒にいたら、今頃ユニコーンの子を孕んでもおかしくないぞ」

竜胆の言葉に、ハルの笑顔が凍り付いた。

そして二人の会話を理解したのか、ユニコーンは低く嘶いて前足で地面を叩く。

そこへ、洞窟の中の様子を確認してきた青年が顔を出す。

「この洞窟の中なら、娘たちも充分安全に過ごせそうですね。」

おや、どうしました。ああ、これがハルさまのユニコーンですか」

竜胆とにらみ合っていたユニコーンが、突如青年の声に反応する。首を巡らし眼帯姿の青年を探し出すと、激しく威嚇していたのが嘘のように大人しくなり、そして、天を向いていた角を地面に突く

ほど頭を下げ、両膝を下り、青年の前で服従の体勢になった。

霊峰女神神殿の聖騎士付きのユニコーンが膝を折る相手など、その長たる法王以外存在しないはず。

青年は不思議そうに、淡雪ユニコーンの角を撫でる。

その様子に竜胆は驚いていたが、ハルは今までの自分の予感が正しかったと確信した。

すべてはクエストという名で、終焉世界が指し示す運命に導かれていたのだ。

法王 白藍の魂は、違法BOTと呼ばれる神科学種の青年の器に宿っていた。

竜胆も薄々と感じ取ったらしい、二人は黙って青年と甘えるユニコーンの様子を見つめていた。

しかし突如、浜辺を監視していた漁師の、敵襲を知らせる指笛が鳴り響く。

人間の視界では、まだその姿を捉えられないが、遠目の利く猫人族はいち早く敵を発見できる。

竜胆は青年に向き直ると、強い口調で問いかけた。

「アンタに娘達を任せたい。

救い出した娘達を、猫人族の男だけで守れるか？」

竜胆の言葉に、青年は笑顔で答える。

「一月前でしたら、奴隷海賊相手にするなど、恐ろしくて考えられませんでした。

しかし今は、我々はハルさまのおかげで、蒼牙ワニを倒せるだけ戦えるのです」

「ハルのおかげとは、どういう意味だ？」

「ハルさまが、蒼牙ワニの牙”蒼珠”が欲しいと言われたのですよ。最初無謀な話だと思ったのですが、コツさえつかめれば動きの鈍いワニは狩りやすい。

しかも、蒼牙ワニの丈夫な鱗皮やワニ骨、美味しいワニ肉が手に入り、港町に出せばよい値段で取引される。

獰猛なワニ相手ですが、危険を冒してでも狩るだけの価値はあります」

漁師たちの蒼牙ワニ狩りは、そのまま戦闘訓練になっていたのだ。しかも、捕らわれて傷ついた娘達を目の前で見た猫人族漁師たちは、雇われ傭兵や奴隸海賊たちを前にしても怯むことはないだろう。

そして竜胆の言わんとしている事を読み取ったかのように、聖人めいた雰囲気から逞しい海の男に眼の色を変えた青年はキツパリと断言する。

「巨大蒼牙ワニと比べれば、取るに足らない弱い相手だ」

黒岩島の浜辺にたどり着いたのは、三人の傭兵に船を操る二人の奴隸海賊だった。

奴隸海賊は、浜辺に潜む蒼牙ワニを恐れて船から下りようとしな

い。

「なにい、ワニが怖いだと。この腰抜けどもめ!!
たかがワニの一匹や二匹、俺たちが切り刻んでやる。」

あの岩山に猫人娘が逃げ込んでいるんだ。ほかの奴らを出し抜いて、俺たちが一番にメス猫を捕り放題できるんだぞ」

傭兵のリーダーらしいスキンヘッドに入れ墨をした男は、奴隷海賊たちを大声で罵ると、小太りの男とモヒカン頭の若い男達は、船から下りて白い砂浜を歩く。

視線の先には、空になった鉄檻が砂の上に置かれているのが見えた。

「ハハハッ、頭の悪い猫どもは、手がかりを残したまま逃げ出したみたいだな。」

「砂の上の足跡をたどれば、隠れ場所もすぐ見つかるぞ」

娘たちの居場所を示す、砂の上に残された足跡を追って、傭兵たちは奇声を上げながら走り出す。

白い砂の上、岩影の裏に続く足跡の先で傭兵たちが見たモノは……

目の前に数十匹の、蒼牙ワニがコロニーを作っていた。

そしてワニの体には数本の矢が刺さり、瞳を赤く染め憤怒状態になったいる。

ゴキゴキガリッ バリバリッ

血のにおいと骨をかみ砕く音、男たちより一足早く、この場所におびき寄せられた傭兵がワニに食われている姿が見えた。

手前の三メートル超の巨大蒼牙ワニが、ゆっくりとスキンヘッド男に近づいてくる。

男は震えながらも背中に担いだ鉄の大剣を構えると、動きの鈍いワニの頭部に降り下ろした。

「お、脅かすんじゃないよ。こんなワニごとき、俺の剣で切り刻ん」

スキンヘッド男の言葉は続かなかった。

ワニの頭に当たった大剣は簡単にポキリと折れて、次の瞬間鋭い牙が男は腸を喰いちぎり、リーダーが目の前でワニに襲われる姿を見て、二人は悲鳴を上げてその場から逃げ出す。

浜辺で待っているはずの、自分たちが乗ってきた船の姿は見えない。奴隷海賊は先に逃げ出して置き去りにされたのだ。

小太りの男は、足の速い小さなワニに追いつかれ足を噛まれて倒される。

振り返ることもせず仲間も見捨てて、モヒカン男は逃げ場所を探す。

浜辺にポツンと置かれた空の鉄檻が見える。

男は後ろに迫るワニから必死で逃れ、檻の中に飛び込むと扉を閉めた。

「ハアハアハア、なんとか逃げきった、ここならワニに襲われる心配な、いぞ……」

モヒカン頭の傭兵の目の前に、いつの間にか現れた眼帯をした男が、閉めた鉄檻の扉を開け放った。

すぐ後ろまで、鋭い牙をガチガチと鳴らしながら目を血走らせて迫ってくる蒼牙ワニ。

男は右手に持った網を、自分と同じ大きさの蒼牙ワニに向かって投げつけ絡め捕る。

そのワニの口を両手で締め上げて抑え込むと、生かしたまま檻の扉の正面に立つ。

「今からこのワニを檻の中に入れるぞ。」

傭兵のお前と蒼牙ワニと、どっちが強いか見てみたいな」

「ひいひいっ、や、やめろお！！た、助けてくれ、食い殺されちまう。」

武器は捨てるからっ、降参だ、捕虜になる。助けてくれ」

ふと上を見ると、浜辺の後ろ、岩山の上から弓を構えて自分に狙いを定める猫人族の姿が見えた。

男は慌てふためいて、自分の手にしていた武器を投げ捨て、両手を上に挙げる。

雇われ傭兵たちは、互いに連絡を取り合うという事をしないため、同じ罠に次々と嵌り、人数の半分がワニに襲われ餌になった。

そして鉄檻に逃げ込んだ傭兵が三十人以上、情けない姿をさらしたままファイヤードラゴンに運ばれて、バンジージャンプ台に鉄檻をぶら下げられることになる。

黒岩島の砂浜で雇われ傭兵たちが畏に嵌まり、蒼牙ワニの餌食になっていた頃、海の上でも新たな戦闘が起こっていた。

奴隷海賊と雇われ傭兵たちは、深緑島の村にいる娘たちを強奪し村を焼き滅ぼす。

ここまでは計画通りだった。

しかし傭兵のリーダーを任されていたハーフ巨人の男が裏切り、猫人娘達の入った鉄檻をドラゴンを使って掠め取った。

そして信じられないことに伝説の女神そっくりの猫人娘が、宙から巨岩を出現させ、奴隷海賊船を岩の雨で押し潰して沈めた。

男は海賊船から海に投げ出されたところで、運良く木切れに掴まり、半分溺れながら波間を漂っている。

海の中には、鮮やかな赤い背びれの10メートル台の巨大紅鬼サメが五匹、餌を求めて回遊している。

数時間前まで、男の他に数人が生きて泳いで居たはずだが、今はその姿も見えない。

なんとかサメから逃れようと足掻く男の前に、沖から三艘の大型船が現れた。

「おーいいい、助けてくれ。」

空から岩が降ってきて、俺の乗っていた船が沈んじまった。

チクシヨウ、女どもは黒岩の島に逃げこんだぞ。

あの半巨人男にメス猫達も、捕まえたらヒドい目に遭わせてやる。早く助けてくれ」

大型船の甲板にいる傭兵達は、げらげら笑いながら、荒波の中を必死で助けを求める男に返事をした。

「ひひっ、空から岩が降ってきただとお。貴様は酔って幻でも見たんだろ。」

俺たちは、お前を助けている暇なんてネエんだよ」

裏家業の雇われ傭兵達は、互いに相手の獲物をかすめ取るなど日常茶判事だ。

遭難した男を助けようとする者は一人もない。

罵り声をあげる男を笑いながら、甲板の上で眺める雇われ傭兵達の頭上を、黒い影がよぎる。

こっん

雲一つない空から、小石が一つ降ってきた。

こっん こっん

船の甲板に落ちた石は、大きく飛び跳ねて海に落ちる。

波間を漂っていた男が、船から離れようと顔を蒼白にしながら、両足をばたつかせる。

なんだ？

甲板にいた傭兵達が天を仰ぐと、黒い石の雨が降ってくる。

ただそれは、小石ではなく、両手で抱えきれないほど大きな岩の固まりだった。

慌てて進路を変えて逃げる大型船を追うように、岩の雨が降り注

ぐ。

巨岩が船にぶつかり、船体が粉々に破壊される轟音と水柱があがる。

青年と猫人族漁師たちに島での戦闘は任せ、竜胆は沖にいる大型船を攻撃するために、ドラゴンに飛び乗った。

大型船への攻撃は、船に乗り込んで直接破壊するかドラゴンのフアイヤープレスで焼き払う事を考えていた。

しかしハルの行った、アイテムバッグに収納した巨岩を船の上に落とすという無慈悲で情け容赦のない方法なら、簡単に船を沈めることが出来る。

神科学種の母親の血を受け継ぐ『魔力持ち^{マナ}』の竜胆は、ハルのアイテムバッグを扱えるのだ。

隣の船の帆柱によじ登り空を見た男は、まがまがしい紅い翼のドラゴンの背に巨体の悪魔の姿を見た。

空の星は、地上に落ちると岩になると言う話を聞いたことがある。これは、天罰だ。奴隷海賊たちの行為にミゾノゾミ女神が怒り狂い、天の星を降らしているのだ。

その様子を啞然と眺めている男の居る帆柱にも、星が落ちてきた。

木っ端微塵になった二艘の船の残骸の合間を縫って、紅鬼サメが泳ぎ回り、所々で海の中から悲鳴のような声は聞こえてくる。

それを無視して、竜胆は残る一艘の大型船の真上にドラゴンを待機させる。

船のマストには紺色の長い布がなびき、甲板に飛び降りた竜胆の周りに集まった奴隷海賊は皆、紺色のターバンやハチマキを頭に巻いていた。

「リンの旦那、いや、竜胆王子。雇われ傭兵達は全員船底に閉じこめました。」

ココにいる連中は全員猫人族の味方、反乱海賊です。これから俺たちも、奴隷海賊と戦いますぜ」

竜胆にそう告げる中年過ぎの瘦男は、八年前廃王子の口車に乗せられて風香十七群島にやってきた。

だが、廃王子は海賊首領を名乗りながら船に酔う、噂では泳げないらしい、船に閉じこもったまま外に出てこない。

手下を使って冷酷な命令だけを出す奴隷海賊首領の廃王子に、愛想を尽かしていた。

瘦男の日々の暮らしは漁師と変わりない。いや、廃王子に搾取され、奴隷という身分では猫人族以下ではないか。

そして「猫人族娘を百五十人捕らえろ」という命令を受けたとき現れた、巨漢の若い男。

瘦男独自の情報網では、台風に襲われた港町で住人を手助けしていたハーフ巨人が、実は暴力王の息子、神科学種の血を引く末席の王子である。

オアシスでの女神降臨と鳳凰小都の聖人出現に関わり、密やかに

次期巨人王後継者にふさわしいと噂される王子。

噂はガセネタか真実か？

目の前に現れた竜胆の姿に、瘦男はあっさりと奴隷海賊首領を見限った。

「やつらは娘を食いものにするために、わざわざ風香十七群島まで出稼ぎにきた、人の姿をした飢えた獣だ。抵抗する奴を生かしておく必要はない、サメの餌にでもするといい」

そう告げる竜胆に、禿頭を紺色のターバンで隠した瘦男は黙って頷くと、銚を手仲間を連れて小舟に乗り込む。

小型船での海賊同士のバトルは、銚の先に蒼牙ワニの牙を仕込んだ武器を反乱海賊たちに竜胆が与え、ほとんど防具を身につけない奴隷海賊たちは、その武器の威力に次々と敗れる。

また戦闘に加わらず中立の立場の奴隷海賊には、上空から小石を一つ二つ船に落としてやれば、恐れ戦いて反乱海賊側にあっさりと寝返った。

日没前には、深緑島と黒岩島周辺にいた奴隷海賊船は、殆ど海の藻屑と化した。

そして、夜の闇にまぎれて黒岩島に上陸しようとした愚か者たちは、本来夜行性の蒼牙ワニに襲われ、夜目のきく猫人族の放った矢の雨に貫かれた。

夜半過ぎ、約束通りハルを迎えにきたティダとSENが黒岩島に

到着した頃には、この一帯での戦闘は終結していた。

「着いたぞネコミミパラダイス、天がこの世に造りし楽園。妖艶にて可憐、美しい獣人の娘達が我を待って」

ドカバキツバキツ！！ キラーン

黒岩島にドラゴンで降り立った途端、うわ言のように電波語を発信し続けたSENは、乙女を守護するユニコーンの後ろ足で、高々と蹴られお星様になる。

ハルが送りつけた大量の猫人娘画像は、島に向かう二人を、特にSENを悶絶状態にしていた。

沖に出て海上戦を続ける竜胆は、まだ島に戻って来ていない。

蹴飛ばされたSENを捨て置いて、息をのむような美しい銀髪の優美な姿をしたエルフが、その場に集まった猫人族を見渡すと告げた。

「我々は、巨人王の使者であり神科学種のSENとティダといいます。

奪われた神科学種の仲間を取り戻すために、鳳凰小都からこの地へ来ました。

ハルちゃんは何処にいますか？」

猫人族の間で緊張が流れている。

ハルはこの島に来て、彼らに様々な豊穡を与え、今も奴隷海賊たちとの戦いに加わっている。

仲間の神科学種が現れたというコトは、ハルは風香十七群島から去ってしまう。

「これは赤い右目の神科学種さま。

ハルさまでしたら、浜辺を見下ろす岩山に陣取り、娘達に弓の扱いを教えてください」

黒髪に眼帯をした硬い表情の青年が、ティダの前に進み出た。

ティダは青年をチラリと見て、冷静さを取り戻した背後のSENに目配せする。

SENの赤い右目を起動して相手のキャラデータを確認、元は神科学種マザキの違法BOT、それに異なる魂が埋め込まれている

終焉世界でも随一の『祝福』を宿す、法王 白藍だった魂モノ。

「その様子なら、ハルが何者であるか、もう知っているのだろうか」

「はい、神科学種さま。ハル様はミゾノゾミ女神自身、もしくはその憑代でしょう。

女神を我がモノにしたい、猫人族の聖騎士の女に攫われて、この地に来たのですね。

ハルさまに拒まれて、私はその女を見たことはありませんが」

青年の言葉に、SENとティダは意外そうに驚いた顔を見合わせる。

聖騎士の娘は、法王 白藍を探すためにハルを攫ったはず。

しかし、これほど近くにいながら、娘と青年は互いにまだ出会っていない。

それは、終焉世界のクエストシナリオがまだクリアされていない

という意味だ。

チツ、思わずティダは舌打ちをした。

港町エリアを出てハルを探そうとすると、ソレを足止めするよう厄介ごとに次々巻き込まれた。

とにかく、今はハルちゃんの無事な姿を確認したい。

青年の案内で、浜辺の見える岩山へ向かうティダの脚は自然に早くなった。

多くの猫人族たちが潜んでいるであろう岩山の一角が、ほんのりと明るくなっていた。

周囲に七色の光を放つ紙細工の鳥を飛ばして、敵を引き付ける囮役の青い髪の少年。

その光に誘われ浜辺を離れ、岩山に登ろうとする蒼牙ワニを狙い、ハルは黒い小弓の弦を引き絞り二本の矢を同時に放つ。

頭部に二本の矢が射られ岩山を転げ落ちるワニに、猫人族の娘と漁師たちはハルを手本に、弓を番える練習をしていた。

夜目の利く猫人族に、弓は最適の武器だ。

奴隷海賊たちとの戦いでは、八人が横並びで一斉に矢を放ち、十本射ったところで後ろと入れ替わる。

敵の姿が見えれば、数分間絶え間なく矢の雨が降り、敵を剣山状態にした。

「あつ、お久しぶり。ティダさんSENさん!!」

と、ハルお兄ちゃんが言っています」

まるで変わらない、いつも通りに笑いかけるハル。その隣には萌黄は付き添っている。

ティダは表情を消し黙ったままハルの傍まで歩き、一息深呼吸をすると口を開く。

「やあハルちゃん、久しぶり。

ねえ、確かハルちゃんには、むやみに動き回らない危険な事はないと約束したよね。これはどういう事かな」

怒りの黒いオーラを放ちながら隣に立つティダに、ハルは一瞬何のことか思い出せずキョトンと上目づかいで見上げている。

それからやっと思いついたのか、顔面蒼白になり両手を合わせて頭を下げ謝り倒す。

確かに自分は竜胆に過保護すぎると言われる訳だ。この一週間無事であるか、夜も寝れずに心配した相手は、サバイバルライフをエンジョイしていたのだから。

怒りを通り越して、虚脱感に襲われるティダを横目に、SENがハルに話しかける。

「ハル、その黒い弓はどうした。かなり激レアな、俺でも見たことのない弓だ」

「これは、クジラ兄さん（下に）の捕まえたワニの胃から出て来たんです。

スゴイ性能が良くって、なんと二本打ちが出来るんですよ！！

と、ハルお兄ちゃんは言っています」

そしてハルは、二人の目の前で試し打ちをするため、ゆったりとした美しい射姿で弓を引き絞り矢を放つ。

的は70メートル先に飛ばした小さな折ツルの、左右を羽根を二本の矢が貫いた。

ティダは以前から微かに疑問に思っていた事だが、やはり気になった。

素人目で見ても、ハルが言う師匠の真似をした付け刃とは思えない、見事な弓の腕を持っている。

「ハルちゃんは弓道部の補欠だって言っていたけど、ちゃんと公式戦に出たことある？」

ティダの質問に、ハルは少し嬉しそうな顔をして答える。

「最後の大会で準決勝に出してもらえて、ちゃんと勝ちましたよ。決勝はさすがに控えだったけど。ああ、その試合を皇族方が見学にいらしてました。」

と、ハルお兄ちゃんは言っています」

「えっ、まさかハルちゃん、皇族方がご覧になる大会行事って全国高校インターハイだね。決勝戦まで進んだとなると……」

「ティダ、ハルは全国二位チームの準レギュラーで、高校トップチームの指導者から、直接弓の腕を鍛え磨かれている。」

本人がマネージャーみたいなポジションだったと言っているのは、副部長の仕事だ」

フォローするようなSENの呟きに、ティダは呆気にとられる。

ハルの扱う『赤い女神の和弓』と『黒い小弓』は、廃ゲームアのSENすら見たことのない激レアアイテム、いや、ハルのためだけに出現したアイテムかもしれない。

そして弓のゲームスキルをカンストするのに何時間必要だろうと、

ハルのリアルスキルは、それを遙かに上回る。

ミゾノゾミ、ここではミゾニャン女神が風香十七群島にもたらした豊穰とは、猫人族に弓の扱いを教える、弓射技術そのものだった。

クエスト63

『赤い女神の和弓』と『黒い小弓』（後書き）

部活動ネタは色々な体験談が紛れ込んでます。

インターハイネタは、ボランティアで参加した大会に皇族方がいらしたとか、

補欠だけど副部長だったとか、

まさか、母校が甲子園2連覇するとは思わなかったとか。

クエスト64 海賊王宮

> i 3 3 4 5 9 — 1 9 6 9 <

風香十七群島の、十八番目の奴隷海賊船島。

砂の浅瀬に乗り上げさせ、何艘もの大型船を繋ぎ合わせた中心に巨人王族用の豪華客船だった船がある。

別名 海賊王宮 奴隷海賊首領 第十一位廃王子 砂磁^{サジ}が住んでいる。

その船内にある一級の調度品は、埃にまみれ汚れがこびり付き、毛の長い青い絨毯も汚れた土足で踏みつぶされ擦り切れている。

海賊王宮の大広間で、キツネ顔の男はこめかみに青筋を浮かべながら、部下から黒岩島で起こった事件の報告を聞いていた。

「南天さま、も、申し上げます。

深緑島の猫人族の村から奪った、メス猫七十二匹に逃げられました。

手引きした赤髪の傭兵と共に黒岩島に逃げ込み、後を追った俺達は畏にはまり、蒼牙ワニに三十人以上が襲われ喰われました」

「な、なんだと!？」

たかが猫人ごとき下級種族相手に、雇われ傭兵が殺されたというのか」

「ワニから逃げ延びた傭兵たちも、潜んでいた猫人族の弓矢攻撃を受け、大勢の傭兵が負傷して捕らわれました」

そう怯えながら報告する男の言葉の終わらぬうちに、続いて全身

ずぶ濡れの男たちが飛び込んでくる。

二人の男は目を血走らせ、口から泡を吐き錯乱状態で叫ぶ。

「ミゾノゾミ女神の怒りだ、天罰が下ったああ!!」

血濡れた真紅のドラゴンにい、赤い髪の悪魔が騎乗してるのを俺は見た。

捕らえた娘たちの中に、ミゾノゾミ女神が紛れ込んでいた。」

「女神は怒り狂い、空から岩の雨を降らして船を沈めた。

俺たちの船も他の船も、沖にいた大型船五艘は全部破壊されて海の藻屑だ」

その錯乱した騒ぎに、周囲の人間は啞然として見ていたが、頭の切れるキツネ顔の男は話の意味を素早く読みとった。

ドラゴンに乗った赤髪の男、自分が傭兵のリーダーに指名した、リンと名乗る半巨人。

自分が留守中に、リンは言葉巧みにバカな傭兵どもを騙し、猫人娘を横取りしたのだ。

「それで貴様等は、俺にわざわざ命乞いをするために、ココに来たというのか。

ミゾノゾミ女神が現れただと?

空から岩が降って来ただと?

そんなバカな話、この俺が信じると思っているのか」

いらだつが募るキツネ男の声が大きくなり、神だ天罰だと讒言のように叫び続ける男に向けてレイピアを抜く。

危険を知らせようと、命懸けで海賊王宮に辿り着いた男の喉を、レイピアは深々と貫いた。

キツネ顔の男 南天は、頭に血が上り、ココが何処で自分が誰と面談するために居るのかを、すっかり忘れ去っていた。

「今の話、どうやら傭兵の中に、巨人王のネズミが入り込んでいたようだな」

キツネ男の背後から巨大な影と、野太く暗い声が響きわたる。歯をむき出して、部下を怒鳴り散らしていた南天の顔面が蒼白になった。

「こ、これは奴隷海賊首領 第十一位王子 砂磁^{サジ}さま。

見苦しいトコロをお見せしました。実はコイツ等が猫人娘を逃がしてしまったのです。

でも、ご心配には及びません。

私、南天が直々に、メス猫どもを取り戻して参ります」

巨人王に謀反を起こし、廃王子となった第十一位王子 砂磁^{サジ}。

年まだ四十前だが既に五十過ぎた老け顔で、活力のない死んだ魚のような目に、口元は歪んだ笑みを浮かべている。

「お前が話していた半巨人の赤毛の若い男、その情報は紫苑^{サジ}から入ってきている。

オアシスで起こった女神降臨の噂を知っているか？

その場にいた末席の王子は、半巨人の赤毛だったそうだ」

「はい、存じております。

全域転送魔法陣が壊れ、一年間オアシスに閉じこめられていた王子が、砂漠竜を倒しミゾノゾミ女神降臨に立ち会ったとか。

しかしそれは、ただの噂話でしょう……まさか、まさか砂磁^{サジ}さま」

キツネ顔の男の主、目の前にいる白髪交じりの赤髪の王子が、肩を震わせ狂ったように笑い出す。

次期 巨人王に一番ふさわしいと言われていた自分が、弟の裏切りに会い、奴隷海賊の首領という肩書きの、実は流刑地の罪人のように朽ち果てようとしている。

ところが、降って湧いたようなチャンスが訪れ、霊峰女神神殿の法王の後ろ盾と十七位王子紫苑の持つエルフ族の秘術を得た。

巨人王の手下の末席王子、自分を裏切り監視している双子の弟第十二位王子 青磁、二人の王子を屠つてやる。

「雇われ傭兵の中に裏切り者がいるように、猫人族漁師の中にも裏切り者が紛れ込んでいるのだ。

バカな連中だ。苦勞して救い出したメス猫を、再び奪われる事になるのだから」

廃王子 砂磁サジの死んだ魚のような目が、ギラギラした獯猛サジな肉食獣の、いや、それよりも狂気を帯びた色に変わった。

夜半過ぎに、ドラゴンに乗って現れた二人の神科学種。

黒岩島の小さな聖堂に場所を移し、ティダとSENはこれまでの詳しい経緯を、青年と猫人族漁師たちに伝える。

その席にハルの姿はない。

戦いの気配と血の匂いを嫌い、興奮する聖獣ユニコーンをなだめるようにと、意図的に席を外させたのだ。

黒衣に黒髪、研ぎすまされた刀のような、赤い右目の神科学種の男が、漁師たちを前に口を開く。

「我々神科学種は、干ばつと悪政のオアシス、欲望と貧困の鳳凰小都を、ミゾノゾミ女神と共に豊穡へと導いた。

それは救いを求める民の声に答えた行為。

しかし霊峰女神神殿の法王は、女神降臨が自分の与り知らぬところで行われた事に激怒した。

そして、自らの意のままになる女神モドキを創り出すために、禁術の素材となる猫人娘の生け贄を欲している」

「えっ、その話はおかしい、待つてください！！」

法王は、ミゾノゾミ女神と神科学種さまの終焉世界への降臨を、手助けする一番の僕として仕える存在です」

「もし女神や我々より、法王の魔力が強いたらどうする。

二年前に強大な魔力を得た法王が、自分より劣る者に大人しく僕として従うか？

はつきり言おう、力だけなら霊峰女神神殿の法王が我々より上だ。ただしヤツは、終焉世界に何一つ豊穡をもたらさない。

そしてお前たちは、弱く力無き者が豊穡をもたらす事を、今実感しているはずだ」

猫人族漁師の間からざわめきと、ハルの名前を呼ぶ声が聞こえる。SENは予想通りというか、前にも似たような出来事を体験していた。

ハルによって猫人族も、すでに食べ物や様々な出来事で、きつちり餌付け済みなのだ。

「そう、豊穰をもたらすハルちゃんは弱い。法王アマザキに狙われれば全く相手にならない。だから一刻も早く、ハルちゃんを危険の及ばない安全な場所に保護する。」

もちろん私たちは、あなた方猫人族を見捨てたりしない。」

コクウ港町エリア海上警備艇の船団が風香十七群島に向かっていくし、神科学種は奴隷海賊と戦い、猫人娘を全員救うと約束する」

銀の髪为天女のような神科学種は、相手を説き伏せ納得させるように、一人びとりの顔を見渡しながらかしめる。

しかし、ついさつきまでハルから弓の扱い方の手ほどきを受けていた漁師からは、不満の聲が挙がった。

それを青年が押さえると、ティダの前へ歩み出て深々と頭を下げた。

「どうぞハルさまを、安全な場所へ連れて行ってください。」

俺の弟を、ハルさまは命がけて助けて下さいました。

我々に、蒼牙ワニや奴隷海賊と戦う術を教えてくださいましたのもハルさまです。

俺は、その御恩に報いたいと思います」

迷いのない澄みきった目で二人に答える青年に、ティダとSENの方が気圧される。

今はまだ、アマザキにハルの存在は知られていない。

とにかく一刻も早く、ハルを王の影の庇護の元、ハクロ王都に連れていこう。

と、そこへ猫人族の六つ子が、悲鳴を上げながら聖堂に飛び込んできた。

「クジラ兄、大変だあ」

「牛みたいな大きな馬が、暴れてハル神さまの服をくわえて、攫って逃げたよ!!」

「びゅーんと空を飛んで、隣の青紫島の方に行っちゃった」

「な、なんだつてえ!!」

それは終焉世界の理。

定められたクエストの途中離脱は認められないのだった。

青紫島に住む猫人族は、数名の漁師と深緑島から逃げてきた猫人娘数名。

小さな畑と森での果実や蜂蜜の収穫、そして売店で酒を売って生計を立てていた。

その売店に一週間前から、白と名乗る猫人娘が手伝いに来ていた。眉上と肩先で綺麗に切りそろえられた黒髪に、形の良い真っ白なネコ耳。

整った美しい顔立ちに品のある立ち振る舞い。

それでいて、重い大量の商品を軽々と持ち運ぶ力持ちだ。

白を雇った妊婦の若い娘は、まるで妹のように彼女になついていた。た。

彼女は自ら進んで、大きなお腹をしている娘の世話と、店を訪れる客の相手をする。

しかし彼女の本当の目的は、法王 白藍の、魂の行方を知る黒髪

の神科学種を探し出すことにあった。

その日、彼女は痩せた奴隷海賊の男に武器を渡され忠告を受けた。

「隣の島の、聖堂へ逃げろ」

しかし夜になると、妊娠した娘の腹痛がひどくなり、とても動かせない状態では無くなった。

まだ出産には半月早いらしい。

彼女は一晩看病して、夜明け頃には娘の状態も落ち着き、ホッと安心して水を汲みに外へ出た。

青紫島の高台の小屋からは海が見渡せ、その眼下に広がる光景に啞然とする。

「昨日、奴隷海賊の男が言っていたのはコノ事だったのね」

小さな黒岩島を挟んで位置する深緑島に、今まで見たことのないほど大量の奴隷海賊船が押し寄せている。

その場で立ち尽くす彼女と同じように、島の住人も絶句としたまま海を眺めている。

「ハクさん、恐いよ。あんなに沢山の海賊船に襲われたら、アタシたち助からない」

腹の痛みが収まり、体を起こせるようになった身重の娘も、窓の外に見える景色に怯えていた。

「だ、大丈夫さあ。いつもの猫人娘の奴隷を買いに来た奴隷海賊連

中だ。

俺たちとは無関係だよ」

誰かが大声で、なんとか安心しようと言葉を発し、それに同意しあう島の住人。

しかしコノ時すでに、住民の中に裏切り者が居たのだ。

クエスト65 青紫島攻防

青紫島は、島が垂直に隆起したような円柱の上部に平地と森がある、奇妙な形の島だ。切り立った岸壁の岩の色は青紫で、その色素の影響なのか、森の木々も花も明るい青紫色をしている。

その岸壁から一カ所に設置された船着き場から、段差の大きい岩の階段が上に登る唯一の方法だ。

元からの島の住人である、猫人族長老と呼ばれる老人と中年の漁師の他に、聖堂に拾われた子猫が漁師として独立して島に住みだして、そこに深緑島から聖堂に逃げ込んだ娘が加わり、現在は二十人ほどが青紫島に住んでいる。

猫人族の若い男女が家庭を築き、少しずつ村の形が出来上がりつつあった。

その日、青紫島の住人は成す術もなく、ただ海の方こうで繰り広げられる戦闘を眺めていた。

深緑島から大勢の猫人娘が連れ去られ、島丸ごと火を放たれるのを見た。

「おい、このままじゃ俺たちも危ないぞ。

男達は、岸壁の階段から島に上ってくる敵の攻撃に備える。

女はみんな、森の中の大樹の中に隠れるんだ」

漁師の中で、一番先輩格に当たる男が、他の若い漁師を集めて海へ降りる岸壁の階段周囲を警備する。ワニ狩りの最中に怪我をしたという漁師の男が、女たちを守りながら森の中へ避難していった。

「あ、アンタ白^{ハク}さんだったな。

ココは危ないぞ、女たちと一緒に森の中に隠れる」

「ええ、そうしたいのですが、臨月に当たるモモの腹痛が酷くて、今は無理に動かせないので。」

私も腕に覚えがありますから、男の人たちと一緒に、奴隷海賊と戦います」

島を攻めてくる奴隷海賊の中に、もしかしたら彼女の探している黒髪で赤眼の男がいるかもしれない。

そう思うと、沸々と闘争心が湧いてくる。

彼女は手慣れた様子で、腰に巻いたエプロンの下に隠していた半月刀を持ち、空を切るように数回振ってみせる。

眼にも止まらぬ速さの鋭い太刀裁きに、漁師たちは思わず声をあげた。

「こりゃ心強いや。俺たちも最近は蒼牙ワニ相手に鍛えてきたんだが、アンタ武器を扱いなれている。実力は、俺らより上みたいだな」

戦いに備える青紫島の漁師たちは、互いに声を掛けあい気合を入れる。

「そうさ、これ以上奴隷海賊たちを好き放題させないぞ。」

奴らを、島に一步も踏み入れさせるもんか」

だが、島への入り口はそこ一カ所ではなかった。

若い漁師たちの知らない、島の秘密の抜け道があり、裏切り者はそこに潜んでいた。

潮の満ちた洞窟の中で、わずかに水の上に出た岩に腰掛けた居た男は、苛立たしげに毒づいた。

「ただの包丁を触っただけで、なにが呪いだつ。あんな人間のガキが女神の使いだと!!」

クジラ野郎め、皆の前でこの俺に大恥をかかせやがって」

この猫人族の三十過ぎの男は、上下の地位がはつきりしている猫人族の中で、若い漁師の次期リーダーを任されていた。

だが、欲深い性格の男は、年下の漁師を自分に服従させようと容赦なくいびり倒し、縄張りを主張して漁かをかすめ取る。

ある日、男は深緑島で見かけた小柄で愛らしい顔をした娘を気に入り、村長から買い取って奴隷にすることを考えついた。

しかしすぐに、男の惚れた娘が下っ端漁師とかけおちをして、聖堂へ逃げこんだ事を知る。二人を助けたのは、聖堂に住み着いた人間の男。

この人間が、若い漁師たちに慕われるようになり、リーダーとして自分を押しつけて猫人族長老に認められる。

海が豊漁続きなのは、記憶のない人間の男が、実は白波クジラの化身だと言うのだ。

俺の女を奪った下っ端も、なにも知らずデカイ腹で俺の目の前をうろつく尻軽女も、リーダー気取りで俺を偉そうに指図するアノ人間も、みんな憎いつ、全員滅ぼしてやる。

男は、奴隷海賊から「猫人娘の乙女を霊峰女神神殿が高値で買い

取る」という話を聞いていた。

数人の娘を捕らえれば、しばらく遊んで暮らせるだけの金が手に入る。他の連中が深緑島の猫人娘に気を取られている間に、俺は楽して獲物を手に入れよう。

すでに奴隷海賊の上の連中とは話が付いていた。

男は潜んでいる岸壁の岩の裂け目から、伝達鳥を空へと放つと、洞穴の入り口を塞いでいる岩を一つのける。

積み重ねられた岩が、ガラガラと音を立てて崩れさり、外の海へと続く穴が現れた。

昼間の今は満潮で、洞窟入り口は水に浸かっているが、夕方の干潮時刻には、穴は小舟が通れるほどの大きさになるのだ。

「そついえば、アノ女が連れてきた美人は俺が貰おう。

気位高そうな娘を調教するのは楽しそうだ」

暗い洞穴に外の光が射し込む美しい風景の中、男はゆがんだ笑いを浮かべていた。

昼過ぎから、海の様子は一変していた。

遠目の利く猫人族は、その様子をすべて見て取れた。

次々と岩の雨を降らすドラゴンによって、沖の大型船は沈没していった。

黒岩島に押し掛ける雇われ傭兵たちが、白い砂浜の上でワニに襲われている姿が見え、小舟に乗った奴隷海賊同士で戦闘をしているようだ。

青紫島の船着き場にも、肉を撒き餌におびき寄せた蒼牙ワニを待機させ、島に近づくと奴隷海賊たちを餌食にした。

「どつやら、聖堂のクジラ兄にーにが、上手いこと奴隷海賊たちをケチらしてるぞ。

さすが白波クジラさまの化身だ、信じられないくらい強いなあ」

「えっ、そのクジラって誰なの？」

隣の島の砂浜で、青年が敵を次々と鉄籠に押し込めていく様子を感心した見ていた漁師たちは、彼女の一言に驚いて振り返る。

「なんだって、白さん。アンタ黒岩島からココに来てしてるんだろ。

黒岩島の聖堂を管理をしている、クジラ兄にーにを知らないのか？」

「あ、ああっそういえば、私の馬番の子供が、聖堂から食事を貰ってましたから、そんな話聞いたかもしれせん。

私はずっと余所の島まで、探し人を訪ね歩いていて、黒岩島に戻るのには夜中だから」

霊峰女神神殿から追われる私が、聖堂の人間に関わったら正体がバレてしまう。

言葉に詰まった彼女を助けるように、腹痛が収まり元気を取り戻した娘が、切り分けた果物を手に持って声をかける。

「白さん白さん、ちょっと休憩しよう。

みんな朝から何も食べてないでしょ、適当に摘んでよ」

大皿に盛られた、島で作られる果実酒の元、桃とバナナを足した

ような甘い果物だ。

「ふう、お腹の子供たち、元気が良く暴れるから大変だよ。

やっとお腹の痛みも収まったけど、みんな頑張っている時に、アタイだけ動けなくてゴメンね」

娘は普段の明るく元気な表情は消え、繰り返す腹痛で眼の下にクマが浮き出て顔色も悪い。申し訳なさそうに謝る娘を、痛々しい気持で見つめていた彼女は、その小さな肩に手を乗せて顔を覗き込む。

「何を言っているの、モモのお腹の中には守らなくてはいけない多くの命があるのよ。」

私はモモとお腹の子供たちの為に、奴隷海賊と命を懸けて戦うわ」

そう告げると、彼女は片膝を折り、娘の手の甲に騎士が忠誠を誓う仕草をする。

その完璧で優美な姿に、娘は頬を赤らめ、漁師たちはどよめいた。

「ありがとう、白さん。嬉しいな、アタイお姫様になった気分だよ。白さんが居れば、奴隷海賊も恐くないね。」

それじゃあ、アタイもみんなと一緒に森の中に隠れてるから。

頑張つてね、怪我しないでね」

迎えに来た中年の漁師に急かされて、モモは手を振りながら森の中に消えていった。

夜、黒岩島を攻略できなかった残党たちが、この青紫島を狙ってくるのは確実だ。

海に目を向けると、数艘の小舟が船着き場を目指しているのが見える。

「よっしゃあ、女たちを守るぞ。

階段で待ち伏せて、下に転がり落としてやれ。

白さんは、一番上で待機してくれ。

ここで食い止めれば、奴隷海賊は一人も島に登れないはずだ」

日が沈みはじめ、あたりは薄暗闇に支配される中で、青紫島の戦闘が始まった。

青紫島に獲物を漁りに来た奴隷海賊は、船着き場から陸に足を踏み入れた途端、腹を空かせた蒼牙ワニに襲われた。

なんとか岩階段にたどりついて、暗闇の中で夜目の利く猫人族に階段の上から攻撃され、次々下へと転がり落ちていった。

落ちた下で待っているのは蒼牙ワニ。

青紫色の岩の船着き場と岩階段は、おびただしい血で赤く染まっていた。

岩階段最上部で待機している彼女の場所まで、数人の雇われ傭兵がたどり着いたが、守護聖騎士『冷たい牙』と呼ばれる彼女の一太刀で、抵抗もできずに葬り去られる。

これまで、猫人族は小さな怪我だけで、被害はほとんどない。

しかし、なんだかオカシイ、相手が弱すぎる。

本気で猫人娘を奪いに来たとは思えない、捨て駒のような連中はかりだ。

ふと彼女は顔を上げ、法王付き聖騎士の持つ気配を探る研ぎすま

された能力で、その違和感の正体を突き止める。
なんだ、森の奥からかすかな悲鳴と血の匂い、人間の男が隠れ潜んでいる気配がする。

「これは罨です!!」

森の中に敵が居るっ、娘たちが危ない」

彼女が叫ぶと同時に、森の中から、雇われ傭兵がゾロゾロと姿を現した。

今まで相手していた敵とは明らかに格の違う、鋼のような体格をした男達が五人、獲物を見つけ彼女に近づいてくる。

目の前の猫人娘が、岩階段を駆け下りて逃げるのを防ぐため、傭兵の男たちは彼女の周囲をグルリと取り囲んだ。

急いで階段上来ようとする漁師たちを、彼女は手で制して、両手に半月刀を構えると傭兵たちに相対する。

「ねえ、貴方達に猫人族の娘を捕らえろと命じた法王は、中身の入れかわった狂人、偽物の法王よ。」

そんな人間の言うことを信じて、猫人娘を生贄にするの?」

「アハハハッ、猫人娘ごときが俺に説教すんのかあ。」

神様だろうが悪魔だろうが、金を稼がしてくれるなら何でもイヤだよ」

彼女の正面に立つ、背の高いドレッドの傭兵が、彼女を品定めするように見下ろしながら笑って答えた。

「いえ、貴方に人の心が有るか確認しただけです。
人の姿をした獣なら、刈り取って、しまいましょう」

笑う男の顔面を、何かが横切ったと思った瞬間、男の鼻先が切り落とされ血が吹き出していた。

彼女はそのまま身を屈めると、取り囲む男達の間をすり抜けながら、二刀流の半月刀で左右二人の脇腹を深々と切りつける。

わずか一瞬で屈強な傭兵が傷を負い、一人は両手で顔面を押さえ、痛みに叫び、二人は腹から血を流し地面をのた打ち回っている。

「な、なんだコノ尼あ！ふざけたマネしやがって」

顔に大きな傷のある傭兵は、頭に血が上り、生きて捕らえる獲物だというコトをすっかり忘れて、身の丈ほどの大剣を彼女に振り下ろしてきた。

それは、人の肩から腰まで一太刀にする威力があるモノだったが……

彼女は振り下ろされた大剣を、右肘で受け止めると、巨大な大剣は当たった部分からひび割れて、簡単に折れた。

彼女のゆったりとした薄桃色のワンピースの袖が裂け、腕に白銀色のミスリル製の肘当てと籠手が現れる。

折れた大剣を唾然と見つめる男にそのまま体ごとぶつかり、心臓を一刺しにする。

霊峰女神神殿 法王付 守護聖騎士『冷たい牙』瑠璃るりの剣技は一撃必倒だ。

半月刀を背中に生やしたまま、男は一瞬で事切れた。

わずか数分の間に四人の傭兵が狩られ、残りの一人は怖気づいて、悲鳴を上げながら森の中へ逃げ出した。

岩階段の方を振り返ると、漁師たちは新たな敵と戦いながらも、必死で持ちこたえている。

彼女は逃げた男を追い、猫人娘を救うために、森の中へ飛び込んでいった。

クエスト66 女神降臨

黒岩島の砂浜を見下ろす岩場の洞窟の前で、猫人族乙女を守護する、身の丈二メートルを超える魔物がいた。

いや、魔物ではない。ユニコーンだ。

ポニーのように小柄で華奢な体は、牛のように逞しく肥え太り、細く柔らかだった毛並みは、蒼く燃えるような光を放ちながら逆立っている。

小枝のように細く繊細な『淡雪ユニコーンの角』は、男の腕ほどの太さに育ち天を貫くように真っすぐに伸びていた。

ハルが、蒼牙ワニの”蒼珠”を怪我をした聖獣に大量に与えた結果、SENが『まるで世@末覇者拳王ラオウの黒王号だ』と称するほど勇ましくなっていた。

SENとティダは、現在の事態を説明するために、聖堂で青年と漁師達を集めて話し合っている。

単発的に敵の襲撃があるが、鋸を携えた漁師と子猫の弓部隊が対処していた。

ハルは、一刻前から落ち着きのない（SENが居るせい？）ユニコーンの様子を見るために、萌黄を連れて猫人娘たちが避難している洞窟に向かった。

洞窟の入り口近くで、ユニコーンの激しく嘶く声と男の怒鳴り声が聞こえる。

半泣きの状態のオレンジ色の髪の若い漁師が、無理やりユニコーン背に乗ろうとして、何度も度突かれ蹴られていた。

「何をしているんですか!？」

ユニコーンは乙女の聖獣、男性は嫌って背に乗せたりしませんよ。と、ハルお兄ちゃんが言っています」

「島の山頂から周囲を偵察していたら、隣の青紫島の様子が変なんだ！！」

あつちの島には、俺の嫁と、もうすぐ生まれる子猫達がいる。

ユニコーンは空を飛べるんだろ？

俺はこいつに乗って、モモを助けに行かなくちゃ」

この騒ぎに、洞窟の中から怯えた様子の娘達が出てきて、砂浜で監視していた漁師も異変を感じて駆けつけてきた。

「コイツの言う様に、青紫島にいる漁師たちが、奴隷海賊と岩階段で戦っているのが見えた。あの島は、他には年寄りとワニと戦えないオッサン漁師しかない。

俺たちも青紫島の加勢に行こう、クジラ兄にに話をしてくる」

数人の漁師が聖堂に向かう道を駆けだし、残りの男たちも船を出せるか相談している。

その間も、ユニコーンは何かに苛立って、蹄を蹴り激しく嘶き続ける。

ユニコーンに乗るのを諦めたオレンジ頭の漁師の顔には瞼の上に大きなコブができて、縋るような目つきでハルを見つめると座りこみ、頭を地面に擦り付けて平伏す。

「ハルさまミゾニヤン女神さま、どうか俺の嫁と子猫を助けてくれ。モモはいつも、丈夫な子猫が生まれるようになって、ミゾニヤン女神さまにお祈りしていたんだ。どうか、どうか、助けてやって下さいっ」

(今からクジラ兄やSENさんが、きつと青紫島の猫人娘を助けに行くよ。)

僕は……拜んでも、あまり力になれないと思う)

声の出ないハルには、直接漁師に返事をする事が出来ない。萌黄も黙って通訳せずに、泣いて頼む漁師を見つめていた。

その時、立ち尽くすハルの背中に、ユニコーンの荒い鼻息と興奮して喉を鳴らす声がして、シャツの襟首を齧られた。と驚いて振り向くと同時に、ユニコーンの蹄が宙を浮く。

ハルは上着をユニコーンに啜えられた状態で、一緒に宙を浮き、空高く舞い上がる。

(ええっ、まさかコノ宙吊り状態で飛ぶの!? ヒィィィィー)

ユニコーンの動きを素早く察した萌黄は、追いかけて岩の上から高く跳躍すると、聖獣の脚に飛び付いた。

猫人娘と漁師たちの目の前で、ユニコーンは全身から蒼い炎を噴き出しながら、ハルと萌黄を連れ、青紫島に向けて空を駆けて行った。

木の影に潜み身を隠しながら、彼女は血の匂いのする方へ進んでゆく。

森の中心に山のような大樹が生えて、その太い幹の上に食料庫のツリーハウスがいくつも建てられていた。

大樹の根元の空洞になった場所に、青紫島の猫人族集会所が作ら

れていて、娘たちはそこに避難しているはずだ。

集会所入口の、分厚い木の一枚板で造られた観音開きの扉の中から、血の匂いとつめき声が聞こえる。

床には、大理石でできたイスが倒され、そしてモモを迎えにきた男たちが血塗れで倒れている。

頭から袋をかぶせられ、柱に括りつけられた年寄りが猫人族の長老なのだろう。

部屋の奥には、猿ぐつわされ縛られた女たちが一か所に集められて居た。

しかしその中に、大きなお腹をしたモモの姿がない。

中央の大テーブルの上で、略奪品を袋に詰め込んでいる傭兵の男が二人、そして岩階段から逃げてきた傭兵が仲間に必死で喚いている。

「へへっ、猫人族のくせに随分と貯め込んでいやがる。

見るよ、金のスプーンに銀のフォークだぜっ。

動物が人間様のマネをしたって、下級種族のままなのになあ」

「オイッ、そんなモン放つといて、メス猫を連れてさっさとずらからう。

バカみたいに強い白耳の猫人族の女が、俺の目の前で、傭兵三人を簡単に倒しちまったんだ」

逃げてきた男の言葉に、二人は全く耳を貸そうとせず、大声でに嘲ると腹を抱えて笑っている。

敵の油断した様子に、彼女は足元の割れた皿を蹴飛ばして、部屋の中央まで一気に駆け込んだ。

突然の物音に、驚いて顔を上げた男たちに向かって、床から壊れた大理石製の椅子を拾い片手で投げつける。

彼女の姿を見て、悲鳴を上げその場から退いた傭兵の目の前で、小柄な男の頭に大理石の椅子が猛スピードで直撃し、なにか肉の塊がぶれる嫌な音がした。

両腕に竜のタトウをした傭兵は、反射的に防具の盾で身を守り難を逃れる。

「貴様あ、岩みてえな大理石を簡単に投げるとは、ただ者じゃないな。」

女の腕では在り得ないほどの怪力、^{マナ}「魔力持ち」に仕える守護兵士か」

「要らぬコトをベラベラとしゃべる男ね。黙りなさい!!」

表情を消した彼女の振り下ろす半月刀を盾で防ぎ、タトウ男は勢いをつけて押し返す。

とつさに後ろへ飛んだ彼女を追って大剣が打ち込まれる。

だが、先ほどの戦いと同じように、剣は左腕のミスリル製の肘当てに弾かれ、鋭利な刃先が簡単に欠けた。

「後ろが、ガラ空きよ」

タトウ男は一瞬、自慢の剣の欠けに気を取られた隙に、彼女は背後に回り込み、無防備な背中から心臓を一撃で貫いた。

瞳の光が消え、口から血の泡を吹きながら倒れる男に、一人残された傭兵は狂ったように喚きだした。

「チキショー!!何が、抜け駆けして娘を簡単に捕まえられるだ、あいつに填められた。」

「こんな強い用心棒が居るなんて話、聞いてないぞ」

「貴様、鼻を削がれたくないなら詳しく話しなさい。」

茶髪で妊婦の娘が一人足りないわ、どこに連れていったの？」

傭兵の男は、腰を抜かして立ち上がれず、そのまま壁際に追いつめられる。

彼女は刀先をひらひらと男の顔面で動かしながら、小さな切り傷を与え恫喝する。

皮肉ね、まさか偽法王アマザキが異教徒を拷問する時のソレを、私が真似るコトになるとは。」

「この島に住む、猫人族の中年の漁師だよ。」

あいつが、俺たちに島の抜け道を教えただ。」

猫人娘は俺たちにくれてやるから、自分は腹のでかい娘が欲しいんだとよ」

「霊峰女神神殿の法王が必要としているのは、猫人娘の乙女のはず。どうして妊婦のモモを連れ去った？」

「教えてやろうか、美人さん。」

この娘は、元々俺のモノになる筈だった、それをやっと手に入れるコトができた」

細目に低いしゃがれ声、島でよく姿を見かけた中年の漁師が、奥の部屋へと続く廊下から現れた。

男の後ろを引きずられるように娘が歩く。両手を縄でくくられて、殴られた頬が赤く腫れ、両目に涙を浮かべている。

願望を成し遂げた男の歪んだ嬉しそうな笑顔、コレによく似た表情を私は知っている。

私と同じだ、この男は私と同じコトをしている。

「ククツ 知っているか？」

生贄用の猫人娘は、赤ん坊でもいいんだよ。コイツがメス猫を何匹生むか楽しみだな。

売っぱらえば、大金が転がり込んで来るんだぜ」

細目の男はそう言いながら、娘を盾にして、彼女に見せつけるように細い首にナイフを当てる。

細い首に刃物を……また同じだ。どうしてこんな男と、私は同じ、私は、私は、こんな男と、私は同じ、私は、こんな男と、私は同じ、私は

突如青白い顔色になり、押し黙った彼女を見て、男は人質を取れば抵抗できないと確信した。

武器を捨てる。と怒鳴ると、素直に二本の半月刀と、肘当てと籠手を足元に投げて来た。

「ダメだ、逃げて白さん。アタイの事は構わないで逃げてえー」

喉元にナイフを付きつけられるのも構わず、娘は自ら男に体当たりをして、逃れようと抵抗しだす。

瞳に狂気の色を宿した男が、怒りに任せ娘の髪を鷲掴むとナイフを振り上げると、彼女が駆けだすのは同時だった。

獣に近い猫人族の中でも、戦う術を叩き込まれた彼女の生身の武

器は、爪と牙。

鋭いナイフのように長く伸びた鋭い爪が男の顔面を潰し、娘を男から引きはがす。

顔面血まみれで、悲鳴を上げて床でのた打ち回る男を見る事もなく、娘に駆け寄ると、服が裂けただけでケガもなく無事だった。

娘の縄をほどき、両手で抱き上げて、他の女たちの居る場所まで連れてゆく。

「モモ、助け出せてよかった。

まさか青紫島に、敵が潜り込める抜け道があるなんて思わなかったわ」

裏切り者の漁師に気を取られている間に、敵を一人逃がしてしまっただ。

彼女は、柱に縛られていた長老を解放したが、脚を怪我して歩けず、床に倒れた漁師のうち二人は辛うじて生きているが、自力で動くことは出来ない。

モモは、他の女たちの縄を解きながら、思いつめた表情で彼女に声を掛ける。

「白さん、奴隷海賊の仲間はまだ十人ぐらい居て、もうすぐここに戻ってくる。

とても白さん一人じゃ敵わない、アタイたちにかまわず逃げキヤアアア」

捕らわれた猫人族の女たちは、猿ぐつわで口を塞がれている。

その中に、雇われ傭兵の女が紛れ込んでいるのを知らせることが

出来なかった。

小太りで黒いローブを被った、猫人族に化けた女傭兵の隠し持っていた剣は、目の前の娘の背中を切り裂いた。

娘は背後から剣で深く斬りつけられ、躰が膝から崩れ落ちる。背中から噴き出す血は、足を伝い流れ落ちて床に血だまりを作る。一矢を報いた女傭兵は、乾いた笑いを口に浮かべていたが、次の瞬間、彼女のつま先の鉤爪が女傭兵の脇腹をえぐり、腸を引き裂いた。

縄を解かれた女達の、甲高い悲鳴が聞こえる。

仰向けに倒れたモモを中心に、じわじわと血の池が広がる。

「イタイよ、白さん、せなか、きられちゃった、ちがいつぱい、とまらない」

彼女は、モモを抱き起して背中を見ると、肩から腰にかけて白い骨が覗くほど深く切られていた。

手で開いた傷を塞ごうとしても、指の間から温かい鮮血が溢れ出てくる。

「モモ頑張つて、こんな怪我、すぐ頼んで治してあげるから。アノ子なら治してくれる」

「アタイはいいから、こねこをたすけて

みぞにゃんめがみさま、こねこたちを、たすけて」

意識も途切れがちに、口から血の泡を吹きながら、娘は女神に祈っている。

血の気を失い、呼吸も浅く、腕の中で力が抜けて体が冷たくなってゆく娘を、彼女は抱きあげ立ち上がる。

私は、また守れないの？

私は、また目の前で失うの？

アノ子なら、アノ子なら、アノ子なら、神の力でモモの傷を治せるのに。

でも私は、攫ったアノ子の名前すら、知らない。

このままでは間に合わない、モモは死んでしまう。

「アノ子の、アノ子の元へ連れてゆけば、必ず助けてくれる。

ミゾノゾミ様なら、ミゾノゾミ女神様、どうか、どうか、モモを助けて」

この敵に囲まれた状況で、隣の黒岩島の神科学種の少年の元へ、事切れる寸前の娘をどうやって……

敵はすべて倒す、海を歩いて渡る、早く、早く、モモをミゾノゾミ女神の元へ連れてゆかなくては。

彼女の狂ったような、鬼気迫る声と表情に、その場にいる誰も制することはできない。

娘を抱きあげ連れ出そうと、早足で集会所の扉の外を目指す。

「僕を 呼んだ？」

扉の向こうから溢れ出す蒼い光。

巨大な聖獣が、彼女の目の前に静かに舞い降りてきた。

ユニコーンに啜えられたままの少年が、ぶっきらぼうにそう答えた。

クエスト66 女神降臨（後書き）

もう少し、修羅場は続きます。

11/3 追加

ユニコーンの変貌ぶりの反響が大きかったので、ちょこっとお遊び。

劇的改造ビフォーアフター風

以前は、ポニーのように小柄で華奢で、とても貧相な体をしていました……

それが、何という事でしょう！！ユニコーンの細すぎる体は、牛のように逞しく肥え太ってるではありませんか。

また以前は、細く柔らかすぎる毛並みでした……

しかし匠ハルの手によって、蒼く燃えるような光を放ちながら逆立つ毛並みへと、変貌を遂げたのです。

一番の難所、小枝のように細く繊細な『淡雪ユニコーンの角』は……
何という事でしょう！！男の腕ほどの太さに育ち、天を貫くように真っすぐに伸びているではありませんか。

こうして、怪我をしていたユニコーンは、匠ハルの手により

『まるで世@末覇者拳王ラオウの黒王号』と称されるほど勇ましく生まれ変わったのです。

クエスト67 沈黙の呪を解除する

青紫島の村の中心にそびえる巨木の中に造られた集会所は、血の臭いが充満し凄惨な状況だった。

ケガをして動けない村人と、戦い倒した敵が、同じ場所で呻いている。

そして死に掛けた身重の娘を抱いて、扉の外へ駆け出そうとした彼女の目の前に……

女神が降臨する。

漆黒の闇夜に、蒼い炎を全身から迸らせながら舞い降りた魔獣。

いや彼女の騎獣ユニコーンが、主人の危機を察し天を飛んできた。

「僕を、呼んだ？」

そう彼女に問う少年の声は不機嫌そうだった。

二つの島の間を、ユニコーンに啜えられ宙吊り状態で無理やり移動させられたのだ。

ユニコーンが啜えたシャツを離すと、ハルはベチョッと顔面から地面に落ちる。

「ええ、お呼びしました。ミゾノゾミ様。

どうか、この娘を助けてください」

彼女は、血塗れの両腕に抱える身重の娘を差し出した。

そうしている間にも、娘の背中から流れ出した鮮血は、音を立てて床に落ち、血溜まりを作っている。

彼女は床に娘を横たえると、ハルは娘の顔を覗き込む。

幼顔の娘は、顔面蒼白で唇も紫色になり、白目を向いたまま浅い息が途切れようとしていた。

「ハルお兄ちゃん、その女はお兄ちゃんをさらった、女神神殿の聖騎士だよ。」

そんな女の頼みごとを、願いを聞いてしまうの?」

ユニコーンの背に乗った金髪の少女が、甲高い声で断罪するように言葉を放つ。

娘の顔をのぞき込んでいた神科学種の少年は、感情のない目で彼女の方を振り返る。

「僕を、呼んだ?」

再び同じ台詞、答えを間違えてはいけない。

祈りに応えて舞い降りた女神を、今度こそ逃してはいけない。

「私はアナタに助けを求めた、アナタなら助けてくれると信じている。」

どうかミゾノゾミさま、娘を、モモをお救い下さい」

彼女は両手を地に、頭を地面に何度も打つけて、叫ぶような声で神に懇願する。

少年は、興味を失ったかのように彼女から目を反らし、娘の状態を確認すると眉を寄せる。

これは、治癒魔法では間に合わない。

今すぐ完全蘇生呪文を行使しないと、母体もお腹の子供も死んでしまう。」

目の前で横たわる娘が激しく痙攣し、その細かい息が完全に止まった。

時間が無い、一刻を争う生死の境目。

完全蘇生呪文を唱えようとしたハルは、自分の体の異常に気が付く。

まさか、こんな時に……舌が凍り付いたように動かない。

女神神殿の最高禁術、罪人へ施す『沈黙の呪』が発動して、ハルの言葉を奪い、完全蘇生呪文を唱えることができないのだ。

「早くつ、僕の『沈黙の呪』を解除をしろ！！

娘の命と引き替えに、お前は対価を示せ」

鋭い少年の声と、弾かれたように彼女は顔を上げ立ちあがる。

「ミゾノゾミ様、舌を出して下さい。

戒めの『沈黙の呪』解除します」

女神神殿の禁術、生涯罪人を縛る呪いを解くと、術者自身に呪い返しを降りかかってくるのだ。

軽々しく『沈黙の呪』を行使した私の自業自得。それでもモモが救えるなら、私の声などくれてやる。

少年の紫色にミミズ腫れを起こしたような舌に、術者である彼女の指先が触れると、呪いが実体化してムカデが三匹現れ、指先を這い上がってくる。

一匹も逃がしてはいけない。
術呪の実体化したムカデを掌に捕え、握りつぶすとそのまま自分の口へ放り込む。

「ミゾノゾミさま、あの白身の肉は美味で う ああつ、アリガト う ああ」

呪いは倍返しされる。

彼女の口の中で荒れ狂う呪いを、薄ら笑いを浮かべながら自分の舌ごと噛みちぎった。

だがハルは、それを見守っている暇は無い。

ユニコーンの上にいる萌黄に振り返ると、静かに声をかける。

「萌黄ちゃん、もし僕が動けなくなったら、SENさんや竜胆さんが助けにくるまで、悪者から守ってね」

そう告げると娘に向き直り、言葉を取り戻した舌先に、完全蘇生呪文を乗せ詠唱を始める。

娘一人の蘇生なら、ぎりぎり自分の生命力で足りるはずだが、宿した子供たちへも、二重三重の完全蘇生呪文を行使したら、力は根こそぎ奪われてしまう。

少年の詠う祝福の調べに乗せて、七色の光が娘を包み込む。

娘の背中の大きな裂傷は、裂けて骨の見えた上に肉が盛り上がり、みるみるうちに塞がると跡形もなく消える。

心臓は鼓動を取戻し、頬は血の色が宿り、穏やかな呼吸で胸は上下する。

猫人族の村人は、目の前で行われた奇蹟に言葉を失う。
蘇生呪文により、命を取り戻した娘の隣で、青い髪の少年は横たわり完全に動かなくなっていた。

ハルがユニコーンに連れて行かれたと子猫たちが知らせに来て、続いて漁師たちが、隣の青紫島が敵襲を受けていると報告にやってきた。

黒岩島の山頂近くで待機させてるファイヤードラゴンを呼び寄せするため、SENはすでに外へ飛び出していた。

苛立たしげに、長い銀色の髪を掻き上げながらティダは、赤い右目の奥に映し出されるパーティステータスに注目した。

異常を知らせるアラーム音と、ハルのステータス表示がグリーンの通常状態から赤く点滅し始め、一気に灰色のデッドリーを示すのだ。

ハルを連れ出して、まだ半刻も経たないうちに、またデッドリーか！！

どうしてハルちゃんにだけ、命の自己犠牲を強いる。
なにが終焉世界に豊穡をもたらすだ、このクソゲーム。

無表情で天を仰ぐティダの隣で、青年は仲間の漁師たちに救援の船を出すように手配していた。

すると、空の彼方から蒼い炎がこちらに向かって飛んで来るのが見えた。

ユニコーンが、背中に数人の娘達を乗せて、青紫島から黒岩島へ戻ってきたのだ。

牛のように遅いユニコーンの背中には、5人の少女たちが乗せられていた。

小さな聖堂の正面に舞い降りたユニコーンに、その場にいた者は皆駆け寄ると、少女たちは叫びながら飛び降りた。

「敵が、大勢の奴隷海賊と雇われ傭兵が、村を襲ってきたわ！！

このユニコーンに乗ってきた男の子は、女傭兵に切られて大怪我をしたモモを治した後、動けなくなったの。

長老やオバサンたちや、怪我をした男の人が残っていて、戦っているのは金色の髪をした小さな女の子と、白さんだけ。

早く、早く助けに行かないと、みんな殺されちゃうー！！」

泣き叫ぶ少女に手を貸して慰める青年に、周囲の者たちも慌ただしく動き出す。

ユニコーンは興奮状態で、鼻を鳴らし蹄で地面を激しく蹴っている。

聖獣一の俊足を誇る、天駆けるユニコーンに乗れば、隣の島まで瞬く間に着くはず。

ティダは急いでユニコーンに駆け寄るが、触れようとして巨大な角で威嚇されてしまう。見た目は天女のようなが、両性で、しかも素手で敵を血祭りに上げるティダは祝福が少ない。

ドSネカマのティダでは、穢れ無き乙女を好むユニコーンには選ばれないのだ。

「弓部隊の子供を行かせるには危険すぎる。誰か、ユニコーンに乗れる者は……」

漁師たちに指示を出していた青年が、巨大な銚を手に、ユニコーンに静かに近づく。

聖獣はその姿を認めると、膝を折り角を下げて体を伏せる。

その蒼く燃えるように逆立つ鬣を優しく撫でると、青年は慣れた仕草でユニコーンに飛び乗った。

「テイダさま、俺はコイツに乗って先に青紫島へ向かいます。

ドラゴンで後を追って来てください、早くハルさまたちを助け出しましょう」

ユニコーンは地を蹴ると、一気に天を駆け、まるで蒼い星が流れるかのような速さで、隣の島めがけて飛んで行った。

それから数分後、黒岩島の頂上から、燃える様に真紅の巨大な翼をもつファイヤードラゴンが吼声を上げながら姿を見せる。

まるで竜巻の様な翼の風圧の中、テイダの前に着陸したドラゴンの背からSENが声を掛ける。

「テイダ、海の方を見る。

どうやら竜胆のヤツ、奴隷海賊の制圧に成功したみたいだ」

黒岩島から見下ろす漆黒の海の所々に、螢火のような”神の燐火”と紺の巨人王族の色旗をなびかせる船が浮かんでいた。

竜胆の呼びかけに答え、奴隷海賊首領を見限り、反乱海賊となった者の船だ。

SENはドラゴンから飛び降りると、入れ替わってテイダが騎乗する。

二人はハルがデッドリー状態なのを知り、完全蘇生魔法チュウを行使するのチャットに、ティダが恐ろしいほど念話で拘ったからだ。

「ハルちゃんが何度も約束を聞かなかった事は、チュウひとつでチヤラにしてあげるよ。」

さあ、眠れるお姫様に目覚めのキッス「さつさと行けっ 変態工口フ」バキッ」

宙へ飛び立った、ファイヤードラゴンの赤い炎のような翼を、SENは見えなくなるまで目で追いつけた。

夜明け前が一番暗い、一昼夜戦い続けてきた猫人族たちにも、表情に疲れの色が濃く見える。

奴隷海賊島を攻め落とすための別部隊、港町エリアの領主 双子の弟王子が動いていた。

奴隷海賊の戦力を分散し、圧倒的な力でねじ伏せて、猫人娘狩りを終わらせるのだ。

クエスト68 想定外の展開

青紫島の岩階段では、島の漁師と奴隷海賊の戦いが続いている。海賊たちは、船着き場に放たれた蒼牙ワニに襲われるとはいえ、緊張感を強いられた戦いが休みなく続く。

森に避難した仲間の様子を確かめに行った、白と呼ばれる娘も戻ってこない。

「おい、何だあれ？」

空を、牛のような化け物が飛んでいるぞ」

岩階段の途中で、銚の先を研いでいた漁師が、ふと空を見上げると声を上げた。

蒼い炎を全身から迸らせた巨大な牛が宙を駆けている。

その背には森の中に逃れていた娘が数人、森の巨木を指さし必死に何か叫んでいた。

「あれは見たことがある、黒岩島に住む神科学種のハルさまが飼っている牛だ！！」

ハルさまが、娘たちを助けにきたんだ」

「森の中の村も奴隷海賊に襲われているのか！！俺たちも早く助けに行こう」

しかし、そう言った漁師の目の前の海を、二十艘あまりの奴隷海賊船が、船着き場目指して進んでくるのが見えた。

先頭の船は、見覚えのある痩せた奴隷海賊の男。

そして隣には、男の二倍はありそうな体格の巨漢の雇われ傭兵を

連れている。

「畜生、マトモな奴だと思っていたが、所詮腐った奴隷海賊だったか。」

知り合いの女子供でも、金のために平気で生け贄にするのか」

顔見知りだった漁師は怒りの声を上げ、鋸を握り締めると、相打ち覚悟で船から降りてきた奴隷海賊めがけ突進してゆく。

「おおい、ちよつと待て！！俺たちは猫人族の味方だ。」

もう奴隷海賊じゃない、反乱海賊だ」

痩せた奴隷海賊の男は、鋸を手に突き進んでくる漁師たちの前に飛び出し、武器を腰に下げたまま両手を上にあげて戦う意志の無い事を示す。

痩せた男達、頭に紺の鉢巻やターバンを巻いた海賊は、その場にいる雇われ傭兵に襲いかかる。

敵同士が争う様子に、猫人族漁師たちは啞然としてみると、反乱海賊を名乗る男は船の帆先になびいている紺色の旗を指さす。

「島周囲一帯の敵はすべて倒してきた。」

この旗を掲げた船は反乱海賊、俺たちは猫人族の味方だ」

痩せ男の後ろにいる若い巨漢の傭兵が、焦った様子で島の漁師たちに強い口調で話す。

「急げ、ハルが危ない。」

早く島の中を案内しろ、中に入り込んだ雇われ傭兵達に襲われている」

「ええつ、なんでアンタがハルさまを知ってるんだ？
そういえば、さつき空を飛んでいった青い牛は、ハルさまが飼っ
ていた牛だ。」

アンタたちが神科学種のハルさまの知り合いなら、本当に俺たち
の味方らしいな」

竜胆は身の丈ほどの大剣を片手に、最後のあがきに襲いかかる傭
兵たちを、大剣の腹で打ちつけ叩き潰しながら、岩階段を駆け上
がる。

海賊が寝返った事を知らない雇われ傭兵たちは、堅く閉めた扉の
前で立ち塞がる彼女を取り囲んでいた。

「そ、その女はバカみたいに強いんだ。構わず逃げちまおう」

「バカはお前だつ！！」

女を捕らえず手ぶらで戻れば、俺たちは、あのキツネ顔の奴隷海
賊に切り殺される。

見るよ、この女。口から血を流して弱っているぜ」

彼女は、沈黙の呪返しで、切り刻まれた舌が燃えるような熱を持
ち、気を失いそうな激痛が走る。忌々しげに口に溜まったドス黒い
血を吐き捨てると、両腕の半月刀を握りしめる。

大剣を手に突っ込んでくる背の高い傭兵の剣を正面で受け止める
が、勢いに押され数歩後ろへ下がった。

「ヒヒツ、ほんとだあ、可哀想に随分と弱ってんな。
もう抵抗は辞めて楽になりなよ、俺たちが優しく可愛がってやるからよ」

背の高い傭兵は、更に剣を押し力を強め舌なめずりをしながら、弱っている美しい獲物に顔を近づける。

彼女は唇の端を歪めた笑いを漏らすと、口に含む血を相手の眼に吐きつけた。

ジュツ 強い呪を帯びた血は劇薬と同じだ。

男は悲鳴を上げて眼を押さえ、大剣を取り落とした。狙いすました二本の半月刀が左右から交わり、傭兵の首を断ち落とす。

「このアマアァー!!生かしちゃおけねえ。いいかあ、合図と同時に切り刻んでやるぞ」

彼女を取り囲んでいた傭兵三人、同時に襲いかかってきた。

右からきた敵を払いのけ、左の敵の空いたわき腹を半月刀で深く切りつける。

「ヒヒツ嬢ちゃん、後ろから串刺しにして ギヤアアッ」

彼女を背後から襲おうと、槍を両手で構えた傭兵は、ふくらはぎに焼けるような痛みを感じ悲鳴を上げてその場に倒れ込む。

男の後には、黄金の髪に手足の長い白い猫耳の小柄な少女が立っていた。

萌黄は両手に細い銀のナイフを持ち、まるで踊るような素早い動きで男の足を切り裂いたのだ。

彼女は倒れた男の槍を奪うと、正面に立つ敵めがけ、勢いよく投げつける。

仲間が彼女を仕留めるだろうと傍観していた傭兵は、左胸に槍を生やして昏倒した。

「馬鹿か、マトモに戦うからやられちまうんだよ。

女をよく見ろよ。足を引きずって動きが鈍ってきてるぜ、生け捕りにできるぞ」

小柄で猫背の傭兵が、笑いながら彼女に黒い固まりを投げつけてくる。

払いのけようとした手前で、黒い固まりが蜘蛛の巣のように広がり、目の細かい網が彼女に覆い被さってきた。

萌黄は間一髪で逃れて、森の中の木の上に登り、枝を伝い逃げる。地面に倒れた彼女の体に、更に網がきつく絡みつき、身動きが一切とれなくなる。

獲物を仕留めた傭兵は、声をあげながら捕らえた網に駆け寄ると、倒れる女の腹に数回蹴りを入れた。

「俺あ、捕らえた女を、暇つぶしに気を失うまで蹴って楽しむんだよ。」

「なんだあ、コイツ声を出さないな」

「おい木の上に、人形みたいな美人の子猫がいるぞ。」

この女と二匹捕まえて連れて行けば、キツネ男も納得するだろう」

身軽な萌黄は、枝から枝へと飛びうつって逃げまわるが、吹矢で狙われて枝から足を踏み外した。

仕留めたと、口笛を吹いて喜ぶ傭兵が獲物の落ちた場所に行くところには子猫を抱きかかえた巨漢の赤毛が、口元に残虐な笑みを浮かべながら立っていた。

「俺の萌黄を、木から落として傷つけたのはオマエか。」

「こんな子供を狩って楽しむような狂犬は、生かす価値ないな」

萌黄を抱えて両手の塞がった竜胆は、丸太のように太く長い脚のリーチで、男の顔面を高々と蹴りあげる。敵は軽々と吹き飛ばされ、背後の岩に背中からぶつかるのと、カエルの様な声を出して気を失った。

「竜胆さま、ハルお兄ちゃんが集会所の中で倒れているの。ハルお兄ちゃん、もし動けなくなったら、竜胆様が来るまで萌黄に守ってねって言ったの」

少女を肩に乗せた竜胆は森の中を駆け抜けけると、突如目の前に視界が広がり、山のような巨木が現れる。木の根元で、数人の傭兵たちを見つけた。

肩の上の萌黄が先に飛び出して、略奪品を運びだそうとしている傭兵の足をナイフ委で切りつける。

悲鳴を上げ仰け反った男の後に小さな少女の姿はなく、巨漢の男が二メートル越えの大剣を、隣の木の幹に振るうのが見えた。

生木の裂ける音がして男の上にゆっくり木が倒れてくる。

背後で木の倒れる大きな音がする。網で捕らえた猫人族の女を見張っていた男たちが、驚いてその方向へ目を向けたとき、足下を黄色色の竜巻が駆け抜け、脚が掬われるように突如倒れ込む。

巨漢の男が、勝ち誇った表情で自分たちに近づいてくるのがみえる。

「貴様らあ、女の命が惜ければ、これ以上俺らに近寄るな。
目の前で首を切り落としてやるぞ!!!」

傭兵は残り4人か、クソツ野郎ならまだしも、女を見殺しに出来るかよ。竜胆は苛立たしげに呟いた。

萌黄を逃がして、武器を捨てて油断させ、まあコイツらなら素手で頭を叩き潰すか。

竜胆は表情を消し、広い背中に萌黄を隠しながら大剣を雇われ傭兵たちの前に投げ捨てる。

あっさりと武器を捨てた赤毛の男に拍子抜けして、啞然と見返した猫背の傭兵は、その一瞬で巨漢の男の長い腕が自分の首を捕らえ、そのまま体ごと振り回され、女を捕らえている男ごと吹き飛ばされる。

その時、背後に控えていた二人の傭兵が、空から舞い降りた獣の蹄に蹴られ、太く鋭い角で突かれる。

蒼い炎を撒き散らす牛獣に騎乗している眼帯男は、網に囚われた娘の傍に立つ巨漢の傭兵を睨み付けた。

突如、角を突き立て飛びかかってくる獣を紙一重で避けた竜胆の喉元に、騎上の黒髪の男が銛を突きつける。

竜胆は、鋭利な銛ごと左手で握り潰すと、逆に柄を捻りあげて押し返す。

武器を奪われまいとする青年は、両手で銛を強く掴んで堪えると、柄が半分からポキリと折れる。

バランスを崩した青年はユニコーンから落ちて、竜胆も銚を手放し後ろ向きに尻もちをつく。

素早く立ち上がった青年は、半分に折れた銚を拾い、竜胆も殴り潰そうと拳を固めるところに、制止の声を上げて萌黄が間に分け入った。

「やめて竜胆さま、この人は敵じゃない、味方だよ！！」

クジラ兄に、怪我にしなかつた？」

テイダの乗る真紅のファイヤードラゴンは、青紫島の岸壁の裂け目から、小舟で一人逃げ出す雇われ傭兵を見つけた。

敵の最後の一人をドラゴンの鉤爪で捕らえ、宙吊り状態のままドSモードで散々脅して、奴隷海賊首領と側近の男の話聞き出す。

風香十七群島の奴隷海賊を力で支配する廃王子、そして策士らしい側近のキツネ顔男が曲者の様だ。

捕えた男の尋問に時間を取られ、テイダが青紫島の巨木の下に辿り着いた時には、すでにイベントは終了していた。

蘇生したハルは、青い顔で口を押えながら、フラフラと扉の外に出てくる。

「竜胆さんっ、船酔いして、ゲロ味の完全蘇生呪文チュウなんて！！
うぐっ、つられゲロゲロ〜」

「俺の船酔いより、簡単にデットリーになるテムエが悪いんだろ」
さすがにティダも、木の陰に隠れてゲロゲロしているハルに声を掛けられない。

竜胆の肩を叩いて合図をすると、不機嫌そうな顔をして見返して来たので、優美な笑みを浮かべながら言葉をかけてやる。

「竜胆王子、素晴らしいご活躍でしたよ。」

船酔いに耐えながら、雇われ傭兵として紛れ込み猫人娘の救出。

奴隷海賊たちを説得して寝返らせ、反乱海賊として傘下に収めた」

急に畏まった口調で話しかけてきたティダに、竜胆の照れて焦る様子で頬を染める。

「で、お姉さまは、ハルちゃん救出を最優先しろと言ったよな。」

お前とハルちゃん、後でこっぴどくお仕置きしてやるから覚悟しとけよ!!!」

ドスの利いたオツサン口調でティダはそう告げると、竜胆の脳裏にオアシス神官にスパルタ勉強会をしたの様子を思い出して、顔が青ざめる。

巨木の中の集会所は野戦病院の状態で、床に所狭しと傷ついた村人が寝かされていた。

怪我人の手当てをしている青年が、手をかざして患部を撫でると痛みが和らいだ。

魔力^{マナ}を持つ青年は、治癒呪文を知らなくても無意識に相手を癒すことができる。

青年の神科学種の器は竜胆と拮抗して戦え、ハル以上に魔力レベルは高く、『完全蘇生呪文』も行使できるはずだ。

ティダは青年に声をかけ、呪文詠唱を実戦で教えると、青年はたった一度でマスターして、治癒呪文で怪我人達を次々と治してゆく。

目を覚ましたお腹の大きなモモは、苦しげな息をして、全身大怪我で気を失った彼女の手当てをしている。

「クジラ兄、次は白さんの怪我を、早く魔法で治してください」

そう頼む娘に、青年は目を逸らすと下をうつむいて、硬い声で返事をする。

「その人は、神科学種さまを攫い黒岩島に連れてきた、ハルさまを苦しめた人です。

ミゾノゾミ女神に仕える俺は、その人の行いを許せません」

事の成り行きを見守っていたティダは、青年の予想外の態度に眉を寄せた。

この緊急クエストは、彼女が『法王 白藍』の魂を探し出せばクリアするはずなのに、白藍の魂を持つ青年に嫌われ拒否られたらどうなるんだ？

クエスト69 完全蘇生魔法を練習しよう

それは想定外の展開、法王 白藍であった魂を持つ青年と、その魂を探す聖騎士の彼女が巡り会えば、緊急クエストは完了するはずだった。

しかし、白藍としての記憶データを持たない青年は、これまでのハルの境遇に同情していた経緯から、彼女を救うことを拒む。

これは、どこでクエストの選択ミスを犯したのか？

バッドエンディング・クエスト失敗・重苦しい鬱なBGMがティダの脳裏に鳴り響く。

だが、大怪我をしたままの彼女を放置出来ないし、女神の名を呼んだ願いは叶えなければならぬ。

ティダは一考した後、彼女に背を向ける青年に声をかけた。

「彼女は村人を守るために、随分と大怪我をしているわね。

これからお姉さまが、『完全蘇生魔法』を行使するから、しっかりと見てなさい」

『完全蘇生呪文』は、口移しで自分の命を相手に注ぎ込む、目覚めのキスのようなエモーション（動作）だ。

「おおっ、美人にキスするのなら、俺が蘇生してやってもいいぞ」

ティダの発言に、何故か竜胆がさかさ食いついてくる。

「竜胆さん、ゲロ味のチュウだから止めてよ」

ハルはキスの味を思い出しげっそりした顔で口をはさむと、ティダにお願いしますと頼む。

天女と見まごう美しいエルフが、傷つき倒れた彼女に覆い被さり接吻すると、ほんのりと体から七色の光が溢れだし、顔の殴られた鬱血も腕の深い刀傷も、全身の傷が癒えて治ってゆく。

ティダは赤い右目で、彼女のステータスの変化を見ていた。

生命力、体力は魔法によって完全回復するが、沈黙の呪によるバツトステータスで、傷付いた舌は癒えない。

いや、最上位蘇生魔法の威力で、僅かではあるが舌の傷も癒え、マイナスステータスが底上げされている。

目の前で、蘇生魔法という濃厚キスシーンを見せられ、青年は顔面真っ赤にして立ち尽くしていた。

ティダは意地悪く笑うと、青年の肩を叩き命じる。

「今のをしつかり見ていましたか？」

まだ舌の傷は完全に治らないから、ほら、蘇生魔法の練習をしてみなさい」

「えっ、えっ、な、なんですって!!」

俺が、その、完全蘇生魔法を、彼女に、ですか？」

キャアーと、大きなお腹のモモが黄色い声を上げ、青年は周囲から好奇の視線に晒される。

ティダはわざと、強い口調で青年に告げる。

「これは、秘術中の秘術とされる『完全蘇生魔法』。

それを貴方に授けてやったのですよ。」

彼女の、呪われた舌の傷を治すには、そうですね、蘇生魔法を五
十回練習しなさい」

ここまではお膳立てしてやるから、後は二人で何とかしろ。
ティダは心の中でそう叫ぶ。

彼女の手当をしていた妊婦の娘と目が合い、好奇心とお節介に燃
える目で、任せてくれ。と言うようにティダに向かって大きく頷く。
ティダは、硬直状態で動かない青年を置いて、ハルたちの元へ向
かった。

ティダがハルを迎えに来るのに、一週間も遅れたのには訳があっ
た。

かつて巨人王に謀反を起こし、風香十七群島の奴隷海賊を支配す
る廃王子と、霊峰女神神殿との結びつきが明確になった。

しかし、コクウ港町エリアを統治する廃王子の双子の弟 第十二
位王子 青磁せいじとの交渉は難航していた。

ここ二年ほど豊漁続きで、経済的に発展し続けるコクウ港町エリ
アで、事を荒立て奴隷海賊と戦う事に渋る者が少なからず居た。
恐怖で奴隷海賊を支配する兄と、温厚で対話により人々を統治す
る弟。対照的な双子の兄弟。

無意味な説得で時間を浪費し、もはや港町エリアの海上警備隊で
はなく、巨人王 王都軍を直接投入するしかないと諦めていた。

ゲームの中では存在しない風香十七群島、そして巨人王への謀反により敵対した双子の兄弟。

SENはゲームおたくのプライドが疼き、”無知は罪”の信条の元、交渉の合間ひたすら情報をかき集めた。

そして判った事は、十三年前の巨人王暗殺未遂事件。

YUYUが暴力王に迎えられ『王の影』として力を振るい、霊峰女神神殿との争いが形勢逆転をした時、巨人王の膝元に敵が存在していた。

第十二位王子 青磁との、最後の対談の席を設けられた時、SENは彼に問いかける。

「何故、仲の良い双子の片割れが、絶大な力を誇る巨人王へ、無謀にも謀反を起こした？」

暴力王の後宮に住む、エルフの美妃に惑わされたのが原因ですね。元々、エルフは神を模した存在と言われ、彼女は霊峰女神神殿側のスパイだった。

貴方も兄と同じく彼女に誘われていたから、巨人王暗殺を直前で阻止できたのです」

双子の弟 青磁は、巨人族にしては細身で、理知的な顔立ちに赤い髪は少し白髪が混じっている。

整った顔立ちの、しかし左耳から左目周囲の皮膚が赤黒く焼け爛れていた。

「この顔の醜い傷は、兄の放った焔獄術呪から、父上を庇った時に負った傷です。」

皆は私を、王を救った名誉ある王子と呼ぶが、私もその瞬間まで美妃に魅入られ迷っていた。

兄を責めることはできないのです」

「そのエルフの美妃の息子は、鳳凰小都で会ったハーフエルフ、第十七位王子の紫苑なのか？」

奴は今、法王と結託して、巨人王の次期王位継承者の取り込みに暗躍している」

SENとは別に、王の影からの情報網を持つティダが何気なくその事を告げると、青磁の顔色が変わり、自分の赤黒く焼け爛れた顔に何度も触れる。

「美妃は事が明らかになると後宮に火を放ち、大勢の側室の姫を道連れにして、自らの命を絶った。

兄はまだ、美妃に魅入られたまま、王になるという野望を捨てられない。

今度は、その息子の口車に乗って巨人王を裏切るのか。

巨人族のエルフ狂は、ここまで深い業なのか」

少し考えさせてくれと席を外し、隣の部屋へ姿を消した青磁王子を見守っていたティダが、不思議に思ったことをSENに尋ねる。

「ゲームの中では、巨人とエルフは敵対する設定だったが、今、青磁王子の言った 巨人族のエルフ狂って何だ？」

SENは腕組みをして、美しいエルフの器を持つ友人に、渋い顔で告げる。

「ゲーム内での巨人とエルフは、純粹に魔力と武力による対立だっ

だが、実際の終焉世界はかなり内容が異なる。

巨人族もエルフ族も、遺伝子操作とクローン技術によって生み出された新種族だが、エルフは子孫を増やせず自然淘汰された。

数少ないエルフを取り込み知識と魔力を得る、そして圧倒的な武力で終焉世界の覇者になったのが巨人族だ。

巨人族は覇者で居続けるために、エルフが欲しくて仕方ないのでさ

「だから、鳳凰館で出会ったハーフエルフの紫苑は、俺に、竜胆を選ぶのか。と激怒したのか」

この人望熱く統治能力の優れた、第十二位王子も悪くは無い、とティダは考える。

しかし竜胆の、人々の心を引き付ける（今はまだ女性に対して発揮しているが）カリスマ性には及ばないな。

それにしてもおかしな話だ。

自分達は、女神の憑代であるハルちゃんのおマケで、終焉世界に取り込まれたハズだ。

もしかして自分にも、この世界で成さなければならない役割があるのか？

そうして二人の話し合っている間に、青磁王子が部屋に戻ってきた。

現れた王子の姿は、焼けただれた顔半分を隠す黒い漆塗の鬼の面の様なマスクに、黒い鋼の重厚な鎧を着こんでいる。

「兄の凶行を辞めさせることが出来るのは、弟の私だけです。

これよりコクウ港町エリア海上警備艇とコクウ自警団の船団は、風香十七群島の奴隷海賊島を制圧に向かいます」

そうしてSENとティダは、青磁王子率いる海上警備艇とコクウ自警団の船団より一足先に、ファイヤードラゴンに騎乗して黒岩島にハルを迎えに来たのだ。

コクウ港町エリアで散々足止めを喰らったティダは、ハルを保護したら、早急に風香十七群島から連れ出そうと考えていた。

しかし巨木の集会所の外に出てみると、乗ってきたファイヤードラゴンの姿が見当たらない。

その代りに、丸一日こき使われ羽を畳む体力すら残っていない、竜胆のドラゴンが地面に蹲っていた。

「ティダさんのファイヤードラゴンなら、反乱海賊たちと話し合いがあるからって、竜胆さんが乗って行きましたよ」

そう返事するハルは、座るユニコーンの腹を枕にして、うつらうつらと舟をこぎ就寝モードに入ろうとしていた。

「あのおクソ王子め。また逃げやがったな！！」

あっ、ハルちゃんもまだ寝ないで、もう少し我慢して起きてっ

ハルは一度眠ってしまうと、最低六時間は熟睡状態から目覚めない。

ティダが慌ててハルを起こそうと近寄ると、全身から蒼い炎を迸らせたユニコーンが、歯を剥き出しにして太く鋭い角でティダを威嚇する。

まさかハルちゃんを巡って、YUYUの他に、聖獣までが恋敵になるとは思ってもみなかった。

そして、穏やかな天女から血に飢えた狂戦士モードになったテイダと、巨大な牛の様な勇ましいユニコーンは、周囲の猫人族が怯え青年が止めに入るまで、半刻以上睨み合うことになる。

クエスト69 完全蘇生魔法を練習しよう(後書き)

ちよっと甘酸っぱい。ニヤリッ

クエスト70 最上位ドラゴン召喚

夜が明けると、黒岩島と青紫島の白い砂浜の上には武器や防具、そして原形をとどめない肉片が転がり、腹を膨らませた数十匹の蒼牙ワニが、気持ち良さそうに寝ころんでいる。

その凄惨な現場を、猫人娘やハルに見せる必要は無いと判断した竜胆は、ゴミを片づけると反乱海賊たちに命じた。

敵の捕虜は奴隷海賊と傭兵が合わせて七十人近く、沈めた船は四十艘を越え、風香十七群島の半分の海域の制圧に成功した。

だが敵の本体、奴隷海賊船島の周辺には大型船が二十数艘集結して、海賊王宮の中には廃王子が立て籠もっている。

ティダから逃げ出した竜胆は、黒岩島のSENと落ち合い、これからの作戦を練る。

「SEN、あんたたち神科学種の持っている、何でも入るカバンを使わせてくれ。」

奴隷海賊たちは海上戦を得意とするが、まさか空から岩が降ってきて攻撃されるとは思っていない」

「ハルはアイテムバッグに石を積めて、乗り込んだ敵船を石の重みで沈めるつもりだったのか。」

それが、運良くドラゴンを使って、岩を上から落とし敵船を空爆して沈める事に成功した」

女神が怒り空から星が降ってくるなんて、種を明かせば単純なマジックだが、相変わらず神懸かりなハルの行動だ。

自分なら、戦いに備えて武器をカバンに詰め込むことはしても、

石ころを詰め込むなんて事は考えつかない。

竜胆の半分力もない、幼い萌黄に戦闘能力を追い抜かされたハルのアイデアが、四十艘の奴隷海賊船を海の藻屑にしたのだ。

「ハルのカバンは竜胆が使って、俺とテイダ三人で空爆すればいい。ハルは戦いには参加させず、島で待機させるのが一番安全だ」

「なあSEN、猫人族と奴隷海賊たちの間では、ミゾノゾミ女神が現れて娘たちを救った噂で持ちきりだ。

そもそも、女神を呼び寄せる儀式の生け贄にするための猫人娘狩りだろ。」

本物のミゾノゾミ女神がすぐ居る事を証明すれば、法王の行う生贄儀式はデタラメだと皆も判るはずだ」

「つまりハルの姿を、戦いの中で人々の前に晒せと。危険を冒せと言うのか？」

SENが強い口調で返事すると、竜胆はそうだと頷く。

確かに竜胆の言う通りではある。

いつまでもハルが、女神の憑代である事実を隠し通せるモノではない。

しかしそれは、自分でさえ扱いかねる狂気と破滅に酔うアマザキに、ハルという玩具を与える事になる。

「判った、できるだけハルが安全な方法で、女神降臨を演出しよう。ただ、ハルを担ぎ出すと、本人が勝手に動き回って、とんでもないことを仕出かさないと心配だ」

わずか一晩の間に、奴隷海賊の七割が『反乱海賊』と名乗って寝返り、残り一割は逃げ出した。

反乱海賊の親玉は若い赤髪のハーフ巨人で、ファイヤードラゴンに騎乗して、上空から巨岩を落として船を沈めるのだ。

あまりに一方的な攻撃で、雇われ傭兵たちは対抗手段がない。

深緑島以外の、他の島で捕らえられた猫人娘はたった十一人で、百人を越える奴隷海賊と傭兵を殺され捕らえられた事を考えると、この戦いの敗北は目に見えている。

更に追い打ちを駆けるように奴隷海賊が逃げ出して、雇われ傭兵だけで船を操ることができず、大型船の漕ぎ手が足りなくなった。

廃王子の側近、狐顔の南天自ら乗り込んだ船も、奴隷海賊が全員逃げ出し走行不能になった。一晩中自分たちでオールを漕いで、やっと奴隷海賊船島に戻ってきたのだ。

そんな疲労困憊の状態で、コクウ港町海上警備艇の船団が第十二位王子 青磁の指揮の元、奴隷海賊島を目指しているという報告が入ってくる。

王の間と呼ぶ最奥の寝室で、奴隷娼婦を弄り楽しんでいた廃王子は、その報告を聞いた途端怒り狂いながら南天を罵倒する。

「俺様は、猫人娘百匹を用意しろと貴様に命じたはずだ。」

それを下級種族の猫人族に敗れたとか、下つ端の奴隷海賊が裏切ったとか、どうでもいい報告ばかりしてくるな!!」

「しかし砂磁さま、殆どの奴隷海賊が敵に寝返り、我々はロクに船さえ動かせないのです。雇われ傭兵も、空からドラゴンの攻撃を喰らっては戦えません。」

それに第十二位王子 青磁率いるコクウ港町警備艇の船団が、この島に向かっているのです」

だが、廃王子は薄笑いを浮かべるだけだった。

「たかが青磁ごとき、なにを脅えている。ヤツは俺の首を穫る度胸もない腰抜けだ。」

俺は父上の言いなりになるより、再び力を盛り返す霊峰女神神殿の法王に味方して、この終焉世界に復讐してやるのだ」

「お待ちください砂磁さま、それでは我々は女神神殿の捨て駒で…」

「仰るとおりです、砂磁兄上。青磁王子は、我が母に言い寄って汚し、双子の兄上を裏切り流刑の罪人扱いにした男。」

他者を食いモノにして、地位と名誉を得た第十二位王子を許してはなりません」

狐男の言葉を遮ったのは、薄暗い船室の中でも鮮やかに光輝く黄金の髪に白面の整った高貴な顔立ち、ハーフエルフの王子が現れる。

「たかが末席の竜胆王子、半巨人の出来損ないが、蠅のような下級ドラゴンで飛び回っているだけです。」

兄上、この風香十七群島そのものが巨大な魔法陣であり、海賊王宮は膨大な魔力の核の上に据えられています。」

魔法陣の魔力と、失われたエルフ秘術をもちいれば、如何なるモノも呼び寄せることができます。

私が格の違いというモノを、ヤツに見せつけてやりましょう。

さあ兄上ご決断ください。外に出て、この竜骨笛を吹くのです」

狐顔の南天は、眉目秀麗なハーフェルフの王子を、苦虫を噛みしめながら見ていた。

あの暗殺事件がなければ、多少粗野な性格をしているが、王を凌ぐ肉体を持ち弟より勇猛な砂磁なら、いずれ次期巨人王候補として頭角を現すはずだったのに。

悔しさを押し殺しながら、主の後ろを付いて海賊王宮の甲板に出る。

そこには何故か、狐男と同じように昔から廃王子に仕える従者が数名いた。

紫苑は廃王子を船首まで連れてゆき、廃王子に手渡した竜骨笛を吹くように言った。

その竜骨笛は、鉱石のように堅く黒光りする竜の角を加工していた、上位竜の角であることがわかる。

廃王子が溜めた息を笛に吹き込むと、巨人族の膨大な肺活量で、笛は高く大きく響きわたり、耳の鼓膜を破裂させるような音の暴力に、甲板にいた者は全員耳を押さええてうずくまる。

背筋が凍るようなおぞましい笛の音に答えるように、上空から鳴き声が聞こえる。

海賊王宮の真上の空にぽっかりと黒い穴が開き、そこからまがまがしい、漆黒の魔物の半身が覗く。

「エルフ族の召還術によって呼び寄せた最上位ドラゴン 不死の力

タストロフ。

「さあ兄上、コレを僕にするために、貴方に忠誠を誓う者を贄を差し出して下さい」

紫苑が贄というのは、甲板に集められた廃王子の側近たち。

「ま、まさか砂磁さま。我々を化け物の餌に……」

王子の濁った灰色の瞳には、何一つ感情の色がない。

巨大な魔物の首が伸びて、人ひとり丸呑みできる口を開くと、甲板の上にいる人間を一人一人喰らう。

「おのれ、呪われたエルフの悪魔め。」

「そうか貴様は、母親と同じように巨人王族が滅びることを願っているのだな」

脅えることも逃げることもせず、腰から下を魔物に食われながらも、南天は紫苑を糾弾した。

端正な美貌の第十七位王子は、その様子を涼しげな顔で眺めている。

奴隸海賊王宮の上空に浮かぶ黒い穴から、頭から長い首、固く黒々とした鱗に幾重にも覆われた胴体、そして蝙蝠を思わせる巨大な鉤翼が現れる。

大蛇のような長い尾を引きずり翼を広げれば六十メートル超えの、不死の最上位ドラゴン カタストロフ。

その圧倒的で凶暴な力は、島の一つや二つ、簡単に滅ぼすことができるのだ。

晴れ渡った青空に突如暗雲が立ちこめ、穏やかな海が波立ち、黒々とした大波が砂浜に打ちよせる。

黒岩島の聖堂前で翼を休めていた二匹のドラゴンが空を仰ぎ、甲高い脅えた鳴き声を上げる。巨人王の王都軍騎獣であるファイヤードラゴンが、酷く脅えていた。

SENは、この状況をゲームの中で何度か体験している。

赤い右目の五つの仮想スクリーンを同時に立ち上げ、衛星からのGPS画像、広域の赤外線生体認識マッピング、ターゲットのステータス確認を行う。

風香十七群島の海域が、巨大な魔法陣のように発光して、その一転に膨大な魔力がそそぎ込まれているのが見える。

そして現れたモノのステータスを確認して、SENは息を飲んだ。

「マジかよ、不死のカスタロフを魔法陣で召喚しただと。」

あの化け物は、百人掛かりで討伐するボスマンスターじゃないか」

ゲーム内では四半期に一度、季節イベントとして最上位ボスマンスターが出現する。

懸賞金は十万単位のウエブマネー、そして激レアアイテムを獲得できる大人気イベントだった。

討伐参加人数枠の百名は速攻で埋まり、討伐完了まで早くて二時間、下手すると五時間に及ぶ集団討伐戦だ。

ボスマンスター討伐に参加するのは、殆どレベル150越えの上級プレイヤー。

それ以下のレベルでは、モンスター攻撃を一発喰らえばデッドリ

ー、参加人数枠からはじき出されてしまう。

つまり、SENレベルの廃プレイヤー百人で、やっと討伐できるモンスター。

そんな化け物と、今ここでマトモに戦えそうなのは……

自分にティダ、そして竜胆と黒岩島の青年のたった四人しかない。

「しかも今、コクウ港町警備艇の船団は奴隷海賊船島を目指している。

もしカタストロフドラゴンと衝突したら、下手すれば船団どころか風香十七群島は全滅する。

もう時間がない、竜胆、すぐ出発するぞー！」

SENは念話チャットでティダと連絡を取りながらドラゴンに飛び乗ると、脅えるドラゴンの首を魔力を込めて叩き、巨大な敵のいる東の空へと飛び立った。

荒れ始めた空と海を睨みながら、ティダはSENからの念話チャットを受けていた。

この戦いにSENは苦渋の色をにじませていたが、狂戦士のティダは血がたぎり楽しくて仕方ない。

同じくSENの念話で就寝モードから起こされたハルは、甘えて頭をこすりつけてくるユニコーンの相手をしながらティダに聞いた。

「カラストロフドラゴンって、このファイヤードラゴンの五倍のサイズ……想像できないよ」

「ガタイがデカイから、直接カラストロフの本体に飛び移って、直接攻撃をする。」

フフフツ、三層に重なった分厚い鱗を剥ぎ取って、ああ、楽しみだ」

ティダは巨木の集会所にいる青年を探して、現在の状況説明をする。少々、血に酔う狂戦士モードのティダに怯えた顔をした。

素手で蒼牙ワニを締め上げる力を持つ青年は、竜胆と同等の戦闘力がある。

ちなみに、ティダが蘇生魔法の練習をたずねると、下を向いて押し黙り、隣にいた妊婦のモモがこっそり指二本示した。

「ユニコーンに乗れるのは、貴方とハルちゃんだけだ。」

凶悪なドラゴンとの戦いに、ハルちゃんを連れてゆけない」

「俺がユニコーンに乗って、そのドラゴンと戦いましょう。」

この美しい島々と猫人族を、命を懸けて守ります。

ではハルさま、ユニコーンを俺に……

ウワツ、な、なんて事だ！！」

戦いの打ち合わせを済ませ、森の中で休むハルとユニコーンの元へ戻った二人は、とんでもない光景を目にする。

「あっ、クジラ兄さん。」

ど、ど、どうしよう、ユニコーンの角が取れちゃった」

さっきからハルに頻繁に頭を擦りつけるユニコーンを、角が痒い

のかと不思議に思い、ハルは太く先端が鋭く尖った『淡雪ユニコーンの角』に触れた。

その途端、角は根元からポロリと自然に折れたのだ。

角が無ければ、微かなユニコーンの面影も消え、ただの牛にしか見えない。

半泣きで戸惑った表情のハルは、取れたユニコーンの角を抱え、その場に立ち尽くしていた。

「ああ、ハルちゃん大丈夫だよ。きっとユニコーンの角の生え替わりで、しばらくすれば新しい角が生えてくると思う」

努めて冷静なティダの声かけに落ち着いたハルは、取れた巨大な角をアイテムバッグの中に収納した。

青年はユニコーンの状態を確認していたが、角が取れた以外はどこも異常はない。

事態は急を要し、一刻を争う。

ティダはファイヤードラゴンに跨ると、空へ飛び立つ。

その後を続いて、青年もユニコーンに飛び乗り追いかけるはずだった。

「ウワウワツッー！？また、僕は宙吊りなの」

宙へ浮き上がる直前、ユニコーンはハルのシャツの襟首を啜える。

背中に乗せた青年が止めるのにも耳を貸さず、再びハルを啜えて、海賊奴隷船島を目指し南の空を駆け出した。

クエスト71 カタストロフドラゴン討伐作戦1

「こ、この馬鹿ユニコーンっ！？信じられん、なんでハルちゃんを連れてくるんだ」

先にドラゴンで青紫島を飛びたったテイダは、追いついた牛ユニコーンがハルの上着を啜え提げているのを見て驚いた。

しかしココは荒れた海の上、しかも聖獣と魔獣は天敵同士で、助けを求めるハルに近づく事もできない。

仕方ない、ハルちゃんはしばらくコノ状態で我慢してもらおう。テイダは気の毒に思いながらも、コクウ海上警備船団との合流地点である、風香十七群島の反対側を目指して天を駆けた。

コクウ港町エリア海上警備艇とコクウ自警船団は、奴隷海賊船島を目の前にして全船が停止していた。

昼前まで晴れ渡っていた空が一転、突如暗雲たち込め強い風が吹き出して、海は酷く荒れ狂う。

そして異変の中心、海賊王宮の上空にばかりと空いた黒い穴、異界へと繋がる空間から召喚獣が現れる。

「ヒイイイ、なんだアノ、黒いコウモリみたいな化け物はっ。

この船よりデカイ、在り得ない大きさじゃないか！？」

海上警備艇の甲板では、船員が空を指さして恐怖に駆られた声を洩らす。

船団を率いてきた第十二位王子青磁は、その禍々しい妖気が鎌首

をもたげた巨大な漆黒のドラゴンに見覚えがあった。

「あれは十三年前、エルフ美姫がこの世界に召還して王都後宮を焼き払い滅した、不死のドラゴン カタストロフ。

まさかあの悪夢を再び、風香十七群島で繰り返すつもりか！！」

海賊王宮に立てこもる廃王子の手下だった奴隷海賊は、殆どが臆胆に寝返ったという報告を聞いた。

もはや孤立無援の廃王子は、世界を憎み、総てを滅ぼそうと魔獣を召喚したのだ。

帆柱の上で偵察を続ける船員が声を上げ指差した先に、二頭の深紅のドラゴンが飛んでくるのが見えた。

それに続いて、同じくファイヤードラゴンと、子供をくわえた蒼い牛が、警備艇を目指して宙を駆ける。

青磁王子は合図の紺煙を焚く指示を出し、女神の使徒である神科学種を船に迎える準備をする。

海上警備艇の甲板に舞い降りた、蒼い炎を全身から迸らせる肥太った巨大な牛は、啞えていた少年を下ろした。

青紫島からほぼ一刻も宙吊り状態で、凍えてガタガタ震えるハルをティダが介抱している。

巨人族の青磁王子は、現れた聖獣の背に乗る黒髪の人間に見覚えがある。

「君は確か、黒岩島聖堂の世話役の漁師だな。

神科学種さまと行動を共にしているというコトは、やはり稀人だったのか。

神獣白波クジラの化身だという噂も、本当かもしれないな」

青磁王子は、自分の支配が及ばない島々にも気を配り、猫人族漁師をまとめ上げる青年と、何度か機会を見つけて話をしたことがある。

続いてドラゴンから降りてきた半巨人の若者、異母兄弟に当たる末席の王子は、頭一つ大柄な兄王子に臆する事無く堂々とした態度で王族独特の挨拶を行う。

「貴方が第十二位王子 青磁兄上ですか。

初めてお目にかかる、俺は第二十五位、末席の竜胆。

異なる世界より召還されたカタストロフドラゴンは、人間や猫人族の手に負えるものではない。

巨人戦士と治癒魔法が使える術師以外は、この海域から避難させてくれ」

若い王子はかなり生意気な話しぶりだが、戦いに馴れた巨人戦士としての覇気が感じられる。

青磁王子は、顔半分を鬼の面で隠しながらも、納得した表情で頷くと声を掛けた。

「私はコクウ港町を統治する 第十二位王子 青磁だ。

我が鍛えあげられた巨人兵は十三人を連れてゆくがいい。

不死のドラゴンを相手にしても、巨人兵は憶することなく戦うだらう」

SENは竜胆と青磁王子の会話を聞きながら、カタストロフドラゴン討伐クエストの過去データを、脳内HDから呼び出して攻略方法を練っていた。

人の三倍以上の力を持ち、常に奴隷海賊を相手にしてきた巨人兵。その戦闘力はかなりのモノだろう。

優れた巨人戦士十三人を人間五十人分と計算して、カタストロフドラゴンの弱点を重点的に攻める作戦で行けば討伐も可能だ。

黒衣の袴姿の武士が船首に立ち、腰にした刀を抜くと海賊王宮の上空に居る魔獣をイチローポーズで示す。

「闇に住まう不死の眷属が、終焉世界の理を汚し、異界の深淵より出し現れた。

しかし、私の女神より与えられし比類なき智謀と心眼を持っていますれば、魔獣に楔を討ち滅ぼすことなど容易い」

突然始まったSENの口上を、船員たちはポカンと突っ立ったまま聞いていた。

銀髪のエルフの神科学種が、苦笑いをしながら青磁王子に語りかける。

「えっと、SENの電波語解説すると、ドラゴンの倒し方を知っていると云っています。

黒衣の神科学種の指示通りに戦えば、カタストロフドラゴンも容易く倒せると部下に伝えて下さい」

「では貴方がた神科学種に、不死のドラゴンをお任せして宜しいのですね。

巨人以外の船団乗員は、万が一のために後方支援とします。

それから反乱海賊の中で、海賊王宮内部に詳しい者を寄越してください。

私はこの騒乱を終わらせるために、奴隷海賊首領の兄に引導を渡しにゆきます」

その言葉に、青磁王子の傍で控える側近が驚き、思い直すように説得している。

奴隷海賊船島を静かな眼差しで眺める青磁王子には、覚悟の色が伺えた。

しかし海賊王宮には、廃王子の他に、アノ紫苑王子も潜んでいるだろう。

「なあSEN、俺が抜けてもカタストロフドラゴンを倒せるか？」

ティダがチャット念話でSENに問いかける。

「なんだと、お前抜きで戦うって、かなり厳しいぞ……」

でもまあ、青磁王子を一人行かせる訳にはいかないし、判った。

もし、カタストロフ討伐報酬で激レアアイテムが出ても文句を言うなよ」

不死のドラゴンを完全に封じるには、その召喚者である廃王子を同時に止めなくてはならない。

二手に分かれて対峙する必要があるのだ。

チャット念話での打ち合わせが完了すると、ティダは青磁王子に向き直る。

「海賊王宮には兄である廃王子の他に、貴方に恨みを持つハーフェルフの紫苑が罫を仕掛け待っているでしょう。」

巨人族の猛者でも、単身で乗り込めば無事では済まず、無残に犬死するだけだ。

貴方は、この土地になくてはならない素晴らしい統治者。

獣どもに命を与える必要はない、私も一緒に付いて行きましょう」

一見貴婦人の様な容姿のエルフの神科学種は、一週間前この警備艇の甲板で、奴隷商人の凶悪な手下達を半死半生にして、強欲な奴隷商人にドS調教を施したのだ。

そのティダの強さは、運悪く調教場面を見てしまった乗組員たちがよく知っていた。

青磁王子に付いてくれるなら、これ以上力強い味方はいない。

「ティダさまが共に海賊王宮に行かれるとは……」。

おおっ、私の願いは神の届いたのですね！！

私は日々ミゾゾミ女神像を前にして、ひたすら祈っております
た。

我ら兄弟の絡まり身動きできない宿業から、どうか解放して下さい
い
「

今までの落ち着いた声色とは違う、青磁王子の喜びを隠しきれない声を聴く。

なるほど、緊急クエストが継続中なのは『未クリア条件』が存在したのか。

ティダはそう独りごちた。

「SENさん、僕も何か、回復役とか手伝える事はないかな？」

皆に忘れ去られていたハルが控えめに聞いてくると、SENは喜

色満面でハルの肩に手を乗せた。

「この戦いは圧倒的に相手有利だが、我々には『錦の御旗』が存在する。」

さあ、この衣装に着替えて、できるだけ皆を鼓舞するんだ！！」

SENがハルの目の前に差し出したのは、鮮やかな紅と白の衣装。えっ、またお約束の……コスプレですか。

ハルは巫女服をしぶしぶ受け取り、アイテムバックに収納しようとして、ふと何かを思い出す。

「この大きな淡雪ユニコーンの角、神官の杖には大きすぎるんだけど、ちゃんと使えるかな？」

バッグから出てきたのは、ハルの背丈ほど長く巨人の腕ほどの太さの、一点の濁りもない純白な聖獣の角。

あまりに巨大な角は、とても神官の杖として使えない。しかしソレを見たSENの目の色が変わる。

「これほど巨大な聖獣の角、呪杖として扱える力を持つ神官は一人しかない」

今は漁師を名乗っているが、竜胆並みの力と法王白藍の魔力と祝福を持つ、クジラ青年にしか扱えない得物だ。

鳳凰小都の黒鷲大神官は、『淡雪ユニコーンの杖』でカミラの飼われていた塔を、丸ごと凍て封じた。

それと同じ方法で、不死のドラゴンに致命傷を与えることが出来るかもしれない。

ハルが肥太らせたユニコーンの角が偶然取れて、扱うにふさわし

い人間の手に渡る。

単なる偶然と納得できるものではない、約束された大きな意志の存在を感じずにはいられない。

これからの戦いにおける布石、全ての準備は整った。

SENの全身に武者震いがはしる。

漆黒の翼を広げると、天が覆われたような錯覚を起こすほど、巨大なカタストロフドラゴン。

そのドラゴンの鼻先に、肥え太った体格から想像できない素早い動きで、蒼い炎を撒き散らしながら牛が宙ユニコーンを駆ける。

ユニコーンの背に乗る眼帯をした青年は、白い鍔のような杖でドラゴンの目を狙い攻撃する。

鋭い角先で傷つけられたカタストロフの鱗は、驚くほど簡単に剥がれ落ちる。

不死の魔獣は、発光するドス黒い血を顔面から流しながらも、怒り狂いユニコーンを追いかけて回す。

そうして海賊王宮上空からおびき出されたカタストロフドラゴンは、白い砂浜の浅瀬に着陸した。

「いいか、カタストロフドラゴンの硬い三層の鱗で覆われた胴体に攻撃しても無駄だ。倒せない。」

飛龍討伐の基本、弱点は薄い翼の膜。翼の部位破壊だ。

竜胆は右翼の攻撃、俺は左翼を攻撃する。

あの巨大なコウモリを、地上に引きずり落とせ！！」

カラストロフドラゴンの翼に、一斉に数十本の縄が放たれ、縄を伝って巨人戦士がドラゴンの翼に飛び移る。

コウモリの羽のような薄膜の翼を、手にした大剣や斧で切りつけ傷つける巨人戦士。

怒り狂うカラストロフドラゴンは、自らの爪で翼を掻きむしり、払い落とす。

竜の巨大な爪に腕を裂かれ、転がり落ちてうめき声を上げる新米巨人兵士のそばに、長い黒髪を束ねた巫女姿の美少女が現れる。

「どうか怪我をみせてください。」

「だいじょうぶ、わたしがすぐに怪我をなおしてさしあげます」

少女が男の傷に手をかざし、歌うように呪文を唱える。

焼けるような傷の激痛が消え、裂けて骨まで見えた部分に新たな肉が被さり、裂傷は瞬く間に癒える。

目の前の少女は、新米兵士が今朝も祈りを捧げた、ミゾノゾミ女神そのものだ。

「あ、あなたはまさか、女神さまか？」

ニコッ

「がんばって、ワタシのためにわるいドラゴンをたおしてください」

ぎこちなく笑う女神の顔をしばらく見惚れた後、新米兵士は雄叫びをあげて、再びドラゴンに向かってゆく。

ハルはその姿を見送った後、白い着物の袷からSENから渡され

た回復ポーションを取り出すと、一気に飲み干した。

「本当は、怪我人に回復ポーションを飲ませた方が傷も完全に治るんだけど……」。

巫女さまに励まされて、直接癒された方が士気が上がるんだって。騙してゴメンね、僕は偽物の女装女神なんだ」

そんな憂いを帯びて心配げに見つめる女神の姿に、戦う男たちの士気は更にあがる。

「おらっ、気合いが足りねえ！！見るよ、女神さまが我らを心配しておられるぞ」

「女神さまは、俺の骨がみえるほどの大怪我を、一瞬で治してくれた。さった。」

「ミゾノゾミ女神さま万歳」

それは、屈強な巨人族戦士を女神は微笑みひとつで虜にしたと、後の世で語られる。

終焉世界のミゾノゾミ女神神話に、新たな1ページが加わった瞬間だった。

クエスト72 カタストロフドラゴン討伐作戦2

第十七位王子 紫苑の召喚術により、海賊王宮の上空に現れた不死のカタストロフドラゴン。

SENと竜胆そして法王白藍の魂を持つ青年、コクウ港町の巨人戦士十三人は、魔獣の翼を直接攻撃していた。

人の力で何度切り付けても殆どダメージを与えられないドラゴンも、巨人族が重い鈍器で力任せに殴りつけると、数回で三重に覆われた鱗が砕け剥がれる。

露出したカタストロフドラゴンの皮膚は意外に柔らかく、続けて降り下ろされた大剣が肉に深く食い込んだ。

「よっしゃあ、堅い鱗は鈍器で砕いて、コウモリ翼の付け根部分を全部雀つちまえ。」

ドラゴンに弾きとばされないように、しっかり足を踏ん張れよ」

ハーフ巨人の竜胆は他の巨人兵士よりひと回り小柄だが、身の丈ほどの分厚い鋼を鍛えて作られた大剣を、急所を狙いの確に振り下ろす。

カタストロフドラゴンは、纏わりついた巨人戦士を振り払おうと体を激しく震わせ、宙に逃げようと巨大な翼を羽ばたかせる。

すかさずSENが魔獣の腹の下に潜り込むと、左足にしがみつき、声を張り上げて皆に指示を出した。

「全員、一旦ドラゴンから飛び降りろ。」

そして、すぐ水の中に潜れ。

カタストロフドラゴンの、炎のブレスが来るぞ!!!」

「これは、なんかやばそうだ。息の続き限り、深く海に潜れ!!」

勘の良い竜胆の指示で、大柄な巨人戦士は盛大に水しぶきを上げ海の中に身を隠す。

コウモリ翼を広げた姿は漆黒の闇を思わせる、不死のカタストロフドラゴンは、クジラ青年の攻撃で両目からドス黒い溶岩のような血を流しながら、高周波の耳をつんざく吼声をあげる。

空を駆ける俊足の牛は、離れた砂浜にいたハルを啜ユキゴンえると、ドラゴンより速く空へ急上昇する。

カタストロフドラゴンの鋭い牙の並んだ口が開く。

不気味な、ブチブチと肉の筋が千切れる音、口が更に裂けドラゴンの頭部すべて巨大な黒い穴になる。

煉獄炎の赤い舌が伸びてチラチラと見え隠れする、カタストロフドラゴンは喉奥から何かを吐き出そうとしていた。

ゴゴボツ　ゴボリ　ゴツ

ゴオオオオーオオオ

それはカタストロフドラゴンの体と同じぐらいの巨大な炎の塊が、裂けた口から勢いよく吐き出された。

空から太陽が落ちてきたと錯覚するような火焰弾が、衝撃波を伴って投下され海の上に落ちる。

先ほどまで浅瀬の海に巨大な穴が空き、海水が炎の塊に触れ音を立てて蒸発する。

海底まで大波が砂をさらい、深く潜っていた巨人たちは水面まで巻き上げられる。

水の中をきりもみ状態で流され、溺れまいと必死で波の上に顔を

出した竜胆は、魔獣の背中に居るSENの姿を見た。

「海の上に炎属性のカタストロフドラゴンを、何故属性無視で召還するんだ。」

もしかして終焉世界は、魔法属性の知識すら失われてしまっているのか？

ちょうど具合よく大気が乱れ、湿った空気と雷雲が発生している。ボスモンスター討伐クエにおいて”ニート四天王”の名を欲しいままにしている俺が、正しい術の行使を教えてやる」

SENの右手に握られた細い数本の針は、ピリピリと静電気を起こして小さく放電する。

これは雷雲を引き寄せるための撒き餌、それを魔獣の背中から宙に放つ。

黒々とした雲の切れ間から、一瞬鋭い稲妻の光が見えたのを合図に、空を縦横無尽に稲妻が走り出す。

風向きに逆らい、巨大な雷雲がカタストロフドラゴンの上に引き寄せられる。

「^{いかすぢ}雷よ集え鳴り響け 稲妻鷹落！！」

呪文詠唱と同時に、SENは手にした宝刀ソハヤノツルギをドラゴンの背に突き立てる。

魔獣にとっては、それだけでは蚊に刺されたほどの痛みしかない。しかし避雷針となった刀の上に、引き寄せられた稲妻が雷の雨を降らせる。

一瞬、不死のドラゴンの全身から白い光が放たれ、焦げ臭いをさせたカタストロフドラゴンが空から落ちてきた。

「討伐クエにおけるカラストロフドラゴンの行動パターンは、戦闘状態で十五分から二十分に一度、憤怒状態で最上位攻撃の炎のブレスを吐く。

それから五分間は上空で無防備状態になり、その隙について攻め続ければ、ドラゴンは耐えられずに再び地上に降りる。

これで1ターン、カラストロフドラゴンの体力の1割ぐらい削れただろう。

今の様な攻撃を、あと十回繰り返せば魔獣の体力のほとんどを削れる」

「はあ、なに冗談をつ、こんな戦いを十回も繰り返すだと。

無理だ、狩れるわけねえ。命がいくつあっても足りないぞ!？」

海では巨大生物とよく遭遇するが、初めての魔獣相手の戦いにベテラン巨人戦士も悲鳴を上げる。

「俺がオアシスで砂漠竜を狩ったときは、一昼夜休みなしで戦い続けたぞ。

砂漠の民は、魔獣を自らの力が倒した。

巨人戦士はその砂漠の民より軟弱なのか!！」

海からあがった竜胆が、頭一つデカイ巨人戦士に声を荒げ厳しく怒鳴りつけた。

巨人王に酷似した雄々しい表情で、背負う大剣を手にすると、再び地上の浅瀬へ落ちてくるドラゴンに向かって駆け出した。

その後ろを、ハルの治癒魔法を受けた新米巨人戦士が付き従っている。

「やっぱり竜胆さんは凄いね。」

巨人戦士の中では小柄で目立たなく埋もれてしまおうと思ったけど、最前線で皆を率いて戦っているよ」

上空でユニコーンに啜えられたままのハルが感心したように呟くと、その背に騎乗した青年が答えた。

「獅子の生まれなら、見た目が子犬のようでも、時が経てばいずれ獅子になる。」

女神降臨の場にいた竜胆王子は、いずれ多くの者の頂点に立つでしょう。

不思議ですね、俺は知識も記憶も失っているはずなのに、何故かその事が判るのです」

黒髪の青年はそう答えると、再び純白のユニコーンの角を握りしめ魔獣へ挑む。

荒れる海の中、木の葉のように頼りなく進む小舟。

紺色のターバンを頭に巻いた痩せ男の漕ぐ舟は、互いに太い鎖で止められた大型海賊船の隙間を縫いながら、過去に”海に浮かぶ巨人王族の白亜の宮殿”と呼ばれていた豪華客船、海賊王宮を目指す。

小舟に同乗しているのは、灰色の薄汚れたローブで全身を覆った巨漢と細身の二人の人物。

船は海賊王宮の裏へと回り、主にゴミを破棄する薄汚れた勝手口の扉から中に進入しようとしていた。

「おい、貴様ら。誰の許可があつて、勝手に海賊王宮に入り込もうとしている」

無人と思われたその勝手口で、運悪く見回り警備の傭兵に見つかる。

痩せ男はターバンを取ると禿げ頭をへこへこと下げながら、傭兵に話しかけた。

「あつしは、奴隷海賊首領の廃王子さまに言いつけられて、奴隷娼婦を連れてきたんです。

今、海賊王宮の正面門はヤバそうじゃないですか。

他の連中が奴隷娼婦を見つけたら、廃王子に届ける前に襲われちまう」

必死に弁解をする痩せ男の後ろに立つ、細身のローブを着た者が深く被ったフードから顔を覗かせる。

白陶器のようななめらかな美しい肌に、鼻筋の通った顔立ち。

切れ長な目に長い睫が影を落とし、薄い紅桃色の唇が妖艶に微笑んでいる。

この場に居るのがあまりに不自然な、まるで天女のような女。

男はその姿を舐めまわすように見ると、興奮したかすれ声で返事をする。

「ああ、そうだな、表の雇われ傭兵は皆気が立っている。

商品の猫人娘には手を出せないから、他所の女を見れば襲ってくるだろう。

畜生、俺たちが殺されまくっているのに、廃王子は女と……」

目の前で微笑む天女に見とれ、背後に回った巨漢の気配に気づかなかった。

後ろから太い腕が頭を抱え込むと、ゴキリと鈍い音がして、首があらぬ方向をむいた男は膝から崩れ落ちる。

口から血泡を吹く男から手を離す、顔半分鬼の面で覆われた青磁王子は、元奴隷海賊の瘦せ男に軽く頭を下げる。

「命がけで、ここまで案内してくれて感謝する。」

お前たちの奴隷海賊という身分は、必ず鉄紺王に進言して取り消させよう」

瘦せ男は礼を言われた事に感激した様子で、顔を赤らめ早口で返事をする。

「俺たち奴隷海賊は、コクウ港町領主 青磁さまの温情で、海賊でも普通の漁師と変わらぬ立場で皆に接してもらってた。その御恩が返せるのなら俺は何でもします」

風香十七群島の奴隷海賊は、元は普通の漁師や海賊の下っ端が多い。

運悪く、漁場を支配していた廃王子に駆り出され、巨人王暗殺という謀反の手伝いをさせられたのだ。

それに同情した青磁王子は、陸に上がれば家畜以下の奴隷身分になる奴隷海賊たちを、コクウ港町では普通の漁師と同じにしたのだ。

フードを脱ぎ色鮮やかな深緑のアオザイ風衣装になったティダが、何か異常を感じた様子で、二人を黙らせると聞き耳を立てる。

暗い海賊王宮船内の廊下の向こうから、不気味な虫の羽音が近づ

いて来るのが判る。

「どうやら、ハーフェルフ王子 紫苑の得意なエルフ秘術とは、魔モノを呼び寄せ意のままに操る召喚使役術か」

ティダは、七色の『神の燐火』を灯す紙細工を暗い廊下に放つ。明るくなった廊下に立つエルフの神科学種は、天女のような姿には似合わない狂戦士特有の残忍な笑みを口元に浮かべる。

その細い両手には、元は銀色を放っていたであろう使い込まれた血塗れの鈍器が握られていた。

騒がしい耳障りな虫の羽音が大きくなり、長い廊下の先から黒いマントを羽織っているらしい人影が見えた。

羽音を立て群れるのは、尻に黒く太い巨大な針を持つ死黒蜂と呼ばれるスズメバチによく似たモンスター。

その死黒蜂に全身びっしりと隙間なく刺された傭兵らしき男が、夢遊病者のように廊下を彷徨い歩いている。

その足がピタリ止まると、全身に張り付いていた黒蜂は一斉に飛び立ち、人型の中身は全て喰われ白い骨が現れる。

「ふっ、このタイプのダンジョン攻略はお姉さまの得意とするところ。」

青磁王子は、少しの間後ろの下がって眺めていてください。海賊のお前は、蜂に刺されたくないなら全速力で逃げて海に飛び込め」

群れて密集した死黒蜂が、まるで闇のように廊下いっぱい広がって迫り来る。

敵を待ち構えるティダの両手に握るメイスから、左右の電撃が流れ合っている。

雷を宿す鈍器を黒蜂の群の前で振り回すと、まるで蠅叩きをして

るかのように見えた。

しかし左右対称に振り回した電撃属性のメイスは、次第に雷光の軌跡が一つの魔法陣をかたちどる。

テイダの前面の空間に浮かび上がったのは、電撃を帯びた魔法陣。魔法陣の向こう側にいるテイダを襲おうと、その間をすり抜けようとすする死黒蜂は、次々と焼かれ灰になる。

「ふふつ、電撃魔法陣を網戸にするとはい、なんともチープな発想だ。狂戦士モードのお姉さま相手に、貧相なモンスターなんか寄越してくるなよ。」

まだオアシス大神官の黒蜘蛛や、鳳凰聖堂大神官のカミラの方が手ごたえあったな。

第十七位王子 紫苑は、エルフの知識をひけらかす割には読みが浅い。次期王としての素質に欠ける」

羽音の煩い害虫の目を通して、どこかで自分たちを観察しているのだろう。

冷淡な口調で「紫苑は使えない」という嘲りを、隣にいる青磁王子に聞こかせる。

廊下を埋め尽くす数千数万の死黒蜂、その耳障りな羽音が急に唸るようなくぐもった音に変化すると、人型のシルエットを形作る。

背の高い、巨人にしてはかなり細い体格の男のシルエットが現れ、優雅な仕草で王族独特の挨拶をする。

「おひさし… Bu… 第十二位王子 青磁兄上。

去年王都… Bu Bu… 挨拶にお会いして以来ですね。

このような… Bu… 兄上の前に現れるのは、私も想定外で… Bu…

… Bu… 野蛮なエルフの言葉には、黙って聞いていらね… Bu…

…」

死黒蜂の羽音が言葉に変換される。酷くプライドを傷つけられ、憎しみの籠った声色なのが判る。

ティダは口元の冷笑を浮かべたまま、害虫の進入を防ぐ魔法陣をすり抜け、紫苑の人型を形成する蜂を一匹捕まえる。

「ここは耐えておとなしく聞いていれば良いものを、単純な誘い文句に引っかかって気配を表すとは情けない。

本当に貴様は竜胆の足下にも及ばない、見かけ倒しで考えの浅い凡庸な王子。

貴様の自慢する高貴なエルフの血筋も、これでは宝の持ち腐れだ」

ティダの容赦ない辛辣な物言いに、紫苑のシルエットはまるで人のように飛びかかってくる。

それより早く、ティダは魔法陣の後ろへ下がり、獲物が罠に掛かるのを眺める。

まるで蜘蛛の巣に囚われたかのように、電撃魔法陣に絡めれる死黒蜂の人型。

ティダは手を開いて、自分の掌を刺した蜂を放つ。

逃げ出した死黒蜂は、元の場所、紫苑の人型へ戻ってゆく。

その途端、電撃魔法陣の光が白く膨れ上がり、絡め取られた死黒蜂は全て焼きつくされ灰になった。

「これで、術の痕跡を追えば、紫苑王子がどこに潜んでいるのか判る。あのハーフェルフは私が相手します。

青磁王子、外では皆が不死のドラゴンと必死で戦っている。

貴方は双子の兄 砂磁と会い、この騒動を終わらせてください」

ティダはそう告げると、長い廊下の影から現れる雇われ傭兵たちに向かって駆け出し、嬉々として狩りはじめた。

クエスト73 カタストロフドラゴン討伐作戦3

カタストロフドラゴンとの戦闘は半刻が過ぎた。

二手に分かれてドラゴンの左右の翼を攻撃していた巨人戦士たちは、いつの間にか竜胆の居る片方の翼に集中している。

大声を張り上げ仲間を奮い立たせ、巨人戦士の中でも抜きん出た攻撃力で戦う王子の姿に、自分も傍で一緒に戦いたいという気持ちがあるのだろう。

大柄な巨人戦士が十人余り、片翼に群がり攻撃を始めると、憤怒状態で飛び立とうとしたカタストロフドラゴンはバランスを崩して浅瀬に腹から転げてしまう。

右翼が開いたままダラリと地面に付き、その翼の付け根部分を集中攻撃していた竜胆は、息を弾ませながら巨人戦士たちに指示を出す。

「こいつの翼の腱を切ったぞ、もう飛ぶことは出来ない！！」

翼に縄を掛ける、使い物にならないコウモリ羽をもぎ取ってやれ」

竜胆の掛け声に、浅瀬に降りた巨人戦士は全員で、翼に掛けた太い縄を息を合わせて引き始め、魔獣の憤怒の咆吼が悲痛な鳴き声に変わる。

「ハハツ、なんて、メチャクチャな戦い方だ」

SENは、巨人戦士達の無理矢理ゴリ押する戦闘方法に、額を押さえ呆れながらも笑い声をあげた。

巨人族は人間の三倍の戦闘力があると理解していたが、集団にな

れば巨人戦士は人間の五倍、十倍にも戦える。
彼ら種族が、終焉世界を力で支配する覇者であることが納得できた。

ミシミシと肉が裂けて千切れる音がする。

カタストロフドラゴンへ攻撃する手を休めない竜胆は、全身ドス黒い返り血で赤く染まっている。

ユニコーンの背に騎乗し白い巨大な角を手にした青年が、渾身の力を込めて泥のような黒い色をした魔獣の右目を貫き、眼球を抉りだす。

浅瀬から立ち上がることが出来ずに、腹で砂の上を這いずり回るカタストロフドラゴンに、縄ごと引きずられそうになりながらも巨人戦士は足を踏ん張って耐える。

SENも竜胆と一緒に剣を振るい、ついに右のコウモリ翼を断ち落とした。

片目と片翼を失ったカフスタロフドラゴンが、頭から前のめりに海の中に倒れる。

そのカフスタロフドラゴンとの戦闘の一部始終は、後方に避難していたコクウ海上警備船団からも見えた。

「す、凄ええええ！！あの悪魔みたいなデカイドラゴンを、巨人戦士がシトメたぞ！！」

「俺たちには、ミゾノゾミ女神様が付いてるんだ。魔王子の呼び寄せた魔獣なんか、簡単に倒せるぞ」

警備艇のマストに登り、戦いの様子を食入る様に眺め、勝利の歓声を上げた見張りの船員は、しかしカタストロフドラゴンの異変に声を失う。

魔獣は水の中から体を起こすと、全身を激しく振るわせ、頭を天に向け憤怒の吼声を上げる。

「いくら吼えたところで、翼が無けりゃ飛べない……な、なんだ！」

千切りとられた翼の付け根の裂け目から、コブの様に新たな肉が盛り上がる。

黒い二本の骨が生えて薄皮の膜が張られ、以前より歪な形の、まるで壊れたコウモリ傘のような小さな翼が二枚に増えて現れる。

クジラ青年が挟り取った右部分の窪みが膨れ上がり、中から一回り小さな眼球が二個、収まりきれずに飛び出した形で再生された。

「まさか、欠損部位が増殖するのか！！」

そんなのカフスタロフドラゴン設定には無かった、コレは……」

浅瀬から体を起こしたカフスタロフドラゴンが、砂地を蹴り異形の翼を広げ空へと舞い上がる。

地上の浅瀬には、さっきまで翼を縄で引いていた巨人戦士が全員残っていた。

竜胆側に集ったのが、ここで災いしたのだ。

魔獣の真下にいる巨人戦士は慌てて逃げ出すが、すでに憤怒状態

から裂けた口で、巨大な炎の塊を吐き出そうとしている。

「だめだ、このままカフスタロフドラゴンの火焰弾を喰らえば一溜りも無い、巨人戦士は全滅だ！！」

カフスタロフドラゴンの背にいる竜胆とSENが必死に攻撃するが、再生増殖により強度を増した鱗で覆われた翼はびくともしない。

パニック状態で砂の浅瀬を逃げまどう巨人戦士の中に、緋衣の巫女姿が居た。

「ビビるなビビるな、僕はできる僕はできる、あれはデカイコウモリだっ、おちつけおちつけ」

ハルはカスタロフドラゴンの真下に立ち、震える手でアイテムバッグから朱色の和弓を取り出す。

数回深呼吸を繰り返し返し、息を整え、肩の力を抜く。

赤い弓に矢を番えると、神弓の力が発動して魔獣の頭部が目の前1メートル先に見えた。

魔獣の羽ばたきによる突風に濡れ羽色の翠の黒髪があおられるが、体勢を崩すことなく、流れるような美しい引き成りを描く。

神事の行為を思わせる巫女神の姿に、その場にいる巨人戦士は逃げるのも忘れ、息を潜めその様子を見つめる。

狙いを定め、放たれた赤い神矢は、

炎の塊を吐き出そうとする魔獣の下顎に突き刺さり、そのまま上顎まで貫く。

続けざまに巫女は矢を三本放つ。
それは正に神業。

カフスタロフドラゴンの裂けた口は、神矢によって縫い止められる。

SENと竜胆は危険を察知し、魔獣の背から飛び降りて海の中へ飛び込む。

ハルの放った神矢により、無理矢理閉られた魔獣の口の中で、炎の塊は荒れ狂う。

カスタロフドラゴンの頭部が、まるで風船のように膨れ上がり、火焰弾が暴発した！！

ビシャ、ヴァシャアアアア――

バラバラと周囲に魔物の細かい肉片と血糊が飛び散り、カフスタロフドラゴンの首から上は失われたかのように見えた。

「でかしたぞハル、今度こそ倒したか?!」

「いやダメだ、コノ化け物、また再生するっ」

魔獣の吹き飛ばされた口の部分から醜く爛れた肉が盛り上がり、上顎の下に新たな上顎が、さらに横からも上顎らしきものが再生増殖され、千切れ飛んだ舌先から触手の様に二本三本と舌が生えてくる。

目の在ったの部分には、まるで卵が生まれるかのようにボコボコと数十個の眼球が飛び出している。

それはオカルト映画を見ているような悍ましい魔獣の再生姿に、その場にいる全員が言葉を失う。

頭部の複眼が蠢き、何度も裂けてイソギンチャク状の口には鋭い牙が生え、歪な黒い三枚のコウモリ翼はドラゴンとしての原型を保っていないかった。

三本の神矢を放つ代償に、生命力を根こそぎ奪われたハルは、砂地に座り込み動けなくなる。

再生を完了したカスタロフドラゴンは、色鮮やかな緋衣の人間に狙いを定め、両足の鍵爪で引き裂こうと襲いかかる。

そこへ、風を切って駿足の聖獣が駆け込み、ハルを庇い立ちふさがる。

騎乗する青年は、純白の巨大角を振り上げると、カスタロフドラゴンの左足の甲に突き立てた。

法王 白藍の魂を持つ青年は、失われた記憶の中にある、氷属性の高位魔法呪文詠唱を唱えた。

「気高き氷の聖霊よ、汝の敵を凍て尽くせ、永久に光なき氷に閉ざされん

極 零 氷 封 印」

魔獣の足に深々と突き刺さった白い角は、そこから冷たい冷気が溢れ出し左足を凍てつかせる。

しかし高位の魔獣と聖獣の力は拮抗し、巨大な淡雪ユニコーンの角を持つとしても、脚部分を僅かに凍らせることしかできない。

「そうか、こいつはカミラと同じだ。無限増殖を止めるには永久凍結の氷魔法で封じるしかない。」

しかし、これだけデカい魔獣を丸ごと凍らせることができるのか？」

武士のSENや狂戦士のティダは、氷属性の高位魔法を使えない。炎属性のカスタロフドラゴンを上回る氷属性魔力を行使できるのは、今ここに居ない『王の影』だけだ。

竜胆は海から上がると、巨人戦士たちを集め隊列を組む。

青年に助け出され、ユニコーンの背に乗ったハルもそこへ合流し、全員が臨戦態勢で待ち構える。

しかしカスタロフドラゴンは頭を巡らし、手前にいる竜胆たち巨人戦士を無視して、後方の海上で待機しているコクウ海上警備船団を見ていた。

その様子に気付いたSENは、すぐさま魔獣に切りかかろうとしたが、一瞬早くカスタロフドラゴンは三枚のコウモリ翼を広げると、方向を転換する。

「おい、ヤバいぞ。召還主の廃王子は、ターゲットをコクウ海上警備船団に変えた!！」

海賊王宮の狭い廊下で起こった戦闘は、多くの屈強な雇われ傭兵を天女のような姿をしたエルフが一方的に殴り倒すというものだった。

同行の青磁王子は、廊下を突き当たり左右に豪華な装飾のされた扉を前にして、敵の最後の一人を楽しそうに腹蹴りでトドメを刺すティダに声をかける。

「ティダさま、今は沸いて出てくる雑魚を相手にする時間はない。どうやら、この船の内部は昔から変わって無いようだ。

私の知る隠し部屋から近道をして、兄の元へ急ぎましょう」

顔半分を鬼の面で隠す王子は、どこか懐かしむ表情で客室扉の反対側にある巨大な鏡に手をかざす。

周囲を映し出していた鏡のような表面は、青磁王子が触れた掌部分から反応して色を変え、黒地に竜の文様が描かれた石の扉が現れる。

観音開きの扉の先には、白い大理石の敷き詰められた真っ直ぐの廊下が続く。

これはリアルの指紋認証技術に似た魔法だ。

驚いた様子のティダに、厳つい表情の青磁王子が話す。

「ココは昔、エルフ美姫が逢い引きの相手を招き入れるために利用した隠し部屋です。

私も一度だけココから通いました」

桃色漂う内容を生真面目に告げる青磁王子に、後ろを歩く美しいエルフが思わず吹き出す。

「一度だけにしては迷いの無い足取り、随分と通い慣れてた様子ですね。

船の主も、コノ隠し部屋の事は知らないでしょう。床に積もる

埃には、誰の足跡もない」

隠し扉の指紋認証は、瓜二つの双子を区別する方法。
今は無きエルフ美姫の本命は、この男だったかもしれない。

クエスト74 カタストロフドラゴン討伐作戦4

海賊王宮の隠し部屋へと繋がる、白い大理石の敷き詰められた廊下に足音が響く。

コクウ港町領主である、第十二位王子 青磁と、その後ろから歩く長い銀髪のエルフは優雅な足取りで進む。

たどり着いた部屋には光源が無く真つ暗で、ティダは”神の燐火”の宿る紙細工をアイテムバッグから数枚出して放つ。

七色の光に照らし出された室内は、中央に豪華な装飾を施した天蓋付きベットが置かれ、繊細な彫刻の施されたクローゼットなど家具や調度品があり、部屋が身分有る女性の寝室だと判る。

だが、どこか奇妙な部屋だ。

家具や調度品の表部分には全て鏡がはめ込まれ、見上げる天井のステンドグラスも色鏡で造られている。

そして、鏡の中に映し出されているのは、部屋の中とは異なる別の場所の景色。

「ふうん、彼女は随分と、素敵な趣味を持っていたですね。

ココは、現代風リアルにいうと警備室のモニタールーム。

海賊王宮の内部を、すべて覗き見る事の出来る監視部屋か」

ティダは、正面の壁に描かれた女の肖像画を眺める。

黄金の髪にエルフ族特有の青白いほど透き通った肌、ふくよかな胸元にダイヤの首飾り。

深紅のドレスを身にまとった薔薇のように華やかな姿の彼女が、この隠し部屋の主、エルフ美姫なのだろう。

青磁王子はその肖像画を目を細めて見つめ、先ほどと同じように掌をかざすと、絵を挟んで左右の壁が切り替わり、窓の様に鮮明な船外の景色を映し出す。

荒れる海に黒々とした雷雲がたちこめた空、その浅瀬でカタストロフドラゴンと巨人戦士たちの戦闘が続いている。

この海賊王宮の奥深い隠し部屋に映し出された映像は、まるで硝子を通して目前で行われているように見えた。

戦いは巨人戦士たちの優勢で、カタストロフドラゴンが目を突かれ翼をもぎ取られて、海の中に頭から倒れる。

「鍛えぬかれた巨人戦士たちは、赤牙鮫や暴れ鯨の巨大生物、時には奴隷海賊を相手にする。」

しかし、不死の魔獣に対してコレ程戦えるのは、それを率いる竜胆の力だろう」

青磁王子が直々に鍛えたコクウ港町の巨人戦士たち、その勇ましい戦いの様子に、映し出された映像だという事も忘れ身を乗り出して見つめる。

「まさか、この船にネズミの潜り込める場所があったとは驚きだ。不死のカタストロフが、そう易々と倒されると思っているのか？」

隠し部屋の入り口に現れた二つの人影。その声に慌てることなく、青磁王子はゆっくりと振り返る。

エルフ美姫の隠し部屋までの扉は、わざと後を追えるように開け放っていた。

美姫に狂い反逆者と化した廃王子と、母である美姫の血に執着す

るハーフェルフの紫苑王子をおびき寄せせるのに、この魅惑溢れる部屋は絶好の場所だ。

「久しぶりだな、砂磁兄さん。

とても長い間、皆に優柔不断と言われたが、随分と迷ったよ。しかし俺はもう決心した。

巨人王直命、そしてコクウ港町の治安を守る領主として、宿敵霊峰女神神殿に荷担する奴隷海賊首領、魔王子 砂磁を討伐する」

一卵性の同じ容姿で生まれた双子、しかし過ぎた十数年の年月が互いの顔に刻まれていた。

焼け爛れた顔半分を鬼の面で隠しながらも、理知的な顔立ちに領主として落ち着いた態度の弟王子と比べ、海賊王宮という船に閉じこもり惰性で生きた魔王子は、王を凌ぐといわれた肉体も衰え、土気色の顔色に猫背気味で背が縮んでみえた。

その睨み合う双子の兄弟を無視して、美丈夫なハーフェルフ王子紫苑は、エルフ美姫肖像画の前に立つ天女のような神科学種の姿を捕らえ、感嘆の声を上げた。

「ああ、生前の姿そのままの、なんと麗しい我が母の肖像画だ。

そして、美姫の光輝く黄金のような姿を前にしても、美しい貴女は冷たい白銀のように輝く。

まさにエルフは、神が作りし選ばれし種族だ」

紫苑は、熱に浮かされたように、芝居がかった歯の浮くような台詞を口にする。

だが中の人おっさんのティダには、背中が痒く虫酸が走るだけで、逆に喉元を締め上げたいほどの加虐心を駆り立てられる。

否、この状況で浮いた台詞を自分に聞かせるのは、何かおかしい？

部屋の中を漂う空気にひどい違和感を感じながら、ティダは相對した双子の王子を見た。

「砂磁兄さん、何故巨人族を裏切るんだ。

あの法王とそこにいる紫苑は、巨人王族の力を削ぐ為に争わせようとしてるんだ」

「馬鹿、バカかーオマエはああ。巨人族は力こそ総てだ！！

暴力王 父上を倒さなければ、いつまで経っても俺様は巨人王になる事ができない。

お前の様な腰抜けが、俺の何を、はあ、ぐあわああ、がはっー
ー！！！」

突然、狂ったように喚きながら頭をかきむしる魔王の奇声と、壁に映し出されたカタストロフドラゴンの吼声が重なる。

巨人戦士目がけ、炎の塊を吐き出そうとしたカタストロフドラゴンの頭部を、赤い弓を持ち矢を番える白衣に緋袴を着た黒髪の巫女、ミゾノゾミ女神が神矢を放ち吹き飛ばすのが見えた。

その巫女の姿に紫苑王子の目の色が変わる。

なんで、初心者のハルちゃんがカタストロフ討伐の戦闘に参加してるんだー！！

ゲームシナリオには無い想定外の状況に、動揺を隠し損ねたティダに紫苑が告げた。

「あれが、貴女方がひた隠しにしている女神の憑代ですね。

終焉世界を豊穰へ導くなんて、ハハッ、そんなことはさせませんよ。

醜い巨人と卑劣な人間の蔓延るコノ穢れた世界など、一度滅んでしまっがいい」

カタストロフドラゴンが攻撃を受けると同時に、魔王子の苦しげな悲鳴が響き渡り、部屋の床でのた打ち回る。

そして、頭部を失ったはずの魔獣が再生増殖して再び蘇ると、魔王子の悲鳴も止んだ。

なんだ、この男は、まるで……

魔王子が顔を上げ、狂気の笑みを浮かべながらテイダの方を向いた。

その死んだ魚のような灰色の目の奥に宿す奇妙な光に、今までの胸騒ぎの正体が解った。

「下がれ、離れる、青磁王子！！」

この気配、死人の臭いを漂わせる魔王子は、もはや生者ではない」

テイダは双子の間に割り込み、咄嗟に手にしたメイスで魔王子の胸を突いて弾きとばす。

壁に叩き付けられ床に倒れた巨人に押し掛かり、豪華な刺繍の施されたマントを剥ぎ取った。

「まさかカタストロフドラゴンを召還するために、自分の心臓を贅として差し出したのか！！」

マントの下の左胸部分は、何かに喰いちぎられたような黒い穴がぽっかりと開いている。

肉体が喰いちぎられたというより、その部分の存在が空間ごと喰われ消え失せていた。

「より強力な、王都を滅ぼせる力を持つ魔獣を呼び寄せるには、人間の生贄だけでは足りません。」

終焉世界最強の巨人王族の血で召喚したカタストロフドラゴンと共に、砂磁兄上は永遠の命を得るのです」

黄金の髪的美丈夫の王子の口から放たれた言葉は、あまりに禍々しい内容だった。

廃王子の体から立ち上る強烈な死臭に、嗅覚の良いティダは慌てて後ろに飛びさる。

「紫苑、貴様巨人王族でありながら、死者の傀儡使いに成り下がったか!!!」

すでに腐り始めている廃王子、紫苑の言う永遠の命など戯言ではないのだ。

しかし、妄執に囚われ傀儡と成り果てた第十一位 廃王子 砂磁には、それを理解できない。

「青磁、お前は……血を分けた双子の俺や愛したエルフ美姫より、下級種族や人間が大事なのだな。」

きさまに、俺と彼女を裏切った報いを与えてやろう。

最初に、船にいる人間どもを血祭りに、次は風香十七群島全ての猫人族、コクウ港町も滅ぼしてやる。

十三年前の、ハク口王都後宮をカタストロフドラゴンで焼き払ったように!!!」

もはや、死人に何を言っても話は通じない。

青磁王子は腰から巨大な青竜刀を抜くと、双子の兄である砂磁王子に向け構えた。

その様子を嘲笑を浮かべ眺める紫苑王子が、隠し持っていた細い鉄の筒に装飾が施されたモノを取り出し、それを青磁王子の被る鬼の面に向ける。

今まで見たことの無いソレに、青磁王子は眉をひそめる。

まさかこの終焉世界に、銃があるだど!!

乾いた破裂音と、庇うように前に出た銀髪のエルフの胸に、銃弾が吸い込まれていった。

異形の化物カタストロフドラゴンが、南の海に待機する船団に狙いを定め、翼を広げ飛び立つ。

「魔獣の後を追え!! 船団に辿り着く前に、何としても止める」

しかし、最上位のカタストロフドラゴンより下位のファイヤードラゴンでは、その空を飛ぶスピードに決して追いつけない。

SENの声に反応して素早く飛び立ったのは、全身から青白い神の焔火を迸らせた聖獣ユニコーンだった。

そしてユニコーンの背中には、クジラ青年と助け出されたハルを乗せていた。

「よせユニコーン、ハルを連れて行くな。もう魔力が枯渇して戦えないぞ!! 畜生、早く追いかける」

ユニコーンの背中で意識朦朧としたハルの耳に、SENの自分を呼ぶ声が聞こえてくるが、それに返事をする事ができない。

一緒に騎乗しているのは、クシラ兄（兄に）のはずだよね。

ハルによる蒼珠（ドールビング）大量摂取により強化された牛（ユニコーン）は、聖獣一の俊足で瞬く間にカタストロフドラゴンに追いつくと、増加した体重を武器に真上から降下して魔獣に体当たりを喰らわす。

元々天敵同士の魔獣とユニコーン、敵を太く逞しい蹄で勢いよく蹴り上げ、再び生え始めた頭部の小さな角でコウモリ翼の薄皮を突き破る。

激しい空中戦で暴れまくるユニコーンの背中はロデオ状態で、ハルと青年は振り落とされないように必死にしがみ付く。

怒り狂うカタストロフドラゴンは、裂けた口から鞭のような舌を伸ばし、ユニコーンの左前足を捕らえると二重三重に生えた牙で噛みついた。

ユニコーンはその攻撃から逃れられず、啜えられ振り回される拍子にハルがユニコーンの背から落下する

「いけない、ハルさま!!! 手をっ」

青年は落ちるハルを追って飛び出し、その体を庇って振り落とされた先は、カタストロフドラゴンの背中だった。

「あうっ、いつ、イタイ、肩がっ」

太く尖った鱗が並ぶカタストロフドラゴンの上に落ち、鱗が左肩

に深く刺さり、ハルの着る巫女服が血で赤く染まる。

女神の弓を行使しすぎて魔力が尽き、肩の怪我を治す治癒魔法が使えない。

思わず漏れる呻き声を押さえようと歯を食いしばり頭を上げると、自分を庇って共に落ちた青年が隣で倒れていた。

「ク、クジラ兄さん（に）、大丈夫ですか？」

共にユニコーンから落ちた青年は、庇って落ちた背中に数本の鱗が刺さり、ハルより酷い状態で血塗れになっていた。

しかし青年が身じろぎして体を起こすと、背中の傷は自己治癒魔法で、瞬く間に消えて行った。

それは、まだハルも習得できない高度な自己治癒魔法。それを漁師の青年が無詠唱で発動させている。

顔を上げた青年は別のモノだった。

「ハルさま、いえ、ミゾノゾミ様。私の名前は、白藍と申します」

「えっと、クジラ兄ではなくて、白藍って……」

聖騎士の彼女が探している、法王 白藍さま？」

抑揚の少ない声、全てを見通すような澄んだ視線、穏やかな表情の青年が静かに頷いた。

「はい、ミゾノゾミ様に聞いていただきたくてあります。

私は長い間、胸に秘めた密かな願いがありました。

エルフ族の秘術により時を止めた幼い体から、年齢相応の大人になりたいという、決して叶わぬ願いです。

しかし、法王を務めるほどの魔力を持つ私の願いは、最悪の方法

で叶ったのです。

破滅の使徒である神科学種を、私はコノ地に呼び寄せてしまった」

アマザキ

二年前、終焉世界に取り込まれたゲームプレイヤーのアマザキは、
法王 白藍を罫に填め、器を奪い魂を入れ替える。

しかしそれは、青年の器を欲した白藍の望みでもあったのだ。

白藍の手がハルの左肩に触れ、高位の神官が行える無詠唱の治癒
魔法で、深い肩の刺し傷が癒えてゆく。

「私のもう一つの願いは、ミゾノゾミ女神の存在をこの目で確かめ
る事でした。

さあ、破滅の使徒の企みを打ち消しましょう。

この魔獣を、ミゾノゾミ女神の力で倒すのです」

クエスト74 カタストロフドラゴン討伐作戦4（後書き）

ついにクライマックス。

ブログの方では、キャラの落書きをしてるので、お暇なら覗いてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9917q/>

神科学種の魔法陣

2011年12月17日11時58分発行